T2R2 東京工業大学リサーチリポジトリ
Tokyo Tech Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	現代日本の建築家の設計論にみられる時間認識
Title(English)	
著者(和文)	大嶽陽徳
Author(English)	Akinori Ootake
出典(和文)	学位:博士（工学）, 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10203号, 授与年月日:2016年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:奥山 信一,屋井 鉄雄,安田 幸一,那須 聖,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10203号, Conferred date:2016/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Type(English)	Doctoral Thesis

Powered by T2R2 (Tokyo Institute Research Repository)

博士学位論文

論文題目

現代日本の建築家の設計論にみられる時間認識

指導教員：奥山信一 教授　　論文提出者：大嶽陽徳

目次

第１章　序論 — 4
　１節　研究の目的と背景 — 5
　２節　研究の概要 — 12
　　2.1　研究の資料
　　2.2　分析の方法
　　2.3　論文の構成
　３節　本論に関連する既往研究 — 17

第２章　増改築建築の設計論にみられる時間認識 — 22
　１節　本章の目的と概要 — 23
　２節　増改築建築における時間認識 — 28
　　2.1『環境』の変化に関する意味内容
　　2.2『時間モデル』の内容
　　2.3『環境』の変化と『時間モデル』の対応関係
　３節　増改築建築における時間認識に関する実現手法 — 39
　　3.1　実現手法
　　3.2　時間認識と実現手法の対応関係
　４節　小結 — 42

第３章　連作に関する設計論にみられる時間認識 — 45
　１節　本章の目的と概要 — 46
　２節『連作の主題』の意味内容 — 51
　３節　連作における時間認識 — 55
　　3.1　連作における『建築表現の関係性』
　　3.2『モデルの想定形式』の内容
　　3.3『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との関係
　４節『連作の主題』と連作における時間認識との関係 — 60
　　4.1【形態】と【空間】における時間認識
　　4.2【構成】と【構法・技術】における時間認識
　５節　小結 — 64

第４章　記念館建築の設計論にみられる時間認識 — 67
　１節　本章の目的と概要 — 68
　２節　記念館建築における時間認識 — 74
　　2.1　記念館建築の設計根拠の意味内容
　　2.2　設計根拠の意味内容における具体性
　　2.3　設計論における設計根拠の組合せ

３節　記念館建築における時間認識に関する実現手法 ― 82
3.1　実現手法
3.2　時間認識と実現手法の対応関係
４節　小結 ― 86

第５章　現代日本の建築家の時間認識 ― 89
１節　本章の目的と概要 ― 90
２節　内面的なテーマにおける時間認識の特性 ― 93
2.1　内面的なテーマに固有の時間認識と外面的なテーマと関わる時間認識
2.2　**『可変的性格』**の比較
2.3　**『時制』**の比較
３節　外面的なテーマにおける時間認識の特性 ― 98
3.1　外面的なテーマに固有の時間認識と内面的なテーマと関わる時間認識
3.2　**『環境』**の比較
3.3　**『着目性質』**の比較
４節　建築家の時間認識の特性 ― 103
５節　小結 ― 106

第６章　結論 ― 108

関連論文目録
付録　資料編

第1章　序論

1節　研究の目的と背景

建築家の時間認識

建築は、時間の経過にともなって、素材の風化や用途の変更など、さまざまな影響を受けざるを得ない。これらは、建築の実体が必然的にもたざるを得ない物質的性質に由来するといえるが、それらにより、歴史的・文化的に築かれてきた建築の意味や象徴などの抽象的水準での思考を含んだ上で、建築を時間の経過のなかでどのように認識するか（以下、時間認識）について論じることは重要であると考えることができる。

このような時間認識に基づいて建築を論じ、近現代において大きな影響を与えた言説を、多くの著作にみることができる。例えば、美術史家 S. ギーディオンは主著である『空間 時間 建築』[注 1-1)] において、その時代の建築家[注 1-2)] 達に共有されていた社会認識を " 時代精神 " と抽象し、そうした概念を著述の根幹に据えて、近代主義建築の枠組みを論じている。また、近代主義建築を相対化した視点を提示した建築家である A. ロッシは『都市の建築』[注 1-3)] において、都市における設計行為が都市の物質的な構造だけでなく、その都市の居住者の記憶に関わることに着目し、過去の建築と関連づける設計理論を提唱している。以上の両者による思想の根底には、同時代的な共振性と過去との連続性といった時間認識の違いがみられ、そのことがそれぞれの論考の内容における方向性を決定づけていると考えられる。このように、時間認識は、建築家が思想を構築する上での基盤となる重要な概念のひとつであるといえる。

建築設計における時間認識

建築家の創作活動のなかで中心的な取り組みである、建築設計においては、こうした時間認識に関する思考と連関させて、空間や形態を具現化することが多いと考えられる。

例えば、日本において、時間認識を思想の基盤に据えて建築を提案し、大きな影響を与えた設計思想のひとつとして、都市や建築の新陳代謝を主張したメタボリズムが挙げられる。この思想を創作の根幹に据えて活動したメタボリズムグループの中心メンバーである菊竹清訓は、著書『代謝建築論』[注 1-4)] において、

注 1-1)　1955 年に丸善株式会社から、太田實の訳により出版された。
注 1-2)　ここでは、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。
注 1-3)　1991 年に大龍堂書店から、大島哲蔵と福田晴虔の共訳により出版された。
注 1-4)　1969 年に彰国社から出版された。

> 生活装置を生活に対応して、交代、変化させうる方法を、建築に導入するということである。これは一方において、変化しない、建築の中心となり、主となる部分を、明確にする・・・
>
> 新しい形態と伝統，代謝建築論 / 菊竹清訓

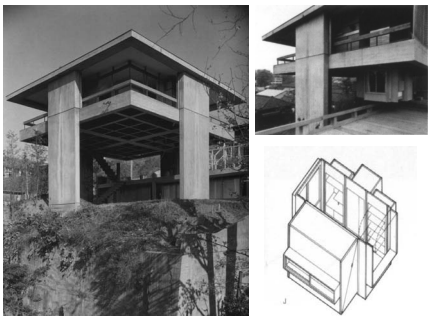
と述べ、時間の経過に対して、可変的な部分と不変的な部分から構成される建築のイメージを提出しており、それを直裁的に具現化した作品を発表している（図 1-1）。さらに、現在の日本の建築界を牽引する建築家のひとりである伊東豊雄は、著書『風の変様体 - 建築クロニクル』[注 1-5)] において、

> クレイジーとしかいいようのない土地の高騰が建築の資産的価値の相対的下落を招き、日々紙屑のように高価な建築のスクラップアンドビルトが繰り返される・・・われわれもまた紙屑のように追い立てられているのである。われわれにできることも抵抗の砦を築くことでなく、テンポラリーな空間を一夜のうちに築き上げ、あとは逃亡を企てるのみである。抵抗の砦なども一瞬のうちに無印商品化されてしまう世の中なのである。
>
> 突き抜ける明るさ，風の変様体 - 建築クロニクル / 伊東豊雄

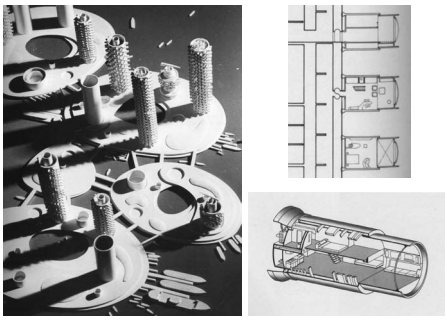
のように、新たな建築表現が即座に通俗化する消費社会においては、むしろ更新のスピードに建築表現の可能性を見出すべきであると論じ、仮説的で軽やかな建築表現を実現している（図 1-2）。

以上のように、建築設計において、時間認識は、建物の可変性や社会状況の移り変わりといった広範なテーマに対して思考されており、そうした思考が空間や形態を具現化する際の基盤となっているといえることから、建築設計における重要な概念のひとつであると考えられる。

注 1-5)　1989 年に青土社から出版された。



スカイハウス
（RC構造体によるピロティにはムーブネットが脱着）



海上都市1963
（垂直の構造シャフトと取替え可能な住居ユニットで構成）

図 1-1　スカイハウスと海上都市 1963（菊竹清訓 設計）

スペース全体がメタリックで、柔らかい材料により舞台装置的につくられて、テンポラリーなもののみが持ち得る即興性と虚構性とが表現されている。そういった即興性・仮説性は現在のこのレストランのあり方にも反映している。
当初レストランとして使われ始めたスペースであるが、その後、能の舞台としてヴィデオインスタレーションやコンサートのスペースとして、さまざまなに表情を変えながら、きょうも都市を漂うエピキュアリアンたちに新しいフィクショナルなイメージを発し続けている。

新建築 日本現代建築家シリーズ 伊東豊雄

図 1-2　レストラン ノマド（伊東豊雄 設計）

今日的な社会状況における意義

こうした建築設計における重要な概念である時間認識を検討することは、今日的な社会状況において、どのような意義を持ち得るだろうか。

現代においては、あまねく情報が飛び交い、手のひらサイズのポータブル端末を通して、絶え間なく人びとの身体の表面を滑り落ちていく状況にある。建築家も、今日を生きている限り、こうした状況を免れ得ず、毎日数え切れないほどの最新の建築作品が社会的メディア空間に提出されては、即時に通俗的な情報の渦にのまれていくといった状況のなかで、設計活動に取り組んでいる。そうしたなかで、建築家でさえも、もはや時間の感覚を失い、何が新鮮で今日的な表現であり、どれが歴史に耐える表現であるかといった判断がつかなくなってはいないだろうか。そうした一方で、地球環境問題が切迫した状態のなか、建築家は、持続可能なデザインの方法論の構築を求められており、時間認識に基づいて建築を考えざるを得ない状況にも接している（図 1-3）。

こうした状況において、新鮮で生き生きとした表現や時間に耐えるデザインの仕組みを創出する方法論を構築することは、現代社会のなかで建築を設計するにあたり、重要な意義をもつといえる。この研究での検討は、そうした方法論を構築するにあたって、有益な視座を与えるものであると考えられる。

dezeen ／ 建築情報ウェブサイト　　建築学会主催 サスティナブル建築のシンポジウム

図 1-3　現代社会における建築を取り巻く状況

建築家の内面的なテーマおよび外面的なテーマにおける時間認識

これまでに述べてきたように、建築設計において、建築家の時間認識は広範なテーマに対して思考されている重要な概念であると考えられる。こうした広範なテーマにおいて思考される建築設計における時間認識には、まず、建築家自身の設計主題や表現方法などを時間の経過のなかでいかに認識するかという、建築家の内面的なテーマに対するものがあると考えられる。こうした建築家の内面的なテーマにおける時間認識は、建築家が作家として作品を設計し続けるために必要不可欠な思考であることから、建築設計における時間認識の重要な枠組みを形成していると考えられる。その一方で、建築家は、都市や社会といった建築家の設計活動を取り巻いている、外在的な枠組みのなかで作品の創作をしていることから、建築設計における時間認識には、そうした建築家にとって外面的ともいえるテーマに対するものも含まれていると考えられる。こうした建築家の外面的なテーマにおける時間認識は、上述した、時間の経過のなかで認識される内面的なテーマを相対化、一般化するための思考として重要であることから、建築設計における時間認識において、内面的なテーマに対する思考とともに、それとは異なる水準で重要な枠組みを形成していると考えられる。以上から、建築設計における時間認識においては、建築家の内面的なテーマに対するものと外面的なテーマに対するものとが互いに独立した意味体系として、重要な意味の枠組みを形成していると考えられるが、こうした２つの側面は無関係でなく、例えば、都市や社会との関係で設計主題や表現方法を考えるといったように、双方のテーマが関わりをもつ位相に対するものも含まれると考えられる。

こうしたことを踏まえると、建築設計における時間認識を、建築家の内面的なテーマに固有なもの、外面的テーマに固有なもの、および双方のテーマに関わるものの３つに大別することが可能であるといえる。

また上述の分類は、建築設計における時間認識という題材を論じる場合に限らず、槇文彦による自身の設計活動の軌跡を論じた『建築とコンテクスト - 形態・表層・空間』[注1-6)]、篠原一男による都市的な構想と直結させた住宅設計方法を批評した『住宅設計の主体性』[注1-7)]、および磯崎新によるつくばセンタービルの設計に関して論じた『都市，国家，そして〈様式〉を問う』[注1-8)] など、さまざまな題材においてみられるように、建築設計一般に通底する基本的なな枠組みであるといえる。例えば、先に挙げた論考のひとつである『建築とコンテクスト - 形態・表層・空間』においては、

注 1-6）『記憶の形象』（筑摩書房 , 1992）に収録。
注 1-7）『住宅論』（ 鹿島出版会 , 1969）に収録。
注 1-8）『建築のパフォーマンス -〈つくばセンタービル〉論争』（ Parco 出版 , 1985）に収録。

建築家にとって、彼自身の置かれている建築環境は、彼の建築観・意思決定に重要な影響を及ぼすし、また逆にそうした建築観・意思決定が彼の周辺に新しい環境をつくっていくことはだれもがたえず経験していることに違いない。

建築家がプロフェッショナルであるというもう一つの側面に、たえず建築家が社会、特定の施主と交渉し、関係していかなければならないという点がある。

現代の建築家が直面する問題・環境はきわめてさまざまである。・・・もっともポピュラーな建築家の一つの型は、建築の対象が何であれ、状況がどうであれ、一つの一貫した考え方、スタイルによって建築をつくりあげることである。・・・しかし・・・本当に建築がその与えられた環境で、一つのリアリティとして息づかせていく重要性を主張するものと、対立的な立場に立っていることも事実である。私自身はむしろ後者の立場に立つ、・・・

建築とコンテクスト - 形態・表層・空間，記憶の形象 / 鈴木博之

とあり、建築家が設計に取り組む際の姿勢を、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマといった２つの側面に着目して論じていることがわかる。

さらに、こうした分類は、建築家の建築表現が宗教や政治に従属したものでなく、それ自体に自律した価値を見出す社会構造に転換してから、建築家の内面的なテーマとその外側を取り巻く外面的なテーマとの関係が問題となりえたといえることから、ひとりの主体性をもった作家としての建築家の確立に関わる根源的な枠組みのひとつとも考えられる。

こうしたことを鑑みると、先に述べた分類は、建築設計一般に通底する根源的な枠組みのひとつであり、建築設計における時間認識の基本的な枠組みを捉えるうえでも重要なものだと考えられる。

時間認識を見出す題材

以上のことを前提にして、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識、外面的なテーマに固有の時間認識、および双方のテーマに関わる時間認識といった３つの時間認識を検討する際には、それらの思考が明確に見出すことの可能であると考えられる題材を取り上げている。まず､建築家の内面的なテーマに固有の時間認識が明確に見出せる題材として、建築家が共通の主題のもとで構想する一連の作品（以下、連作）を取り上げている。連作においては、一連の時間経過のなかで設計された自身の作品群をいかに考えるかという、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識が設計の際の中心的な主題となると考えられ、そうした思考を明確に捉えることが可能であるといえる。次に、建築家の外面的なテーマ

に固有の時間認識が明確に見出せる題材として、記念館建築を取り上げている。記念館建築の設計においては、人物の業績や歴史的事実を後世に伝えるといった記念性についていかに考えるかという、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識が中心的な主題となると考えられ、そうした思考を明確に捉えることが可能であるといえる。そして、建築家の内面的テーマと外面的テーマの双方に関わる時間認識が明確に見出せる題材として、増改築建築を取り上げている。増改築建築の設計においては、既存建物のデザインに対して自身の建築表現を構想することと、既存建物が社会のなかで使われてきたことへ配慮することの双方が前提条件となることから、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識を明確に捉えることが可能であるといえる。

研究の意義と目的

以上の観点から、本研究においては、建築設計において重要な概念のひとつである時間認識に関して、建築家の内面的なテーマに固有のもの、外面的なテーマに固有のもの、および双方のテーマに関わるものに大別して、連作、記念館建築、および増改築建築を題材としてそれぞれ検討することで、建築家の時間認識に関する思考の基本的な枠組みの一端を明らかにし、今後の建築設計に新たな視座を提出することを目指す。

２節　研究の概要

２．１　研究の資料

本論で取り上げる連作、記念館建築、および増改築建築といった題材において、建築家の時間認識に関する思考を分析するための資料はアンケート、インタビュー、著述等数多く考えられるが、ここでは、多くの建築家が書籍や雑誌等に作品あるいは言説を発表することで建築に関する社会的な表現活動を行っていることに着目して、そうした表現活動の現れのひとつである、書籍や雑誌等の社会的メディアに掲載されている設計論を取り上げている。ここで言う設計論とは、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものを指している。社会的メディアに掲載された設計論においては、実際に建築家が思考した内容を直接的に検討できるわけではないが、多数の設計論が社会的な言説空間に提出されることが建築に関する社会的な意味体系の形成に関わっていることを考慮すると、本研究における検討は、建築家の表現活動がつくり出す建築に関する社会的な意味体系の枠組みの一端を明らかにすることが可能であると言える。

さらに設計論が掲載されている社会的メディアのなかでも、本論では、一般建築ジャーナリズムを現代の設計者の最も自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、建築ジャーナリズム誌に限定している。それらのなかでも、最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌と「新建築 住宅特集」誌に掲載された設計論を主な対象とし、それに加えて「建築文化」誌、「SD」誌、および「都市住宅誌」に掲載された設計論も補助的に含めている。

対象期間としては、日本において大きく社会構造が変革した第２次世界大戦以降を現代と設定し、終戦時に各誌が休刊していた期間を除き、1946 年から 2013 年までとしている。

2.2　分析の方法

本論文の第２章から第４章においては、設計根拠や主題といった設計論から抽出された建築家の多数の言説から、意味のある全体像を発見、整理するための分析の方法として、KJ 法をもちいている。KJ 法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法のことである[注 1-9)]。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法として用いている。

本論では、特定の建築家の言説の意味を、複数の建築家の言説との関係の中に読み取るという立場をとっている。したがって、分析に際して同一の建築家による複数の言説、あるいは、ひとつの言説内にそれぞれ別の意味内容をもつものとして分節可能なものについて、それぞれ別個の資料として扱っている。このように複数の建築家の言説の意味内容を相対的に把握するには、定性的データとして抽出した資料をできる限りそのままのかたちで検討、考察する方法が重要であり、そのような意味において、複数の分析者によって行われる KJ 法による分析は有効な手段であると考えられる。なお本論では、資料の内容のグルーピングの作業を何度も繰り返し検討、検証を重ねることで、分析の客観性を高めるように努めている。

注 1-9)　川喜田二郎：発想法 , 中央公論社 , 1967

2．3　論文の構成

本論は「現代日本の建築家の設計論にみられる時間認識」と題し、以下の６章により構成されている。

第１章「序論」は、研究の目的と意義、研究の資料と方法、および論文の構成と概要を位置付けるものである。本章ではまず、本論文が設計思想を構想する上で基盤となる重要な概念の時間認識を検討するものであり、さらに、そうした建築設計における時間認識が、建築家自身の設計主題や表現方法などの内面的なテーマに固有のもの、社会や都市などの建築家の外面的なテーマに固有のもの、および双方のテーマに関わるものの３つに大別して捉えられ、それらは、連作、記念館建築、増改築建築といった題材で見出すことが可能であることを指摘した上で、現代日本の建築家による上記３つの題材の設計論を資料としてそれぞれの時間認識の内容と特性を捉えるとともに、それらを相互に比較・検討することで、現代日本の建築家の時間認識に関する思考の枠組みの一端を明らかにすることを本論文の目的として位置付けている。

第２章「増改築建築の設計論にみられる時間認識」では、建築家の内面的なテーマおよび外面的なテーマの双方に関わる時間認識が、建築の設計を取り巻く環境（以下、『環境』）の変化に対していかにデザインを位置づけるかという『時間モデル』で捉えられることを明示した上で、それらと実現手法の関係を検討する。その結果、『環境』の変化に関する意味内容が生活、社会、都市・農村、自然といった４つで把握でき、『時間モデル』が環境の変化に対して特定の状態を持続させるものと新しい状態に更新させるものという対立する内容、および環境の変化にともなって理想的な状態に収束させるという内容で位置付けられ、これらの対応から、生活と更新、および社会と持続が関連して論じられること、さらに実現手法との関係から、前者は部位・部材によって、後者は空間によって具現化される傾向があることを明らかにしている。

第３章「連作に関する設計論にみられる時間認識」では、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識が、一連の作品群に共通した主題のもと、作品相互の建築表現をどのように関係づけるかという『建築表現の関係性』と、建築表現の基となるモデルをどのように想定するかという『モデルの想定形式』で捉えられることを明示した上で、これらの関係を検討する。その結果、一連の作品群に共通した主題は形態、空間、構成、構法・技術、周辺環境との関係の５つで把握でき、『建築表現の関係性』は類似性と差異性といった対立する内容で捉えられ、『モデルの想定形式』は演繹的なものと帰納的なもので位置付けられ、

これらの対応から、形態では『モデルの想定形式』によらず差異性と、空間では『モデルの想定形式』に応じた『建築表現の関係性』と、構成では演繹的な形式における差異性と、構法・技術では帰納的な形式における類似性および差異性との関連があることを明らかにした。

第４章「記念館建築の設計論にみられる時間認識」では、建築家の外面的なテーマに固有な時間認識が、記念性に関わる設計根拠から捉えられることを明示した上で、それと実現手法との関係を検討する。その結果、記念性に関わる設計根拠は、人物の業績や歴史的事件を後世に伝えるといった記念性に固有の側面に着目した内容である固有的側面と、記念対象と関連した都市環境への対応など記念性に関連した側面に着目した内容である関連的側面で把握でき、設計論における組合せでは、固有的側面は関連的側面とともに根拠として論じられる傾向があること、さらに実現手法との対応から、固有的側面を建築の部分的な要素で具現化し、それに加えて関連的側面を建物全体の形態により具現化する傾向があることを明らかにしている。

第５章「現代日本の建築家の時間認識」は、第２章から第４章の検討で得られた知見をもとに、建築家の内面的なテーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考（第３章）と外面的テーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討し、さらに外面的なテーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考（第４章）と内面的なテーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討した上で、それらを総合的に考察するものである。その結果、内面的なテーマに対する時間認識は、時間の経過のなかでの持続性、および未来と過去という時制への思考といった枠組みで捉えることができ、外面的なテーマに対する時間認識は、生活、社会、都市、自然といった建築の設計を取り巻く４つの環境との関係で時間を認識するといった枠組みで捉えることができ、前者の時間認識は、未来の理想的状態を見据えて、持続と更新に対する明瞭な思考をする傾向があり、こうした思考は、後者の時間認識の特徴的な思考である、社会と都市との関係でのなかで認識される傾向があることを明らかにした。

第６章「結論」は、以上各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

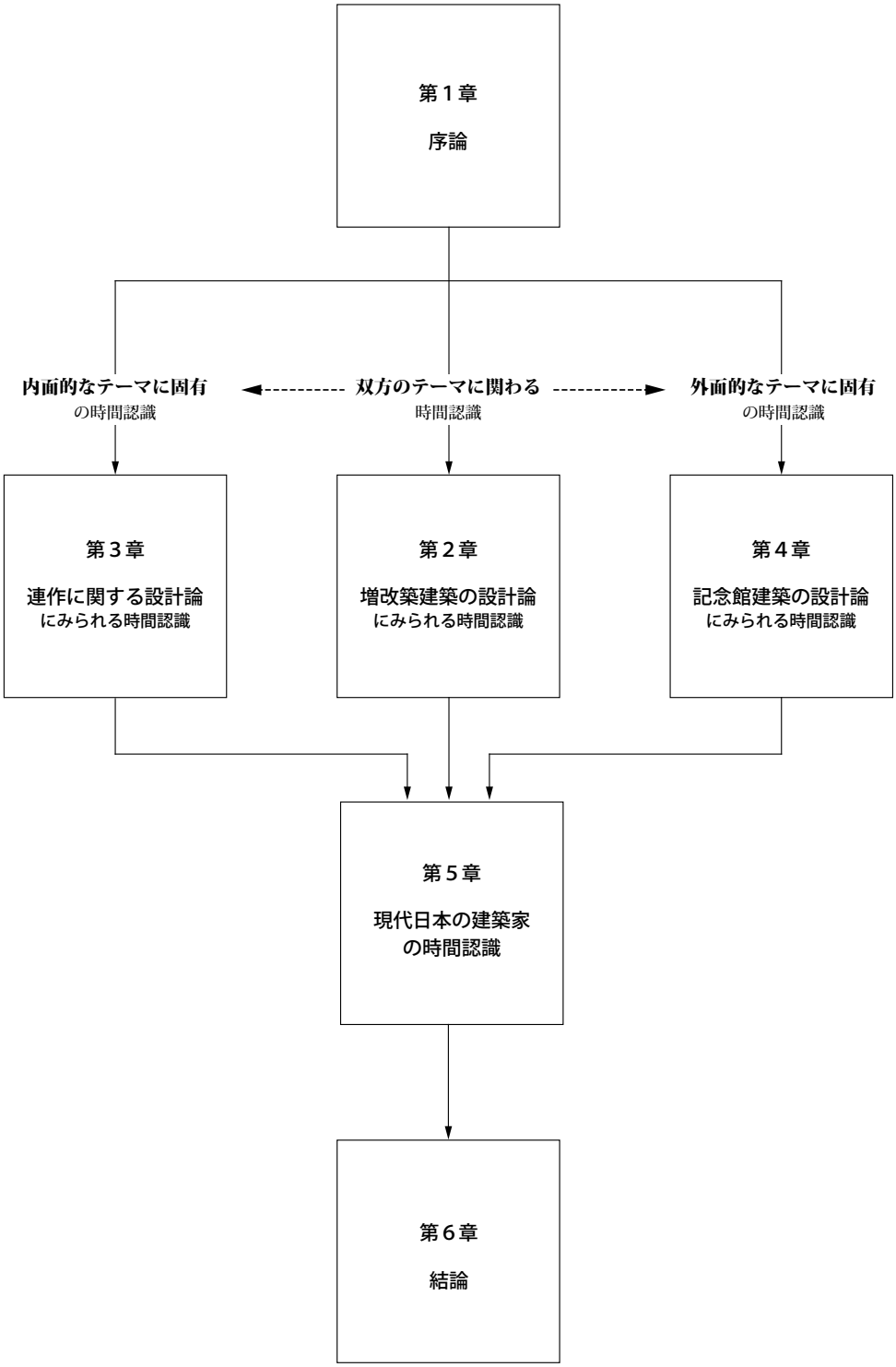

第１章
序論
内面的なテーマに固有
の時間認識
双方のテーマに関わる
時間認識
外面的なテーマに固有
の時間認識
第３章
連作に関する設計論
にみられる時間認識
第２章
増改築建築の設計論
にみられる時間認識
第４章
記念館建築の設計論
にみられる時間認識
第５章
現代日本の建築家
の時間認識
第６章
結論

図 1-4　論文の構成

３節　本論に関連する既往研究

本研究における既往の研究には以下のものが挙げられる。

時間の概念に着目した既往研究

本研究のように建築家の言説活動を対象とした研究は、これまで数多くみられるが、そのなかでも、建築における時間の概念に着目した研究としては、朽木によるアルド・ファン・アイクの建築思想における「経験」という時間に基づいた概念の研究[注 1-10)]のように、特定の建築家あるいは建築史家に着目し、その言説を資料として作家の思考する時間の概念を検討するものや、水谷、末包による研究[注 1-11)]のように、複数の哲学者により提示された時間の概念を参照しながら、博物館と劇場の設計論におけるキータームを抽出して近年の建築家の思考する時間の概念を検討するものなどがあげられる。これらの研究は、建築家の考える時間とはいかなる内容かといった観念的水準での解明を目的として成果をあげているといえる。それに対し、本研究は、建物の設計に際して、時間の経過のなかで建築をいかに考えたかといった、具体的な水準における建築家の思考の一端を明らかにするものであり、そこに独自性があると考えられる。

増改築建築に関する既往研究（第２章に対応）

本研究の第２章で取り上げている題材である増改築建築に関する既往研究には、増山、坂本らによる建築作品の実体的側面に着目し、外形および内部空間の双方において、既存部と新築部の構成形式を検討するもの[注 1-12)][注 1-13)]や、田中、山田らによる建築家による設計論を資料とし、空間を構想する際の既存部と新築部の関係に関する思考を検討するもの[注 1-14)][注 1-15)]などがあげられる。こうした既往研究は、既存部と新築部による空間的な

注 1-10）朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築思想における時間概念について －「経験」の構造に関する分析を通して，日本建築学会計画系論文報告集 No.676，pp.1489-1498，2012.6

注 1-11）水谷友也，末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究－ 1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.801-804，2009

注 1-12）増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における外形構成と内部空間の構成 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.581-582, 1999

注 1-13）増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における構成類型と構成的な性格 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.583-584, 1999

注 1-14）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の関係 - 建築家の言説からみた増改築 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.629-630，2004

注 1-15）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の要素 - 建築家の言説からみた増改築 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.631-632，2004

特徴を捉えることによって、建築設計の可能性を見い出すことで成果を挙げているが、本研究のように建築設計における時間認識に着目した研究は見られない。

連作に関する既往研究（第３章に対応）

本研究の第３章で取り上げている題材である、連作に関する創作活動を対象とした既往の研究としては、特定の建築家に着目した作家論的なものが多くみられた。それらのなかで連作を構成する作品群の実体的側面に着目したものとして、林、末包らによる広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH」シリーズにおける空間構成と架構形式の類型を検討したもの[注 1-16)]や、内山、山名らによる前川國男の木質パネル構法「プレモス」シリーズにおける壁や屋根などの部材構成の変遷を検討したもの[注 1-17)]などが挙げられる。また、本研究と同様に連作に関する建築家の言説活動に着目したものとして、朽木によるアルド・ヴァン・アイクの一連のダイアグラム「オッテルロー・サークル」シリーズに関する言説における主題の変遷を検討したもの[注 1-18)]や、林、土居による篠原一男の「亀裂の空間」シリーズに関連した言説における「亀裂」の意味内容の変遷を検討したもの[注 1-19)]などが挙げられる。こうした特定の建築家の連作に着目した研究は、作家の創作活動全般に対するものではないものの、共通の主題のもとに構想された一連の作品に限定し、建築表現の展開の仕方やそれに関する思考を明確に浮かび上がらせることで、特定の建築家の創作活動に関する新たな視点を明らかにし、成果を挙げてきたと言える。これらに対して本章は、現代日本の建築家によって著された、建築表現の展開に関する数多くの言説を分析対象として、その意味体系の総体を明らかにするものであり、多くの建築家の言説を共時的に享受するなかで建築の思考が形成されていると考えられる現代的な状況に対して有益な示唆を与えるものと考える。

記念館建築に関する既往研究（第４章に対応）

本研究の第 4 章で取り上げている題材である記念館建築を対象にした既往研究は数多

注 1-16）林俊博 , 末包伸吾 , 長谷川あみ湖 , 藤井一成：広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH シリーズ」における空間構成と架構形式に関する研究 , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp.901-904, 20

注 1-17）内山崇 , 山名善之 , 谷川大輔：前川國男設計のプレモスの部材構成に着目した開発過程に関する考察 , 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.313-314, 2008

注 1-18）朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築思想 - 図式「オッテルロー・サークル」の変容について , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp893-896, 2005

注 1-19）林直樹 , 土井義岳：篠原一男の「亀裂」- その時代を語るキーワードとして , 日本建築学会九州支部研究報告集 , pp.785-788, 2007

くあり、それらの目的・テーマはさまざまである。なかでも、本研究と関連性の高いものとして、原衣代果と石川恒夫による今井兼次が設計した日本二十六聖人殉教記念施設を対象とした研究[注 1-20)]や、安部晋太郎や岡河貢らによる丹下健三が構想した大東亜建設記念造営計画を対象とした研究[注 1-21)]など、特定の建築家が設計・構想した記念施設を対象にして、作家のスケッチや言説から、記念することの意義や建築への反映方法を検討する作家論的・作品論的な研究がみられた。こうした研究は、特定の建築家の記念館建築を対象として、作家の創作活動に関する新たな側面を明らかにし、成果を挙げてきたと言える。これらに対し本章は、現代日本の建築家によって著された、記念館建築に関する数多くの設計論を分析対象として、多くの建築家の言説を共時的に享受するなかで建築の思考が形成されていると考えられる現代的な状況に対して有益な示唆を与えるものと考える。こうした本章と同様の視点から、現代日本の建築家の言説活動を総体的かつ相対的に分析した研究[注 1-22)][注 1-23)]はこれまで数多く見られるものの、記念館建築を対象とした研究はみられない。

注 1-20）原衣代果，石川恒夫：日本二十六聖人殉教記念施設における今井兼次の初期構想について - 日本二十六聖人殉教記念施設にみる今井兼次の建築思想に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集，No.651，pp.1247-1254，2010

注 1-21）安部晋太郎，今掛壽大，岡河貢：丹下健三の大東亜建設記念営造計画に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2，pp.227-228，2011

注 1-22）井上翔太，谷川大輔：公立博物館建築の設計論にみられる地域との関わりをもつ主題とその具体化 - 公共文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ，日本建築学会計画系論文集，No.718，pp.2843-2853，2015

注 1-23）水谷友也，末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究― 1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.801-804，2009

参考文献

時間認識に関わる文献

1-1） ジークフリード・ギーディオン , 太田實 訳：空間 時間 建築 , 丸善株式会社 , 1955
1-2） アルド・ロッシ , 大島哲蔵 , 福田晴虔 共訳：都市の建築 , 大龍堂書店 , 1991
1-3） 菊竹清訓：新しい形態と伝統 , 代謝建築論 , 彰国社 , 1969.1
1-4） 伊東豊雄：突き抜ける明るさ , 風の変様体 - 建築クロニクル , 青土社 , 1989.4
1-5） 伊東豊雄:レストラン・ノマド , 別冊新建築「日本現代建築家シリーズ 12」伊東豊雄 , 新建築社 , 1988.12
1-6） クリスタファー・アレグザンダー , 平田翰那 訳：時を超えた建設の道 , 鹿島出版会 , 1993
1-7） ケヴィン・リンチ , 東京大学大谷幸夫研究室 訳：時間の中の都市 - 内部の時間と外部の時間 , 鹿島出版会 , 1974
1-8） モーセン・ムスタファヴィ , デイヴィッド・レザボロー 共著 , 黒石いずみ 訳：時間のなかの建築 , 鹿島出版会 , 1999
1-9） 磯崎新 , 土井義岳：建築と時間 , 岩波書店 , 2001
1-10）多木浩二：生きられた家 , 青土社 , 1984
1-11）坂本一成：覆いに描かれた〈記憶の家〉と〈今日を刻む家〉- 建築でのアイデンティティと活性化／建築の外形を例として , 建築に内在する言葉 , TOTO 出版 , 2011
1-12）後藤暢子 , 後藤幸子 , 後藤文子 , 伊東豊雄：中野本町の家 , 住まいの図書出版局 , 1998
1-13）篠原一男：空間の思想と表現 , 住宅論 , 鹿島出版会 , 1969
1-14）奥山信一：高次言語建築の行方 - 再考「住宅は芸術である」, ja No.93, 新建築社 , 2014
1-15）内藤廣：建築のはじまりに向かって , 王国社 , 1999
1-16）内藤廣：建築的思考のゆくえ , 王国社 , 2004
1-17）松山巖：住み家殺人事件 - 建築論ノート , みすず書房 , 2004
1-18）ブルーノ・タウト , 篠田英雄 訳：永遠なるもの - 桂離宮 , 日本美の再発見 , 岩波新書 , 1939
1-19）長島明夫 編：建築と日常 No.3-4, 2015
1-20）早稲田大学渡辺仁史研究室 時間 - 空間研究会：時間のデザイン , 鹿島出版会 , 2013
1-21）アンリ・ベルクソン , 中村文郎 訳：時間と自由 , 岩波文庫 , 2001
1-22）真木悠介：時間の比較社会学 , 岩波現代文庫 , 2003
1-23）渡辺由文：時間と出来事 , 中央公論社 , 2010
1-24）谷川渥：形象と時間 , 白水社 , 1986

建築論の分類に関わる文献

1-25）篠原一男：住宅設計の主体性 , 住宅論 , 鹿島出版会 , 1969
1-26）磯崎新：都市，国家，そして〈様式〉を問う , 建築のパフォーマンス -〈つくばセンタービル〉論争 , Parco 出版 , 1985
1-27）鈴木博之：建築の七つの力 , 鹿島出版会 1984
1-28）エミール・カウフマン , 白井秀和 訳：ルドゥーからル・コルビュジエまで - 自律的建築の起源と展開 , 中央公論美術出版社 , 1992
1-29）デイヴィッド・ワトキン , 榎本弘之 訳：モラリティと建築 , 鹿島出版会 , 1981
1-30）奥山信一 編 , 篠原一男 監修：アフォリズム・篠原一男の空間言説 , 鹿島出版会 , 2004
1-31）奥山信一：設計思想の一貫性を支える条件 , 新建築 住宅特集 No.156 , 1999.4
1-32）谷川大輔：現代日本の建築家の設計論における社会的枠組みとしての都市環境に関する研究 , 東京工業大学 学位論文 , 2006

建築家の言説の意義に関わる文献

1-33）フェルナン・ド・ソシュール 景浦峡 田中久美子 共訳:ソシュール 一般言語学講義 - コンスタンタンのノート , 東京大学出版 , 2007
1-34）丸山圭三郎：ソシュールの思想 , 岩波書店 , 1981
1-35）ロラン・バルト , 佐藤信夫 訳：モードの体系 , みすず書房 , 1972
1-36）ロラン・バルト , 渡辺淳 沢村昂一 訳：零度のエクリチュール , みすず書房 , 1971
1-37）ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン , 藤本隆志 , 坂井秀寿 共訳:論理哲学論考 , 叢書・ウニベルシタス , 1968
1-38）多木浩二：雑学者の夢 , 岩波書店 , 2004
1-39）エイドリアン・フォーティー , 坂牛卓 邊見浩久 監訳：言葉と建築 , 鹿島出版会 , 2006

分析の方法論に関わる文献

1-40）川喜田二郎：発想法 , 中央公論社 , 1967
1-41）奥山信一：現代日本の建築家による創作論に関する研究 , 東京工業大学 学位論文 , 1994

既往研究に関する文献

1-42）朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築しそうにおける時間概念について －「経験」の構造に関する分析を通して，日本建築学会計画系論文報告集 No.676，pp.1489-1498，2012.6

1-43）水谷友也，末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究－ 1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.801-804，2009

1-44）増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における外形構成と内部空間の構成 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.581-582, 1999

1-45）増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における構成類型と構成的な性格 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.583-584, 1999

1-46）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の関係 - 建築家の言説からみた増改築 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.629-630，2004

1-47）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の要素 - 建築家の言説からみた増改築 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.631-632，2004

1-48）林俊博 , 末包伸吾 , 長谷川あみ湖 , 藤井一成：広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH シリーズ」における空間構成と架構形式に関する研究 , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp.901-904, 20

1-49）内山崇 , 山名善之 , 谷川大輔：前川國男設計のプレモスの部材構成に着目した開発過程に関する考察 , 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.313-314，2008

1-50）朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築思想 - 図式「オッテルロー・サークル」の変容について , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp893-896, 2005

1-51）林直樹 , 土井義岳：篠原一男の「亀裂」- その時代を語るキーワードとして , 日本建築学会九州支部研究報告集 , pp.785-788，2007

1-52）原衣代果，石川恒夫：日本二十六聖人殉教記念施設における今井兼次の初期構想について - 日本二十六聖人殉教記念施設にみる今井兼次の建築思想に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集，No.651，pp.1247-1254，2010

1-53）安部晋太郎，今掛壽大，岡河貢：丹下健三の大東亜建設記念営造計画に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2，pp.227-228，2011

1-54）井上翔太，谷川大輔：公立博物館建築の設計論にみられる地域との関わりをもつ主題とその具体化 - 公共文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ，日本建築学会計画系論文集，No.718，pp.2843-2853，2015

1-55）水谷友也, 末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究－ 1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.801-804，2009

第２章　増改築建築の設計論にみられる時間認識

1節　本章の目的と概要

1．1　目的

前章で述べてきたように、本章においては、建築家[注2-1)]の内面的なテーマおよび外面的なテーマの双方に関わる時間認識を見出すことの可能である具体例として、増改築建築を取り上げ、その設計論[注2-2)]を検討している。

既存建物の保存・修復や用途変更などを目的とする増改築建築の設計においては、社会のなかで使われてきた既存建物への配慮が前提条件となることから、そうしたことへの思考を巡らせるなかで、建築家の外面的なテーマにおける時間認識に対して意識的になると考えられる。それと同時に、既存部のデザインに対して自身の設計する増築部の建築表現を位置づけていると考えられることから、建築家の内面的なテーマにおける時間認識に対しても思考されていると考えられる。

こうしたことを踏まえると、増改築建築の設計論からは、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識を明確に読み取ることが可能であると考えられ、これを検討することは建築設計における時間認識に関する思考の枠組みを捉える上で重要であると言える。さらに、増改築建築の設計論からは、建築家が、こうした時間認識に関する思考と連関させて空間や形態を具現化していることも読み取ることができる。そこで本章では、現代日本の建築家による増改築建築の設計論を資料として[注2-3)]、建築家が、内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識をどのように捉え、建築の空間や形態に反映させようとしたかといった思考の枠組みの一端を明らかにすることを目的とする。

注2-1)　前章と同様に、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。

注2-2)　前章と同様に設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものと定義する。

注2-3)　増改築建築の設計論に関する著書、論文は膨大に存在するため、すべてを把握することはできないが、一般建築ジャーナリズムを現代の設計者のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌を対象としている。また、日本において大きく社会構造が変革した第2次世界大戦以降（1945年）から現在（2013年）までを現代と設定し、資料の対象期間としている。この範囲において、173作品を資料とした（別表2-1）。

1．2　概要

資料とした設計論において、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマに対する時間認識がいかに関係づけられて記述されているかを検討したところ、居住者の暮らし方や経済の状況などの建築の設計を取り巻く環境（以下、『環境』[注2-4)]）の変化に対して、自身の設計した増改築部の建築表現をいかに位置づけるか（以下、『時間モデル』）といった形式で記述されていることを読み取ることができた。例えば、図2-1の分析例No. e-76では、「いかに日本料理の伝統を重んじるにしても、営業形態が今から30年以上先まで、まったく同じ形である保証はない」のように、施設運営の方針や体制といった『環境』の変化に対して、「建築空間の基本的な「構え」を崩さずに・・・建築のいわば「枝葉」に当たる部分については、今後もそのように姿を変えていけるようにしたかった」と述べ、変わらない部分をもたせながらもそれ以外は状況に応じて変化させるといった『時間モデル』を読み取ることができる。そこで、本章に続く2節では、まず、『環境』の変化に関する言説と、『時間モデル』に関する言説を抽出し、それらの意味内容を分析・整理した上で、『環境』の変化と『時間モデル』の対応関係を検討することで、建築家の時間認識に関する思考を考察する。

さらに3節では、資料とした各設計論において、「建物本体に基幹構造としてのRC架構と、より細かい空間をもたらす鉄骨や木造の部分とを考えた（図2-1, 分析例No. e-76）」のように、時間認識に基づいて建築をいかに具現化するかといった内容（以下、実現手法）が記述されることが多いことから、そうした実現手法を分析した上で、2節で論じた『環境』の変化および『時間モデル』との関係を総合的に検討、考察し、4節で小結を述べる。

注2-4)　本章では括弧（『　』）を以下のように使っている。
『　』：時間認識に関する言説から読み取ることが出来る、都市景観や社会状況などの建築を取り巻く環境とその変化に対する建築の時間モデルを示す際に、『環境』、『時間モデル』と記す。

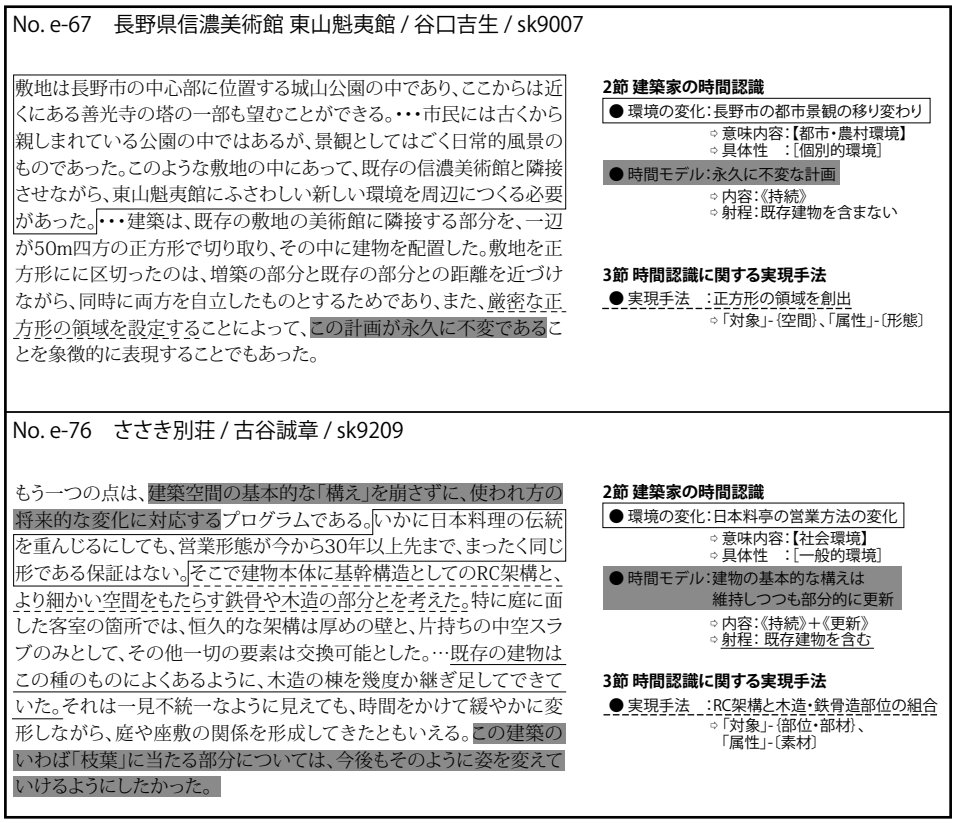

No. e-67　長野県信濃美術館 東山魁夷館 / 谷口吉生 / sk9007
敷地は長野市の中心部に位置する城山公園の中であり、ここからは近くにある善光寺の塔の一部も望むことができる。・・・市民には古くから親しまれている公園の中ではあるが、景観としてはごく日常的風景のものであった。このような敷地の中にあって、既存の信濃美術館と隣接させながら、東山魁夷館にふさわしい新しい環境を周辺につくる必要があった。・・・建築は、既存の敷地の美術館に隣接する部分を、一辺が50m四方の正方形で切り取り、その中に建物を配置した。敷地を正方形にに区切ったのは、増築の部分と既存の部分との距離を近づけながら、同時に両方を自立したものとするためであり、また、厳密な正方形の領域を設定することによって、この計画が永久に不変であることを象徴的に表現することでもあった。
2節 建築家の時間認識
● 環境の変化：長野市の都市景観の移り変わり
⇨ 意味内容：【都市・農村環境】
⇨ 具体性　：［個別的環境］
● 時間モデル：永久に不変な計画
⇨ 内容：《持続》
⇨ 射程：既存建物を含まない
3節 時間認識に関する実現手法
● 実現手法　：正方形の領域を創出
⇨「対象」-｛空間｝、「属性」-〔形態〕
No. e-76　ささき別荘 / 古谷誠章 / sk9209
もう一つの点は、建築空間の基本的な「構え」を崩さずに、使われ方の将来的な変化に対応するプログラムである。いかに日本料理の伝統を重んじるにしても、営業形態が今から30年以上先まで、まったく同じ形である保証はない。そこで建物本体に基幹構造としてのRC架構と、より細かい空間をもたらす鉄骨や木造の部分とを考えた。特に庭に面した客室の箇所では、恒久的な架構は厚めの壁と、片持ちの中空スラブのみとして、その他一切の要素は交換可能とした。…既存の建物はこの種のものによくあるように、木造の棟を幾度か継ぎ足してできていた。それは一見不統一なように見えても、時間をかけて緩やかに変形しながら、庭や座敷の関係を形成してきたともいえる。この建築のいわば「枝葉」に当たる部分については、今後もそのように姿を変えていけるようにしたかった。
2節 建築家の時間認識
● 環境の変化：日本料亭の営業方法の変化
⇨ 意味内容：【社会環境】
⇨ 具体性　：［一般的環境］
● 時間モデル：建物の基本的な構えは維持しつつも部分的に更新
⇨ 内容：《持続》＋《更新》
⇨ 射程：既存建物を含む
3節 時間認識に関する実現手法
● 実現手法　：RC架構と木造・鉄骨造部位の組合
⇨「対象」-｛部位・部材｝、
「属性」-〔素材〕

図 2-1　第 2 章の分析例

別表 2-1　増改築建築の設計論の資料リスト

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	主用途	用途変更	歴史的建造物	『環境』 生活環境	社会環境	都市・農村	自然環境	『時間モデル』 持続	持続+更新	更新	収束	実現手法 部位・部材	空間	なし
1	5109	森博士の家	清家清	住			a						ヘ		な		
2	5304	S氏邸	槇一郎	住						n	イ				色		
3	5312	大文字家の客室	富家宏泰	宿			a						ト		形		
4	5405	十合邸	脇かほる	住			a							リ	な		
5	6102	桃李境 離れ客室3題	白浜謙一	宿				e			ロ				色		
6	6202	新橋演舞場新館ホール	吉田五十八	文		●		e			ロ					配	
7	6405	大石寺大客殿	横山公男	宗				h					ヘ			色	
8	6503	川其	中村登一	商				e				ホ			色		
9	6503	愛染橋病院	浦辺鎮太郎	病					k					ヌ			な
10	6609	鶯花荘	山崎泰孝	宿			a	e				ホ			色		
11	6702	智有趾	鈴木恂	住			a					ホ			な	形	
12	6703	武庫川学院・甲子園会館	大辻真喜夫	住	●	●	c				イ					色	
13	6706	長野市・蔵春閣	三沢浩	文					j		ロ				色		
14	6802	小田邸	田中清	住			b							リ		配	
15	6808	グイン・ホーム	水谷頴介 他	住			b							リ	色		
16	6809	箕面観光ホテル	坂倉建築研究所	宿			a					ホ			色		
17	6812	日本出版会館	下妻力	事						n				リ	色		
18	6905	コートハウスの増改築	太田隆信	住			d					ホ			な		
19	6905	続・坪井教授の家	清家清	住			d							リ			な
20	7003	高知県立郷土文化会館	清岡澄雄	文					k					チ	配		
21	7112	北山本門寺大客殿	内井昭蔵	宗				f			ロ					配	
22	7303	東光園新館	市村光雄	宿					k		ロ						な
23	7308	T氏邸軽井沢山荘	室伏次郎	住					j					チ		形	
24	7308	水かがみの間	谷口吉郎	商					j				ト		色		
25	7407	倉敷アイビースクエア	浦辺鎮太郎	商	●	●			k				ト				な
26	7505	東京大学工学部六号館増築	香山寿夫	学		●			j		ロ				形		
27	7505	辻氏住宅改装	中島龍彦	住		●	a				イ				尺		
28	7508	ザ・デザイン・ハウス・マツシタ	木島安史	住			b							リ		形	
29	7601	善光寺別院願王寺	山崎泰孝	宗		●		i				ニ					な
30	7602	久我山街道の家	内藤恒方	住						o				チ		尺	
31	7704	代官山集合住居計画第3期工事	槇文彦	住				e						リ		配	
32	7704	サウンド・シティ	鈴木高道	商	●		c					ニ					な
33	7708	農家の改造——笠幡の家	星野厚雄	住		●		f			ロ					尺	
34	7708	ある民家の再生——M邸	内藤徹男	住		●		h				ニ			色		
35	7909	谷合眼科	戸沢正法	病					j				ト		色		
36	8009	山の上のホテル本館改修	渡辺邦夫	宿		●	b						ヘ		配		
37	8103	葛飾北区保健所	千葉邦彦	病			b							リ	色		
38	8104	農家	石井和紘	住					l		ロ				形		
39	8206	慶応義塾図書館・新館	槇文彦	文				e	j					リ	形	尺	
40	8206	北野らんぷ館	天藤久雄	文				f					ヘ			色	
41	8208	M邸	畠山博茂	住			b							チ			な
42	8210	出雲大社 新祜殿	菊竹清訓	宗			a,c					ホ			色		
43	8210	金沢工業大学ライブラリーセンター	大谷幸夫	文				g				ニ					な
44	8212	大淀のアトリエ	安藤忠雄	事						m			ト		配		
45	8212	菊池色素工業技術本館	海老原一郎	事				e			ロ				配	配	
46	8212	向日町教会・まこと幼稚園	内井昭蔵	学			a							リ	尺		
47	8303	大谷大学本部・研究室棟	川崎清	学		●			l				ト			配	
48	8303	賀川豊彦記念松澤資料・松澤幼稚園	阿部勤	学		●		f			ロ				配	配	
49	8307	南牧村立南牧北小学校	宮本忠長	学						n	イ				色		
50	8308	梅宮邸	安藤忠雄	住						n				リ	色		
51	8406	東京大学経済学部校舎増改築	香山寿夫	学			c				ロ				形		
52	8509	練馬公民館・練馬図書館	岡秀隆	文					j		イ					配	
53	8512	すや——改造	白井晟磨	商				f			ハ					配	
54	8601	常陸国総社宮参集殿	緒方四郎	宗						n				リ	色		
55	8602	スタンレー電気技術研究所本棟	阿部勤	事			a					ホ				配	
56	8606	赤福本店五十鈴茶屋	山下好次	商		●	b							リ	色		
57	8610	脇町立図書館	重村力	文	●	●			l					リ	☆		
58*	8610	弧風院	木島安史	住	●	●	b				ロ					配	
59	8611	国立国会図書館新館	中田準一	文				e			ロ				色		
60	8703	織陣III	高松伸	事				f					ト		配		
61	8803	女子聖学院 礼拝堂・講堂棟	長島孝一	学						m			ト		配		
62	8810	NTT渋谷“The B”	早川邦彦	商					j				ヘ		色		
63	8811	慈恵園乳児ホーム	葉祥栄	学						m			ト		色		
64	8901	正暦寺福寿院	武市義雄	宗						m				チ		色	
65	8902	京都府京都文化博物館	岡本賢	文	●	●		e			ロ						な
66	9006	東京YWCA会館	香山寿夫	事			a	f						リ	尺	尺	
67	9007	長野県信濃美術館 東山魁夷館	谷口吉生	文					j		イ					形	
68	9012	高知市斎場	上田堯世	他			a	f			イ				色	色	
69	9103	騰々亭	宮本忠長	宿						m	イ				形		
70	9104	修善寺フォーラム 渡月1990	富永譲	事	●				j			ニ			色		
71	9107	脇田美術館	鈴木秀文 他	文					j			ニ				配	
72	9112	山口蓬春記念館	大江匡	文	●	●		e				ニ			配		
73	9112	日本航空チケッティングロビー	伊東豊雄	事				f					ト		色		
74	9206	ヒルサイドテラス第6期	槇文彦	商				e	j		ロ					色	
75	9207	TIME'S II	安藤忠雄	商					k			ニ				色	
76	9209	ささき別荘	古谷誠章	宿				g				ホ			色		
77	9212	熊本県立美術館分館	M.ラベーニャ+E.トーレス	文	●					n				リ	色		
78	9404	武者小路千家 起風軒	川合智明	住				i				ホ				な	
79	9405	楽蹴舎	中東壽一	住						m			ト		☆		
80	9408	日本理容美容専門学校	武市義雄	学					j			ホ			配		
81	9504	千葉市美術館・中央区役所	大谷幸夫	庁	●	●			k			ニ				配	
82*	9504	住居 No.17	内藤廣	住		●	b							リ	配		
83	9507	ホテルブレストンコート	東利恵	宿				e				ホ			色		
84	9511	下北沢Sビル	飯田善彦	商					k				ト		配		
85	9601	DNタワー21	堀田正	事		●	a				ロ				色		
86	9607	ミュージアムパーク アルファビア	武田光史	文	●	●				m			ヘ			配	
87	9612	静銀草薙センター	江中伸広 他	事			a						ヘ		配		

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	主用途	用途変更	歴史的建造物	『環境』 生活環境	社会環境	都市・農村	自然環境	『時間モデル』 持続	持続＋更新	更新	収束	実現手法 部位・部材	空間	なし
88	9702	蔵史館	林寛治	事	●	●		f				ホ					な
89	9703	東京大学１号館	香山寿夫	学		●		h			イ					配	
90	9709	伊豆の長八美術館	石山修武	文				e			イ				形	配	
91＊	9711	「ゼンカイ」ハウス	宮本佳明	事	●		b					ニ			配		
92	9802	熊本県立天草工業高等 実習棟・体育館	室伏次郎	学					l		ロ			ト			
93	9802	鈴木木材工業本社	城戸崎和佐	事						m		ホ			色	配	
94	9805	JR東日本本社ビル	小倉善明	事					k			ニ		ト		尺	
95	9806	清涼山霊源皇寺庫裏	山口隆	宗		●		e				ホ				色	
96	9811	聖台病院作業療法棟	藤本壮介	病								ニ		チ	☆		
97	9911	鹿児島カテドラルザビエル記念聖堂	阪田誠造	宗								ト			色		
98	9912	ビビア庵	出江寛	商								ホ			色		
99	9912	エンデノイ中目黒	西沢平良	商				i		n					色		
100	0003	農家の緑側空間	安田博道	住					j					チ	色		
101	0005	ICB Paris	岸和郎	商		●			j		イ			リ	な		
102	0006	新宿三井ビルディングリニューアル	村尾成文	事				f			イ	ホ					な
103	0008	三良坂町陶芸学習舎	吉松秀樹	他				e				ニ		リ		配	な
104	0010	東京大学工学部2号館	岸田省吾	学		●			k			ホ		リ		形	
105	0103	ZIG HOUSE / ZAG HOUSE	古谷誠章	住			d							ト		色	
106	0103	新風館	佐藤敦 他	商	●	●	b					ニ		ト		形	
107	0105	IMAGICA 品川プロダクションセンター	大江匡	事				g						ト		配	
108	0105	東北大学創造工学センター	八重樫直人	学						mo				ト	★		
109	0107	楓居	有馬裕之	宿			a							ト	色		
110	0112	慶應義塾普通部新本館	池田靖史 他	学		●	b							ト		配	
111	0202	茨城県立図書館	林昌二	文	●		c							ト		尺	
112	0206	安曇野ちひろ美術館新館	内藤廣	文			b							ト		形	
113	0206	横浜赤レンガ倉庫1号館・2号館	新居千秋	商	●	●			j			ニ		リ			な
114＊	0210	スガルカラハフ	宮本佳明	宗			d							リ	形		
115	0303	表参道テラスハウス	堀部安嗣	住						n	ロ			リ			な
116	0402	日光霧降・マープルハウス	奥山信一	文	●			f				ホ		リ			な
117	0404	LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH	青木淳	商					j		イ			リ	★		
118	0411	交詢ビルディング	大山尚男	商		●		e			ロ			リ	な	な	
119	0412	松屋銀座 耐震外装	吉田進 他	商		●			j					リ	色		
120	0508	r-ST1 201 / 203	長岡勉	住			b							ト	色		
121＊	0607	角館の町家	渡辺菊眞	住			a					ニ				配	
122	0612	YKK50ビル リノベーション2006	宮崎浩	事			a	g				ホ			配		
123	0703	TARO NASU OSAKA	青木淳	文	●		a							ト	色		
124＊	0704	とたんギャラリー	大川幸恵	文	●		a							ト			
125＊	0704	押小路の町家「幹翠」	吉村篤一	住						m				リ	な		
126	0706	東京大学医学部附属病 中央診療棟Ⅱ期	岡田新一	病					g			ニ				尺	
127	0711	大隈講堂（保存・再生）	大野勝	文		●			h			ホ					な
128	0802	REISM	田島則行	住					f			ニ			配		
129	0803	カエツキャニオン	長岡勉	学				a							形		
130	0803	金刀比羅宮新茶所『神椿』	田窪恭治	商							イ				色		
131	0805	犬島アートプロジェクト「精錬所」	三分一博志	文	●	●			j	p				チ		配	
132	0808	SAYAMA FLAT	長坂常	住				b						ト	配		
133	0809	house K	宮晶子	住				a						ト	配		
134	0810	千本松 沼津倶楽部	渡辺明	宿		●				m				チ	色		
135	0810	VEGA	小泉誠	事		●				m				ト	色		
136＊	0902	帷子の家	矢田朝士	住	●					m				ト	色		
137	0904	レストラン長屋門	千葉学	商		●			j		ハ			ト		配	
138	0911	書院／Third-house	岸和郎	住				f,h						ト		色	
139	0912	上大須賀の家	谷尻誠	住			a							ト	配		
140	1001	澄心寺庫裏	宮本佳明	宗		●	a					ホ			色		
141	1001	とらや一条店改修	内藤廣	商				i			ロ	ニ				形	
142	1003	カバヤ珈琲	永山祐子	商		●		e								色	
143	1003	Sakura flat	若山均	住			a					ト			配		
144	1005	京都工芸繊維大学 60周年記念館	木村博昭	学		●		e			イ					色	
145	1007	武蔵野美術大学 美術館・図書館	藤本壮介	文				a				ト				形	
146	1007	日産厚生会 玉川病院南	星野大道	病					h					ト	配		
147＊	1008	平和台の民家	阿部勤	住		●			e			ニ				形	
148＊	1008	美原の農家	大野鶴夫	住		●		a				ニ			色		
149	1102	三輪窯Ⅱ	三分一博志	宿						n				リ	色		
150	1103	大森ロッヂ	大島芳彦	住				b						リ			な
151	1104	Aesop Aoyama	長坂常	商					g					ト	★		
152	1105	Maruya garden	みかんぐみ	商						o				リ	色		
153	1106	Ring Around a Tree ふじようちえん増築	手塚貴晴＋由比	学						o				ト	色		
154＊	1106	Do It Yourself	垣内光司	住		●		a				ニ					な
155	1107	みやした こうえん	塚本由晴	他					g		ロ						な
156	1107	テクニカフクイ新社屋	薄田学 他	事						j		ニ		ト		配	
157	1108	駒沢公園の家	今村水紀 他	住								ト		ト	色		
158	1109	VISION	根津武彦	事						o					色		
159	1203	高野口小学校校舎改修・改築	本多友常	学		●					ロ				色		
160	1204	大多喜町役場	千葉学	庁		●			f			木			形		
161	1205	寅醒山高福寺第二文華殿	森田昌宏 他	宗						m				ト	配		
162	1206	Peanuts	前田圭介	学				a						ト	色		
163	1208	豊崎長屋（南長屋・北終長屋）	小池志保子	住		●		b						リ	色		
164＊	1208	KIM HOUSE 2011	岸和郎	住					j						な	な	
165＊	1208	8ビル	塩塚隆生	住				a						ト		配	
166	1209	旧澤村邸改修	山中新太郎	文	●	●		a				ニ					な
167	1302	大阪市住宅供給公社 カスタマイズ賃貸プロジェクト	馬場正尊	住				b						ト	色		
168	1302	麻布十番の集合住宅	栃澤麻利	住					k					ト	色		
169	1307	字城市立豊野小中学校	小泉雅生	学				g			ロ					形	
170	1308	Apartment惣	泉幸甫	住						m				ト		配	
171	1309	直島宮浦ギャラリー	西沢平良	文	●					m				ト	色		
172	1309	豊島横尾館	永山祐子	文	●		b				ハ	ニ			色		
173	1312	改築 散田の家	坂本一成	住			b										な

別表2-1 注1) 資料は原則「新建築」誌に掲載された設計論であるが、補助的に「新建築 住宅特集」誌に掲載された設計論もみている。資料番号に＊が付されているものは「新建築 住宅特集」誌に掲載された資料である。
注2) 主用途の記号は、住：住宅、事：事務所、庁：庁舎、学：学校、文：文化施設、商：商業施設、宿：宿泊施設、病：病院、宗：宗教施設、他：その他 を示す。
注3) 『環境』の変化および『時間モデル』の記号はそれぞれ、表1、図3に記載したものを用いている。下線を引いた記号は、『環境』の変化の欄では、『環境』の具体性における［個別的環境］であるものを示し、『時間モデル』の欄では、『時間モデル』の射程における既存建物を含むものを示す。また、実現手法は「対象」ごとに「属性」を記載しており、記号は付表の頭文字としている。ただし、☆は色・素材感と形態の双方を属性としているものを、★は配置・配列と色・素材感の双方を属性としているものを示す。

２節　増改築建築における時間認識

２．１　『環境』の変化に関する意味内容

資料とした設計論にみられる『環境』の変化について通読したところ、その意味内容は多岐にわたっていた。そこで資料から『環境』の変化に関する言説を抽出し、その意味内容を、KJ 法的[注 2-5)] に相互に比較検討した。その結果、【生活環境】[注 2-6)]【社会環境】【都市・農村環境】【自然環境】（以下、それぞれを【生活】のように略記する）の 4 つの大枠で捉えることができた（表 2-1）。以下、それぞれの具体的な内容を概説する。

【生活】は最も多くみられた『環境』で、建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象に、その変化を論じるものである。それらは、「結婚式、展示、演奏、庭鑑賞、会合・パーティ、食事という「行為」を流動的に繰り返す場である。（109）[注 2-7)]」のように、施設内のアクティビティといった具体的な活動の変化について論じるものと、「･･･熱意あふれる教師の皆さんが磨き上げていくものなのだと理解し、使われながら考えられていくであろう・・・(110)」のように、使用者のメンタリティの変化について論じるものなどが大半を占めたが、「ヒトが使う施設であれば、用途の変化に応じて・・・銀行がホテルになる、あるいは博物館になるといった例が日本でも生まれ始めています。(111)」のように、建物の主用途の変更について論じるもの、および「当時少年だった坪井家の 3 人の坊やも成長して、それぞれ一人前の建築家になった･･･そういう変化の波は･･･(19)」のように、家族構成の変化について論じるものなども僅かであるが見い出すことができた。

【社会】は建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象に、その変化を論じるものである。それらは、「古い京都の家並みにまじって明治から大正、昭和初期の

注 2-5)　前章でも述べたように、KJ 法とは民族地理学の分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法をいう。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法としている（参考文献 9）。ここでは、こうした意味で KJ 法的としている。

注 2-6)　本論では下記のように括弧を使い分けている。
【　】：『環境』の変化に関する意味内容のカテゴリー
［　］：『環境』の具体性のカテゴリー
《　》：『時間モデル』のカテゴリー
「　」：実現手法に関する言説における、具現化する際の建物の対象とそれに与えられた属性を示す際に、「対象」、「属性」と記す。
｛　｝：「対象」のカテゴリー
〔　〕：「属性」のカテゴリー
（　）：資料番号

注 2-7)　本章における括弧の使い分けを注 2-6 に記してある。

それぞれの時代を表現した建築が連なり・・・(65)」のように、建築の様式の時代状況と連動した移り変わりについて論じるもの、および「さまざまな価値判断が錯綜している時代でもある。・・・古いものと新しいものの境目は常に曖昧であって、時に古いもののほうが新しく見えることだってある。このような時代において・・・(160)」のように、社会に共有された価値観の変化について論じるものなどが多くみられた。それらと比較して少数ではあるが、「インターネットを基盤としたモバイルテクノロジーが企業のオフィスの中に発達し始めると、これまでの会社にドメインをおくという体制にも変化の兆しが見え始める。(107)」のように、施設運営の方針・体制の変化について論じるもの、「家長制度が崩壊したために、上層階級は農地改革の影響もあって、男衆や女子衆を抱える大家族の生活は瓦解した。そして小家族や核家族に移行する・・・(34)」のように、社会制度の変化について論じるもの、「武者小路千家は、利休より 14 代にわたって茶の湯の正統を継承する三千家のひとつであり、・・・その精神性と共に 400 年以上も継承され、現代においてもわれわれを啓発する力をもつ。(78)」のように、文化の伝承・刷新について論じるものなどもみられた。

【都市・農村】は、周辺の建物や田畑などの人工物群に関する事柄を対象に、その変化について論じるものである。それらは、「この地は、古くからの農村である。しかしファーストフード店、コンビニ等がボツボツ建ち始めており、現状では郊外と呼んでもよいような、それでいて懐かしいような、何でもないが変貌しつつある農村風景である。(100)」のように、都市景観・農村景観の変貌について論じるものが最も多く、こうした都市や農村の物的な側面の変化について論じるものに対して、「麻布十番は、洗練された麻布エリアの中でも庶民的な懐かしい雰囲気を残す地域である。古くから続く商店街は大規模な開発から逃れ、個々の建築の建替えや店舗の入れ替わりにより、緩やかに更新されながら街の魅力が継続している。(168)」のように、建物の建替えによって都市が更新する現象について論じるものもみられた。また、数は少ないものの、「かつての土蔵や、蔵塀や、無意識に形成された広場が、多くの namable objects (名付けることのできる対象―モノ) にとりかこまれた memorable space (記憶された空間) であるとしたならば・・・namable objects と memorable space をつくってゆくべきだと考えた (57)」のように、人びとに共有された都市・農村の情景の喪失について論じるものもみられた。

【自然】は、四季の気候や植物の成長などの自然界の現象を対象に、その変化について論じるものである。まず、「1 日の太陽や天候の変化、四季を通じての外光の変化が、・・・(61)」のように、天気・気候の移り変わりについて論じるものが半数強を占めている。その他には、「外装に使われた熊本産の石や銅板が風化していく・・・(77)」のように、材料の風化・腐食について論じるものと、「屋外の緑が生い茂る頃には、床から伸びる植

物と共に・・・(158)」のように、植物の成長・季節変化について論じるものがみられた。また、該当数はひとつであったが、「地球上のあらゆる地形には、すでに利用可能なエネルギーが存在している。・・・絶え間ない自然の再生サイクルに従い・・・(131)」のように、自然界のエネルギー循環について論じるものもみられた。

表 2-1 『環境』の変化に関する意味内容

【生活環境】	施設内のアクティビティの変化 a (29)	この建築は特異な使われ方をしている。住宅と別荘と記念碑の中間にあって、そのどれでもあるといった性格をもつ。あるときはいくつかの家族が集まり、子供たちの声でみちあふれ、そしてあるときはまるで静かな生活が営まれ、ほとんど住む人のいない状態にまでなる。 ⇨No.e-11
	使用者のメンタリティの変化 b (20)	映画「寅さん」でおなじみの柴又も管内にあり、建築的な財産は少ないが人情という言葉がまだ生きている地域である。・・・衛生行政は従来都の管轄であったが、昭和50年区に移管され区民により密着した形でその健康管理を受け持つことになった。・・・保健所に訪れることの多い子供や母親に安心感を与え、保健所を職場とする人々や地域に住む人々により、長い時間の経過の中で愛され誇りとする・・・ ⇨No. e-46
	建物の主用途の変更 c (5)	ボーリング場をレコーディングスタジオに再生させることは必ずしも最適の方法ではないかもしれません。・・・十分に耐用年数を持つ建物はそれぞれの時のそれぞれの要求に合ったものに再生改装して行く時代に入ったといえそうです。⇨No. e-32
(58)	家族構成の変化 d (5)	一般的に、「小住宅に増改築案はつきもの」といわれており、この場合、家族構成の変化、家族の成長にともなう生活様式の変化といったことがその原因として上げられるが、・・・ ⇨No. e-18
【社会環境】	建築の様式の時代状況と連動した移り変わり e (19)	13年間の時の流れを隔てて隣り合うふたつの建築――社会背景、施主のニーズ、建築の手法の変化の中で、このふたつの建物の間に如何なる「関係」を生み出すかが、今回のテーマであった。13年間で確実に時代は変わってきたし、それにつれて建築の様式も当然変わって行くだろう。⇨No. e-45
	社会に共有された価値観の変化 f (15)	不動産は、その建てられた時代時代のニーズを考慮して設計されてはいるものの、時代が変われば当然ニーズもマーケットも変わる。そういった時代の変化を考慮した時に、・・・ ⇨No. e-128
	施設運営の方針・体制の変化 g (8)	建設の動機があり、設計、施工、監理、運営とハコモノはつくられ利用されていく。このようにつくられたものは、どう運営されるかが運命を左右する。運営を通しマネージメントが熟し、それがフィードバックされるようなサイクルがつくられるようになればしめたものである。⇨No e-126
	社会制度の変化 h (6)	日本の医療建築は、国の政策である医療制度とそこで行われる診療形態の影響を強く受ける。・・・こうした基準や医療形態は、社会構造の変化や医療の機能分化により多様化するとともに急激な変化を続けている。医療法は1985年から25年の間に5回改正され、診療報酬制度も2年ごとに改正される。診療形態も疾病構造の変化や医療技術の進歩により日々変化し続け、・・・ ⇨No. e-146
(51)	文化の伝承・刷新 i (4)	つくるということは、常にこの「古さ」に挑戦しなければならない宿命をもっている。世の中は、生々流転、古い生命が亡び新しい生命が生まれ育つからこそ変化してゆくし、その過程で文化としての継承が行なわれるからこそ前向きに発展するのである。・・・ ⇨No. e-29
【都市・農村環境】	都市景観・農村景観の変貌 j (24)	銀座通りは、景観に対する法的な縛りがないにもかかわらず、東京で数少ない景観調和のとれた商業地である。それは、見識ある老舗店舗と、街並みと商業的価値に魅力を感じ参入する店舗で形成された街であるからである。・・・1 期完成から現在まで、すでに 3 年以上経っているが、この間にも銀座の表情も目まぐるしく変わ ってきた。刻々と変化する街に・・・ ⇨No. e-119
	建物の建替えによる都市の更新現象 k (10)	今まで住居があった場所が更地になり駐車場ができる。しばらくするとシートに囲われて、いつの間にか建物が立ち上がる。わずか1年足らずで風景が一変する。突然の変貌の相乗的な繰り返しが、都市をつくっているということができる。このように日々加速するスピードで変化している都市において・・・建築を構想することは、ひとつの現象を引き起こすことにほかならない。 ⇨No. e-84
(39)	人びとに共有された都市・農村の情景の喪失 l (5)	この農村風景はこれといって特色がないようだが、考えてみるとこうした中庸な農村風景こそが思いのほか私たちに共有された〈農村〉のイメージとなっているような気がする。・・・きっと誰しもが農村のイメージを持っているに違いない。・・・村の中には軽量鉄骨のプレファブ住宅も建つようになり、田園風景のサイクルの長い悠久の美しさと全く関係がなくなってしまっている。 ⇨No. e-38
【自然環境】	天気・気候の移り変わり m (17)	庭園と客室の間の鬱蒼とした木立を写し込む水盤には、富士の湧水がこんこんと注がれている。・・・夏は涼しげなせせらぎを、冬はあたたかな陽の光を、時に建物の陰影を映し込み、人びとを楽しませてくれる。・・・時空間の中に身を委ねることで感受でき・・・ ⇨No. e-134
	材料の風化・腐食 n (9)	西欧の教会の扉は・・・ブロンズ製の数百年をかけて製作されたもので、年月を経るにしたがってますますブロンズ特有の緑青を含んだ渋い青銅色を呈していく。⇨No. e-17
	植物の成長・季節変化 o (5)	施主は、ぎんなんや栗を拾ったり、また敷地内の桧や椿、かえでなどの樹が自然のまま大きくなるのを楽しんで生活してこられた。新しい家を設計するにあたって、この豊かな自然環境をなるべく変えないで楽しむことができる、この敷地に合った家をつくることが大切なことであった。 ⇨No. e-30
(31)	自然界のエネルギー循環 p (1)	地球上のあらゆる地形には、すでに利用可能なエネルギーが存在している。その対象は長い時間をかけて自然に形成されたものや気候条件だけを指すのではなく、かつて人類が注ぎ込んだ人的構造物も含まれている。・・・犬島アートプロジェクトでは、負の遺産と化した廃墟の島を、自然エネルギーに導かれた世界で最も知的な芸術アイランドへと生まれ変わらせることが求められた。・・・絶え間ない自然の再生サイクルに従い、建築そのものも姿形を持って自然収支全体の中に組み込まれていくこと。⇨No. e-131

以上が『環境』の変化に関する記述内容の概略であるが、こうした記述では、抽象的に『環境』の変化を論じるもの（[一般的環境]注2-8)）と、地域や組織の名称を具体的に明示して、その変化を論じるもの（[個別的環境]）がある。例えば、図2-2注2-9)の抽出例No. e-34では、「家長制度が崩壊したために・・・、男衆や女子衆を抱える大家族の生活は瓦解した。そして小家族や核家族に移行する・・・」のように、家族制度の変化を状況論的に述べているため、[一般的環境]として捉えることができる。これに対して、図2-2の抽出例No. e-127は「早稲田大学は次なる125年に向けて、・・・歴史と伝統に支えられたものを引き継ぎつつ、常に時代に即した先進的教育環境の創造を目指している」のように、『環境』の変化となる対象を具体的に明示して論じているため、[個別的環境]として捉えることができる。

このような視点から、すべての資料について検討した上で、先に捉えた『環境』の変化に関する意味内容との対応関係を、図2-2のグラフに示している。これより、[一般的環境]では【社会】と【自然】が、[個別的環境]では【生活】と【都市・農村】がそれぞれ相対的に比率が高いことがわかった。

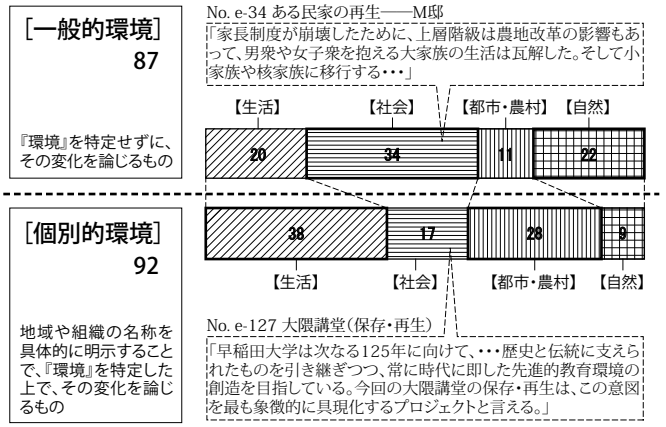


図2-2 『環境』の具体性

注2-8) 本章における括弧の使い分けを注2-6に記してある。
注2-9) 各資料における図2-2のカテゴリー項目の情報は別表2-1に記してある。

2.2 『時間モデル』の内容

『時間モデル』は前節で定義したように、『環境』の変化に対して、自身の設計した増改築部の建築表現をいかに位置づけるかに関する思考のことである（図 2-1）。まず、資料から抽出した『時間モデル』に関する言説の内容を比較検討した。その結果、『環境』の変化に対して特定の状態を維持させる《持続》[注 2-10] と新しい状態に変更させる《更新》という対立する性格のモデルで位置づけるものと、これらとは性格が異なり、『環境』の変化にともなって理想的な状態に近づかせる《収束》というモデルで位置づけるもので捉えることができた[注 2-11]（図 2-3[注 2-12]）。以下、各『時間モデル』について具体的に概説する。

《持続》は、『環境』の変化に対して、建築表現を変化させず、特定の状態を維持させるモデルである。具体的には、「建築全体が周囲の環境変化に強い抵抗力を持った都市の建築としての普遍性を持っている・・・(52)」のように建築表現が『環境』の変化に対して耐えることを意図するものや、「たとえわずかでも時代ごとにバトンを受け渡し、けっして途切れないこと、それ自体に大きな意味があるはずだ・・・(141)」のように建築表現が『環境』の変化によらず受け継がれることを意図するものなどがみられた。

それに対して《更新》は、『環境』の変化に合わせて建築表現を新しい状態に変更させるモデルである。具体的には、「オフィスもそれに準じて変化をしていく・・・(107)」のように、建築表現が『環境』の変化に追従して新しい状態に変更されることを意図するものと、「外光の変化が、内部の空間に微妙な変化を反映する。(61)」のように、建築表現が『環境』の変化と同時に新しい状態に変更されることを意図するものなどがみられた。これら 2 つの『時間モデル』は、単一の性格による明快なモデルといえる。

これに対して、《持続》と《更新》の双方の性格を含む両義的なモデル（《持続＋更新》）で位置づけるものも存在し、それらは『環境』の変化に対して不変な部分を保持しながら、それ以外の部分の更新を意図したものである。具体的には、「異なる改修手法が組み合わ

注 2-10) 本章における括弧の使い分けを注 2-6 に記してある。

注 2-11) ここで述べたように、各『時間モデル』は『環境』の変化と連動する概念であるので、各『時間モデル』がどのような時間の経過のなかで認識されているかを捉える上で、『環境』の変化に関する時間の単位は重要である。こうした時間の単位に関して、【生活環境】や【自然環境】に該当する資料のなかには、一日のなかの変化といった極めて短い時間を単位としているもの（8 資料）、一年のなかの季節の変化などの時間を単位としているもの(7 資料)、これらの双方を単位としているもの(9 資料)がみられたが、こうした比較的短い時間を単位としている資料は少なかった。その他の資料は、明確な記述はないものの、建築の様式の時代状況における移り変わりや建物の建替えによる都市の更新現象などの意味内容から鑑みると、数年から数十年といった比較的長い時間を単位としていることが推察できた。また、こうした比較的長い時間の経過のなかで、建築の特定の状態を維持させることや建築を新しい状態に変更させることなどに関与する主体は、施主や行政など多様であるが、本研究では、建築家の思考を検討しており、『時間モデル』を意図する主体は建築家である。

注 2-12) 各資料における図 2-3 のカテゴリー項目の情報は別表 2-1 に記してある。

されてできた建築の状況をまちの縮図と見立て、将来もそれぞれに別の手が加えられて使われ続けていけるようにしたいと考えた。(166)」のように、建築表現が『環境』の変化に対応して部分的に修正されることを意図するものと、「中心部分が不変部分とすれば、周辺部分は可変な部分である。(55)」のように、建築表現に、『環境』の変化に対して変わらない部分と変わる部分を分離・併存させることを意図するものなどがみられた。

上記三つの『時間モデル』は、対立する性格の《持続》と《更新》を極として、その意味を構造化して捉えることができるものであるが、《収束》はそれらとは意味的性格の異なるものである。《収束》は、『環境』の変化に応じて、理想的な状態に近づかせるモデルで位置づけるものであり[注2-13)]、「時と共に周辺の風景に溶け込んでいくことを意図している。(96)」のように、建築表現が『環境』に同化していくことを意図するものと、「新築時が美しいのではなく、時がたつにつれて美しい、そんな建物こそ私がイメージしたものであった。(54)」のように、建築表現が『環境』が変化するごとに成熟していくことを意図するものなどがみられた。

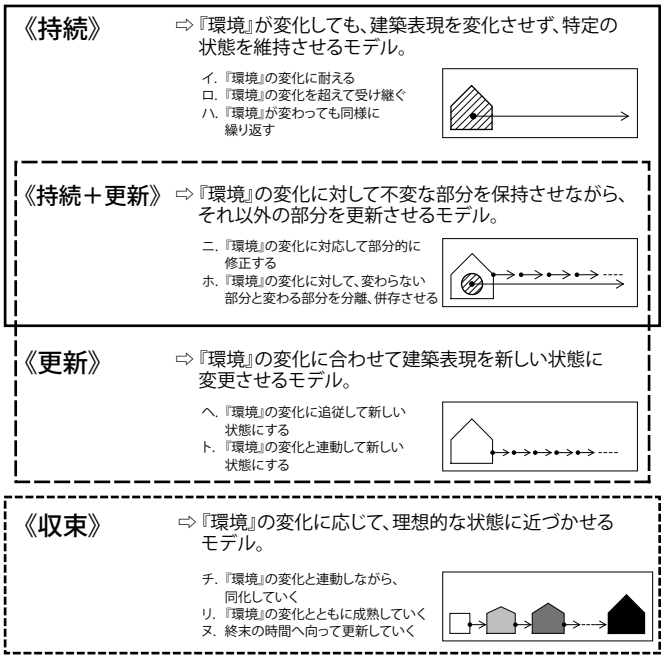


図 2-3 『時間モデル』の内容

注 2-13) 《収束》における理想的な状態とは、必ずしも建築が『環境』と同化して収斂した状態だけでなく、風化などにより建築が物質的に発散した状態も含んでいる。

また『時間モデル』に関しては、設計対象である増改築部だけでなく、既存部も含めて述べられることがある。例えば、図 2-4[注 2-14)]の抽出例 No. e-140 では、「インフラとインフィルを分けて考えた方がよいと思われた。ここで、インフラとは 100 年、200 年と永続する鉄筋コンクリートの大屋根であり、その下に自由に展開する軽快な木造軸組がインフィルとなる。」と述べられていることから、《持続＋更新》に関する『時間モデル』を意図していることが読み取れ、それと同時に、「伽藍は大きく 1752 年創建の法堂と 1830 年創建の客殿からなる。それらの増改築の歴史を辿ると、明らかに、変わるもの（= 屋内空間）と変わらないもの（= 大屋根）のふたつによって構成されていることに気付く」のように、既存建物への洞察に基づいていることが分かる。

このように、『時間モデル』に既存建物を含めて思考するか否かによって、既存建物の状態を継続させるか否かを判断し、それを『時間モデル』の射程の指標とした。そして、全ての『時間モデル』ごとに、その射程について検討した（図 2-5）。以下、特徴的な傾向について述べる。

まず、対立する性格である《持続》と《更新》についてみると、それらの総数は同程度であるものの、その射程において、《持続》では既存建物を含む資料に、《更新》では既存建物を含まない資料に、それぞれ偏りがみられた。このことは、既存建物を含むことでオリジナルの状態を維持させるといった、『時間モデル』の射程を比較的長く設定した思考と、既存建物を含まず増改築建物に言説を限定することで当初の状態の変更を促すといった、『時間モデル』の射程を比較的短く設定した思考といった定型的な思考が基調になっていることを示すと考えられる。また《収束》における射程では、既存建物を含まないものに該当数の偏りがみられた。

注 2-14)　各資料における図 2-4 のカテゴリー項目の情報は別表 2-1 に記してある。

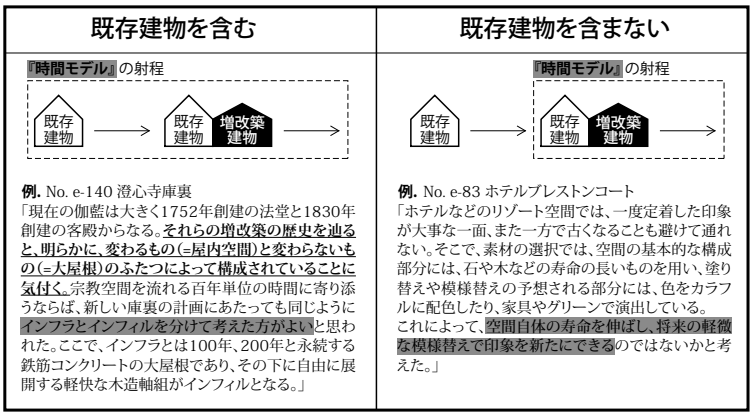


図 2-4 『時間モデル』の射程

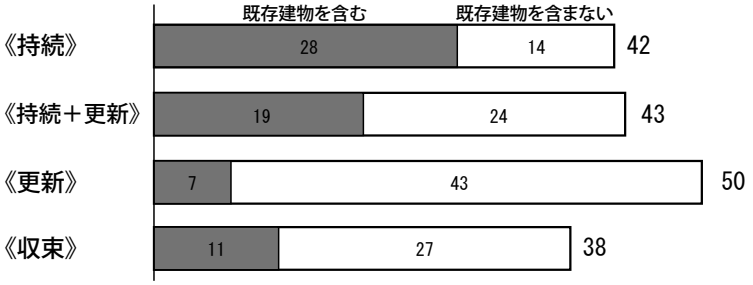


図 2-5 『時間モデル』とその射程の対応関係

2.3.『環境』の変化と『時間モデル』の対応関係

前項までに検討してきた『環境』ごとに『時間モデル』との対応関係を示したものが図 2-6 である。さらに図 2-6 では、それぞれの組合せにおいて、『環境』の変化に関する意味内容の細項目および『時間モデル』の射程についても示している。

まず、『環境』の変化に関する意味内容の大枠である【生活】【社会】【都市・農村】【自然】と、『時間モデル』の《持続》《持続＋更新》《更新》《収束》との対応関係を検討した。

その結果、【都市・農村】では、すべての『時間モデル』がほぼ同程度みられ、多様な『時間モデル』が思考されていることがわかる。一方【生活】【社会】【自然】においては、『時間モデル』の該当数に偏りがみられた。以下、その特徴について考察する。

まず、資料数の多い『環境』である【生活】と【社会】において、《持続》と《更新》といった対立する性格の『時間モデル』に着目すると、【生活】では《更新》と、【社会】では《持続》とそれぞれ相対的に対応がみられた。このことから、建物内での活動や用途などの使用者に関わる事柄の変化に追従したプラグマティクな思考と、制度や慣習などの社会的な事象の変化から距離をとる批評的な思考といった、建築表現に関する相反する特徴を読み取ることができる。

さらに、【自然】においては、《持続》と《持続＋更新》がほとんどみられず、《更新》と《収束》に大半が集中した。このことは、気候の変化や植物の成長などの自然現象に着目した場合には、その変化に建築表現を対応させることで、自然と調和させようとする傾向を示すと考えられる。

また、《持続》および《更新》と意味的性格の異なる『時間モデル』である《収束》については、【社会】ではほとんどみられないのに対して、【生活】と【自然】では比較的多かった。このことは、【生活】と【自然】が《更新》との対応が強かったことを考慮すると、《収束》は《更新》と性格の異なる『時間モデル』であるものの、『環境』の変化に反応して建築表現それ自体が変質すべきであるとする点では共通し、最終完成形を想定するか否かに相違点があることを示すと考えられる。

以上を踏まえたうえで、さらに、『環境』の変化に関する意味内容の細項目および『時間モデル』の射程に関しても検討する。

まず、【生活】において、意味内容の細項目において多くみられた、施設内のアクティビティの変化および使用者のメンタリティの変化について論じるものに着目すると、前者は《更新》および《持続＋更新》との対応がみられ（《更新》では 11/16 資料、《持続＋更新》では 10/17 資料）、後者は《収束》との対応がみられた（12/17 資料）。このことは、使

用者の活動が変わる場合は、建物の使用上の支障をきたさないように建築表現も対応させる傾向と、使用者の建物への認識に着目する場合は、建物への順応とともに建築表現の最終完成形を見据える傾向を示していると考えられる。

また、【自然】において、『時間モデル』の射程をみると、既存建物を含まないものがほとんどであった（29/31 資料）。このことは、天候の移り変わりや植物の成長などの自然現象と連動させて、既存の状態の変更を促す傾向を示していると考えられる。

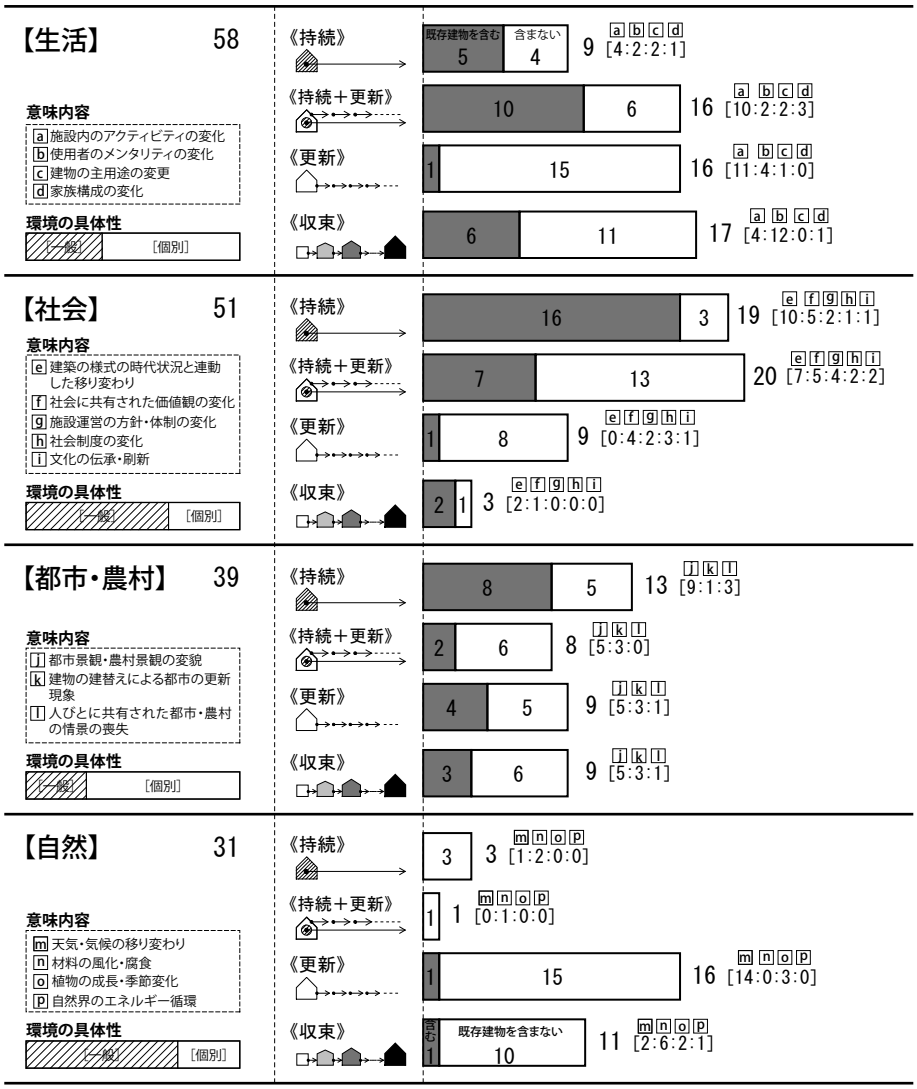


図 2-6 『環境』の変化と『時間モデル』の対応関係

3節　増改築建築における時間認識に関する実現手法

3.1　実現手法

資料とした設計論から、設計に際して、時間認識に基づいてどのように具現化したかについて明確に著している箇所を実現手法として抽出し、その内容を相互に比較検討した。その結果、それらは建物のどの部分で表現をしたかという「対象」[注2-15)]と、その「対象」に対してどのような性質を与えたかという「属性」との組合せで捉えることができた（図2-1、表2-3[注2-16)]）。「対象」は、床・壁・天井や柱・梁などの具象的な実体として捉えることのできる｛部位・部材｝[注2-17)]と内部や外部の境界づけられた広がりとして捉えられる｛空間｝に分けた。これに対し「属性」は〔配置・配列〕[注2-18)]、〔色・素材感〕、〔形態〕、〔尺度〕で捉えることができた。

表2-3　実現手法

対象 / 属性	部位・部材 115 (54)	床・壁・天井・屋根	柱・梁	家具・植栽等	空間 62 (19)	内部空間	外部空間	なし 21 (0)
配置・配列	26 (14)	11 (4)	6	16 (8)	25 (13)	17 (8)	12 (2)	
色・素材感	63 (28)	42 (11)	21 (2)	22 (6)	14 (4)	9 (1)	5 (3)	
形態	14 (6)	9 (8)	3	6 (4)	10 (1)	10	1	
尺度	4 (1)	3 (1)	1	1	9	7	2	
なし	8 (5)	4	1	6 (3)	4 (1)	3	2	21

表2-3注：
表中の括弧内の数字は、該当資料のうち、対象が複数あるものの数を示す。また、｛部位・部材｝などの「対象」における内訳の項目は重複することがあるため、内訳の総数が「対象」の該当数と必ずしも一致しない。

注2-15)　本章における括弧の使い分けを注2-6に記してある。
注2-16)　各資料における図2-4のカテゴリー項目の情報は別表2-1に記してある。
注2-17)　本章における括弧の使い分けを注2-6に記してある。
注2-18)　本章における括弧の使い分けを注2-6に記してある。

3.2　時間認識と実現手法の対応関係

前節では、建築家の時間認識を捉えるために、『環境』と『時間モデル』との対応関係を検討した。ここでは、それぞれの組合せごとに実現手法との対応関係を検討する（図 7）。

まず、 実現手法の「対象」において、｛部位・部材｝ が ｛空間｝ に比べて約 2 倍弱の該当数がみられた（表 2-3）。このことは、建築家の時間認識が、壁や建具などの実体的な要素に反映されることが多いことを示すものである。ここで前章で相反する特徴として述べた、【生活】と《更新》の組合せ、および【社会】と《持続》の組合せに着目すると、前者では ｛部位・部材｝ と、後者では ｛空間｝ との対応がみられた。このことは、壁や建具等により具現化された実体的な建築表現としての側面に、施設を使用する人の活動の変化へ追従させる時間認識が反映されるのに対し、非実体的な性格の空間としての建築表現には、制度や慣習などの社会的な事象の変化から距離をとる時間認識が反映される傾向があることを示すと考えられる。

以上が、「対象」に関する傾向であるが、「属性」に関しては、【自然】と《収束》の組合せにおいて、｛部位・部材｝ の「属性」が全て〔色・素材感〕であるといった傾向がみられた。これは、例えば、外壁の素材などが風化により変化していくとともに、それ自体が建築表現を完成させていくといった内容であり、建築の物質性に基づく時間認識とその実現手法との対応関係における典型例であると考えられる。

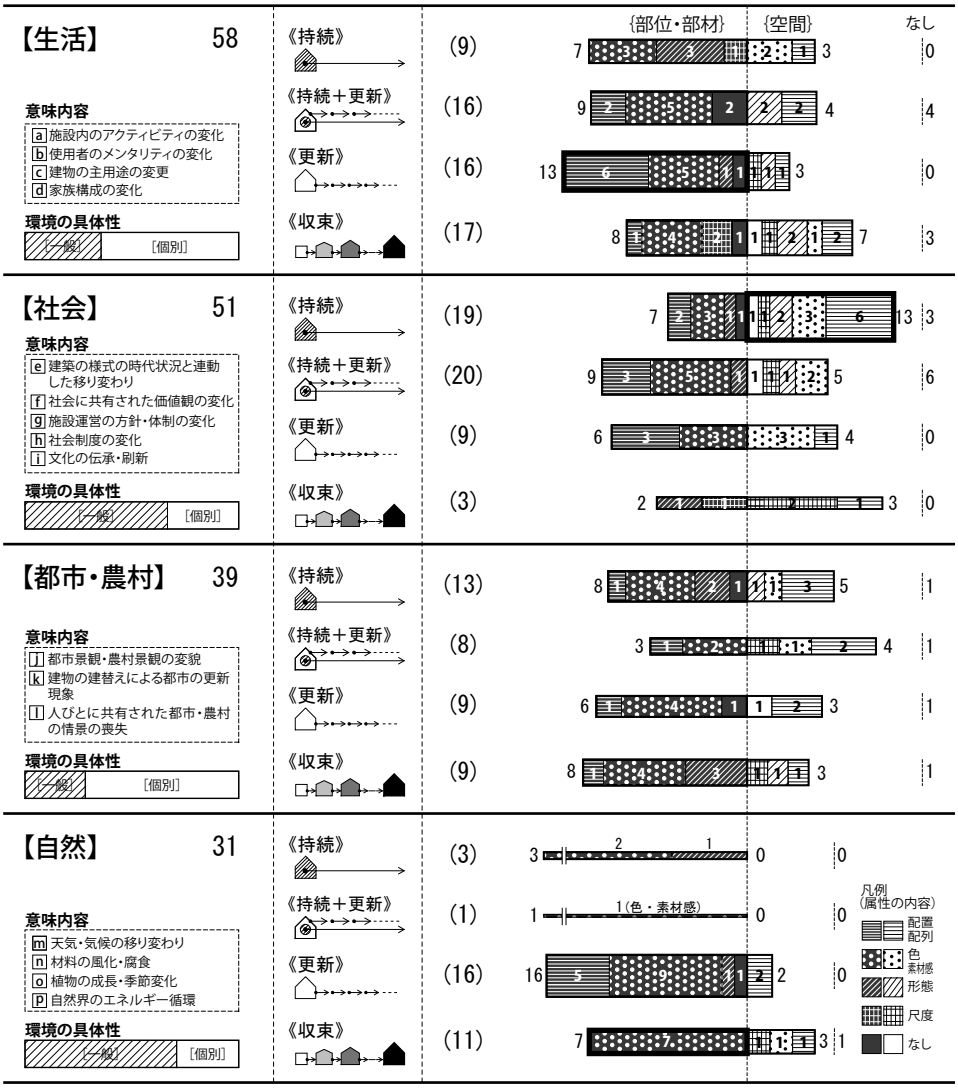


図 2-7　時間認識と実現手法との対応関係

４節　小結

本章は、増改築建築の設計論において、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識に関して、建築の設計を取り巻く環境の変化に対して、建築家自身の設計した増改築部の建築表現をいかに位置づけるかといった観点から捉え、さらにその時間認識を具体的な建築にいかに反映させたかを検討したものであった。

２節では、建築の設計を取り巻く環境の変化に関する意味内容と建築家の建築表現の位置づけ方に関するモデルについてそれぞれ検討した。建築の設計を取り巻く環境の変化については、建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象としてその変化を論じるものである生活、建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象としてその変化を論じるものである社会、周辺の建物や田畑などの人工物群に関する事柄を対象としてその変化について論じるものである都市・農村、および四季の気候や植物の成長などの自然界の現象を対象としてその変化について論じるものである自然といった４つの内容で捉えることができ、建築家の建築表現に関しては、持続性と更新性といった対照的な性格のモデルで位置づけるものと、時間の経過とともに理想的な状態に収束させるモデルで位置づけるもので捉えることができることを示した。

さらに、建築の設計を取り巻く環境の変化と建築家自身の建築表現の位置づけ方との対応関係を検討したところ、いくつかの特徴的な傾向がみられた。まず、都市や農村における環境の変化に関しては、多様なモデルでの位置づけ方がみられた。それに対し、施設の使用者に関わる事柄の変化には、それに追従させるプラグマティクな思考と、制度や慣習などの社会的な事象の変化には、それから距離をとる批評的な思考といった、相反するモデルによる位置づけ方の傾向がみられた。また、気候の変化や植物の成長などの自然現象に対しては、時間の経過とともに更新させるモデルと理想的な状態に収束させるモデルといった、性格の異なる連動のさせ方で位置づける傾向がみられた。

３節では、以上の傾向を踏まえて、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識を建築にどのように反映させたかを検討した。まず､建築家の時間認識は、壁や建具などの実体的な要素に反映されることが多いことがわかった。また、２節で相反する特徴として述べた、施設の使用者に関わる事柄の変化に追従させる時間認識、および制度や慣習などの社会的な事象の変化から距離をとる時間認識に着目して検討した。その結果、前者は、壁や建具などにより具現化された実体的な建築としての側面に反映される

傾向があるのに対し、後者は、非実体的な性格の空間に反映される傾向があった。このことは、建築の空間による建築表現で、制度や文化の動向を相対化して批評しつつも、実体を伴った建築表現としての側面では、建物の使用などの実用的な状況に対応させるといった、建築家の時間認識の二面性を示すと考えられる。

以上、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識と、それと関連した具現化の方法における思考の特徴的な傾向の一端を明らかにした。

参考文献

2-1)　内藤廣：「待つ」という意識 , 新建築 Vol.85 No.2, 新建築社 , 2010.1
2-2)　長谷川堯：建築の生と死 , 新建築社 , 1978
2-3)　磯崎新：建物が残った , 岩波書店 , 1998
2-4)　鈴木博之：現代の建築保存論 , 王国社 , 2001
2-5)　後藤暢子 , 後藤幸子 , 後藤文子 , 伊東豊雄：中野本町の家 , 住まいの図書出版局 , 1998
2-6)　多木浩二：生きられた家 , 青土社 , 1984
2-7)　川喜田二郎：発想法 , 中央公論社 , 1967
2-8)　大嶽陽徳 , 奥山信一：現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる時間認識 , 日本建築学会計画系論文集 , NO.709 pp591-599, 2015. 3
2-9)　増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における外形構成と内部空間の構成 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.581-582, 1999
2-10）増山絵理奈 , 坂本一成 , 他：増改築における構成類型と構成的な性格 - 現代建築の増改築による構成形式に関する研究 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.583-584, 1999
2-11）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の関係 - 建築家の言説からみた増改築 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.629-630, 2004
2-12）田中浩貴 , 山田深 , 他：建築の増改築における [新] と [旧] の要素 - 建築家の言説からみた増改築 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.631-632, 2004

第３章　連作に関する設計論にみられる時間認識

1節　本章の目的と概要

1．1　目的

第 1 章で述べたように、本章においては、建築家[注 3-1)] の内面的なテーマに固有の時間認識を見出すことが可能である具体例として、共通した主題のもとで構想される一連の建築作品（以下、連作[注 3-2)]）を取り上げ、その設計論[注 3-3)] を検討している。

建築家の創作活動における設計論においては、個別の作品の創作に即した一回性の試みの表明のみならず、複数の作品の創作を通して展開する設計思想とその論理を読み取ることができるものがある。設計論にみられるそうした思考には、時間の経過のなかで自身の作品群をいかに設計していくかといった、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識を見出すことができる。特に、共通した主題のもとで構想される一連の建築作品である連作においては、一連の時間経過のなかで、共通した主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかといった思考を明確に読み取ることが可能であると考えられることから、建築家の時間認識を見出す上で重要な題材であるといえる。

そこで本章では、現代日本の建築家による連作に関する設計論[注 3-4)] から、共通の主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかに関する言説を検討することにより、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識に関する思考の枠組みを明らかにすることを目的とする。

注 3-1)　前章と同様に、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。

注 3-2)　広辞苑（第四版，岩波書店，1995 年）においては、「文芸・美術などで、同一のモチーフやテーマを追求して一連の作品を作ること。また、その作品。複数の作家でおこなうこともある」とある。本研

注 3-3)　究では、一人の建築家が同一のモチーフやテーマを追求して構想した一連の作品といった意味で用いている。

注 3-4)　前章と同様に設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものと定義する。
連作に関する設計論についての著書、論文は膨大に存在するため、すべてを把握することはできないが、一般建築ジャーナリズムを現代の設計者のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌（sk）、「新建築 住宅特集」誌（jt）に掲載された設計論で、巻頭論文的位置づけのものを対象とし、3 つ以上の作品に通底した主題が明確に書かれているものを資料とした。また、日本において大きく社会構造が変革した第 2 次世界大戦以降（1945 年）から現在（2013 年）までを現代と設定し、資料の対象期間としている。この範囲において、164 作品を資料とした（別表 3-1）。

1．2　概要

先に述べた観点から、図 3-1 の分析例 No. s-15 の設計論を読むと、まず、「住宅というプライベートな空間は、外部に対してできるだけ閉じた世界であるべきだという素朴な直観からはじめた私の住宅設計の作業によって、この 3 年間に 3 つの住宅が完成した。」という記述から、内部空間と外部の関係性を、3 作品に通底した主題（以下、一連の作品に共通する主題を『連作の主題』[注 3-5)] とする）としていることが分かる。

また、こうした主題のもと、3 作品の具体的な建築表現に関する記述をみると、「3 つの住宅とも割合明確な機能を持つ部屋を小箱と考え、〈閉じた箱〉の内部にそれを入れ込むことで、計画的に住宅として成立させている。」という箇所から、3 作品を同様な建築表現で具体化していることが読み取れる。これは、連作を構成する作品群相互の建築表現に関する関係性（以下、『建築表現の関係性』）を示すものと言える。さらに、上述の個別の作品における建築表現を統合する「閉じた箱」といった原型的なモデルとでも言える記述もみられる。これは、「この 3 つの住宅が〈閉じた箱〉という私が建築家として最初にもった素朴な空間意識を通して･･･」という記述から、このモデルをあらかじめ念頭において 3 作品の建築表現を構想したことが読み取れる。このような建築表現の基となるモデルの想定の仕方（以下、『モデルの想定形式』）に関する記述は、建築家が一連の作品群の建築表現を脈絡なく行うのではなく、論理的に展開していることを示していると言える。つまり『建築表現の関係性』に加えて『モデルの想定形式』は建築表現を展開させる方法論における重要な思考と位置づけることができる。こうした観点から、一連の作品群における建築表現を展開させる思考は、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』で捉えることができ、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識において、これら 2 つの観点が重要な枠組みを形成しているといえる。

ここまで検討してきた分析例 No. s-15 以外の全ての資料についても通読したところ、同様な読み取り（『連作の主題』、『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』）が可能であった。

注 3-5)　本章では下記のように括弧を使い分けている。
『　』：連作に関する設計論から読み取ることができる、一連の作品に共通した主題、連作を構成する作品群相互の建築表現に関する関係性、建築表現の基となるモデルの想定の仕方をそれぞれ、『連作の主題』、『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』と記す。
【　】：『連作の主題』の意味内容のカテゴリー
［　］：『建築表現の関係性』のカテゴリー
《　》：『モデルの想定形式』のカテゴリー
（　）：資料番号

以上のことを鑑みて、本章の概要について述べると、本節に続く 2 節では、資料とした連作に関する設計論から、『連作の主題』として明確に読み取れる箇所を抽出し、その意味内容を分析、整理する。次に 3 節では、『建築表現の関係性』に関する言説とともに、『モデルの想定形式』に関する言説も抽出し、それぞれの意味内容を整理した上で、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を検討することで、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識を考察する。そして、4 節では『連作の主題』の意味内容ごとに、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を検討、考察し、5 節で小結を述べる。

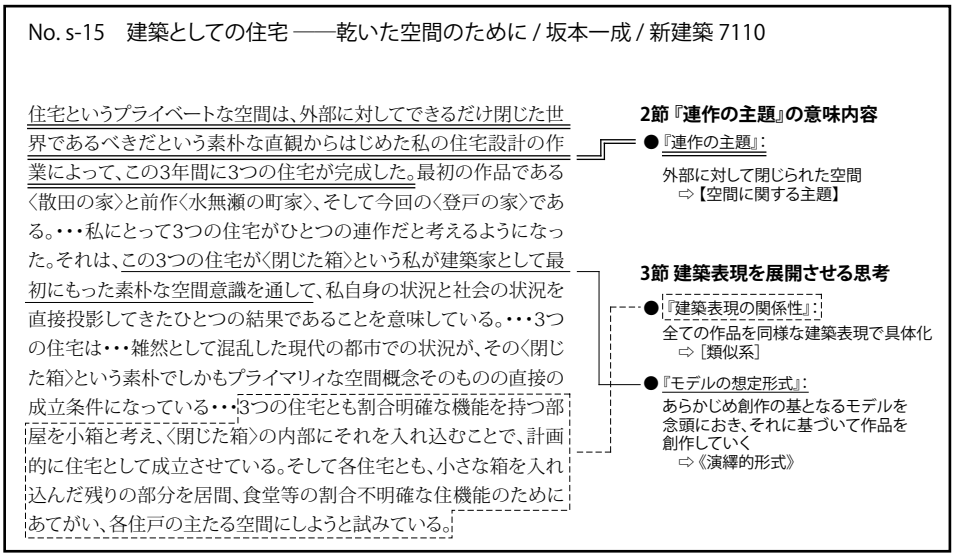


図 3-1　第 3 章の分析例

別表 3-1　連作に関する設計論の資料リスト

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				モデルの想定形式	
						形態	空間	構成	構法・技術	演繹的形式	帰納的形式
1	sk 5003	PREMOS No72 に就いて	田中誠	プレモス72型	4				n		類
2	sk 5407	木造住宅におけるCASE STUDY	三輪正弘	木造住宅におけるCASE STUDY	8				m		差
3	sk 5411	住居デザインにおけるコアの意義	池辺陽	住宅 No. -サービス・コア	4			h			差
4	sk 5511	Tプランにおける可能性の追求	池辺陽	住宅 No. -Tプラン	3	c					類
5	sk 5511	鉄骨住宅への反省	広瀬鎌二	SH -構法	10				m		混
6	sk 5511	鉄骨構造による4つの住宅	三輪正弘	鉄骨構造による住宅	4	b					差
7	kb 5804	工業化のためのデザインへ	池辺陽	住宅 No. -工業化	6				n		類
8	sk 5806	都庁舎の経験	丹下健三	シティー・ホール	5		g			類	
9	sk 6004	C.S. ハウス #3 の設計	増沢事務所	コアシステム	5				n		類
10	sk 6006	住宅における basic なもの.	田辺博司	basic house	6				h	類	
11	kb 6012	発想から形になるまで・・・	広瀬鎌二	SH -MC	4				n		な
12	sk 6205	H形鋼使用による住宅設計ノート	小沢行二	H形鋼使用による住宅	3				i		差
13	kb 6211	建築生産プロセス自動化への提案	広瀬鎌二	SH -自動設計法	3				n		類
14	sk 6710	駿河銀行支店建築の「かた」設計	菊竹清訓	駿河銀行	3				h		類
15	sk 7110	建築としての住宅	坂本一成	閉じた箱	3		e			類	
16	sk 7201	空間場へのアプローチ	中島龍彦	空間場	4				j		な
17	sk 7202	住宅論	篠原一男	亀裂の空間	4	a				差	
18	sk 7204	〈手法〉について	磯崎新	手法	10	b				類	
19	sk 7204	コミュニティ・バンクの機能と空間	菊竹清訓	アンブレラ・ストラクチャー	4			i		差	
20	sk 7205	若人の新しいコミュニケーション空間	小川淳	ユースホステル	3		d				混
21	sk 7307	なし	伊丹潤	WORK	3		d			差	
22	tj 7312	仮面としての建築	相田武文	自立した立面	3	a					差
23	sk 7501	現代のファンクショナル・トラディションを求めて	押野見邦英	KAJIMA SCIENTIFIC BUILDING DESIGN SYSTEM	3			h		差	
24	kb 7505	「内なる空Ⅱ／深沢・住宅」に関するノート	富永譲	内なる空	3		e				な
25	kb 7601	なぜ連階段か	船越徹	連階段の家	4			h		差	
26	sk 7701	「帯」としてのオフィス・スペース	林昌二	帯	4	c				差	
27	sk 7702	住居思考	武者英二	白い吹抜のある閉じた空間	3		e			差	
28	sk 7702	状況に楔す	安藤忠雄	情念の基本空間	4		d				類
29	sk 7703	沈黙と饒舌のあいだで	相田武文	斜めの造形	3	a				類	
30	sk 7705	余白の導入	長部稔	余白	4			k			類
31	sk 7708	細胞としての住宅	山下司	細胞	6		d				類
32	sk 7806	都市への埋め込み作業	長谷川逸子	焼津の建築	3	a				類	
33	sk 7902	家形を思い、求めて	坂本一成	家形	3	a					差
34	sk 7905	中間領域または周縁性へ	黒川紀章	中間領域	3		g			類	
35	sk 7908	再生への演歌	星野厚雄	中古木材	5				l		類
36	sk 7909	設計について	谷口吉生	二律背反の単純図形の組合せ	6	b				差	
37	sk 7909	狭間からの象徴空間へ	神谷五男	メタモール	4	a				な	
38	sk 7910	非装飾が装飾化する可能性を開始する	長谷川逸子	曖昧な図形	3	c				混	
39	sk 8004	地形の発掘・部屋の格納	香山壽夫	沖縄の住宅＋病院	3			h		差	
40	sk 8008	続・コートハウスの記	太田隆信 他	正面のない家	4			k		差	
41	sk 8008	表現について	山下和正	アタッチメントとデフォルメーション	4	b				差	
42	kb 8008	多重屋根のコンセプト	木村誠之助	多重屋根の家	5			i		差	
43	sk 8101	開かれた博物館をめざして	戸尾任宏	博物館	5		f			混	
44	kb 8102	プライマリィの継承としての混構造	宮脇檀	混構造	4			i		差	
45	sk 8104	光を！	葉祥栄	光と架構	3				m	差	
46	sk 8108	自然との共存を求めて	石井修	目神山の家	7	-	-	-	-		差
47	sk 8108	形態とすき間	東孝光	スリット	6	b					類
48	sk 8209	設計随想	神谷五男	曲線	3	c				差	
49	sk 8304	なし	芦原義信	スプリット・レベル	3			h		差	
50	jt 85春	遊戯性、積木、そして……	相田武文	積木の家	10	a				差	
51	sk 8506	コミュニティ施設を木造でつくる	納賀雄嗣	豊里町の木造建築	3				l	差	
52	jt 8610	ロビンソン・クルーソーの家づくり	石山修武	コルゲートパイプ	5				l-n		差
53	sk 8611	なし	長谷川逸子	パンチングメタルのスクリーン	3				l	混	
54	sk 8703	3つの図書館と幾何学	岡田新一	幾何図形平面の図書館	3	b					差
55	sk 8703	なし	大杉喜彦	INDEX	3				l	な	
56	sk 8704	54の柱	石井和紘	54	3			j		差	
57	jt 8705	コンクリート・ブロック造の住宅 3題	圓山彬雄	コンクリート・ブロック造の住宅	9				l-m	な	
58	kb 8808	設計作業日誌 77/88	山本理顯	ルーフ	3			h-i			類
59	sk 8810	異化する	安藤忠雄	都市のアルコーブ	3		e			差	
60	sk 8810	INTERIOR LANDSCAPE	早川邦彦	INTERIOR LANDSCAPE	3			j		差	
61	jt 8901	"街の眼"から住宅見る	早川邦彦	成城の家	3			i		類	
62	jt 8904	遅さの、沈黙の戦術を置くこと	鈴木了二	物質試行	26			i			差
63	sk 8908	街路に開かれた集合住宅	早川邦彦	集合住宅	3		e				類
64	jt 8912	装飾の断面	久保清一	装冠の建築	10	a				な	
65	jt 9001	場の意味と軸の規定	村上美奈子	軸	3	b				差	
66	jt 9002	自然・素材・建築	竹原義二	自然との融合	3				l		差
67	sk 9003	光のワイドレシーヴァー	原広司	光のレシーヴァー	5		f			差	
68	jt 9007	プラットホーム	妹島和世	PLATFORM	3		d			類	
69	jt 9011	宙吊りの幾何学	宮崎好彰	ジャンクション和接合	3	b					混
70	sk 9101	木洩れ日のなかで	相田武文	ゆらぎ	6			i		混	
71	sk 9103	蝶の家に住む小児科医	葉祥栄	緊張構造	3				m		類
72	sk 9104	象徴化する	中村弘道	都市のシンボル	3	a				差	
73	jt 9106	紙の建築	坂茂	紙管	3				l-m		差
74	sk 9109	「ON AXIS-OFF AXIS」から「厳粛なる散逸」へ	小林克弘	厳粛なる散逸	3	b				類	
75	jt 9109	好木心	中東壽一	舎	7				l	類	
76	jt 9111	「地籍」の「かたち」	林雅子	末広がりの家	3	c				な	
77	jt 9112	「自律する秩序」と「孕んだ空間」の合成	越後島研一	木造による西欧的造形	3	a					類
78	sk 9201	建築の素形	内藤廣	素形	7	a					類
79	jt 9203	建築の教育と体験	坂茂	壁とコアによる空間構成	6			h-i		差	
80	sk 9205	都市空間のプログラム	竹山聖	無為の時間の空間化	3		g				混
81	jt 9205	PROJECT MIZOE-3	藤井博己	MIZOE	3			j		混	
82	sk 9206	時と風景	槇文彦	ヒルサイドテラス	5		g				混
83	jt 9211	廻遊式住居	竹原義二	廻遊式住居	6		d			類	
84	sk 9212	軸	古市徹雄	軸線	4	b				差	

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				モデルの想定形式	
						形態	空間	構成	構法・技術	演繹的形式	帰納的形式
85	sk 9302	都市小規模ビルの可能性	ｱｰｷﾃｸﾄﾌｧｲﾌﾞ	HATHAUS	4		d				類
86	sk 9304	構造テーマの継続と展開	坂茂	南北面に前面開口で内外部が融合した空間	4		e			類	
87	sk 9308	図式の体験	妹島和世	図式	3	b					差
88	jt 9405	[Barn] について	吉本剛	Barn	3				m	類	
89	sk 9501	都市の単位	山本理顕	緑園都市	8	-	-	-	-	類	
90	sk 9502	新しい住居形式を求めて	福村俊治	パティオをもつ住宅	6		e				混
91	jt 9505	和洋折衷・安愚楽鍋	太田隆信	KES構法	3				o		差
92	jt 9506	浮遊する断片がダンスを始めた	竹山聖	天と地の対位法	3	b				類	
93	sk 9507	通過点としての公共建築	伊東豊雄	八代の公共施設	3		e+g				混
94	sk 9509	遣から進化する建築	青木淳	動線体	4		d			差	
95	jt 9510	明確なかたちをもった部分と何でもない殻	奥山信一	明確なかたちをもった部分と何でもない殻	3			h+i		差	
96	jt 9512	トータルシステムとしての独身寮	岡本宏 他	PLUST-21	3				n	類	
97	jt 9602	インターネット空間の断片	西宮善幸	internet空間	3			k		差	
98	jt 9604	原初の箱	葛西潔	木箱	3		d			類	
99	jt 9605	光の中の6つのキューブ	葉祥栄	光の建築	6		d			差	
100	sk 9608	海のシルクロード建築構想	高崎正治	地球建築	3	a					な
101	sk 9608	複雑性の海に浮かぶ装置体	早川邦彦	装置体	3	a					混
102	jt 9608	場所についての覚書き	塩田能也	つなぐ場所	3		d			混	
103	jt 9609	未知の近代建築に向けてIV	岡河貢	ドミノ	3			i			混
104	sk 9610	諸分野統合としての建築	渡辺豊和	商業建築	3	a					差
105	sk 9611	なし	谷口吉生	門構え	4		e			差	
106	sk 9611	第三の地形	團紀彦	ランドスケープ	8	-		-	-	差	
107	jt 9704	住宅のコストセービング	野沢誠	輸入材	3				n		類
108	jt 9707	原型としての「箱の家」	難波和彦	箱の家	8				n	類	
109	jt 9707	丸太柱と鉄のビーム	石井和紘	丸太柱	6				m		差
110	jt 9710	鉄のこと	木村博昭	スチールシートの住宅	3				m	差	
111	sk 9807	分有体への試み	遠藤秀平	コルゲート鋼板	6				l	混	
112	jt 9808	森の中の簡素な囲い	香山壽夫	山荘	3		e			類	
113	jt 9808	向齢住宅設計ノート	藤木忠善	すまい	3		d			差	
114	jt 9809	「家具の家」の開発	坂茂	家具の家	3				n		類
115	jt 9902	ロコンニ	阿部勤	ロコンニ	3			k			混
116	jt 9903	立方体住棟システムと"ARCHITECT"	原広司	立方体住棟システム	5	b					差
117	jt 9911	拡散し収縮する家・5つのフェイズ	入江経一	拡散・収縮する家	5		d				差
118	sk 0004	桐蔭学園キャンパス整備計画の歩み	稲塚二郎	コミュニケーションネットワーク	3		d				類
119	jt 0005	中古28年	乗富久哉	DOGU	8				l		差
120	sk 0009	建築のイメージから原すまで	宮崎浩	透明性	3		f			混	
121	sk 0011	なし	黒川哲郎	丸太材構法	4				m		差
122	jt 0104	建築の4層構造	難波和彦	箱の家-サステイナブル	5				n		類
123	sk 0105	企業が溶ける時代のオフィスとは？	大江匡	オフィス	3		d				類
124	jt 0107	木箱仕口212による展開	葛西潔	木箱-鳥居形フレーム	6				m	類	
125	sk 0109	グリッドプランはフレキシブルではない	山本理顕	グリッドプラン	4				n	差	
126	jt 0202	部分から考えることの意味	坂牛卓	連窓の家	3			i		差	
127	sk 0205	都市空間を自由にレンタルするために	古谷誠章	空箱	3		d				混
128	jt 0211	中庭について	岸和郎	中庭	3			k			差
129	sk 0301	構成の強度／形式を純化すること	八重樫直人	アウトフレーム	3	c					混
130	jt 0303	包むということ	遠藤政樹 他	ナチュラル	4			i		差	
131	sk 0310	服としての建築	坂茂	シャッター	3				l	差	
132	sk 0403	空間のこと	妹島和世	部屋の配列	4			h		差	
133	sk 0405	複合の新しい〈風景〉を目指して	飯田善彦	対概念の形象化	4			j		差	
134	sk 0406	バージョンアップするリファイン建築	青木茂	リファイン建築	4				m		類
135	sk 0407	「絶対装飾」について	青木淳	ルイ・ヴィトン	5		f				類
136	sk 0502	Renovation Style	納谷学＋新	マンションのリノベーション	6		e				類
137	jt 0505	共有するプロセス、事後的なプランニング	田辺芳生 他	空間の原形	3		f				差
138	sk 0506	スペースブロックとダブルスキン	小島一浩 他	スペースブロック	3			h		類	
139	jt 0508	建築は動かない	堀部安嗣	多角形平面をもつ住宅	5	c					差
140	sk 0509	バーチャルなエクステリア	藤村龍至 他	グリッドベースの家具	3				n	差	
141	sk 0607	風景を支えるフレーム	下吹越武人	テナントビル	4		e				差
142	jt 0608	建築のその先にあるもの、今ここにあるも	田井幹夫	キール	5			j			差
143	sk 0609	新旧の対話する空間	安藤忠雄	新旧の対話する空間	3			j		な	
144	sk 0610	CHINA RUSHING	迫慶一郎	スケーリング・ユニット	8			h		差	
145	sk 0610	セミモノコック建築	ヨコミゾマコト	セミモノコック建築	4				m		類
146	sk 0703	図式の崩壊から	青木淳	ルールのオーバードライブ	3		f				混
147	sk 0706	「ある置かれ方」でできているメガネ屋さん	中村竜治	JIN'S GLOBAL STANDARD	4			i			差
148	sk 0708	囲いの形式	千葉学	囲いの形式	4			h			差
149	sk 0708	集合住宅であることの意義	谷内田章夫	高さのある住居ユニット	8			h+i		差	
150	jt 0708	住宅はアメーバ型ワンルーム空間へ	安田幸一	アメーバ型ワンルーム空間	4			h		類	
151	jt 0710	別荘の街並みを考える	早草睦惠	軽井沢の別荘	4	b				差	
152	sk 0802	ワンルームという不動産ストックの再構築	田島則行	REISM	7			h		混	
153	jt 0805	ふたたび、都市型住宅へ	岸和郎	中庭と屋上庭園をもつ都市型住宅	3		e			類	
154	sk 0902	ガラスブロックによる「構造＋機能＋環境」	山下保博	ガラスブロック	3				l		混
155	jt 0905	アルミハウス・プロジェクト	山下保博	アルミハウス・プロジェクト	3				l+m		混
156	sk 0911	改めて家型の意味を見直す	五十嵐淳	家型	6	a					差
157	sk 1007	ポンピドー・センターとの7年間	坂茂	木造編構造	7				m		な
158	jt 1102	「狭小住宅」はやめにして「町家」をはじめる	塚本由晴	まちや	3	-	-	-	-		類
159	sk 1105	線上の建築	佐藤光彦	一本の線	6		d				差
160	jt 1108	規格材で、高品質なプロトタイプ住宅をつくる	奥野公章	7272	3				n	類	
161	sk 1202	パラレル・マテリアル・シティ	辻琢磨 他	マテリアルの流動	4				n		差
162	sk 1206	シェアを設計する	猪熊純	超濃密な可能性の場	3		d				な
163	sk 1211	建物からスペースへ、そして空間性へ	菅順二	オフィススペース	5		d			類	
164	jt 1303	内外を超えた場の可能性から想起する	五十嵐淳	風徐室	3		e				類

別表3-1注1）資料は原則「新建築」「新建築 住宅特集」に掲載された設計論であるが、補助的に「建築文化」「都市住宅」に掲載された設計論もみている。掲載誌のアルファベット記号は、
sk：新建築、jt：新建築 住宅特集、kb：建築文化、tj：都市住宅
を示し、4桁の数字は発行年月を示す。

注2）連作名については、設計論において建築家が名付けている場合は、その名称を記載し、それ以外の場

注3）合は、連作に関するキーワードに基づいた名称としている。

注4）『連作の主題』の記号は、表1に記載したものを用いている。ただし、No.46、No.89、No.106、No.158は【周辺環境との関係】に属する資料である。『モデルの想定形式』の欄には、『建築表現の関係性』のカテゴリー項目を記しており、
類：［類似系］、混：［混合系］、差：［差異系］、な：建築表現に関する言説なし
を示している。

2節 『連作の主題』の意味内容

資料とした設計論から抽出した『連作の主題』について通読したところ、その意味内容は多岐にわたっていた。そこで、それらをKJ法的[注3-6)]に相互に比較検討した。その結果、【形態に関する主題】[注3-7)]【空間に関する主題】【構成に関する主題】【構法・技術に関する主題】【周辺環境との関係に関する主題】（以下、それぞれを【形態】のように略記する）の5つの大枠で捉えることができた（表3-1）。以下、それぞれの具体的な内容を詳述する。

【形態】は、建築の実体的側面にあらわれるかたちに関する事柄を主題として論じたものである。それらは、「サイコロの主題による家では、建築の用途と形象との関わりを、さらに断絶させることを試みた。であるからこの作品は涅槃の家、無為の家に続く一連のものであり、考え方をさらに押し進めたものである。建築の形態を成立させる外皮に独自の意味性を持たせることによって、形象自体の自立性を明確にさせること。・・・かつて形態は権力の象徴であったり、宗教の尊厳を維持するためのものであった。・・・権力や、かつての宗教や虚構的な用途から開放されて、形態自体が自立して語ることを始めなければならない。（22）[注3-8)]」のように、形態のもつイメージを主題として論じるものと、「3つの作品を発表するこの機会に、現在の私が関心を抱いている建築の構成原理について・・・述べてみたい。・・・スリットの手法は住宅設計における新しい建築的構成原理のひとつとなりえる可能性を持っている。これまでひとつの建築にはひとつの形態的表現と考えられていたものを、スリットの空間を挟むことで、ふたつまたはそれ以上の形態の組み合わせという複合的なかたちに転換させ得る点が重要である。（47）」のように、形態の創作方法を主題として論じるものとが多くみられた（これら2つの細項目にそれぞれ約4割の資料が該当）が、「私が正多角形に魅力を感じているのは、正多角形が誰かが誰かのためにつくった形ではなく、またその敷地のためだけにつくられた形でもなく、そしてそれ以上動かない形である、という自立性であるかもしれない。・・・いくつか正多角形の建

注3-6) 前章でも述べたように、KJ法とは民族地理学の分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法をいう。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義でのKJ法としている（参考文献7）。ここでは、こうした意味でKJ法的としている。本研究のように、多様な建築家の言説に対する分析方法としてKJ法を利用した研究は多く、こうした言語分析のプロセスはオーソライズされた方法論のひとつであると言える。

注3-7) 本章における括弧の使い分けを注3-5に記してある。

注3-8) 本章における括弧の使い分けを注3-5に記してある。

築を設計して・・・(139)」のように、形態そのものの特徴を主題として論じるものもみられた。

【空間】は、床や壁などの建築の構成要素で境界づけられた三次元的な広がりをもつヴォリュームに関する事柄を主題として論じるものである。それらの多くは、「“つなぐ”とか“移動する”とかいう、ただそれだけの空間・・・機能的に特化していないぶん、人もそこに固定した先入観なしに自らの行為を発見しやすいのではないかと考えたのだ。そして以後、この空間を、場所と場所をつなぐもうひとつの場所としてとらえ、積極的に位置づけようとしてきた。(102)」のように、人間の活動を充足する空間を主題として論じるもの(約4割の資料が該当)と、「これらの作品ではまず住宅は、外部と接触をつくるということよりは、本質的な性格として、内部を明確に境界づけることと、外殻の閉合性そのものに主眼が移されている。(24)」のように、内部空間の外部との関係性を主題として論じるもの(約3割の資料が該当)であった。その他に、「奈良県立民俗博物館、知多市民俗資料館、浜松市博物館、蒲郡市郷土資料館を経てこの計画に至るまで一貫して考えてきたことは、展示室という閉ざされた空間から受ける心理的圧迫感、展示物から受ける緊張感をどのように開放させるか・・・ということであった。(43)」のように、空間の与える知覚的印象を主題として論じるものと、「OXY乃木坂、D-HOTEL OSAKA、TERRAZZAという3つの都市商業施設を例にとって、・・・共有し得る都市空間の提案という意図の所在と行方を眺めてみたい。(80)」のように、空間の公共性を主題として論じるものもみられた。

【構成】は、建築的要素の配置・配列関係に関する事柄を主題として論じるものである。それらのうち多くみられた内容として、「3つの住宅はすべて、コンクリートの単純で頑健な箱の内に、さまざまな部屋をもうひとつの箱として格納する方法をとっている。(39)」のように、部屋の配列を主題として論じるもの(約4割の資料が該当)と、「屋根を反復させて架けることによって、建築的表現を確保しながら、平面的、空間的自由度が大きく増すということである。私はこれらの理由から建築的ソリューションのひとつとして多重屋根方式とでも呼べる考え方に到達したのである。(42)」のように、部位・部材の配列を主題として論じるもの(約3割5分の資料が該当)が挙げられる。これらと比べて少数であるが、「各建築構成要素を努めて等価値に並存させようとしてきた従来までの私のアプローチに、変更を促すものではなかった。つまり、家具のスケール、部屋のスケール、建物のスケールで発想を分節、分断化させるのではなく、同じシステムが、スケールをこえて反復し並存するという表現方法は、そのままこの3つのプロジェクトでも展開された。(60)」のように、建築的な構成要素の統合方法を主題として論じるもの、および「3作品は共通してヴォイドなスペースを建築が囲い込む、いわば古典的なコートヤードハウ

スととらえている。(97)」のように、外部を囲う建物の配置を主題として論じるものも見い出すことができた。

【構法・技術】は、建物の造り方やそれに関わる技術に関する事柄を主題として論じるものである。これには、「コルゲート鋼板と呼ばれる波型成型板による試みは今回で 6 件目となる。(111)」のように、建物を造る材料を主題として論じるもの、「これらスチールシートを外皮に使った住宅は、客船のようにそれ自体が外装材と構造材を兼ねた 1 枚のスチールシートで包み、建物本体とは別に、外皮が自立するモノコック的構造を試みた構造体である。(110)」のように、建物の構造を主題として論じるもの、および「工業化、ないしは量産化を本当に意識して住宅計画の組織化に手をつけたのは、・・・20 番台の後半から 30 番台のはじめごろである。本誌に発表した 332 型は、組織化の最初の段階であって、・・・組織化の次はプラントとの技術的交流による新しい時代に入る。(11)」のように、建築を生産する仕組みを主題として論じるものといった 3 つの内容がみられ、それぞれ同程度の資料数が該当した。

以上で述べてきた 4 つの大枠の意味内容に資料の大半が該当した（160/164 資料)。一方、該当する資料は僅かではあるが、敷地周辺の都市や自然などの環境との関係を主題として論じる【周辺環境との関係】といった意味内容もみることができた[注 3-9)]。

注 3-9)　【周辺環境との関係】に該当する資料が少ないため、3 節以降の分析からは除いている。

表 3-1 『連作の主題』の意味内容

【形態 に関する主題**】** (36)	形態のもつイメージ[a] (15)	この建築(**佐野市文化会館**)には地方都市における文化活動の核となる建築をいかにアイデンティファイさせ、そしていかなる手法でシンボル化するか・・・この建築の中央の位置を占めるメタモールの形態はこの建築のアイデンティティとシンボル化に対するすべてである・・・楕円壇状に表出した形態は"どんづまり"といった地域性に対する巻き返しにも似たイメージを表現したものであり、・・・**「竹の塚の住宅」**、**「流山の住宅」**、そして**「今市市文化会館」**などにおいて表現された形態も同様な設計意図の中に構築されたものであった。⇨No. s-37
	形態の創作方法[b] (14)	この3年間で、軽井沢に5件の別荘の設計を行った。・・・その場所でその形になった原因はすべて木に由来する。**「120度の家」**はマユミという幹のねじれた木がたくさん生えていた。・・・建物の複雑な形態はマユミを眺めていたゆえかと思う。**「万華鏡の家」**の敷地は雑木林だった。シラカバとホウノキという大きな放射状の葉がつく木が印象に強く残った。回転性を持たせようと思ったのは、このホウノキがきっかけかもしれない。今回発表する**「水平線の家」**と**「緑陰の家」**は、道を隔てて向かい合っている。・・・ともに周りをカラマツの林で囲まれていた。・・・カラマツの強い垂直性から、四角い建物がふさわしいと思った。⇨No. s-151
	形態そのものの特徴[c] (7)	この**「徳丸小児科」**の内部に配置したサインカーブの壁面や仰角60°の壁面と天井面、6寸勾配の天井面など・・・である。それらのかたちの選択の仕方は**「鴨居の家」**、**「緑ヶ丘の家」**で100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきたときの選択の仕方に近い。・・・ここで使ったかたちは幾何学の基本図形である円や三角に視覚的に還元できるというより少し不完結さを残すようずらしたもので、完結したかたちに対し、曖昧なかたちともいえるものになっていると思う。⇨No. s-38
【空間 に関する主題**】** (43)	人間の活動を充足する空間[d] (19)	私は**「小さい木箱」**の発表に際して、「建築家のつくるべき住宅は小さければ小さいほど、生活を限定しないのびやかな空間が必要である」と書いた。今回のふたつの住宅(**傾斜地の木箱**、**段地の木箱**)は小規模であり、広い空間の獲得には物理的な限界があった。しかし私はいつものように住宅内にのびやかな空間を求めた。⇨No. s-98
	内部空間の外部との関係性[e] (14)	住み手の生活意識と、設計者の空間意識の複合化の実践過程として、1968年から1972年にかけて三つの住宅(**泉の家**、**富士見ヶ丘の家**、**茅ヶ崎の家**)を設計した。いずれも白い吹抜のある、都市に対して閉じた空間の住宅である。⇨No. s-27
	空間の与える知覚的印象[f] (6)	**「仁保の郷」**における透明性は、大きな屋根に覆われた内部空間と外部空間を、内と外を結ぶデッキや櫓によって視覚的にも空間的にも簡明に連続させた点にある。・・・**「TAG」**は、・・・スペースそのものの透明性をつくり出すことを強く意識している。・・・**「再生木ルーバーハウス」**における透明性は・・・半透明なスクリーンと内部スペースの境界をできるだけ透明に表現し、外部スペースを取り込んだ透明で広がりのある内部空間を生み出そうとした。・・・3つのプロジェクトなりの特徴をもった透明なスペースを生み出すことができたと思っている。⇨No. s-120
	空間の公共性[g] (5)	**第1期**から**第6期**までのプロセスを改めて振り返って見るとき、・・・もしも、**ヒルサイドテラス**が20年以上の年月の中で、都市の中で生きたひとつの風景を提供しているとすれば、おそらく前面の歩道も含めたパブリック・スペースの存在であろう。先にも述べたように、第1期から小さくはあるがさまざまなパブリック・スペースの展開が試みられている。⇨No. s-82
【構成 に関する主題**】** (40)	部屋の配列[h] (17)	いくつかの部屋に分けた方がいいのか、その場合それらをどのように並べればいいのか、さまざまな関係のつくり方があると思うんです。**「スタッドシアター」**や**「梅林の家」**は部屋がくっついたものだし、**「金沢21世紀美術館」**は部屋を離しています。・・・**「スタッドシアター」**の場合、壁が2枚になればもっとクリアになったと思います・・・だからある意味では、**「トレド美術館ガラスセンター」**はその発展形です。壁がダブルになることで、各部屋の関係性がさらに変わってきています。⇨No. s-132
	部位・部材の配列[i] (15)	私の場合、これまで並置された壁の集積によって、やわらかな構造を組み立てることを試みてきた。・・・この**「齋藤記念館」**も同列に位置づけることができる。つまり、**「梶原邸」**、**「風間邸」**、**「西園寺無量寿堂」**、**「GKDビルディング」**、**「東京都戦没者霊苑」**の作品は、平行系の壁を配置しながら、諸々の事象に交感してきたものとしてまとめることができる。⇨No. s-70
	構成要素の統合方法[j] (7)	この**PROJECT　MIZOE-3**は、以前発表した**MIZOE-1**、**MIZOE-2**に続く連作のシリーズのひとつであって、空間や壁の重層性、あるいは散逸が意図された・・・私が意図した・・・考えは、各部分の構成を統合していくためのものでは決してない。⇨No. s-81
	外部を囲う建物の配置[k] (5)	**正面のない家**第1作は、1961年1月。今考えてみても、コートハウス、就中坂倉コートハウスの特長を、実によくいい表わしているこのタイトル。・・・第2回目は1962年10月。この時は、2軒(**正面のない家K**、**正面のない家H**)まとめて発表。・・・今度の3回目(**続・正面のない家**)の発表に、意外と手間取ってしまったが、私としてはずうっと一連のコートハウスのつもりで・・・ ⇨No. s-40
【構法・技術 に関する主題**】** (41)	建物を造る材料[l] (17)	この中古木材シリーズも早や7歳。「列島改造論」とやらの真最中、ドンチャン騒ぎの世相に背を向けて、いくつかの社会性の強い路線をはじめた。その中のひとつが、このシリーズ(**独楽蔵のアトリエ**、**若山邸**、**みの虫**、**むさしのアルプス**、**電柱砦**)。建設の物質消費性、木材への愛着をテーマに、"使えるものは、とことん使おう"と、建築デザインを楯鉾に、消費文明の爛熟期へデモンストレーションをかけた故である。⇨No. s-35
	建物の構造[m] (16)	2次元的に曲がりやすい木でグリッドの構造をつくれば、その上に直接屋根を葺くこともできる上に、木は引っ張り材にも圧縮材にもなるので、・・・圧縮系のシェル構造としても成立するのではないかと考えたのである。その後、**宇野千代博物館計画**、**今井病院附属託児所**、**今井篤記念体育館**、**バンブー・ルーフ**、**フライ・オットー・ラボラトリー計画**と、木造(竹)編構造の開発を続け、その集大成としてこの**ボンビドー・センター・メス**の屋根が完成した。⇨No. s-157
	生産の仕組み[n] (15)	住居生産をどうしたら工業生産に結びつけることができるか、というテーマは、ここ数年来の研究室の主なテーマであり、・・・ここに報告する6戸の住居(**住宅 No. s-38**、**No. s-39**、**No. s-41**、**No. s-43**、**No. s-44**、**No. s-45**)もこの主テーマの展開の中より生れ出たものである・・・ぼくのとった方法は、・・・住居をコンポーネントに分解し、コンポーネントデザインとそれを集めるデザインを個別に追求してゆく方法がある。コンポーネントは個々の実施設計とは別個の立場で設計され、生産システムにのせられる。⇨No. s-7
【周辺環境との関係 に関する主題**】** (4)		美しいこの土地の自然が破壊されてゆくのを目の当たりにし、人間の横暴さを感じずにいられない。・・・私の家の近隣に私が手がけた住宅は、我が家を含めて7軒(**目神山の家１～７**)完成し、今後も数件の住宅を設計することになる。美しい現在の自然を残しながら、どのようにすれば自然と共存できる家を建ててゆくことができるかが、これからもこの地域での住宅設計の大切な課題になることと思う。⇨No. s-46

3節　連作における時間認識

1節の研究の概要で述べたように、連作に関する設計論において、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』とに関する記述からは、建築表現を展開させる思考の重要な側面が読み取れることから、それぞれについて分析・整理した上で、対応関係を検討する。

3.1　連作における『建築表現の関係性』

連作を構成する作品群における『建築表現の関係性』の検討に際して、まず、作品間の建築表現の関係について詳説する。資料とした設計論において、作品間における建築表現の関係に関する言説を抽出して検討したところ、例えば、「パブリック的な空間：【空間】」という主題に対して「第6期の計画は・・・道路に沿ってガラスの細長い、ささやかではあるが透明な内部のパブリック・スペースが設けられ、・・・こうしたスペースは第1期や3期にも設けられている（図3-2，具体例No. s-82）」のように、作品間の類似性を主調とする資料と、「木造建築：【構法・技術】」という主題に対して「おのおのの施設に適した木構法を検討することにした。つまり、適材適所におのおのの構法の特徴を生かし・・・（図3-2，具体例No. s-51）」のように、主題を共有しながらも具体的な建築表現の水準で作品間の差異性を主調とする資料がみられた。また、以上のような記述がないものでも、個別の作品の建築表現に関する具体的な記述を読み込むことで、作品間の建築表現の類似性と差異性を判断できる[注3-10)]。例えば、「微妙にずらした曖昧なかたち：【形態】」という主題に対して「かたちの選択の仕方は鴨居の家、緑ヶ丘の家で100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきた・・・（図3-2，具体例No. s-38）」のように、複数の作品の建築表現を一括して記述しているものは建築表現に類似性があるものとして、それに対して「平面は幾何図形を複合させた：【形態】」という主題に対して「八戸市立図書館はふたつの正方形を、中心を軸として45度ずらせている。秩父市立図書館は1/4円の中心点にふたつの扁平な長方形を交わらせている。（図3-2，具体例No. s-54）」のように、個別の作品ごとに建築表現を記述しているものは建築表現に差異性があるものとして分類した。

作品間の具体的な表現に関する上記の判断は、必ずしも連作を構成する全ての作品群に亘るものではなく、資料によっては、作品間における類似性と差異性が組み合わされるも

注3-10)　資料のなかには、僅かではあるが、建築表現に関する具体的な記述のないものがみられた（12資料）。こうした資料は、図3-5と図3-6において除いて検討している。

のもみられた。そこで、一連の作品群における『建築表現の関係性』については、上述の設定に基づいて、連作を構成する全ての作品間で建築表現に類似性が認められるか否かを検討することで、類似性に基づいた関係が多いものを［類似系］[注3-11)]、差異性に基づいた関係の多いものを［差異系］、および双方の関係が同数のものを［混合系］といった3つで整理した（図3-3[注3-12)]）。

注3-11) 本章における括弧の使い分けを注3-5に記してある。
注3-12) 各資料における、図3-3のカテゴリー項目の情報は別表に記してある。

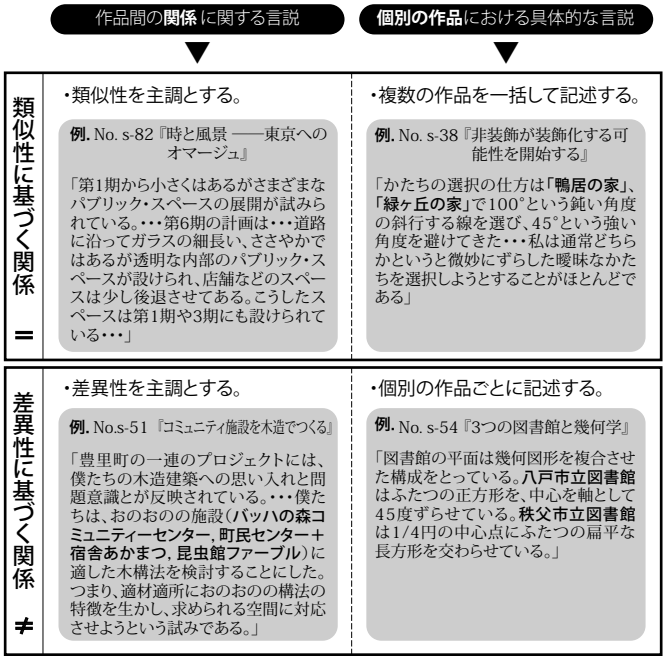


図 3-2　作品間における建築表現の関係

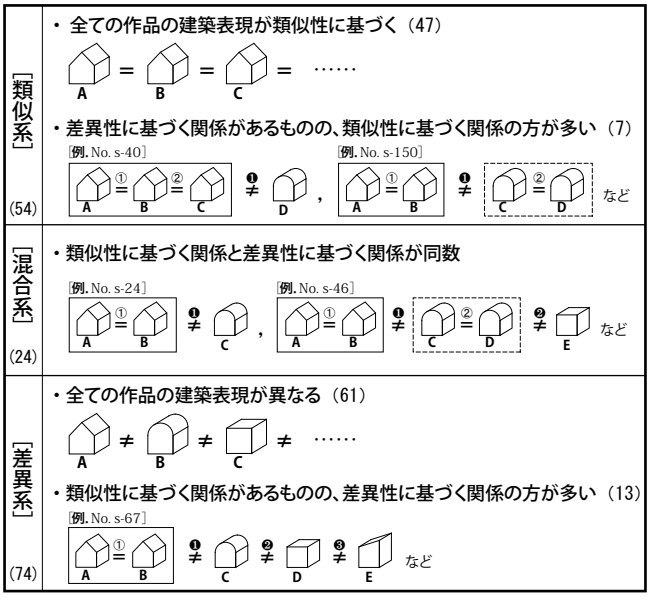
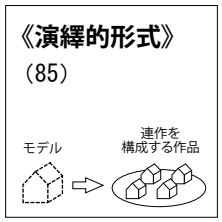


図 3-3　連作における『建築表現の関係性』

3.2 『モデルの想定形式』 の内容

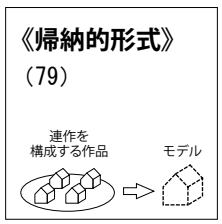
『モデルの想定形式』とは 1 節で定義したように、具体的な建築表現の基となるモデルをいかに想定して一連の作品を創作したかである。こうした『モデルの想定形式』に関する言説を抽出し、その内容を検討したところ、あらかじめ建築表現の基となるモデルを設定した上で一連の作品を創作するもの（《演繹的形式》[注 3-13)]）と、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索するもの（《帰納的形式》）の 2 つに分類することができた。例えば、図 3-4[注 3-14)] の抽出例 No. s-57 は、「モデル住宅をつくった翌年あたりから、年に 1、2 軒のペースで二重壁構法のブロックの住宅を建ててきて、･･･」という記述から、あらかじめモデル住宅を創作した上でそれに基づき一連の作品を設計したと読み取れるため、《演繹的形式》として捉えることができる。これに対して、図 3-4 の抽出例 No. s-137 は、「設えが付加される前の空間の原形に近い状態で、住宅としての「空間の質」をつくり出せることが、最終的な到達点だと考えている。」という記述から、一連の作品の創作を通して住宅的な設えが付加される前の空間の原形を追求していると読み取れるため、《帰納的形式》として捉えることができる。こうした方法で全ての資料を検討したところ、《演繹的形式》と《帰納的形式》はほぼ同数みられた（85 資料：79 資料）。



→ あらかじめ建築表現の基となるモデルを設定した上で、一連の作品を創作。

例. No. s-57『コンクリート・ブロック造の住宅 3題』

「それから4年ほどして、ブロック造のモデル住宅をつくった。ブロックを生産販売している人たちの協会、北海道建材ブロック協会が中心になって、ブロック建築の普及促進を図るために、モデル住宅をつくることになったのである。･･･私も、モデル住宅をつくった翌年あたりから、年に1、2軒のペースで二重壁構法のブロックの住宅を建ててきて、今年は自宅から数えて10軒目を計画している。」



→ 建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索。

例. No. s-137『共有するプロセス、事後的なプランニング』

「今回掲載の「T-HOUSE」「花見川の家」および「殻の家」の3つのプロジェクトを通して、「空間の原形」への試みを具体的に説明したい。･･･生活のためのプランニングとは、将来的には変更になる可能性をもつ設計時点での与条件に基づいて、個々の住宅としての「設え」を事後的に付加する作業だと位置づけている。可能な限りその割合を少なくし、設えが付加される前の空間の原形に近い状態で、住宅としての「空間の質」をつくり出せることが、最終的な到達点だと考えている。」

図 3-4 『モデルの想定形式』の内容

注 3-13) 本章における括弧の使い分けを注 3-5 に記してある。
注 3-14) 各資料における、図 3-4 のカテゴリー項目の情報は別表に記してある。

3.3 『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との関係

前項までに検討してきた『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を示したのが図 3-5[注 3-15)] である。

これより、《演繹的形式》においては、［差異系］が半数以上みられた（44/79 資料）。このことから、あらかじめ想定された建築表現の基となるモデルに基づいて一連の作品を創作する場合は、そのモデルからいかに多様な建築表現を創出できるかを試みる思考が基調になっていることが窺える。一方、《帰納的形式》においては、［類似系］と［差異系］が同数程度みられた。このことから、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索する場合は、作品ごとに設計条件が異なるものの、ひとつの建築表現の可能性を反復する思考と、作品ごとの設計条件に応じて、多様な建築表現のバリエーションを試す思考の双方が基調となっていることが窺える。つまり、これらの思考が、自身の設計した作品群の建築表現といった内面的なテーマに固有の時間認識に関して、基調であると考えられる。

さらに、該当資料数が少ないカテゴリーではあるが、［混合系］に着目すると、《演繹的形式》と比べて割合が高いことから、建築表現における作品間の関係を様々に試みながら理想的なモデルを模索している傾向があることも分かる。

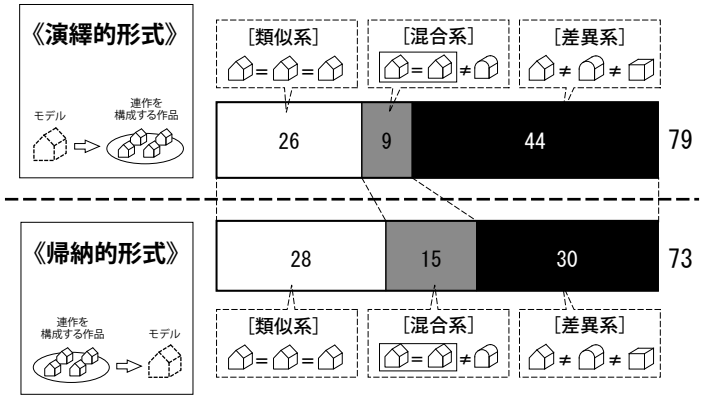


図 3-5 『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の関係

注 3-15) 資料のなかには、僅かではあるが、建築表現に関する具体的な記述のないものがみられた（12 資料）。こうした資料は、本図の検討において除いている。

４節　『連作の主題』と連作における時間認識との関係

資料とした連作に関する設計論において、共通の主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかを検討するために、『連作の主題』の意味内容ごとに、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との対応関係を示したものが図 3-6[注 3-16)] である。さらに、図 3-6 では、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の組合せごとに『連作の主題』の意味内容の細項目も示している。

まず、【形態】と【空間】では、『モデルの想定形式』（《演繹的形式》と《帰納的形式》）の該当数における顕著な違いはみられないものの、『建築表現の関係性』（［類似系］、［差異系］、および［混合系］）の内訳において、【形態】では『モデルの想定形式』によらずほぼ同程度であるのに対して、【空間】では『モデルの想定形式』に応じて偏りがみられた。このことから、これらの主題のもとでは、『モデルの想定形式』ごとの［類似系］、［差異系］、および［混合系］といった内訳が、建築表現を展開させる思考を特徴づけていると言える。一方、【構成】と【構法・技術】においては、『モデルの想定形式』の該当数における偏りが顕著であることから、これらの主題のもとでは、《演繹的形式》と《帰納的形式》といった建築表現の基となるモデルの想定の仕方が、建築表現を展開させる思考を特徴づけていると言える。こうしたことを踏まえて、以下に詳細を考察する。

４．１　【形態】と【空間】における時間認識

まず、【形態】と【空間】について、『モデルの想定形式』ごとの内訳である『建築表現の関係性』の該当数に着目して検討を行う。

【形態】では、《演繹的形式》と《帰納的形式》における『建築表現の関係性』の内訳が同程度であり、双方とも［差異系］の占める割合が高い（《演繹的形式》では 10/16 資料、《帰納的形式》では 9/16 資料）。さらに、こうした《演繹的形式》と《帰納的形式》における［差異系］について、『連作の主題』の意味内容の細項目に着目すると、全ての細項目がみられることが分かる。以上のことから、まず、実体的側面にあらわれるかたちを題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方によらず、そのバリエーションを創出しようとする思考（［差異系］）が基調となっていることが窺える。さらに、こうした思考は、形態のもつイメージ（a）、形態の創作方法（b）、および形態そのものの特徴（c）といった、かたちに関する全て

の具体的内容においても通底してみられる一貫性をもったものであることも窺える。

一方、【空間】では、《演繹的形式》と《帰納的形式》における『建築表現の関係性』の内訳に差がみられた。《演繹的形式》においては、［類似系］と［差異系］との対応がみられる（［類似系］が 10/21 資料、［差異系］が 8/21 資料）のに対し、《帰納的形式》においては、［類似系］と［混合系］との対応がみられる（［類似系］が 9/20 資料、［混合系］が 7/20 資料）。このことから、非実体的な性格の 3 次元的なボリュームを題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方に応じて、一連の作品群における建築表現の関係性を選択する柔軟な思考が窺える。具体的には、あらかじめ建築表現の基となるモデルを念頭において一連の作品を創作する場合は、そのモデルを用いて同様な建築表現を繰り返す画一的な思考（［類似系］）と、多様な建築表現を創出してモデルの汎用性を試す思考（［差異系］）とが多くみられるのに対して、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して導出する場合は、ひとつの建築表現の可能性を反復しながら追求する思考（［類似系］）と、作品間の建築表現の関係を様々に試しながら模索する思考（［混合系］）とが多くみられる傾向がある。

4.2 【構成】と【構法・技術】における時間認識

【構成】と【構法・技術】については、『モデルの想定形式』の該当数に着目すると、【構成】では《演繹的形式》が、【構法・技術】では《帰納的形式》が、それぞれ多くみられた（前者は 26/38 資料、後者は 23/37 資料）。以下、これを踏まえて検討する。

まず、【構成】の特徴を示す《演繹的形式》について、『建築表現の関係性』の内訳をみると、［差異系］が大半を占めている（19/26 資料）。このことから、建築的要素の配置・配列関係を題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルをあらかじめ設定して、それに基づいて様々な建築表現を創出しようとする思考を基調としていることが窺える。

次に【構法・技術】についても同様に検討する。該当数の多かった《帰納的形式》の『建築表現の関係性』に関する内訳では、［類似系］および［差異系］との対応がみられる（［類似系］が 11/23 資料、［差異系］が 9/23 資料）。さらにそれらにおける『連作の主題』の意味内容の細項目をみると、［類似系］では生産の仕組み（n）が多いのに対し、［差異系］では建物を造る材料（l）および建物の構造（m）が多いことが分かる。以上のことから、まず、建物の造り方やそれに関わる技術を題材とした建築表現については、作品の創作を試験的な段階とし、ひとつの建築表現の可能性を追求する方法（［類似系］）と様々な建築表現を試みる方法（［差異系］）との対照的な方法により、新たな建築技術や生産方法の実現を目指そうとする思考を基調とするなかで、これらの対照的な方法は、建物の造り方やそれに関わる技術に関する具体的な内容に応じて柔軟に使い分けており、新たな生産の仕組みを実現するためには、ひとつの建築表現の可能性を追求するのに対し、新たな材料や構造を用いた建築表現を実現するためには、様々な建築表現を試みる傾向があると言える。

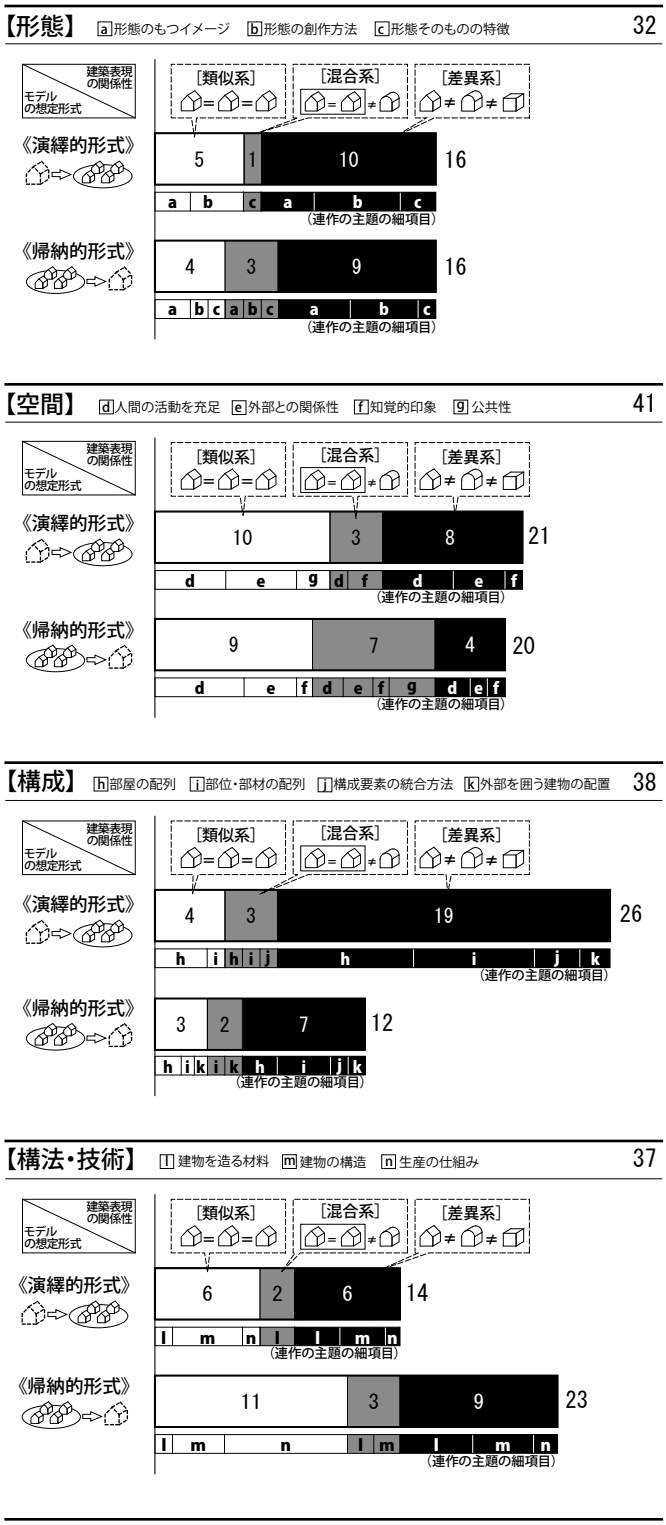


図 3-6 『連作の主題』における『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の関係

5節　小結

本章は、連作に関する設計論において、一連の作品群に共通した主題のもとで建築表現を展開させる思考を、一連の作品群相互における建築表現の関係性と、建築表現の基となるモデルの想定の仕方といった観点から整理・検討することで、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識に関する思考の枠組みを明らかにするものであった。

2節では、一連の作品に共通する主題の意味内容について、建築の実体的側面にあらわれるかたちに関する事柄を主題として論じたものである形態、床や壁などの建築の構成要素で境界づけられた三次元的な広がりをもつヴォリュームに関する事柄を主題として論じるものである空間、建築的要素の配置・配列関係に関する事柄を主題として論じるものである構成、建物の造り方やそれに関わる技術に関する事柄を主題として論じるものである構法・技術、および敷地周辺の都市や自然などの環境との関係を主題として論じる周辺環境との関係といった、5つの大枠で捉えられることを示した。

続く3節では、建築表現を展開させる思考を、建築表現の関係性と建築表現の基となるモデルの想定の仕方から検討した。建築表現の関係性については、作品相互の建築表現の類似性と差異性から3つに分類でき、建築表現の基となるモデルの想定の仕方については、演繹的な想定の仕方と帰納的な想定の仕方の2つで捉えることができることを示した。さらにこれらの対応関係を検討することで、あらかじめ想定された建築表現の基となるモデルから多様な建築表現を創出しようとする思考、および建築表現の基となるモデルの模索のために、ひとつの建築表現の可能性を追求し続ける方法と多様な建築表現を試し続ける方法をとろうとする思考が基調になっていることを明らかにした。つまり、これらの思考が、自身の設計した作品群の建築表現といった内面的なテーマに固有の時間認識に関して、基調であると考えられる。

4節では以上のことを踏まえて、主題の意味内容ごとに、建築表現の関係性と、建築表現の基となるモデルの想定の仕方との対応関係を検討した。その結果、実体的側面にあらわれるかたちを題材とした建築表現については、建築表現のバリエーションの創出が、建築表現の基となるモデルの想定の仕方によらない一貫したものであり、非実体的な性格の強い空間を題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方に応じて、一連の作品群における建築表現の関係性を選択する柔軟な思考

が基調となるといった、相反する特徴がみられた。また、建築的要素の配置・配列関係を題材とした建築表現については、汎用性のあるモデルをあらかじめ設定して、それに基づいて多様な建築表現を創出しようとする傾向と、建物の造り方やそれに関わる技術を題材とした建築表現については、作品の創作を試験的な段階とし、ひとつの建築表現の可能性を追求する方法と様々な建築表現を試みる方法により、新たな建築技術や生産方法の実現を目指そうとする傾向を示すことができた。

以上、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識の枠組みと、その特徴に関して明らかにした。

参考文献

3-1)　馬場璋造：生残る建築家像 , 建築情報システム研究所 , 1990.4
3-2)　菊竹清訓：設計の論理 , 代謝建築論 , 彰国社 , 1969.1
3-3)　奥山信一 編 , 篠原一男 監修：アフォリズム・篠原一男の空間言説 , 鹿島出版会 , 2004
3-4)　奥山信一：設計思想の一貫性を支える条件 , 新建築 住宅特集 No.156 , 1999.4
3-5)　柏木博 , 藤森照信 , 布野修司 , 松山巖：建築作家の時代 , リブロリポート , 1987
3-6)　村松貞次郎：日本建築家山脈 , 鹿島研究所出版会 , 1965
3-7)　浜口隆一 , 村松貞次郎：現代建築をつくる人々《設計組織ルポ》, KK 世界書院 , 1963
3-8)　鈴木博之 , 石井和紘：現代建築家 , 晶文社 , 1982
3-9)　川添登：建築家・人と作品 , 井上新書 , 1968
3-10）難波和彦：戦後モダニズム建築の極北 池辺陽試論 , 彰国社 , 1999
3-11）B. ゼーヴィ 編 , 鵜沢隆 訳：ジョゼッペ・テッラーニ , 鹿島出版会 , 1983
3-12）川喜田二郎：発想法 , 中央公論社 , 1967
3-13) 安藤一将 , 塩崎太伸 , 奥山信一 , 稲用隆一：建築家の連作における設計主題 - 現代日本の建築家の連作に関する研究（1）, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.799-800, 2009
3-14）安藤一将 , 奥山信一 , 塩崎太伸 , 稲用隆一：建築家の連作における設計論の展開にみられる形式 - 現代日本の建築家の連作に関する研究（2）, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.801-802, 2009
3-15）林俊博 , 末包伸吾 , 長谷川あみ湖 , 藤井一成：広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH シリーズ」における空間構成と架構形式に関する研究 , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp.901-904, 20
3-16）内山崇 , 山名善之 , 谷川大輔：前川國男設計のプレモスの部材構成に着目した開発過程に関する考察 , 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.313-314, 2008
3-17）朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築思想 - 図式「オッテルロー・サークル」の変容について , 日本建築学会近畿支部研究報告集 , pp893-896, 2005
3-18）林直樹 , 土井義岳：篠原一男の「亀裂」- その時代を語るキーワードとして , 日本建築学会九州支部研究報告集 , pp.785-788, 2007

第 4 章　記念館建築の設計論にみられる時間認識

1節　本章の目的と概要

1．1　目的

第 1 章で述べたように、本章においては、建築家[注 4-1)] の外面的なテーマに固有の時間認識を明確に見出すことが可能である具体例として、記念館建築[注 4-2)] を取り上げ、その設計論[注 4-3)] を検討している。

記念館建築は、人物の業績や歴史的事実を記念し、後世に伝えることを基本的な目的としており、その設計においては、こうした記念性に関してどのように考えるかが中心的な主題となると考えられる。そうした人物の業績や歴史的事実を記念し、後世に伝えるといった記念性に関する思考からは、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識を見出すことができると考えられる。

さらに、イギリスの歴史家 A. フォーティーが著書『言葉と建築』[注 4-4)] において、「記念のために建物を作ることは、建築の最も古くからある目的の一つである。ある人々や出来事を直接見て知っている個人的な回想をこえて、社会的に共有されたこれらの記憶を保ち続けることができる、と建築は期待された。」と述べているように、記念性は、建築に古来から備わっている社会的役割のひとつであると言え、その思考においては、時間認識における根源的ともいえる内容を読み取ることができると考えられることから、記念性は時間認識において重要な概念のひとつであるといえる。

そこで本章では、現代日本の建築家による記念館建築の設計論を資料とし[注 4-5)]、記念性に関する言説を抽出・検討することで、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識に関す

注 4-1)　前章と同様に、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。

注 4-2)　建築大辞典（第二版，彰国社，1993 年）において、記念館は「歴史的事実や人物の業績などを記念して造られる建物で、記念塔の一部に設けられる場合もある。日本では博物館として設けられる場合が多く、広島市平和記念資料館、北海道開拓記念館、秩父宮記念スポーツ博物館などのほか、画家、小説家、俳人などの記念館が多い。」とあり、本研究もこの定義に従っている。なお、記念碑や記念塔のみ設計したものは含んでいない。

注 4-3)　前章と同様に設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものと定義する。

注 4-4)　坂牛卓と邊見浩久の監訳により、2006 年に鹿島出版会より出版された。

注 4-5)　記念館建築の設計論に関する著書、論文は膨大に存在するため、すべてを把握することはできないが、一般建築ジャーナリズムを現代の設計者のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌を対象としている。また、日本において大きく社会構造が変革した第 2 次世界大戦以降（1945 年）から現在（2013 年）までを現代と設定し、資料の対象期間としている。この範囲において、135 作品を資料とした（別表 4-1）。

る思考の枠組みを明らかにすることを目的とする。

さらに、記念館建築の設計論からは、建築家が、こうした時間認識に関する思考と連関させて空間や形態を具現化していることも読み取ることができることから、本章においては、外面的なテーマに固有の時間認識を、建築の空間や形態にどのように反映させようとしたかといった思考も明らかにする。

1．2　概要

建築家の設計論において、設計する際に建築家が何をその根拠としたのか（以下、設計根拠）といった言説からは、設計に際して建築の設計を取り巻く建築家にとって外面的なテーマをどのように考えたかを読み取ることができる。資料とした記念館建築の設計論から、こうした設計根拠のうち、記念性に関わるものを抽出し、通読したところ、人物や歴史的事件などの記念する対象（以下、記念対象）を後世に伝えるといった記念性に固有の内容だけでなく、記念性と関連付けて現代的な状況への対応に関する内容もみられた。例えば、図 4-1 の分析例では、「その時代の背景は哀愁に満ちた一種のトワライトゾーンのような感じがする。・・・彼の作品はこの時代をよく表しているように思える。私はこの背景を空間や造形でつくる・・・」のように、記念対象の活躍した時代を表現することで、記念対象を後世に伝えることに固有の設計根拠を論じるとともに、「蕗屋虹児氏は、新潟県新発田市が生んだ抒情作家である。・・・敷地は新発田市の中心、市役所と新発田市民文化会館・公民館と図書館が集まっている市民文化ゾーンの中に選ばれた。・・・私は市民文化会館と図書館に対し、同化させる形態ではなく、相互の自立性を重んじ、なお全体の調和が可能な形態にしたいと思った。」のように、記念対象の出身地において、その中心となる地区の施設に対して自立的でありながらも調和させるといった、現代的な状況との対応に関する設計根拠を記念対象と関連させて論じていることを読み取ることができる。さらに、資料とした設計論の半数弱[注 4-6)]において、上述のように、ひとつの設計論から複数の設計根拠が読み取れることから、記念性に固有である側面と現代的な状況への対応に関連させる側面との均衡関係を考慮することに、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識を読み取ることができると考えられる。そこで、本章 2 節では、記念性に関わる設計根拠を抽出し、それらの意味内容を分析・整理し、さらに、設計論における設計根拠の意味内容の組合せを検討することで、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識を考察する。

さらに 3 節では、資料とした各設計論において、「ロシア正教会の形態をおいてないように思えた。・・・トワイライトゾーンの中にはビザンチンのドームとオーソドックスな構成を持つ建築がぴったり合うように感じた。（図 4-1，分析例 No. m-36-1）」のように、記念性に関する設計根拠に基づいて建築をいかに具現化するかといった内容（以下、実現手法）が記述されることが多いことから、そうした実現手法を分析した上で、2 節で論じた設計根拠との関係を総合的に検討、考察し、4 節で小結を述べる。

注 4-6)　建 135 資料のなかで 57 資料みられた（約 42%）。

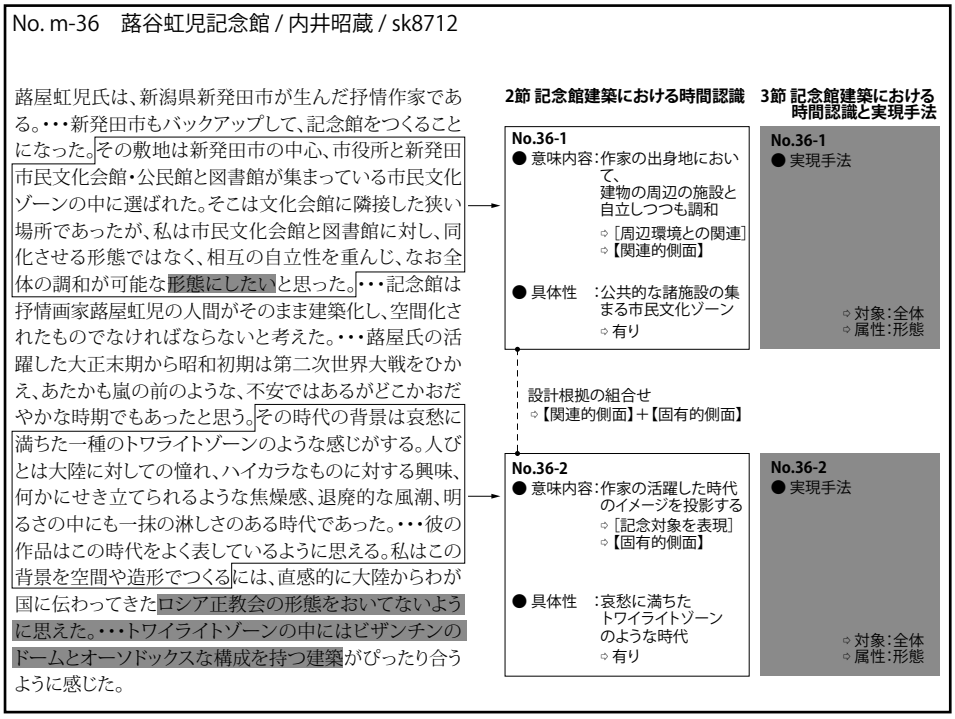

No. m-36　蕗谷虹児記念館 / 内井昭蔵 / sk8712
蕗屋虹児氏は、新潟県新発田市が生んだ抒情作家である。・・・新発田市もバックアップして、記念館をつくることになった。その敷地は新発田市の中心、市役所と新発田市民文化会館・公民館と図書館が集まっている市民文化ゾーンの中に選ばれた。そこは文化会館に隣接した狭い場所であったが、私は市民文化会館と図書館に対し、同化させる形態ではなく、相互の自立性を重んじ、なお全体の調和が可能な形態にしたいと思った。・・・記念館は抒情画家蕗屋虹児の人間がそのまま建築化し、空間化されたものでなければならないと考えた。・・・蕗屋氏の活躍した大正末期から昭和初期は第二次世界大戦をひかえ、あたかも嵐の前のような、不安ではあるがどこかおだやかな時期でもあったと思う。その時代の背景は哀愁に満ちた一種のトワライトゾーンのような感じがする。人びとは大陸に対しての憧れ、ハイカラなものに対する興味、何かにせき立てられるような焦燥感、退廃的な風潮、明るさの中にも一抹の淋しさのある時代であった。・・・彼の作品はこの時代をよく表しているように思える。私はこの背景を空間や造形でつくるには、直感的に大陸からわが国に伝わってきたロシア正教会の形態をおいてないように思えた。・・・トワイライトゾーンの中にはビザンチンのドームとオーソドックスな構成を持つ建築がぴったり合うように感じた。
2節 記念館建築における時間認識
3節 記念館建築における時間認識と実現手法
No.36-1
● 意味内容：作家の出身地において、建物の周辺の施設と自立しつつも調和
⇨［周辺環境との関連］
⇨【関連的側面】
● 具体性　：公共的な諸施設の集まる市民文化ゾーン
⇨ 有り
No.36-1
● 実現手法
⇨ 対象：全体
⇨ 属性：形態
設計根拠の組合せ
⇨【関連的側面】＋【固有的側面】
No.36-2
● 意味内容：作家の活躍した時代のイメージを投影する
⇨［記念対象を表現］
⇨【固有的側面】
● 具体性　：哀愁に満ちたトワイライトゾーンのような時代
⇨ 有り
No.36-2
● 実現手法
⇨ 対象：全体
⇨ 属性：形態

図 4-1　第４章の分析例

別表 4-1　記念館建築の設計論の資料リスト

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	記念対象	主用途	設計根拠					実現手法			
						記念		関連						
						表現	伝承	社会的役割	周辺環境	性能	全体	空間	部位・部材	なし
1-1	4903	藤村記念堂	谷口吉郎	島崎藤村	博		●						色	
1-2						◎							色	
1-3										◎			配	
2	5401	平和会館 記念陳列館	丹下健三	原爆投下	博			●			尺			
3	5504	原爆堂	白井晟一	原爆投下	博	●					形			
4	5901	原敬記念館	谷口吉郎	原敬	博					●	色			
5-1	5907	野球体育博物館	森京介	野球界に貢献した人々	博		●				形			
5-2									◎				配	
6-1	6002	クラーク記念館	太田実	クラーク博士	学			◎				配		
6-2									◎		形			
7	6006	五島美術館	吉田五十八	五島慶太の喜寿	博	●								な
8-1	6107	玉堂美術館	吉田五十八	川合玉堂	博	●	●					な	な	
8-2						◎					な			
8-3						◎								
8-4									●				尺	
9	6208	日本26聖人殉教記念施設	今井兼次	日本二十六聖人	宗	◎							形	
10-1	6604	楽部音楽堂	今井兼次	香淳皇后の還暦	劇		●						形	
10-2							●						色	
10-3						●							な	
11	6612	大隈会館	今井兼次	大隈重信	博	◎							配	
12-1	6808	武庫川学院公江記念図書館	大辻真喜夫	公江喜市郎	学					●	形			
12-2							●						配	
13-1	6910	金沢工業大学本館・土木工学館	水野一郎	益谷秀次	学			●				配		
13-2										◎		配		
14	7009	芹沢文学館	菊竹清訓	芹沢光治良	博	◎								な
15-1	7102	遠山美術館	今井兼次	遠山元一	博				◎		形	色		
15-2						●							形	
16	7106	北海道開拓記念館	佐藤武夫	北海道開拓百年	博	●					形			
17-1	7212	こどもの国「あずまや」	環境開発ｾﾝﾀｰ	皇太子成婚	劇				◎		形			
17-2										●	形			
17-3									●			配		
18	7308	喜多六平太記念能楽堂	棒沢敏郎	喜多六平太	劇					●				な
19-1	7510	別子銅山記念館	寺本敏則	別子銅山の歴史	博	●					配			
19-2									◎		形	配		
20-1	7701	吉川英治記念館	谷口吉郎	吉川英治	博	●					尺		色	
20-2						●					尺		色	
21	7806	大佛次郎記念館	浦辺鎮太郎	大佛次郎	博	●					色	尺		
22	8107	自由学園記念講堂・記念体育館	遠藤楽	学園創立60周年	学				◎		配			
23	8209	白鹿記念館	上村幸之 他	酒造の歴史	博				◎					な
24-1	8303	賀川豊彦記念松澤資料館・幼稚園※	阿部勤	賀川豊彦	☆		◎					配	配	
24-2						◎							配	
24-3								●		●		配		
25	8307	歴史民俗資料館・自由民権運動記念館※	大高正人	自由民権家	博			◎	◎		配			
26-1	8310	北海道立三岸好太郎美術館	岡田新一	三岸好太郎	博				●		形			
26-2						◎							形色な	
26-3						◎							配	
27-1	8310	稲沢市 萩須記念美術館	徳岡昌克	萩須高徳	博	◎					形			
27-2								●					な	
28-1	8312	土門拳記念館	谷口吉生	土門拳	博		◎					な		
28-2									◎		形			
28-3						◎							配	
28-4								●				配		
28-5						◎	◎					形		
28-6							●						形	
29-1	8406	齋藤隆夫記念館 静思堂	宮脇檀	齋藤隆夫	博	◎	◎						色	
29-2									◎				色	
30	8409	伊豆の長八 美術館	石山修武	伊豆の長八	博		●							
31	8411	メモリアルハウス	森義純	施主	住	●					色		形	
32	8506	日中友好会館	加藤隆久	国交正常化10周年	住					◎			色	
33	8510	YKK 50	遠藤精一	会社創立50周年	事	◎						な		
34-1	8608	田崎美術館	原広司	田崎廣助	博	◎					色		形色配	
34-2										●	形			
34-3								●			形			
35	8608	県立富山高校100周年記念館	山本公也	高校創立100周年	学	◎					形			
36-1	8712	露屋虹児記念館	内井昭蔵	露屋虹児	博				◎		形			
36-2						◎					形			
37	8712	ｻｯﾎﾟﾛﾋﾞｰﾙ 開拓使麦酒記念館	竹井俊介	ビールの歴史	博		●						色	
38-1	8801	東京工業大学百年記念館	篠原一男	大学創立100周年	博				●					な
38-2						◎								
39-1	8805	瀬戸大橋記念館	山本忠司	瀬戸大橋竣工	博				●		色			
39-2								●			配			
39-3										◎	形			
39-4								●					配	
40	8806	平福記念館	大江宏	平福穂庵・百穂	博				◎				色	
41	8901	ﾄﾞﾝﾎﾞｽｺ記念聖堂・地域交流ﾎｰﾑ※	坂田誠造	ドンボスコ	宗			●						な
42-1	8903	福島市古関祐而記念館	岡田新一 他	古関祐而	博		◎						形	
42-2									◎	◎			配	
43	8906	三溪記念館	小俣富歩	原三溪	博				◎	◎	形	尺		
44	8912	玉川高島屋 20周年ﾘﾆｭｰｱﾙ※	彦坂裕	開店20周年	商					●			配	
45	9006	東京都太田記念館	林雅子	太田宇之助	住	●	●					色		
46-1	9007	長野県信濃美術館 東山魁夷館	谷口吉生	東山魁夷	博	◎						形	配	
46-2									◎		形			
47	9011	普連土学園百年記念館	小川守之	学園創立100周年	学				◎				配	
48	9101	芝浦工業大学齋藤記念館	相田武文	前教授の寄付	学				●					
49-1	9103	白瀬南極探検隊記念館	滝浪正光	南極探検隊	博	●	●						色	
49-2							●							
50-1	9111	酒田市国体記念体育館	谷口吉生	国体開催	体				◎	◎				
50-2						◎								
50-3										◎				
51	9112	曽我・平澤記念館	香山壽夫	曽我量・平澤興	博					◎				な
52	9112	山口蓬春記念館	大江匡	山口蓬春	博					●				
53	9201	高知県立坂本龍馬記念館	高橋晶子	坂本龍馬	博	◎								
54	9207	猪熊弦一郎現代美術館・図書館※	谷口吉生	猪熊弦一郎	博				◎	◎				
55	9208	静嘉堂文庫美術館	高木彦二	文庫創立100周年	博					◎				
56	9212	宮沢賢治イーハトーブ館	古市徹雄	宮沢賢治	博					●				
57-1	9302	新居浜市立 別子銅山記念図書館	寺本敏則	銅山開杭300周年	図			●						
57-2									●					
58-1	9306	所沢航空発祥記念館	横谷英之 他	航空の発祥	博					◎				
58-2								●						
59	9307	須磨子博物館・赤彦記念館※	伊東豊雄	島木赤彦	博					◎				
60-1	9308	窪田空穂記念館	柳澤孝彦	窪田空穂	博				◎	◎				
60-2						◎								
60-3														
61	9309	式年遷宮記念　新宮美術	小俣富歩	式年遷宮61回	博				◎	◎				
62-1	9401	中原中也記念館	宮崎浩	中原中也	博				◎	◎				
62-2														
63-1	9407	木の殿堂	安藤忠雄	全国植樹祭	博									
63-2									◎					
64-1	9407	新美南吉記念館	新家良浩	新美南吉	博									
64-2														
65	9411	植村直己冒険館 植村直己公園ﾋﾞｼﾞﾀｰｾﾝﾀｰ※	栗生明	植村直己	博									
66-1	9501	西堀榮三郎記念 “探検の殿堂”	上田篤	西堀榮三郎	博									
66-2														

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	記念対象	主用途	設計根拠					実現手法				
						記念		関連							
						表現	伝承	社会的役割	周辺環境	性能	全体	空間	部位・部材	なし
67-1	9502	中谷宇吉郎 雪の科学館	平林繁	中谷宇吉郎	博			◎			形			
67-2						◎					色			
67-3									◎		色			
68	9503	中央工学校創立85周年記念館※	林雅子	学校創立85周年	学			●			形			
69	9508	わらべ館	山本浩二	おもちゃ博	博	●					形			
70-1	9509	森鴎外記念館	宮本忠長	森鴎外	博			●	●				配	
70-2						◎						色	色	
71	9509	ある町医者の記念館	堀部安嗣	前原朋和	博		◎					色		
72-1	9603	書写紀念会館	東孝光	大学創立50周年					◎		形			
72-2								●			形			
73-1	9606	からくり記念館	内井昭蔵	大野弁吉	博	●					配			
73-2						●					配			
73-3						◎							配	
73-4						◎								
73-6						◎					色			
74-1	9608	長崎原爆資料館	安東直	原爆投下	博		●						配	
74-2								●			形			
75	9609	多胡碑記念館	木村優	多胡碑	博	◎							色	
76	9610	文京学園島田依史子記念館	時園國男	島田依史子	学				◎			配		
77	9701	長野市ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念ｱﾘｰﾅ ｴﾑｳｪｰﾌﾞ	小野威	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ開催	体			◎					色	
78	9703	一茶ゆかりの里	岡田新一	小林一茶	博			●						な
79	9705	丈山苑	岩崎泰久	石川丈山	博	●						配		
80	9706	安曇野ちひろ美術館	内藤廣	いわさきちひろ	博				◎		形			
81	9707	山口大医学部創立50周年記念会館※	岸和郎	学部創立50周年	学			◎				形	形	
82-1	9709	平山郁夫美術館	今里隆	平山郁夫	博	◎							色	
82-2									◎				色	
83	9806	天竜市立秋野不矩美術館	藤森照信	秋野不矩	博		◎						色	
84	9806	上林暁文学記念館	圃紀彦	上林暁	博		◎					色		
85	9807	早稲田大学 會津八一記念博物館	古谷誠章	會津八一	博					◎			な	
86-1	9808	茨城県天心記念五浦美術館	内藤廣	岡倉天心	博			◎			尺			
86-2						●							配	
86-3						●							色	
87-1	9810	松本清張記念館	宮本忠長	松本清張	博		●					な		
87-2						◎						尺		
88	9811	織田廣喜ミュージアム	安藤忠雄	織田廣喜	博		●						配	
89	9902	セキグチ・ドールガーデン	ｱｰｷﾃｸﾄﾌｧｲﾌﾞ	会社創立80周年	博					◎			配	
90-1	9905	昭和館	松里征男	太平洋戦争	博	●					形			
90-2										●			色	
91-1	9911	鹿児島ｶﾃﾄﾞﾗﾙ ｻﾞﾋﾞｴﾙ記念聖堂	坂田誠造	ｻﾞﾋﾞｴﾙ渡航450年	宗			◎	◎		形			
91-2						●					形			
91-3						◎							色	
92-1	0001	牧野富太郎記念館	内藤廣	牧野富太郎	博				◎		形			
92-2						◎					形			
93	0005	沖縄県平和祈念資料館	福村俊治	太平洋戦争	博			●			配		色	
94-1	0005	軽井沢ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念館	三輪正弘	オリンピック開催	博		◎						色	
94-2									●		形色尺			
95	0007	東京大学弥生講堂	香山壽夫	学部創立125周年	学			◎			色		配	
96	0011	馬頭町広重美術館	隈研吾	安藤広重	博	◎							配	
97	0103	草津片岡鶴太郎美術館	泉幸甫	片岡鶴太郎	博				◎		色			
98	0104	神戸大学百年記念館	狩野忠正	大学創立100周年	学				●			形		
99	0204	長谷木記念幹	内井昭蔵	長谷川家の歴史	博	◎							色	配
100	0204	100周年記念館 ﾏｰｶﾞﾚｯﾄﾎｰﾙ※	淺石優	大学創立100周年	学	◎			◎				配	
101	0206	井之頭学園70周年記念館	赤坂喜顕	学校創立70周年	学	◎						色	配	
102-1	0207	司馬遼太郎記念館	安藤忠雄	司馬遼太郎	博	◎	◎						尺	
102-2						●	●						色	尺
103-1	0209	雲仙岳災害記念館 がまだすﾄﾞｰﾑ	林年男	雲仙岳噴火	博				●		配			
103-2							●				色			
104	0211	今井篤記念体育館※	坂茂	今井篤	体				●		形			
105	0302	岐阜県立飛騨牛記念館	北川原温	飛騨牛	博				●				形	
106-1	0309	安曇野髙橋節郎記念美術館	宮崎浩	髙橋節郎	博				◎		形			
106-2									◎		色尺			
107-1	0311	石川県西田幾多郎記念哲学館	安藤忠雄	西田幾多郎	博	◎	◎					形		
107-2						●						形		
107-3						●								な
108	0401	大阪府立北野高等学校六陵会館	竹山聖	高校創立130周年	学	●					形			
109	0405	野依記念物質科学研究館	飯田善彦	野依良治	学			●				配		
110	0406	京都大学百周年時計台記念館	川崎清	大学創立100周年	学			●					色	
111-1	0407	村井正誠記念美術館	隈研吾	村井正誠	博		◎					配		
111-2						◎						色		
112-1	0412	吉田正音楽記念館	毒島智和	吉田正	博			●			形			
112-2							◎				形			
113	0504	富弘美術館	ﾖｺﾐｿﾞﾏｽﾄ	星野富弘	博	◎						配		
114	0601	東山魁夷せとうち美術館※	谷口吉生	東山魁夷	博				●				配	
115-1	0603	真下慶治記念美術館	髙宮眞介	真下慶治	博				◎			形	色	
115-2						◎							色	
115-3									◎		形			
116	0604	葛生傳承館	芦原太郎	葛生町の伝統文化	博			●	●		形			
117-1	0611	南方熊楠顕彰館	矢田康順 他	南方熊楠	博	◎	◎					形		
117-2									◎		色尺			
118	0703	龍馬の生まれたまち記念館※	西森啓史	坂本龍馬	博			◎					色	
119-1	0704	奥田元宋・小由女美術館	柳澤孝彦	奥田元宋・小由女	博	●	●				形			
119-2						●							配	
120	0707	キース・ヘリング美術館※	北川原温	キース・ヘリング	博		●					形	形	色
121-1	0709	坂の上の雲ミュージアム	安藤忠雄	坂の上の雲	博	◎							形	
121-2						●	●						配	
122-1	0709	伊丹十三記念館	中村好文	伊丹十三	博				●		形			
122-2							●					形		
122-3						◎							配	
122-4							◎					配		
122-5										●		配		
122-6								◎	◎		色			
123-1	0709	東京音楽大学 100周年記念本館	野口秀世	大学創立100周年	学			●				形		
123-2								◎			色			
124	0804	日本工業大学百年記念館※	小川次郎	大学創立100周年	学					●	色			
125	0805	東京大学情報学環・福武ﾎｰﾙ	安藤忠雄	大学創立130周年	学			●			配			
126	0810	星野哲郎記念館	井下仁史	星野哲郎	博	◎					形			
127	0905	東北大学百周年記念会館 川内萩ﾎｰﾙ	村上孝憲 他	大学創立100周年	学				●			色		
128	0907	聖心女子学院創立100周年記念ﾎｰﾙ	安藤忠雄	大学創立100周年	学			●					配	
129-1	0911	ボーラ銀座ビル	中屋敷公一	会社創立80周年	事			◎					色	
129-2						◎							色	
130-1	1004	東邦音楽大学 70周年記念館	野生司義光	大学創立70周年	学					●		配		
130-2								●				配		
130-3						◎					形			
131	1005	京都工芸繊維大学 60周年記念館	木村博昭	大学創立60周年	学				◎		色	色		
132	1006	鶴岡市立藤沢周平記念館	高谷時彦	藤沢周平	博			●			形			
133-1	1110	山口大工学部創立100周年記念会館※	髙宮眞介	学部創立100周年	学				●		形			
133-2						●							形	
133-3								●			配			
134	1207	東京電機大学100周年記念ｷｬﾝﾊﾟｽ※	福永知義	大学創立100周年	学			●	●		形			
135-1	1301	文京区立森鷗外記念館	陶器二三雄	森鷗外	博	◎					色			
135-2						◎					色			

別表4-1 注1）作品名に※が付してある資料は、略名としている。
注2）主用途の記号は、博：博物館、学：学校施設、宗：宗教施設、劇：劇場、住：住宅、事：事務所、商：商業施設、体：体育館、図：図書館、☆：博物館＋学校施設 を示す。
注3）設計根拠の記号は、◎：具体性あり、●：具体性なし を示す。
注4）実現手法の記号は、「対象」ごとに「属性」を記載しており、記号は表4-1の頭文字としている。

２節　記念館建築における時間認識

２．１　記念館建築の設計根拠の意味内容

資料とした設計論にみられる記念性に関する設計根拠について通読したところ、その意味内容は多岐にわたっていた。そこで資料から設計根拠に関する言説を抽出し、その意味内容を、KJ 法的[注 4-7)] に相互 に比較検討した。その結果、人物の業績や歴史的事件を後世に伝えるといった記念性に固有の側面に着目した内容（以下、【固有的側面】[注 4-8)]）と、記念対象と関連した都市環境への対応など記念性に関連した側面に着目した内容（以下、【関連的側面】）で大枠捉えることができた。

このうち、【固有的側面】には、記念対象の人柄や作風などを建物で表現しようとする［記念対象の表現］[注 4-9)] と、記念対象の作品や業績などを伝える方法を追求しようとする［記念対象の伝承］とで捉えることができる。

［記念対象の表現］は、「西堀氏の型破りな人生を現すように･･･(66-2) [注 4-10)]」のように、人柄や性質などの記念対象に内在している事柄に着目し、それを建物に表出させようとするもの（以下、〔内在する事柄の表出〕[注 4-11)]）、「伊丹十三は、エッセイにおいても、映画においても、上質のユーモアのセンスと遊び心を感じさせる仕事をしてきた。・・・伊丹らしさを醸し出すためには、なにはともあれ、そこはかとなくユーモアと遊び心を感じさせる記念館にしなければならない。(122-3)」のように、家族や作品など記念対象に付帯する人や物の特徴に着目し、それを建物に反映させようとするもの（以下、〔付帯する人･

注 4-7)　前章でも述べたように、KJ 法とは民族地理学の分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法をいう。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法としている（参考文献 9）。ここでは、こうした意味で KJ 法的としている。

注 4-8)　本章では下記のように括弧を使い分けている。
【　】：設計根拠に関する意味内容の大枠のカテゴリー
［　］：設計根拠に関する意味内容の中枠のカテゴリー
〔　〕：設計根拠に関する意味内容の小枠のカテゴリー
『　』：設計根拠における具体的な記述の有無
「　」：実現手法に関する言説における、具現化する際の建物の対象とそれに与えられた属性を示す際に、「対象」、「属性」と記す。
｛　｝：「対象」のカテゴリー
〈　〉：「属性」のカテゴリー
（　）：資料番号

注 4-9)　本章における括弧の使い分けを注 4-8 に記してある。

注 4-10)　本章における括弧の使い分けを注 4-8 に記してある。

注 4-11)　本章における括弧の使い分けを注 4-8 に記してある。

物の特徴の反映〕)、および「・・・記念館設計のイメージがわいてくる。原点は青野山、城山、津和野川、街のもつ風景、植生のすべてに渡って、森林太郎が 10 歳にして故郷を離れるときの様相を大切にしていくという〈記憶の中の風景〉の創成であった。(70-2)」のように、および出身地や活躍した時代など記念対象に帰属する環境のイメージに着目し、それを建物で具現化するもの(以下、〔帰属する環境のイメージを具現化〕)の大きく 3 つで捉えることができた。また、数は少ないものの、「鳥取市が開催した 89 年世界おもちゃ博を顕彰する施設として・・・楽しく音楽的なおもちゃ箱のような建築にすることであった。(69)」のように、記念対象から連想されるイメージを建物で具現化する内容もある。

［記念対象の伝承］には、「訪れた人びとがこのがかが描いてきた状態と同じ自然光のもとで絵を鑑賞する体験ができれば、より作品世界に近づくことができるかもしれない。(88)」のように、記念対象の作品や人柄への理解を促進する場として設計するもの(以下、〔記念対象への理解の促進〕)と、「皇后さまのご還暦を寿ぎ奉りたいとの私の世俗的習慣にしたがう常識的意図の発想が、この場合もっとも適わしい意義を持つものと信じたことに誤りがあったようである。それ以後、はばたく鶴の形象をはばたく白鳥として、記念性の意を高めるように思いを寄せて行ったことはもちろんである。(10-1)」のように、記念対象を伝えること自体の意義を模索するもの(以下、〔伝承する役割の模索〕)がみられた。

これらに対して【関連的側面】は、記念対象と関連性のある建物周辺の都市や自然などの環境と関係付けようとする［周辺環境との関連］、建物を建てることで、記念対象と関連性のある地域社会への貢献を図ろうとする［社会的役割との関連］、および記念対象と関連性のある人びとの活動や作品・資料の展示のために、室内環境の性能を向上させようとする［室内環境性能との関連］で捉えることができた。

まず、［周辺環境との関連］は、「秩父の山系を西に望む川島村は遠山元一先生の郷土であり、・・・私は近隣地域の農村の香りを感じながら、記念館との環境の調和を大切にしなければならないと思い、・・・(15-1)」のように、記念対象と関連性のある周辺環境と建物を調和的に関係付けるもの(以下、〔周辺環境と調和〕)と、「氏の生家である江戸中期の創建とされる茅葺き屋根の主屋やいくつかの土蔵が群として現存しており、今回の計画では庭を含めた古民家群を美術館施設として再生し、展示室、収蔵庫などの機能をもつ新設館とどのように関係づけていくかが大きなテーマであった。われわれは、新設館を古民家群のもつ伝統的な形態とは同化させずに、・・・(106-1)」のように、記念対象と関連性のある周辺環境と建物を対立的に関係付けるもの(以下、〔周辺環境と対立〕)といった対照的な内容で大きく捉えることができる。また、こうした関係の具体的内容を明確に

記述しないものも、僅かではあるがみられた。

次に、［社会的役割との関連］には、「オリンピックという世界的イベントにおいて、長野を世界に印象づけるユニークな建築であるべき、また長野という地域性を生かし、長野らしさを表現し、・・・(77)」のように、建物を建てることで、記念対象と関連性のある地域のアイデンティティを創出しようとするもの（以下、〔地域性の創出〕）と、「平和公園とそこに立つ平和会館の建設が、広島の平和的再建の中心課題として開始されたのである。・・・この地が公園として整い、これらの建築がコミュニティ・センターとして完成されたとき、・・・市民にとって、もっとも楽しい空間を提供するに違いないであろう。・・・空間の社会性の認識が、必要であることを私たちは深く感じているのである。(2)」のように、建物を建てることで、記念対象と関連性のある地域社会における生活に貢献しようとするもの（以下、〔地域の生活に寄与〕）といった内容が含まれる。

そして、［室内環境性能との関連］は、「音楽芸術研鑽の一環教育の実践をしている三室戸学園。・・・音楽大学の校舎においては各室に求められる高い音響性能を確保しつつ、お互いの干渉を避けた計画が求められる。(130-1)」のように、記念対象に関連した人びとの活動や作品・資料を展示・保管のための施設として、性能の整合性を追求するもの（以下、〔施設との整合性の追求〕）と、「本館は〈益谷記念館〉という学園発展に対する記念性が付与されている。・・・今計画は、自主的に結ぼうとすることも、赤の他人でいようとすることも・・・可能になるように、さまざまな空間やいくつかの経路を与えていった。・・・利用する者にとってより自由で選択性のある空間に高めることができる（13-2)」のように、記念対象と関連性のある人びとの活動や作品・資料を展示・保管のための施設において、多様な活動を許容させようとするもの（以下、〔施設での許容性の創出〕）といった内容で捉えることができた。

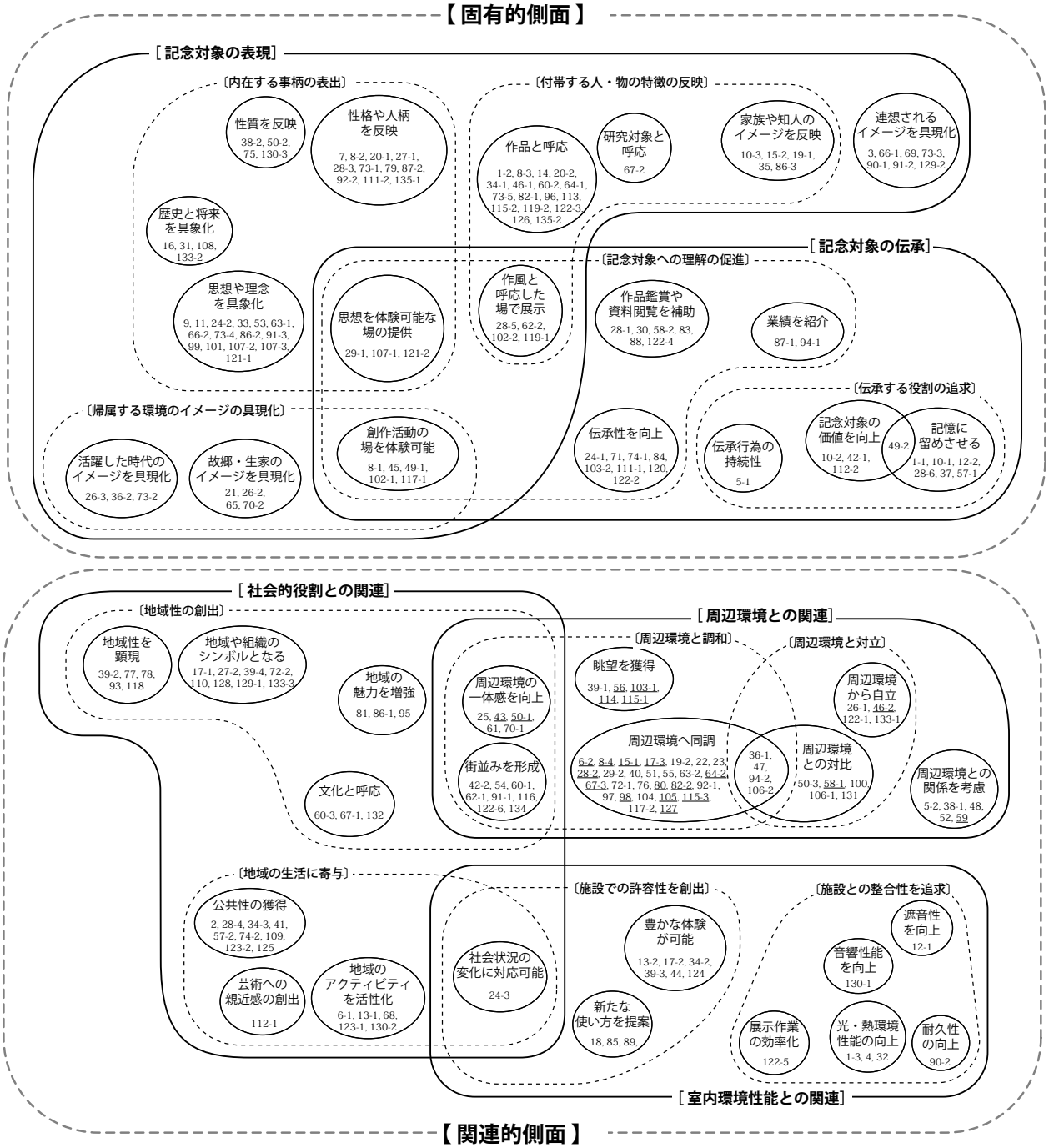


図4-2注) 各々の意味内容の下に記した数字は資料とした設計論の通し番号である。ひとつの資料より複数の設計根拠が抽出されたものはさらに添え番号をつけている。また、［周辺環境との関連］において資料番号に下線の引かれたものは、自然環境に関する意味内容であり、下線のないものは、都市環境に関する意味内容である。

図 4-2　記念館建築の設計根拠の意味内容における関係図

2．2．設計根拠の意味内容における具体性

資料から抽出した言説には、前項で捉えた設計根拠の意味内容のカテゴリー項目について、より詳細な内容が記述されていることがある。例えば、資料 No. m-8-2 は、性格や人柄を反映といったカテゴリー項目（〔内在する事柄の表出〕の細項目）に分類されるが、その設計根拠においては、「玉堂先生の記念館である以上、その設計にあたって先生をホウフツさせることを第一の念願としたのは当然であろう。私は 30 年来、先生の普請を手がけてきたので、先生の性格はよく知りぬいており、・・・生真面目な固さと洒落、この両方面をもっておられた。その点をこの建物にも反映したかった。」のように、性格や人柄に関するより詳細な内容を論じていることがわかる。一方、資料 No. m-86-2 は、思想や理念を具象化といったカテゴリー項目（〔内在する事柄の表出〕の細項目）に分類されるが、その設計根拠においては、「これらの構成が天心の精神を象徴する隠れたイコンになっている。」と記述されており、こうしたカテゴリー項目についてより詳細な内容が論じられない事例もみられた。このように、設計根拠の意味内容の関係図でまとめたカテゴリー項目に関して、より詳細な内容の記述があるか否かを、設計根拠の意味内容における具体性の有無の判断指標とした。このような視点から、すべての資料について検討した上で、前節で捉えた設計根拠の意味内容との対応関係を、図 4-3[注 4-12)] のグラフに示している。

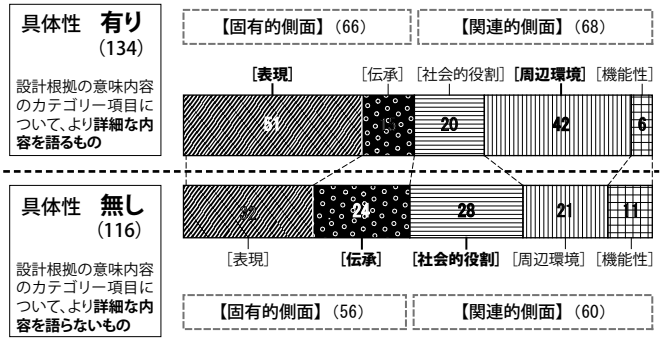


図 4-3　記念館建築の設計根拠の意味内容における具体性

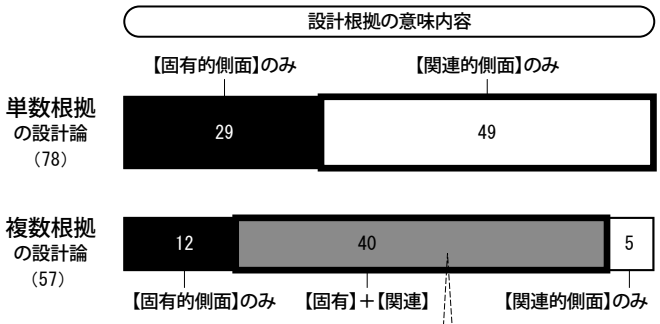
注 4-12)　各資料における、図 4-3 のカテゴリー項目の情報は別表に記してある。

これより、【固有的側面】と【関連的側面】といった大枠の意味内容において、具体性の有無を比較すると、数的な偏りがほとんどみられなかったものの、それぞれの内訳である中枠の意味内容においては、偏りがみられた。まず、【固有的側面】に属する中枠の意味内容においては、［記念対象の表現］と『具体性有り』が、［記念対象の伝承］と『具体性無し』が、それぞれ対応が比較的みられた。このことから、記念対象を建物で表現する場合は、記念対象の人柄や作品に関する具体的内容を思考する傾向があるのに対し、記念対象を伝える方法を追求する場合は、伝える内容の具体性よりも、伝える行為そのものを重視して思考する傾向があることがわかる。次に、【関連的側面】に属する中枠の意味内容においては、［周辺環境との関連］と『具体性有り』が、［社会的役割との関連］と『具体性無し』が、それぞれ対応が比較的みられた。このことから、建物と関係を構築する物的な周辺環境に関しては、その対象を明確に思考するのに対し、建物が建つことで貢献する地域社会の現象的内容に関しては、その対象を明確に限定せず、現象的内容全般に対して思考していることが窺える。

2．3． 設計論における設計根拠の組合せ

1 節の研究の概要でも述べたように、資料としたひとつの設計論のなかに複数の設計根拠に関する記述を読み取ることができるものが、全体の半数弱みられた。したがって、記念館建築を設計する際には、建築家は記念性に対して、ひとつの観点から思考するだけでなく、複数の観点から思考することもあることがわかる。そこで、設計論を、記述されている設計根拠が単数のもの（単数根拠）と複数のもの（複数根拠）に分類して、それぞれ個別に設計根拠の大枠の意味内容との対応関係をみることで、設計論単における設計根拠の意味内容の組み合わさり方について検討する（図 4-4 [注 4-13)]）。

まず、単数根拠の設計論においては、【関連的側面】が多く、【固有的側面】が少ないことがわかる。さらに、複数根拠の設計論について着目すると、【固有的側面】や【関連的側面】



［中枠の意味内容の組合せ］

2種類（24）

【一般】／【記念】	社会的役割	周辺環境	機能性
表現	3	11	1
伝承	3	4	1

3種類（13）

【一般】／【記念】	社会＋周辺	周辺＋機能	機能＋社会
表現	6	0	2
伝承	1	0	0

【一般】／【記念】	社会的役割	周辺環境	機能性
表現＋伝承	0	3	1

4種類（3）

・表現＋伝承＋社会＋周辺　2
・表現＋伝承＋社会＋機能　1

5種類（1）

図 4-4　設計論ごとの設計根拠の意味内容の組合せ

注 4-11)　各資料における、図 4-4 のカテゴリー項目の情報は別表に記してある。

を反復して論じるものは少なく（それぞれ 12 資料、5 資料が該当）、【固有的側面】と【関連的側面】の双方を論じるものが多くみられた（41 資料）。こうしたことから、記念性に関連した側面に関するコンセプトは、それ自体で設計根拠となり得るものの、記念性に固有の側面に関するコンセプトは、それだけを根拠として設計することを避け、記念性に関連した側面に関するコンセプトと併存させて設計するといった思考が、記念性に対する思考の定型のひとつであることがわかる。さらに、これは、人物の業績や歴史的事実といった外面的なテーマを、時間の経過のなかで後世へ継続させる意識は希薄であり、それよりも、建築の設計を取り巻く現代的な状況への共振を根拠として重要視して設計しているといった外面的に固有な時間認識の特性の一端を示していると考えられる。

とくに、こうした定型的な思考を表す、複数根拠の【固有的側面】と【関連的側面】の双方を論じる資料において、その内訳である中枠の意味内容の組合せをみると、［記念対象の表現］および［周辺環境との応答］を論じる資料と、［記念対象の表現］、［周辺環境との応答］、および［社会的役割の付与］を論じる資料とが多いことから、［記念対象の表現］と［周辺環境との応答］とを組合せて論じやすいことがわかる。このことは、記念性に固有の側面と関連した側面との均衡へ配慮する思考において、記念対象を建物で表現しつつも、物的な周辺環境といった現代的な状況への対応をしやすいことを示していると言える。

３節　記念館建築における時間認識に関する実現手法

３．１　実現手法

資料とした設計論から、設計に際して、記念性に関する設計根拠に基づいて建築をいかに具現化したかについて明確に著している箇所を実現手法として抽出し、その内容を相互に比較検討した。

その結果、それらは建物のどの部分で表現をしたかという「対象」[注4-14)]と、その「対象」に対してどのような性質を与えたかという「属性」との組合せで捉えることができた（表4-1[注4-15)]）。「対象」は、部屋や部位・部材など表現した箇所を限定できる場合は｛部分｝[注4-16)]とし、限定できない場合は｛全体｝とした。これに対し「属性」は、幾何学などの形態を操作的に用いて表現する〈形態〉[注4-17)]、建物の要素間の関係性を表現とした〈配置・配列〉、建物に用いる色、素材やその質感によって表現する〈色・素材感〉、建物におけるスケールを表現とした〈尺度〉で捉えることができた。

表4-1　実現手法

対象＼属性		形態	色・素材感	配置・配列	尺度	なし
全体	112	54	27	18	11	2
部分	137	25	46	50	5	11
部屋	49	12	11	20	2	4
部位・部材	68	13	35	30	3	7
なし	10					9

例.
「**安曇野ちひろ美術館は、切妻の連続屋根のシルエット**をもっている。敷地との関係から、この形態がいちばん建物が低く見え、風景に対する座りがよいことから決定した。」
⇨ no. m-80 安曇野ちひろ美術館

→{全体}-[形態]

例.
「**･･･外壁**は、貴重な資料・情報の保存・収集・陳列というような役割を果たす施設であることから、耐久性のある**チタン材**を採用し、･･･」
⇨ no. m-90-2 昭和館

→{部分}-[色・素材感]

注4-14)　本章における括弧の使い分けを注4-8に記してある。
注4-15)　各資料における、表4-1のカテゴリー項目の情報は別表に記してある。
注4-16)　本章における括弧の使い分けを注4-8に記してある。
注4-17)　本章における括弧の使い分けを注4-8に記してある

3.2　時間認識と実現手法の対応関係

前節では、建築家の記念性に関する思考を捉えるため、設計根拠の意味内容を検討した。ここでは、設計根拠に対して、どのような実現手法を用いたかを検討する。

まず、設計根拠の大枠の意味内容である【固有的側面】および【関連的側面】ごとに、実現手法との対応関係を検討した（図 5）。さらに図 5 では、各設計根拠を、それが記述されている設計論において、どのような意味内容の設計根拠と組み合わされるかによっても分類し、【固有的側面】および【関連的側面】ごとに、実現手法の対応関係の内訳として示している。

この図より、【固有的側面】を設計根拠とする場合は、{部分} が多くみられ、その「属性」としては特定のカテゴリーとの対応がみられなかった。このことは、建物の全体的な性質ではなく、部分的な要素の性質が、建物としての記念性に固有の側面の具現化を左右する重要な要因であるとする建築家の思考が反映されたものと考えられる。さらに、こうした傾向は、【固有的側面】の設計根拠が記述されている設計論が、【関連的側面】の設計根拠とともに論じられている場合に比較的顕著にみられることがわかる。その一方で、そうした【関連的側面】を設計根拠とする場合は、{全体} が多くみられ、その「属性」としては {形態} が半数程度みられた。こうしたことは、記念性に関連した現代的な状況へ対応する時は、特定の箇所に限定された部分的な要素ではなく、建築全体の形態に重点が置こうとする建築家の思考が反映されたものと考えられる。

さらに、こうした傾向は、【関連的側面】の設計根拠が記述される設計論が、【固有的側面】の設計根拠と組み合わされる場合に特に顕著にみられた。このことに、【固有的側面】に関する先の考察を加味すると、現代の建築家は記念館建築を設計する際に、記念対象の人柄など記念性に固有の側面のみで建築全体を具現化することが困難であるとして、部分的な要素の性質への反映にとどめ、それに加えて、記念対象の出身地における都市的な環境など記念性に関連した現代的状況への対応を建物全体の形態により具現化することを重要視する傾向があると言える。

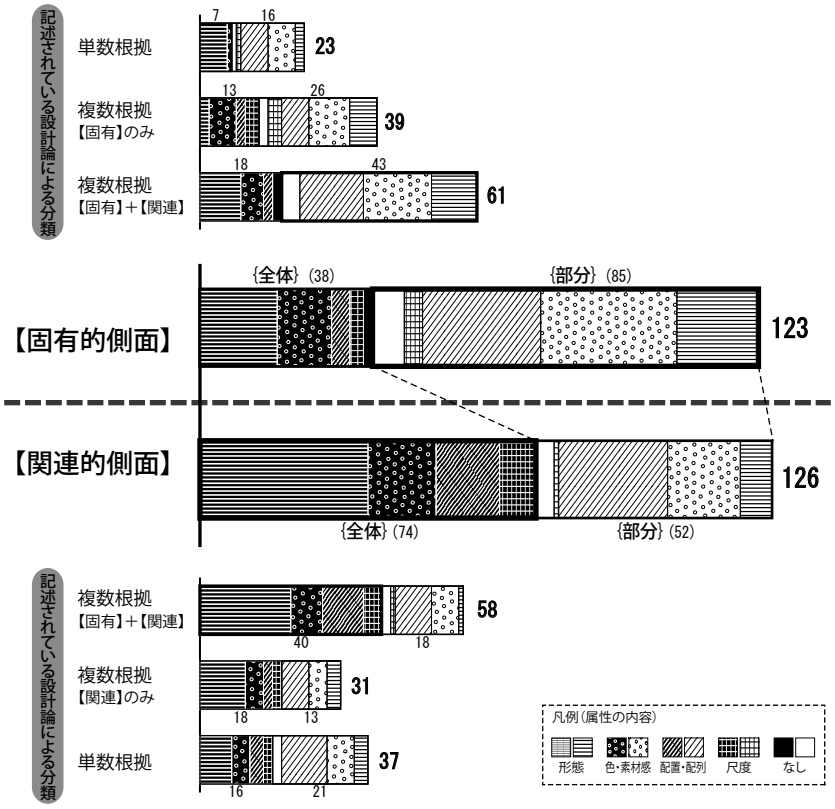


図 4-5　設計根拠の大枠と実現手法の対応関係

次に、こうしたことを前提として、設計根拠と実現手法とのより詳細な対応関係を検討するために、設計根拠の中枠の意味内容ごとに、実現手法との対応関係を示したのが図６である。これより、【固有的側面】の中枠の意味内容では、［記念対象の伝承］において｛部分｝との対応が顕著にみられた。このことは、建物の中でも身体のスケールに近い、部分的な要素の性質に着目して、来館者に記念対象をより認識しやすくしようとする建築家の考えを示していると考えられる。一方、【関連的側面】の中枠の意味内容では、［周辺環境との関連］において ｛全体｝ との対応が顕著にみられ、その「属性」として ｛形態｝ が半数程度みられた。このことは、記念館建築の建物全体の形態を決定する重要な実現手法は、記念対象と関連した周辺環境といった物的な要因との関係によって思考される傾向があることを示していると考えられる。さらに、該当資料数を少ないものの、［室内環境性能との関連］においては、大枠の意味内容の傾向とは異なり、｛部分｝ との対応がみられた。こ

のことから、記念対象と関連性のある人びとの活動や作品・資料の展示のために、室内環境の性能を向上させようとする場合には、建物を構成する要素を明示して、そこの性質によって成し遂げようとする傾向があることがわかる。

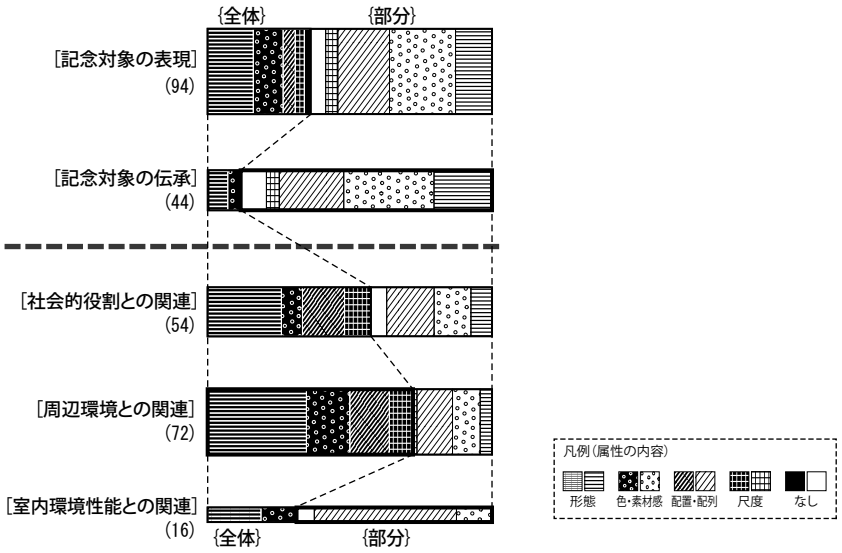


図 4-6　設計根拠の中枠と実現手法の対応関係

4節　小結

本章は、記念館建築の設計論において、記念性に関する設計根拠とその実現手法を検討することで、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識に関する思考の枠組みを位置付けるとともに、そうした時間認識をいかに具現化したかを明らかにするものであった。

2節では、まず、記念性に関する設計根拠の意味内容を検討し、人物の業績や歴史的事件を後世に伝えるといった、記念性に固有の側面に着目した内容と、周辺の都市や記念館建築を取り巻く社会的な状況への対応などのコンセプトを記念対象と関連づけて論じるといった、記念性に関連した側面に着目した内容とで捉えられることを示した。さらに前者は、記念対象を建物で表現するものと、記念対象を伝える方法を模索するものとで捉えられ、後者は、建物とその周辺の環境との関係を記念対象と関連づけて論じるもの、建物を建てることによる地域社会へ貢献を記念対象と関連づけて論じるもの、および人びとの活動や作品・資料の展示のために、室内環境性能の向上を記念対象と関連づけて論じるもので捉えらることを示した。

次に、単一の設計論において、どのような意味内容の設計根拠と組み合わさるかといった観点から、建築家の記念性に関する思考を検討した。その結果、記念性に関連した側面に関するコンセプトは、それ自体で設計根拠となり得るものの、記念性に固有の側面に関するコンセプトは、それだけを根拠として設計することを避け、記念性に関連した現代的な状況への対応に関するコンセプトとを併存させて設計することが、建築家の記念性に対する定型的な思考のひとつであることを明らかにした。このことは、記念性に関する思考に、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識を見出すことが可能であることを鑑みると、人物の業績や歴史的事実といった外面的なテーマを、時間の経過のなかで後世へ継続させる意識は希薄であり、それよりも、建築の設計を取り巻く現代的な状況への共振を根拠として重要視して設計していることを示していると考えられる。

そして4節では、以上の傾向を踏まえて、記念性に関する思考を建築にどのように反映させたかを検討した。その結果、建築家は、現代社会において記念館建築を設計する際に、記念対象の人柄など記念性に固有の側面のみで建築全体を具現化することが困難であるとして、部分的な要素の性質への反映にとどめ、それに加えて、記念対象の出身地における都市的な環境など記念性に関連した現代的状況への対応を建物全体の形態により具現化することを重要視する傾向があることがわかった。このことは、2章で見出した記念性

に関する定型的な思考を、建築に反映させる方法に関する傾向であると言える。

以上、外面的なテーマに固有の時間認識に関する思考の枠組みと、その具現化の方法の特徴的傾向の一端を明らかにした。

参考文献

4-1)　エイドリアン・フォーティー , 坂牛卓 邊見浩久 監訳：言葉と建築 , 鹿島出版会 , 2006
4-2)　ジョン・ラスキン , 杉山真紀子 訳：建築の七燈 , 鹿島出版会 , 1997
4-3)　森田慶一：記念的な表現 , 建築論 , 東海大学出版会 , 1978
4-4)　森田慶一：建築の記念性について , 建築論集 , 彰国社 1958
4-5)　谷口吉郎：建築に生きる , 日本経済新聞社 , 1954
4-6)　ニコラス・ペヴスナー , 越野武 訳：建築タイプの歴史 , 中央公論美術出版 , 2014
4-7)　川喜田二郎：発想法 , 中央公論社 , 1967
4-8)　泰永麻希，奥山信一，稲用隆一, 四ヶ所高志：現代日本の建築家による記念館建築の設計根拠と実現手法，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2，pp.713-714，2010
4-9)　原衣代果，石川恒夫：日本二十六聖人殉教記念施設における今井兼次の初期構想について - 日本二十六聖人殉教記念施設にみる今井兼次の建築思想に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集，No.651，pp.1247-1254，2010
4-10）安部晋太郎，今掛壽大，岡河貢：丹下健三の大東亜建設記念営造計画に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2，pp.227-228，2011
4-11）井上翔太，谷川大輔：公立博物館建築の設計論にみられる地域との関わりをもつ主題とその具体化 - 公共文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ，日本建築学会計画系論文集，No.718，pp.2843-2853，2015
4-12）水谷友也, 末包伸吾：現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究― 1990 年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.801-804，2009

第５章　現代日本の建築家の時間認識

1節　本章の目的と概要

1.1　目的

これまでの章では、連作、記念館建築、および増改築建築を題材にして、その設計論から、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識、外面的なテーマに固有の時間認識、および双方のテーマに関わる時間認識についての思考の枠組みを、個別的に検討してきた。それぞれの章で位置付けた、思考の枠組みを整理したものが図 5-1 である。なお、図 5-1 には、本章の構成についても示してあるが、それに関しては、次項において詳説する。

まず、それぞれの章で位置付けた思考の枠組みについて概説すると、第２章においては、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識を、増改築建築の設計論を資料にして検討することで、いかなる『環境』の変化に対して（『環境』の変化に関する意味内容）、自身の建築表現をどのように位置づけるか（『時間モデル』）といった枠組みで捉えることができた。次に、第３章においては、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識を、連作に関する設計論を資料として検討することで、共通した主題（『連作の主題』）のもと、自身の一連の作品群における建築表現をいかに展開させたか（『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』）といった枠組みで捉えることができた。そして、第４章においては、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識を、記念館建築の設計論を資料として検討することで、設計する際に記念性に関わるどのような内容を根拠としたのか（記念性に関わる設計根拠）といった枠組みで捉えることができた。

以上を踏まえて、本章では、各章で個別的に検討してきた、これらの時間認識において、共通のテーマに対する思考を、相互に比較・検討することで、建築設計における時間認識について、重要な意味の枠組みを形成しているとして位置付けた、建築家の内面的なテーマにおける時間認識と外面的なテーマにおける時間認識の特性を、より詳細に考察する。これにより、現代日本の建築家の時間認識に関する思考の特性の一端を明らかにすることを目的にしている。

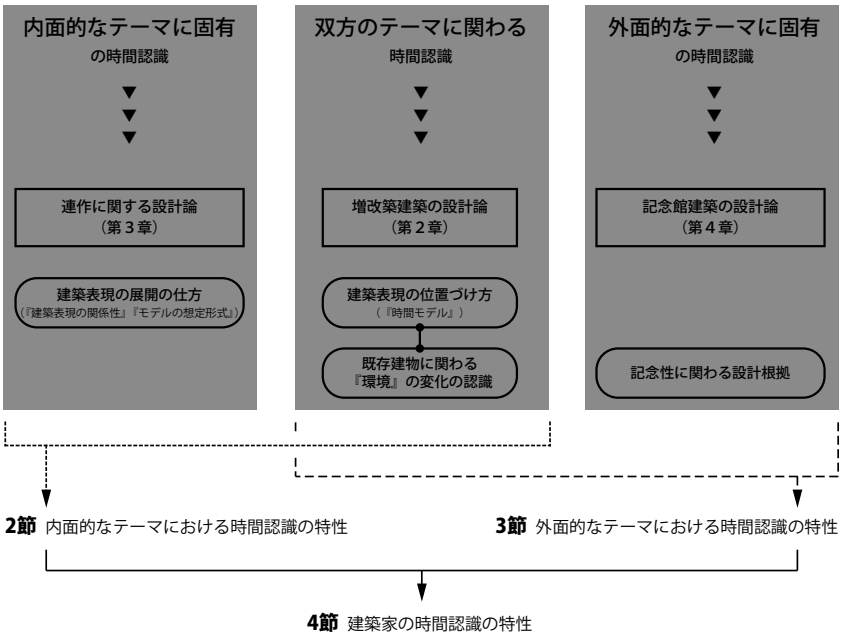


図 5-1　各章の時間認識に関する思考の枠組みと第５章の構成

1．2　概要

前項で述べた目的を明らかにするにあたって、本節に続く２節において、建築家の内面的テーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考（第３章）と外面的なテーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討し、さらに、３節において、建築家の外面的テーマにおける時間認識の特性について､それに固有の思考（第４章）と内面的なテーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討する。そして、４節において、２節と３節の検討の統合、考察し、５節で小結とする。

また、各章の時間認識に関する思考の枠組みは、原則的には、その章のテーマや題材の範疇におけるものであるが、２節および３節における各章の比較にあたっては、そうした個別的な括りを外して、複数の章に共通してみられる一般的な思考と考えられる時間認識から整理しなおすこととする。こうしたことを前提として、各章の比較・検討を行うことで、総合的な知見が得られると考えている。

なお、第２章と第３章、および第２章と第４章において、共通する作品[注5-1)]がある。２節と３節においては、各章を比較・検討することで、各章の時間認識に関する特性を明らかにすることを目的としているため、以後の検討においては、これらの共通する作品は省いている。

注 5-1)　第２章（増改築建築）と第３章（連作）に共通する作品は以下の９つである。
- 代官山集合住居計画第３期工事（槇文彦，sk7704）
- NTT 渋谷 “The B”（早川邦彦，sk8810）
- 慈恵園乳児ホーム（葉祥栄，sk8811）
- ヒルサイドテラス第６期（槇文彦，sk9206）
- 楽蹴舎（中東壽一，sk9405）
- IMAGICA 品川プロダクションセンター（大江匡，sk0105）
- LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH（青木淳，sk0404）
- TARO NASU OSAKA（青木淳，sk0703）
- REISM（田島則行，sk0802）

また、第２章（増改築建築）と第４章（記念館建築）に共通する作品は以下の６つである。
- 賀川豊彦記念松澤資料・松澤幼稚園（阿部勤，sk8303）
- 長野県信濃美術館 東山魁夷館（谷口吉生，sk9007）
- 山口蓬春記念館（大江匡，sk9112）
- 伊豆長八美術館（石山修武，sk9709）
- 鹿児島カテドラルザビエル記念聖堂（坂田誠造，sk9911）
- 京都工芸繊維大学 60 周年記念館（木村博昭，sk1005）

2節　内面的なテーマにおける時間認識の特性

2．1　内面的なテーマに固有の時間認識と外面的なテーマと関わる時間認識

前節で述べたように、ここでは、第２章と第３章で位置づけた思考の枠組みに基づいて、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識と外面的なテーマと関わる時間認識を比較・検討することで、内面的なテーマにおける固有の特性を考察する。具体的には、第３章での結果から、内面的なテーマに特化した場合の時間認識は、建築家自身の一連の作品群における建築表現の展開の仕方（『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』）といった枠組みで捉えることができ、第２章での結果から、外面的なテーマと関わる時間認識は、『環境』の変化に対する建築家の建築表現の位置づけ方（『時間モデル』）といった枠組みで捉えることができることから、これらの枠組み同士を比較・検討する。

こうした比較をするにあたり、まず、第２章と第３章に共通してみられる一般的な時間認識の枠組みを位置付けた（図 5-2）。

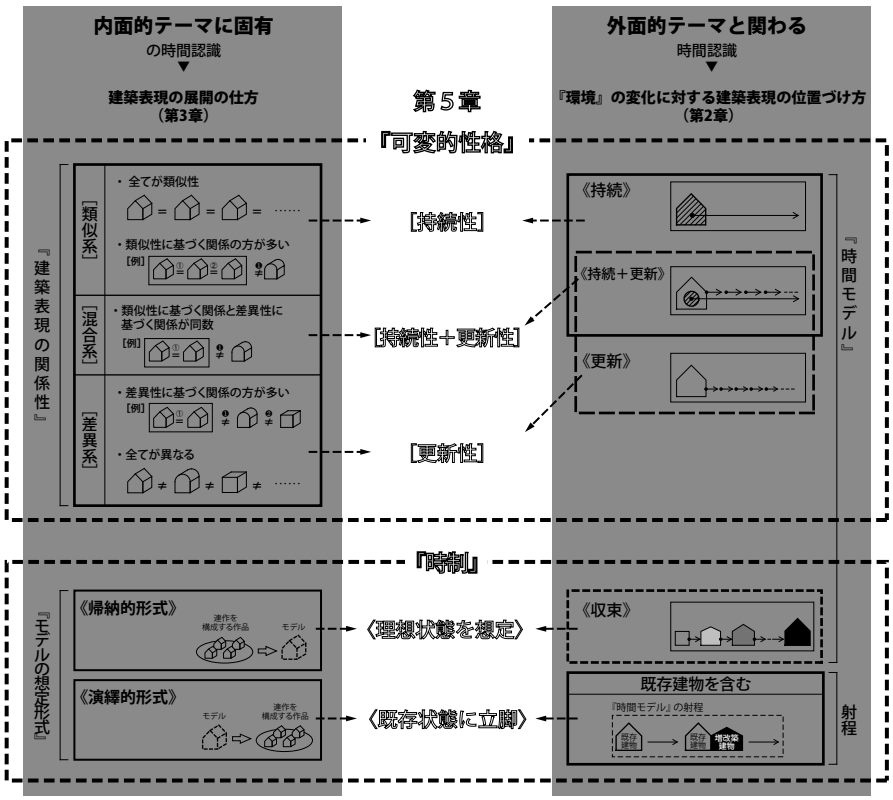


図 5-2　内面的なテーマにおける時間認識の枠組み

まず、第２章における思考の枠組みである『時間モデル』は、『環境』の変化に対する建築表現の位置づけ方のことであり、『環境』の変化に対して、建築表現を変化させずに特定の状態を維持させるモデルである《持続》と建築表現を新しい状態に変更させるモデルである《更新》とを極として形成される意味の体系、およびそれとは意味的性格の異なる、『環境』の変化に応じて、理想的な状態に近づかせるモデルである《収束》で捉えた。さらに、『時間モデル』の射程の指標として、時間の経過のなかでの既存建物の建築表現の状態を継続させるか否かについても捉えた。次に、第３章における思考の枠組みは、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』で捉えることができる。『建築表現の関係性』は、一連の作品群相互の建築表現に関する関係性のことであり、その内容は、一連の作品群において同様な建築表現を反復する［類似系］と、異なる建築表現を展開し続ける［差異系］を極として形成されるものであるといえる。これは、前述の『時間モデル』において、《持続》と《更新》を極として形成される意味の体系と共通する内容であるといえ、時間の経過のなかでの建築表現における可変的性格として位置付けることが可能なものである。また『モデルの想定形式』は、建築表現の基となるモデルの想定の仕方であり、そのなかには、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索する《帰納的形式》がみられる。これは、前述の『時間モデル』における《収束》と同様に、建築表現の理想的な状態を想定しているものとして捉えることができる。さらに、『モデルの想定形式』には、建築表現の基となるモデルをあらかじめ設定したうえで、一連の作品を創作する《演繹的形式》もみられ、これは、『時間モデル』の射程として捉えた、時間経過のなかでの既存建物の建築表現の状態を継続させる思考と同様の性質といえ、既存の状態に立脚して建築表現を考えるものとして捉えることができる。

以上のことを踏まえると、建築家の内面的なテーマにおける時間認識の枠組みは、**『可変的性格』**と**『時制』**といった２つの観点から捉えることができるといえる。以下、それぞれについて詳説する。

まず、**『可変的性格』**は、時間の経過のなかでの建築表現の変化に関わる思考であり、時間が経過しても特定の状態を変化させずに維持する性格の［**持続性**］、時間の経過とともに新たな状態へ変更する性格の［**更新性**］、およびその双方の性格をもつ［**持続性＋更新性**］で捉えている。

また、**『時制』**は、過去や未来といった時間的位置に関する思考であり、現在の建築表現の先に理想とする状態を想定するといった未来を見据えるものである**〈理想状態の想定〉**と、現在までに形成されてきた特定の状態の建築表現に立脚するといった過去に基づく思考である**〈既存状態に立脚〉**で捉えている。

以上のことを前提として、次項から各章の比較・検討を行う。

2．2 『可変的性格』の比較

まず、建築表現における『可変的性格』について、第２章と第３章を比較・検討する。内面的なテーマに固有の思考（第３章）と外面的なテーマと関わる思考（第２章）ごとに、『可変的性格』の内容の割合を示したものが図 5-3 である。

この図より、内面的なテーマに固有の場合においては、［持続性］と［更新性］といった『可変的性格』の両極との対応がみられるのに対し、外面的なテーマと関わる思考においては、［持続性］と［更新性］の双方の性格をもつ［持続性＋更新性］との対応がみられた。このことは、建築家自身の作品群に完結した建築表現は、時間の経過のなかで、特定の状態を維持しようとするもの、あるいは新たな状態へ更新しようとするもののいずれか単一の性格による明快な思考を基調としているものの、そうした思考に基づいて具現化された作品にける建築表現は、外面的なテーマと関わるなかで、不変な部分を保持しながらそれ以外の部分の更新を意図するといった両義的な性格の思考をする傾向があることを示していると考えられる。

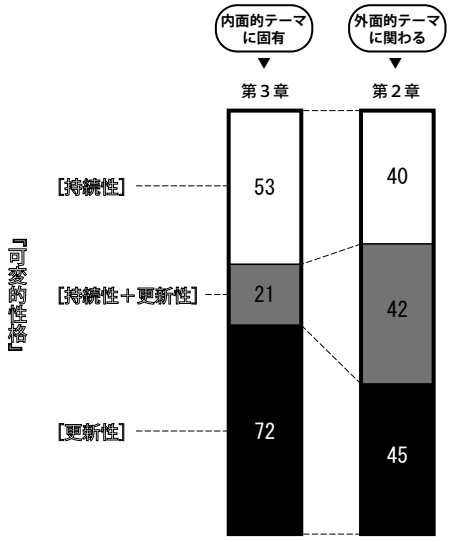


図 5-3　建築表現の『可変的性格』の比較

2.3 『時制』の比較

次に、建築家の内面的なテーマに固有の思考（第３章）と外面的なテーマと関わる思考（第２章）ごとに、**『時制』**に関する思考を検討した（図 5-4）。

まず、内面的なテーマに固有の思考では、**〈理想状態の想定〉**と**〈既存状態に立脚〉**がほぼ同数程度みられたが、外面的なテーマと関わる思考と比較すると、**〈理想状態の想定〉**との対応が顕著であることがわかる。こうした傾向に２節での結果を加味すると、自身の作品群に完結した建築表現において、その持続性、あるいは更新性のいずれか単一の性格による思考は、自身の理想的な状態の建築表現を模索するための方法論であると考えられる。

一方、外面的なテーマと関わる思考では、**〈理想状態の想定〉**と**〈既存状態に立脚〉**の双方とも比較的該当数が少ないものの、それぞれを比べると**〈理想状態の想定〉**よりも**〈既存状態に立脚〉**の該当数が倍近くみられた。こうした傾向に２節の結果を加味すると、具現化された作品における時間認識において、持続性と更新性の双方の性格を有する思考は、既存建物という外面的でもあるものと関わるなかで、確定性の高い既存の状態に立脚させようとしていると考えられる。

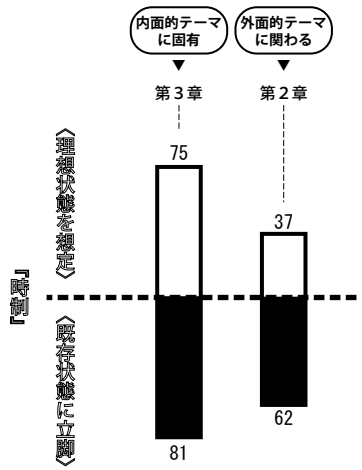


図 5-4 『時制』の比較

3節　外面的なテーマにおける時間認識の特性

3．1　外面的なテーマに固有の時間認識と内面的なテーマと関わる時間認識

前節と同様に、本節においては、第２章と第４章で位置付けた思考の枠組みに基づいて、外面的なテーマに固有の時間認識と内面的なテーマと関わる時間認識を比較・検討することで、外面的なテーマにおける時間認識の特性を考察する。具体的には、第４章での結果から、外面的なテーマに固有の時間認識は、記念性に関わる設計根拠をいかに考えるかといった枠組みで捉えられ、第２章での結果から、内面的なテーマと関わる時間認識は、既存建物に関わる『環境』の変化をいかに認識するかといった枠組みで捉えられることから、これらの枠組み同士を比較・検討する。

こうした比較をするにあたり、まず、第２章と第４章に共通してみられる一般的な時間認識の枠組みを位置付けた（図 5-5）。

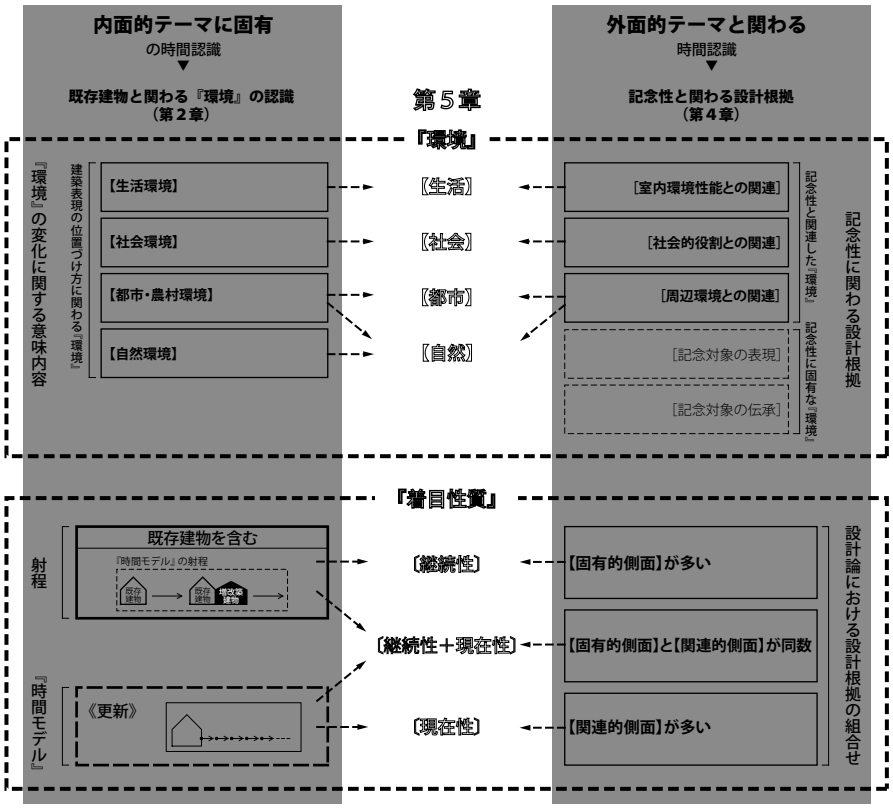


図 5-5　外面的なテーマにおける時間認識の枠組み

まず、第２章における思考の枠組みである『環境』の変化に関する意味内容は、建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象に、その変化を論じる【生活】、建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象に、その変化を論じる【社会】、周辺の建物や田畑などの人工物群に関する事柄を対象に、その変化について論じる【都市・農村】、および四季の気候や植物の成長などの自然界の現象を対象に、その変化について論じる【自然】といった４つで捉えた。次に、第４章における思考の枠組みをである記念性に関わる設計根拠の意味内容は、人物の業績や歴史的事件を後世に伝えるといった記念性に固有の側面に着目した内容である【固有的側面】と、記念対象と関連した都市の環境への対応など記念性に関連した側面に着目した内容である【関連的側面】で捉えることができた。このうち、【固有的側面】は第４章に固有の内容であるが、【関連的側面】においては、その内訳の意味内容において、例えば、記念対象と関連性のある建物周辺の都市や自然などの環境と関係付けようとする［周辺環境との関連］が、第２章の【都市・農村】【自然】と同様の内容であるといったように、第２章における『環境』の変化に関する意味内容と共通の内容を見出すことができる。

また、第４章における思考の枠組みである記念性に関する設計根拠においては、設計論を単位として、その組合せも検討している。設計論における設計根拠の組合せは、数的な偏りも加味して、【固有的側面】が多いもの、【関連的側面】が多いもの、および双方が同数のものといった３つで捉え、第４章でも述べたように、【固有的側面】が多いものは、記念対象を後世に伝えるといった『環境』の継続性に着目した設計論であり、【関連的側面】が多いものは、記念対象と関連した現代的な都市環境などといった『環境』の現在性に着目した設計論であり、さらに【固有的側面】と【関連的側面】が同数のものは、『環境』の継続性と現在性の双方に着目した設計論であると位置づけることができる。これに対して、第２章において、既存建物を建築家にとっての外面的な対象として捉えた際には、『時間モデル』の射程の指標である、既存建物の状態を継続させる思考は、外面的なテーマの継続性に着目したものであると位置づけられ、さらに『時間モデル』において、『環境』の変化に合わせて新たな状態へ変更させる《更新》は、その時々の『環境』の現在的状況に着目したものであると位置づけることができる。

以上のことをふまえると、外面的なテーマにおける時間認識の枠組みは、時間の経過のなかで認識される**『環境』**の内容と、そうした**『環境』**のどのような性質に着目するか（以下、**『着目性質』**）といった２つの観点から捉えることができるといえる。以下、それぞれについて詳説する。

まず、**『環境』**は建築の設計を取り巻く環境のことであり、時間の経過のなかで認識さ

れるものとしては、〖**生活**〗〖**社会**〗〖**都市**〗〖**自然**〗の４つで捉えることができた。〖**生活**〗は、建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象に時間認識を論じるものであり、〖**社会**〗は、建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象に時間認識を論じるものであり、〖**都市**〗は、周辺の建物やインフラストラクチャーなどの人工物群に関する事柄を対象に時間認識を論じるものであり、〖**自然**〗は、植物や気候などの自然やその現象を対象に時間認識を論じるものである。

また、『**着目性質**』は、上述の『**環境**』に対して、どのような性質に着目するかに関する思考であり、『**環境**』において、時間の経過のなかで継続してきたものに着目する［**継続性**］、現在的な状況に着目する［**現在性**］、およびその双方の性格をもつ［**継続性＋現在性**］で捉えている。

以上のことを前提として、次項から各章の比較・検討を行う。

3．2 『環境』の比較

まず、時間の経過のなかで認識される『環境』の内容について、第２章と第４章を比較・検討する。建築家の外面的なテーマに固有の思考と内面的なテーマに関わる思考において、時間の経過のなかで認識される『環境』の内容の割合を示したものが図 5-6 である。

この図より、外面的なテーマに固有の思考と内面的なテーマと関わる思考の双方において、〖社会〗との対応がみられた。このことは、時間の経過のなかで認識される外面的な環境としては、建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象が基調となることを示していると考えられる。さらに、内面的なテーマと関わる思考においては〖生活〗と、外面的なテーマに固有の思考においては〖都市〗と、それぞれ対応が比較的みられた。このことは、時間の経過のなかで認識される、既存建物と関わる外面的な環境として、建物内での活動や機能などの使用者に関わるプラグマティクな内容が特徴であるのに対し、記念対象と関わる外面的な環境として、周辺の建物やインフラストラクチャーなどの人工的なものに関する内容が特徴である傾向があることを示すと考えられる。

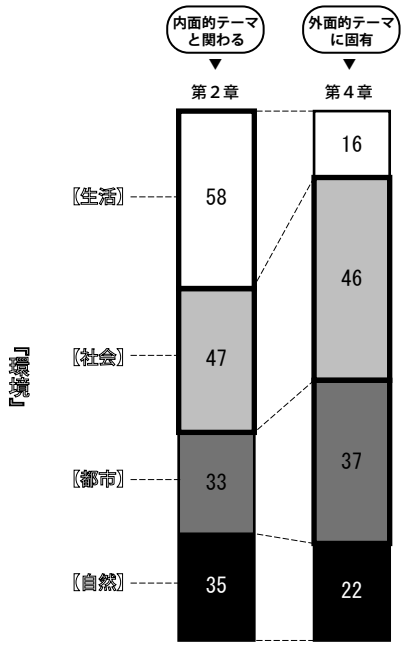


図 5-6 『環境』の比較

3.3 『着目性質』の比較

さらに、第2章および第4章について、『環境』に対する『着目性質』を検討したものが図 5-7 である。

この図より、建築家の内面的なテーマと関わる思考においては〔継続性〕と、外面的なテーマに固有の思考においては〔現在性〕との対応が顕著にみられた。こうした傾向に、2節での結果を加味すると、建築家にとって外面的なファクターである記念対象との関係において認識される『環境』においては、社会や都市における現在性に着目し、建物に今日的な新鮮さを刻み込もうとする一方で、建築家にとって内面的なファクターでもある既存建物との関係において認識される『環境』においては、生活や社会における継続性に着目し、建物に長いスパンの時間を担わせようとするといった、相反する思考をする傾向があると考えられる。

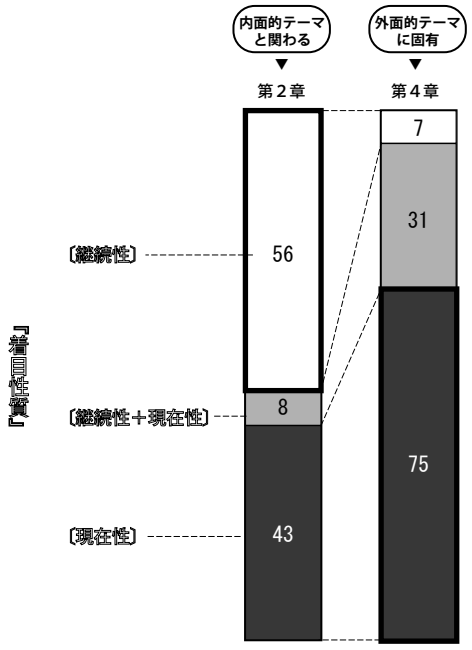


図 5-7 『着目性質』の比較

４節　建築家の時間認識の特性

本節では、２節と３節で位置付けた内容を総合化し、建築家の時間認識の特性を考察する。

まず、前節までで位置付けてきた、建築家の内面的なテーマにおける時間認識と外面的なテーマにおける時間認識にそれぞれ固有の特性をまとめた（図 5-8）。これより、内面的なテーマに固有の時間認識の特徴的な傾向として、建築表現の『可変的性格』においては［持続性］と［更新性］との対応、建築表現における『時制』においては〈理想状態の想定〉との対応が挙げられ、また、外面的なテーマに固有の時間認識の特徴的な傾向として、時間のなかで認識される『環境』においては〖社会〗と〖都市〗との対応、『環境』に対する『着目性質』において〔現在性〕との対応が挙げられる。

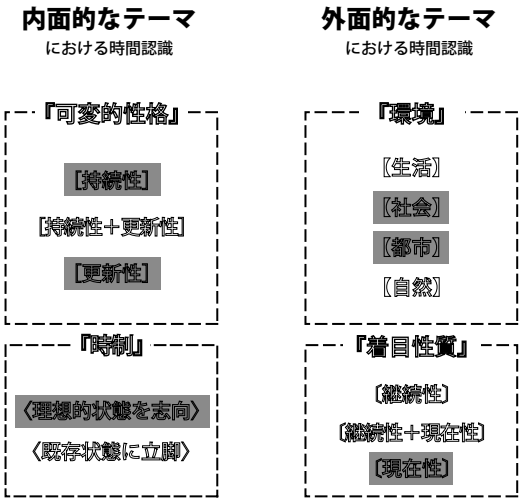


図 5-8　時間認識の固有的特性

このことから、建築家の時間認識の基本的な特性として、社会や都市のその時々の状況といった今日的な新鮮さとの関連のなかで、自身の建築表現において更新性あるいは持続性のいずれかの思考によって理想的な状態を模索しているといえる（図 5-9）。

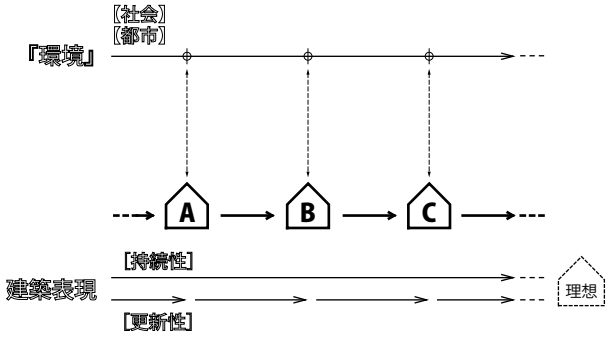


図 5-9　時間認識の固有的特性の模式図

次に、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマの双方に関わる時間認識の特性を整理した（図 5-10）。これより、内面的なテーマにおける時間認識の特徴的な傾向として、建築表現の『可変的性格』においては［持続性＋更新性］との対応、建築表現における『時制』においては〈既存状態に立脚〉との対応が挙げられ、また、外面的なテーマにおける時間認識の特徴的な傾向として、時間のなかで認識する『環境』においては〖生活〗と〖社会〗との対応、『環境』に対する『着目性質』においては〔継続性〕との対応が挙げられる。

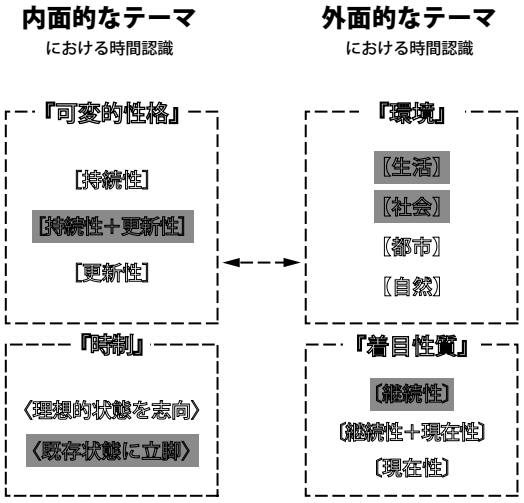


図 5-10　時間認識の両義的特性

このことから、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマが関わる位相の時間認識の特性としては、生活や社会と対応した建築表現を、部分的に引き継ぎながらもそれ以外を更新させるといった、建築設計を取り巻く環境との継続的な関係を構築する傾向があるといえる（図 5-11）。

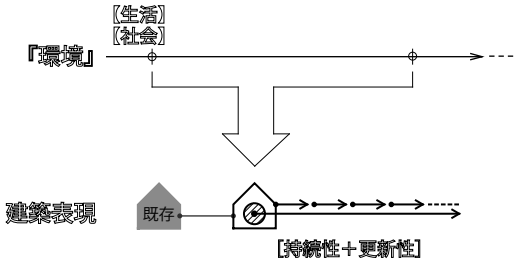


図 5-11　時間認識の両義的特性の模式図

5節　小結

本章は、 第２章から第４章まで個別的に検討してきた時間認識において、第２章と第３章、および第２章と第４章において共通したテーマにおける思考が見られることから、それらを相互に比較・検討することで、建築設計における時間認識について、重要な意味の枠組みを形成しているとして位置付けた、建築家の内面的なテーマに対するものと外面的なテーマに対するものの特性を、より詳細に考察するものであった。

このような目的のもと、２節において、建築家の内面的なテーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考と（第３章）と外面的テーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討した。その結果、内面的なテーマにおける時間認識が、時間の経過のなかでの建築表現の可変的な性格、および建築表現の時制に関する思考で位置付けられることを指摘した上で、建築家自身の作品群に完結した建築表現は、時間の経過のなかで、特定の状態を維持しようとするもの、あるいは新たな状態へ更新しようとするもののいずれか単一の性格による明快な思考を基調としているものの、そうした思考に基づいて具現化された作品にける建築表現は、外面的なテーマと関わるなかで、不変な部分を保持しながらそれ以外の部分の更新を意図するといった両義的な性格の思考をする傾向があることを示していると考えられる。さらに、前者は、理想的な状態を求めての思考であること、後者は、既存の状態に立脚した思考であることを明らかにした。

３節では、建築家の外面的なテーマに固有の時間認識の特性について、それに固有の思考（第４章）と内面的テーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討した。その結果、外面的なテーマにおける時間認識が、時間の経過のなかで認識される、建築設計を取り巻く４つの環境で捉えることができ、そうした環境の継続性あるいは現在性といった性質に着目しているといった枠組みで位置付けられることを指摘した上で、建築家にとって外面的なファクターである記念対象との関係において認識される**環境**においては、社会や都市における現在性に着目し、建物に今日的な新鮮さを刻み込もうとする一方で、建築家にとって内面的なファクターでもある既存建物との関係において認識される**環境**においては、生活や社会における継続性に着目し、建物に長いスパンの時間を担わせようとするといった、相反する思考をする傾向があることを明らかにした。

そして４節においては、２節と３節で得た結果を総合化して、考察した。その結果、建

築家の時間認識の基本的な特性として、社会や都市のその時々の状況といった今日的な新鮮さとの関連のなかで、自身の建築表現において更新性あるいは持続性のいずれかの思考によって理想的な状態を模索しているといえることと、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマが関わる位相の時間認識の特性としては、生活や社会と対応した建築表現を、部分的に引き継ぎながらもそれ以外を更新させるといった、建築設計を取り巻く環境との継続的な関係を構築する傾向があるといえることを明らかにした。

第6章　結論

本章では、第２章から第５章までに得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括する。それをを以下に述べる。

第１章「序論」は、研究の目的と意義、研究の資料と方法、および論文の構成と概要を位置付けるものである。本章ではまず、本論文が設計思想を構想する上で基盤となる重要な概念の時間認識を検討するものであり、さらに、そうした建築設計における時間認識が、建築家自身の設計主題や表現方法などの内面的なテーマに固有のもの、社会や都市などの建築家の外面的なテーマに固有のもの、および双方のテーマに関わるものの３つに大別して捉えられ、それらは、連作、記念館建築、増改築建築といった題材で見出すことが可能であることを指摘した上で、現代日本の建築家による上記３つの題材の設計論を資料としてそれぞれの時間認識の内容と特性を捉えるとともに、それらを相互に比較・検討することで、現代日本の建築家の時間認識に関する思考の枠組みの一端を明らかにすることを本論文の目的として位置付けた。

第２章「増改築建築の設計論にみられる時間認識」では、建築家の内面的なテーマおよび外面的なテーマの双方に関わる時間認識が、建築の設計を取り巻く環境（以下、『環境』）の変化に対していかにデザインを位置づけるかという『時間モデル』で捉えられることを明示した上で、それらと実現手法の関係を検討した。

まず、『環境』の変化に関する意味内容が、以下の４つで捉えられることを示した。

【生活環境】 … 建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象に、その変化を論じるもの

【社会環境】 … 建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象に、その変化を論じるもの

【都市・農村環境】 … 周辺の建物や田畑などの人工物群に関する事柄を対象に、その変化について論じるもの

【自然環境】 … 四季の気候や植物の成長などの自然界の現象を対象に、その変化について論じるもの

次に『時間モデル』の内容は、以下に示すように、『環境』の変化に対して特定の状態を維持させる《持続》と新しい状態に変更させる《更新》という対立する性格のモデルで位置付けるものと、これらとは性格が異なり、『環境』の変化にともなって理想的な状態に近づかせる《収束》というモデルで位置付けるもので捉えることができた。

《持続》 … 『環境』の変化に対して、建築を変化させず、特定の状態を維持させるモデル

《持続＋更新》 … 『環境』の変化に対して不変な部分を保持しながら、それ以外の部分の更新を意図した

《更新》 … 『環境』の変化に合わせて建築を新しい状態に変更させるモデル

《収束》 … 『環境』の変化に応じて、理想的な状態に近づかせるモデル

さらに、『時間モデル』に既存建物を含めて位置付けるか否かによって、既存建物の状態を継続させるか否かも判断し、それを『時間モデル』の射程の指標として捉えた。

そしてこれら『環境』の変化と『時間モデル』との対応から、都市や農村における環境の変化に関しては、多様なモデルにより建築表現を位置付ける傾向があること、施設の使用者に関わる事柄の変化に建築表現を追従させるプラグマティクな思考、および制度や慣習などの社会的な事象の変化から距離をとって建築表現をする批評的な思考といった、相反する位置づけ方の傾向があること、気候の変化や植物の成長などの自然現象に対しては、時間の経過とともに更新させるモデルと理想的な状態に収束させるモデルといった、性格の異なる連動のさせ方で位置づける傾向があることを明らかにした。

さらに、相反する特徴として捉えた、施設の使用者に関わる事柄の変化に追従させる時間認識、および制度や慣習などの社会的な事象の変化から距離をとる時間認識と、実現手法との対応から、建築の空間によって、制度や文化の動向を相対化して批評しつつも、実体を伴った建築としての側面では、建物の使用などの実用的な状況に対応させるといった、時間認識の二面性を明らかにした。

第３章「連作に関する設計論にみられる時間認識」では、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識が、一連の作品群に共通した主題（『連作の主題』）のもと、作品相互の建築表現をどのように関係づけるかという『建築表現の関係性』と、建築表現の基となるモデルをどのように想定するかという『モデルの想定形式』で捉えられることを明示した上で、これらの関係を検討した。

まず、『連作の主題』の意味内容が、以下の５つで捉えられることを示した。

【形態】 … 建築の実体的側面にあらわれるかたちに関する事柄を主題として論じたもの

【空間】 … 床や壁などの建築の構成要素で境界づけられた三次元的な広がりをもつヴォリュームに関する事柄を主題として論じるもの

【構成】 … 建築的要素の配置・配列関係に関する事柄を主題として論じるもの

【構法・技術】 … 建物の造り方やそれに関わる技術に関する事柄を主題として論じるもの

【周辺環境との関係】 … 敷地周辺の都市や自然などの環境との関係を主題として論じるもの

次に、連作を構成する作品群相互の建築表現をどのように関係づけたかといった『建築表現の関係性』の内容を、以下の３つで捉えた。

［類似系］ … 全ての作品間における建築表現において、類似性に基づいた関係の多いもの

［混合系］ … 全ての作品間における建築表現において、類似性および差異性に基づいた関係が同数のもの

［差異系］ … 全ての作品間における建築表現において、差異性に基づいた関係の多いもの

さらに、建築表現の基となるモデルをどのように想定したかといった『モデルの想定形式』の内容を、以下の２つで捉えた。

《演繹的形式》 … あらかじめ建築表現の基となるモデルを設定した上で、一連の作品を創作するもの

《機能的形式》 … 建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索。

そして、『連作の主題』ごとに、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との対応を検討することで、実体的側面にあらわれるかたちを題材とした建築表現については、建築表現のバリエーションの創出が、建築表現の基となるモデルの想定の仕方によらない一貫したものであり、非実体的な性格の強い空間を題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方に応じて、一連の作品群における建築表現の関係性を選択する柔軟な思考が基調となるといった、相反する特徴の傾向があること、建築的要素の配置・配列関係を題材とした建築表現については、汎用性のあるモデルをあらかじめ設定して、それに基づいて多様な建築表現を創出しようとする傾向があること、建物の造り方やそれに関わる技術を題材とした建築表現については、作品の創作を試験的な段階とし、ひとつの建築表現の可能性を追求する方法と様々な建築表現を試みる方法により、新たな建築技術や生産方法の実現を目指そうとする傾向があることを明らかにした。

第４章「記念館建築の設計論にみられる時間認識」では、建築家の外面的なテーマに固有な時間認識が、記念性に関わる設計根拠から捉えられることを明示した上で、それと実現手法との関係を検討した。

まず、記念性に関わる設計根拠は、人物の業績や歴史的事件を後世に伝えるといった記念性に固有の側面に着目した内容である【固有的側面】と、記念対象と関連した都市環境

への対応など記念性に関連した側面に着目した内容である【関連的側面】で大枠捉えることができ、前者は以下の２つの内容で、後者は以下の３つの内容で捉えることができた。

【固有的側面】

［記念対象の表現］ … 記念対象の人柄や作風などを建物で表現しようとするもの

［記念対象の伝承］ … 記念対象の作品や業績などを伝える方法を追求しようとするもの

【関連的側面】

［周辺環境との関連］ … 記念対象と関連性のある建物周辺の都市や自然などの環境と関係付けようとするもの

［社会的役割との関連］ … 建物を建てることで、記念対象と関連性のある地域社会への貢献を図ろうとするもの

［室内環境性能との関連］ … 記念対象と関連性のある人びとの活動や作品・資料の展示のために、室内環境の性能を向上させようとする

次に、単一の設計論における設計根拠の組合せの検討から、記念性に関連した側面に関するコンセプトは、それ自体で設計根拠となり得るものの、記念性に固有の側面に関するコンセプトは、それだけを根拠として設計することを避け、記念性に関連した側面に関するコンセプトと併存させて設計するといった思考が、記念性に対する思考の定型のひとつであることを明らかにした。

さらに、設計根拠と実現手法との対応から、現代の建築家は、記念館建築を設計する際に、記念対象の人柄など記念性に固有の側面のみで建築全体を具現化することが困難であるとして、部分的な要素の性質への反映にとどめ、それに加えて、記念対象の出身地における都市的な環境など記念性に関連した現代的状況への対応を建物全体の形態により具現化することを重要視する傾向があることを明らかにした。

第５章「現代日本の建築家の時間認識」は、第２章から第４章の検討で得られた知見をもとに、建築家の内面的なテーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考（第３章）と外面的テーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討し、さらに外面的なテーマにおける時間認識の特性について、それに固有の思考（第４章）と内面的なテーマと関わる思考（第２章）を比較することで検討した上で、それらを総合的に考察した。

まず、内面的なテーマにおける時間認識に関する思考の枠組みは、時間の経過のなかでの建築表現の変化に関わる思考である**『可変的性格』**、および建築表現における過去や未来といった時間的位置に関する思考である**『時制』**で捉えることができることを位置付けた上で、建築家自身の作品群に完結した建築表現は、時間の経過のなかで、特定の状態を維持しようとするもの、あるいは新たな状態へ更新しようとするもののいずれか単一の性格による明快な思考を基調としているものの、そうした思考に基づいて具現化された作品にける建築表現は、外面的なテーマと関わるなかで、不変な部分を保持しながらそれ以外の部分の更新を意図するといった両義的な性格の思考をする傾向があることを示していると考えられる。さらに、前者は、理想的な状態を求めての思考であること、後者は、既存の状態に立脚した思考であることを明らかにした。

次に、外面的なテーマにおける時間認識に関する思考の枠組みは、時間の経過のなかで認識される建築設計を取り巻く環境（**『環境』**）が以下の 4 つで捉えられることができ、

〖生活〗 … 建物内での活動や機能などの使用者に関わる事柄を対象に時間認識を論じるもの

〖社会〗 … 建築に関わる法制度、文化、慣習などの社会的な事象を対象に時間認識を論じるもの

〖都市〗 … 周辺の建物やインフラストラクチャーなどの人工物群に関する事柄を対象に時間認識を論じるもの

〖自然〗 … 植物や気候などの自然要素および自然現象を対象に時間認識を論じるもの

そうした**『環境』**の継続性あるいは現在性といった性質に着目しているといった形式で捉えられることを位置付けた上で、建築家にとって外面的なファクターである記念対象との関係において認識される環境においては、社会や都市における現在性に着目し、建物に今日的な新鮮さを刻み込もうとする一方で、建築家にとって内面的なファクターでもある既存建物との関係において認識される環境においては､生活や社会における継続性に着目し、建物に長いスパンの時間を担わせようとするといった、相反する思考をする傾向があるとを明らかにした。

そして、これらを総合化することで、建築家の時間認識の基本的な特性として、社会や都市のその時々の状況といった今日的な新鮮さとの関連のなかで、自身の建築表現において更新性あるいは持続性のいずれかの思考によって理想的な状態を模索しているといえることと、建築家の内面的なテーマと外面的なテーマが関わる位相の時間認識の特性としては、生活や社会と対応した建築表現を、部分的に引き継ぎながらもそれ以外を更新させるといった、建築設計を取り巻く環境との継続的な関係を構築する傾向があるといえることを明らかにした。

以上に述べた結論は、増改築建築、連作、および記念館建築を題材として、その設計論から、建築家の内面的なテーマに固有の時間認識、外面的なテーマに固有の時間認識、および双方のテーマが関わる時間認識を位置づけ、それらを相互に比較・検討することで、現代日本の建築家の時間認識に関する思考の枠組みとその特性を明らかにしたものであり、ここで得られた知見は、今後の建築デザインを考える上で重要であるといえる、時間認識に基づいた建築設計の方法に、新たな視座を示すものといえる。

関連論文目録

本論に関係する審査論文

・現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる時間認識
大嶽陽徳 , 奥山信一 , 日本建築学会計画系論文集 No.709 pp.591-599, 2015 年 3 月
……（第 2 章に対応）

・現代日本の建築家による連作に関する設計論にみられる建築表現を展開させる思考
大嶽陽徳 , 安藤一将 , 奥山信一 ,　（審査中）
……（第 3 章に対応）

・現代日本の建築家による記念館建築の設計論にみられる設計根拠
大嶽陽徳 , 泰永麻希 , 奥山信一　（投稿準備中）
……（第 4 章に対応）

本論に関係する口頭発表論文

・現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる〈時間〉の認識
（大嶽陽徳，奥山信一，塩崎太伸，稲用隆一, 四ヶ所高志）
日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.715-716，2010

その他の口頭発表論文

・40 編（日本建築学会学術講演梗概集 F-2（共著））

1. 床・壁・天井の境界面からみた住宅の主室空間の断面的性格
（大嶽陽徳，奥山信一，塩崎太伸）p.785-786，2007 年

2. 建築家の設計論における光に関する認識 - 現代日本の建築家の光を主題とした設計論に関する研究 (1)
（大嶽陽徳，渡邉啓太，塩崎太伸，奥山信一）p.71-72，2011 年

3. 建築家の光に関する思考モデルと実現化手法 - 現代日本の建築家の光を主題とした設計論に関する研究 (2)
（渡邉啓太，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.73-74，2011 年

4. 現代日本の建築家の言説にみられる透明性という言葉に投影された建築的思考
（小滝健司，塩崎太伸，大嶽陽徳，奥山信一）p.75-76，2011 年

5. 大空間建築の覆いに対する建築家のアナロジー表現
（中村 義人，奥山信一，塩崎太伸，大嶽 陽徳）p.91-92，2011 年

6. 現代日本の建築家によるインスタレーションの創作意義
（村部塁，奥山信一，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸）p.601-602，2012 年

7. 現代日本の建築家の言説にみられる「白」という言葉に投影された建築的思考
（大塚優，奥山信一，塩崎太伸，四ヶ所高志，大嶽陽徳）p.603-604，2012 年

8. 仮想空間を題材とした SF 映画にみる情報化社会における身体
（鈴木淳平，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.611-612，2012 年

9. 芸術家が参画した建築の設計論にみる協働根拠 - 建築家と芸術家の協働性に関する研究（1）
（四ヶ所高志，金子敦史，大嶽陽徳，奥山信一）p.615-616，2012 年

10. 芸術家との協働根拠と芸術作品の配置形式の関係 - 建築家と芸術家の協働性に関する研究（2）
（金子敦史，四ヶ所高志，大嶽陽徳，奥山信一）p.617-618，2012 年

11. 生命体を題材とした設計論にみる参照の内容 - 建築家の設計論における類推的思考に関する研究（1）
（大嶽陽徳，大久津竜輝，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.619-620，2012 年

12. 生命体を参照した設計論にみる建築的操作の形式 - 建築家の設計論における類推的思考に関する研究(2)
（大久津竜輝，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.621-622，2012 年

13. 大空間建築の覆いの接地に関する建築家の設計意図 - 現代日本の建築家による大空間建築の設計論に関する研究(1)
（四ヶ所高志，中村義人，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.99-100，2013 年

14. 大空間建築の覆いの接地形式と設計意図 - 現代日本の建築家による大空間建築の設計論に関する研究（2）
（中村義人，四ヶ所高志，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.101-102，2013 年

15. 海外建築作品の設計論における現代日本の建築家の設計根拠 - グローバル社会における建築家の設計姿勢に関する研究（1）
（大嶽陽徳，丸子勇人，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.107-108，2013 年

16. 海外建築作品の設計根拠における参照の態度 - グローバル社会における建築家の設計姿勢に関する研究（2）
（丸子勇人，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.109-110，2013 年

17. 博物館建築における建築家の言説にみる連鎖する空間の密度
（吉池葉子，奥山信一，塩崎太伸，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平）p.111-112，2013 年

18. 近未来 SF 映画のテクノロジー表現からみた生活環境のイメージ
（橋本かをり，奥山信一，四ヶ所高志，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平）p.125-126，2013 年

19. 建築専門誌における東日本大震災関連の特集内容 - 建築家の活動の社会的意義に関する研究（1）
（塩崎太伸，田中浩介，大嶽陽徳，四ヶ所高志，奥山信一）p.131-132，2013 年

20. 東日本大震災関連の言説にみる建築家の社会的役割 - 建築家の活動の社会的意義に関する研究（2）
（田中浩介，塩崎太伸，大嶽陽徳，四ヶ所高志，奥山信一）p.133-134，2013 年

21. 東京の放射状鉄道路線の車窓景観における都市の境界
（林恒視，奥山信一，塩崎太伸，四ヶ所高志，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平）p.313-314，2014 年

22. 港町を舞台とした流行歌の歌詞における情景描写 - 流行歌にみる都市イメージ形成に関する研究（3）
（香月歩，前田咲，鈴木淳平，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.321-322，2014 年

23.港町を舞台とした流行歌の歌詞における都市の空間イメージ - 流行歌にみる都市イメージ形成に関する研究(4)
（前田咲，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.323-324，2014 年

24. 観光パンフレットにみる路面電車のある都市のイメージ - 場所のイメージの価値形成に関する研究（5）
（新宮光善，奥山信一，塩崎太伸，四ヶ所高志，大嶽陽徳，鈴木淳平，香月歩）p.325-326，2014 年

25. 日本を舞台としたアニメーションにおける聖地の画像の内容と構図 - 現代の風景像の枠組みに関する研究（1）
（塩崎太伸，森瞳美，鈴木淳平，香月歩，大嶽陽徳，四ヶ所高志，奥山信一）p.331-332，2014 年

26. 日本を舞台としたアニメーションにおける聖地の画像にみる風景像 - 現代の風景像の枠組みに関する研究（2）
（森瞳美，塩崎太伸，鈴木淳平，香月歩，大嶽陽徳，四ヶ所高志，奥山信一）p.333-334，2014 年

27. 世界都市の観光プロモーションビデオにおける描写内容と描写形式
- 映像表現にみる都市のイメージ形成の枠組みに関する研究（1）
（四ヶ所高志，岩崎桃子，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.335-336，2014 年

28. 世界都市の観光プロモーションビデオの描写表現にみる都市のイメージ
- 映像表現にみる都市のイメージ形成の枠組みに関する研究（2）
（岩崎桃子，四ヶ所高志，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.337-338，2014 年

29. 現代日本の住宅作品の立面における壁面の形状と開口の配置 - 建築と大地の接続関係に関する研究（1）
（大嶽陽徳，遠藤康一，阿部沙佳，塩崎太伸，奥山信一）p.417-418，2014 年

30. 立面の構成および前面外構との連続関係からみる建築の接地性 - 建築と大地の接続関係に関する研究(2)
（遠藤康一，大嶽陽徳，阿部沙佳，塩崎太伸，奥山信一）p.419-420，2014 年

31. 篠原一男の図面資料の概要とスケッチの特徴 - 篠原一男の図面資料に関する研究（1）
（大嶽陽徳，藤本章子，香月歩，鈴木淳平，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.553-554，2015 年

32. 篠原一男のスケッチからみた構想段階におけるかたちの創出 - 篠原一男の図面資料に関する研究（2）
（藤本章子，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.555-556，2015 年

33. ウェブサイトの言語表現にみる海外の地名を借用する街のイメージ - 場所のイメージの価値形成に関する研究(6)
（宮村萌子，奥山信一，塩崎太伸，四ヶ所高志，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平）p.573-574，2015 年

34. シェアハウスの不動産情報サイトに掲載された住まいに関する言語表現
（香月歩，南澤智規，鈴木淳平，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.579-578，2015 年

35. シェアハウスに投影された価値の内容にみる現代社会における住まいのイメージ
（南澤智規，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.581-582，2015 年

36. 円形平面を主調とした現代日本建築作品の設計根拠
（新居壮真，奥山信一，塩崎太伸，四ヶ所高志，大嶽陽徳，香月歩，鈴木淳平）p.593-594，2015 年

37. 歴史的タームを題材とする記事における建築家の着目根拠
- 1970 年代以降の建築専門誌における建築の歴史に関する研究（1）
（四ヶ所高志，北澤悠樹，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.601-602，2015 年

38. 現代建築家の言説にみる建築の歴史に関する認識
- 1970 年代以降の建築専門誌における建築の歴史に関する研究（2）
（北澤悠樹，四ヶ所高志，香月歩，鈴木淳平，大嶽陽徳，塩崎太伸，奥山信一）p.603-604，2015 年

39. 建築専門誌における記事内容とその構成 - 戦後日本の建築ジャーナリズムにおける記事に関する研究（1）
（鈴木淳平，橋本かをり，香月歩，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.615-616，2015 年

40. 建築専門誌における記事内容とその構成の推移 - 戦後日本の建築ジャーナリズムにおける記事に関する研究（2）
（橋本かをり，鈴木淳平，香月歩，大嶽陽徳，四ヶ所高志，塩崎太伸，奥山信一）p.617-618，2015 年

付録　資料編

資料編： 第２章　増改築建築の設計論にみられる時間認識

注）［　］内は意味を補うために筆者が加筆したものである

付表 2　増改築建築の設計論の資料リスト

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	主用途	用途変更	歴史的建造物	『環境』				『時間モデル』				実現手法		
							生活環境	社会環境	都市・農村	自然環境	持続	持続＋更新	更新	収束	部位・部材	空間	なし
1	5109	森博士の家	清家清	住			a						ヘ		な		
2	5304	S氏邸	槇一郎	住						n	イ				色		
3	5312	大文字家の客室	富家宏泰	宿			a						ト		形		
4	5405	十合邸	脇かほる	住			a							リ	な		
5	6102	桃李境 離れ客室3題	白浜謙一	宿				e			ロ				色		
6	6202	新橋演舞場新館ホール	吉田五十八	文		●		e			ロ					配	
7	6405	大石寺大客殿	横山公男	宗				h					ヘ			色	
8	6503	川其	中村登一	商				e				ホ			色		
9	6503	愛染橋病院	浦辺鎮太郎	病					k					ヌ			な
10	6609	鶯花荘	山崎泰孝	宿			a	e				ホ			色		
11	6702	智有趾	鈴木恂	住			a					ホ			な	形	
12	6703	武庫川学院・甲子園会館	大辻真喜夫	住	●	●	c				イ					色	
13	6706	長野市・蔵春閣	三沢浩	文					j		ロ				色		
14	6802	小田邸	田中清	住			b							リ		配	
15	6808	グイン・ホーム	水谷頴介 他	住			b							リ	色		
16	6809	箕面観光ホテル	坂倉建築研究所	宿			a					ホ			色		
17	6812	日本出版会館	下妻力	事						n				リ	色		
18	6905	コートハウスの増改築	太田隆信	住			d					ホ			な		
19	6905	続・坪井教授の家	清家清	住			d							リ			な
20	7003	高知県立郷土文化会館	清岡澄雄	文					k					チ	配		
21	7112	北山本門寺大客殿	内井昭蔵	宗				f			ロ					配	
22	7303	東光園新館	市村光雄	宿					k		ロ						な
23	7308	T氏邸軽井沢山荘	室伏次郎	住					j					チ		形	
24	7308	水かがみの間	谷口吉郎	商					j				ト		色		
25	7407	倉敷アイビースクエア	浦辺鎮太郎	商	●	●			k				ト				な
26	7505	東京大学工学部六号館増築	香山寿夫	学		●			j		ロ				形		
27	7505	辻氏住宅改装	中島龍彦	住		●	a				イ				尺		
28	7508	ザ・デザイン・ハウス・マツシタ	木島安史	住			b							リ		形	
29	7601	善光寺別院願王寺	山崎泰孝	宗		●		i				ニ					な
30	7602	久我山街道の家	内藤恒方	住						o				チ		尺	
31	7704	代官山集合住居計画第3期工事	槇文彦	住				e						リ		配	
32	7704	サウンド・シティ	鈴木高道	商	●		c					ニ					な
33	7708	農家の改造――笠幡の家	星野厚雄	住		●		f			ロ					尺	
34	7708	ある民家の再生――M邸	内藤徹男	住		●		h				ニ			色		
35	7909	谷合眼科	戸沢正法	病					j				ト		色		
36	8009	山の上のホテル本館改修	渡辺邦夫	宿		●	b						ヘ		配		
37	8103	葛飾北区保健所	千葉邦彦	病			b							リ	色		
38	8104	農家	石井和紘	住					l		ロ				形		
39	8206	慶応義塾図書館・新館	槇文彦	文				e	j					リ	形	尺	
40	8206	北野らんぷ館	天藤久雄	文				f					ヘ			色	
41	8208	M邸	畠山博茂	住			b							チ			な
42	8210	出雲大社 新祜殿	菊竹清訓	宗			a,c					ホ			色		
43	8210	金沢工業大学ライブラリーセンター	大谷幸夫	文				g				ニ					な
44	8212	大淀のアトリエ	安藤忠雄	事						m			ト		配		
45	8212	菊池色素工業技術本館	海老原一郎	事				e			ロ				配	配	
46	8212	向日町教会・まこと幼稚園	内井昭蔵	学			a							リ	尺		
47	8303	大谷大学本部・研究室棟	川崎清	学		●			l				ト			配	
48	8303	賀川豊彦記念松澤資料・松澤幼稚園	阿部勤	学		●		f			ロ				配	配	
49	8307	南牧村立南牧北小学校	宮本忠長	学						n	イ				色		
50	8308	梅宮邸	安藤忠雄	住						n				リ	色		
51	8406	東京大学経済学部校舎増改築	香山寿夫	学			c				ロ				形		
52	8509	練馬公民館・練馬図書館	岡秀隆	文					j		イ					配	
53	8512	すや――改造	白井晟麿	商				f			ハ					配	
54	8601	常陸国総社宮参集殿	緒方四郎	宗						n				リ	色		
55	8602	スタンレー電気技術研究所本棟	阿部勤	事			a					ホ				配	
56	8606	赤福本店五十鈴茶屋	山下好次	商		●	b							リ	色		
57	8610	脇町立図書館	重村力	文	●	●			l					リ	☆		
58＊	8610	弧風院	木島安史	住	●	●	b				ロ					配	
59	8611	国立国会図書館新館	中田準一	文				e			ロ				色		
60	8703	織陣Ⅲ	高松伸	事				f					ト		配		
61	8803	女子聖学院 礼拝堂・講堂棟	長島孝一	学						m			ト		配		
62	8810	NTT渋谷“The B”	早川邦彦	商					j				ヘ		色		
63	8811	慈恵園乳児ホーム	葉祥栄	学						m			ト		色		
64	8901	正暦寺福寿院	武市義雄	宗						m				チ		色	
65	8902	京都府京都文化博物館	岡本賢	文	●	●		e			ロ						な
66	9006	東京YWCA会館	香山寿夫	事			a	f						リ	尺	尺	
67	9007	長野県信濃美術館 東山魁夷館	谷口吉生	文					j		イ					形	
68	9012	高知市斎場	上田堯世	他			a	f			イ				色	色	
69	9103	騰々亭	宮本忠長	宿						m	イ				形		
70	9104	修善寺フォーラム 渡月1990	富永譲	事	●				j			ニ			色		
71	9107	脇田美術館	鈴木秀文 他	文					j			ニ				配	
72	9112	山口蓬春記念館	大江匡	文	●	●		e				ニ			配		
73	9112	日本航空チケッティングロビー	伊東豊雄	事				f					ト		色		
74	9206	ヒルサイドテラス第6期	槇文彦	商				e	j		ロ					色	
75	9207	TIME'S Ⅱ	安藤忠雄	商					k			ニ				色	
76	9209	ささき別荘	古谷誠章	宿				g				ホ			色		
77	9212	熊本県立美術館分館	M.ラペーニャ+E.トーレス	文	●					n				リ	色		
78	9404	武者小路千家 起風軒	川合智明	住				i				ホ				な	
79	9405	楽蹴舎	中東壽一	住						m			ト		☆		
80	9408	日本理容美容専門学校	武市義雄	学					j			ホ			配		
81	9504	千葉市美術館・中央区役所	大谷幸夫	庁	●	●			k			ニ				配	
82＊	9504	住居 No.17	内藤廣	住		●	b							リ	配		
83	9507	ホテルブレストンコート	東利恵	宿				e				ホ			色		
84	9511	下北沢Sビル	飯田善彦	商					k				ト		配		
85	9601	DNタワー21	堀田正	事		●	a				ロ				色		
86	9607	ミュージアムパーク アルファビア	武田光史	文	●	●				m			ヘ			配	
87	9612	静銀草薙センター	江中伸広 他	事			a						ヘ		配		

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	主用途	用途変更	歴史的建造物	『環境』 生活環境	社会環境	都市・農村	自然環境	『時間モデル』 持続	持続＋更新	更新	収束	実現手法 部位・部材	空間	なし
88	9702	蔵史館	林寛治	事	●	●						ホ					な
89	9703	東京大学１号館	香山寿夫	学		●		f								配	
90	9709	伊豆の長八美術館	石山修武	文				h			イ				形		
91＊	9711	「ゼンカイ」ハウス	宮本佳明	事	●		b	e			イ	ニ			配		
92	9802	熊本県立天草工業高等 実習棟・体育館	室伏次郎	学					i		ロ			ト	色	配	
93	9802	鈴木木材工業本社	城戸崎和佐	事						m							
94	9805	JR東日本本社ビル	小倉善明	事					k			ホ				尺	
95	9806	清凉山霊源皇寺庫裏	山口隆	宗		●		e				ニ		チ		色	
96	9811	聖台病院作業療法棟	藤本壮介	病					j						☆		
97	9911	鹿児島カテドラルザビエル記念聖堂	阪田誠造	宗						m		ト			色		
98	9912	ピピア庵	出江寛	商						n					色		
99	9912	エンデノイ中目黒	西沢平良	商				i				ホ		ヘ	色		
100	0003	農家の縁側空間	安田博道	住					j					チ	色		な
101	0005	ICB Paris	岸和郎	商		●			l		イ				な		
102	0006	新宿三井ビルディングリニューアル	村尾成文	事				f			イ	ホ					な
103	0008	三良坂町陶芸学習舎	吉松秀樹	他				e			イ			リ			な
104	0010	東京大学工学部2号館	岸田省吾	学		●			k					リ		配	
105	0103	ZIG HOUSE / ZAG HOUSE	古谷誠章	住				d				ホ				形	
106	0103	新風館	佐藤敦 他	商	●	●		b						リ		色	
107	0105	IMAGICA 品川プロダクションセンター	大江匡	事				g					ヘ	ト		配	
108	0105	東北大学創造工学センター	八重樫直人	学						m o			ヘ	ト	★		
109	0107	楓居	有馬裕之	宿			a						ヘ	リ	色		
110	0112	慶應義塾普通部新本館	池田靖史 他	学		●	b						ヘ	リ		配	
111	0202	茨城県立図書館	林昌二	文	●		c						ヘ	リ		尺	
112	0206	安曇野ちひろ美術館新館	内藤廣	文			b						ヘ	リ		形	
113	0206	横浜赤レンガ倉庫1号館・2号館	新居千秋	商	●	●			j			ニ		リ			な
114＊	0210	スガルカラハフ	宮本佳明	宗			d								形		
115	0303	表参道テラスハウス	堀部安嗣	住						n				リ			な
116	0402	日光霧降・マーブルハウス	奥山信一	文	●			f				ホ					
117	0404	LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH	青木淳	商					j		イ				★		な
118	0411	交詢ビルディング	大山尚男	商		●		e			ロ			リ	な	な	
119	0412	松屋銀座 耐震外装	吉田進 他	商		●			j						色		
120	0508	r-ST1 201 / 203	長岡勉	住			b						ト		色	配	
121＊	0607	角館の町家	渡辺菊眞	住			d					ニ	ト				
122	0612	YKK50ビル リノベーション2006	宮崎浩	事			a	g				ホ	ト		配		
123	0703	TARO NASU OSAKA	青木淳	文	●		a						ヘ	リ	色		
124＊	0704	とたんギャラリー	大川幸恵	文	●		a						ヘ	リ	な	な	
125＊	0704	押小路の町家「幹翠」	吉村篤一	住						m			ヘ	リ	な	尺	
126	0706	東京大学医学部附属病 中央診療棟Ⅱ期	岡田新一	病				g				ニ					
127	0711	大隈講堂（保存・再生）	大野勝	文		●		h				ホ					な
128	0802	REISM	田島則行	住				f				ニ			配		
129	0803	カエツキャニオン	長岡勉	学							イ				形		
130	0803	金刀比羅宮新茶所『神椿』	田窪恭治	商					j		イ			チ	色	配	
131	0805	犬島アートプロジェクト「精錬所」	三分一博志	文	●	●				p			ト				
132	0808	SAYAMA FLAT	長坂常	住									ト	チ	配		
133	0809	house K	宮晶子	住				b					ト		色		
134	0810	千本松 沼津倶楽部	渡辺明	宿		●				m			ト	チ	色		
135	0810	VEGA	小泉誠	事		●				m			ト		色		
136＊	0902	帷子の家	矢田朝士	住	●					m			ト		色		
137	0904	レストラン長屋門	千葉学	商		●			j		八		ト			配	
138	0911	書院／Third-house	岸和郎	住				f,h					ヘ			色	
139	0912	上大須賀の家	谷尻誠	住			a						ト		配		
140	1001	澄心寺庫裏	宮本佳明	宗		●	a					ホ			色		な
141	1001	とらや一条店改修	内藤廣	商				i			ロ					形	
142	1003	カバヤ珈琲	永山祐子	商		●		e				ニ			配	色	
143	1003	Sakura flat	若山均	住			a						ト			形	
144	1005	京都工芸繊維大学 60周年記念館	木村博昭	学		●		e			イ		ヘ		配	色	
145	1007	武蔵野美術大学 美術館・図書館	藤本壮介	文			a						ト			形	
146	1007	日産厚生会 玉川病院南	星野大道	病				h					ヘ		配		
147＊	1008	平和台の民家	阿部勤	住		●		e				ニ			色	形	
148＊	1008	美原の農家	大野鶴夫	住		●						ニ			色		
149	1102	三輪窯Ⅱ	三分一博志	宿						n				リ	色		
150	1103	大森ロッヂ	大島芳彦	住				b					ヘ	リ	★		な
151	1104	Aesop Aoyama	長坂常	商					g				ヘ		色		
152	1105	Maruya garden	みかんぐみ	商						o			ヘ	リ	色		
153	1106	Ring Around a Tree ふじようちえん増築	手塚貴晴＋由比	学						o							
154＊	1106	Do It Yourself	垣内光司	住		●		a				ニ					な
155	1107	みやした こうえん	塚本由晴	他					g		ロ						な
156	1107	テクニカフクイ新社屋	薄田学 他	事									ト			配	
157	1108	駒沢公園の家	今村水紀 他	住					j			ニ			色		
158	1109	VISION	根津武彦	事						o			ト		配		
159	1203	高野口小学校校舎改修・改築	本多友常	学		●			i		ロ				色		
160	1204	大多喜町役場	千葉学	庁		●		f				ホ			形		
161	1205	黄檗山萬福寺第二文華殿	森田昌宏 他	宗						m			ト		配		
162	1206	Peanuts	前田圭介	学				a					ト		色		
163	1208	豊崎長屋（南長屋・北終長屋）	小池志保子	住		●		b					ヘ	リ	な		
164＊	1208	KIM HOUSE 2011	岸和郎	住					j				ヘ		な	な	
165＊	1208	8ビル	塩塚隆生	住				a					ヘ		配		
166	1209	旧澤村邸改修	山中新太郎	住	●	●		a					ヘ				な
167	1302	大阪市住宅供給公社 カスタマイズ賃貸プロジェクト	馬場正尊	住				b				ニ	ト		色		
168	1302	麻布十番の集合住宅	栃澤麻利	住					k				ト		色		
169	1307	宇城市立豊野小中学校	小泉雅生	学				g			ロ		ト			形	
170	1308	Apartment惣	泉幸甫	住						m			ト			配	
171	1309	直島宮浦ギャラリー	西沢平良	文	●					m			ヘ		色		
172	1309	豊島横尾館	永山祐子	文	●		b				八				色		
173	1312	改築 散田の家	坂本一成	住			b					ニ					な

別表2-1 注1）資料は原則「新建築」誌に掲載された設計論であるが、補助的に「新建築 住宅特集」誌に掲載された設計論もみている。資料番号に＊が付されているものは「新建築 住宅特集」誌に掲載された資料である。

注2）主用途の記号は、住：住宅、事：事務所、庁：庁舎、学：学校、文：文化施設、商：商業施設、宿：宿泊施設、病：病院、宗：宗教施設、他：その他 を示す。

注3）『環境』の変化および『時間モデル』の記号はそれぞれ、表1、図3に記載したものを用いている。下線を引いた記号は、『環境』の変化の欄では、『環境』の具体性における［個別的環境］であるものを示し、『時間モデル』の欄では、『時間モデル』の射程における既存建物を含むものを示す。また、実現手法は「対象」ごとに「属性」を記載しており、記号は付表の頭文字としている。ただし、☆は色・素材感と形態の双方を属性としているものを、★は配置・配列と色・素材感の双方を属性としているものを示す。

No. e-1　森博士の家 ――清家清，sk5109

王朝時代の生活様式ではあるが、舗設という語がある。ひとつの大きな室の中に、年中行事や生活に付随して、家具、几帳 etc.、を適当に置き、その時折の空間を構成して行く、こう云った方法を舗設という。この住宅は大きく見て一室と考えられないことはない。必要に応じて襖、障子等で寝室となる空間を舗設したり、書斎を隔絶する。しかし建具を開放すれば室内は勿論、戸外も含めて、ひとつの一体的な空間が構成される。

森博士の家

No. e-2　S 氏邸 ――槇一郎，sk5304

此の家は住宅としては特殊なものであるが、今後の庶民住宅を考える場合耐火を主としたコンクリートブロックの効用性は云うに及ばないが堅牢性・耐久性も一行の価値があると考える。
此の例をとれば、2 階が乗る部分の 1 階がコンクリートブロック造であることにより、構造上の堅牢さ及木材の下からくる腐朽に対して相当効果があり、木造 30 年とするなら 100 年の耐用年限が考えられるのではなかろうか。・・・1 階は居住部分として暖房の発達と相まって開放的な廣い居間・食堂に当てられ柱数が減せられる将来を考える時、少ない 1 階の壁・柱の腐朽に家の運命をたくする矛盾を考えざるを得ない。ここにブロックの将来性があろう。

S 氏邸

No. e-3　大文字の客室 ――富家宏泰，sk5312

このＬ字型の卓は初瀬川松太郎の設計になる自身の作である。一つは布目地のウルミ色呂色仕上げであり、もう一方は赤杉の木地の儘［読み：“まま”］の仕上げであるため実によい調子である。組合せの變化で、使い勝手もかわり、部屋の雰囲気も變化する。

大文字の客室

No. e-4　十合邸 ――脇かほる，sk5405

完成して間もないこの家は、まだ単に殻ができたにすぎず、次に残されている問題は殻の充塡であり、それは概念的な空間の中にさらに分析された人の動きによって自ら必要を会得し、形を整えていくだろう。それは適切な家具やパーティションによってなされてゆく。・・・
人は常に変動していく。一時の家庭の姿をとらえて設計はなされても恒久的に変動に耐えることは難しい。特に我が国の現状の如く常に最小限にすべて押さえてゆかねばならない時には、家屋の有機的な変動の可能性を残してゆくべきであろう。固定された一時の概念をすべてとして築かれたアイデアに基づくことは作品主義の独善になり易い。・・・何れにせよ避けるべきは［建築家からの］一方的な強要であろう。住宅がその場限りの作品であってはならない・・・ことは言をまたないことだからである。

十合邸

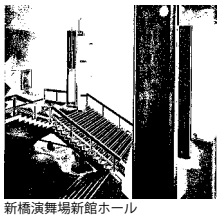
No. e-5　桃李境 ――白浜謙一，sk6102

・・・多少の間はおもはゆさをもって、請われるままにこれらのオールドファッションの演習に取り組んだ。
・・・新しい材料、新しい技術はむしろ意識的に念頭から取り払って、静けさや安らぎをうる造形をと、古いものに頼った。・・・
＊現代の住まいにおいても捨ててはならない“良さ”をもっていることを今更ながら発見しえた。外見の良さではないそれらの質感、否、質そのものの特長は“住い”の、とくに“安らぎ”の要素を満足してくれる。
杢目のデコラや、杢目のコンクリートは高価な代用品でしかない。ボードの壁は土壁より優れていなければ、やはり代用品である。
木や竹や紙を捨てさるときがくるとしても、その“良さ”だけはこれからも求め続けられるであろう。住いはその外見ではなくて、その質を求めている。
“木造の如き”コンクリートの柱や梁にはこの“良さ”を見出すことはできない。
新しい材料、新しい技術、新しい造形が生まれることは喜ばしいことであるが“・・・

桃李境

No. e-6　新橋演舞場新館ホール ――吉田五十八，　sk6202

新橋演舞場は、大正 14 年、菅原栄蔵氏が、心血をそそいだ一代の力作で、ライト調の大正後期の代表作である。それから、歳月を経ること 20 数年、終戦直後、戦災で焼失した演舞場が修復されると同時に、10 メートルばかり離れた河べりに、前田健二郎氏設計の、新橋倶楽部が建てられた。この間に優に 4 分の 1 世紀の時間が経過している。・・・
ここで私は、いろいろと考えあぐんだ末、二つの建物の間に、空間という、一つのクッションを置いて、この異質の建物の調整を試みた・・・この継ぎはぎした、三つの建物は、大正期、終戦直後、現代、とはっきりと時代的のけじめがついていて、その雰囲気は、けっして、一つの融和するような結果にはならなかった。むしろ、見方によれば、時の流れを、そのまま如実にもの語る、一連の建物として、これを見れば、興味があるものと、言えるかもしれない。


新橋演舞場新館ホール

No. e-7　大石寺大客殿 ――横山公男，　sk6405

そこ［ロンシャンを指す］で彼［コルビュジエを指す］が指向しているものは神の世界なのであって、人間そのものの姿でない。ロンシャンといい、ラトゥーレの僧院の礼拝堂といい、キリスト教建築の伝統的な空間をギリギリの極限まで集約して見せたみごとさはただ感嘆のほかないが、宗教的空間にたいする彼のイメージの指向する方向は、伝統的なそれの範疇を出てはいないので、そこにはイメージの変革への姿勢は見られないのである。・・・
一方、仏教建築は、その空間創造のテーマに大きな変革は見られないままほとんど現在にいたっている。・・・いずれにしろ、仏教建築における空間創造の指向する方向は、伝教大師によって像法の、理の一念三千が説かれ、さらに日蓮聖人によって末法の事行の一念三千が明らかにされた後においてさえも、すなわち仏法そのものには革命的な変革がもたらされた後においてさえも、なおその宗教的空間のテーマにはさしたる変化は見られないのである。これは奇妙なことといわなければならないが、あるいは空間に対するこうした考え方は日本人の、というよりも仏教の無常感というものの影響と考えるべきかもしれないが、それであるからこそ、そこには変革がなければならないはずなのである。･･･仏の世界とは西方浄土にあるのではなくて、われわれ自身のうちにあると明書されている。主体は人間そのものに、われわれという個々の人間そのものにあると、はっきりいわれているのである。したがって宗教建築創造のテーマもまた、ここになければならないのである。大客殿計画案発表のさいに“宗教的空間とはつまるところ人間的空間のことなのである”と私が書いたのはこの意味においてである。

大石寺大客殿

No. e-8　川其 ――中村登一，　sk6503

RC 造は 4 面ガラス張りのものとして、その中に外観と関係なく、乾式工法木造間仕切りを試みた・・・乾式法をえらんだのは、料亭の室内の雰囲気は、5 年ほどで流行があって変化してゆく。・・・常に目新しさを客は好む。そこで RC 造はそのままで、映画のセットのように時代とともに変化できるようにした。

川其

No. e-9　愛染橋病院 ――浦辺鎮太郎，　sk6503

高津入堀川はいずれ埋立てされて、上に高架高速自動車道路が造られる計画だと聞いている。その時あるいはその後の長い間にどんなことが起こるか、あるいはこの病院の新館も今の旧館と同じ運命に陥るか、神のみぞ知る、である。願わくばこの新館もいずれ手ぜまとなり、老化して新々館の生まれる時まで石井記念愛染園の事業が永続発展してゆくことを祈りたい。

愛染橋病院

No. e-10　鶯花荘 ――山崎泰孝／坂倉準三建築研究所，　sk6609

鶯花荘

現在まで鶯花荘の経緯が示すように、この種の建物には増改築がつきものである。今後に対してもこれを考慮することがひとつの焦点であった。このことは、今後ともいろいろな建物についても、あてはまることではないだろうか。
これらに対する設計の方法として、まずこの建物を構成する要素を、３つの異なったサイクルに分けて考えた。
その第１は、家具 .... 椅子、テーブル、額、花瓶など。これらは使う人によって、また季節によって、一番小さなサイクルで使い分けられる。第２は、これらが容れられる空間単位としての各客室、風呂、広縁など。第３は、他の建物とは異なったなんらかの個性をもつ鶯花荘という建築総体。
この３つにそれぞれについて、材料を次のように使い分けた。第１の家具については、移動や転用を考えているので、動きさえすれば良いが、第２の空間単位となる各個室は、数年ごとの改装のために、また畳敷きの旅館であることや経済的なことも考え合わせたうえで、普通の木造建築とした。・・・第３の建築総体を支えるものとして、鉄筋コンクリートのスケルトンを考えた。
さらに、今回第２の木造の単位空間と、第３の鉄骨コンクリートのスケルトンを統一する寸法として、学会のモデュールを参考に寸法の整理を行った。
・・・将来の改造のために木造部分を自由に変更していっても、鉄骨コンクリートのスケルトンと一緒に増築していった場合も、この寸法関係を守る以上、全体としての調和をこわさずに容易に改造増築してゆけるだろう。
最後に、これらに対する設備について考えたことは、電気においては、各スパンに到るまでは配管内配線としてコンクリートに打込まれたが、その後はすべて一番簡単な V.A. による天井内露出配線となっている。それは、木造建築部分の改造に合わせて、それに対する配線を容易に変えられるためである。また、給排水、空調などの配管類もあらかじめ梁や壁に大きな開口があって、そこをいつでも変更できる型で通っている。・・・なお機械室についても全体の建築が増築する場合、それに対応して増築できるように３階の裏側に配置されている。

No. e-11　智有趾 ――鈴木恂，　sk6702

智有趾

この建築は特異な使われ方をしている。
住宅と別荘と記念碑の中間にあって、そのどれでもあるといった性格をもつ。あるときはいくつかの家族が集まり、子供たちの声でみちあふれ、そしてあるときはまるで静かな生活が営まれ、ほとんど住む人のいない状態にまでなる。
それぞれの部分のもつ天井や床の高さは、この建築にとって重要な要素である。仮に仕切られたそれぞれの部分は、それ自体の意味をもつとともに、個室が消滅する時期には、それに対応して全体の再構成の重要な要素となる。
予測されないさまざまな使われ方に対して、この建築は、高さの変化、平面の部分、仮の間仕切りなどを加え、積極的にこうした空間のフレームをつくりだしている。

No. e-12　武庫川学院・甲子園会館
――大辻真喜夫／竹中工務店，　sk6703

武庫川学院・甲子園会館

遠藤新の設計、大林組の施工によって 1930 年（昭和５年）に建てられた甲子園ホテルは日本近代建築の傑作である。・・・最近武庫川学院の手にわたり、竹中工務店によって家具および一部の間仕切りをのぞいて完全に復元された。
・・・
古きよきものが惜し気もなく壊されてゆく今日である。そして古いもののよさをつくりだすことができない今日である。
すべて採算の合うものしか存在することが許されないような現在の社会に対してはひとりの建築家としてだけでなく強い反発を感じる。そこには人の心などひとかけらもなく、金がすべてを支配する。
先人たちが心こめた愛情や良心の結晶も、ただ今日の利益のためにむなしくふみにじられてしまう。数年前からさわがれている帝国ホテルの問題もこれとおなじである。ホテルの経営者に “ なんとかしてほしい ” とお願いする前に、もっと大きな社会問題として考えなければならないことである。
古いものが年を経て、やがて土に帰るのはさからうことのできない大自然の摂

理であるとしても、病めるものをなんとかして助けようとする人間としての努力もまた自然の摂理にほかならない。
その意味でここに甲子園ホテルが変遷の後にようやく再出発の陽の目をみたことは喜びにたえない。
客室部分は変更したとはいえ、ロビー、ダイニング、バンケット等々の公共スペース、および外観が、ほとんど忠実に復元された・・・今後もこの環境が活かされていくことを願ってやまない。
［以上、筆者が明記されていないため、参考文章］
・・・
甲子園ホテルはライトの愛弟子として、帝国ホテルをまとめ、またその教えを守りながら独特の作風を残した特異な建築家遠藤新氏が、当時のホテル界の第１人者林愛作氏と４つに組んで産みだした建築で、昭和４年12月に竣工したユニークなものであります。
太平洋戦争で昭和19年に海軍の病院として収用、改造され、終戦で進駐軍の将校宿舎とクラブになり、昭和32年解除後は空家のまま、大蔵省の管理下におかれ、この40年11月に、ようやく土地の名門武庫川学院に譲渡されることになりました。同学院追公江理事長の建築に対する深い造詣と愛情により、20数年ぶりに、息吹を取りもどす機会を得たのであります。すなわち、同窓会館、研究、ゼミナール室、学生宿舎の複合建物として、本来の姿をそこなわぬよう、改造補修することとなりました。ホテルから病院、将校宿舎、そして荒廃の十数年と、40年近い数奇な命運を経てきた建物でありながら、そこに謳歌されている空間は、いささかの褪色も見せずわれわれを魅了するのです。
" 玄関から入って、低く横に広がるフロントから、一躍高い吹抜けロビーへ徐々に床の高さを変えながら流れ込み、その下り天井の一隅の予期せぬ開口から、一段下がった小食堂からバーへ、またロビーの吹抜けから繋がった２階のラウンジは、さらに２階のカードルームを経て屋上庭園へ、・・・至るところ注意深く、ダイナミックに、リズムを持って流れうつる空間がそこにあります。どの空間もそこに停止してしまうのでなく、さらに次の世界へと続いて行くのです。
ライトの帝国ホテルが竣工当時の面影をとどめ得ぬ今、遠藤新氏の甲子園ホテルが蘇生して、生きた姿でまみえる意義は、単に関係者のみでなく、日本の建築界にとって大きいといわざるを得ません。

No. e-13　長野市・蔵春閣――三沢浩，　sk6706

長野市・蔵春閣

川中島、松代までも一望におさめる長野市の城山。ここにあった旧館は明治帝が四方の春を賞でて以来、蔵春閣と呼ばれた。しかし、明治24年炎上。木造の大架構はそのまま炎につつまれ、火の子を浴びて惜しむ、町の人々の脳裏にやきついた。その大往生ぶりはいつまでも町の語り草となった。墓場旧蹟のような建物の再建。・・・
市は善光寺の門前町。残る甍［読み:“いらか”、意味:瓦葺の屋根］の数も多い。山を背景に全体が寺に向ってせり上るこの町は美しい。その中間に、緑をわけて数層のコンクリート造を建てるのは、むしろ怖れしらず、おこがましくもあった。・・・
６ヵ月の短工期。信州の冬は厳しい。仮屋根をかけ、雪をよけてコンクリート打ちが強行された。春が明ければ数百万の善光寺の宗徒が全国から押寄せる。ここが唯一の開放休憩所になる。とにかく間にあった。それでも建築は残る。数百年残るかもしれぬ。残さなくてはなるまい。町の人々のほこりとなって残ってほしいと思う。意に充たぬまま、でも残したいこと、これも矛盾である。
こうして、建築の原型がどれほどできたかと考えるとき、はなはだ暗然たるものがある。原型は未完成のものだと心にいいきかせても、なお納得できないものがある。質がない。空間ができていない。内部と外部をつなげる空気の流れがない。物理的に完成しないいくつかがある。未完への斗い、私にはいまようやくはじまったばかりのようだ。

No. e-14　小田邸――田中清，　sk6802

玄関をとらないで、直接居間に入る。そしてどの部屋からも美しい海を見ながら、それぞれの個性に合った生活が楽しめるようにと考えた。
でき上がってからしばらくたったが、訪ねるたびに、ご家族の生活の個性が刻まれて行き、時間とともにしっとりとした落着きをそえ、こころにくいまでのしゃれた色どりがあちこちに配されて、すっかりこの住いを幸せなものにしている。

小田邸

No. e-15　グイン・ホーム――水谷頴介・植田喜美子，　sk6808

みせかけのきれいさや、与えられたきれいさは、時間がたつと崩れます。なにしろ建築予算は、平均価格の半分です。提供できるスペースは、骨組みだけです。コンクリート・木などの素材をいかした骨組みのなかに時間をかけて生活の智慧と生活の美を充実させていってもらいたいと思っています。子供たちの教育との長い対話がこの建物を生き生きしたものに成長させてくれるでしょう。
子供たちは、昭和43年6月現在で27人、保母さんが6人、指導員・施設長が3人、看護婦1人、炊事1人、毎日の食事委員3人の総勢41人であります。延面積219.67㎡ですから、1人当り5.36㎡です。骨組みすらもう狭くなっています。あちこちに施設を使う人の立場からの臨時のつぎ足しやはり出しが、すでに始まっています。

グイン・ホーム

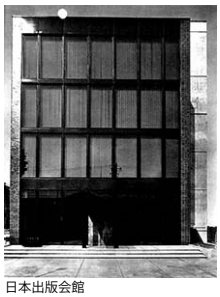
No. e-16　箕面観光ホテル――坂倉準三建築研究所，　sk6809

このホテルの設計は、まずその母体ともいうべく既存の和館と帰納的に連続した建築をという要求があり、そのために和館に連なる急傾斜の敷地に配置されることになった・・・
構造は鉄筋コンクリート造であるが、内部は時間的・空間的条件を容易に変更してしまう企業側の要求の特殊性に対処できるよう、前に鶯花荘で試みられた方法にならい木造となっている。

箕面観光ホテル

No. e-17　日本出版会館――下妻力／佐藤武夫設計事務所，　sk6812

正面玄関のブロンズ製扉にはエジプト古代象形文字をエッチングしてある。これは出版会館の象徴とし設計されたもので・・・西欧の教会の扉はいずれも彫琢をかさねたものが多く、ミラノのドゥモにしても、ノートルダムの伽藍にしてもそれは門扉の機能を超えた教会建築のひとつの大切な要素となっている。これらはブロンズ製の数百年をかけて製作されたもので、年月を経るにしたがってますますブロンズ特有の緑青を含んだ渋い青銅色を呈していく。近来軽金属や哲に新しい脚光が与えられ、その材質の表現する建築物が建設されているが、古来から使われているブロンズなども、その材質、エッチングの技法など見直されてもよい可能性を秘めているのではないだろうか。


日本出版会館

No. e-18　コートハウスの増改築

――太田隆信／坂倉順三建築設計事務所，　sk6905

一般的に、「小住宅に増改築案はつきもの」といわれており、この場合、家族構成の変化、家族の成長にともなう生活様式の変化といったことがその原因として上げられるが、それと同時に小住宅にとって、増改築の必然性は、小住宅というテーマそのものの中にすでに存在しているのだということを明記しておく必要がある。
・・・当時私たちは、当然のことながら増改築をも見込んだフレームワークをつくること、また、増改築によって損なわれることなく、否むしろ増改築をもその中に包含するような空間をつくることが、設計にあたっての目標のひとつであった。
・・・'68年の初めにいよいよ増改築計画にとりかかった時、それは新らたに増

コートハウスの増改築

改築をするというよりも、むしろ '61 年以来のテーマの具体化という意味で一連の設計というニュアンスが強かった。
・・・移動家具がいろいろと市場に出まわってきたこと、特に外国製品がきわめて簡単に入手できるようになったことは、建築家の仕事のいくつかを、つくることから選ぶことに変えてしまったということを、つくづつ感じさせられた。このことから・・・建築家は、基本的な空間のみをつくりあとはより多くを住む人の選択にまかせるという両面の解答がみちびき出されると思う。

No. e-19　続・坪井教授の家 ――清家清，　sk6905

旧作「坪井教授の家」ができてから、すでに 10 年以上も経つ。当時少年だった坪井家の 3 人の坊やも成長して、それぞれ一人前の建築家になった時点で、いまさら私が増築をお引受けするものおこがましいとは思ったのだが、先生からのご指名でまたお手伝いをさせていただいた。・・・今度の計画では、生活諸般からみて 3 階になってしまった。
増改築というのは、長い建築物の歴史のうちでは止むを得ない事件である。成長する家という考え方のうえに立って、特に変化の多い住宅計画に当っては当初から、そうした増改築に対する何がしかの考慮をはらっておく必要はあるに違いない。十年ひとむかしというように、住宅は少なくとも 10 年の周期――私は 5 年ぐらいかとも思うのだが、そういう変化の波は避けられないのではないかと思う。

続・坪井教授の家

No. e-20　高知県立郷土文化会館 ――清岡澄雄，　sk7003

会館の敷地、藤並神社境内は、高知城の直下に、高知公園の緑につながる木立に囲まれ、戦前までは　三方を塀で囲まれ、高知城の遺構の一部として、切りはなせない姿を残していたが、戦後東側の塀は児童公園に、北側の塀は駐車場として埋め立てられ、車の喧噪等に攻め入られながらも木立に守られ、比較的静かな環境を残しており、既存の図書館や神社とともに、市民の気軽な散策の場所として利用されている。敷地の北半分を占めていた神社を、敷地内の一隅に移設し、その跡地が会館の地に当てられた。
建設中にやむなく移植された樹木や、伐採した草木が、年を経ておい繁るころ、周囲の環境とより一体となって、人びとに長く親しまれることであろう。

高知県立郷土文化会館

No. e-21　北山本門寺大客殿 ――内井昭蔵，　sk7112

・・・日蓮――日興上人の思想をいかに現代に具現化するかという課題に取り組み、また現代社会の日常生活において、もういちど新たな寺院建築のもつべき意義と精神的な空間構成の方法などを追求するものとしてまとめたものが大客殿である。
・・・やはり現代の日常生活の中で、宗教のもつ意味をもう一度考えねばならないことであり、現代の盲点であると痛感させられた。
多様な価値観が許容され、機能分化された現代生活の中で、私たちはそれでもなお変わらないもの、普遍的なものを追求すべきではないか。つまり建築においては、精神的にダイレクトに肉迫する機能を超えた空間の発見こそ重要であると考えさせられたのである。
・・・この富士を含めた大自然の中で、いかに精神的な拠点をつくるかということもテーマとなった。自然と同化することは、建築の空間を高めることである。ここでは自然を貫入させる手法をとりながら竹林のなかに長い廊下を構成した。

北山本門寺大客殿

No. e-22　東光園新館

――市村光雄／菊竹清訓建築設計事務所，　sk7303

新しい環境を計画しようとする場合、その時点から予想されることのできる範囲の未来を先取りし、それを射程に入れて計画するものだが、・・・その際につねに従来からそこにあったあらゆる環境を発見し、認め、全体を計画していくことは重要である。増改築プロセスのいずれの段階をとっても、その環境の中で生活し、利用する人びとにとって受け入れられるもっとも望ましい環境を、われわれは提案し、維持していくべきであろう。
東光園の敷地内には、柴岡亥佐雄氏の大浴場や木造離れの客室、流政之氏の庭園や彫刻が周りの海や松林に囲まれて、豊かな環境をつくりだしている。今回の新館の工事に際しても木造離れを庭の南側に移築し、松林も工事に支障がない範囲でできるだけ残すようにしたが、東光園にこれまでに既存の環境をほとんど壊さずに度重なる改築ないし、移築によって新しい時代の変化を受け入れ、全体の環境を大切に維持している。われわれの今回の計画および将来計画とともにこの考え方を根底におき、その結果として、そこに異なったそれぞれの時代を超えて存在しつづけたものがひとつの全体の環境を支え、つくりあげているといった望ましい状況が生まれることを期待しているのである。

東光園新館

No. e-23　T 氏邸軽井沢山荘

――室伏次郎／アーキヴィジョン，　sk7308

古くから落ち着いた、たたずまいの別荘が唐松林の中に点在する。それはファッション化する現代建築のさまざまな状況と無縁な、歴史を経たユニークな個性を感じさせる建物と自然の姿であり、大変気持ちの良い風景として感じることができる。
そのような中で、くぬぎ、唐松などの大樹と美しく手入れされたコケの庭に囲まれた約 2000 坪の敷地に建つこの建物は、T さん家族が夏の 2 ヶ月間を東京から移り住むため、いわば夏用の住居であり、いわゆるウィークエンドタイプの別荘と少し趣を異にする。
・・・新しい建物の配置にあたっては、前述の美しい環境をそのまま残すことを第 1 目的に、敷地に新しく造成を加えることをさけて、従来より残された平坦部をふたたび使用することとした。要求される約 60 坪の床面積は別荘としてかなり大型であるが、複雑な構成をさけて深い緑とおおらかな敷地環境に対して、できるだけシンプルなシルエットのボリュームとして対応することを考慮した。
新しいこの建物が静かで落着いたこの環境の内に長い時間を経て T さんの個性の一部として、自然の一部として定着するよう念じている。

T 氏邸軽井沢山荘

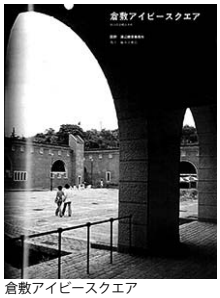
No. e-24　水かがみの間 ――谷口吉郎，　sk7308

庭は全面が池となる。その向うに古い庭の一部が見えるが、広縁も渡り廊下も池に接している。したがって、庭石も植え込みもない。土も苔もない水面だけの庭である。
水の底に伊豆の青石が敷きつめられているので、水が青く澄んで見える。だから、澄明の水面がこの庭の主題となっている。
静かな水の表面には、四季の移り変りが写る。晴れた日には、明るい日ざし、白雲。雨がふれば、雨の足。夕方には夕ばえ。夜の灯影。街の騒音も聞こえるが、時には渡り鳥の鳴き声が余情をそえる。そんな水面を座敷から眺めていると、瞑想の中に、人のなさけと時の流れが思い浮かぶ。その部屋を「水かがみの間」と呼ぶ。

水かがみの間

No. e-25　倉敷アイビースクエア ――浦辺鎮太郎，　sk7407

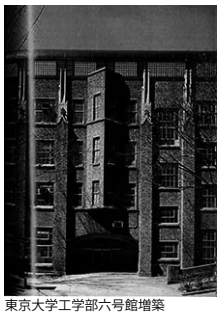
倉敷紡績所の明治建築がアイビースクエアに変身した――それだけのことでも時流に投ずればかくなるものか！
倉敷代官所→倉敷紡績所→アイビースクエアと姿をかえてきたこの一角。一丁江戸から文明開化の居留地然としたアイビースクエアに入る驚き。「旅」をテーマにして作野丹平さんが制作中のフレスコ。喜々として広場を散歩する旅の人、町の人。すべては流行してやまない。できた以上はその流行に任せよう。ただこんな演出をした私は流行の中に不易を見るのが建築家の修練だと思っているのだが・・・。1974 年初夏。



倉敷アイビースクエア

No. e-26　東京大学工学部六号館増築 ――香山寿夫，　sk7505

工学部六号館は、東大本郷キャンパスの中心地区にある、擬ゴシック風の建物である。この様式は内田祥三先生によって、設計されたものであり、戦前に建設された東大の建物のほとんどすべてに、統一的に用いられている。この様式は、イギリスゴシックを独自に解釈してつくり出されたものと考えられるが、独特のファイナル（final）あるいは尖頭（pinnacle）をもったバットレス（buttress）状の柱、パラペットの繰り型（moulding）、45°面で壁の突出するベイ・ウィンドウ（bay-window）、石貼りのアーケードと、荒いスクラッチ・タイルの壁といったものによって特徴づけられるものであり、こうした共通のモチーフが、個々の建物に独自の表情を与えるとともに、建物群全体に統一した連続感をつくり出している。われわれに課せられた課題は、この様式によってつくられている建物の屋上に、その建物の調和を守りながら、あるいは望むらくは高めながら、1 階分の増築を行なうことであった。
こうした形態と、意味の連続をつくり出しつつ新しい形態を付け加える場合は、当然考えられる方法は、そうした形態的特質を保ちつつ、増築を行うことであろう。中世ヨーロッパのカテドラルの数 100 年にわたる建設は、すべてこうした形態の特質を保ちながら増築の連続とみることができよう。・・・
この設計はすべてにわたって、形態上の判断を行いながら、進めることが必要な作業であった。このことが可能であったことは、何といっても、様式的な建築というものが、そのような形態相互の諸関係においてつくられていたからであり、建築や都市が、時代を越えて、連続的な環境をつくり上げていくためには、形態的認識が不可欠であることが、あらためて確認される。・・・既存の建物をこわしては新しい建物をつくるという日本の一般的傾向をはっきりと拒否し、既存の建物の保存と再生を方針とした、東大マスタープランはまことに高く評価されるべきものであり、・・・


東京大学工学部六号館増築

No. e-27　辻氏住宅改装 ――中島龍彦，　sk7505

こういった民家の多くは生活の様式変化に耐え切れなくなり、どんどんワラがトタンに、土がコンクリートブロックに置き換えられ、あげくの果てには取壊しの運命にある。私は幾度かこういった古い民家の中で生活の不便をうったえる声を耳にした。なかんづく机がおもちゃのようなスチールの何とかデスクにとって代わりつつある子供部屋のないことであり、電化の進んだ台所廻りであり、そして決定版は何といっても家の暗さであった。ここの住人もまた同じ悩みをうったえられた。しかし私が手掛ける前にはすでに屋根のワラは麦の香も新しいワラに葺きかえられ、ここの住人の、先祖の遺産を守り育てる姿勢を伺い知ることは困難なことではなかった。私がこの道に入ってこういう民家を手掛けて 4 軒目になる。幸いにしてそれらの住人はすべてこの家のあるじのこどく自分の家の在りようを大切に扱った。多くの遺産破壊が進む中にあって、こういった人びとがまだ頑張ってくれていることを非常にうれしく感じながら仕事をすることができた。私はできる限り本質的な空間を、架構を、そして形態を残すことを努めた。幸いにして日本の民家の多くは大架構でできていて改造も変幻自在であるしその中でも田の字プランをもつ高塀づくりは牛曳梁と呼ばれる大梁を除いてはほとんど元型のまま改造することができる。

辻氏住宅改装

No. e-28　ザ・デザイン・ハウス、マツシタ ――木島安史，　sk7508

ザ・デザイン・ハウス、マツシタ

光を設計する者のほうが、闇を設計する者より多い昨今である。不意に仏間に飛び込んで、その異質な世界に畏怖の念をはじめていだいた幼な心や、倉に閉じ込められたり押入でおしおきされる経験がまったくなくなってしまった戦後の住生活では、その隅々までが白日の下に照らし出されてしまっている。生活の意識は、目を覚まし起きている活動的な時間や、毎日の気ぜわしく動きまわっている日常的な日々に重点がおかれ、かつての仏間で演じられ、肌に感じていた、冷たい死者との血のつながりや闇の中にはじめて射し込んでくる光明の不明瞭な併存の感覚を忘れさせているからである。

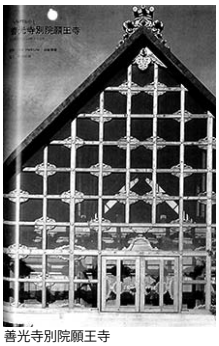
人間の生命というものを現世の生活から死後の生活まで延長して考える人びとにとっては、恐らく生きている間の住まいより死後の生活の場のほうがより具体的に重要性をおびていたであろう。そうした人びとの墓に対する考え方は、いわゆるモニュメンタリティという単純なものではなかったと考えられる。しかし墓を設計することに関して住居を考えること以上に真摯であった時代は、遠い昔のこととなってしまった。現世は仮りの生活ではなくなったように、住居は仮りの宿ではなくなったてのである。今や住居こそ終局の場の象徴となっている死後の生活の以上に、自己の投影物なのである。

最近の住宅設計を自分でふりかえってみると、どうも生とのみ直結しすぎているように思えてしかたがない。そのために生に自己の存在のすべてをたくしていることが痛感され、その結果、生のみに凝縮した人間の生活の器の設計とは、生きた墓場の設計にほかならないのではないかと感じるに至ったのである。生命への考え方が変化し、王の墳墓の時代が過ぎ去ったことによって、現代のわれわれは個人の生活にとじ込められたはかない個の命の培養器としての住まい、いいかえるならば自己のすべてが隠蔽された墓場をつくろうとしているのである。

この家の主は若いデザイナーである。・・・設計をはじめてから施工期間中を含め一貫して彼が主張してきたことは、「オレは死ぬまでこの家に住まなければならないんだから」という独白ともつかない独白であった。・・・彼の棺がほんとうにこの家からでることになるかどうかは、遠い先の話のことであるから私にはもちろんわからない。棺の行き着く先や彼の魂の安住の地については、お互いにいっさい語られたことがないのである。むしろ彼の息子がこの家を引継いでいくことに、彼は確たる信念をもっていることだけで十分なのであった。・・・・・日本人にとって永遠というものが個人の死を越えて存在するとすれば、やはり死後の世界か、あるいは世代の継承しかありえないであろう。かれがこの住宅で生きている生活の継承を主張していることは繰り返すまでもものない。かつての墓に人がたくしていた永遠性を、いまではすべての人が、現実の生活の器に求めているといえるだろう。完成したこの住宅をあらためて考え直す時、私の頭に浮ぶのは他の住宅ではなく、もちろん住の原型たる古代の住居でもなく、生活のすべてが埋蔵されたピラミッドに代表されるような墳墓である。

生きているものの墳墓が、現代社会の宿命的な仕組みとして生産されてくるとして、この住宅の形態はどのような意味をもっているのであろう。この住宅の形が固定した原因は、住み手である松下さん個人が持続している絶対性にほかならないと私は考えてる。

No. e-29　善光寺別院願王寺 ――山崎泰孝，　sk7601


善光寺別院願王寺

Ⅱ「古さ」が生みだすもの
もののありようと人のありよう

建築家や都市計画家が、このもののありようをいじろうとすると、それが古ければ古いほどそれと長くつきあってきた人びとや人間関係、体制や制度ごとの抵抗があり、それが新しければ新しいほど、その抵抗する力も大きい。「住宅は住むための機械である」といった考えから、よく人のありよう――生活や文化――が建築や都市のありようを決定するように言われる。しかし、この逆の作用もあり得ることを忘れてはならない。単に人のありようを調査し、それにただ正直に応えるのみでは、仕事になっても創造とは言えない。真の創造とは、そこに作者としての個性や世界観によって新しく物のありようをつくり、それを通して人びとのありようを変えてゆくことにある。だからこそ、建築家や都市計画家にはその人のもつ人のありよう、世界観が問われているのである。といっても、あまりにも、もののありようを大きく一度に変えようとすると、前述したように、そのつきあいが古いほど人のありようについてゆけなくなって

拒絶する。だから、もののありようを大きく変えようとすれば、その過程の中でのひとのありよう――イメージや作法――をある程度それが拒絶反応を示さぬ程度までは、同時に変えてゆかなければならないことになる。・・・
Ⅲ 伝承される「古さ」
・・・今後の都市や建築を計画する場合、こんな大変つかみにくく、計量化できない、しかもそれだけ重みをもったいろいろな「古さ」をどう伝承し、どのように「新しさ」と新陳代謝を促進させてゆくかが最大の課題ではないかと思う。
Ⅳ「古さ」と「新しさ」
つくるということは、常にこの「古さ」に挑戦しなければならない宿命をもっている。世の中は、生々流転、古い生命が亡び新しい生命が生まれ育つからこそ変化してゆくし、その過程で文化としての継承が行なわれるからこそ前抜きに発展するのである。・・・
京都がそのよい例であるが、ものの世界、人の世界、そしてそれらの関係においても、古い文化がいっそう重く存在するが故に、ただ単に目新しいものはなかなか受け入れられず、それだけに本物の新しさが認められるといえる。事実、現代美術やファッションなど、文化面も政治面でも古い存在と新しい存在がこれだけきわだちながら共存している都市はめずらしい。・・・このようにわれわれもこのものの「古さ」をのりこえて、新しいものをつくる宿命をもつ以上、その努力を惜しんではならないだろう。

No. e-30　久我山街道の家 ――内藤恒方，　sk7602

・・・施主は、ぎんなんや栗を拾ったり、また敷地内の桧や椿、かえでなどの樹が自然のまま大きくなるのを楽しんで生活してこられた。新しい家を設計するにあたって、この豊かな自然環境をなるべく変えないで楽しむことができる、この敷地に合った家をつくることが大切なことであった。・・・必要な面積を最小の建築面積で満たすように総２階とし、敷地への干渉を少なくしなければならない。落葉にたっぷりと埋まり自然のもつサイクルと調和のできる家、また年月とともに自然の中に溶け込み、良さを増すような家が良い。

久我山街道の家

No. e-31　代官山集合住居計画第 3 期工事 ――槇文彦，　sk7704

第 1 期の計画の頃（1966 年～ 1969 年）
当時事務所をはじめてから、まだ 2、3 年――今でもたいして大きくはないが、何といってもこじんまりとした中にもゆっくりしていた時代であった。・・・日本はちょうど高度成長期にさしかかっていて、建築界もメタボリズム、未来論、技術主導型思想が華やかに打出されていた。それらにも一応あいづちをうちながら、実は正直なところ建築は、というより性格にいうならば“器”としての建築は、そういうものではないのではないか、ということを常に自分に対しても反問もしてきた。
建築家のタイプには大きくいって 2 種類ある。ひとつはきわめて概念的にアプローチして行くタイプである。設計して行く上で、ひとつの論理の構成と、その結果としての表現の間の一致が彼らの関心事である。もうひとつのタイプは、より状況的にアプローチする。設計する主体は（もちろん、主体はアプリオリに存在するのだが）与えられた場と、条件の示唆するコンテクストに従って言葉を探し、建物をつくって行く。建築における厳密な論理の構成云々にいささか懐疑的な僕は、どちらかというと後者に属するようだ。後でも触れるように、空間を身体的に捉えようとするために、とことん頭で考えることを拒否して行く傾向がある。・・・67 年の冬、アムステルダムを訪れた時、彼［アルド・ヴァン・アイクを指す］はリートフェルトのミセス・シュレーダー・ハウスやドイカーの映画館、サナトリウムとかグランド・ホテルへ連れて行ってくれた。オランダの建築で感心することは、彼らの建築におけるガラス面のとり扱い方とか小空間のつくり方がある。町のカフェの窓際の処理、るまりどのくらい内と外との空間を継ぎ、また、離すかを窓台の高さ、床レベルで工夫して行く手法への関心は、第 1 期だけでなくこの計画全体について表われている。先に身体的に空間を考えるといったが、こうしたこともその側面のひとつであろう。したがって、オランダ派的な空間の原則が素朴につくられているのが第 1 期である。

代官山集合住居計画第 3 期工事

第 2 期の計画の頃（1969 年～ 1973 年）

第２期をはじめる頃から山手通りの車の量が増え、八幡通りもますます発展していた。第１期で示した素朴な建物の道路性は、内側に後退した内広場型に変わって行く。車の騒音をさけ、特に１階における店舗の透光性を増すためである。しだいに敷地内の緑の量も多くなり、それを享受したいと考えるようになる。当時はまだオイルショック以前ということもあったが、建築界は大阪万博も終わって“さて”という時代にさしかかっていたと思う。
ひと昔前のフランスのジャック・タチがつくった“Mon Oncle（ぼくの叔父さん）”という映画の中で、様ざまなかたちで近代建築の風刺がなされているが、タチが扮する主人公が、４階建ての建物のペントハウスに昇って行くのに彼が表れたり、隠れたりするのが現代建築の空間の透過性を揶揄していて面白かった。第２期のコーナーのガラス張りの喫茶店の中に坐って、前を横切り、上下する人たちの動きを見ていると、人と空間の等価性に現代建築のひとつの特徴をみたジャック・タチの鋭い眼を肯定することができる・・・・・・とにかく、第２期をジャック・タチ型と称しておこう。

第３期の計画の頃（1975 年～ 1978 年）
この最後の４年間は、第１期から第２期の頃以上に、世の中も激動した。バラ色の未来は灰色に色彩を変じたし、急に世紀末が近づいてきたような予感を皆がもつようになった。・・・
建築界もいうならば、この５年間、われわれは何であるかを問い出しているともいえる。アメリカではピーター・アイゼンマンが主宰する建築都市研究所と、季刊誌「Opposition」を中心にして、若い建築家の活動が単に彼らの数少ない作品だけでなく、評論、討論、展覧会など様ざまなメディアを通じて盛んになっている。そして、ヨーロッパでも相呼応するような動きが見られる。国外の動きに過敏ともいえる日本の建築界が（ジャーナリズムも含めて）それを無視するわけがなかった。それは運動というより季節といったほうがふさわしいだろう。つまり運動というにはあまりにも目標が拡張しているからであり、しかし一方で、どこから吹いてくる風、伝わってくる香りにも胸騒ぎがしても、分かちあうものがありそうな予感のする時代であるからである。
第３期はふたつの棟からなっている。道路側の棟をＤ棟、南野崖縁沿いの棟をＥ棟とよぶことにする。
建築に、その時代（時期というべきか）が示唆する何かを表現させて、それを並置してもやはりひとつの集合が成立するだろうということを実験してみたかった。
アメリカの小さな町に行くと、メイン・ストリートに日本と同じように小さな銀行の建物が、往々にしてギリシャの神殿まがいの大きなオーダーをいただいたいかめしい構えをしている。このＤ棟は、ちょっとそれに似たスケールをもっている。・・・
かくして 10 年経って、オランダ流近代建築型と、それにジャック・タチ型を加味したものと、田舎銀行型の３つの建物が代官山の山手通りに並ぶことになった。ちょっと奥まってＥ棟が配置され、なお、いずれ遠くない将来、第１期と第２期の間の駐車場のところにも小さな第４期計画がある。これらの建物がひとつの集合をつくり、街並みを形成しているかどうかは、見る人の判断にまかせなければならないし、また、時がそのギャップを埋める作用もするだろう。

No. e-32　サウンド・シティ ――鈴木高道／鹿島建設，　sk7704

ボーリング場をレコーディングスタジオに再生させることは必ずしも最適の方法ではないかもしれません。というよりも先に述べたようにいろいろのことから逆にもっとも改装しにくい種類のものかもしれませんが、このことは別に建物の改装、再利用、再生とぴうことも考えるには良い機会を得たと思っています。欧米、特にヨーロッパでは伝統的にこれが行われてきたように思います。経済的に急成長していた時代で、常に古いものをこわし、新しい建物をつくるといった時代は終わったようです。十分に耐用年数を持つ建物はそれぞれの時のそれぞれの要求に合ったものに再生改装して行く時代に入ったといえそうです。

サウンド・シティ

No. e-33　農家の改造――笠幡の家 ――星野厚雄，　sk7708

農家の改造――笠幡の家

東京の郊外を環状にはしる、国道 16 号線に独楽蔵のアトリエがある。この環状線は、都心から波紋のように広がってくる新しい都市型の生活文化と、古くから住みついている人びとのそれとが、まるで異民族同志のようにぶつかり合っている円周でもある。新しい型の生活は華々しく、たとえそれが根拠のないようなものであっても、土着の人びとが持っている楽しい暮らし方に対する長い間のあこがれは、古いくらしの柵を一気に捨て去ってゆくのである。ところが、新しい生活に慣れ、その目新しさが消えた時に、多くの人びとが味わうのは、捨て過ぎたむなしさと、それ故の不便さなのである。地域の世間話を拾い集めてみると、あらためて暮らしの根深さを認識すると同時に、それが崩壊した要素のひとつに、家の新築があることに気付くのである。過去、現在、未来を通じて、その家族や地域の痕跡の場として存在したはずの家が、新しくなることによって、その内蔵されている意味をなくし、また、そうせざるを得ない状態になってしまうのである。
極端な変貌から生まれる地域の歪に、建築デザインという仕事を通じて取り組んでみたいと企画したもののひとつに、民家の改造があった。・・・
民家の保存や改造の一般的事例には、風土性を無視して、北のものが南へ移築されたもの、柱や梁の大きさだけにとらわれて家を見世物化してしまったもの、そして、根拠の薄弱な民芸調のものなど、表面的な扱いに終始したものが多いが、本来は、暮らしの深い部分にまでメスを入れて考えるべきだろう。いうまでもなく、民家はその土地の風土や暮らしの必然性から生まれ、その長い存在によって、住み手の変化を超越した土着性をそなえ、屋敷内の一木一草一石にいたるまでが、家というものにかかわり合っているからである。しぶとく蓄積された暮らしの仕組みは、特に農村地帯に健在で、表面的な変化はあるにせよ、その根は盤石である。
・・・
この家の場合も、暮らしぶりを細かく掘りおこしてみると、そこに仕組まれた物質的、精神的要素をかなり豊富に発見できると同時に、家の老化や時代の変化によって、それらが影を薄めようとしているのに気付く。今までこの家を支えてきた数々の要素が、改造という事業を通して、新しい目で見直され、これからの生活にも、積極的に役割を果たせるようになるのが、もっとも無理のない改造法だと思った。

No. e-34　ある民家の再生―― M 邸
――内藤徹男／日本設計，　sk7708

ある民家の再生―― M 邸

・・・全体に大振りで簡潔な架構美がよく保たれていた。
工事は、まず小屋をはずして軸組までに解体、次に補強の鉄骨と木材で固めて、ジャッキで浮かせておき、コンクリート基礎を打設して、その上に置いた。
・・・昔の家屋は一代限りのものでなく、「家」の存続を願って子孫の住まいとして遺せるように、堅固につくられている。
古民家が急速に荒廃したのは第２次世界大戦後といわれている。「家」の概念や家長制度が崩壊したために、上層階級は農地改革の影響もあって、男衆や女子衆を抱える大家族の生活は瓦解した。そして小家族や核家族に移行すると共に、家屋敷の維持も日常的な手入れもできなくなり、荒廃を早めていった。
優れた古民家が消滅していく他の原因に、住人自身が建物の良さに気付いていないことがある。古くて汚くて、広過ぎて不便だといって見放してしまう。昔の家屋は一代限りのものでなく、「家」の存続を願って子孫の住まいとして遺せるように、堅固につくられている。そして代々の当主は、こまめに手入れで補修を繰返しながら、自分たちの生活に合うように改造を重ねて、家を引継いできた。確かに、昔の人は、家を命あるものとして慈しみ、大切にしてきたのである。
M 邸のような、徹底した修理も再生と存続の一手法であるが、実生活に合わせて建物を縮小するかたちで、野太い架構を再利用するとか、屋根の重みをバランスよく除去して改造するとか、いろいろな再生の手法が編出せるのではなかろうか。・・・M 家当主の言葉を借りれば、万巻のお経をあげるよりも、ほんとうの先祖の供養になり、また、孫子の代まで家を遺してやれるのである。

No. e-35　谷合眼科 ――戸沢正法，　sk7909

真夏日の緑陰と白い雲
秋　黄色くいろずいた葉が舞い
冬には　細かい網目の梢がゆれて
春になれば　萌え出ずる新緑が
6 面のガラスに映って
小さな　林　となり
季節の変化を人々にもたらす・・・・・・
そのような建物の外観を
イメージ　しました

外装のレンガタイルは四季折おりの光の変化に富んだ表情をみせてくれます。武蔵野の大地にしっかりと根付いた建物になったようです。

谷合眼科

No. e-36　山の上のﾎﾃﾙ本館改修 ――渡辺邦夫，　sk8009

一般に構造物は数 100 年の寿命があると思われるが、社会的変化によって構造物の寿命よりはるかに短い年月で取り壊されてしまう。構造物は一旦でき上がってしまうとその土地に固定され、その構造物がその土地で機能しなくなればもはやグズ山でしかあり得なくなる。しかしそれは構造物側に責任があるのでなく、それを使う人間の側に責任があるはずである。私たちが構造物をより有効に利用してゆくには、その時代の技術レベルに合わせた構造体の「蘇生」の論理を考えてゆく必要がある。
・・・その補強方法としてもっとも簡単なのは、耐震壁の新たな設置である。
数 10 年の後、このホテルがさらに変身を遂げることがあるとすればどの様な形になるのか楽しみである。

山の上のﾎﾃﾙ本館改修

No. e-37　葛飾北区保健所
――千葉邦彦／葛飾区建築部営繕課，　sk8103

映画「寅さん」でおなじみの柴又も管内にあり、建築的な財産は少ないが人情という言葉がまだ生きている地域である。区民の生命と健康を守る衛生行政は従来都の管轄であったが、昭和 50 年区に移管され区民により密着した形でその健康管理を受け持つことになった。
仕上材は中庭のビンコロ石や鉄平石、樹木、外壁の白い磁器タイル、天然スレート葺きの屋根、内部の床仕上げのコルクタイル、木煉瓦敷、木製建具、モザイクタイルによる壁画など予算の許される限りの自然の材料を選択した。本物の持つ材質感は保健所に訪れることの多い子供や母親に安心感を与え、保健所を職場とする人々や地域に住む人々により、長い時間の経過の中で愛され誇りとする建物に育ってゆくだろうと期待したからである。

葛飾北区保健所

No. e-38　農家 ――石井和紘，　sk8104

農家を無意識に楽天的に住宅と見なおし、合理的で機能的なものにしようとする農家の近代化は、結果としてはそれが都市からの働きかけによって、ただ農家の定型を破壊するにとどまるケースが多く、現実にはそのアプローチが農村環境を蚕食して貧しくしている場合が多いように見受けられる。
農家設計の実際のケースをご理解いただくために、私の場合に則して少し詳しく説明してみよう。そして農家は住宅としてよりも、私たちの記憶の中での農環境の大切さを問い掛け保存するものと考える方が大事だということを述べたい。農環境というものは誰にとっても十分に腹応えのある大切な記憶であって、多少の機能性、合理性以上のものだと考えるからである。農環境は私たちのイメージの母なのである。
この土地は平和で小さな土地である。陽光に恵まれ、水に恵まれ、山林や田に恵まれている。米も野菜も果実も豊富である。冬はきびしいが雪に埋もれるということはなく、夏は暑いが熱帯性ということはない。雄大な山裾ということもなく、あるいは見渡す限りの大穀倉地ということもないが、しかしまたけっ

農家

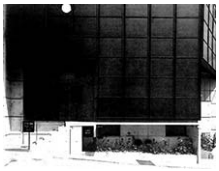
してひなびた山村ではない。人里離れた奥地ではなく、汽車に乗って都市に出て行くことができる。この農村風景はこれといって特色がないようだが、考えてみるとこうした中庸な農村風景こそが思いのほか私たちに共有された〈農村〉のイメージとなっているような気がする。
・・・きっと誰しもが農村のイメージを持っているに違いない。それは都会に住む人も田舎に住む人もである。
ここで農環境というものに物理的に働きかけていく私たちのような職能に立って考える時、私には今述べた共有される農村のイメージが決定的に重要であるように思う。一方で僻村は過疎になってゆく。逆に都市は過密になってゆく。さらにその中間の近郊農村は新郊住宅地として蚕食されていゆく。そんなパターンに私たちは馴れっこになってしまっている。
・・・まず、わら屋根の農家であるが、麦政策の関係上麦わらが減り、ほとんどが引き倒すか、あるいは亜鉛鍍鉄板をかぶせることになった。新築される家はもはや農家ではなく町家の大規模のものとなった。農作業の場の延長、あるいは厨房としての土間中心のものが町家ふうの玄関のつく２階屋になってしまった。農家側からすると玄関がないということは劣等意識であり続け、今日に至って玄関をつけるということが接客中心の家屋構造になってしまったのだと思われる。村の中には軽量鉄骨のプレファブ住宅も建つようになり、田園風景のサイクルの長い悠久の美しさと全く関係がなくなってしまっている。
ひと頃、農村開発計画というものが賑やかに議論されたことがあった。生産性の向上、労働の合理化等々、いわば後進産業としての農業の近代化がその中心的課題であった。しかし、今日では農環境自体が新しく転生できずに失われてゆこうとしている。近代化の呼び声は結果としては無反省に都市環境を農村に撒き散らすことになってしまったと思えるのである。農家は都市型住宅として考えられるものではない。私たちの記憶の中から生きた農村の記憶が失われてしまうことは、私たちの空間意識を大幅に狂わせてしまうことになりはしないだろうか。
・・・
今回の農家の設計において直接の方法の参考となったものは、この地域でわら葺き屋根の上に鉄板をかぶせてゆく方法であった。大きな屋根が銀一色の鉄板でくるまれ、それが連続していくという風景は思いの他悪くない。その銀屋根は単に従来のわら屋根をおおったというものではなく、鉄板細工でたんねんに加工して鬼瓦や棟飾りがついている。これはわら屋根の近代化にともなって職人たちが巧まずして考え出した、近代化の乗り越えの方法でもあって、私には大変興味深くまた貴重なものに思えた。でき上がった装飾の意味の鮮やかさに驚くのであるが、遠望からも環境に溶け込んでしまうし、それが証拠には近所の人びとがいっこうにこの鬼瓦を気にとめないのである。人間の住まいと、環境との接点としての装飾として、歴史的に繰り返し使用されてきた鬼瓦の意味を今、反芻して考えている。

No. e-39　慶応義塾図書館・新館 ――槇文彦，　sk8206

このように位置関係・形態のシルエットなどに関する一連の考慮は、周辺のコンテクストに対して“優しさ”というかたちで調停を試みる一方、その形態は独自の“モニュメンタリティ”を主張している。
この三田の山のキャンパスは、長い年月の間にひとつひとつの建物群の集積として形成されてきたし、おそらく今後とも同じようなプロセスを経て変貌していくであろう。その時おのおのの建物が、ひとつの時代の刻印としての独自の主張を持ちながら、なお周辺と微妙に調停していく時、もっとも高次の集合体を獲得し得るのである。果たして、新図書館がこの点において満足し得る建物であるかどうかは時間の審判をまたねばならないが、“優しさ”と“モニュメンタリティ”という二律背反の意図の背後にはこうしたアーバンデザインに対する視点があるのである。

慶応義塾図書館・新館

No. e-40　北野らんぷ館 ――天藤久雄，　sk8206


北野らんぷ館

建築は時間と共にあり、時間の経過に従って変化してゆく。それはわれわれの力を越えて変化してゆく。もしその変化が避けられないものであれば、少なくともその変化を人間的なプロセス、あるいはスケールに誘導するのがわれわれの責任である。老朽化あるいは時代の変化に耐えきれなくなった建築にどう取り組むかということは、今いかにつくるかということにつながる。すべての建築にその運命が待ち構えていることをわれわれは忘れがちである。
今回のテーマは洋燈を取り囲む空間を真っ黒は闇で塗り潰し、暗黒の中で洋燈の焔が醸し出す「闇の世界」をつくること。・・・

No. e-41　M 邸 ――畠山博茂，　sk8208

M 邸

10 年という歳月は、この住宅を簡単に取り壊したり、捨て去ったりできない価値を生じ、設計者の手の届かない存在になっている。10 年かかって築かれたものを取り戻すには、今後 10 年の歳月を待たなければならないであろう。

No. e-42　出雲大社 新 _ 殿 ――菊竹清訓，　sk8210

出雲大社 新 _ 殿

最後に問題の更新性についてどのように神祜殿を考えているかという点であるが、・・・
では庁の舎と神祜殿においてどうかと仮に考えてみると、おそらく左右の建物を交互に更新していくということになるのではないか。今回 20 年遅れて神祜殿が完成した。おそらくこれから後 21 世紀になって、庁の舎が新しい機能的な理由や耐久性あるいは目的変更などによって改修されるようなことが起こるかも知れない。その場合、大柱とプレストレスト大梁は耐久力もあり十分活用できるものと思われるので残して、これを主架構として、段状ののプレキャストだけが取外され改めてガラス、アルミなどの新材料で再建される形となるのではないか。そうなれば外装がそこで一新するということになるであろう。・・・
そうなれば、ガラスの庁の舎とコンクリートの対比は、この更新によって一層強化され、新しい魅力をつくりだすに違いないと思われる。
それに対して神祜殿は、コンクリートの閉鎖的な建築であるから耐久力としての寿命はやや長いように思われる。しかし展示陳列館としての宝物殿の物の見せ方は、今後相当大きく変化することが予想され、また祈禱の性格にも変化が生ずるかも知れない。そのときには大幅な内部の改装が必要となるのではないかと思われる。
いずれにしても今後の神祜殿の計画を通じて、環境の永続性と継承の問題は、更新性と深くつながっており、翻って人間環境を更新しながら構築していく場合の明らかにひとつのモデルが、ここに実感させられたということができる。
更新計画がもし環境を人間的なものとする適応のプロセスと考えるなら、そして生活において取替え装置を介在させて、環境とのより適切な適応を果たそうとする限り、そこにより高度の技術の適用を行ない、より創造的な空間の造型を意図するものとなるであろう。

No. e-43　金沢工業大学ライブラリーセンター ――大谷幸夫，　sk8210

金沢工業大学ライブラリーセンター

旺盛な建築活動の集積の結果として在る現代都市では、都市規模の拡大・高密度かを伴いながら、変動を続けていることに対応した秩序の確率に難渋している。それは、都市全体に関わる秩序の体系もさることながら、人びとの直接的生活環境として在る、それぞれの地域の安定にも成功していない。・・・
現代の市街地では、それぞれに固有な事情や意図を反映し、形体や形質を異にする多様な建築が建設され、結果として、雑多なものの集積と化した市街地をつくり出している。そこでは、地域としての固有性や秩序には何等の関心も示さず、建築はもっぱら自己の固有性の追求に専念している。しかし、こうしたそれぞれの固有性の主張も、雑多なものの集積と化した市街地の騒然とした景観の中に埋没し、ひとつひとつの建築の存在も影の薄いものに終わっている。
つまり、現代の建築は、己れを主張することで、町という自らの環境の解体に

力を貸し、環境を脅かし脆弱にすることで、己れの存在まで不確かなものにする自体を招いている。現代の建築に見るこの直破綻こそ、現代建築が克服しなければならない重要課題である。
ここに掲載されている金沢工業大学のキャンパスは、10 数年間、3 期にわたって計画され建設されてきたものである。・・・学園のこの全体像は、始めから予定されイメージされていたわけではない。3 期にわたる個別の建設を積み重ねることによって導き、組み立てられたものである。大学の方針にも依ることであるが、このキャンパスにどのような施設を設置し、どう性格づけるか、といったことを決定的に規定することは、可能な限り保留する方針がとられている。それゆえ、ここでは、確からしいマスタープランがまず検討されたのではなく、それぞれの時点で、大学が必要とする最少限の施設が建設され、こうした部分の確定を積み重ねることによって規定され、方向づけられるキャンパスの全体像を検討しながら、次期の計画や既存の確定部分の再規定を試みるといった方法がとられている。
部分から総体を導く場合の要点と私が考えていることは、それぞれの固有性を堅持しながら、先行して在るもの、ならびに将来出現するであろう何ものかに対する配慮、ということにつきている。そして、その中でも私が重視したことのひとつに、第 1 に掲げた事項がある。
すなわち、それぞれの時点の計画に際して、先行して在るものの補強と修正を図る、という点である。それは、任意の計画・建設がこうした行為を伴わないとき、部分の積み重ねは、すなわち、弱点や誤りの累積でもあり、条件によっては、それらの拡大・増幅を意味する恐れもある。部分の積み重ねによって、より確からしい総体を導くためには、こうした弱点の誤りの増大を防ぐことが、不可欠の要件と考えられる。
・・・私たちは、マスタープランとか全体計画を、いささか過大視してきたのではないだろうか。ものごとの将来について、私たちが確かなこととして断定できることは、多くの場合、きわめて限られているように思われる。また、将来を決めつけることが、いささか越権行為に思われる場合もある。もとより、将来に関わることとして、重要な決断を下すべき場合もあるが、私たちがいま求められていることは、それぞれの時点で、確かなことと判断されたことを、確実に実現しながら、それを手掛りとして、より確からしい将来像や全体像を組み立てる方法論を確立することではないだろうか。
私が、個と総体、固有性と秩序の文脈にこだわる理由は、現代の建築と都市の状況のもとで、まず、ひとつひとつの建築の固有性を尊重し、その存在を確かなものとしたいと考えるからである。また、ひとつひとつの建築が、それを越えて、より広い人びとの生活領域の確立に、将来にわたって寄与するものでありたいと願い、そのころによって、ひとつの建築の存在を、より確かなものとすることができる、と考えるからである。
つまり、先の文脈に対するこだわりは、終局的には、建築の確立、ということへのこだわりにほかならない。

No. e-44　大淀のアトリエ ――安藤忠雄，　sk8212

奥に設けられた光庭が、この建物の中心を与えている。西側の壁の間に光を受ける壁が挿入され、庭の上部に重さを失ったまま支持される。自然光がこの壁にあたり、さらにガラス面に反射して複雑な陰影をつくり出す。光の推移が時間の経過を刻々と映し出してゆく。豊かな緑を既に喪失した都市の中では、自然を新たな形で身近に引き寄せることが、もっとも必要なのではないだろうか。

大淀のアトリエ

No. e-45　菊池色素工業技術本館 ――海老原一郎，　sk8212

・・・リニアに延びていく庇の線や、段状にセットバックしてゆくテラス、どれもが事務棟と意図して対比的に扱われている・・・内部構成も対比している。螺旋階段を中心としてその回りに執務空間が取り巻く事務棟に対して、技術本館はリニアに延びる人と設備の２本の軸を持ち、研究空間に段階的な序列をつくっている。
・・・
13 年間の時の流れを隔てて隣り合うふたつの建築――社会背景、施主のニーズ、建築の手法の変化の中で、このふたつの建物の間に如何なる「関係」を生み出すかが、今回のテーマであった。13 年間で確実に時代は変わってきたし、それにつれて建築の様式も当然変わって行くだろう。が、その中には貫かれねばならない建築家の理念―建築の作法―があるはずである。「対比」の概念はふたつの建物の間の相違を表す一方で、同様に共通項をも暗示している。異なった時代の異なった様式を持つ建物が、ひとつの建築の作法に貫かれて、時を超えて地球環境に貢献してゆくことを願いたい。

菊池色素工業技術本館

No. e-46　向日町教会・まこと幼稚園 ――内井昭蔵，　sk8212

主に使い勝手の問題は、既存の木造建築時代とかなりの差がでてきたようで、なれるまでには時間がかかるようだ。私としては“なじみやすさ”が当面の建築テーマであるだけに、かなり機能面でも注意したつもりであるのに、使われ方などを後で見ると驚かされる面がいくつかあった。しかし、求められる機能に忠実につくればそのままなじみやすいか、といえばそうではないと思う。最近では設計した後、いかなる使われ方をされようとも少々のことでは動じなくなったが、建築の設計のむずかしさは、建築を知れば知るほど身にしみてきた。今回の設計で大切に考えた点はいかになじみやすく、しかも精神性が高い筋目の通った空間をつくるかということであるが、そのためにはエレベーションが重要だと思った。開口部や屋根、壁なども、材質に合ったプロポーションを選んでみた。
・・・建築の表情は、設計だけではつくり出せない。生活の時間が必要だ。
川島甚兵衛氏［幼稚園の経営母体である教会の創設者である］の撒いた種子が花開き、やがてここを育った人びとに、この空間を育ててもらいたい。

向日町教会・まこと幼稚園

No. e-47　大谷大学本部・研究室棟 ――川崎清，　sk8303

建物が置かれた場所には、歴史の積み重ねや成立の機縁となる必然性がある。しかし時間と共にその空間の構造や歴史的意味が変わってゆく。
環境造形としての建築とは、決して静止した空間の造形でない。建物から都市へ、地域へ広がる地縁性と過去から未来へ研学の精神を継承し得る歴史的時間性との交わりの空間表現として正面に吹き抜けの大空間をゲートとして、大谷大学の発祥の尋源館を新しいキャンパスのシンボルとなる形に再生したが、そこに諸々の意味が託されている。

大谷大学本部・研究室棟

No. e-48　賀川豊彦記念松澤資料館・松澤幼稚園
――阿部勤，　sk8303

“建築は時代の心を運び、時代の心を外側にして永遠に伝えるものである”（賀川豊彦『生命宗教と生命芸術』）という賀川豊彦の唯心論ともいうべき哲学を伝えるために、旧会堂の内部空間をコンクリートの建物の中に解体・再現し、またキャノピー部分はシンボルとしてそのまま“光の庭”に取り付けたものである。これらは新しい建物に不思議としっくりおさまっている。

賀川豊彦記念松澤資料館・松澤幼稚園

No. e-49　南牧村立南牧北小学校 ――宮本忠長，　sk8307

鉄筋コンクリート造３階建ての校舎と体育館の２棟。連絡廊下は、陽溜りの温室となる。例年、１月、２月が真冬日、秋から春先まで寒い日が続く。RC 造の冷たさを少しでも暖かくする試みで、外装に明るい茶褐色の煉瓦タイルを打ち込んで模様状にした。屋根は耐候性鋼板の片流れ葺きで RC 造床板の上に載せ、耐寒、防雪、耐凍を考慮した。内装は、子供たちが誰でも身近にあって分かる素材の構成、すなわち、信州唐松材を主体に木質系で構成した。教室棟は南面し、太陽に背を向けることなく配して、冬季の室内気候条件を良くするように図った。寒冷地での素材選び、ディテールなど、メンテナンスがかからず変化変色しない建築空間の実像を現出するように努めた。

南牧村立南牧北小学校

No. e-50　梅宮邸 ――安藤忠雄，　sk8308

コンクリートブロックは、ざらざらしているために汚れやすいが、時間の重みを確実に受け止めてゆくことができる。しかし、わが国ではモダンリビングの浸透と共に、いつも美しく汚れのないものばかりで満たされるに至り、触感を刺激するようなものが生活の周辺から取り除かれていった。かわりに登場したのがプラスティック製品であり、現代を特徴づけるテレビ文化、喫茶文化である。プラスティックは汚れてても洗えばいいし、傷がついて見苦しくなっても取り替えれば住む。同じ風潮の中で、表層的な生活感の乏しい映像ばかりが氾濫する。自己をかけて生きなくても、時間は加速的に流れていく。しかし、自己の周辺の現実に根をはった生活が必要であるし、そのために人間の生理とも関わる素材感は大切である。手触りと共に汚れ、朽ちてゆくという自然の材料が、時間と共に変化してゆく様をみることは、人にある本質的な感動を呼び起こすものだと思う。
・・・
コンクリートブロックは、ざらざらしているために汚れやすいが、時間の重みを確実に受け止めてゆくことができる・・・
既存の住居の離れに、コンクリートブロック造でアトリエと居住部分を増築したのである。

梅宮邸

No. e-51　東京大学経済学部校舎増改築 ――香山寿夫，　sk8406

内田先生の建物には、ゲイブルかアーチのついたポーチが建物入口における外部と内部の中間領域として設けられている。これが常に構内の統一性をつくり上げるとともに、建物の使用目的の変化を超越して普遍的空間となっている。この要素もまた、われわれの守るべきものであった。しかし、既存の建物は既に本来ポーチの突出すべき線上にまで迫り出して建てられている。したがって、われわれは従来のポーチの形態要素を継承しつつ、その厚みを消してレリーフのように建物正面にはめこんだのである。

東京大学経済学部校舎増改築

No. e-52　練馬公民館・練馬図書館 ――岡秀隆，　sk8509

都市における低層高密度建築としては、参考図にあげたウル西方地区の住宅や京都の町家が秀れたプロトタイプとしてあげられよう。これらはいずれも建築の外壁と敷地境界がほぼ一致しており、通風、採光、眺望、人や物の出入りなどのための空間として、「内包された外部空間」を持つものである。パティオ、コート、前庭、中庭、坪庭、通り庭等とさまざまな機能とイメージを持っているにせよ、これらの内包された外部空間の存在により建築全体が周囲の環境変化に強い抵抗力を持った都市の建築としての普遍性を持っているということができよう。

練馬公民館・練馬図書館

No. e-53　すや――改造 ――白井昱麿，　sk8512

コンクリートのいかにも現代的なビルに建て替えるのではなく、できることなら 200 余年の歴史を生きてきた店構えを、それにすがりつくような保存という形でなく、合理的な店舗としての機能を十分に果たして、なおかつこれからの長年月にも耐え続けるようなものとして改造したい。・・・
・・・その決して上普請でも立派ともいえない建物が、町の人びとからも木曽の自然に育まれた栗菓子を慕って遠方から訪れる人びとにも親しまれ愛されてきたのは、いかにも構えのないひなびた風情の中にも、いたずらに椀を上げることに腐心しようとはしない深い分別や、時代の風潮や流行に媚びることなく、純正でこころ楽しい栗菓子を愛情と誇りをもってつくり続けて変わることのない気骨が、時の風雪を経て生き続けているということへの共鳴や同慶を率直に感じさせるものであったからだろう。ともあれ私はそのような理解から改造設計を引受けることになったのである。
・・・すやの店構えは開口 5 間ほど、奥行き 2 間だったが、その奥行きを半分に切り詰める［この計画は道路を両側 1 間ずつ拡張するのに伴う改築である］と廊下状のスペースしか残らない。また切妻桁入りであったから、後退に伴って軒高さは三尺以上も上がることになる。継ぎ接の改修で当初もっていたと思われる統一の失われた建物に、このふたつの物理的課題を克服する同時に、筋の通った秩序を回復することが私の仕事であると考えた。その構想のポイントになったのは、従来の建物では店から奥まってやや切り離された形で使われていた、ある一段高い座敷の空間を、それ自体の独立性を保ちながら店の核となるスペースとして組み入れられることだった。そこには家族が集まって栗の煮炊きや菓子をつくる生産の場であると同時に、客間や居間の性格も備えた「家」の中心としての長い歴史を刻んできたところで、その機能を失った今日でも、すやにとっては何にも変え難い意味を持っていた。頭上を覆う黒くすすけた梁組みと共に、歴史に昇華され、実利的な機能や理屈を越えてなおかつ生きた意味を保持し続けてきた空間である。それを店舗と一体のものにするということは、よそゆきの建前だけを形にする一般の店舗とは明らかに異質な、「家」の中心が「店」の中心でもあるような開かれた店舗としての構成を意味した。そしてそのことがひいては先の物理的課題にも答えるさまざまな方法を提供してくれることになった。
建物の老朽化という時間的宿命と、車道に場所を譲らねばならない時代的要請を契機として、ここで蘇生し持続すべきであると考えたのものは、老舗の看板としての、あるいはコマーシャルなレッテルとしての伝統や歴史ではない。受け継がれてきたものを、人と時代の変質変容と向き合いながら、今日的な新しさや古さという概念の儚さや曖昧を見据えつつ、常に自らの伝統と歴史の特性を反復しようとする意志と理解を保持する店構えの実現であった。

すや――改造

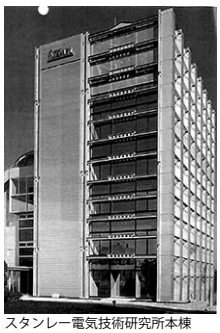
No. e-54　常陸国総社宮参集殿 ――緒方四郎，　sk8601

・・・「なんとか昭和の大改修にふさわしいものを」というのが、設計にあたっての私の夢であった。この設計目標から参集殿の大屋根をどうつくるか。伝統的な民家の木組を同寸法で美しく組み上げたいというイメージから、トラス構造が発想された。木トラスの最大の問題点である材の接点の納りをどうするか、これを解決するには木の持つ材の不均質性と金物のなじみ、割れなどの問題を解決しなくてはならない。しかし、それを解決すれば、自然換気と太陽光に包まれて時間と共に変化し長生きする「木の美しさ」を楽しむことができるはずである。新築時が美しいのではなく、時がたつにつれて美しい、そんな建物こそ私がイメージしたものであった。

常陸国総社宮参集殿

No. e-55　スタンレー電気技術研究所本棟 ――阿部勤，　sk8602

この研究所は、大きくふたつの要素から成立っている。ひとつは塔状の中心部分であり、もうひとつは、それを取巻く形で拡がる周辺部である。中心部はこの研究所の外に開かれた部分で、会議、応接、展示室等であり、外観としてはシンボルの役割を果たしている。周辺部分は既存棟を含め、研究施設がとりまいている。
中心部分が不変部分とすれば、周辺部分は可変な部分である。時代の先端を行く研究内容は常に変化する。建物もその変化に対応できるものでなくてはならない。設計工事の期間にも当然施設内容の変化や増設はあったが、全体のイメージをくずすことなく、むしろ改良という形で解決した。


スタンレー電気技術研究所本棟

No. e-56　赤福本店五十鈴茶屋 ――山下好次／竹中工務店，　sk8606

今回の計画は本店を改修保存しながら、伊勢の町家を復元増築し、加えて街並みの修景を目的としたものである。伊勢に伝わる伝統的建築技術と材料を用いて、商家のただずまいを再現しようとした。本来、街並みの保存とは、形骸化した博物的保存ではなく、歴史的なただずまいを、そこで生活している人びとの息吹をも含めた生活総体として存続させることである。そのような気持ちをもって、この街並みの修景計画の第一歩として着手した。
[増築部分は]五十鈴川にちなんで「五十鈴茶屋」と名付けられた。ここを訪れた人に、住みなれた家の心地良さを感じるといわれた。本店の建物と同様に、歴史に耐えながら美しく老い、人びとに親しまれる建物になってくれることを望んでいる。

赤福本店五十鈴茶屋

No. e-57　脇町立図書館 ――重村力，　sk8610

大谷川の柳並木から、脇町の中町通のほうへ入ると、細い 4m 幅ほどの道が、独特な高い白壁に両側を挟まれて、うねりながらゆるやかに登って行く。最近ようやく町並みとしての評価がひろまり出した脇町の町並みが写真にとられるとき、常に取り上げられる風景である。すでに昭和 59 年この風景の手前側にあった町家蔵が、RC 造の近代建築に建て替わってしまった。・・・この蔵塀［敷地隣りにある］の軒先は一部崩れ、木舞と下地の棕櫚縄が覗いている。蔵塀全体は、道路の反対側へと倒れかけており、一部の漆喰は荒壁から浮いて、はがれ落ちている。この敷地は、中町通りと北側で接し、南側では、独特な形の卯建の連なる、重厚な町屋が建て並ぶ南町の町並みと接している。この蔵塀以外に 4 棟の土蔵づくりの倉庫があり、もう 1 棟農協の事務所となっていた 2 階建ての 1 棟がある。この南町通りと中町通りとをつなぐ 1,300㎡の敷地の中庭は、井戸とお稲荷さんの小さな祠のあるスモール・アーバン・スペースとして、まさに日本の都市が失いつつある伝統的な広場・自由空間として機能していた。・・・
・・・namable objects という点で、脇町の町並みは、まさに宝庫であり、地域の民家すべてほとんど本瓦葺きである。軒丸瓦・鬼瓦・棟瓦ののしのデザイン。上階および妻壁は漆喰大壁の塗り込めである。これらの左官仕事は、虫籠窓や漆喰文字、軒や破風の納めなど、さまざまな細工仕事としてのディテールをもつ。町並みを特徴づける卯建は、左官と瓦職の合作になる白眉のものである。卯建の上に鬼瓦のある寄棟瓦小屋根が載り、軒裏は航空母艦の舳先のような白漆喰の凹曲面で美しく抉られて、水平線が強調されている。下階は真壁・格子造りであり、教の町屋などに比べて間口が広く、木材も潤沢であったため、骨太の格子の美しい比例構成が並ぶ。町家の土間側から座敷側へと、格子のピッチは粗から密へと変化する構成の美を見せている。これらの立ち上がったデザイン・エレメントに加えて、私たちの目を引いたのは、建築の足元、礎石・基壇・腰壁や、舗石・縁石などのアース・カヴァリングに用いられている豊富な石であった。
具体的なかたちをもった、これらの地域の素材（モノ）と技術（ヒト）を、計画で活かすこと。町並みも接する部分では、機能と抵触しないかぎり、この形と素材の復元を試みること、これらがすでに変更されている部分（南町）では創造的復元を試みること。南町・中町から、路地・中町へと町並みから離れ、内部空間へと奥に進むにつれて、これらの素材と技術を用いながら、伝統的な形の再解釈（インタープリテーション）へとかたちを自由に展開し、新しい市民の文化施設・新しいアーバン・スペースを産み出すように心掛けること。これらの基本的なデザイン・ポリシーを考えた。

脇町立図書館

・・・
かつての土蔵や、蔵塀や、無意識に形成された広場が、多くの namable objects にとりかこまれた memorable space（記憶された空間）であるとしたならば、私たちはこの複合文化センターの性格をもつ図書館づくりの企画と設計と建設の過程を通じて、もっと多くの、あるいは失われてゆくものに変わる namable objects と memorable space をつくってゆくべきだと考えた。ちょうど地表の自然が、生態を遷移させてゆく時のように、個人の成長過程や人の社会が記憶を受け継ぎながら、ひとつが消えると新しい物語が生まれ、堆積して徐々に文化が形成されてゆく時のように。

No. e-58　弧風院 ――木島安史，　jt8610

弧風院

弧風院と名づけられたこの建物を住宅と呼ぶべきかどうか、意見の分かれるところであろう。明治 40 年、現在の熊本市黒髪、熊本大学工学部の敷地内に熊本高等工業学校の講堂として建設されたものだからだ。
・・・100 坪の講堂を資金の関係から 64 坪に縮め、2 階にある小部屋を増やしたほかは正面の姿は昔と変わらない。・・・
部屋を増やした原因を考えてみると、その空間に何か性格を与えようと考える以上に、むしろ講堂の基本的な空間をできるだけ温存したいために、倉庫や何かの目的で設けたといえる。生活とは物に置き換えてみると、そうした細々とした物の堆積にしかすぎない。物を整理することのによって、今の生活は明らかになってくる。しかし私個人にはその生活時間を記憶としてとどめておきたい欲望がある。自分の存在を、いわば時間を歴史としてとらえるならば、それは渾然として存在している記録としての物にほかならない。それを詩にうたうこともよい。日記に記録するのもまた素晴らしい。しかし設計をする身になってみると、これらすべてを生きた物として身の回りに置いておきたい。

No. e-59　国立国会図書館新館
――中田準一／前川國男建築設計事務所，　sk8611

国立国会図書館新館

この建物は、「打ち放しコンクリート」「タイル」「スチール」を主な素材として空間を構成している。すなわち、コンクリートは骨組みを、タイルは外装とコアの壁を、スチールは開口部のサッシュと大屋根である。内装としての天井材または床材に、手摺に使った木や、講堂での内装に、または、外構の石垣の石に、それぞれの素材としての性質や性能を追求し、その有様を認識した上でデザインし、ディテールを開発し、この建物をつくり上げてきた。
いつの時代にも、その時代のつくりようがあり、今の時代には、今の時代のつくりようが、手の跡として建築に残ることを期待して職人に目一杯のところを要求した。職人たちがそれに精一杯応えてくれてでき上がったのが、この建物である。
このように、この建物では使いなれた素材を改めて見直し、さまざまなディテールを開発すると同時に、あまりにも早い社会の変化の中で忘れられ、置き去りにされたものの中から優れたものを蘇らせる努力もした。それは「いつの時代にも、その時代のつくりようがあり、その時代の手の跡が、その時代の建物がある」と考えているからである。

No. e-60　織陣III ――高松伸，　sk8703

織陣III

敷地の東端にあたる 1 期工事を手掛けたのがおおよそ 8 年前、京都の一企業の社屋建設に係わるお付き合いとしてはなかなかに悠然たる時の流れではある。さもありなん、ここは間違う方なき千年の都、8 年や 10 年などものの数に入らぬという訳だ。もともと大方の京の老舗の例に漏れず、この御店も計画性などといった浅薄で疑似科学的な律儀さとは縁もゆかりもない王朝気質、四百年の埃の積もった倉を取り壊して、重い腰をグズグズと持ち上げながら本社屋建設に取りかかったひと昔前に、次から次への増築を予想した者など、施主自身を含めてまず誰ひとりいなかったと断言していいだろう。つまりはきわめて無計画的に計画された。そのきっぱりとした成果がこの 3 期工事という次第だ。

しかしよくよく考えてみれば、かようなことと次第は、古くから手持ちの大工の手を借りつつ、融通無礙、変幻自在の増改築と、そしてそれなりの奥深い美学空間を、人知れずはんなりと楽しんできた、京都特有の町家普請の風情に似ていなくもない。この一種の歴史的だらしなさは、条房に切り刻まれ、その授かりものの結界に封印されてしまった欠乏の空間が、時の抑揚や人の欲望の移ろいと、しっくりと折り合いをつけていこうとする、なかなかにうまい方法であったのかもしれない。
・・・今までになく濃密な構成的強度と、その系列的な応力のあまりにもの凶々しさが、もともと離散的な諸形態の揚力をいたずらに煽りたててしまうという結果になった。いわば接合面や結節点に、自ら生成する偶力や反力への耐久力を保全し得ない未完の完体とでも呼べそうな不慮の組成、どこかにゆらぎを抱いてしまったルースリィな機械がこうして不安にかられつつ誕生することになった次第である。

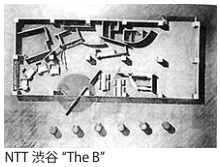
No. e-61　女子聖学院 礼拝堂・講堂棟 ――長島孝一，　sk8803

自然光もまた祈りの空間にとって重要な空間の要素である。・・・アンバー色のカテドラルグラスは以前の木造の礼拝堂・講堂にあったものを一部使用したものである。講壇の上部には虹色に構成した色ガラスの光をトップサイドで入れ、十字架の前に懸かる木製のスクリーンを通じて背後の壁を照らす工夫をした。この空間にはサイドからアンバー色の光が入り、上と横からの複雑な光のアンサンブルを演じる場となっている。
１日の太陽や天候の変化、四季を通じての外光の変化が、内部の空間に微妙な変化を反映する。それが限定された光であることが、その光を感じる人びとの感性を豊かにまた繊細なものに育てることを願っている。垂直性と求心性の空間と形の構成、それに光の輝きと影が集約されるこの建物の一隅は、建物全体の核でありまた学園全体の軸ともなっている。

女子聖学院 礼拝堂・講堂棟

No. e-62　NTT 渋谷 “The B” ――早川邦彦，　sk8810

しかし、このように内部が一新されたところで、1,700 局に先がける第１弾としての NTT 電話局の変身度のインパクトは弱い。さらに、街の情報拠点というように、街に根差した活動を展開する以上、周辺の街並みに対しどのように関係してゆくのか、ということが重要である。そこで、総合プロデュースを担当する電通、パオスも含めて、私たちは周辺の街並みに対し、いかつく、重たい現状の外観もイメージを一新するよう提案した。
3.6m グリッドの H 型鋼のフレームは、周辺の街並みのスケールに同調すると同時に、そのフレーム内の光と風を透過するさまざまな材質の被膜が、街並みに柔らかく応答するものとなる。その一部に使用した外気の温度変化によって自らの色彩を変えてゆくテント布地は、建物が衣服をまとったように、時間や季節の移り変わりと共に、建物の表情を変えてゆく。建物が従来のように、一度完成したらそのまま不変のものであるということでなく、もっと皮膚で呼吸するように、そして生物が外界の環境に自らの形態を同調させるように捉えよう、とするひとつの試行であった。


NTT 渋谷 “The B”

No. e-63　慈恵園乳児ホーム ――葉祥栄，　sk8811

もちろん、例のごとく、コンクリートの梁をふたつに分けて、光格子をふんだんに設け、家の隅々まで太陽の光を招じ入れることにしていた・・・
・・・格子という格子に、数多くの十字を発見することができる。さらに、光を散乱し拡散するために新製品の和紙を漉きこんだガラスを多用して、隅々まで柔らかな光に満ち溢れている。光の家と呼ぶゆえんである。
キリスト教に根差した西欧の進んだ文化と、アメリカの幸せな家庭の雰囲気をもたらした慈愛園の 60 年間の歴史の重みに対して、私たちは、その光の家を通じて、このように、日本的な生活様式や美意識を柔らかくふくよかな光で受け止めることにしたのである。きっと四季折々の変化、時間の移ろいに敏感な日本人の美意識や生活感覚を育むに違いない。

慈恵園乳児ホーム

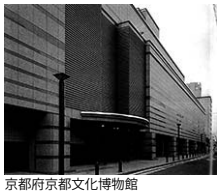
No. e-64　正暦寺福寿院 ――武市義雄，　sk8901

既設の建物から渡り廊下を通り、ホールを経て広間に至る。茶室には天井を低くした廊下を経る。短いアプローチだが、4 本の丸太を組んだホールの上方から降り注ぐ光と渡る風は、時の移ろいを知覚させると共に、日常からの覚醒を体感させる意味を込めている。この空間は周囲を閉じながらも、光の壷のように自然の光や風につながる意識の象徴である。
南と東に設けた庭は周囲に繁茂した樹林を意識して開放的な空間をもつ石庭とした。南側は立石を焦点としたオープンな庭、南東隅は季節の池泉を整備して力強く、ラフな表現の護岸を築いた庭とし、山際の東側は白川砂を敷いて広がりをもたせ、この地から出た石を組み合わせた。この 3 種類の庭が自然に連なっている。
建築と庭という相互の人工の系が、深い谷間の自然の系を際立たせると共に、相反するように見えるふたつの系の主張が、時のはざまの中で森羅万象へと融合してゆくことだろう。

正暦寺福寿院

No. e-65　京都府京都文化博物館 ――岡本賢／久米設計，　sk8902

社会資本の蓄積期を迎えて、建築の保存が本格的に取り組まれてきている。多くはモニュメンタルなディテールを一部保存して新しい建物にはめ込む等、あくまでも新しい建物のデザインの一部として保存するという手法がひとつのパターンとなってきた。この建築保存の見地から、京都三条通りは京都市が「歴史的界隈景観保存地区」として指定した非常に貴重な一画を形成している。古い京都の家並みにまじって明治から大正、昭和初期のそれぞれの時代を表現した建築が連なり、いわば近代建築史の生きた博物館となっている。・・・「京都文化の博物館」を実現しようとするもので、各々の時代において常に文化的に前衛として位置してきた京都のアイデンティティを確立する場として、また新しい文化創造の契機となる場としてこの施設を位置づけている。京都において古くから語られてきた " 寄合いと風流の精神 " がこの京都文化博物館の基本コンセプトとなった。この理念に基づき旧建物を含めた博物館建築そのものが各時代を表象する建築空間展示の一部を占めるという位置づけとなった。
・・・幕末までの京の町屋と明治の赤煉瓦建築と新しく完成した昭和の京都文化博物館が時代を展観する新たな一画を三条通りに付加したと思う。


京都府京都文化博物館

No. e-66　東京 YWCA 会館 ――香山寿夫，　sk9006

この建物は、駿河台のこの敷地にあって、60 年間人びとに愛され親しまれていた旧会館を取り壊し、新たに建設したものである。東京 YWCA（東京キリスト教女子青年会）は、1905 年に創立されたキリスト教に基づく婦人の団体で、文化活動、社会活動、教育活動の幅広い領域で、日本の近代化に大きくかつ独自な貢献を成し遂げてきたものである。そしてその活動は、1980 年代に至って、新たな展開と充実の時期を迎えた。・・・［旧会館は］YWCA の会員やそれを利用する人びとはもちろん、町の人びとからも駿河台の町のシンボルとして親しまれてきた。・・・
YWCA の活動の基本が、キリスト教を基盤とした国際団体、婦人団体であることに変りはない。その活動は大きく分けると、会員活動、教育活動、体育活動、の 3 つと考えることができるが、それぞれが新しい社会に対応して新たな展開を必要としていた。会員活動は新たな国際化の時代、女性の社会進出や高齢化といった状況の中でその活動も拡がり、活発になっている。・・・英語教育や秘書教育は、こうした領域の草分けであるが、各種専門学校における職業教育の意義が再評価される今日の一般的状況と国際社会、福祉社会といった動きの中で、いっそうの拡充が期待される状況にある。拡充の要請は体育施設に対しても同じであって、伝統ある水泳と飛び込みのプールを確保しながら、新たにアスレチック・ジムを設け、都心部にある女子体育施設としての特色を充分に発揮しようということになった。
一方、建物の外に目を向けると、神田から駿河台の上にむかっての最近の変化は著しい。オフィス群が下町の日本橋、大手町から坂をのぼって押し寄せてくる一方で、古い書店街に加えて、若い学生や生徒向きの店も激増し、各種専門学校も増えて昔の学生街とやや変わって来てはいるものの、新たな若者の町と

東京 YWCA 会館

なってきた。一方、大正から昭和の初め、東京でも一番ハイカラな町であった所だけに、当時の建物もあちこちにまだ残っており、そうしたものを再発見、再評価し、大切にしようとする動きも盛んである。「神田学会」とか「神田っ子」「神田ルネサンス」といった活動団体がそうした動きを代表している。・・・
新しい建物の形態は、以上のようなさまざまな条件を統合する形式をもつものでなければならない。・・・
こうした統合を成立させる建築的要素として、私達が設定し、力を注いだのは、通りに面するファサード・ブロックと建物内部の中央に膨れるロトンダを中心としたアトリウムのふたつである。ファサード・ブロックは、基本的に以前の建物のスケールと構成を保っている。
アトリウムは、四角い建物の中に内包されたドームを頂く円形の空間（ロトンダ）を中心とし、YMCA の複合した活動が、ひとつになるところである。
寸法的には、直径 16.4m のロトンダで決して大きいものではない。しかし、その形態の単純さが、親しみ易いスケールを保ちながら大いなるものとなり、・・・・・・人間の行うことは全てそうであるように、建築家の行うことも常に部分的もので、完全からほど遠い。・・・今、私達が構想していた以上に人びとが楽しげにこの建物の中で動いている姿を見て、さらに大きな喜びを与えられている。この建物が、私たちの手を離れ、多くの人びとの中で生きていくことによって、さらにその力が見出され、より完全なものとなることを祈っている。

No. e-67　長野県信濃美術館 東山魁夷館 ――谷口吉生，　sk9007

長野県信濃美術館 東山魁夷館

敷地は長野市の中心部に位置する城山公園の中であり、ここからは近くにある善光寺の塔の一部も望むことができる。・・・
敷地は既存の信濃美術館の横の空地で、一部がテニスコートとして使用されていた。周辺は緑も多く、市民には古くから親しまれている公園の中ではあるが、景観としてはごく日常的風景のものであった。このような敷地の中にあって、既存の信濃美術館と隣接させながら、東山魁夷館にふさわしい新しい環境を周辺につくる必要があった。・・・
建築は、敷地の既存の美術館に隣接する部分を、一辺が 50m 四方の正方形で切り取り、その中に建物を配置した。敷地を正方形にに区切ったのは、増築の部分と既存の部分との距離を近づけながら、同時に両方を自立したものとするためであり、また、厳密な正方形の領域を設定することによって、この計画が永久に不変であることを象徴的に表現することでもあった。

No. e-68　高知市斎場 ――上田堯世，　sk9012

高知市斎場

この建築は今ここに改築され、次はいつの日であるか予想だにつかない。斎場に求められる荘厳さ・静謐さは時がいかに変わろうと、変わりようがない。時により価値感・機能の変わる建築に求められる命では考えられない、永遠の命がこの建築には求められています。・・・
私はよい建築をつくるための言葉として「ピカッと・キチッと・ドシッと」をスタッフと共有しています。・・・それらを備える建築は、物理的にはもちろん意匠的にも機能的にも耐久性を持ち、美しい建築であると信じています。
新しい建物の形態は、以上のようなさまざまな条件を統合する形式をもつものでなければならない。・・・
こうした統合を成立させる建築的要素として、私達が設定し、力を注いだのは、通りに面するファサード・ブロックと建物内部の中央に膨れるロトンダを中心としたアトリウムのふたつである。ファサード・ブロックは、基本的に以前の建物のスケールと構成を保っている。
アトリウムは、四角い建物の中に内包されたドームを頂く円形の空間（ロトンダ）を中心とし、YMCA の複合した活動が、ひとつになるところである。
寸法的には、直径 16.4m のロトンダで決して大きいものではない。しかし、その形態の単純さが、親しみ易いスケールを保ちながら大いなるものとなり、・・・

No. e-69　騰々亭 ――宮本忠長，　sk9103

騰々亭の施工は、日本の名匠、棟梁・中村外二である。彼の信念は、用途・材料・技術を常に認識し、日本の気候を踏まえて日本建築の伝統美を追求する気迫と、将来の変質への配慮を徹底的に考察することにある。騰々亭は、材料の変質を予測した技法、選択など、棟梁の長年の経験を十分に活かした、正の愛情のなかでつくり上げられた建物である。
日本庭園の作庭は、作庭家・庭園史家・重森完途である。「禅語で〈真如〉というのは、宇宙にあるすべてのもの、根源的で変わらない本当の姿のはたらきとされている。」彼のこのコンセプトを形象化し、修景し、おだやかさと気品をただよわせた意匠で統一。・・・「主庭は、露地の南端から新館南端まで、サツキの連山刈込みで、瀬戸内海の島や山々を表わし、庭園中央部は、やはり、島々や半島を色彩の変化と絡めて地割りし」「なあごやかな起伏を見せた野筋に三尊石組みを中心にした石組みを各所に組み、二筋の枯流れに近世初期風の手法で石橋を架け」「東部に厳島神社の鳥居をみはるかし、眼前に海がひろがり、この地のみの風景を借景に、この〈真如の庭園〉がゆたかに展開している」（重森完途／作庭記より）。
すなわち、〈棟梁・中村外二〉〈作庭・重森完途〉、それぞれの専門分野の協同のもとに、騰々亭の建築が組み立てられた。"

騰々亭

No. e-70　修善寺フォーラム 渡月 1990 ――富永譲，　sk9104

・・・木造建築は社会のなかで〈記憶の凝縮器〉として作用している時間的な存在であり、しかも社会はそれを変容させざるを得ない時、木造のこうした建築システムとしての優秀性は注目されてよい。
人間的な環境を形成しようとする時、すべてを新（ｻﾗ）にし、文脈を空白にするほど愚かしいことはない。建築の場合、それは全面的な自由を手に入れたということなどではなく、不可避的に資本の流れを加速するという役割に深くとりこまれてしまうだけなのである。
つまり町は変化しなければならないのだが、変化の仕方の建築的なモデルをささやかながらもここで示してみることであった。歴史をゼロにするのでもなく、保存するのでもなく、中間の道が選ばれた。道路の前面に継ぎ木された鉄骨の部分は町並みのなかで異質な（現代的な）要素である。しかしそれは、変形した地形を占め、既存の木造部分のヴォリュームと接合することによって、すでに矛盾や不整合を環境の遺伝子としのように引き受けることになる。つまりここで生まれる異質さは時間がつくり上げた修善寺の町という環境の大きな文脈と微笑みを交わしあいながら、全体を活性化し、町を変容させてゆくひとつの要素となってゆくだろうという構想であった。
現在の状況と昔からあった状況と照合させ、異なったシステムを突き合わせ、それらを溶接して新しい全体を形づくることは、多くの立派な木造３階建ての残っている修善寺町にとっても、場所の伝統を引き受け、しかも新鮮で豊富な意味ある環境を手にするための有力な方法であろうし、日本の町づくりにとってそれが意味深い人間の環境に到達するためのやはり一番容易な方法であるように思われる。

修善寺フォーラム 渡月 1990

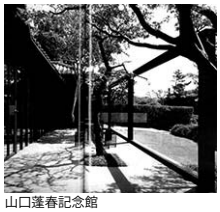
No. e-71　脇田美術館 ――鈴木秀文・小菅克己／鹿島建設，　sk9107

軽井沢の駅からほど近く、「三笠ホテル」に抜ける大通りからやや奥まった一隅、その賑やかさと微妙に接しながら、旧軽井沢のただずまいを色濃く残した林の中に、脇田和画伯の作品を展示するこの美術館は建っている。
その立地ゆえに周囲の自然は、近い将来、少しずつ変質することが予想される。その中で、軽井沢という環境が醸成したきた文脈を表徴し、持続させ、その新たなる展開をも予感させる美術館を私たちは想い描いた。
敷地中央に据えられた既存の吉村順三氏設計のアトリエを兼ねた山荘を取り囲むように、ヴォリュームと形態の大きく異なる３つの棟を配置した。
ヴォリュームの異なる３つの棟＝展示室棟、ギャラリー、別棟は、柔らかく連繋し、時に分節され、微妙にずれ、その隙間からさまざまなコンポジションの風景を切り取り、透明な光を舞い込ませ、清澄な空気と交錯する。軽井沢という環境と多様な応答を繰り返すことで、新たな文脈の展開をも予感させる絵画と人間の邂逅の舞台となる快適で親密な美術館を形成し得たのではあるまいか。

脇田美術館

No. e-72　山口蓬春記念館 ――大江匡，　sk9112

時代や様式によって異なる複数の材料や構成要素・形態を多相的に「かさね・あわせる」この手法は、新たに深度のある空間をつくる可能性をもっている。これは日本語が、漢字、平仮名、片仮名などの、それぞれの時代や異文化がつくり出した体系をかさねあわせているがゆえに、言語密度が高いことにも似ている。
・・・「かさね・あわせ」の手法は、単に増築をするということではなく、このように内部の構成要素を含めて多相的な展開をすることにより、時と文化を「かさね・あわせ」る有効な解決になるのではないだろうか。


山口蓬春記念館

No. e-73　日本航空チケッティングロビー ――伊東豊雄，　sk9112

今回発表している 4 つの作品は、いずれも「映像的」という言葉で括ることができると思います。
・・・本当はビルのファサード自体にエフェメラリティをつくり出せればいいのですが、それができないので、内部にもう一枚スクリーンをたてて、そこにプロジェクションをするといったような、建築のシュミレーションとしてのインテリアをつくったわけです。・・・エフェメラルな、現れては消え、消えては現れる風景、ここではすべての映像あるいは風景は流れていて、それは絶えずノイズの中に消えていく、また、流れの中に解けていく、という私の建築的イメージを映像を使うことで体験できるようにしようと試みたものです。・・・映像は当然実体のないわけですし、一方実体としての建築はどのようにつくろうが実体であることには変わりがなく、一度つくってしまったらそれは不動のものとなります。その矛盾する条件の中で、どこまで映像のような、あるいはフィクショナルなイメージを建築に盛り込めるかということが課題になります。
映像的建築、という言葉は、ひとつにはおそらく、建築になるかならないかというきわどい辺りを、探っているところに向けられるものだと思います。どんなに、えげつないほど消費的な世界であっても、そこに生活のエネルギーがあるとすれば、そのエネルギーをよそよそしい建築建築した建築の中に入れ込んで、とりすました表情を取り去るとか、あるいは土俵周辺にずらしていけるか、ということがテーマだといえます。別ないい方をすると、いまの消費社会がつくり出そうとしているかつてわれわれが味わったことのない新しい生活、それはｊまだうまく言語化され得ていないし、ライフスタイルになっていないけれども、その新しい生活を、新しい建築の中に投入しないと、建築は面白くなっていかないと思っています。新しい都市生活、それは消費社会の中にありながら、すべて消費されるのではなくて、そこにあるテクノロジーを媒介にした空気をどうやって視覚的に空間化しうるのか、生活という言葉がいいかどうか分かりませんが、なにか人間の行為の変化に対する発見がないと、絶対に新鮮な建築はできてきません。かつてのモダニズムとはまた違う、新しい生活革命がこの都市ではすでに始まっているはずです。・・・そこに映像的建築という、ふたつの矛盾する言葉をひとつにしようとしている建築館があるわけです。

日本航空チケッティングロビー

No. e-74　ヒルサイドテラス第 6 期 ――槇文彦，　sk9206

モダニズムと都市の風景の構築は私にとって、この数十年間常に一貫した課題であったといえよう。

ヒルサイドテラスの計画には最初の計画（1967 年）から第 6 期計画の完成（1992 年）までちょうど 25 年、すなわち 1 ／ 4 世紀の時間が流れている。その時間の流れとは、東京という巨大都市の、ひいては代官山という地域における流れであった。また、それは同時に私自身の意識の中での時間の流れであり、その反映としてのそれぞれのフェイズにおける建築の様態の変化でもあった。

25 年前のこの地区は、まだ武蔵野の面影が強く残っていて、雨でも降ると強い土の臭いが立ち上がってきていた。高い欅の梢が空に向かって力強くそびえ、それらが低い町並みにコントラストを与えていた。第 1 期の計画は、・・・近代都市デザインの典型的なヴォキャブラリィの集積であった。しかし風景としてのもっとも強い印象は、おそらくその簡明な幾何学性と白さであったと多く

ヒルサイドテラス第 6 期

の人びとは述べている。おそらく高い緑の影を背景に、水平に低く伸びた白いマッスを、東京では比較的に整備された広い道空間を介して鑑賞し得るという、そうした機会がそれまで少なかっただけに、こうした要素の組合せがつくり出す風景が、一層の新鮮さを与えたのではないだろうか。
第 1 期に続いて 4 年後に完成した第 2 期は、・・・4 年という〈時間〉がもたらした状況――たとえばプログラムの変更、周辺地区の発展、建築家の意識など――の変化がそこに強い影を落としている。おそらく第 2 期の終わりまでは、こうした結果としての incremental（部分的）なプランニングを肯定する立場であり、その中での〈時〉の重さを認識したといってよい。しかし第 3 期以降、明らかに私の意識の中で、〈時〉というパラメーターをより積極的に計画の中に位置づけようとする意図が強くなってきた。
第 3 期における山手通りに面した棟の幾何学性、スケール、外装材の取り扱いなどを通して、第 1 期・第 2 期と異なったファサード、空間に〈時〉を刻むことを、より積極的に行っていった。
ヒルサイド・アネックスとよばれる第 4 期は、山手通りから少し奥まった、中目黒の方へ降りていく道の両側に建てられている。第 3 期を担当し、その後独立した元倉真琴が主宰するスタジオ建築計画作品である。
・・・ここでは〈時〉は単に時間的な経過でなく、ふたちの建築家の間に存在する〈時〉＝〈世代〉をパラメーターとする差異性であり、ヴァリエーションであったと読み取ることができる。私はこのように、関係の存在がつくり出す〈無関係〉によってつくり出される群が、実は都市における集合のあり方に新しい幅と可能性を与えると考えたい。このことは、第 1 期の道路の反対側に、過去数年間に建てられた 3 つの建物群を見たときに一層はっきりする。彼らは単に関係のない無関係性を互いに主張しているにすぎないからである。
この 25 年の間に、代官山のこの地区も、交通量の増大、開発、そして建築規準法の改正（第 1 種住専から第 2 種住専―― 10m 高さ制限の撤廃と容積率の増大）によって町の様相は、先に述べた静かな屋敷町から繁華な通りへと激しく変貌してしまっている。第 6 期の計画に先立って、ここでは何を表現すべきか、あるいはどのような風景をつくり出すかについて、さまざまな想いが去来した。その中では、当然、ヒルサイドテラス計画の中で守ってきた〈時〉をひとつのパラメーターにすると共に、何か〈現在〉でありながら、ここにひとつの締め括りをつくらなければならないということがあった。
第 1 期から第 6 期までのプロセスを改めて振り返って見るとき、次に述べるパブリック・スペース、あるいはモダニズムのひとつの展開と併せて、自分なりにひとつの " 時の風景 " をしるしていったといってよい。
現在の東京のように、都市形態の規範の多くが失われてしまった中で、冒頭の横浜のスピーチ［カオティックな都市の状況のなかで都市デザインすることについて語っている。］でも述べているように、むしろヘテロな要素に満ちた現代都市の中で建築家には " 新しい風景の構築 " が求められている。それは単体であろうと、あるいは複合体であろうと、同じ課題ではあるが、その風景を通じて新しい領域が都市の中につくられていく。

No. e-75　TIME'S II ――安藤忠雄，　sk9207

都市空間が、孤立した単体の建築物の入れ替えで窒息させられていくのではなく、周辺環境を取り込み活性させつつ連続して発展する建築で、生気に溢れた空間へと変貌していかなければならないという考えを具現化したものである。
・・・ I 期の空間と川の流れが平行してつくる水平性に対して、強い求心性と垂直性を挿入することで新しい空間の質をもらす。
・・・この新しく挿入された垂直軸は、既存の空間を質的に拡張させるばかりか、川の表情も変貌させ、さらに今後周辺環境がより豊かに発展する契機となる刺激を場に与えるだろう。都市における人びとの生活が自然とさまざまな方法で関係づけられ、かつその自然の力が都市に生気を吹き込み生まれ変わらせていく。「TIME'S」、そして今回の「TIME'S Ⅱ」は、都市と自然の関係を時間、空間の中で活性化する刺激剤として建築を社会に対して新しく機能させる試みであった。

TIME'S II

No. e-76　ささき別荘 ――古谷誠章，　sk9209

ささき別荘

街は本来、性質の異なるものによって織りなされている。私たちは銘々がその断片を摘み取り、はぎ合わせた中に、それぞれ自分の都市空間を紡ぎ出す。また街は間断なく変容し続けている。そのさま変わりは、あたかも生物の世代交替のように、個々別々のライフ・スパンによっており、普通は同時に街全体が一新されることはない。建築や都市空間におあっても、その異なった諸世代が重複することで、文化の継承や記憶の連鎖が可能となる。そのためには都市にも建築にも、「更新」に備える何らかのアイディアが必要だ。さもなくば家や街はその都度、その骨組みごと、ご破算にされざるを得ない。
ここでの試みはおおむね次の二点に要約できる。ひとつはこの真新しい街に対して、いかに古くからの要素 –―数寄屋風の旧棟や山の斜面に続く庭など―– を参加させるか。割烹旅館は一般的には非日常的な場といえるが、敷地に塀などを巡らさず、表のみちからも奥の庭を垣間見させることで、近隣の住宅地に日常的に生活する人びとに対しても、胸襟を少し開いたようにしたかった。フェイクのような街路空間に、年月を経た個性的な表情がこぼれ出す。
もう一点は、建築空間の基本的な「構え」を崩さずに、使われ方の将来的な変化に対応するプログラムである。いかに日本料理の伝統を重んじるにしても、営業形態が今から 30 年以上先まで、まったく同じ形である保証はない。そこで建物本体に基幹構造としての RC 架構と、より細かい空間をもたらす鉄骨や木造の部分とを考えた。特に庭に面した客室の箇所では、恒久的な架構は厚めの壁と、片持ちの中空スラブのみとして、その他一切の要素は交換可能とした。・・・既存の建物はこの種のものによくあるように、木造の棟を幾度か継ぎ足してできていた。それは一見不統一なように見えても、時間をかけて緩やかに変形しながら、庭や座敷の関係を形成してきたともいえる。この建築のいわば「枝葉」に当たる部分については、今後もそのように姿を変えていけるようにしたかった。・・・この建築は、室の随意的な生成消滅のプログラムを内蔵している。
街に連なる多様な個々の要素は、相互に複雑に作用し合いながら、休みなく変容する。ここで述べた二点をさらにひと口に要約すれば、空間の「緩やかな更新」の模索である。

No. e-77　熊本県立美術館分館
―― M. ラペーニャ＋ E. トーレス，　sk9212

熊本県立美術館分館

これら 4 つの空間を統合させるためのコンセプトですが、それはこの建物をどのように熊本城と対話させていくかといういことです。形態、また動線の演出をどことなく熊本城のそれと似せていくことと同時に、老朽化もしくは時と共に味を増すことが可能な建物をつくるということです。外装に使われた熊本産の石や銅板が風化していくことで、熊本城と共生していくことが、私たちの狙いなのです。

No. e-78　武者小路千家 起風軒 ――川合智明／竹中工務店，
sk9404

武者小路千家 起風軒

この建物には、外部を含めて３つの “ フィールド ” をつくっている。ひとつは階段前の地上のフィールド、ひとつは２階部分のフィールド１・２、ひとつはその上階のフィールド３である。そこに透明な２枚のヴォールト状の屋根を載せ、空との境界にしている。視覚的には空と内がつながっているが、屋根の扇型垂木が影をつくり、内には直接自然光が届かないように設計している。
荒々しい木肌の壁と透明なガラスの壁の対比、透き通った扇形垂木の屋根から降り注ぐ太陽の下で自然と共存しながら、この建物と共に時の流れを刻み込ればと思っている。

No. e-79　楽蹴舎 ――中東壽一，　sk9405

武者小路千家は、利休より 14 代にわたって茶の湯の正統を継承する三千家のひとつであり、冒頭の一行はその精神性と共に 400 年以上も継承され、現代においてもわれわれを啓発する力をもつ。
・・・その姿は伝統の技法によって既存のたたずまいと同化させると共に、露地からの連続性を重視し、織部釉の敷瓦を延長して玄関まで導いている。
多人数を主体とした大寄せの茶会や、日常の多様な稽古といった現代的な茶の湯への対応を、小間が中心の既存の茶室に頼っていくのは無理があった。むしろ伝統の名席を痛めず、家元の活動の幅に合った多様性のある場所をしつらえることが希求されていた。8 畳台目の茶室は、床の間以外のすべての面が開放可能であり、重層する建具によって緩やかに仕切られている。・・・
伝統の茶室と露地の関係から不変のものを見極め、それを継承しつつ時代と個性に応じて変化を求めていくことは、茶の湯の精神にかなうものであろう。

楽蹴舎

No. e-80　日本理容美容専門学校 ――武市義雄，　sk9408

この専門学校が建つ敷地は、まさに現代都市の混乱とした状況の真中に位置しているといえる。準工業地域に指定されている敷地の西側には、JR の環状線が高架となって走っている。現在 11m 幅の全面道路も近く 30m に拡幅される予定で、東側のすぐ近くまで道路の拡幅工事が完成している。周辺には、工場と木造住宅、マンション、店舗、学校などがモザイクのように入り乱れて、都市の急激な変貌にさらされている。この周辺が近い将来、どのような都市景観になっていくかも想像できない。多分、この混乱を抱えたまま変化していくというのが現実なのだろうと思う。
・・・現実の混沌とした都市の状況を認識し、受け入れながら、混沌とした状況から毅然とした差異を設ける表現を形づくり、遠くの山並みや光の変化に呼応する新たな都市の風景を形づくろうと考えた。
ひとつの方向からすべてが理解できる建築ではなく、見る角度によって変化する形態をもち、光によって変化していく素材と色彩を選択し、軽やかに浮かぶルーフラインや、垂直に伸びる塔のイメージなど、複合する不整合の形の組合せによって、相反する要素をひとつの建築に凝縮させることができた。

日本理容美容専門学校

No. e-81　千葉市美術館・中央区役所 ――大谷幸夫，　sk9504

この提案は、近年の市街地の変貌や、それぞれの歴史を担ってきた古い建物の保存のされ方に対する、私のささやかな異議の申し立てでもあった。
改めて指摘するまでもないが、戦後のわが国が達成した驚異的な経済発展を受けて、大都市の中心街では高架道路の敷設や建物の更新が広範に進められ、街はとどまることもなく、今も変貌を続けている。とりわけこの 10 数年は、建築の高層化・大規模化の傾向に拍車がかかり、多くの地点で巨大建築群による市街地空間の占有が目立っている。そしてこの変貌は当然のことのように、都市をこれまで支え、組み立ててきた既存の建物の消滅を意味している。つまり、都市から歴史性や由緒が拭い去られることで、都市が身につけていた個性は力を失い､現代風一色に塗り替えられることで､どの都市も同じような相貌を呈し、文化としての地域も流出・解体している。
変貌を続ける現代都市にあって、私が是正したいと願っていることも、この一連の歴史性の喪失の問題であり、とりわけそこに見られる思考と行動の様式の問題である。現在では新しい時代の要求を満たすことが正当であり、妥当性が認められると、それを実現する際に、それまで街を支え、組み立ててきた人びとの営みや建物が抹消されることになっても、やむを得ぬこととする考えが罷り通っている。本来、新しい時代要求を満たすことと、都市を歴史的に支えてきた営みやそれを体現している建物とは互いに別個な存在理由をもつものである。
新しい建物の強靭なフレームの中に旧川崎銀行を抱え込んでいるように見えるこの状態は、・・・
ここに試みられた鞘堂形式はこれがはじめての事例であるが、発展を続ける現代社会が引きずってきた歴史性の喪失、という体質上の問題に対する私なりの取り組みであり、今回限りの特殊解に終わらせることだけは回避したいと願っ

千葉市美術館・中央区役所

ている。振り返ってみると、この方式の骨子は、設計に先立って存在しているもの、すなわち歴史的な建物や成果を眼前に据え、それに何をなすべきか、何ができるかを考えることであった。そしてすべての建築はそれに先行してすでに存在している建築や都市や自然の中でつくられるものであり、先行してあるものの保全・修復を図り、何がしかの現代の成果をそれに付加することでそれを補強し、あるいはそれと連係することで豊かさと確かさを獲得する。それが建築の設計というものであり、そこで未来に向かう開発行為と歴史性の保全は、互いに相補的であることが期待できる。

No. e-82　住居 No.17 ――内藤廣，　jt9504

この建物での私の主な仕事は、どこまでかつての建物を利用できるか、であった。骨格や利用可能な箇所は残し、それ以外のところはできるだけ控えめに現代の技術で補うことをこころがけた。全体としては主架構を中心に中身を残し、それを外皮で覆うということになった。過去の建物の骨を覆う黒いシェルター、といった感じだ。
過去の建物の骨を覆う黒いシェルター、といった感じだ。過去という時間を今という時間につなぎ止められたかどうかは定かでない。とりあえずつなぎ止めた時間と小清水氏がこれから生み出していくであろう時間との共振が、この建物の本当の空間をつくっていくのではないかと思っている。

住居 No.17

No. e-83　ホテルブレストンコート ――東利恵，　sk9507

バブルの時代には、新しいもののために多くの建物が壊されたが、そのうちどれだけが寿命をまっとうできたといえるのであろうか。
年月をかけて生まれ育った石や木を贅沢に使った商業空間が、躊躇もなく数年事に壊され、築後 10 年もたたない建物が、駐車場に変わっていった。そんな時代に対する疑問も経済理論に押し潰され、勢いを止めることはできなかった。流行は数年の単位ではなく数カ月、数週間の単位で生まれては泡のように消えていった。
しかし、数年前にバブル神話が崩壊し、経済は閉塞し、押し込められていた疑問への答えが、再び問われる時期がきた。このようなときに、このプロジェクトに巡り合った。
ホテルなどのリゾート空間では、一度定着した印象が大事な一面、また一方で古くなることも避けて通れない。そこで、素材の選択では、空間の基本的な構成部分には、石や木などの寿命の長いものを用い、塗り替えや模様替えの予想される部分には、色をカラフルに配色したり、家具やグリーンで演出している。これによって、空間自体の寿命を伸ばし、将来の軽微な模様替えで印象を新たにできるのでなないかと考えた。

ホテルブレストンコート

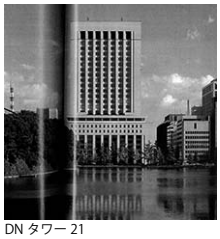
No. e-84　下北沢 S ビル ――飯田善彦，　sk9511

今まで住居があった場所が更地になり駐車場ができる。しばらくするとシートに囲われて、いつの間にか建物が立ち上がる。わずか 1 年足らずで風景が一変する。突然の変貌の相乗的な繰り返しが、都市をつくっているということができる。このように日々加速するスピードで変化している都市において、もはや誰も永久不変の建築や環境を信じてはいない。そのような意味で、建築は一個の現象にすぎないのである。・・・都市において建築を構想することは、ひとつの現象を引き起こすことにほかならない。しかもその現象は、今や多重で複合的なさまざまな関係やストーリーに縁とられている。そのような認識のもとに、敷地をとりまく文脈や、できるだけ先の未来を予見しつつ、スタンディングポイントを明確にしながら、注意深く現象を発生させることに留意しなければならない。
・・・下北沢 S ビルの、電車から見える北側のファサードに表現された 4 層分の透明感のあるグリッド状のカーテンウォールと、その上に屹立する、内側の住居の気配がちりばめられた壁面。これらを含むすべての断片とその集積が、この現象としての建築を成立させている概念を、できるだけ明瞭で強度をもったメッセージとして発信し続けられるように用意された。

下北沢 S ビル

No. e-85　DN タワー 21 ――堀田正／清水建設，　sk9601

このふたつの建築も戦火を経て現存した数少ないもののひとつであった。
・・・50 年以上を経て、オフィスとしての機能低下は避けられなくなったが、両社にとってこのふたつの建物は本社ビルとしてそれぞれの企業の歴史を刻み込んだというだけでなく、日本の歴史に果たした大きな役割についての深い認識があった。・・・
①日比谷通りに面した第一生命館の西側部分を保存する。
②西側正面の外観と統一の取れた北側外壁そのものを保存する。
（第一生命館の内部改装したという記述あり）
デザイン的にいささかの端正さをも失わない保存部分は・・・
・・・全体街区は西側日比谷通り側の保存第一生命館と、東側の 21 階の高層棟新館から構成され、保存される建物の 31m の高さの低層部分と高層部のデザインを統一させるという手法を取った。50 年以上を経て、デザイン的にいささかの端正さをも失わない保存部分は、これからもより永い生命をもち続けるこの建物のデザインの方向性を示唆していたともいえる。


DN タワー 21

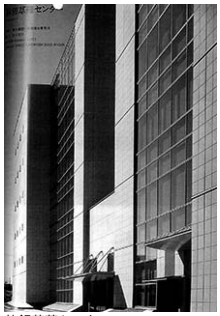
No. e-86　ミュージアムパーク アルファビア ――武田光史，sk9607

芝の庭、ボードテラス、開放的なガラス張りの煉瓦の壁で手厚くつつまれた空間のレイヤを、自由に開いたり閉じたりすることで、季節の変化や一日の時間の流れに応じて、のびやかで快適な空間を柔軟につくり出すことを意図している。

ミュージアムパーク アルファビア

No. e-87　静銀草薙センター ――江中伸広、加野祐／清水建設，　sk9612

同じアーキテクチャーといってもコンピュータの進化のスピード、進化の方向についての予見の難しさは、建築とは比較にならないことは明白である。そこで現在予測し得るものに大しての確実な解答を示すと共に、将来コンピュータの進化の中で予測し得ない事態に対し、この建物が快適なオフィスビルへと変身できることまでを想定し、設計を進めた。
・・・外壁側に設けられた電力系シャフトからのワイヤリングと中央からのワイヤリングは架構の風車型に合わせて櫛形にレイアウトされており、ワイヤリングの交差がなく、保守性・更新性を向上させている。また、空調のダウンブローの風向も、風車型の架構方向に合わせており、風量障害の改善も図られている。構造架構、空調システム、ワイヤリングが一体となったこのシステムで、コンピュータの冷却およびワイヤリングが効率よくしかも保守性、更新性を満足させている。


静銀草薙センター

No. e-88　蔵史館 ――林寛治，　sk9702

欧州諸都市の歴史的中心市街地地区の伝統建築の保存再生については既定のことであり、歴史・伝統的外観を維持しながらも、内部は個人の意思で現代の生活に適合するようにある程度自由な改造が可能である。
これらの内部空間の中には、公共施設をも含め洗練されて劇的な印象を与える建築が数々見られるが、静かな山間の町である金山町の例では、ともすれば簡単に捨て去りがちな町の先達がつくり上げたささやかな遺産を素朴に再生しても新たに機能するのだ、ということを改めて町民に発信することを目的とした。蔵史館ホールは、町内有志により企画された定期の催しでのコンサート・講演・集会など、さまざまに活用され活気を呈しいていると聞く。

蔵史館

No. e-89　東京大学１号館 ――香山寿夫，　sk9703

東京大学１号館

大学で建築を教えつつ、その空間の設計にたずさわることができたことは、教師としてまた建築家として、幸せなことだったと感謝している。自ら望んでも、計画しても、こうした機会が得られるものではない。・・・
人が人を教えることは、どういうことなのであろうか。学生は教師から、一体何を学んでいるのであろうか。そして大学は何を成すところなのであろうか。大学に対する社会の批判はますます大きい。社会は大学に何を望んでいるのだろうか。そうしたすべてのことに対して、建築のおうべき役割とは、一体何なのか。
・・・私がかかわり、行ってきたことを踏まえて、気づいたことを、いくつか整理して述べてみたい。

［大学をとりまく社会的状況が変わってきていること、それにより学生の気質も変わってきていることが語られている］

大学とは、学生と教師が同じく空間の中に共にいて、考えを交わす場である。大学の本質はそこにあり、そのことが欠けていれば、それは大学とはいえない。したがって大学の空間、あるいはキャンパスとは、そうした学生と教師の共同体のまとまりを形成する囲いでなければならない。
・・・80 年代、都心のいくつかの古い大学が競って郊外に脱出した。大学が古い殻を脱ぎ、新しい時代に即したものになるためには、キャンパス移転は必須の条件であるかの感すらあった。東京大学においても、多摩や立川や幕張への移転が、大々的に検討された時期である。しかしそれは幸いにも、東大に関しては実現しなかった。・・・大学の空間の、真の豊かさ、真の個性とは、時間と共にしか育ち得ないものであることを誰もが心の底で感じていたのである。人が絶えず変わるように、大学も常に新しくなる。しかしもっとも新しく変わるためには、もっとも変わらずに続くものが必要である。変わらず続く存在のうちでもっとも大きいのものは、場所であり、その上に建つ建築である。・・・
東京大学は、1922 年に、新しいマスター・プランを決定した。それは、東京大学の中心が本郷キャンパスにあることを宣言し、そしてその既存の緑や建築物による空間を保存しながら、施設を新しくしていく具体的な方法を示した画期的なものである。・・・工学部 1 号館は、歴史的な建築を保存しつつ新しくする計画の第 1 号である。

No. e-90　伊豆の長八美術館 ――石山修武，　sk9709

伊豆の長八美術館

・・・企業社会にある大量生産大量消費時代は音もなく崩壊している。渦中にある脱工業化社会も驚くほどに退屈な時代であることはどうやらすでにはっきりしてしまった。建築デザインがその退屈さをすでに身にまとい始めている。使われる素材が異なるにせよ今はミース風デザインが氾濫する時代だ。何故氾濫するのか。デザインは情報である。そして情報は情報を模倣しやすい構造をもっている。つまりあらゆる情報の力は多様化を目指すよりも、どうやら巨大な均質の母体に顔を向けているようなのだ。それ故に現在の建築は必然的に類似性を帯びる。その類似性はアメリカ文明ベースでもある大量生産大量消費の形式の中にあるものだ。戦後五十年、私たちはアメリカ文明を学び模倣し続けてきた。それは歴史的自然とでも呼ぶべき流れでもあった。しかし、その流れはすでに私たちに固有の風土に満ち溢れ過ぎている。臨界点を越えてしまっている。
伊豆の長八美術館の全体が表現しようとしているのは少量生産多品種の形式である。

伊豆の長八美術館にはチョットけげんなところがあるな、というのが増築を経て得た実感だ。ここにはわれながら過剰な形の群れがある。過剰であることに問題はないが、過剰にさせている部分部分そのものには問題がｓりそうだ。特にほとんどフリーハンドで描いてしまった雲形や、いくつかの曲線にそれがいえる。・・・ある部分はもっと突き進めてレッキとした装飾にしてしまえばよかったのだ。・・・

伊豆の長八美術館の正面の表情はまさに全体が装飾そのものだったのだ。それで沢山な人間がイイヨといって名所になった。今ではそれがよくわかる。近代

建築への人びとの無関心をわずかなりとも超えることができていた。
正面に並べて建てた収蔵庫には町の人から夫婦亀だとか鶴亀で目出たいとかいわれた形ある装飾性はない。

所謂ポスト・モダーンの建築は終わった。次はデコンで、それもすでに過ぎたという俗論がある。まったくモノ忘れの激しい人間が多いなと思う。ポスト・モダーンが提起している問題なのだ。簡単に通り過ぎたと片付けられては困る。
ポスト・モダーンが提起した問題は今でも解決されてはいない。その最たるものが建築それぞれの個別性の問題であり、その突出した問題としての装飾の可能性であった。誤解を恐れずにいえば、あえて正面に並べて増築した収蔵庫で取り組んだのは装飾の問題であった。伊豆の長八美術館の正面の表情はまさに全体が装飾そのものだったのだ。それで沢山な人間がイイヨといって名所になった。今ではそれがよくわかる。近代建築への人びとの無関心をわずかなりとも超えることができていた。
正面に並べて建てた収蔵庫には町の人から夫婦亀だとか鶴亀で目出たいとかいわれた形ある装飾性はない。あるのは、まださささやかな試みではあるが時間の装飾と呼びたいモノだ。・・・

私にとって確かになったのは四半世紀前の伊豆の長八美術館も日門湾の廃船も同じような時間の形だということだ。・・・

・・・それは現代の装飾として強い力をもつことになるのではないか。時間と共に消費されていきようのない物体、消費の対象ともならずに、しかも人びとに深い安心や時間だけが生み出すことができる歴然たる記憶への手がかりになってくれるのではないだろうか。どんなに時代が混乱したままで流されていても、人間は誰でもっそれぞれの記憶をたよりに生きている。"
" 今までほとんど 100 年もったのだから、もう 100 年なんとか生き存えさせたいと思った。

No. e-91 「ゼンカイ」ハウス ――宮本佳明， jt9711

・・・修繕すればよい。正確には修繕する意思さえもち続けていればよい。修繕する意思をもち続ける限りにおいて、モノはどんなにコワレたとしても無用にならない。モノとはコワレルものなので修繕して使う、というのと、モノはコワレないものだから、もし万が一コワレたらそれはもうモノでない、というふたつの思想的背景の違いがもたらす結果の違いはあまりに大きい。一方は存続であり、一方は廃棄である。・・・ただ背負うこと、生きている限りにおいて、われわれにはただ背負い続けることだけが許されているのかもしれない。

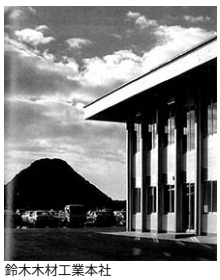
「ゼンカイ」ハウス

No. e-92 熊本県立天草工業高等学校 実習棟・体育館
――室伏次郎， sk9802

既存建物を残すことの意味――風景を継承する。前述のようにこの計画は、既存建物を残しつつ、将来は解体する予測のもとにその将来の最適解としての計画を、そしてそのプロセスにおいても望ましくある解を求められている。・・・元来学校とは、地域の中で特異なスケールをもった公共的なオープンスペースとして風景を形成してきた建築としてシンボル性をもつものであり、特に工業高校とはその職能としての要素が地域社会との結びつきの意識の高い歴史をつくってきた。そのようにして人々の記憶の留まる歴史的時間をつくってきた空間と考えることから、すべて建て替えへんかしてしまうことを前提とする方法に替わるものが必要であると考えた。
既存建物は、その物理的条件の判断により、解体もあり得るものだが、改修継続使用するか建て替えかいずれの場合にしろ、それまでの時間を継承するあり方を前提とした方法の発見により、人びとの記憶に残る風景の断絶を避けることが、この美しい特徴的なこの場所の計画として重要であると考えた。
・・・校地、瀬戸、里の風景という東西の風景の軸を意識化することを目指した。・・・このようにしてこの場所の特徴である美しい水際に恵まれた空間は、この地の風景の意味を明らかに実感する場所として、周辺の巨大な橋、瀬戸の水面の広がりに対応した、スケール感のある場をもつ、水際のプロムナードとして、学校の空間をそのまま市民に開放されるものとすることが計画されている。・・・

熊本県立天草工業高等学校 実習棟・体育館

No. e-93　鈴木木材工業本社 ――城戸崎和佐，　sk9802


鈴木木材工業本社

たぶん、時間はどこにでもある。たとえば夏の強い日差しに気づくのが、庇の下のひんやりとした日陰でだったりするように、光や影を通過するときにわれわれは時間を、一瞬知覚する。連続する空間の中の不連続な時間、その時間がどこにでもある。そういう場所をつくろうと思った。
東西南北の 4 方向ごとに色分けされたトップライトから落ちる光や、引き戸のアクリルや手摺の有孔合板を通過する光が、時間と共に建物の中を移動していく。この光は外部に満ちている光と何も違わない。建物はむしろ何もコントロールしていない。人びとは、建物に出入りし、建物の中を移動するたびに、いくつかの光を横切る。そうして、そこにある時間を、瞬間、知覚するのである。

No. e-94　JR 東日本本社ビル ――小倉善明／日建設計，　sk9805

JR 東日本本社ビル

建築の耐震性の向上など建築技術の進歩により、建築の長寿命化は可能となったと考えてよい。特に鉄骨構造は、コンクリートに比較して耐久性に対する信頼性が高く 100 年の寿命をもたせることはできよう。・・・長寿命の建築をつくるには耐震性があることはもちろん、フレキシビリティのあること、あるいは空間の自由度のあることが大切である。・・・天井の低いオフィスビルでは情報化に対応する快適な空間はつくりにくい。逆に、天井（階高）が高ければ建築は用途が変わりながらでも生き長らえることができる。
改修をしやすくすることも建築を長寿命化する上で必要である。構造も一部のスラブを取り外し、階段を取りつける程度の変更は可能なことが望まれる。20 年ごとに予想される設備の大改修は、用途の変更を伴えばもう少し複雑に、かつ頻度も多くなる。そのためにはより大きな貨物用のエレベータを設置すべきである。
建築にも育つ環境がある。建築の環境は都市計画によって左右される。都市計画の変更があればその土地にある建築も変化せざるを得ない。住宅地が商業地区に変われば住宅は壊され商業施設やより大きなマンションが建設される。将来、都市機能が十分に発揮できるように都市計画が立案されるのであれば、建築が長寿であるためには都市計画は 100 年の計でなければならない。・・・戦後、都市計画に基づき良好な都市環境をつくるための努力がなされたが、経済成長の波は予想を超え、都市は拡大し都市環境も郊外の環境も悪化した。
・・・長期にわたって享受できる快適な地域環境を、自治体は住民に保証すべきであるし、建設する側は快適な都市生活を長期にわたって過ごすことのできる建築をつくるべきである。
JR 東日本本社ビルは、・・・本社ビルとして長寿命建築を目指すものである。時代が経過するにつれ、建築の多くの部分や設備機器が更新されることになろうが、基本的な部分はそのまま残ることになる。・・・

No. e-95　清涼山霊源皇寺庫裏 ――山口隆，　sk9806

清涼山霊源皇寺庫裏

・・・霊源皇寺は、仏殿、書院、宝物殿、庫裏、四季折々に変化する 4 つの庭で構成されている。既存建物は数世紀を経ており、老朽化への対応が必要とされた。
この霊源皇寺は修学院離宮を造営した後水尾上皇が､禅僧の仏頂国師（一絲文字）のため、1638（寛永 15）年、西加茂の地に建てられたものである。国師の死後、上皇自らがご尽力を注ぎ、国師の遺跡を再興させるため、1671（寛文 11）年御所の清涼殿を移建し仏殿が建立された。1678（延宝 6）年には上皇より最初の勅願寺としての命を受け、現在も天皇家との由緒が引き継がれている。
境内をはじめて訪れたとき、仏殿（本堂）が二重屋根の優美な姿を見せていた。下段の反りの瓦屋根に対し、上段の起りの屋根はもともとは柿葺の屋根を、1780（安永 9）年以前に瓦葺きに変えられたものである。今回の屋根の改修工事ではその名残である柿葺の一部が発見された。あきらかに、建物は時の流れの中で呼吸をしていたのが感じられた。今回の設計では過去から連綿とつづく時の流れの中に、現代という時間と空間を重ね合わせることで、過去の存在が鮮明化されることを求めた。それが先達の遺跡に接する際の礼儀であり、歴史と対峙する際の作法であると思われたからである。建築の創造とは時間軸の中のひとつの変曲点のようなものである。それぞれの変曲点において屈折と差異

が生じ、それは接続詞のように全体性の中で過去を未来へとつなげ、絡まりながらテクスチャーを形成し歴史を編み上げていく。
歴史性を有する場所に新しいものを挿入するとき、そこに貫かれる軸を読み取り、それを継承していかなければならない。こうした状況において解読されるべきものこそが眼に見えぬ論理すなわち場所の固有性である。この場所がもつ眼に見えぬ論理の発掘がはければ、いかなる構築も歴史性から乖離してしまい過去との連続性を見失ってしまう。また未来への可能性が意識されずに過去の論理のみが保存されるだけでは、時間の流れを凍結することでしかない。地上の庭は白い玉砂利で敷きつめられている。新しく重ねられた透明で白い空間は、この庭を介して、時を経た建物と呼応し連続する。全体は、西加茂の豊かな自然に包まれて、新たな時を刻み続けていくであろう。

No. e-96　聖台病院作業療法棟 ――藤本壮介，　sk9811

・・・敷地は北海道の田園地帯。
・・・木張りの素朴な外観と変形切妻の形態とが、田園の納屋のようなただずまいで、時と共に周辺の風景に溶け込んでいくことを意図している。
僕はこの建物において「姿」という言葉を意識した。「形」がその物自体の性質を表すのに対し、「姿」という言葉は、建物と周りの環境、時間的変化などの関係全体性を表現している。それならば、建築のもつあらゆる性質は、最終的に「姿」に凝縮するだろう。

聖台病院作業療法棟

No. e-97　鹿児島カテドラルザビエル記念聖堂
――阪田誠造／坂倉建築研究所，　sk9911

コンペ後の実施設計では、施工期間や工事費予算などの制約から、宗教的象徴性をもっぱら色彩（材料としてステンドグラス）中心に考えることにした。（「赤・青」２色の構成である。日本のキリスト教殉教者の犠牲、キリストの犠牲・贖罪、宣教の情熱、ザビエルの勇気と事績を象徴し、そして薩摩ガラスの色でもある「赤」を会衆席背後に、正面祭壇側には、敬虔な祈りを象徴する色、大航海時代の色である「青」を配した。この「赤」と「青」の配色は、・・・）
早朝から日没へ、夕闇までの刻々の空間の色彩の変化に、天候や季節の変化を織り込み、この聖堂が自然と神からの人びとへの語りかけになればと思いを込めた「祈りの空間」である。

鹿児島カテドラルザビエル記念聖堂

No. e-98　ピピア庵 ――出江寛，　sk9912

この茶室は、自然に錆びた耐候性鋼板とフロスト処理した強化ガラスの２種類の壁でつくられている。鉄とガラス、丈夫なものと脆いもの、不透光と透光、自然に錆びて表情を変える（文化的）ものと変わらない（文明的）もの、という二元対比は茶室内部にもそのまま表れており・・・

ピピア庵

No. e-99　エンデノイ中目黒 ――西沢平良，　sk9912

ショップの両サイドのディスプレイ・スペースは、店側のディスプレイ作家によってシーズンごとに改装されていくための展示のスペースである・・・ガラス面へのディスプレイも含めて、季節ごとにリニューアルされる新作の衣服と共にショップ全体が変化していく。
・・・春になると、目黒川沿いの桜並木が映り込んだピンク色のインテリアとなり、夏には緑のフィルムで内側から覆われたようなスペースとなって、現在は冬期特有のクリアな空気に満たされた、戸外につながっていくインテリアでもある。この小さなガラスのスペースは、簡単なつくりのブティックであり、透明なストック・ルームでもあり、季節ごとに変わる展示スペースでもあり、外に晒されたインテリアでもあって、屋外や屋内にあわせて移り変わっていくスペース

エンデノイ中目黒

としてデザインしたものである。デパートの中のブティックのように、デザインするほど独自の世界を固定してしまうインテリアとしてでなく、そこにもち込まれるすべてが次々と移り変わって成り立つような、透明なスペースをデザインしたかったからである。

No. e-100　農家の縁側空間――安田博道，　sk0003

農家の縁側空間

東京から電車を乗り継いで約３時間のこの地は、古くからの農村である。しかしファーストフード店、コンビニ等がボツボツ建ち始めており、現状では郊外と呼んでもよいような、それでいて懐かしいような、何でもないが変貌しつつある農村風景である。
この屋敷は 10 数代続く歴史ある農家であるが、この家の夫妻は 30 代はじめに、自らの屋敷内で、養鶏業を始めた。職場と住居、生産と消費、仕事と余暇、どのように呼び分けてもよいが、普通、生活と呼ばれる諸行為一般を分け隔てることなく含み込んだ、あいまいで、渾然ともいえる世界がそこにあった。現在、初老にさしかかった夫妻は屋敷内での養鶏はやめてしまい、郊外に移転した鶏小屋も少しずつ規模の縮小を始めて静かな老後を迎えようとしている。今回の計画は、養鶏業を続けつつも老後を迎え入れようとしている夫妻の、いわば「経験の曲がり角」を、旧鶏小屋増改築を通して考えることが主題であった。それは、新しい生活の提案であると同時にそうではなく、今まで続けてきた生活形態の継続であると同時にそうではない。
旧小屋改装は腐食した部材を取り替えるたけにとどめフォルムはそのまま残している。新たに胴縁＋メッシュでファサード全面を覆い、将来的には蔓草による植栽を予定している。・・・長いリニアな空間は、南側を鶏の集卵作業上としてあて、卵を買いにくる隣家の人びとが覗けるように配置している。屋敷中庭に面する部分には駐車場を設け、母屋に接続する部分には回廊、浴室を設けて、職に属する部分と住に属する部分を分け隔てなく並べている。もう少し広いスケールでとらえるならば、この縁側空間によって屋敷全体の諸行為は連続性を帯び始める。それは、従来は単体としての、裏庭、母屋、中庭、小屋、そして外部に対し、機能拡張のような役割を果たしているともいえる。
老後を迎える人にとっての経験の曲がり角とは、いままでの生活を継続しつつも、これから始まる新たな生活を意識することである。新築による、リセット（再起動）のような　断続的変化とはちょっと違う、もう少し連続的、継続的な変化である。周辺環境から見ても、徐々にその変化が受け入れられるような、そんな効果を意図している。

No. e-101　ICB Paris――岸和郎，　sk0005

ICB Paris

パリという都市のもつ景観や歴史といった文脈を尊重すること、２面が道路に面した不整形な平面や景観規制を受けているファサードには手をつけないこと、さらに本来であれば保存する必要のない内部コーニスや、いつ取り付けられたのかわからない補強のための柱や、手摺などにも手をつかないこととした。それがオリジナルかどうかなどは問わず、とりあえず現在の状態で建築を凍結すること、というのがコンセプトであり、・・・
今回修復したファサード、天井仕上げ、柱型、いかにもニセモノじみた室内の手摺の装飾まで含めてすべて現状のままで凍結し、重層する改装の結果としての現状建物をそのまま残すこととした。
それはこの建物の歴史を現在までの総体として保存するということでもある。・・・
都市の中でひとつの建築が変化するのをやめること、そのことの意味を考える。建築が時間の中で凍結されることによって、逆説的に「建築」として主張し始めるのではないかと気づいた。・・・現在ある建物をそのままにしておくことのほうが逆説的に「建築的」な営為なのではないかと考えたのだ。

No. e-102　新宿三井ビルディング リニューアル
――村尾成文／日本設計，　sk0006

・・・超高層建築は投資額の巨大さと計画・設計密度の高さから基本的に耐用年数の長いことが指向されている。いわばストック時代に相応しい建築のタイプのひとつである。しかし、時代を先取りするかたちで計画・設計された密度がどんなに高くとも、長い年月の経過につれて、当初は予想もできなかった社会生活の変化とそれに対応した新しい課題が発生する。そのうえ、設備や内装をはじめとした、経年劣化した部位の更新や、地震や台風や日常的利用を通じて理論的に確立したと思っていた技術の見直しも必要となる。・・・
・・・当初の計画・設計の大切さのほかに、こうした継続的な努力を通じて建築の長寿命化は達成されるといえる。建築家が建築を生み出すときにだけでなく、その長いライフサイクルにわたって関与し続ける覚悟と姿勢がきわめて大切な時代になっているとの思いを強くしている。

新宿三井ビルディング リニューアル

No. e-103　三良坂町陶芸学習舎 ――吉松秀樹，　sk0008

建築とは動かないことである。動かないから建築はその存在の強度を上げることが可能となり、動かないからその表層をめぐって議論が戦わされる。だから設計行為は建築の思考を定着させる可能性をめぐる作業であるといってよい。つまり建築は、走りつづける「世界」を止める技術であり、止まり方であるといい変えられる。・・・世界を止めようとし、一瞬なりともその切断面を見ようとするのである。

新奇な形態を追い求めるのではなく、どのような形がつくられていくのかというプロセスにこそ「建築」の本質があるのではないかと考える。この思考と形態の結びつき方が「モデリング」である。・・・「continuous」であることをモデリングの基準として、位相的なヴォリューム構成を保持したまま最終形状へ変形させていく作業をいくつか試みてきた。この恣意的な操作をできるだけ排除しつつ変形をしていく行為は、空間から「見えない建築」を切り出す作業であり、思考の切断面をダイレクトに形態化したいとする思いでもある。

三良坂町陶芸学習舎

No. e-104　東京大学工学部 2 号館 ――岸田省吾，　sk0010

環境にとって変化が不可避であるとしても、変化が留まることを知らない不断の変容を意味すれば、そこには永遠の現在があるだけだ。変化の跡は次第に過去の形跡となっていくが、さまざまな過去の形跡を現在、そして未来に向かって連続するフラックスとして意識できるとき、われわれはその環境に「持続」を見る。「持続」があってはじめて「現在にありながら、常に過去、未来と容易に行き交う」（H. ベルクソン）自由を手にすることができる。未来に向かって過去の「再生」をすることも、未来に向かってヴィジョンを描くことも可能となる。
キャンパスにおいて、どのような方法が「持続」を可能とするのか、また、どのようの「持続」が求められているのか。計画の方法についていうなら、単に「完成」の姿を想定するだけの計画では不十分であろう。むしろ変化を導き、方向づけるような何らかの空間的な「しくみ」を考えなければならない。
大学という知にかかわるさまざまな活動が集積され、交錯する場にあって、こうしたオープンスペースこそ長期間にわたって継起しつづける変化を過去の形跡として蓄積し、多様な人、もの、情報が交錯し得る場となってきた。キャンパスに流れる多様な時間、多様な活動はオープンスペースによってまとまりを与えられ、環境における「持続」が生成したきたのである。
こうしたキャンパスであってもの、屋外空間をオープンスペースに組み換え、個々の建物にそれを内包させることができれば、建物内外を貫通するオープンスペースのネットワークが成長していく。ネットワークの成長に伴って、多様な時間と空間が統合された環境へと成長していくであろう。時間の成長を空間の成長に接続していくような「しくみ」としてのオープンスペース、そうした眼で本郷キャンパスに残された外部環境と建物を見ていくならば、それらのすべてが膨大な遺産として現れてくる。

東京大学工学部 2 号館

No. e-105　ZIG HOUSE / ZAG HOUSE ――古谷誠章，　sk0103

・・・ジグザグ型をしたこの家の輪郭は、昔からの木立に囲まれた庭と周囲に建ち並ぶ家々との関係において配置されている。これまでこの敷地に建っていた前の家、そのまた前の家は共に南北を遮断するかたちで建っていた。今回は敷地の表裏をはじめて結んでやろうと思って、親子２世帯の間をポーチのように抜いている。
・・・この庭には僕が知っているものだけでもそれまでに８棟の建物があった。僕がこの土地での３代目だから、すでに少なからず歴史が堆積しつつあった。父が子供時代に遊んだという梅の木がまだあり、祖父の持ち物がしまわれたままの物置がついこの間まであった。この付近は戦災を免れたのでかつては同じような家がいくつもあったが、そのほとんどはマンションに建て替わったり、あるいはバブル期に相続税として物納されたりして、今ではまちづくり事業用地として虫喰い状の空地となっている。古い木は１本も残っていない。向かいの建仁寺垣の家が唯一以前の佇まいを残す（本当は立木ごと残す場合は本数に応じて相続税を減免したほうがいいと思うのだが）。この事態に関しても少し意地になって何とかこの土地をもちこたえようと踏ん張って、ミニチュアの界隈ずくりを始めたような心境である。集合住宅というほどのものでもないが、さりとて普通の一戸建てともいえない。賃貸の住人を含め人びとがひとつの土地に住みついて、時代に応じて建て替え・更新を続けながら記憶を継承していく試みである。都市住民が極度に流動化し、大いなる転居時代を迎えつつある今日ではやや時代に逆行するきらいがあるが、もやは良好な環境も古い樹木も、土地を維持し続けることによってしか生き長らえることができない。
おおかた 40 年ほど前に父が祖母のために隠居家を母屋の西側に建てた。奇しくも今回、やはり敷地の西側に両親の住む部分を建てて、東側に僕の家族が移り住むことになった。意識したわけではなかったが、親世代が順番に西方に渡っていく風習ができあがっている。そうすると僕もいずれ年でも取って妻と共に、家の間の「河」を渡って浄土に近い西側に移り住むのだろうか。

ZIG HOUSE / ZAG HOUSE

No. e-106　新風館 ――佐藤敦／ NTT ファシリティーズ＋蔭山晶久
／リチャードロジャースパートナーシップジャパン，　sk0103

まず本格的な大規模開発でなく、周囲の環境や地域との対話をふまえ、時間をかけて将来の地域のポテンシャルを上げていき、このロケーションにふさわしい開発を探っていく。そのために多くの人の流れが発生する商業施設を 10 年間の暫定プロジェクトとして展開していくこととした。・・・
この重厚な歴史的意匠をもった旧い建物に対し、常に新しく生まれ変わることを意識した建物を付加することで、「伝統」と「革新」の対比と融合をテーマとし、本施設を訪れる人びとに驚きと感動を与え、心に残るデザインとした。・・・本施設が、情報発信性・話題性の高い新たな商業の核として機能すると共に、今後実際に人びとに使われて仕上げられていく社会的基盤として役立ってくれることを願っている。

新風館

No. e-107　IMAGICA　品川プロダクションセンター
――大江匡，　sk0105

インターネットを基盤としたモバイルテクノロジーが企業のオフィスの中に発達し始めると、これまでの会社にドメインをおくという体制にも変化の兆しが見え始める。これまで一般的な企業において、人のドメインは機能にあった。たとえば、メーカーであれば、それは営業部、設計部（開発部）、生産管理部、購買部、物流部などの機能に名前がついて部（セクション）に人は所属しドメインとしていた。モバイルテクノロジーによって、これらの仕組みは解体し、プロジェクトがドメインとなることになる。すなわち、机のレイアウトの単位は、部や課ごとではなくて、プロジェクト単位になっていく。そして経時的なフェイズによって、人が移動していく（これまでは、人の間をプロジェクトが渡り歩いていた）。・・・
・・・企業の中のプロジェクトのモデルが、それほど長続きする必要がないという前提に立つと、コンソーシアム的な組織とそれに集まる資本というモデルは現実味を帯びてくる。オフィスもそれに準じて変化をしていく。

IMAGICA
品川プロダクションセンター

こうなっていくと、オフィスのイメージは、短期的に人が流動していくモデルとなる。・・・こうしたイメージをもとに、全面のプロムナードをつくり、その後ろにオフィスが並ぶレイアウトになっている。・・・

No. e-108　東北大学創造工学センター ――八重樫直人，　sk0105

建物の周囲に発生した建築と外部空間の境界を、周辺環境の表情をリフレクトするデバイスと考えた。ステンレスのコンベアベルトとガラスを複層し、外部の空間をやわらかく包み込む。単純な仕切りでなく時間の変化や天候、空の表情、木々の成長や変化に柔軟に対応できる被膜。かつこのメッシュは簾状に上下で緩やかに止められ、風によって微細に運動する。その境界の小さな可変性がこの建物の特徴となっている。

東北大学創造工学センター

建物の周囲に発生した建築と外部空間の境界を、周辺環境の表情をリフレクトするデバイスと考えた。ステンレスのコンベアベルトとガラスを複層し、外部の空間をやわらかく包み込む。単純な仕切りでなく時間の変化や天候、空の表情、木々の成長や変化に柔軟に対応できる被膜。かつこのメッシュは簾状に上下で緩やかに止められ、風によって微細に運動する。その境界の小さな可変性がこの建物の特徴となっている。

No. e-109　楓居 ――有馬裕之，　sk0107

結婚式、展示、演奏、庭鑑賞、会合・パーティ、食事という「行為」を流動的に繰り返す場である。その意味ではときどきの「今」と関係する空間でなければならない。材料はごく単純に今の工業既製品から選ばれていて、さまざまな「行為」に対応するためのものだ。「r」という装置が空間各所に点在し、それを操作して自由にこの「space」を使用することがユーザーには可能であるが、それは材料の変化と相乗して空間に流動的な印象を与えている。変化し、遮蔽・流動を繰り返すことが建物に表情を与えることになる。

楓居

材料はごく単純に今の工業既製品から選ばれていて・・・「楓居」「mci」の使用材料は、「行為」に対応する背景である。効果的に内部・外部の関係を整流制御するフィルターとして選択されていて、内外がばらばらに張られ全体としてのコンビネーションが成立しているという特徴がある。材料は構造体とは切り離され、張りつけられてマテリアル感は軽くすべてはコラージュ的に成立している。

No. e-110　慶應義塾普通部新本館 ――池田靖史＋國分昭子，　sk0112

一方でこれからの社会や教育の進化を見据えた学校建築の空間構成についても貴重な経験をさせていただいた。・・・私たちが採った方法は屋上庭園に面した教師と生徒の交流空間から昇り庭に面した地下のメディアセンターまで建物を縦に貫通する開放的な階段が光と風を自然に導き、外部空間と内部空間が相互作用しながら立体的な視界をつくり出すことであった。
次の 50 年に対応する「Integration と Flexibility を共に備えるシステム」が与えられた課題である。遅まきながら基本設計の終盤頃になってやっと私たちはそれが設計に結実するのではなく、建築から始まり熱意あふれる教師の皆さんが磨き上げていくものなのだと理解し、使われながら考えられていくであろうことへの真摯な支援であると自覚した。私たち建築家は竣工時点での状態に多くを期待しすぎるのかもしれない。「育てる」発想はやはり本職である。今は多感な少年時代をここで過ごす生徒たちの心に普通部の長い歴史の新たなる一頁として留められる空間へ一歩ずつ成長し続けることを心から願っている。

慶應義塾普通部新本館

No. e-111　茨城県立図書館――林昌二／日建設計，　sk0202

茨城県立図書館

この建築には、玄関から元議場に通じる中央部を、大空間が貫通しています。この大空間がない場合を創造してみると、貧弱な、つまらない空間体験しか得られず、図書館を訪れる魅力も半減するように思われます。・・・このように静謐平明で、しかも非日常的な豊かな空間性が、図書館への再生に大きな役割を果たしていることがわかります。
近代建築は、機能に忠実につくられているため、用途の変化が起こると寿命が尽きる､したがって短命を免れないとの説が､もっともらしく流されてきました。しかし、この「議事堂→図書館」の例を見ると、簡単に短命説を信ずるわけにはいかなくなってきます。プラント施設の類は別として、ヒトが使う施設であれば、用途の変化に応じて再生させることは、実はかなり可能で、銀行がホテルになる､あるいは博物館になるといった例が日本でも生まれ始めています。･･･資源・環境問題から考えて、壊すよりは再生を選ぶという倫理観はもちろん大切ですが、それと共に、長年にわたって建築を愛し、丁寧に使い込んできた人びとにとっての、壊すに忍びないと感じる自然の感情も大切です。壊すか否かの最後の判断を左右するものは、その建築のもつ力なのかもしれません。
建築のもつ力が人を動かす、私たちは力のある建築をつくらなくては。それが、今回の転用を体験しての思いでした。

倉庫と納屋は形は同じようなものだが、中味はまったく違う。倉庫はものをしまっておく所だから静的なタナトスに近く、納屋は生活のための場所だからエロスに近い。したがって、建物の形は倉庫のようなものだが、開館後には時間を胚胎する納屋のようになってほしい･･･約５年経って時の経過を観察すると、どうもその通りになってくれたようだ。この美術館では、日々何かが生まれ続けている。
「こんな時代だからこそこういう場所が必要なんです」、名誉館長を務める黒柳徹子さんの言葉だ。とてつもなく悲惨な光景をユニセフの活動で目の当たりにしたその足で美術館へと足を運ぶ。建築の向き合っているのは日常の暮らしだ。だから、自分のやっている行為が、激動する状況と連動していないのではないか、という不安にときたま襲われる。・・・安曇野の風景やちひろの絵に多くの人が引き寄せられるのは、世界の歪みに人の心が引き裂かれているからだろう。倉庫のような建物は納屋になり、そこに集まる人と場所を支える。

No. e-112　安曇野ちひろ美術館新館――内藤廣，　sk0206

安曇野ちひろ美術館新館

現在までの日本のスクラップ・アンド・ビルドの開発手法に建築の保存、保全はどう対応していくべきかという問題がある。ヨーロッパのように歴史的に都市の景観が継承され、そこに新しい景観が付加されて深みのある街ができているというアーバンデザインの観点や保全建物の歴史性、作家の意図を汲み取った上で新しいデザインを付加し、その建物をさらに強化していくという考え方は重要だと思う。

No. e-113　横浜赤レンガ倉庫１号館・２号館 ――新居千秋，　sk0206

浜赤レンガ倉庫１号館・２号館

・・・庫裏とは寺院の付属建築物としての僧侶の住まいであるが、この建物はさらにその庫裏に付随して、若夫婦のための居住スペースを増改築によってつくったものである。
・・・勾配の緩い入母屋を大きく照り（反り）のついた片流れ屋根に載せ替えることで、その下で展開される生活をリ・プログラミングしようと考えた。･･･日本の社寺建築には、繧繝風という屋根の増築についての優れたデザイン手法がある。照りのついた屋根をそのまま延長して高く跳ね上げるのではなく、一度折って改めて照りをつけ直し、全体として優雅にみせるというところが繧繝風のデザイン上のポイントである。平面的な増築にともなって、とかく納まりがつかなくなる照りのついた屋根を、苦し紛れにしかしうまく（美しく）納めたものが、繧繝風だといえる。一見、取ってつけたようなデザインだが、納まりの悪さを逆手にとったデザイン手法であるともいえる。増築に増築を重ねて、

なお美しい。世代を越えてリエゾンされる構築性こそが、和風建築のもっとも本質的な部分であろう。

No. e-114　スガルカラハフ ――宮本佳明，　jt0210

なるべくたくさんの人に、よい空間でよい生活体験をしてもらいたい。そのためには今の日本に良質な賃貸住宅が必要 " と考えるオーナー兼クライアントは、築 17 年のかつての企業の社宅であった 3 軒すべての内部を同時に改装して賃貸住宅として甦らせることを決めた。

スガルカラハフ

No. e-115　表参道テラスハウス ――堀部安嗣，　sk0303

時間の試練に耐え得る改装 " ということをコンセプトに、経年変化を味方につけ、時間の経過と共に価値の上がるようなリニューアルが求められた。

表参道テラスハウス

No. e-116　日光霧降・マーブルハウス ――奥山信一，　sk0402

工事の最終段階で、ある壁一面に鏡を張りたいと企画者から提案された。・・・企画者のこの要望の中に、この空間の本質が潜んでいると思った。
鑑賞物として像と対峙しているときは、それはひとつの美学的対象でしかない。・・・しかし、この空間での像を、ひとたび美学的対象としてではなくひとつの身体として眺めたときに、その永遠不変の美しさを通して、自身の身体に限りがあることを実感させる対象としてなる。そして、今、まさに生きている実感を、未来への生だけでなく死をも含めて日々への日常へと備給するための存在としてある。
人間の身体願望には二種の時間が流れている。ひとつは若さを保とうとする本能的身体への願望であり、もうひとつは年齢相応であろうとする社会的身体への願望である。いずれにしても、生と死を同時に意識する思考なくしては、これらの身体願望をめぐる二種の時間への洞察は生じないように思う。もしかしたら、限りなく前進する未来への夢のみを具現化したモダニズム思想に決定的に欠落していたものがあるとしたら、それはここでいう社会的身体への意識であったのではないかと思う。
・・・あまりにも現代という時間を刻み続け、そして人間の生の現在生へのみ眼差しが向けられた現代建築の状況の中で、生と死を含めた人間の生存全てが建築空間に含まれていることを建築デザインの射程として据えることの必要性を痛感した。

日光霧降・マーブルハウス

No. e-117　LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH ――青木淳，　sk0404

実際 57 丁目は、かつて、こういって矛盾しないといいけれど、凛とした繁華街だった。重々しい石の外装を纏い、そこにごく小さなディスプレーと、幅に対して極度に背の高い玄関が穿たれた通りだった。こうした華やかさと厳しいまでの凛々しさの共存は、それこそヒュー・フェリス的世界に通底するもので、それが同時に、当時の大きな利益を生む商業形式と結びついていたのだ。誇り高い凛々しさといえばいいか、崇高といえばいいか。しかし、商業形式の変化は早い。いまでもかつての時代を引きずるティファニーは、ルイ・ヴィトン・ニューヨークと同じ交差点の一角を占め続けているものの、同じ通りにナイキなどのポピュラリティに訴える商業形式のお店が進出してきている。そうした商業形式は、凛々しさの逆を求める。だから、もともとの建物を破壊することになり、現在の 57 丁目からは、こうしてかつての様相が失われたのだ。
同じようなことが、5 番街でも、現在起きている。こちらは、ナイキのワーナー・ブラザーズなどの商業形式の後に興隆してきたもうひとつの商業形式であるファッションブランドの進出による。ブランドイメージを建物の外装で訴えようとするその力は、ただそのブランドイメージを伝えるという使命を果たすだけの、建てられる場所を問わないデザインで街を塗り込めるものだ。結果、5 番街は急激にその個性を失い、世界中の大都市どこにでもあるような風景へ

LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH

と崇高さを失墜しつつある。

そういう大きな流れに対して、ルイ・ヴィトンと話し合ったことは、それに抗い、かつての崇高さに回帰しようということだ。それはひとつに、日本においてもことは同様であるのだけれど、基本的にフランスのブランドであるルイ・ヴィトンが単純に「フランス」を打ち出すというよりは、つくられる土地の文脈にカスタマイズしようする戦略をもっているからであり、また 9.11 が起きたためでもある。・・・映画の中の死ではない。現実の死だ。それを前にして、架空の世界に逃避して戯れることなどできるものではない。現実にここにいるという感覚が必要だった。いつもと変わらぬ風景を、しかし新鮮な目で見ること。それだけが、そこにいることへの安心と誇りを与えられる。
こうして、ぼくたちはヒュー・フェリスの「水晶の束としてのニューヨークの摩天楼」に戻ってくる。
・・・それを「束としての摩天楼」に変えるにはどうすればいいか。・・・コーナー部は、地上から上まで伸び上がる単位としてデザインされることになる。下部から分岐して垂直に伸びるコーナーという、既存建物の一部の改修によって、建物全体の様相を変えること。
天然の水晶を観察すると、透明な部分と白濁している部分が混ざっていることがわかる。それら境はグラデーションになっていて、白濁が透明にまで自然に推移している。そこで改装部の外壁は全面ガラスにする。ガラスは強化ガラスの合わせで、内側に細かい白いチェッカーボード・パターンを、ただしこちらは不透明から透明に至るグラデーションをもったパターンをセラミック印刷する。・・・この薄い表面によって、しかし奥まで詰まった物質生を獲得させる。

No. e-118　交詢ビルディング ――大山尚男／清水建設，　sk0411

この建物には " 形態だけの保存 " を超える解決策が求められた。行政も、容積や高さの緩和に加えて歴史的建造物に対するインセンティブを用意した。いつの時代も建築はその時代を表現する。コンセプトとして求めたものは、健全なる自立であり存続とした。単なる長生きでなく、" 健康に生きる " 建築。つまり、今の時代に生きる機能を果たしての存続である。この問題には、多くの戦略と経済的合理性に立脚しながら現実社会に解決策を提供しなければならなかった。設計に際し、築 70 年を経た交詢ビルを観察し、輝くオーセンティシティ（本物の価値）を捜し求めた。その結果、この建物を成立させている当時のモダニズムの母体上の無数の記号（パーツ）を読み取り、再構築することとした。・・・外部では正面壁体の現物保存、ステンドグラス窓の復元、内部ではチューダーアーチや紋章彫刻といったパーツのあふれる談話室、中庭、小食堂の移築保存である。単に物として保存を目的にするのではなく、かつての建築の骨格であり精神的機軸であったことを継承したいと考えた。・・・
・・・ここに歴史の記号と最新の光を纏いながら交詢ビルディングが実現した。この風景を見て 1930 年代の時介の魂は喜んでくれるただろうか。このビルが銀座の街並みに交詢社の持つジェントルな輝きを放って溶け込み、次の世代に引き継ぐことを願ってやまない。

交詢ビルディング

No. e-119　松屋銀座 耐震外装
――吉田進＋高島謙一／大成建設，　sk0412

銀座通りは、景観に対する法的な縛りがないにもかかわらず、東京で数少ない景観調和のとれた商業地である。それは、見識ある老舗店舗と、街並みと商業的価値に魅力を感じ参入する店舗で形成された街であるからである。その中で、松屋銀座は約 120m に渡り銀座通りに面し、 1 街区全体をファサードに持つ。この「顔」のリニューアルが銀座の街並みに与える影響は大きい。クライアント側との議論を重ねデザインを進めた。
このメガファサードの優位性を明確にするには、分節的なデザインより統一的

松屋銀座 耐震外装

デザインを目指し、印象に残る「白い箱」を表現したいと考えた。
箱を覆う白い壁は、1 期（1、2 階）のダブルスキンウォールと基本構成は同じである。今回は表情に豊かさを求めるため、アルミエンボスパネルとガラスのダブルスキンとした。
この計画は、完成までにもうしばらくかかる現在進行形である。1 期完成から現在まで、すでに 3 年以上経っているが、この間にも銀座の表情も目まぐるしく変わってきた。刻々と変化する街に馴染みながら、このファサードが松屋銀座のイメージとして浸透していくことを期待している。

No. e-120　r-ST1 201 / 203 ――長岡勉，　sk0508

ここではブラインドを本来の機能以上に、部屋の質そのものをコントロールするモノとして扱いたかった。
そこで画家の福津宣人氏にブラインドのパターンデザインをお願いした。閉じている時はソリッドな面に、開いている時は存在感の希薄なレースのようなストライプに完全に包まれる空間。可動と回転によってそれ自体の存在感とその向こう側にあるモノとが流動的に変化するグラフィックパターンとしてブラインドを扱ってもらった。
ブラインドに完全に囲い込まれた部屋の内部から、採光、街並み、収納、プライバシー、といった様相を住み手が楽しみながらコントロールする。それはブラインドというより部屋全体の質を調整できるイコライザーのようなものなのかもしれない。インテリアにあるバラバラなモノを生かしながら、総体として連続したまとまりをつくり出すこと。その状態をつくるために、住み手が積極的に関わっていくことができる空間になればと思う。

r-ST1 201 / 203

No. e-121　角館の町家 ――渡辺菊眞，　jt0607

旧状の敷地内には 3 つの建物があった。築 150 年の解体部分、築 100 年の曳家部分、そのまま存置させる築 50 年の書庫である。これらの動線は屈折を繰り返しながら連結し、全体で渦を描こうとしていた。3 つの建物は、3 つの世代がそれぞれに建てたものであった。
増築計画においても、屈折を繰り返しながら渦を描く動線を踏襲する。・・・増築計画においても、屈折を繰り返しながら渦を描く動線を踏襲する。ただ前面道路拡幅と土地の部分的売却のために、敷地は狭小となり同一平面での屈折の連続は無理である。そこで以下のような空間操作を試みた。…②全体平面の対角線に沿って、段階的に縮小する 3 つの矩形を 2 階以上のレベルで入れ子にし、入れ子最内部の和室と、その外側に隣接する板間のレベルを変え、和室への小刻みなアップダウンと屈折を繰り返すアプローチとする。③和室中心線と建物中心線をずらし、和室から天井を見上げたとき、その視線は屈折しながら、天空へ放射されるようにする。
・・・解体されて消えてしまった生活空間の記憶を保持し、垂直方向では天空へ向かう「屈折渦巻空間」を展開することができたのである。
世代ごとに屈折しながらつなげて描いた渦巻きに、天空へ向かう新たな屈折を導入した。立体化した渦巻きに、未来の世代はどんな渦巻きを描くのだろうか。家はいろんな時間を巻き込んで、ぐるぐと、めぐる。

角館の町家

No. e-122　YKK50 ビル　リノベーション 2006 ――宮崎浩，　sk0612

時代の流れと共に発生する組織や用途の変更に伴う多くの問題を、スクラップ＆ビルドという手法を用いずに臨機応変に改装を行うことで解決し、建物の長寿命化を図っている。
今回のリノベーションの中心となる BSI オフィスの計画を進めるにあたっては、元のオフィスの抱えていたさまざまな諸問題を個別に解決することだけを目的にするのではなく、このオフィスのもつ 2 層吹き抜けの豊かな空間の質を最大

YKK50 ビル　リノベーション 2006

限に生かし、まったく新しい空間をつくり出すことを設計のテーマとした。将来を見据えた設備のインフラシャフトを核とした新しい骨組みを導入することで、空間に基本的なルールを与え、フレキシブルでありながら、当初の開放的なイメージを保持し続けることができるようなあり方を構築した。

No. e-123　TARO NASU OSAKA ——青木淳，　sk0703

ルールが・・・可動パーツの集合体という物理的・視覚的なものだったということだ。・・・可動ゆえの頼りなさもまた、それはそれとして、確固たるひとつの空間の質だ。堅牢という空間の質もある一方、変化し続け、流転し続け、かたちや様相を変え続ける、弱々しく、でも満ちているという空間の質もある。だとすれば、そんな確固たる——美術作家の吉田暁子さんの言葉を借りるなら——「弱満る」質をもって、しっかりと作品を受け止めることはできないのだろうか。それが「TARO NASU OSAKA」で考えたことだ。空間の形や様相は、展覧会ごとに変わる。でも、その根本的な空間の質は、作品によっても、人の行為によって、も変わることなく保持される。そんな空間はあり得ないのか。

TARO NASU OSAKA

No. e-124　とたんギャラリー ——大川幸恵，　jt0704

リノベーションの本来の目的とされる「再生」や「継続」という役目を果たさないプロジェクトであり、他の事例と大きく異なるということを先に述べておく。・・・そこでのテーマは保存や再生ではなく、「今ある風景や建築の終わりを考えること」「終わりに向かう建築を使い切ること」を目的としている。
・・・前住人によって増改築を繰り返し変遷してきたハコを、ほぼそのまま使用している。ある種の「場力本願」的な思考が存在する。運営にあたり、ハードとしての一般的なアートスペースの機能を満たすことよりも、蓄積された生活の痕跡とのつき合い方に着目し、ルールを設けたことである。「原則現状復帰はしない」「作家は展示終了後、一点以上作品を残す」などといったルールである。現在進行形で生活が営まれる住宅という器にアートというソースを介入させ、作家たちが個展を行うたびに「新たな痕跡」として作品を残していく。人や作品がレイヤーのように蓄積され、空間を使い込んでいくのである。
場が終わることに対して感傷的にならずに、どう変化していくのか、どう終わるのか、その「死をデザインする」にはどうしたらよいか。
「とたんギャラリー」は、作品や人びとを通して、それぞれが終わりを考える場になりつつある。

とたんギャラリー

No. e-125　押小路の町家「幹翠庵」——吉村篤一，　jt0704

吹抜け部分は冬期は既存の梁の高さに障子を設置して寒さを防ぎ、夏には外せるようになっている。また、台所も既存の通り庭部分にあり上部は吹き抜けているので､冬期はつなぎ梁の上にポリカーボネイト板を置くことにより光は入って暖かく、夏は取り外して通風ができるという配慮も行っている。京町家は昔から夏家具と冬家具の入れ替えをすることにより建築的に季節の変化に対応する・・・

押小路の町家「幹翠庵」

No. e-126　東京大学医学部附属病院中央診療棟 II 期
——岡田新一，　sk0706

SMP［システムマスタープランの略］の段階ではまだ建物の形はない。工期で分けられた建物は SMP に沿ってその時々の要求が設計条件となって建設されるわけで、その変化を予め読み取ることはできない。しかし、4 期にわたる建て替えに 25 年かかる・・・25 年という歳月は商業施設などでは建て替えの行われるサイクルである。その間に指導享受が長澤泰教授に代わった。東大施設部長も何代か交代したし、病院長は現在の長井良三院長まで 15 代を数える。このような流れの中で病院建築は「ひとつの建築」という存在を超えたものであ

東京大学医学部附属病院中央診療棟 II 期

ることが分かってきた。建物が生まれ変わりながら都市が成熟していくようなプロセスに身を置きながら、これをひとつの建築として表現してしまっては、この都市的プロセスをとる病院が存在する意味を表すことができない、と考えるに至った。・・・ボリューム、高さ、色彩等が微妙に違いながら総体としてまとめる。その役割を SMP がしている。このような長期にわたる都市スケールを持ち、時間の要素が大きく左右するプロジェクトは今後増えていくだろう。長期プロセスを取るために、設計条件を時代に応じて組み込まなければならない。そのためには、初期一時につくるモデル表現では不十分であると考えるに至っている。
形を表現するモデルは、作成するとその後は時を追って旧態となっていく。都市がひとつの表現でつくられるということも恐ろしいことである。長い年月をかけて、少しずつ異なりながら調和のあるまとまった表現としてつくられる都市に心の安まるものが見られるのではないか。・・・外装の表現も微妙に異なった集合体になっている。これらの時間的要素が入ることによって、巨大な建物が周辺環境に呼応するボリュームにブレークダウンされるのである。
25 年におよぶ東大病院再生計画に携わり、複雑な仕組みを統合し時間の要素に耐えられるサステナブルな建築、いわば小都市の如きものをつくるには SMP は欠くことのできない要素で、それを出発点に置くデザインの意味を考えた・・・建設の動機があり、設計、施工、監理、運営とハコモノはつくられ利用されていく。このようにつくられたものは、どう運営されるかが運命を左右する。運営を通しマネージメントが熟し、それがフィードバックされるようなサイクルがつくられるようになればしめたものである。・・・本来ならば SMP のレベルへフィードバックされ、広い統合の中に組み込まれていく。

No. e-127　大隈講堂（保存・再生）
――大野勝／佐藤総合計画，　sk0711

早稲田大学は次なる 125 年に向けて、変わらない早稲田と変わりゆく早稲田の両立を意識し、歴史と伝統に支えられたものを引き継ぎつつ、常に時代に即した先進的教育環境の創造を目指している。今回の大隈講堂の保存・再生は、この意図を最も象徴的に具現化するプロジェクトと言える。
すなわち「変わらないもの」としては、人びとの記憶に深く残り、意匠的にオリジナリティの高い空間から手摺り・照明など細かなディテール部分に至まで、トータルな「かたち」や素晴らしい「音」など見えざる価値などの保存・復原を徹底化することとした。一方、「変わりゆくもの」としては、価値の高い古い空間に影響しない部分で、必要な多機能型ホールへの機能向上、バリアフリー対策、設備更新などのために新たに付加すべきところは新たなモダンな技術と意匠を施し、古い空間に対比させながら、それとの連続性をもたせることを基本的な考え方としたのだ。
・・・このような「変わらないものと変わりゆくもの」の徹底化とその共存こそが、建築が生き続けるための重要な課題であり、大隈講堂保存・再生のコンセプトと考えた。

大隈講堂（保存・再生）

No. e-128　REISM ――田島則行，　sk0802

既存のプランのままでは今日のニーズに合致しないこともあり、リノベーションを施して再利用する方法論を確立しなければ、大量のストックが無駄に放置されることとなる。
ところが、不動産業界においては、まだまだリノベーションという概念が浸透しておらず、改装や改修と区別のつかないことが多い。改装とか改修と言われているのは、いわば仕上げを変えることによる延命措置のことであって、再生ではない。不動産は、その建てられた時代時代のニーズを考慮して設計されてはいるものの、時代が変われば当然ニーズもマーケットも変わる。そういった時代の変化を考慮した時に、既存の空間という器を使いながらも、必ずしも既存のプランに拘束されずに、その用途や目的、あるいは使い方や使われ方を再構築し、建築に新しい命を与えることが重要になる。つまり、既存の要素や条

REISM

件を最大限利用しつつも、まったく違った文脈に沿った、新しい空間のあり方を創造することが、再生であり、リノベーションであると考えている。

プロトタイプのプランを考えた時、まず、最初の課題は、ステレオタイプのプランにおける問題を解決することだった。典型的なプランタイプでは、たとえば北側通路から玄関を入ると、廊下の片側はキッチン、反対側は風呂トイレ、そして奥に居室がある。これは、居室が住む場所であり、キッチンと風呂トイレはサービス空間であるという、古典的なプラン形式には合致しているのであろうが、使われている実態を見てみれば、このプランはきわめて暴力的な形式であり、どうにも暮らしにくい。・・・そこで考えた戦略が、水回りを集約させることによって、その周りの空間を回遊させる方法である。・・・あるいは別のケースでは、水回りを壁際に分散配置させた場合でも・・・

No. e-129　カエツキャニオン――長岡勉，　sk0803

「形」はスタイルとして、「機能」は使われ方として時間の流れと共に変化していく。しかし、人の「居場所」（居心地のよさという感覚）は、ほぼ普遍的であり、時代や時間と関係なく、その空間に存在し続ける。カエツキャニオンと名付けられた巨大な家具は、さながら川の流れに削られた峡谷のうように、人の居場所やアクティビティが削り出す地形をつくり上げた。そして、この地形は、内部だけでなく外の景色と連続的につながり、時間と共に新しい、生きた風景をつくり上げていく。

カエツキャニオン

No. e-130　金刀比羅宮新茶所『神椿』――田窪恭治，　sk0803

この仕事を、私は、自分より長い時間を生きるであろう、モノやコトの総体である特定の現場の風景を対象とした仕事を「風景美術」と呼び、作家がいなくなった未来においても生き続ける表現の現場を「風景芸術」と呼んでいます。

・・・この仕事は金刀比羅宮の境内地全体と、その神体山である琴平山を対象とした風景芸術です。
金刀比羅宮の境内は約 30 万坪とも言われ、広大な空間に宗教施設や文化施設、石段や道路など、さまざまなモノが入り交じり、鎮守の森に囲まれた小さな国のようなところですから、・・・

私の仕事のモットーは「何も変わらない風景」をつくり上げることにあります。「何も変わらない風景」とは何もしないで、ただひたすら古いものを守ることではありません。
椿の花が毎年違うところに花をつけるように。それでいて、昨年と変わらない椿のイメージを与えてくれるように。命の不思議と自然の力強さを強調する。そんな表現方法なのです。このような表現の方法はフランスで言うところの「ペイザージスト」に近いのかもしれません。
・・・現場の過去を振り返りながら、現在の風景を成立させているイメージの要素をひとつひとつ調べ出して、慎重に、目の前の風景に嵌め込み直していく作業が必要なのです。
一見、何事もないような自然の風景の中に未来を決定する「命」がみなぎっています。
風景芸術とは、その「命」を終わらせないように大切に生かし続けることなのです。

金刀比羅宮新茶所『神椿』

No. e-131　犬島アートプロジェクト「精錬所」
――三分一博志，　sk0805

犬島アートプロジェクト「精錬所」

地球上のあらゆる地形には、すでに利用可能なエネルギーが存在している。その対象は長い時間をかけて自然に形成されたものや気候条件だけを指すのではなく、かつて人類が注ぎ込んだ人的構造物も含まれている。・・・
・・・これからの時代、アイソレートした領域へのアプローチの手法は、外から大量に注ぎ込んだり、強引に持ち去ったりという、いわゆる従来の開発的行為でなく、内のものを内で使って、自然にバランスを戻していくような方法が望ましい。
犬島アートプロジェクトでは、負の遺産と化した廃墟の島を、自然エネルギーに導かれた世界で最も知的な芸術アイランドへと生まれ変わらせることが求められた。
新たに持ち込まれる素材による島への干渉や変更は、歴史／文化／地理／気候的条件に対しても考慮した上で最小限であることと、その耐候性のバランスが重要であると考えた。
敷地一帯を覆うカラミやスラグの廃棄物の組成は約 50%が酸化鉄であることが分析されたため、地中に埋まる建築の主構造を鉄造とし、化学的外部被膜等を行わないことで酸化していくことを受け入れることとした。・・・
「再利用可能な既存の地形や構築物のエネルギー」と「持続可能な天然資源や廃棄物の利用」、「新たに持ち込まれる素材」から建築のサイズや容量、ディテールを与えていくことと、絶え間ない自然の再生サイクルに従い、建築そのものも姿形を持って自然収支全体の中に組み込まれていくこと。それこそが、地球に知的にあり続けるための建築をつくり出す方法であると考える。
その結果、地中熱を利用した冷却の通路、太陽エネルギーを利用した採暖のギャラリー、太陽エネルギーと煙突の浮力効果を利用した動力のホール、それらの中心に環境調整されたメインのホール、この 4 つの空間と植生と水の循環を司るランドスケープを構成していった。

No. e-132　SAYAMA FLAT ――長坂常，　sk0808

SAYAMA FLAT

襖や障子、年代物のキッチンコンロ、はがされた壁紙跡、しまいにはボード下に隠れされていたチョークの計算式までもが、われわれにとって徐々にいとおしい存在になり、この時点で初めて「引く」だけのデザインを意識し始めたのだ。引いた後に残される選択されたもの同士が、距離を置いて関係を結び、空間を再構築していくさまに、指示を与えながら驚きを覚えたのを今でも新鮮に覚えている。
この「SAYAMA FLAT」は入居後、内装に自ら手を加えてよいことになっている。・・・われわれがしたことは、29 年で生まれた需要と供給の歪みの矯正、いわば 29 年の間についた無駄な贅肉をそぎ落とし、今必要とされる本来の骨格を取り戻して、この先数十年のシナリオを描くためのリセットのみである。
・・・引き渡し後の内覧を素直に楽しめる機会もそうはない。勝手な話だが、たいてい、入居後というのは想定外なことが繰り広げられており、再度、訪ねたい気になかなかならない。しかし、この計画は既存を自ら受け入れ、そして、市場に戻し、その至らなさをその居住者に補わせることで、一度たりとも長期的に強い完成像を想像させない、動的な感覚を持つプロジェクトであり、不思議と少々の変化に動じない懐の広さがある。

No. e-133　house K ――宮晶子，　sk0809

house K

その中を一歩、あるいは半歩踏み出すたびに、風景の部分と全体が交互に立ち現れて、環境の全体と、身体それ自身の存在を感じながら、自分の居る場所を選び取ることができる。
・・・壁は交点を余白にしながら 2、3 歩分の長さで 2、3 歩分の間隔を保ちながら、いろいろな方向に連鎖するという生成ルールで、外部環境とリンクするさまざまな視線の関係や視野を生む位置に置かれている。ひとつの空間の中でひとつの生活のシーンが完結するのではなく、たくさんの「小さな風景」の中で生活のシーンが連続していき、環境からの小さな働きかけを受けながら、その時の気分や状況に合った場所を選んで過ごすことができる。そのような、プログラムによって固定的にならない日常は、人びとが思い思いに活動でき、自然でいきいきとしたものになるの

ではないだろうか。
・・・ガラスの内部に広がる奥行のある光によって、ガラスの表面は奥行のある外の風景を映し出し、見る人の移動に伴い変化して、ある時、建物の向こう側の風景まで透視する。
さまざまな反射と透過が起き、内外が混じり合った不思議な奥行が刻々と変化するファサードの様相は、窓を介するのとも、ガラス張りの建物を介するものとも違う、新しい関係を中の人と外の人との間にもたらしてくれるのではないかと考えた。

No. e-134　千本松 沼津倶楽部 ――渡辺明，　sk0810

見上げると富士川の砂と土を積層させた版築壁。土の堅さ、柔らかさは、日光の強弱により、そのひ表情を刻一刻と変化させ、風景に溶け込んでいく。・・・
庭園と客室の間の鬱蒼とした木立を写し込む水盤には、富士の湧水がこんこんと注がれている。ラウンジ、またどの客室からも眺めることができ、夏は涼しげなせせらぎを、冬はあたたかな陽の光を、時に建物の陰影を映し込み、人びとを楽しませてくれる。
目を感受する美だけでなく、時空間の中に身を委ねることで感受でき、至福の時を得ることができるようにと、常に考えながら試行錯誤の日々だった。

千本松 沼津倶楽部

No. e-135　VEGA ――小泉誠，　sk0810

空間の表情が大山の光と風を受け、時間と共に変わることを試みた。壁面には、今回の工事で解体された既存土壁の土を使い、貫場さん自らの手で再び壁として蘇らせた。唯一南側に開けられた小窓にはガラス作家渋谷良治さんの作品が嵌め込まれ、ガラスを透した光が空間を満たすことを企てた。・・・
東側の壁は 70 年前の納屋の外壁で、その土壁をそのまま残し、西側と床面に黒部の紙漉き師がここの土を漉き込んだ紙を貼り巡らした。建物の隙間から漏れ入る光をこの紙が受け留め、時間と共に移ろう空間ができ上がっている。

VEGA

No. e-136　帷子の家 ――矢田朝士，　jt0902

終の住まいとして 1 日の中でゆっくりと変化していく光や空気をとらえたい。
家族や友人が集まるとき、そして夫婦水入らずのときなどの場面に応じて、ひとつの広がりのある空間と分節された別々の空間に使い分けることができるようにした。しかしそこでは、いつもお互いを身近に感じながらも、ほどよい距離感を保ちつつ、漂う空気に身を任せ、変化を肌で感じながら時間を過ごしてほしい。
そこで半透明のパーティションを使い、微かに反対側を映し雰囲気を伝えつつ軽やかに間仕切る光のスクリーンをつくった。寝食の区切りは麻布張りの透ける建具を使い、風を通し、透過した柔らかな光を部屋の隅々にまで届け、光と人の動きを陽炎のように映す。天井の木目が、この水中のような空気感を視覚化させている。またこの部屋では暗い側が見えなくなることを利用して、一室空間の中でプライバシーを守っている。

帷子の家

No. e-137　レストラン長屋門 ――千葉学，　sk0904

「レストラン長屋門」は、4 つの部屋とその間に挟まれた隙間状の空間で構成されている。4 つの部屋のうち 3 つは庭で、ひとつが厨房である。庭は、検討の初期段階から大きなテーマであった。それは、長屋門をくぐり抜けた先に庭が、そして今後変わりゆく富士宮の街とレストランとの間に、いつも変わらずに四季を刻み続ける場所があればと思ったことによる。

レストラン長屋門

No. e-138　書院／ Third-house ――岸和郎，　sk0911

書院／ Third-house

「今日性」を持つ書院
京都という環境の中で、伝統の現代的な解釈を求めることなど、自分で抱え込むには大きすぎる主題だが、それよりも「近代和風」という問題構制、これに回答を与えなければいけなくなると考えたことの方が大きかった。時代区分としての近代につくられた和風、ということでよいのなら話は簡単だが、理念としての近代主義、すなわち市民社会の時代の、それも機能主義的な和風表現、などというものが存在し得るのだろうか。そんな時、立ち位置をずらすことで、「近代」という概念を一時棚上げできないかという文脈で考えたのが、実は「今日性」という概念であり、それを「近代」に置き換えることで新しく見えてくるものはないだろうかと考え始めた。すなわち、「近代」と「現代」に置き換え、理念の問題をすり抜けること。
そうすると、自分自身のための、極私的日本建築史が見えてきた。寝殿造りから書院造り、それに数寄屋造りへと変わっていく住宅建築の流れを、「原 - ユニバーサル・スペース」としての寝殿造り、新たに派生した機能や欲望によって「差異化」され、遷移し始めるその途中の宙吊りの形式としての書院、建築の箇々の空間さえもが人間の個の欲望によって「差異化」されたものの最終形としての数寄屋、と考えたらどうだろうか。
そう考えたとたんに、書院の空間が自分の関心の真ん中に躍り出た。個が成立し、その欲望や社会形態の変容に従って、「差異化」され始め、しかも最終形にはいまだ到達していない「遷移的」な空間。書院のもつそんな「今日性」こそ、自分にとって重要なのではないか。
インテリアデザインとしての遷移的な書院
・・・簡単に、外装を持たない内部空間での自由さ、と考えてもよい。ふと気付くと書院というのは外装を持たない、内装だけで成立し得る形式だったではないか。

No. e-139　上大須賀の家 ――谷尻誠，　sk0912

上大須賀の家

新しくつくられた建築は、垂れ壁によって人の立つ・座るといった行為と非常に密接な関係を持っており、立ち上がって移動している時には空間は分割され、座ると室内と庭部屋が一体化し、人の動作によって空間の現れ方が変わる状況を設計している。垂れ壁によって囲まれた内部空間

No. e-140　澄心寺庫裏 ――宮本佳明，　sk1001

澄心寺庫裏

青雲山澄心寺は、日本アルプスの山々に囲まれた長野県箕輪町にある古刹である。開山は 1199 年と伝えられ、曹洞宗の寺院としても 550 年の歴史を持つ。現在の伽藍は大きく 1752 年創建の法堂と 1830 年創建の客殿からなる。それらの増改築の歴史を辿ると、明らかに、変わるもの（= 屋内空間）と変わらないもの（= 大屋根）のふたつによって構成されていることに気付く。宗教空間を流れる百年単位の時間に寄り添うならば、新しい庫裏の計画にあたっても同じようにインフラとインフィルを分けて考えた方がよいと思われた。ここで、インフラとは 100 年、200 年と永続する鉄筋コンクリートの大屋根であり、その下に自由に展開する軽快な木造軸組がインフィルとなる。
若い第 32 世ご住職は、お寺を 21 世紀の「（共）コモン」のプラットフォームとして再生するという夢を抱かれ、その想いを建築という「形」に託すことを選ばれた。寺院が単に宗教儀式のためだけに存在するのではなく、住民が集い、展覧会やコンサート、人生相談などにも活用される。言わばビバーラ（安息の住・休息の地）としての庫裏である。・・・

No. e-141　とらや一条店改修 ――内藤廣，　sk1001

京都駅の喧噪を離れて北に向かう。左手に東本願寺を見て四条を過ぎたあたりから前方に大きな森が見えてくる。御所はほとんどが公園化されている。巨大なブラックホールのように見えるが、大きさのわりには場所にパワーがない。単に都市部に残った異様に大きいただの森に見える。この場所は、主の帰りを待っている。・・・

周到に丁寧に時代をやり過ごしていくこと、その巨大で巧緻な知恵がこの街全体の文化の底に流れているように思える。これがこの街の誰も口にしない見えざる「大きな物語」である。この大きな物語に寄り添うように、「虎屋」とその敷地の物語もある。京都烏丸一条、御所の隣というのは特別な場所である。「虎屋」の発祥は室町時代に遡り、以来この地で約 300 年間御所御用を承り、菓子づくりをしてきた。明治天皇が東京に移られたため本拠地を東京としたが、烏丸一条の場所は虎屋の精神的な拠り所として機能してきた。この場所も「待つ」ことを強いられてきたのだ。

「待つ」ということは、･･･たとえわずかでも時代ごとにバトンを受け渡し、けっして途切れないこと、それ自体に大きな意味があるはずだと信じること。この場所にはそういう意志が働いている。

製造所とその脇に小さな菓寮があったが、これらの建物の建て替えがわたしに与えられた役割だった。この街の文化の一助となるような新たな場所にしたい、という意向を受けて設計が始まった。

・・・室町時代からの伝統と格式を持つ菓子製造の歴史は、実はその時代に必死に答えようとする姿勢の連続にこそある、ということだ。京都を離れたこと、この敷地を「待つ」状態に置いたこと、それも常に時代に必死に向き合ったから、という思いがあるのではないかと想像する。これを「待つ」ための方法論と理解することもできる。時代に向き合うことと「待つ」ということが、この敷地においては顕在化せざるを得ないように思えた。

計画に取り掛かった初めから、抜けのある場所、特に庭に対して抜けのある空間、つまり四阿のような空間をイメージしていた。四阿は待つ場所である。そう考えれば、四阿を「待つ」ということの隠れたメタファーとすることはそう見当違いなことではあるまい。

これを建築に則していえば、明日と昨日のような身近なところにある時間だけでなく、百年単位の遠くにある未来と過去の時間を「今」に引き入れることを問うべきだ。さらに、微細なディテールから建物の姿形、その外に広がる近隣や地域、さらには世界にまで広げてみて、それらどこまで「ここ」に引き込むことができるかを問うべきだ。つまり現在を起点に、時間と空間の幅を広く捉えること、それが建築や都市に課せられた大きなテーマなのではないか。

近年、建築が育んできた文化は、あまりにも一足飛びに未来を志向し過ぎていまいか。そこには、その未来に至る持続的な時間が消去されている。どこかの時点で、建築は「待つ」ことを止めたのではある。

設計に「待つ」という意識を持ち込んではどうか。「待つ」ためには、未来を想起し、そこから現在を逆照射する逆立ちしたような意識が必要だ。もともと設計とは、未来から現在を見つめ、そこに至る「待つ」ための方図を組み立てることではなかったか。すなわち、「待つ」ことは建築にふたたび持続的な時間概念を導き入れることである。・・・

この街の大きな物語の傍らで、この敷地はずっと待ち続けてきた。この建物もそれに歩調を合わせるべく、けっして到来することのない遠い未来を「待つ」ことを始めている。そこで醸成されるはずのもの、それは、「待つ」ことそれ自体が意味を持ち始めることかもしれない。まるでこの街のように。

とらや一条店改修

No. e-142　カバヤ珈琲 ――永山祐子，　sk1003

この場所は長年積み重ねてきた人びとの思いからなる膨大なストーリーを内包して、既に熟成され、完成された空間となっていた。ただ、そのまま残してもノスタルジーに陥ってしまう。そこで、この空間の持つ特性を拡大解釈して見せることで、今の時代にあった別のストーリーがそこに浮かび上がってくるのではないかと考えた。感情的な部分から離れ、ただ空間特性だけを拾い上げようと、固定観念を捨てて見つめ直した。・・・天井に黒いガラスを張り、そこに窓外と室内の映像を映し込み、垂直方向に空間を広げていく。店内に入った瞬間に見える奥の壁は光壁にし、窓外の照度と合わせ、水平に奥へと広がり外に抜けていくような感覚を与えた。
賑やかな通りの往来、店内でくつろぐ人の様子が天井に反射して見える。この生き生きとした「今この瞬間」の映像越しに、過去から続く大正時代の梁が重なって見えてくる。ここで珈琲を飲みながら人は何かを夢想する。「今この瞬間」から、過去と未来に繋がる時間の糸が、始まりと終わりが分からないくらいに絡み合い、「カバヤ珈琲」という場ができ上がる。そんな、常に現在進行形の空間をつくるきっかけを与えることが「生きた保存」なのではないかと思う。

カバヤ珈琲

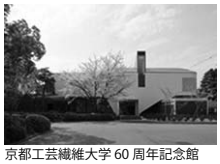
No. e-143　Sakura flat ――若山均，　sk1003

住む場所としてのスケール、プロポーションを逸脱した空間と柱梁の構造体、この「少しばかりの非日常」に対して、その傍らに現実的な扉、収納家具、棚などの具体的な昨日や日常の「もの」、そして建築の部位も同じように扱い、それらを点在させる。既存の未完成感や肌理の粗さ、古さに、引き寄せられた「もの」が拡散している状態。
家事や仕事、休息など住む行為は、それぞれが身体的で小さな場所での出来事だけど、ふと目を移すと急に世界が変化する。日常と非日常とが同居していながら、日々の暮らしで切り替わりが繰り返される。
この段階でできたそうしたラフな状況に住み始め、住みながら日常品や雑多な「もの」を足していったり、変えてみたりする行為が全体で建築として成り立つと、生活がとても自由なものになるのではないかと感じた。

Sakura flat

No. e-144　京都工芸繊維大学 60周年記念館 ――木村博昭，　sk1005

記念館の構想にあたり、時間をテーマに記憶と時を静止させた時代を再確認する静的な建築であると捉えた。建築には、過去から継承されず、失われる技術もある。当然ながら機能だけでは定まらず、感性、記憶、象徴等と多重的要素で成立している。
現代建築は、存在感が薄れつつある。しかしながら、建設に携わった無名の職人たちの熟練した手の痕跡や素材により、建築そのものに命を与え、その空間体験が五感を呼び起こし、人に感動と敬意を促す。これまで出会ったすばらしい建築は、それらが身体にダイレクトに伝わるものであった。そして、その時代の文化の結晶として残るのである。ここでは、そんな建築への思いと取り組み、空間の素材とディテールを熟考し、現代性の表現として鉄を使い、創設期の本野精吾の鉄筋コンクリート造の校舎と対照させた。


京都工芸繊維大学 60 周年記念館

No. e-145　武蔵野美術大学 美術館・図書館 ――藤本壮介，　sk1007

図書館の最も重要な性質のひとつは、まぎれもなく「検索性」である。検索性とは、文字通り目的の本に的確にたどり着くためのシステマチックな空間的な配置のことであり、10 進分類法によって分類された本が明確な方法で配列され、それを人が直感的でしかも機械的に追いかけていくことができる仕組みである。
しかし図書館が人間のための場所だとするなら、検索性だけが人間と本との関わり方ではないはずだ。そこで僕たちは、検索性と両立する概念として「散策性」というものを想定してみた。散策性とは、ある意味で検索性とは対局の概念だ。・・・図書館の中においても、とくに目的というものがないまま散策をしていく中で、自分が今まで存在すら知らなかったカテゴリー、たまたま目にした美しい表紙などに驚き、何かの予感に突き動かされてさまよい続けるという

武蔵野美術大学 美術館・図書館

ことがあり得るのではないだろうか。それは図書館の中の人間の営みとして最も根源的な活動のひとつであろう。
渦巻とは両義的な形である。・・太古の洞窟壁画にも表れるシンプルな渦巻きが建築になる時、それは両義性の場として立ち現れてくる。フランク・ロイド・ライトのグッゲンハイム美術館では、同じ場所と異なる場所が同居している。吹き抜けを介して見える向かい側やひとつ下のスロープは、果てしなく他者のような浮遊感を持って見えてくるが、それは自分が今いるこの床と繋がっている。・・・また巻貝のような家を想像すると、ぐるぐると奥まっていくその場所の性質は刻々と変化していくにもかかわらず、空間はただひとつである。この図書館の渦巻も、先ほど述べた検索性と散策性という両義性を獲得するための精緻な方法として導入された。

No. e-146　日産厚生会 玉川病院南館
――星野大道／鹿島建設，　sk1007

日産厚生会 玉川病院南館

日本の医療建築は、国の政策である医療制度とそこで行われる診療形態の影響を強く受ける。なぜなら、適正な病室の面積や廊下の幅など、通常であれば建築基準法が扱う事柄を、施設が満たすべき基準として医療法や診療報酬制度で定めていること、そして診療エリアの室のクライテリアが診療形態によって規定されるからである。こうした基準や医療形態は、社会構造の変化や医療の機能分化により多様化するとともに急激な変化を続けている。医療法は 1985 年から 25 年の間に 5 回改正され、診療報酬制度も 2 年ごとに改正される。診療形態も疾病構造の変化や医療技術の進歩により日々変化し続け、当然、それらが必要とする空間は多様化し，可変性が求められることにる。今回の計画では常に変化し続ける医療情勢のために「可変ホスピタル」を採用している。医療建築では清浄度、温湿度条件、高度医療機器対応などの設備計画の比重が高い。また、散在する水回りや 24 時間無休で稼働するといった特殊性をもつ。このような特有の条件下で求められる多様性、可変性を実現するのが「可変ホスピタル」である。このシステムは､設備の構造躯体を分離したスケルトンインフィルの考え方を軸として、病院部門や外来部門に加え、従来対応が難しいとされていた画像診断部門や手術部門などの可変技術を開発し、医療建築の特殊性、個々の病院の条件を加味した医療建築としての柔軟な骨格の形成を目的としている。

No. e-147　平和台の民家 ――阿部勤，　jt1008

平和台の民家

法隆寺の時代からでも 2000 年、各時代の人に選ばれ、今日まで残ってきた木や土、石といった素材またそれ等を扱う技術には確かさがある。
前の時代から引き継いだ“もの”、“こと”を今の目で選択し、その時代の新しい“もの”、“こと”を加え次の時代に伝えることが各時代に生きる人が心がけなければいけないことがと思う。
「平和台の民家」この家をこう呼ぶことにした。最寄りの駅が東京の西、有楽町線の平和台だということと、平成、昭和、大正の時代に住み続けられた家だからである。
民間レベルでの単なる古民家の保存は考え等絵 r 図、残すのであれば当然のことながら、これからの百年、住まいとして快適に住み続けられるように機能面、設備面を充実させたり、構造的な見直しが必要なため、そもままの型の曳屋は断念し、一度解体し、残したい空間、残したい材、残したい技術を選び、それに今の時代の住まいに必要な“もの”､“こと”を加えて再構築することとなった。

No. e-148　美原の農家 ――大野鶴夫，　jt1008

当初このプロジェクトの設計は鉄材と木材の両立、および対比的なデザインで進めていた。鉄は現代建築の象徴的な素材であり直線的でもある。他方、古民家で使われていた木材は、手の跡が残り有機的である。
・・・そのため、構造的にも意匠的にも鉄材と木材の二元対比的なデザインで進めていたが、途中で止めて原点に戻ることにした。・・・材料を捨てずに再利用して記憶の継承と共に新しいデザインを投入し、増築される部分は邪魔にならないデザインと有機的な材料を用いた計画を進めることにした。記憶の中に棲みついている桂離宮に見られるような段階的に増築、改修を重ねた建築手法が頭から離れなかった。そのため、構造的にも意匠的にも鉄材と木材の二元対比的なデザインで進めていたが、途中で止めて原点に戻ることにした。
この敷地に建つ建築群は一度に完成したわけでなく、長い時間を経て移築、増築、新築を繰り返し多くの人の手を経て構成され、現在においてなお、設計が続いている。
このような建築に対し、今私たちが建築家気質でデザインの挑戦を果たすのではなく、大工仕事をしていた経験を生かし、痛んでいるところは素直に取り替え、建物にそぐわないデザインが施されているところは伝統的なデザインに戻す。どうしても生活に合わない部分は材料を捨てずに再利用して記憶の継承と共に新しいデザインを投入し、増築される部分は邪魔にならないデザインと有機的な材料を用いた計画を進めることにした。

美原の農家

No. e-149　三輪窯 II ――三分一博志，　sk1102

壁面は端材を斜めに積層したパネルで構成し、雨や力の流れに導かれた構造体となる。外部は樹皮をそのまま現し、樹木の成り立ちの姿そのままに建築の表情をかたちづくる。端材には、価値の低いものゆえの姿と趣、鉄には時と共にさびていく儚さがある。その素材そのものの持つ性質に新しい価値を見出し、空気や重力、雨等の自然の絶え間ない営みに導かれたディテールを与え構成していくことで、建築は地球や人びとに末永く認められると考えられている

三輪窯 II

No. e-150　大森ロッヂ ――大島芳彦，　sk1103

私たちが目指した設計のスタンスは、既存の状況を一度「解体」した上で魅力的な部分を抽出し、これをほどよい「余白」と共に抽象化するということ。歴史が紡ぐ物語に新たな生活者たちが参加し、変化、成長する楽しみを共有できる「余白」をデザインするということだ。
段階的に進められる大森ロッヂのリノベーションは、この余白に徐々に人びとが関わることによって有機的に成長する。そしてその成長の過程に終わりはない。

大森ロッヂ

No. e-151　Aesop Aoyama ――長坂常，　sk1104

スキンケアブランド Aesop の日本における初の路面店の計画である。その場所にある、どこにでもある古い一軒家を解体し、どこにでもあるスケルトン空間に挿入し、どこにでもある形式の棚をつくり、それでショップとオフィスを間仕切った。それによって、どこでも可能だが、どこに行っても異なる空間づくりを考えた。必然的に変化するスケルトンとマテリアルを取り扱うルールを限定することで、想定を大きく超えず、されど堪能しがいのある変化を持続させるコンセプトである。

Aesop Aoyama

また、この方法は当然スケルトンとマテリアル、そしてある程度固定化された運営上のマニュアルそれぞれを、そのまま隠さずぶつけ合うため、互いの関係の間に矛盾が生じる。その矛盾が、もうひとつの変化の余地でそれが見る者に将来への変化の可能性を感じさせる。本件は路面店であることから、同時にその矛盾を町にもゆだねるおとで、街の風景と繋げた。

No. e-152　Maruya garden ――みかんぐみ，　sk1105

共用部の床など、身体に近いところには無垢の木材や石を使い商業建築のメンテナンスだけに優れた材料を使うということを極力排除した。外壁はナイロンロープのメッシュに、地元の蔓植物やアイビーを混在させ、エントランス回りはより密集した植栽を施し、垂直なガーデンとした。さまざまな材料が時を重ねるという前提を共有するように、この外壁も育っていく。

Maruya garden

No. e-153　Ring Around a Tree ふじようちえん増築
――手塚貴晴＋手塚由比，　sk1106

建物の半分は外部である。建物は樹と交じり合い、その輪郭は内部と外部を隔てる外壁とは著しくずれている。
大ケヤキは、まだ若木の頃台風にあおられて転倒し、そのまま枯れてしまうかと思ったら生き残り、50 年近くの歳月を経て、大人でも抱きかかえられない大木に育った。・・・
5 月になると建物は緑に埋もれる。優に建物の 5 倍の量塊の茂みが建物に覆いかぶさり侵食する。枝はありとあらゆる建物の部分にうごめく影を落とし、床や柱はどこかへ消え失せてしまう。建物の平面形態は歪んだ楕円形。傾いた梢の影をなぞったかたちである。思うがままに突き出した枝はそのまま残し、建物に突き刺さり覆いかぶさるに任せている。・・・

Ring Around a Tree ふじようちえん増築

そこで竣工後いきなりようちえんの子どもたちに開放しては危険だと考え、小一時間ほど手塚家の娘と息子を放し飼いにしてみた。・・・しばらくすると建物に突き刺さった枝を伝って手摺を乗り越えてしまった。これは危ない。この建物には随所にロープが張ってある。園長先生と据え付けた安全装置である。このロープをわれわれ設計側はポジティブに捉えている。安全第一に考えるとこの種の建物は生まれない。たとえ 50cm の段差でも危険なものである。この危険を注意深くコントロールしつつ教育に取り入れているのが「ふじようちえん」の特徴である。・・・とりあえずつくってみてから、どうしても危ない空間は補強する。張られたロープはその試行錯誤の足跡である。木は成長を重ね建物との関係は変化する。その変化のたびにロープの張り方も変わり続けるはずである。

No. e-154　Do It Yourself ――垣内光司，　1t1106

何よりこの DIY プロセスを経た彼［＝施主］自身が、もっとも自身の家を知る人間となり、生活の変化やメンテナンスに対応できる力を獲得したこと以上の安心感はほかにない。
100 年前に建てられたこの町屋は、大火を逃れた人びとがその焼け跡から使える材料を再利用して建てたものだと、改修中にご近所の方から話を聞いた。壊れたものを補修し、利用可能なものは再利用しながら住み継いでいく。100 年後の耐震改修 DYI プロジェクトは、ごく自然なことだったのかもしれない。

Do It Yourself

No. e-155　みやした こうえん ――塚本由晴，　sk1107

乱暴な言い方かもしれませんが、20 世紀の建築家は現在からその先の未来までを扱って空間にしてきました。前の家や前の庁舎よりも新しくつくる方がよいとみんな信じていたわけです。もちろん、大学の教育もそれを前提に成り立っていました。鉄筋コンクリートの図面を引くということが未来に向かうことだったわけです。しかし、むしろ今はプロジェクトに関わっている前とその後の両方の時間をどうやってひとつのフレームに納めるかという空間的、時間的想像力が求められています。それはひとつの住宅であろうと、公共的なものであろうと変わらないはずです。・・・

ネーミングライツでナイキが権限を持つのは 10 年間ですから、その後に別の企業が関わる可能性は十分にあります。だから、われわれの設計は、リノベーションという感覚でなくて、どちらかというとリレーです。われわれが受け取ったバトンを次の人に渡すまでが仕事なのです。それもあって、工事前のままで保存してあるところもあります。それはある時点で誰かが判断してつくったものなので残っていて構わない。むしろそういう一筋縄では行かない時間の堆積が見えていた方が良いのです。それが見えなくなるぐらいにひとつの意志で統一してしまうこと自体がパブリックスペースとしてふさわしくないと思ったのです。

みやした こうえん

No. e-156　テクニカフクイ新社屋
――薄田学＋長谷川寛／竹中工務店，　sk1107

閉じた外部とは対照的に、玄関を入った建物の中央に水盤を持った中庭をボイドとして嵌め込むことで上部から自然環境を取り込んだ。閉じた箱の中に入ると一転してガラスのカーテンウォールと水盤に反射した山や空が光と共に映し出される。上部の排煙＋換気窓と下部の換気窓によって中間期には風も取り込むことができる。
エントランスや打ち合わせコーナーなどパブリックな部分を回廊状に配置しており、季節や時間の移ろいに従い、光や影だけでなく風景自体も取り込むことでその姿を変える。

テクニカフクイ新社屋

No. e-157　駒沢公園の家 ――今村水紀＋篠原勲，　sk1108

木造家屋が密集する環境を「木造の軸組の集まり」と捉えてみる。すると一気に、木造密集地は、簡単に編集できる風景に見えてきた。今の時代にあった用途や家族構成によって、梁や柱を抜いたり足したりして、建物を更新していくことがが、木造の軸組ではできる。私たちは、敷地や、既存建物に縛られずに、自由に軸組を更新していくことで、古い木造家屋の抱える問題を解決しながら、まっさらな風景をつくるのではなく、時を経た建物や景色を少しずつ更新していくことを考えた。
この「木造の軸組の更新」が、都市部の一般的な住宅密集地を、新しい風景に変えていくきっかけになればと思っている。

駒沢公園の家

No. e-158　VISION ――根津武彦，　sk1109

幾重にも重なるフィルターは、季節、時間ごとにシミュレートされた太陽光を、作業性と機能性を加味してコントロールしている。屋外の緑が生い茂る頃には、床から伸びる植物と共にそのレイヤーに織り込まれ、今とも異なる表情を見せてくれるに違いない。

VISION

No. e-159　高野口小学校校舎改修・改築――本多友常，　sk1203

改修の基本方針は、木構造による耐震補強を行った上で、受け継がれてきた教育環境の価値を後世に繋げていくことにあった。そのため再利用できるものは再利用し，残せるものは残しつつ、快適な教育環境がどこまで獲得できるかが課題の中心となっていった。
70 有余年を経た学び舎の歳月は、親子 3 代にわたる人びとの記憶を、受け継がれてきた愛着として校舎に宿している。その意味を考えると、校舎の窓は、なんとしても木の建具でなければならなかった。長い話し合いの結果として、片廊下を挟む内と外の両側の窓は、教室を外気から守る 2 重の建具の効果があるものとして、修理して使い続けることとなった。しかし教室の直接外気に面する外周部は、気密性を確保するためにあたらしくつくり直し、元の建具は小屋裏に永久保存とした。差小渕天井も相当な破損を受け入れつつも、白くしなければならなかった教室の天井の中に、元の姿を隠してかろうじて温存されることとなった。これを推進した根底には、これからの長い時の経過において、かつてあり続けていた姿の価値が、改めて醸成され再認識されていくに違いないという確信が、たくさんの人びとに共有されていたからに他ならない。

高野口小学校校舎改修・改築

No. e-160　大多喜町役場――千葉学，　sk1204

今後もまた同じくらいの年月､50 年は生き長らえるような建築をつくろうと考えた。

こうして蘇った旧庁舎は、どこからどこまでが元の姿で、どこからが新しく手を加えた場所かは即座に分からないような、しかしよく見てみれば、どこかに痕跡が残っているような、そんな曖昧で複雑な全体性を持った空間となっている。新しいとか古いとかいった乱暴な枠組みで捉えるのではなく、むしろひとつひとつの改修の履歴が地層のように堆積した空間である。

現代という時代は、・・・さまざまな価値判断が錯綜している時代でもある。頼り得る地域性やコンテクストは間違いなくあるが、しかしそれは、一義的に説明できるようなものでは決してないし、今井兼次の建築の本質は何かなどという問いに対する答えは、それを体験した人の数だけありそうである。古いものと新しいものの境目は常に曖昧であって、時に古いもののほうが新しく見えることだってある。このような時代において建築をつくることは､困難であるが､しかし一方で、次の時代に向けた建築を生み出す多くの可能性を秘めているようにも思う。
こうした状況を前に僕たちは、過去を否定することで生まれる新しさではなく、地域をひとつの価値にくくって生み出される調和でもない、あらゆる複雑さを引き受けた上で、僕というひとりの目が読み解き、紡いでいったひとつの物語のようなものとして立ち現れてくる、複雑で曖昧な全体を持った建築のあり方を探し続けていたのだと思う。門形フレームというありふれた要素が、町や既存棟と関係性を持ち始めた途端、それは一気に時間を超越して、どこかで見たような懐かしさと同時にどこにもなかったような新しさをもって浮かび上がってきたり、役場として充分に機能するようなフレキシビリティを追求した結果、それが役場を超えた使い方をも包括するような普遍性を持ち始めたり、あるいは今井兼次が生み出した建築でありながら、同時に今井兼次がつくり得なかった建築のようにも見えてくる。その中で、建築の何が変わらないものとしてあり続け、何が変わるものとしてあるのかを見極めていく作業は、今の時代だからこそ生み出し得る、次の時代に向けたバトンのようなものであるとも思う。そしてこの建築がまた 50 年後、幾重にも読み取られてまた次のバトンに繋がってくれればと心から思う。

大多喜町役場

No. e-161　黄檗山萬福寺第二文華殿
――森田昌宏＋足立裕己／竹中工務店，　sk1205

足元からは地窓を経た自然光が、拡散と反射を繰り返した果てに布の裏側に忍び込む。その光は、布の方位や時刻・空・天候・季節によって刻々と移ろい変わる。一方、布の表側には室内照明の灯りが反射し、見る人の立ち位置によって様相を変える。また、室内をめぐる気流にも敏感に反応する。・・・光の始原を感じさせるような特別な容器、訪れた人びとが特別な時間を味わい、人生の謎や仏さまの教えに思いを至らせてほしいと願う。

黄檗山萬福寺第二文華殿

No. e-162　Peanuts ——前田圭介，　sk1206

生後 43 日から 12 カ月間の過程は、まさに五感を研ぎ澄ましさまざまな状態を認識していく中で大きな発達を遂げる時期である。

Peanuts

居場所とは、人間あるいは生物が生きていく多様な活動のインタラクティブな環境領域に身を置くことである。すなわち人間や動植物など生命あるものから大気の状態まで、刻々と更新するうつろいとの応答の中に環境の総体としての居場所が存在する。こういった状態の中でこそ本能的な感受性は喚起されていくのである。・・・さまざまな樹木や草花、岩や石、そしてうねるけもの道に寄り添うかたちでサクランボ、ヤマモモ、キンカンなど実のなる植物の香りの出る植物を多く配植し、木漏れ日・枯葉のゆらぎ・雨音や小川のせせらぎ、さらに季節の薫りや自然の小動物など多様な要素とのインタラクティブな環境を五感で受け止めていくだろう。その日ごとの更新が何よりも子どもと保育者が育ち合う持続可能な保育環境を生み出していくのだと強く感じる。

No. e-163　豊崎長屋（南長屋・北終長屋）——小池志保子，　sk1208

改修は凄い力を持っている。すぐには出来上がらないけれど、徐々につくられゆっくりと実る。その長い時間の中で、少しずつ日常が育まれていく。90 年続く高齢の住人たちの交流の中に学生たちが溶け込み、コーヒーの香りと笑い声がどこかの部屋から漂ってくる。建築物ひとつの改修が、ひとつだけのことに留まらずに街を変え、人を変える。
・・・建物は老朽化して空き家が見られた。そこで長屋の所有者と住人、大学が一緒になって再生を進めてきた。
季節の移ろいを感じる暮らしを残していきたい、その魅力を住み継ぎたい、この思いはプロジェクトに通底している。住む場所としての再生にこだわり・・・
木造軸組構造の魅力を探りながらの再生改修・・・
豊崎長屋はさまざまなことを学ぶことができるプロジェクトである。使う立場の人がいつの間にか導く立場になっている。改修作業を手伝っていた学生が住人になり、アーティストとして作品をつくっていた知的障害を持った作家がその技術を教える人になる。お客さんがつくり手になり、利用者が担い手になる。このような巻き込む力があること、それが改修のいちばんの可能性なのかもしれない。

豊崎長屋（南長屋・北終長屋）

No. e-164　KIM HOUSE 2011 ——岸和郎，　jt1208

いちばんびっくりしたのは、24 年経っても両隣の住宅が当時のままという事実だった。それに見回してみると隣だけでなく、近隣の風景も昔のままだ。この住宅ができ上がった後、バブル経済の到来や崩壊など、24 年間の日本の経済状況の変化は凄まじかったが、この地域そのものにほとんど変化がない。さながら昭和 30 年代で時間が止まったような風景。

KIM HOUSE 2011

2011 年の改装の主題はそんな都市との関係を改めて見直すことだった。・・・
住宅と倉庫とは同じビルディングタイプだと考えてきた。どちらも内部の使い方はどうとでも変更可能だが、外部とのインターフェイスだけが重要、という意味でだ。
倉庫は閉じていることが基本だし、住宅は外部と内部とを調停する要素、すなわち都市とのインターフェイスである「ファサード」や「中庭」だけを時間を超えても変化しない永続的インターフェイスとしてデザインすること。
ヨーロッパの歴史建築のように「ファサード」や「中庭」は不変の要素として存在し、内部空間の改装と共に時代の変化が建築に刻印されればいいと考えてきたのだが、それは本棟に形式的な議論であり、「ファサード」も「中庭」も時代とともに変化する要素に過ぎないと考えた方が自然だ、ということに気付く。
では、時代の経過の中でも変化しない、永続的な建築要素とは一体何なのか。
24 年の年月の流れの中で変化したことと変化しなかったこと、自分自身の変化も含めて、最も意識的になったのはそのことである。

No. e-165　8 ビル ――塩塚隆生，　jt1208

同じサイズの住戸が連続する集合住宅の形式、つまり 12 個の区画とふたつの階段室の組み合わせで、居住者の用途や必要面積の変化に追従できる多様さをもった建築に変えようとした。たとえば、3 階の住宅を拡張する時は 2 階のっ区画を住居として使ったり、1 階のオフィスのスペースが足らなくなれば 2 階のいくつかの区画をオフィスにあてたり、各階をそれぞれひとつの家族が使うことで 3 家族の共同住宅になり得たり、2 階の 4 つの区画をそれぞれオフィスやショップとしてシェアをするなど、時間軸における使い方の変化を呑み込む建築にしたいと思った、

8 ビル

No. e-166　旧澤村邸改修 ――山中新太郎，　sk1209

愛されて使われている建築ほどさまざまな手が加えられている。今回の改修では様々な痕跡が重なるハイブリッドな状況を変えないようにしようと思った。異なる改修手法が組み合わされてできた建築の状況をまちの縮図と見立て、将来もそれぞれに別の手が加えられて使われ続けていけるようにしたいと考えた。強い改修手法によって建物を画一的に直してしまうと、それまでの痕跡が失われてしまい、人びとの愛着は失われる。まち遺産の改修は全てをやり切らずにオープエンドである方がよい。まちも建築も「開いた計画」でなければまちの温度は上がらない。まちづくりには若者の参加が欠かせない。
澤村邸は開館から 2 カ月で 10,000 人以上の入場者を集めた。母屋の 2 階は下田芸者を引き継ぐ和解芸姑さんの練習場となり、トイレ前の広場は、キャンドルカフェなど、まちのイベントの会場として生き生きと使われている。蘇ったまち遺産を市民たちが使い倒している姿は何とも頼もしい。・・・

旧澤村邸改修

No. e-167　大阪市住宅供給公社 カスタマイズ賃貸プロジェクト ――馬場正尊，　sk1302

行った操作は住宅の半分、水まわり側には一切手をつけず、もう半分をスケルトンにして限りなくそのまま貸すこと。余白の部分は住み手に委ねる、というとてもシンプルなモデル。住み手がつい手を出したくなるきっかけの壁を立てた。構造用合板の L 字型の独立壁で、そこは塗装しようがビスを打ち付けようが自由だ。さらに、R 不動産で取り組み始めた「toolbox」のシステムと連携して、自分の空間を編集するアプリケーションと組み合わせた。日本では住み手が空間にコミットメントする選択肢が少ない。DIY か業者発注か、どっちも極端で、求められているのはその中間領域だ。toolbox はそれを埋めるシステムだ。
ここでの実験は、コントロールされた余白と、それを住み手が編集するきっかけのデザイン。

大阪市住宅供給公社 カスタマイズ賃貸プロジェクト

No. e-168　麻布十番の集合住宅 ――栃澤麻利，　sk1302

この建築をどのように再生していくべきかを考える時に、その手掛りは「麻布十番らしさ」にあるのではないかと思った。麻布十番は、洗練された麻布エリアの中でも庶民的な懐かしい雰囲気を残す地域である。古くから続く商店街は大規模な開発から逃れ、個々の建築の建替えや店舗の入れ替わりにより、緩やかに更新されながら街の魅力が継続している。この、継続する古いものを残しつつも、新しいものが加わりながら街が継続していくことが「麻布十番らしさ」であり、今回のリノベーションに通じるものがあるのではないかと考えた。
・・・道路に面して、1 枚の壁を新設し、その壁と既存躯体との間に生まれるわずかな空間と開口位置により、街との新しい関係をつくり出している。・・・挿入した 1 枚の新しいファサードは、建物を、町並みを、緩やかに更新させる「麻布十番らしい」ものになっているのではないだろうか。
このリノベーションを通して、この建築単体のみならず、街全体の魅力が緩やかに更新・再生されていくことに少しでも寄与できていれば、と願っている。

麻布十番の集合住宅

No. e-169　字城市立豊野小中学校 ——小泉雅生，　sk1307

豊野小中学校は、小学校の建て替えにあたって近隣の中学校敷地・校舎を活用し改築を行うこととなった施設一体型の小中一貫校である。特別教室や体育館を共用して効率的に整備を行うと共に、一貫教育により不登校などの中１ギャップへの対応することが目指されている。
この柔らかい曲線で囲い込む形式は、時間軸を見据えたものでもある。将来、中学校校舎の建て替えの時期がくる。その時には、今回建設された校舎の外形に、従前の校舎の跡が残される。新たな校舎が新旧の建物を物理的に繋ぎ、小学生と中学生を繋いでいく。また過去から今、そして将来へと記憶を繋いでいくこととなる。

字城市立豊野小中学校

No. e-170　Apartment 惣 ——泉幸甫，　sk1308

この大きな中庭とは別に、新築した集合住宅には独自の小さな池のある中庭もつくった。三方が回廊に囲まれ、屋上で集めた雨水が池に直接落ちるようになっている。雨水が水面をたたく音や波紋が、雨の日の情景を生み出す。その情景は雨量や風によってさまざまに変わる。この集合住宅が最も輝くのは雨の時かもしれない。このような都市の中にあっても、自然を取り入れることは可能である。

Apartment 惣

No. e-171　直島宮浦ギャラリー ——西沢平良，　sk1309

展示室のルーバーは上空からの日差しによって色調や濃淡を変えるようにした。基本的に、黒色の焼け付きによる平滑な鉛直面というのは、光に照らされるとツヤの反射によって色彩を失うが、照らされなければ黒色のままである。それを数百本のルーバー材によって繰り返すと、天井全体が黒から白までのグラデーションとなり、水墨画で覆われたような展示空間ができ上がる。この水墨効果は光の仕事であるから、太陽高度や天空照度に合わせてゆっくりと濃淡や色調が変化し続けることになる。日没が近づくと水墨効果が消え、代わりに周囲の色調がルーバー面に映り込み、カラフルな表情を見せるようになる。ルーバー面に暖色（木材の色）と寒色（天空色）という両極端の色彩が映り込み、天然色のような印象になるためである。

直島宮浦ギャラリー

No. e-172　豊島横尾館 ——永山祐子，　sk1309

そして、既存の日本家屋の空間に赤、黒、透明のガラス、鏡などさまざまなスクリーンを挿入し、作品、庭の風景のイメージが各スクリーンによって増幅していくように考えた。
この美術館で目指したのは、建築と作品が一体となった空間。建築という三次元表現を絵画的な二次元表現に近付けることを考えた。横尾氏のコラージュ作品のように、増幅された作品のイメージとさまざまなスクリーンによって空間の中に生まれる二次元的シーンが共に三次元空間にコラージュされ、作品とシーンが一体となる。シーンは人の動き、太陽の光の状態で刻一刻と変化する。一度として同じシーンの組み合わせはない。「生と死」は横尾忠則作品の根底にあるテーマであり、私たちの日常の中に流れる共通のテーマでもある。作品から、固定化されない生命の変化と循環を感じる。常に変化し、循環し続けるシーンの集合体として、横尾美術館を考えた。
もうひとつ、美術館の重要な役割は高齢者が多く住む離島の日常の中に、活力を与える新しいきっかけとなること。それが福武財団と施主からの強い要望でもあった。地域の人びとと、美術館がつくられていく過程、さらに美術館そのものを共有するため、美術館を知ってもらう機会を積極的に設けた。餅つきイベントを通しての説明会、瀬戸内国際芸術祭の期間中には建設過程が赤いガラス越しに見えるようにし、庭の池底のタイル絵の制作は住民との共同作業で行った。また「生と死」のテーマから、この場所で葬儀が行なえるようになっている。美術館であるのと同様に地域の重要な箇所となり、生命の循環のエネルギーがこの美術館から地域全体に広がっていくことを望んでいる。

豊島横尾館

No. e-173　改築 散田の家 ――坂本一成，　sk1312

ある時期以降は、時間の継続の問題についても考えるようになりました。時間が継続していくような、未完成のような状態をつくりたい、と思ったんですね。それが顕著に現れているのが、たとえば House SA で、なんだか材木置きみたいだと言われたこともあります。時間は目には見えませんが、時間の長さや継続性を、空間の痕跡として残したいと感じ始めていたのかなと思います。ですから今回の改築にあたっても、イメージを変えてほしいという要望に対して、すべてを変えるのではなく、蓄積された時間も残しながら自分もうよしとする空間にしたいと考えました。建築をどのようにつくっていくかということは、ある種の操作をすることで、ものとして成り立っていくわけですよね。そしてその操作にもさまざまなレベルがあるわけですが、イメージを変えるという意味では、この建物の場合は、白く塗ることがいちばんシンプルで有効な操作だと思いました。

僕の建物は基本的に家族構成が変わっても、大幅な改修がされたことは今のところないんです。水無瀬の町家は 2008 年に別棟を増築しましたが、架構や空間の分節といった内部空間に関しては、どれも特に変わっていないんじゃないかと思います。それはおそらく設計時に、家族構成を考慮するのはもちろんですが、それだけのために建築をつくっていないからじゃないでしょうか。家族構成を超えた建築の元型を常に追求してきたと思います。

改築 散田の家

資料編： 第３章 連作に関する設計論にみられる時間認識

注）［ ］内は意味を補うために筆者が加筆したものである

付表３　連作に関する設計論の資料リスト

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				モデルの想定形式	
						形態	空間	構成	構法・技術	漸移的形式	帰納的形式
1	sk 5003	PREMOS No72 に就いて	田中誠	プレモス72型	4				n		類
2	sk 5407	木造住宅におけるCASE STUDY	三輪正弘	木造住宅におけるCASE STUDY	8				m		差
3	sk 5411	住居デザインにおけるコアの意義	池辺陽	住宅 No. -サービス・コア	4			h			差
4	sk 5511	Tプランにおける可能性の追求	池辺陽	住宅 No. -Tプラン	3	c					類
5	sk 5511	鉄骨住宅への反省	広瀬鎌二	SH -構法	10				m		混
6	sk 5511	鉄骨構造による4つの住宅	三輪正弘	鉄骨構造による住宅	4	b					差
7	kb 5804	工業化のためのデザインへ	池辺陽	住宅 No. -工業化	6				n		類
8	sk 5806	都庁舎の経験	丹下健三	シティー・ホール	5		g			類	
9	sk 6004	C.S. ハウス #3 の設計	増沢事務所	コアシステム	5				n		類
10	sk 6006	住宅における basic なもの.	田辺博司	basic house	6			h		類	
11	kb 6012	発想から形になるまで・・・	広瀬鎌二	SH -MC	4				n		な
12	sk 6205	H形鋼使用による住宅設計ノート	小沢行二	H形鋼使用による住宅	3			i			差
13	kb 6211	建築生産プロセス自動化への提案	広瀬鎌二	SH -自動設計法	3				n		類
14	sk 6710	駿河銀行支店建築の『かた』設計	菊竹清訓	駿河銀行	3			h			類
15	sk 7110	建築としての住宅	坂本一成	閉じた箱	3		e			類	
16	sk 7201	空間場へのアプローチ	中島龍彦	空間場	4			j			な
17	sk 7202	住宅論	篠原一男	亀裂の空間	4	a				差	
18	sk 7204	〈手法〉について	磯崎新	手法	10	b				類	
19	sk 7204	コミュニティ・バンクの機能と空間	菊竹清訓	アンブレラ・ストラクチャー	4			i		差	
20	sk 7205	若人の新しいコミュニケーション空間	小川淳	ユースホステル	3		d				混
21	sk 7307	なし	伊丹潤	WORK	3		d			差	
22	tj 7312	仮面としての建築	相田武文	自立した立面	3	a					差
23	sk 7501	現代のファンクショナル・トラディションを求めて	押野見邦英	KAJIMA SCIENTIFIC BUILDING DESIGN SYSTEM	3			h		差	
24	kb 7505	「内なる空Ⅲ／深沢・住宅」に関するノート	富永譲	内なる空	3		e				な
25	kb 7601	なぜ連階段か	船越徹	連階段の家	4			h		差	
26	sk 7701	「帯」としてのオフィス・スペース	林昌二	帯	4	c				差	
27	sk 7702	住居思考	武者英二	白い吹抜のある閉じた空間	3		e			差	
28	sk 7702	状況に棲す	安藤忠雄	情念の基本空間	4		d				類
29	sk 7703	沈黙と饒舌のあいだで	相田武文	斜めの造形	3	a				類	
30	sk 7705	余白の導入	長部稔	余白	4			k			類
31	sk 7708	細胞としての住宅	山下司	細胞	6		d				類
32	sk 7806	都市への埋め込み作業	長谷川逸子	焼津の建築	3	a				類	
33	sk 7902	家形を思い、求めて	坂本一成	家形	3	a					差
34	sk 7905	中間領域または周縁性へ	黒川紀章	中間領域	3		g			類	
35	sk 7908	再生への演歌	星野厚雄	中古木材	5				l		類
36	sk 7909	設計について	谷口吉生	二律背反の単純図形の組合せ	6	b				差	
37	sk 7909	狭間からの象徴空間へ	神谷五男	メタモール	4	a					な
38	sk 7910	非装飾が装飾化する可能性を開始する	長谷川逸子	曖昧な図形	3	c					混
39	sk 8004	地形の発掘・部屋の格納	香山壽夫	沖縄の住宅＋病院	3				h		差
40	sk 8008	続・コートハウスの記	太田隆信 他	正面のない家	4				k		差
41	sk 8008	表現について	山下和正	アタッチメントとデフォメーション	4	b					差
42	kb 8008	多重屋根のコンセプト	木村誠之助	多重屋根の家	5				i		差
43	sk 8101	開かれた博物館をめざして	戸尾任宏	博物館	5		f				混
44	kb 8102	プライマリィの継承としての混構造	宮脇檀	混構造	4				i		差
45	sk 8104	光を！	葉祥栄	光と架構	3					m	差
46	sk 8108	自然との共存を求めて	石井修	目神山の家	7	-	-	-	-	-	差
47	sk 8108	形態とすき間	東孝光	スリット	6	b					類
48	sk 8209	設計随想	神谷五男	曲線	3	c				差	
49	sk 8304	なし	芦原義信	スプリット・レベル	3				h	差	
50	jt 85春	遊戯性、積木、そして……	相田武文	積木の家	10	a				差	
51	sk 8506	コミュニティ施設を木造でつくる	納賀雄嗣	豊里町の木造建築	3				l	差	
52	jt 8610	ロビンソン・クルーソーの家づくり	石山修武	コルゲートパイプ	5				l+n		差
53	sk 8611	なし	長谷川逸子	パンチングメタルのスクリーン	3				l	混	
54	sk 8703	3つの図書館と幾何学	岡田新一	幾何図形平面の図書館	3	b					差
55	sk 8703	なし	大杉喜彦	INDEX	3				l	な	
56	sk 8704	54の柱	石井和紘	54	3				j	差	
57	jt 8705	コンクリート・ブロック造の住宅 3題	圓山彬雄	コンクリート・ブロック造の住宅	9				l+m	な	
58	kb 8808	設計作業日誌 77/88	山本理顕	ルーフ	3			h+i			類
59	sk 8810	異化する	安藤忠雄	都市のアルコーブ	3		e			差	
60	sk 8810	INTERIOR LANDSCAPE	早川邦彦	INTERIOR LANDSCAPE	3			j		差	
61	jt 8901	"街の眼"から住宅見る	早川邦彦	成城の家	3			i			
62	jt 8904	遅さの、沈黙の戦術を置くこと	鈴木了二	物質試行	26						差
63	sk 8908	街路に開かれた集合住宅	早川邦彦	集合住宅	3		e				類
64	jt 8912	装飾の断面	久保清一	装冠の建築	10	a				な	
65	jt 9001	場の意味と軸の規定	村上美奈子	軸	3	b				差	
66	jt 9002	自然・素材・建築	竹原義二	自然との融合	3				l		差
67	sk 9003	光のワイドレシーヴァー	原広司	光のレシーヴァー	5		f			差	
68	jt 9007	プラットホーム	妹島和世	PLATFORM	3		d			類	
69	jt 9011	宙吊りの幾何学	宮崎好彰	ジャンクション和接合	3	b					混
70	sk 9101	木洩れ日のなかで	相田武文	ゆらぎ	6			i		混	
71	sk 9103	蝶の家に住む小児科医	葉祥栄	緊張構造	3				m		類
72	sk 9104	象徴化する	中村弘道	都市のシンボル	3	a				差	
73	jt 9106	紙の建築	坂茂	紙管	3				l+m		差
74	sk 9109	「ON AXIS-OFF AXIS」から「厳粛なる散逸」へ	小林克弘	厳粛なる散逸	3	b				類	
75	jt 9109	好木心	中東壽一	舎	7				l	類	
76	jt 9111	「地籍」の「かたち」	林雅子	末広がりの家	3	c				な	
77	jt 9112	「自律する秩序」と「孕んだ空間」の合成	越後島研一	木造による西欧的造形	3	a					類
78	sk 9201	建築の素形	内藤廣	素形	7	a					類
79	jt 9203	建築の教育と体験	坂茂	壁とコアによる空間構成	6				h+i	差	
80	sk 9205	都市空間のプログラム	竹山聖	無為の時間の空間化	3		g				混
81	jt 9205	PROJECT MIZOE-3	藤井博己	MIZOE	3			j		混	
82	sk 9206	時と風景	槇文彦	ヒルサイドテラス	5		g				混
83	jt 9211	廻遊式住居	竹原義二	廻遊式住居	6		d			類	
84	sk 9212	軸	古市徹雄	軸線	4	b				差	

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				モデルの想定形式	
						形態	空間	構成	構法・技術	演繹的形式	帰納的形式
85	sk 9302	都市小規模ビルの可能性	ｱｰｷﾃｸﾄﾌｧｲﾌﾞ	HATHAUS	4		d				類
86	sk 9304	構造テーマの継続と展開	坂茂	南北面に前面開口で内外部が融合した空間	4		e			類	
87	sk 9308	図式の体験	妹島和世	図式	3	b					差
88	jt 9405	[Barn] について	吉本剛	Barn	3				m	類	
89	sk 9501	都市の単位	山本理顕	緑園都市	8	-	-	-	-	類	
90	sk 9502	新しい住居形式を求めて	福村俊治	パティオをもつ住宅	6		e				混
91	jt 9505	和洋折衷・安愚楽鍋	太田隆信	KES構法	3				o		差
92	jt 9506	浮遊する断片がダンスを始めた	竹山聖	天と地の対位法	3	b				類	
93	sk 9507	通過点としての公共建築	伊東豊雄	八代の公共施設	3		e+g				混
94	sk 9509	道から進化する建築	青木淳	動線体	4		d				差
95	jt 9510	明確なかたちをもった部分と何でもない殻	奥山信一	明確なかたちをもった部分と何でもない殻	3			h+i			差
96	jt 9512	トータルシステムとしての独身寮	岡本宏 他	PLUST-21	3				n	類	
97	jt 9602	インターネット空間の断片	西宮善幸	internet空間	3			k			差
98	jt 9604	原初の箱	葛西潔	木箱	3		d			類	
99	jt 9605	光の中の6つのキューブ	葉祥栄	光の建築	6		d				差
100	sk 9608	海のシルクロード建築構想	高崎正治	地球建築	3	a					な
101	sk 9608	複雑性の海に浮かぶ装置体	早川邦彦	装置体	3	a					混
102	jt 9608	場所についての覚書き	塩田能也	つなぐ場所	3		d			混	
103	jt 9609	未知の近代建築に向けてⅣ	岡河貢	ドミノ	3			i			混
104	sk 9610	諸分野統合としての建築	渡辺豊和	商業建築	3	a					差
105	sk 9611	なし	谷口吉生	門構え	4		e				差
106	sk 9611	第三の地形	團紀彦	ランドスケープ	8	-	-	-	-	差	
107	jt 9704	住宅のコストセービング	野沢誠	輸入材	3				n		類
108	jt 9707	原型としての「箱の家」	難波和彦	箱の家	8				n	類	
109	jt 9707	丸太柱と鉄のビーム	石井和紘	丸太柱	6				l+m		差
110	jt 9710	鉄のこと	木村博昭	スチールシートの住宅	3				l+m	差	
111	sk 9807	分有体への試み	遠藤秀平	コルゲート鋼板	6				l	混	
112	jt 9808	森の中の簡素な囲い	香山壽夫	山荘	3		e			類	
113	jt 9808	向齢住宅設計ノート	藤木忠善	すまい	3		d			差	
114	jt 9809	「家具の家」の開発	坂茂	家具の家	3				n		類
115	jt 9902	ロコンニ	阿部勤	ロコンニ	3			k			混
116	jt 9903	立方体住棟システムと"ARCHITECT"	原広司	立方体住棟システム	5	b					差
117	jt 9911	拡散し収縮する家・5つのフェイズ	入江経一	拡散・収縮する家	5		d				差
118	sk 0004	桐蔭学園キャンパス整備計画の歩み	稲塚二郎	コミュニケーションネットワーク	3		d				類
119	jt 0005	中古28年	乗富久哉	DOGU	8				l		差
120	sk 0009	建築のイメージから原寸まで	宮崎浩	透明性	3		f			混	
121	sk 0011	なし	黒川哲郎	丸太材構法	4				l+m		差
122	jt 0104	建築の4層構造	難波和彦	箱の家-サステイナブル	5				n		類
123	sk 0105	企業が溶ける時代のオフィスとは？	大江匡	オフィス	3		d				類
124	jt 0107	木箱仕口212による展開	葛西潔	木箱-鳥居形フレーム	6				m	類	
125	sk 0109	グリッドプランはフレキシブルではない	山本理顕	グリッドプラン	4				n	差	
126	jt 0202	部分から考えることの意味	坂牛卓	連窓の家	3			i		差	
127	sk 0205	都市空間を自由にレンタルするために	古谷誠章	空箱	3		d				混
128	jt 0211	中庭について	岸和郎	中庭	3			k			差
129	sk 0301	構成の強度／形式を純化すること	八重樫直人	アウトフレーム	3	c					混
130	jt 0303	包むということ	遠藤政樹 他	ナチュラル	4				i	差	
131	sk 0310	服としての建築	坂茂	シャッター	3				l	差	
132	sk 0403	空間のこと	妹島和世	部屋の配列	4			h		差	
133	sk 0405	複合の新しい〈風景〉を目指して	飯田善彦	対概念の形象化	4			j		差	
134	sk 0406	バージョンアップするリファイン建築	青木茂	リファイン建築	4				m		類
135	sk 0407	「絶対装飾」について	青木淳	ルイ・ヴィトン	5		f				類
136	sk 0502	Renovation Style	納谷学＋新	マンションのリノベーション	6		e				類
137	jt 0505	共有するプロセス、事後的なプランニング	田辺芳生 他	空間の原形	3		f				差
138	sk 0506	スペースブロックとダブルスキン	小島一浩 他	スペースブロック	3			h		類	
139	jt 0508	建築は動かない	堀部安嗣	多角形平面をもつ住宅	5	c					差
140	sk 0509	バーチャルなエクステリア	藤村龍至 他	グリッドベースの家具	3				n	差	
141	sk 0607	風景を支えるフレーム	下吹越武人	テナントビル	4		e				差
142	jt 0608	建築のその先にあるものと、今ここにあるも	田井幹夫	キール	5			j			差
143	sk 0609	新旧の対話する空間	安藤忠雄	新旧の対話する空間	3			j		な	
144	sk 0610	CHINA RUSHING	迫慶一郎	スケーリング・ユニット	8			h		差	
145	sk 0610	セミモノコック建築	ヨコミゾマコト	セミモノコック建築	4				m		類
146	sk 0703	図式の崩壊から	青木淳	ルールのオーバードライブ	3		f				混
147	sk 0706	「ある置かれ方」でできているメガネ屋さん	中村竜治	JIN'S GLOBAL STANDARD	4			i			差
148	sk 0708	囲いの形式	千葉学	囲いの形式	4			h			差
149	sk 0708	集合住宅であることの意義	谷内田章夫	高さのある住居ユニット	8			h+i		差	
150	jt 0708	住宅はアメーバ型ワンルーム空間へ	安田幸一	アメーバ型ワンルーム空間	4			h		類	
151	jt 0710	別荘の街並みを考える	早草睦恵	軽井沢の別荘	4	b				差	
152	sk 0802	ワンルームという不動産ストックの再構築	田島則行	REISM	7				h	混	
153	jt 0805	ふたたび、都市型住宅へ	岸和郎	中庭と屋上庭園をもつ都市型住宅	3		e			類	
154	sk 0902	ガラスブロックによる「構造+機能+環境」	山下保博	ガラスブロック	3				l		混
155	jt 0905	アルミハウス・プロジェクト	山下保博	アルミハウス・プロジェクト	3				l+m		混
156	sk 0911	改めて家型の意味を見直す	五十嵐淳	家型	6	a					差
157	sk 1007	ポンピドー・センターとの7年間	坂茂	木造編構造	7				m		な
158	jt 1102	「狭小住宅」はやめにして「町家」をはじめる	塚本由晴	まちや	3	-	-	-	-		類
159	sk 1105	線上の建築	佐藤光彦	一本の線	6		d				差
160	jt 1108	規格材で、高品質なプロトタイプ住宅をつくる	奥野公章	7272	3				n	類	
161	sk 1202	パラレル・マテリアル・シティ	辻琢磨 他	マテリアルの流動	4				n		差
162	sk 1206	シェアを設計する	猪熊純	超濃密な可能性の場	3		d				な
163	sk 1211	建物からスペースへ、そして空間性へ	菅順二	オフィススペース	5		d			類	
164	jt 1303	内外を超えた場の可能性から想起する	五十嵐淳	風徐室	3		e				類

別表3-1注1）資料は原則「新建築」「新建築 住宅特集」に掲載された設計論であるが、補助的に「建築文化」「都市住宅」に掲載された設計論もみている。掲載誌のアルファベット記号は、
sk：新建築、jt：新建築 住宅特集、kb：建築文化、tj：都市住宅
を示し、4桁の数字は発行年月を示す。

注2）連作名については、設計論において建築家が名付けている場合は、その名称を記載し、それ以外の場

注3）合は、連作に関するキーワードに基づいた名称としている。

注4）『連作の主題』の記号は、表1に記載したものを用いている。ただし、No.46、No.89、No.106、No.158は【周辺環境との関係】に属する資料である。『モデルの想定形式』の欄には、『建築表現の関係性』のカテゴリー項目を記しており、
類：［類似系］、混：［混合系］、差：［差異系］、な：建築表現に関する言説なし
を示している。

No. s-1　PREMOS No72 に就いて
――田中誠／前川国男建築設計事務所，　sk5003

［連作名］**プレモス 72 型**

PREMOS は木造パネル式プレファブ（工場生産住宅）である。製作を開始してから既に 4 年になる。72 型は、天井パネルを突出させて軒の出とした事、妻側に袖壁を設けて耐震壁として、一般外壁に自由に開口を取れる様にした點等が、在来のものと異なっている。・・・各パネルの枠材からトラスの部材に到るまで、部材の断面の統一、加工の容易化等、大量生産に直ぐ乘り得るように設計されている。外壁は外側から下見板、フエルト、絶縁用テツクス・内部仕上は 6M.M. ベニア、天井パネルはテツクスとミネラルフエルト、屋根はフエルトに亞鉛鍍鐵板、と言つた風に浴室以外は完全に乾式構造である。・・・

プレフアブの設計製作に携わつていて、最も痛切に感じる事は、日本に優秀な乾式構造用資材の無い事である。各種ボード類、テツクス、ベニア、ロツクウール等の絶縁材料、パネルの継目等の充填材料、等の優秀品が大量に安価に供給される様になれば、日本のプレフアブはその面目を一新するであろう。

こゝに紹介された數戸のブレモスもその細部については一作毎に少し宛の改良が加えられている。日本のプレフアブも此の地味な努力の中に細々とその命脈を保ちつゝその發展を将来に期している。

高樹町コンパウンド

北村邸・西園寺邸

鮎川邸

No. s-2　木造住宅における CASE STUDY ――三輪正弘／ RIA，　sk5407

［連作名］**木造住宅における CASE STUDY**

Case Study は大體次の五つの要素に分析する事が出来るだらう。

a. 住い方　　b. 構　造　　c. 表　現
d. コスト　　e. 材　料

住い方は、家族構成、風土的な習慣、流動している社會的條件等から導かれるプランニングとして現れる。コスト卽ち建築費の枠が経済的にプランニングをおさえていく。そこで構造と材料の問題が技術的な素材としてとりあげられることになる。ということは、住い方経済條件の提起をまつて、始めて技術的な建築生産が構造或いは材料の選擇をうながすのである。こゝで始めて建築設計の分野が開かれることになる。そうして實現された住宅が、よかれあしかれ以上の條件の解析者としての設計者、建築家の表現とみなされるはずである。

この様に、それぞれの要素は獨立したものでなく、互いにいりくんだ関係を持つているのであつて、最後に建築となつた表現に於いて判断されるものと我々は考えている。

住宅設計の発展段階を考えてみる時、個々の住宅作品に實験的、或いは試作的な意識が働いていくのは當然の事であるが、もしそれが實験、試作にのみ終始するとしたならば、おそらくその住宅は設計者の作品意識の蔭に住生活を埋没させる結果になるだろう。我々は、數多くの實際の積み重ねの間に斬進的な発展をたどりつてゆきたいと思う。・・・

そうすると Case Study は、個々の試作ないしは提案といい性質からはほど遠く、積重ねと小幅の前進を正確に報告し、個々の作品の関連性を観察する結果になるはずである。

ローコストハウスは、・・・構造材料を節約するほうほうとしてたるき構造を採り上げることになつた。たるき構造の問題点は、屋根勾配そのまゝを室内の空間に出して来ること、卽ち屋根材料と天井材料がたるきせいを挟んで平行に流れる構法である。ローコストハウスの場合、鐵板屋根であり、インスレーションも不充分だつたから、完全に人間的な生活條件を満足すること或は耐用年限の問題で缺陥をそのまゝさらけ出しているが、室内室間の解決にはあつに續く三宅邸・大久保邸に発展することになる。・・・三宅邸・大久保邸に續く土田邸に於てはコの字プランとこの構造の関係をたしかめることが出来た。こゝには寄棟部と入隅部に於て、棟梁、隅梁、或は上り梁等の袖材が、たるき構造に協力する形となり、金融公庫標準規定との妥協が考えられている。中村邸は土田邸の同型に属し、後の青山邸にその変型を見ることが出来る。寄棟型式でたるき構造を採つた典型的な例は小池邸で、その金融公庫型が吉田邸である。

この Case Study に於ては、重点を構造に置き、特に小屋組と軸の問題に焦点をしぼつて見た。

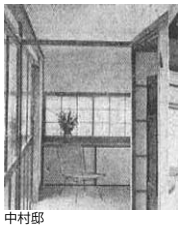
ローコストハウス

大久保邸

土田邸

青山邸

小池邸


中村邸

吉田邸

No. s-3　住居デザインにおけるコアの意義――池辺陽，　sk5411

［連作名］**住宅 No. - サービス・コア**

最近の住居には「コア・システム」と呼ばれる平面のものが非常に多くなつた。私自身の設計もほとんどが「コア・システム」のものである。・・・
・・・コア・システムの一般化を目前にひかえている現在、このことについて改めて考えてみて、今後の発展に何らかの役に立てば、と思う。

住宅 No.15

住宅 No.20

住宅 No.21

住宅 No.17

コア・システムとはどういう方法を意味するのだろうか。・・・もとより、コア・システムという明確な定義があるわけではない。元来コア（Core）とは周知のように核とか中心とかいう意味のものであるから、訳せば、「核組織による平面」といつたものであろう。・・・
住居を形成している要素は大きく分けて３つ、平面、構造、設備がある。コア・システムはまずこの３つに対して考えられる。

1. プランニング・コア
2. コンストラクション・コア
3. エキップメント・コア

・・・
以上の３つのコアの考え方があるわけであるが、実際に一般にコア・システムと呼ばれているものはこの中の１つ、又は２つ、３つの性質を併せ持つている。しかしこの３つのコア・システムは理論的には全く異なつたものであり、どの場合にもおのおのの立場から考え、計画してゆく必要がある。この３者の無意味な混同はデザインを制約するだけである。

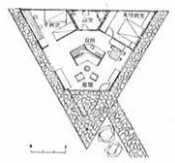
構造のコアについては前に述べたが、設備のコアにこの構造コアの意味を合せ持たせよう、という考えがある。私の研究室の作品は前に発表した No.15 も含めて、今度の３つの住居も全部その型式をとつている。

［No.21 の設計解説文］
・・・No.15、No.20、No.21 はコアシステムの違つた３つの形を示している。
この住居の構造は中央コアの鉄筋コンクリート部分に横力の大部分を分担させ、周囲のブロックには僅かしか持たせていない。この構造方式は No.17 に近いものである。・・・

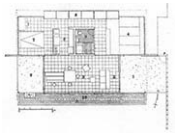
No. s-4　T プランにおける可能性の追求――池辺陽，　sk5511

［連作名］**住宅 No. -T プラン**

私にとつての近来の住居平面の典型ともいえる南に向つて広く開いた長い矩形プランは長い間の疑問であつた。このプランが日照や通風などの科学的条件から裏ずけられていたとはいえ、その裏ずけに非常に浅い一面的なものに感じられていた。・・・
こうして南北に奥行の深いデザインが始まつた。
・・・なかでも私たちに多くの可能性を明らかにしてくれたのは No.20 の T 型のプランニングであつた。
ここに T 型のプランニングは、その後の研究室での大きな足掛りとなつた。こうしてその後住宅 No.29（工事中止）No.28 のプランが生まれたのである。
T プランの狙いは南に開いたプランに対して次の諸点である。
1.　南北に奥行深く、全体として通風を良好とし、（東西方向の風もなるべく受け入れるようにする）敷地利用度の増大と、通風の二つの問題を解決すること。
2.　東西南北の敷地利用を同じウエイトで考えること。
3.　T プランの特徴である東西面の大きなカバーされたテラスを生かすことによつて、南面の庇の出を日照だけを考慮してきめることが可能となること。
4.　コアプランに対してよく適合すること。
このプランを必然的に導いたものは No.20 のデザインの際であつた。・・・
そして T プランの追求が始まつた。それは No.24 を足掛りとした。この住居は不幸にして実現することができなかつたが、ここで試みたことはリヴイングを南北に深く計画することと、住居にとつて最も日照条件が重視されるのはリヴイングではなく、マルティユースのスペースではないか。という点であつた。こうしてでき上がつた No.24 のプランは No.20 を南北に押し潰した形、コアが北側のスペースに入りこんだ形をとつたのである。
この追求の結果は No.28 にバトンを受けついだ。No.28 のプランはその骨格はほ


住宅 No.20

住宅 No.24


住宅 No.28

とんど No.24 と同様な形をとつている。
T プランの特性はまだ掘りつくされていない、私たちもまだこのプランに対して幾多のアプローチを試みたいと思っている。・・・すべての考えられる形の持つ可能性をもつともつと追求しなければならぬ・・・

No. s-5　鉄骨住宅への反省 ――広瀬鎌二，　sk5511

［連作名］**SH - 構法**

SH-1 を設計してから、2 年半の間にちょうど 10 棟の鉄骨住宅を完成した。・・・・・・鉄骨造の住宅を設計することは、たしかに冒険ではあつたが、計畫の最初に概略の構造計算で、構造材の断面を仮定して、重量を当たつてみたところ、驚く程軽量で出来ることを知つて、この結果に力を得、可能な限りの単純化を目標に生れたのが、“SH-1” であつた。・・・主体構造の費用が総工費に対して 10％以下で出来るという見込がついた・・・木造が 20% ～ 25% に対して 1/2 以下の割合になつている。この結果がその後の鉄骨住宅における設計の拠りどころとなつて来た・・・

SH-1 以後、経済性の追及を主として、進めてきた鉄骨住宅の構造は、前項で述べたように、最も経済的な断面を得るための、手段としての構造計畫であったために、平面計畫や、他の仕上材料との取合いなどに若干の制約を与えてきたことは否定できない。
こうした架構方式は、木造の場合には、多くの利点を持つていたが、鉄骨造の特性を十分に生かしていたとは言い難い。
これから、順を追つて説明する 10 種の住宅は、その意味から限界をもつた方式であると考えて頂き度い。しかし前期の結論を生む為に、これらの作品が必要であつたことを思えば、ここで今一度その変化の過程を追つてみることも無意味なことではないようである。
・・・SH-1 の架構方式に就いては・・・鋼構造で、最も複雑な納りは接点である。接点を剛接にしなければならない為に、架構全体を非常に複雑な感じにしてしまっている。このことから、出来るだけ単純な架構を得るためには、接点を簡単にしなければならないと考えた。
水平力を筋違に負担させたピン構造は、こうして生まれた・・・
SH-2：この作品が前作と著しく違つているのは、トラスの組みかたである。・・・その他の点では前作と全く同様の架構である。
SH-3：前 2 作に続いて設計されたこの建物で、初めて 2 階建が計画された。
規模が大分大きくなつた上に、2 階建になつたことと、両妻を除いて、スパン方向に耐力壁を取りたくない為に、桁方向のみピン、スパン方向はラーメンの架構にしている。・・・
SH-4：・・・前作のラーメン架構は、初めの予想通り、スッキリした納まりにならないので、再びピン架構で計画した。・・・
SH-5・6：前作と同じ架構方式で・・・
SH-7・8：・・・架構の組立てを簡単にする為と、屋根天井を一体のパネルで並べるために、小屋筋違を止めて、小屋梁自体をダイヤゴナルに組み、X 形のトラスを 1 組としてある。・・・
SH-9：・・・SH-3 の不成功が原因して、ラーメン架構は全く使われなかつたが、この構造計画では、このような方形に近い平面の場合は、中央部に水平力を集中させた方が有利かも知れないと考えて、中央 2 本の小屋組をラーメンにして、スパン方向の全水平力を受持たせ、このラーメン架構を継ぐ桁行方向に筋違を入れて、これに桁方向の全水平力を受け持たせた。・・・
SH-10：・・・桁行方向をラーメンとし、トラス方向をピンとして、塀を兼ねた両妻に垂直筋違をとる以外に方法がなかった。・・・

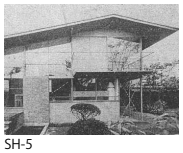
最初に述べたように、以上 10 種の住宅からは、今後の鉄骨住宅の進め方に、なお前進の希望があるとは考えられないのであつて、むしろ、技術的にも、行き止つたとさえ言えるのではなかろうか。それは単に、建築工費からでも、弱い経済基盤のためからでもなく、鉄骨住宅の計画そのものから考え直さなければならないのではないか。鉄骨造建築は、工業生産品の組合せによつて、その本来の目的を満足させ、同時に、独自の効果を持つことが出来ると考えていることは、前に述べたが、いま一歩を進めて、鉄骨住宅が果して工場生産住宅になり得るだろうか。

SH-1

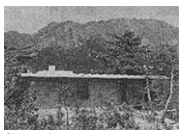
SH-2

SH-3

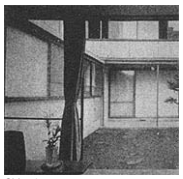
SH-4


SH-5

SH-6


SH-7・8

SH-9


SH-10

No. s-6　鉄骨構造による 4 つの住宅 ——三輪正弘／ RIA ,　sk5511

［連作名］鉄骨構造による住宅

我々の試みた住宅は鉄骨構造主体を木造でする follow モンタージュ方式を採つている。そういう材料的な共通点を除けば、構造方法もプランニングもそれぞれの主張を固執しているかに見える。

三番町の家

幡ヶ谷の家

鎌倉の家

週末住宅・鵠沼の家

以下 4 つの鉄骨住宅は、すべて TSA の協力によるものである。
安部邸に提出したカンティレバーの鉄骨梁、幡ヶ谷の住宅に見られるトラストガーターの平凡な構造、鎌倉の家での家具の脚のようなつかまえ方、そして鵠沼の家に採用したピロテイの手法…という展開は、それぞれの個別のプランニングを考え乍ら進めた構造の追及だつたのだが、技術的問題もさることながら、われわれの持つ形に対する性急な欲望が素直にそしてやや幼稚な方法によつて現われている。そしていまこの 4 つの仕事を振りかえつて、いわゆる構造に対する偏執を脱しえる段階にきたことを感じている。プランと形の定着が、鉄骨という素材を契機として行われるためには、まだいくつかの方法の検討や、イデーの整理ということが残されている。鉄骨住宅のプレファブリケーションが果たして日本で展開するかどうか、木材を拒否して行けるかどうか、また伝統的な木造木割の造型性を鉄骨のフレームで成長させることが正しいかどうか…、すべては我々にとつて今後の問題である。

No. s-7　工業化のためのデザインへ ——池辺陽 ,　kb5804

［連作名］住宅 No. - 工業化

住居生産をどうしたら工業生産に結びつけることができるか、というテーマは、ここ数年来の研究室の主なテーマであり、プラン・ストラクチャー・モデュールなどの問題はこの主テーマに沿って取り上げてきた。ここに報告する 6 戸の住居もこの主テーマの展開の中より生れ出たものであるが、1957 年におけるこれらの仕事を通じて、ぼくらのデザインシステムや住居生産の方法は、主テーマの今後の進め方に対して、大きな収穫を得ることができた。しかしそれはまだすべてその芽を発見したにすぎず、1957 年の仕事のすべては、その個々の段階を示しているにすぎない。

住宅 No.38

住宅 No.43

住宅 No.41

住宅 No.39

住宅 No.44

住宅 No.45

住居生産の工業化といっても、ぼくらのテーマは、いわゆるプレファブ建築の設計にあるのではない。工業化は現在すでに、急速に進んでいる。それは材料面などを考えればすべての人の承認するところであろう。この工業化の必然的進行に対して、デザインの方法、生産システムと建築デテールの検討、さらに建築が現在保有している個々の設計の自由の問題を、どのように対決させてゆくことが可能であるか、ということにテーマの中心はおかれている。このテーマに対して独立住居はその規模の小ささや、デザインの自由度、デザインの生活的経済的制約の大きさ等の点で、もっとも多くの問題を提供している。・・・小規模生産のもっとも極端な小住居の場合、多くの材料が近代化されているにかかわらず、設計システムや施工システムは全く放置された状態にある、といってよい。ところが別の面から考えるならば、住居は大衆需要の代表であり、一戸一戸の共通性から考えても工業生産の可能性を十分にその中に含んでいる。しかしそれにはデザインの方法から検討が始められなければならないのである。デザインの方法の検討、これにはいうまでもなくいろいろなアプローチが考えられよう。ぼくのとった方法は、デザインはプランから始まり、ディテールに終るという一般概念から脱け出ることにあった。いいかえるならば、住居をコンポーネントに分解し、コンポーネントデザインとそれを集めるデザイン（ぼくらはこれをスペースデザインと呼ぶ）を個別に追求してゆく方法がある。コンポーネントは個々の実施設計とは別個の立場で設計され、生産システムにのせられる。スペースデザインはこのコンポーネントをどのように生かすか、という方向で行われるのである。
しかしこのコンポーネントへの分解には、組合せの研究と、工場生産システムの研究の両方が併行する必要があり、1957 年の住居の大部分はその検討に役立った。現実にコンポネント生産が始まるのはこれからである。この問題についてはもう何年も前から方法として考えてきた。しかしそれがようやく現実の可能性として把握できたのには、後に述べるモデュールのシステムの整備が大きく役立った。モデュールの確立なしにコンポーネントの現実化は不可能である。

モデュールの必要条件は、実際の必要に応じた寸法が得られることと、生産の立場から、その数ができるだけ少ないこと、という互に矛盾した条件を満足させな

ければならない点にある。・・・
モデュールは材の断面から――プランニング――都市のブロック割に到るまで一貫したシステムでなければならない。材断面のように小さな単位では細かい数値が必要であり、プランニング、ブロックプラン等に対してはそれほど細かな数値は必要ではない。このことがモデュールのシステムを考える上に重要な手掛りであり、工業標準数、モデュロール等の等比数列のシステムの理論的裏づけとなっている。・・・
・・・この使い方をできるだけ重視したものが、この GM 型式のモデュールである。・・・
このモデュールを基本にして現在３つの作業を進めている。
1. 動く家具のモデュール化
2. モデュール空間の研究
3. コンポーネントとディテール
・・・
動く家具から動かぬ収納家具への結びつきは、そのまま壁・建具などのコンポーネントへ結びついてゆくことができる。壁体の構成や窓枠の問題、等にはいくつかの標準コンポーネントデザインが作られ、実施面と理論面の両方から検討を重ねている。しかしここでは取付ディテールの問題が大きくクローズアップされてくる。そしてまた問題は動く家具までもどってくるのである。
だがこの往復運動のくり返しの中に、ぼくらはコンポーネントデザインに独立の生命を吹き込むことの可能性を信じている。そしてそれは現実化しつつある。

この数ページにわたるスペースでアインはその中に含まれるコンポーネントがすべて共通につくられていることを示している。・・・

No. s-8　都庁舎の経験――丹下健三，　sk5806

［連作名］シティー・ホール

都庁舎というようなものにぶつかって、はじめに問題にし、今なおそれを問題としてゆかねばならないと思っていることの一つは、いわゆるシティー・ホールと呼ばれるものの在り方である。
・・・［市民社会成立の経緯に関して論じた上で］だから市庁舎は、上から与へられたものではなく、市民社会が、自らの自由と独立を獲得するために、自らが自らを治める機関として生まれたものであった。だから市庁舎は市民意識の統一を生みだす象徴でもあったし、またそれは市民がそこに集り、交わる場所でもあり、また市庁舎の建築はそのような市民の交わりをより深めることに貢献してきたのである。
・・・［ストックホルム市庁舎に関して］しかしこの広間、なにもないかに見える広間――というよりは、広間――中庭――広間の一連の空間――これが、シティー・ホールなのである。市民に解放されたホールなのである。
都庁舎本館の設計のときには、漠然とではあったが、そのような希望を私たちはもっていた。・・・
私たちは何度か市庁舎を設計する機会があった。清水の市庁舎の設計は、新庁舎［都庁舎］の競技設計の翌年であったが、ここではパブリック・スペースの考えかたをもっと強く提案した。これが出来上がったとき、このホールは広過ぎるとか、その一隅のカウンターのところで執務している人たちから落着かぬなどという批判をもらった。しかし、2、３年後には、執務も馴れ、またこの市民ホールと呼ばれているパブリック・スペースも、一般市民からしだいに親しまれているという反響を貰っている。
倉吉の市庁舎のばあいも、パブリック・スペースを全体の予算のなかから作りだすことに、かなり積極的に努力した。・・・市庁舎のばあい、とくに、私的企業的立場からみれば、無駄かもしれない空間が、市民にとって、また市庁舎にとって、本質的な空間であることを、ここでは再び申し上げておきたい。
これは市庁舎ではないが、ほぼそれに等しい問題をもっている香川県庁舎の設計のときにも、このパブリック・スペースを十分にとる必要を話し合い、また為政者の方々も、むしろ積極的にその必要を感じておられ、ほんとうの県民の県庁舎でありたいという理想をもって出発した。・・・今治市庁舎のばあい、市庁舎の公会堂が同じ敷地に、また同時に建設されているが、広場を介したこの二つの組み合わせをこそ、もっとも現代的な意味で、シティー・ホールと呼ぶことができると私たちは考えている・・・

東京都庁舎

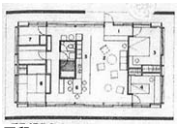
都庁の本館も、そんなに広くはないが玄関にホールがある。・・・それから一ヵ年余りした今日、ここは都民ホールと呼ばれて、一般の都民からも親しまれ、いまでは手狭なぐらい都民が行き交っている。

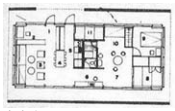
No. s-9　C.S. ハウス #3 の設計 ――増沢洵建築設計事務所，　sk6004

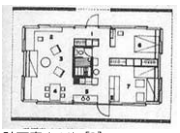
［連作名］**コアシステム**

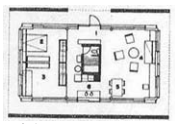
設備関係を中心とした、いわゆるコアシステムの平面は、一般的に実験段階を通り抜けたと思われる。私たちの場合にも、原邸［コアのある H 氏のすまい］では各要素の分化を意図し、屋根、小屋、外壁、天井、内壁、間仕切り壁、床、設備関係、作りつけ付家具などをそれぞれ分けて考えた。これは、コアシステムの考えには、建築の生産に対する意図が平面から受ける印象の中に秘められているのではないかと理解しているからで、この傾向は原邸以後の設計にもあらわれている。例えば、トラスを用いて一つの空間をつくり、コア部分を構造に使わない点（原邸、高島邸、計画案（408）、河合邸、C.S. ハウス＃ 3）や、耐震壁以外は壁を薄くしている点（高島邸）、間仕切壁をだんだんと移動家具化していったり、（高島邸、計画案（408）、河合邸）、奥行きの深い台所ユニット（高島邸、3 次元的に使える）などは分化の考えが基本となっていた。

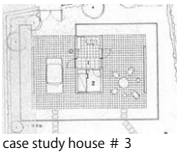
設計の作業には常に分化と綜合が繰り返えされている。私たちの場合でも原邸以後のものは分化を主とし、（C.S. ハウス＃ 3）、綜合に重点をおいている。これは私たちの中にも、コアシステムを一歩一歩育てていきたいという希望があり、またここには近代建築の基本的な問題も内包されているようで、コアシステムをとるたびに建築を技術として把握しなければ発展しないという示唆を受けるからである。


原邸


高島邸


計画案 (408)［P］


河合邸


case study house ＃ 3

No. s-10　住宅における basic なもの.
――田辺博司／レーモンド建築設計事務所，　sk6006

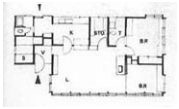
［連作名］**basic house**

住宅の平面構成のうち、いわゆる設備関係を中心としたコアシステムとか、構造形式やピロッティを持つことから特徴づけられているものなど、いくつかの系列があるが、・・・これらの平面構成のあり方は、生活調度や建築の生産技術の進歩に結びついて発展していくべきものであるともいえるが、いかなる材料や技術の発展があったにせよ、人間の生活の原型それ自体は変化しない basic なものであるし、その原型はいかなる住居であっても、プリミティブな型で残されていくべきである。そしていつでも何人でも納得のいく平面構成の基本型というものがあるはずである。

左に掲げる平面の内（1）は戦後間もない頃のもので、われわれは basic house と呼んでいるが単純にして原始的なこの平面計画の基本型は、その後少しづつ他の付随的な要素を加えていった Blake 邸（2）とか、C. Raymond 邸（3）とかに展開されていったが、これらのうちに貫く一本の基本線は、当初の basic なもの以外のなにものでもない。

それが 2 階建てとなってカニングハム邸とか西園寺邸（4）に変ってゆく過程の中には、それぞれの時代における施主と社会の経済状勢の発展に伴なう住宅規模の増大（むしろ適正値に近くなった）という現象があり、かかる意味においてこの金究邸もこれらの一連の流れの中にあって，現在の社会と経済機構の中における basic house として考えてみたい。階下が living space で 2 階が寝室というきわめて簡単なプランニングも、それに付属するすべての設備も、まったく正当に取扱われている。

basic house


Blake 邸

西園寺邸

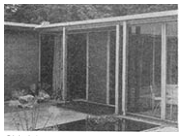
C.Raymond 邸

金究邸

No. s-11　発想から形になるまで・・・――広瀬鎌二，　kb6012

［連作名］**SH -MC**

工業化、ないしは量産化を本当に意識して住宅計画の組織化に手をつけたのは、平面計画がほぼひとつの方向にまとまりはじめた 20 台の後半から 30 台のはじめごろである。
本誌に発表した 332 型は、組織化の最初の段階であって、モデュールおよび MC と本格的に取り組んだのもこの頃からであった。組織化の次はプラントとの技術的交流による新しい時代に入る。


SH-30

SH-32

SH-36

SH-39

住宅は大衆のためにある。
建築家が本当に大衆と直結するためには、質の高い家を一般の経済状態に適応できるか価格で提供することではなかろうか。
・・・
量産すれば安くなる。
本当だろうか。量産すれば高くなることもまた事実である。・・・
なるほど、現在造られている量産住宅というのは、すべてこうした批判をあまんじて受けねばならない程度のものである。しかしながら、これらの住宅ははたして本当に量産といえるものなのだろうか。
・・・
量産とは、機械工業のなかの生産組織であって、建築のなかには残念ながらまだ存在していない。

No. s-12　H 形鋼使用による住宅設計ノート
――小沢行二／ INA 建築研究所，　sk6205

［連作名］**H 形鋼使用による住宅**

この 3 軒の住宅は、床版、屋根版を支える骨としていずれも H 鋼を使用した点は共通しているが、皮（skin）の配置は、それぞれ A 邸――骨と離れて内側、B 邸――骨と離れて外側、C 邸――骨と接して、2 図のように異なっている。もちろん、建物の構成は骨（skeleton）と皮（skin）というように単純に分類できるものばかりでなく、壁式鉄筋コンクリート造、ブロック造のように、骨と皮が一体となった構造もあるが、この 3 軒の住宅は上下 2 枚の版で構成された空間に、自由に skin を配置して、居住空間を構成することを共通の目的として計画を進めた。
・・・3 軒とも骨材として H 鋼（A 邸 B 邸 × 150、C 邸 × 200）を使用している。・・・
皮（skin）は A 邸、C 邸は版と版の間、すなわち h（階高 - 床版の厚さ H-t=h 4 図）をパネルの高さとし、B 邸では、下り壁と床版の間をパネルの高さにしている。・・・
皮の 3 様の配置は習作の域を脱していないので、それぞれの優劣を断じることはできないが、A 邸のように骨と無関係に配するのが理想である。・・・
H 鋼を骨とした理由の一つとして現場加工の少ないということをあげたが、工場加工においても普通形鋼、軽量鉄骨と比較すると、工数は非常に少なくなり、精度も期待した通りのものがえられた。さらに現場接合部にはハイテンションボルトを使用すれば合理的である。

H 形鋼使用による住宅 A 邸

H 形鋼使用による住宅 B 邸

H 形鋼使用による住宅 C 邸

No. s-13　建築生産プロセス自動化への提案 ――広瀬鎌二，　kb6211

［連作名］**SH - 自動設計法**

やはり長年続けていると手馴れてくるし、今まで集めた資料を補充したりするのに便利なので、ついこういうことになってしまった。
こうなってみると、いちいち同じような設計図を書いているのも能がないし、そろそろ大分前からの思案であった " 自動設計法 " なんていう言葉はないかも知れないが、考える必要のないところは、すべて機械がやってくれるようなシステムができないものかと思って始めたのが今回の提案である。
目的はもちろん住宅だけに限らずあらゆる建築に適用できることにあるが、いきなり大風呂敷を拡げても、竜頭蛇尾に終る危険があるので、とりあえず、基礎資料の最も完備した住宅を取りあげて、模型的な検討をしてみることにする。
とはいうものの、ここに例として取り上げる 3 棟の住宅が、自動設計法で行われたわけではない。この 3 棟のようにそれぞれかなり極端に異なった条件を持った住宅が、このシステムのなかに、どんな風にあらわれるかをチェックするために

SH-55

SH-56

SH-59

選ばれたのである。
自動設計法といっても、いきなり電子計算機にかけてガチャガチャと計算させるというほど高級ではなく、各種の設計条件をせめてパンチカードかIBMが利用できる程度に整理しようというものである。この方法は、まず大きく5つの段階に分ける。
1既定条件・2空間・3組織・4部品・5・独立
1は主として発注者側が要求してくる条件で、受注者側には関係なくすでにきめられているものであり、2は1の条件に対応する適正空間を選別する段階である。これは、空間種別によって分類された空間性能をきめるカードが用意される。3は1の環境、2の空間による組合わせのバリエーションのカードであり、4は3を部品分解して、要求に応じた各種の部品を用意しておくカードと組立図のバリエーションを示すカードで、この2種のカードをそのまま注文書にすれば図面1枚書かなくとも、要求どおりの住宅をパンチカードが自動的に選別してくれて、5で組立てられ注文者に渡されるわけである。

No. s-14　駿河銀行支店建築の「かた」設計――菊竹清訓，　sk6710

［連作名］**駿河銀行**

駿河銀行横浜支店

・・・大衆社会と接触する銀行の前線基地ともいうべき銀行建築の典型（かた）をまず問題にしようとしたわけである。そこで次の各要素間の関係を検討した。・・・
［構想チームの検討内容を論じた上で］
これまでの作業は構想チームが担当して行なった。つづいて小型店舗の典型を、いかに計画するかを討議していった。構造計画、設備計画、工費配分計画などについての基本的原則をどう固め、どういうシステムをそこに考えて行くかである。最終の目標は標準設計にこれをフィックスすることではないかと考えられた。構想チームから与件と仮設計を引きついだ計画チームの作業のなかで、とくに問題となったのは構造計画である。架構体は、敷地條件によって鉄骨造と鉄筋コンクリート造のいずれかの構造にするか、経済的にはきわめて近似している建築規模だったからである。そこで鉄骨とRCの組み合わせを考えることになった。そしてふたつの部分を組み合わせた結果が、よりすぐれた全体を表現するものかどうか、構造体として経済的であり合理的であったとしても、銀行建築としてどのような意味をもつかということを検討した。
計画チームはメタボリズムの思想のもとに、これまで計画をすすめてきており、この建築の空間と構造との関係については次のように考えた。ふたつの部分は、空間的に変わらない部分と変る部分であり、店舗の空間を支配する重要な部分が変わらない部分でなければならない。そして、この方法はこれからの銀行建築を、より強く表現するものと考えられたのである。こうしてふたつの部分を積極的に組み合わせることになった。
駿河銀行伊東支店は、この考えがもっともシンボリックに適用された。建物の両側のシャフトはコンクリート打放しで、中央部分はメタリックな表現となっている。平塚支店は、前面がすべて鉄骨造のメタリックな表現となっているが、建物の後部にRC造シャフトが立っている。この考えは、地域の中心店舗にも適用することが可能で、横浜支店も同じような考え方に従って完成した例である。
このようにして標準設計が計画チームの担当でまとまってきた。これを形態チームが引き継いで、実施設計に適用したのである。
駿河銀行の支店のいくつかが実施設計に移された後で、標準設計は修正と追加の必要なことがわかった。標準設計の役割、内容はこれまで考えられていたような形式的規格設計とはかなり相違したものであることがそこではじめて明らかになった。それは設計する場合のひとつのルールといった性格のほうが強いものであり、ひとつの基準となりうるものである。・・・
われわれは、こうしたことから標準設計という言葉が適当でないので、以後これを「かた」設計ということにした。
「かた」設計の問題は形態チームからフィード・バックして計画チームの問題となった。これはデザインのプロセスにおける「かた」の問題をより明確にするものである。構想チームもまた、現代建築の課題を正しく把握していたかどうか、としてフィードバックされるのである。

No. s-15　建築としての住宅――乾いた空間のために
――坂本一成，　sk7110

［連作名］**閉じた箱**

〈3つの住宅〉　住宅というプライベートな空間は、外部に対してできるだけ閉じた世界であるべきだという素朴な直観からはじめたｗ足しの住宅設計の作業によって、この３年間に３つの住宅が完成した。最初の作品である〈散田の家〉と前作〈水無瀬の町家〉、そして今回の〈登戸の家〉である。それらの作品はほとんど連続して、またオーバーラップして設計された。・・・私にとって３つの住宅がひとつの連作だと考えるようになった。それは、この３つの住宅が〈閉じた箱〉という私が建築家として最初にもった素朴な空間意識を通して、私自身の状況と社会の状況を直接投影してきたひとつの結果であることを意味している。

〈閉じた箱〉　３つの住宅は・・・雑然として混乱した現代の都市での状況が、その〈閉じた箱〉という素朴でしかもプライマリィな空間概念そのものの直接の成立條件になっているのであるが、その主題自体が現代の住空間の一般性に接近するであろうと考えてきた。というのは、直接的にも間接的にも現代の社会の状況に対処できる住空間は閉じた内部にしか成立しないとさえいえるからだ。・・・できるだけ大きなドライな物理的な箱を用意して、その内部を新しい敷地、環境と考え、そこで完結する空間を求めれば、それは閉鎖的な〈閉じた箱〉の概念を提出する。だからといって、〈閉じた箱〉が必ずしも社会との、あるいはその地域の環境との社会的接触を拒否するものではなく、かえってその閉鎖性ゆえ、さらにその社会性を明確にすると考えられる。しかしそのことは〈閉じた箱〉が内部の構成を単に外部に示すといったことではなく、その存在として、その形式として、ひとつの形相を示さねばならないことを意味する。そしてそれは社会との存在としての接触と呼ぶような新たな接触の仕方をしなければならない。私は今この〈閉じた箱〉というテーマがさらに有効であろうと考えている。それは今の状況、そしてこれからの社会の状況に対して開放された空間に私たちが成立していけるであろうという実感を持てぬからである。このリアリティある〈閉じた箱〉のテーマをさらに明確にしたいと考えている。

〈空間の形相〉　３つの住宅とも割合明確な機能を持つ部屋を小箱と考え、〈閉じた箱〉の内部にそれを入れ込むことで、計画的に住宅として成立させている。そして各住宅とも、小さな箱を入れ込んだ残りの部分を居間、食堂等の割合不明確な住機能のためにあてがい、各住戸の主たる空間にしようと試みている。しかしその残部である主たる空間の処理の仕方は３つの住宅で少しずつ異なっている。

散田の家

水無瀬の町家

登戸の家

No. s-16　空間場へのアプローチ――中島龍彦，　sk7201

［連作名］**空間場**

これから私の述べるのは、四天王寺老人ホーム「悲田院」、播磨カントリークラブハウス、四天王寺学園大学、摂津市綜合福祉会館を通じて一貫して追求してきた「場」というものの概念とそれの構造である。・・・

自然界には無数の「場」の存在が確認されている。その一番手近なものは重力場であり磁場である。前者は重力を支配し秩序づける領域であり、後者は磁力の関係である。これらは共にそれぞれ領域があってその中で占める位置ないしは大きさというものに支配されている。

・・・建築空間には当然いくつかの種類があり、そのおのおのの空間の間にも空間が介在している。したがってこれら相互間には接着剤的な役割を果たすねばっこいものが存在する、これが空間における「場」というものである。そしてこの「場」がある以上、人にとってその場が好ましいものであるか、また嫌悪感を伴うものであるかということが問題にされるであろうし、そうしなければならない。

ここで冒頭の話を思い起こしていただくとすれば、そこでは幾つかの空間を形成する上の要因があることにお気付きのことと思う。ひとつは原っぱであり、ひまの木であり日光であり日影である。そしてまんがを読む、あるいはとんぼをを追うといった共通の意識がある。このように場を構成する上にも幾つかの要因がある。それは大きくいって上述の空間要素を含んだ空間相互の成り立ちと人との関係である。

摂津市総合福祉会館

No. s-17　住宅論　個と集合のための空間論――篠原一男，　sk7202

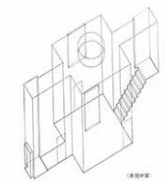
［連作名］亀裂の空間

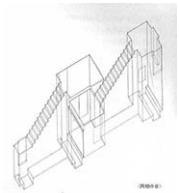
〈亀裂の空間〉と名付けた、天井が高く幅が極度に狭められている空間・・・
〈亀裂の空間〉はその現実的な空間の形を象徴するために名付けられたのだが、しかし、それはさまざまな場面での亀裂を意味することを期待していた。・・・

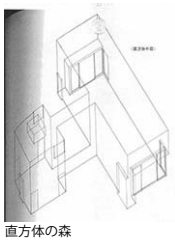
強い遮断性を存在させると、人間の生活のもっている全体性、有機性を回復するために、空間のなかに連続性への強い期待が現われるのではなかろうかと私は書いた。（前掲２論文）私はそれを〈篠さんの家〉〈未完の家〉のなかに〈亀裂の空間〉を構築したときに感じとったからである。これも人間と空間をめぐる、私のいう対現象のひとつといえるだろう。強烈な遮断性を意図していた最初のふたつの住宅に続く、〈亀裂の空間〉の連作といえる今度のふたつの住宅、〈直方体の森〉、〈同相の谷〉では遮断を触媒としてにじみだしてくる連続への意識が、私のなかで、計画のはじめから働いていたように思う。

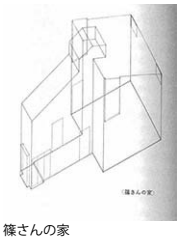
私は連続への期待を意識的に記述してきたように思う。だが、ひとつの住宅をつくるときに、そのようにいつも明確に意識化してきたわけではない。〈亀裂の空間〉がひとつの住宅のなかに現われる瞬間を考えてみたとき、奇妙なことに気づいた。その空間が構築される瞬間の、発想の型といえるようなものが、かつての私の空間構成の主題であった〈空間の分割〉のときと同じような位相をもっているのでh ないかということであった。
ここに４つの軸測投影図がある。〈篠さんの家〉から〈同相の谷〉までの４つの住宅の空間の主題が図形化されている。〈亀裂の空間〉の連作といえるのだが、もちろん、それぞれの具体的な構成においては、ひとつひとつ主題の意味や意図する方向が異なっている。しかし、〈大屋根の家〉、〈白の家〉のような、今までの私の住宅がもっていた空間の表情とは異なった方法によったものだという点において、統一的な呼びかたをしている。
・・・全体をその構成法が直撃的に襲うという表現がいちばんの発想の状態をいい現わすように思える。今ここに示された４つの〈亀裂の空間〉は、空間の〈分割手法〉とはまったく異なった構成法と思っているが、しかしこの方法も、住宅の全体の輪郭を直撃的に襲うようにして浮かびあがってきたものだといえそうである。
４つの空間の形態は一見操作的な複雑さをもっている。しかし、この周囲に配置されたいくつかの部屋を結びつけて行く過程で生まれる隙間を造形して行くという順序でできあがったものではない。もちろん、この中央の空間だけが全体の構成と独立してつくられるものではあり得ない。だが、私のなかではこの中心の空間の型と機能は、全体の輪郭が次第に固まりつつある過程で、直撃的な現れかたをもって浮上する。
今私はこの〈亀裂の空間〉の機能を次第に確認しつつある。・・・しかし、この構成法のもつ機能は、この直撃的な現れかたがいちばんのぞましいものだとは考えていない。むしろ、全体を構成する、個々の機能が指示されたたくさんの部屋をまとめあげながら、それらを緊密にむすびつける有効な機能をもった連結の空間として、なお、それ自体で積極的な意味を所有し得るポジティブな空間として、次第に構築されて行くべきものだと思う。

［参考文章］
〈亀裂の空間〉と呼んだ構成を見出したとき、空間の表情は中性的な、乾いたものへの指向が強まった。それは殻の意匠の無機化を喚起した。４つの連作は内と外との両側面で、中性的なあるいは無機的なと呼べるような表現の展開を試みたものといえる。


未完の家


同相の谷


直方体の森


篠さんの家

No. s-18 〈手法〉について ――磯崎新， sk7204

［連作名］**手法**

手法は、いわば作家の観念が投影された影でなければならない。建築を設計するという雑多の要因が重なり合う諸条件をかきわけ整理して、その作家の観念とできあがった作品が、無媒介に短絡していることを、他者に直観的に理解してもらう必要がある。そのようにして、設計の過程を客観化し、すなわち技法の系を成立させ、同時に現実の空間にやはり影のように、原型となる観念をしのびこませておいたとき、はじめて有効になるのである。

決してそれは、多種類のものが開発される必要はないのだが、今の私にとっては、たちあらわれる現実のなかにひそむものが、いかなる推測よりもはるかに巨大であり、新しい条件が通るたびに、次の格闘がはじまり、同時に次の手法に導き出されるといった、際限のない輪のなかに追いこまれているのではないかと思うときさえある。・・・現実はおそらく、単一の解法だけでカバーできるものなのでなく、より多様化し、よりメディア化し、より不確定となっていることだけは明らかだ。・・・手法としてかかわったいくつかのものは、基本的にこのような状況を異なった角度から掘り下げているのにすぎないようだ。・・・

これらの手法を、私は可能なかぎり、単純な手続き上の技法に還元し、要約しようとしている。そこにもし主観的なもの、あるいは手の痕跡のようなものが介在し得ないまでに突きはなし得たならば、その手法はおそらくより有効で、射程距離が遠くなろう。

手法は、文字どおり、手をうごかしていく順序である。設計の過程では、定規をつかい、測定をし、判定を下していくとき、それが一種の自動律をもって自己運動するような方式に支えられていて、はじめて手の恣意的な痕跡が消滅しはじめるのである。

特定の手法が提示する抽象的な形態によって、建築の全体性が明視されはじめるというべきだ。ここで明視されるものは、工業化の論理とか住民参加という手続きの決める方式とかいった、建築に外在する主題が建築空間の目標となるのではなく、これらの主題を当然のことながら包含していても、その背後に、建築そのものの論理としての形式を浮かびあがらせることが必須の条件となる。それはすぐれてフォルマリスト的な方法である。その中核に、手法をすえ、同時に建築を決定づけ明視させるものとしての意味を与えることでもある。

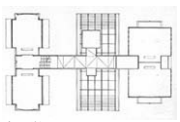
これまで私がかかわってきた手法を整理すると、次のような７種に分類できるような気がしているのだが、その手法は、いずれも具体的な作例と密着している。しかも、領域がそれぞれ異なっているときに個別に開発されてきたものばかりである。

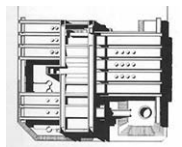
私がかかわってきた《手法》は、いま整理すると、この両ページにみられるように、7 種類ある。共通していえることは、いずれも可視的領域のなかで、物体にひとつの形態をあたえるときに、その物体の独自の論理、すなわち客観性をもった近代科学的手続きにこだわらず、実在感を喪失させ、ひとつの形式に押し込めるような取り扱いにかたむいている。・・・

７つに分類して並べた手法は、それにかかわった、あるいは開発をはじめた順序に従っている。つまり、布石（1960 ―ジョイント・コア・システム、岩田学園）、切断（1963 ―大分県立図書館）、射影（1966 ―福岡相互銀行大分支店、大名支店）、梱包（1964 ― N 邸、大分支店）、転写（1965 ―マリリン・モンロー定規、福岡相互銀行東京支店）、応答（1967 ―ミラノ・トリエンナーレ、電気迷宮、お祭り広場装置）、増幅（1970 ―福岡相互銀行長住支店、六本松支店）という時間系列に並んでいる。それは、単一の作品で結論づけられたものではない、場合によってはふたつ以上の手法を意識的に混成させているときもある。

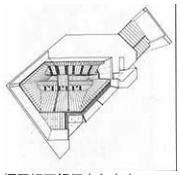
・・・原イメージは作家の内部にあって、観念自体を明視させるための補助的な媒体となる。・・・

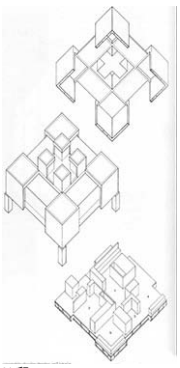
たとえば原イメージは、まさに作家の内側にメモワールとして残っていく。多くの場合、それは抽象化された概念であったり、暗喩であったり、また直接的な譬喩となっていることもある。たとえば、終末であり、廃墟であり、闇であり、マリリン・モンローであり、機械のエロスであり、薄明であり、青空であり、深海であるだから、それが顕示する具体的なかたちをそのまま述べても無意味だし、だいいちかたちさえもっていないものもある。ひとつの言語としてあるいは記号として記述はできるけど、それを具体的な空間にたいしてそのままの概念で説明する手段にさえなれないだろう。


岩田学園

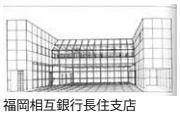

大分県立図書館

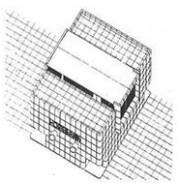
岩福岡相互銀行大分支店


福岡相互銀行大名支店


N 邸

福岡相互銀行東京支店


福岡相互銀行長住支店


福岡相互銀行六本松支店

大分県医師会館

つまり、設計を徹頭徹尾支配するのは、具体的な手法そのものだ。その手法は、全過程にあって原イメージとからみ合い、おそらく弁証法的な関係をとり結んでいるだろう。ひとつの手法が過剰に使用されると、実在する物体とかならず確執をおこすはずだ。その過程を統御するのに、原イメージが決定的な役割をしている。しかし理想をいうと、手法は、あらゆる部分でイメージを排斥し、独自の運動をして、簡明な結果に到達しているべきだ。イメージのまったく介在しない、乾ききった、ちょうど機械だけをつうじて設計がすすんでいくときの、非個性的な状態に近づいていくことを考えてもよい。そのとき、手法だけがまったくあらわに、その全体の姿をみせてしまい、非個性化の極限にたちいるだろう。原イメージが、手法それ自体に同化したとみていいときである。目下のところ、私には原イメージを放棄して、手法そのものだけを抽出し、その操作だけに全力をかたむけるという乾ききった、決定的な手法を開発できていない。いつものことながら、原イメージを幾度も反芻しながら、手法を手さぐりで操作しているだけだ。

ここで発表した３つの建物について、原イメージをとりだしてみると、大分県医師会館の増築部は《積層した雲》であり、福岡相互銀行の長住・六本松両支店は《薄明》だといっていい。このような原イメージが、いつ発生し、どこから明確になり、指導的な主題に転化したかを記述することは困難だ。というのは、私の仕事の場合、手法そのものを含めて、これまでは前の作品と可能なかぎりの大きい断絶をつくることを意図してきたからである。・・・

No. s-19　コミュニティ・バンクの機能と空間――菊竹清訓，　sk7204

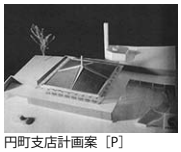
［連作名］アンブレラ・ストラクチャー

こうして銀行のこれからの役割と機能が増大し、続いて起こるであろうキャッシュレス・ソサエティでの新しい存在になり得るであろう。すなわち個々の要求をある一定の地域でまとめて、その経済的な活動を銀行が代わって担うというコミュニティ・バンクのイメージが、ここから生まれてくるのである。・・・銀行の社会的機能におけるウエイトの変化が企業中心の系列化から一般市民を対象とする地域化に現われてきている。それが今日の銀行に現われている特徴的な機能転換現象であり、「コミュニティ・バンク」が注目される、背景である。

京都信用金庫修学院支店

城陽支店

九条支店


円町支店計画案［P］

このようなコミュニティ・バンクへの方向を前提として、それでは一体どういうストラクチャーをもち、いかなるパターンをもつか考えてみたい。・・・明らかに地域のサービス内容と業務組織との間に、一定のもっとも好ましい単位――最適規模が存在しているのではないかと思わせるものがある。そういう単位の存在を想定すると、それらの単位と地域との関係、および単位時間のつながりと相互分担のパターンから単位群による地域との対応関係をもつ独自のネットワークが容易に想定されてくる。

そこで既往のデータから導かれる単位の空間規模は、どのくらいのものになるかを考えてみたい。またそのうえで空間の使われ方が今後どう変わっていくかも考えて単位を設定する必要がある。銀行単位の空間規模と面積配分の資料にもとづき、銀行のスペースは、大きく３つに分けることができる。ひとつは、接客部分、つまりお客と行員とがさまざまな形で接触するバンキング・ホール部分で、これが全体の 50％の面積を占める主要な部分である。つぎに共用部分がある。たとえば貸会議室などで外部の利用もできる地域への開放施設で、これが約 20％に当たる。その３は行員利用部分である。管理室、食堂、休憩室、更衣室、倉庫など管理・運営の部屋などがそれで、全体の面積の 30％を占める。
第１の約半分を占めるパーキング・ホールはさらに４つの要素に分けることができる。預金、貸付、相談およびコミュニティ・サービスである。しかもこれらは 100㎡前後のほぼひとしい面積を要求する。このことはコミュニティ・バンクの主たる空間であるバンキング・ホールについて、４つのスペースモデュールをうまく設定し、これを組合わせることで計画をすすめることが妥当であることを示すのである。・・・

私は、スペース・モデュールに対して、その構造にアンブレラ・ストラクチャーを採用した。それは空間における場の形成の方法としてあたかも樹木のように１本の柱を中心にして、柱のまわりに空間をつくろうとするかねて主張にもとづくもので、この考えは、大黒柱によく表われているものである。

この構造方式については構造的、生産的、経済的、設備的にそれぞれ計画上の合理性を見いだされるが、同時に活動の場にふさわしい緊張感とあるまとまりをあたえる方法のように思われる。このアンブレラ・ストラクチャーをスチール構造にしたのは、解体組立が容易で、特に工期の短縮と確実な工事への期待、繰返し生産による適切なコストを導きたいという理由からであった。・・・
このスペース・モデュールの集合の問題では、これをどう組合わせて地域の特性を出し、環境にうまく調和させるかという点で、4つのスペース・モデュールの集合のパターンについて、それぞれ高さを変えるとか、大きさを変えるとか、あるいは組合せを変えるなど多様な変化を統一されたひとつのシステムのなかで展開して行きたいと考えている。

メタボリックな空間のつくり方を考えておく必要がある。コミュニティ・バンクでのメタボリックな空間とはどういうもので、どうつくられる　べきかということは、ひとつの興味あるテーマである。そのため各店舗は解体、組立、増築が可能な解決をベースにして、そのことによって社会の変化に対応し、自らの変容に自ら行動できる環境をつくろうと考えている。

No. s-20　若人の新しいコミュニケーション空間 ―3つのユースホステル―

――小川淳，　sk7205

［連作名］ユースホステル

建築のひとつのテーマとして考えている豊かな空間の創造について、3つのユースホステルを通じて一貫して追求してきたコミュニケーションの場の成立ち方を述べてみたいと思います。
若人は何かを求めて旅をします。そして彼らはインフォーマルな旅をより好みます。しかし、彼らの利用するユースホステルはどちらかというとフォーマルな宿泊施設に属します。そして､その生活のなかでのミーティングの時間はホステラーのコミュニケーションにおいて重要なものですが、反面、人と人との関わり合いのわずらわしさから逃れようとする人にとっては苦痛の時間になりかねません。そのためには、私は共同意識が芽ばえる空間、集まろうと呼びかける空間の創造が必要であり、その空間の創造がより積極的な対話を生み出すものだと思います。そして、機能と空間との組合せをもう一度見直す必要にせまられ、コミュニケーションの序列による空間の組織立て、秩序立てを想定したのです。
下の空間構成図がそれです。
そして、その空間構成の装置として通路をとりあげ、とくに坂道的なレベル差をもった通路と集会室との複合空間をより豊かに構成することで､コミュニケーションの場の設定が可能と思われました。
道の意味するものは、機能の配列をつなぐ動線の処理空間としてのみ存在せずに、坂道はとくに視線が通りやすく、空間を視覚化するのに役立ちます。ホステラーが建物に入ってから自分の宿泊室に至るまで、歩きながら何となく施設の構成が理解でき、また、未知の友との出会いの機会も多くなることと思われます。
次の3つのユースホステルの設計のプロセスで、このテーマをいかに発展させたかを具体的に述べたいと思います。

・・・「今若人がユースホステルを利用して何を求めているか」を意識的に建築に同化させるために､テーマの設定を行ないました。それが「広場と道」――コミュニケーションの場というテーマでした。このコミュニケーションの場としての広場と道の設定は最初から問題として把握していたわけでなく、陸前高田ユースホステルの設計ではっきりと問題としてとらえることができず、完成し、そしてその使われ方を体験して、次の鶴岡ユースホステルからの設計テーマとしてとりあげてきたものです。

・・・［陸前高田ユースホステルの］空間構成は、ホステラーの施設の中心である集会室と宿泊室を視界のきく2階に、サービス関係のペアレンツ室、機械室、食堂、厨房を1階に設けていますが、また食堂と集会室をパブリックはブロックに、宿泊室、ペアレンツ室、サブペアレンツ室をプライベートなブロックにふたつに分けて、その結合部分として階段を含むオープンスペースを設けました。

・・・［鶴岡ユースホステルは］陸前高田ユースホステルの経験から得たコミュニケーションの場としての道と広場のテーマにより積極的に取組ました。

陸前高田ユースホステル

鶴岡ユースホステル

北九州ユースホステル

・・・［北九州ユースホステルの］空間構成は鶴岡ユースホステルと比べてアプローチの位置を除いてほとんど同じですが、・・・

No. s-21　論文タイトルなし――伊丹潤，　sk7307

［連作名］**WORK**

素朴な生きて行くための生の空間だけを獲得しようという〈WORK〉であった。私にとって住宅設計とは、棄てがたく、建築のすべての基本であると思い知りながら、まさしく WORK（作業）以外の何ものでもないため、WORK と名付ける所以である。

私の設計作業（WORK）は〈点からの出発〉を願い、〈点〉からの出発といえる。そこからはじめて、なにかがはじまり、起こり、立ち現れてくる。つまり〈メタフィジカルなポイント〉というはっきりとした概念と思考である。私は、はじめから〈ある形〉を、そこに（場所）あてはめる（位置化）手法をもちあわせてはいないし、その場所で、その領域で、〈立ち現れてくる〉空気みたいなものを、ひたすらに追いつづける。立ち現れてくる空間が、住み手と生活をぎりぎりに覆ったときを、私だけは、生の空と呼びたいし、生の空間とは、生の空をひたすらに問いかけ獲ちとれる空間である。窓が窓化し、視線が視線化したとき、息づきの空間となり得る。

WORK3

WORK5

No. s-22　仮面としての建築――相田武文，　tj7312

［連作名］**自立した立面**

建築における形象と用途に関する問題は〈涅槃の家〉〈無為の家〉を発表した際すでに述べた。すなわち、建築の自立性は、立面をけちな機能から開放し、機能的制約からのがれる必要があるという論旨である。

今回発表する〈サイコロの主題による家〉は、県 t 肉の用途と形象との関わりを、さらに断絶させることを試みた。であるからこの作品は〈涅槃の家〉〈無為の家〉に続く一連のものであり、考え方をさらに押し進めたものである。建築の形態を成立させる外皮に独自の意味性を持たせることによって、形象自体の自立性を明確にさせること。形象自体が固有のものとして一人立ちすることを願ったからである。

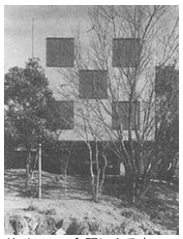
かつて形態は権力の象徴であったり、宗教の尊厳を維持するためのおのであった。それはゴシックやロマネスクの教会堂が町に対する象徴的な取り合いだったり、都市国家における神殿だったり、それは社会に対して見はらされた容貌であり、力であり、威厳であった。そして建築の形態は諸力の総合として存在の価値があったのだが、もはや形態は総合を語ることをやめにしなければならない。形態に最後に残されたものは、権力や、かつての宗教や虚構的な用途から開放されて、形態自体が自立して語ることを始めなければならない。・・・

建築の機能、狭義にいえば用途であるが、この用途を日常的なレベルで建築の立面にした場合、建築の容貌の見え方は一つにならざるをえないし、空間を形成する要素によってつくられる空間性は一つの結果のみに終わってしまう。

建築はさまざまな容貌を持つべきである。

無為の家

涅槃の家


サイコロの主題による家

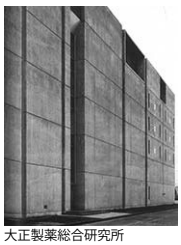
No. s-23　現代のファンクショナル・トラディションを求めて――押野見邦英／鹿島建設，　sk7501

［連作名］**KAJIMA SCIENTIFIC BUILDING DESIGN SYSTEM**

研究所に要請される機能はフレキシビリティである。フレキシビリティは現代のアノニマスな建築に共通に要請されるものだが、研究所の場合は他の建築よりさらに重く、オフィスビルのような物理的なオープンスペースがあるだけでは不十分である。実験室はさまざまの機器があり、おのおのにパイプやダクトが接続されているので単なるパーティションの変更だけでは足りず、そうしたパイピングやダクティングも容易に変更できる必要がある。また節義機器のライフ・タイムは躯体より、短いので、そのメインテナンスも容易でなければならない。さらに実験室に要する室内環境条件はおのおの異なるので、それに追従する必要もでてくる。こうした機能的要請を正面に据えてデザインしたシステムがわれわれの研

愛知医科大学専門過程棟

興人東京研究所


大正製薬総合研究所

究所のシステム── KAJIMA SCIENTIFIC BUILDING DESIGN SYSTEM である。このシステムは〈上図〉のごとく最小単位のユニットを各々独立させ、各ユニットが細胞のごとく自己完結的な働きができるようなサービスをユニットの間の透き間ほどこそうとしたものである。このシステムでデザインされた例として、愛知医科大学専門過程棟、興人東京研究所があり、大正製薬総合研究所がある。
愛知医科大学ではフレキシブルなシステムが医科大学の専門課程の本質的要請のひとつとして把握されており、大学のカリキュラムやプログラムの変化に最大限に対応できるよう、デザインされている。興人東京研究所は軽量な鉄骨のフレームに取付けられたライトウェイト・エンクロージャーがテーマで、内部の機能的要請に応じてモデュール化された各種のパネルがとりかえられるようデザインされている。・・・

前述の研究所システムによってデザインされた最新の化学および生物系の研究所［大正製薬総合研究所のことを指す］で、高度でフレキシブルなメカニックを擁しながらも不用意なダクトやパイプはいっさい露出していない。・・・

No. s-24 「内なる空Ⅲ／深沢・住宅」に関するノート
──富永譲， kb7505

［連作名］**内なる空**

私は、人間の観念や思考や動きを根源的に魅きつけてくれる構造に興味をもち、そうした物の在り方を愛称とした。「内なる空Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、「地の切削Ⅰ」を設計してきた。これらの作品ではまず住宅は、外部と接触をつくるということよりは，本質的な性格として、内部を明確に境界づけることと、外殻の閉合性そのものに主眼が移されている。住宅は人間がそこから外部を眺める場所ではなく、住宅の存在そのものの力によって人間を定着させ、可能ならば、外部世界を抽象して住宅内部に到来させることであり、それは必然的にその空間の自立した構成を要求する。
これが住宅のひとつの形式として成立するためには、もうひとまわり大きな殻でなければならないのではないか・・・この形式のさまざまなヴァリエーションが想起され、いまではこの住宅は、次の仕事のとっかかりとなるあらたな具体的ないくつかの感覚を強化する。

内なる空Ⅰ

内なる空Ⅱ

内なる空Ⅲ

No. s-25　なぜ連階段か ──船越徹， kb7601

［連作名］**連階段の家**

この連階段という語は私の造語であって、階段はおおよそ連続したものであろうから、ことさらに「連」の字を冠せるのもどうかとも思うが、とくにスキップ・フロアを形成している階段を全体の空間構成の骨格においたということを強調する意味で、そう名づけてみたまでなのである。
10 年前くらいからつくってきた住宅のなかに、それぞれ実際の形は違っていても、連階段という解を得たものが数例あり、・・・
いま私は、連階段という「解」という言葉を使ったが、これは実は正確ではない。解は出来上がった住宅そのものなのだから、一つの手法であるところの連階段は「方程式」であるというべきであろうか。私は設計の際に、直接、解だけを求めるのでは満足できない気持ちがあり、あるはっきりとした方程式をセットしたいのである。言い換えれば、ある論理によって裏打ちされたところの空間構成のタイプを求めるということになろうか。
連階段という方程式──すなわち空間構成の一つのタイプは、住宅の空間について一つの有力な手法だと考えている。

連階段の家“回”

連階段の家“折”

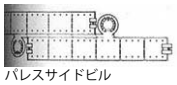
連階段の家“直”

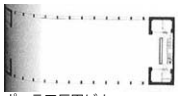
連階段の家Ⅳ

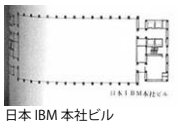
No. s-26 「帯」としてのオフィス・スペース ――林昌二， sk7701

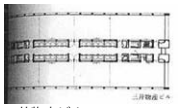
［連作名］帯

日本のオフィスは、大部屋を主体としています。ヨーロッパのオフィスが個室・小部屋を重視しているのにくらべると、これは際立った特徴といえます。・・・
事業体の執務組織は数人単位のグループごとにひとりの管理者を置く「課」制度が支配的です。業務の最小単位である「課」の編成については諸説があるものの、5 人から 10 人どまり、多くは 7 ～ 8 人というところが、さまざまな事業体に共通した規模となっています。・・・「課」の大きさ、したがって事務室の必要奥行寸法については今後当分の間大きな変化は起こらないものと思われます。もっとも、近年は事務機器の普及によって寸法的には多少奥行が拡大される傾向を見せていますが、それにしても事務室の奥行は 10 数 m どまりですから、大部屋とはいうものの、オフィスの空間は必然的に横へ横へと拡がる形になって行きます。業務連携度の高い「課」同士を近接させながら配置して「部」のまとまりをつくり、「部」についても同様の手法をくり返して全体を配置して行くと、ひとつの事業体の空間は幅は 10 数 m で、長さのきわめて大きい「帯」状のものとならざるをえません。日本のオフィス・スペースは、概念的には「帯」なのです。大規模な事業体となれば、「帯」の延長は数 km にもおよぶことになりますから、各部の連携上の便宜と敷地の大きさの制約とを考え合わせて、「帯」は適当な長さに折りたたまれ、積み重ねられ、あるいは平行に敷き並べられることになりますが、これを廊下とエレベーターでつなぎ合わせることによって、オフィス建築の基本形が定まります。一方、階段、便所などのサブ・スペースは、長い「帯」のかたわらの随所に、適当な間隔をもってとりつくはずのものですが、これらは建築としてまとまる段階でシャフトやコアという形に凝縮されることになります。
私たちがこれまで手がけてきたオフィスビルは、ほとんどすべてこの「帯」概念によって説明することができます。事業体の規模と敷地の大きさの違いによって、平面形と高さはそれぞれに異なっており、また、サブ・スペースの凝集の仕方によって、コアの形式がサービスビル型（パレスサイドビル）となり、あるいはツイン・コア型（日本 IBM ビル、ポーラ五反田ビル）となってきました。今回の三井物産ビルでは、「帯」は 2 列・20 数段に積み重ねられ、2 列の「帯」の間にサブ・スペースがずらりと並んで、中央リニアーコア型とも呼ぶべき形式をとることになりました。


パレスサイドビル


ポーラ五反田ビル


日本 IBM 本社ビル


三井物産ビル

No. s-27　住居思考 ――武者英二， sk7702

［連作名］白い吹抜のある閉じた空間

住み手の生活意識と、設計者の空間意識の複合化の実践過程として、1968 年から 1972 年にかけて三つの住宅を設計した。いずれも白い吹抜のある、都市に対して閉じた空間の住宅である。都市近郊の住宅地の悪化の中で、建築の内部に充実した精神的な風土とも呼べる原空間を獲得し、その空間自体が家族にとって想像力を啓示し、世代から世代への共同生活の場となる、精神と肉体の培養の場としたかったからである。
1969 年設計の「泉の家」は、敷地の中央に泉の湧くコートがあり、それを囲んで個室が取りついた形態である。外部と内部の吹抜は呼応するように向かいあい、人の流れはサークル状に計画されている。
1971 年設計の「富士見ヶ丘の家」は、完全なコンクリートの立方体で閉じられた中空の家である。あらゆる行為がマッスの中央にある光の吹抜空間から示唆される、独立性の高い空間構造の住居である。
今回発表の「茅ヶ崎の家」は、1972 年の設計である。末子部なコンクリートにクラック状の外部空間とステンドグラスのある内部の吹抜が相対するような構造になっている。ここでは流れと白磁のある外部空間を視覚的に内部化しようとしている。前出の 2 軒と同じようにこの家の中心は光である。・・・これらの三つの住宅は空間構成の手法は原則的には共通している。

泉の家

茅ヶ崎の家

富士見ヶ丘の家

No. s-28　状況に楔す――安藤忠雄，　sk7702

［連作名］**情念の基本空間**

私は、抽象的な空間というよりも、空間の原形をつくり出そうとしている。この空間は、知の操作とはまったく逆に、あらゆる人間の欲望に根ざした情念の操作によって生み出される。つくる側の論理として、空間の原形をつくり出すことの意味は、自己の作品を長いライフ・ワークのなかで展開して行くときに、基本的に保有しておきたいからで、それが、つくる者にとっての生の証となる。また、空間の享受者に対する姿勢としては、この空間は、あらゆる論理を超えて、精神の深層に訴えかけようとするもので、互いの生の叫びとしての対話をかわすときの媒体となる。

・・・

私の作品に特徴づけられるのは、マテリアルが限定され、マテリアル特有のテクスチュアを裸形のまま表現するということ、それに空間の構成においては、かならずしも機能によって明確に空間がアーティキュレイトされていないということが挙げられる。・・・後者は、空間が閉ざされたものであり、外部との関連によってつくり出されたものではなく、あくまで個人の内的風景を醸成させるものであり、個人の内なる空間に対応させることに起因する。そのため、機能によってアーティキュレイトするよりも、人間の情念と関わり合う不確かな部分、機能によって意味づけられた空間と空間との間隙部分に重点がおかれるためである。この空間の原型を〈情念の基本空間〉と呼ぶならば、それを創出した後に、次のステップとして、この空間を象徴的な空間へと昇華させて行く操作がある。・・・

〈情念の基本空間〉は、私にとって非日常的な様相を呈する。しかし、この非日常生をそのまま保持しながら日常的な意味づけを行いたい。・・・

私は、コンクリートの厚い壁を建築の主な構成要素に用いて、閉じた空間をつくったきた。閉じることの意味としては、社会の中に壁によって自己の場を切り取り、個人の領域を第一に獲得しようとするものである。現代社会は高度なビューロー・クラシーに代表されるように全体構築の論理にウェイトが置かれ、個人が社会に従属しがちである。・・・意志のある個人の主張が集積して行ってこそ、息づき生きた環境というものができるのではないだろうか。

この発想に立って、まず第一に個人の場を確立してから、社会と関わって行こうという意志の表象として壁をつくってきた。中でも、「富島邸」、「双生観」においては、閉ざされた空間で〈情念の基本空間〉というものを模索してきた。・・・

この２作と少しニュアンスの異なるのが「立見邸」と「平林邸」である。はじめの２作が、〈情念の基本空間〉というものを追求してきたのに対して、出発は同じであるが、この２作は日常的な空間と非日常的な空間とが対峙する間隙に生じる空間に期待してつくられた。・・・

これらの４作は、〈情念の基本空間〉をつくり出す作業、非日常的な空間と日常的な空間の重なり合いなど、次のステップに至るための礎石であった。

富島邸

平林邸

立見邸

双生観

No. s-29　沈黙と饒舌のあいだで――相田武文，　sk7703

［連作名］**斜めの造形**

“PL 学園幼稚園”“段象の家”今回の“アップテル塩原”と斜めの線を使ったものが結果的に続いた。いまから思えば、これは・・・実は現代建築との深いかかわりのなかで考えておかねばならない問題があったからである。近代から現代建築への流れのなかで、建築形態の表情が地面からきりはなされたところで成立するといったことがひとつの善であるという思想が低迷していたことも事実であろう。地面からきりはなされた建築が現代建築のひとつの座標とするならば、地面にへばりついた建築も現代建築のひとつの課題といえるのである。

PL 学園幼稚園

段象の家

アップテル塩原

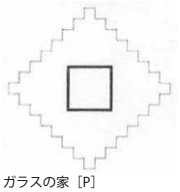
No. s-30　余白の導入 ――長部稔，　sk7705

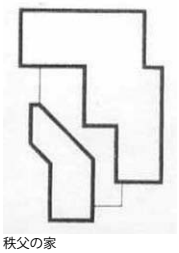
［連作名］**余白**

建築においても、内部と外部の間に半外部ともいえる「縁」とか「軒下の空間」があって、内部と外部を全体として感得するうえでの要となっている。日本の空間的表現の焦点でもあるこの現象を、「余白」として導入し、曖昧模糊としているが含蓄があり、暗示的なこの空間を内部空間秩序の形成因子と考えて、空間構成してみたい。内部空間の中で、比較的明確な空間として捉えやすい部分を壁で囲い、この空間で全体を支持することができたら、「余白」は日本建築における「軒下の空間」のように、構造的に解放された空間とすることができる。「限定されたリアルな空間」が、空間構成のうえでも構造的にも拠所となる。換言すれば、構造が空間的な組織の協力者として働くという、日本建築における空間と構造の関係に近付くことができる。これが『秩父の家』から『木下病院』へと続く、共通のテーマである。

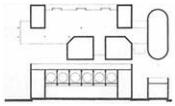
何が「限定されたリアルな空間」であり、何が「余白」であるか。『秩父の家』では十分に検討されていないし、空間と構造という点でも咀嚼されていない。・・・『秩父の家』の場合、「余白」は北西の塊と南東の塊の「すき間」となっている。・・・『木下病院』の場合、機械室、手術室、レントゲン室、病室、階段室が「限定されたリアルな空間」として捉えられていて、ひとつの機能のための合目的性にかなった設備計画が施されている。・・・構造的には「限定されたリアルな空間」である階段室と病室によって、「余白」である外来診療部分は解放され、取り外し可能な壁によって仕切られている。・・・

テーマとは、新しい自由を得るための付加的・主観的な制約の設定であり、空間表現が空間所有の欲望に基づくものであるとすれば、「限定されたリアルな空間」と「余白」の設定は、設計者の感覚と理智によるものとはいえ、独断にすぎないかもしれない。『ガラスの家』で、壁に囲まれた「内の室」と、それをとりまく「外の室」を思考し、『富士宮の家』で、ある程度そのテーマを醸成させた住宅を計画した。『木下病院』はその延長上で実施され、増築計画にともなって、「限定されたリアルな空間」が増殖し、それらを新たに結びつけ直す時、「余白」が変化に対しての融通性を発揮し、東洋絵画における「余白」のように、全体としての構成の要となれるかどうか、現実に試されることになった。


ガラスの家［P］


秩父の家

富士宮の家


木下病院

No. s-31　細胞としての住宅 ―都市の蘇生 UNIT として
――山下司，　sk7708

［連作名］**細胞**

［都市文明が没落した現代においては、住空間を通して品詞の都市に酸素を吹き込むことが必要である、と述べた上で］

私のこれまでの作品もこのような考えから、都市の中で生の発生を誘発する細胞になることを意図している。アメーバや、プラナリアの形態組織に魅かれ、それらた自然の自由な秩序の中に拡がり、浸透して行くように都市の中にフレキシブルな秩序をつくり出し、魂に創造性を啓示する空間、郷土意識、エソスの原点になり、自然で自由な楽しい空間、至極当然であるがこれが私の住空間に対する方向である。“自然流”とまでいえる境地になりたいと願っている。それはまずBOX からの脱却であり、種々の物理的、社会的エントロピーの増加を自然界のもつフレキシブルな秩序によって低下させるような方向でコントロールできる空間なのであるが…。

そのような気球の最初の例が 1970 年の“O 氏邸”である。これは箱の解体からはじめた。田園都市線に沿った典型的な新興住宅地の中に周囲の雑多な形態の中に、いかにそれらと同調しながら、生の息吹を吹き込むか。プライバシーを守りながら、エソスの原点となるもの、個と群の自由な交換、これらのコンセプトが 100㎡の家にしては大きな 45㎡の吹抜けをもつリビング・ダイニングをつくりだした。ここをコミュニティの空間都市、ものと関係の深いほかの諸室をその周囲に置いた。リビングに原空間としての質を高めるため吹抜けの 4 隅にスカイライトを配置し、時間による居間のドラマティックな変化を意図した。これは原空間としての居間を活性化し、人びとを呼び集めた。しかし O 氏邸においてはまだ箱のイメージが残った。それは方形の空間規定要素が強かったからである。次の '71 年の“米元邸”においては、東淵寺で試みた、直角のグリットを 45°ずらして重ね合せたモデュールを採用し、より自由な動き、より自由な接点を試みた。3 角形に近いプランであるが，階段を居間に取り込み、吹抜けと一体化させることによって小住宅とし

O 氏邸

林邸

米元邸

唐木医院

活生間

ては意外と思われる大きさのリビングを得た。階段の上部にスカイライトを南に向け、強い光がこの空間を演出している。小住宅の空間をいかに広く感じさせるかという点においてこの手法に確信を得、以後この住宅は私の住宅計画の原型となり、そのバリエーションが、'73 年の " 大磯の家 "、'74 年の " 林邸 " と続く。林邸には居間に円弧が導入され、より自由な空間の流れをつくりだした。この円弧が '75 年の " 唐木医院 " の居間へと発展し、より自由な空間の流れをつくり出した。このふたつの住宅においては外部空間の内部化、内外の自由な相互貫通を意図した。そして今回の " 活生間 " においてはこれらのボキャブラリィのインテグレーションを試みた。空間を拡げること、空間の質を高めること、明と暗、動と静、内と外、個と群、帰納的な空間に対する情の空間、それらの自由で可変的なバランスを意図した。

No. s-32　都市への埋め込み作業 ——長谷川逸子，　sk7806

［連作名］焼津の建築

物理的都市にひとつの建築が向き合うのは、建築の内と外を分節している外側の面によってではないだろうか。この外側の面はひとつの建築の構成の仕方に関わって、そのあり様は決められていると考える。

焼津の文房具屋

〈焼津の家Ⅰ〉を出発として建築を壁つまり面によって構成してきた。・・・面構成であることは、小規模な建築であることからも選択してきたことだが、構造計算上は壁の量を問題にするため、柱・梁の線材によるラーメン構造より構造上厳密さがなく、あい昧さを残す。その結果として面構成は情感をともないやすく、また平面としての形が残り、形が直接的意味作用と関係しやすい。
この全体を面構成によって、内と外を分節する外側の面をつくってきた時は、できるだけ無表情さを失わせ、無機化するように仕上げ、無性格な開口部を埋めてきた。・・・

〈焼津の家Ⅱ〉は木造の柱・梁・斜材の線材を組んで、そのすき間を壁面で埋めた真壁形式の建築である。その面には線材がつくる三角形と対立する矩形や正方形の開口部を埋めた。・・・

この〈焼津の文房具屋〉は鉄骨の柱・梁架構を建て、次に 3 枚の鉄筋コンクリートスラブを打ち、そのスラブの先端に木造の間柱を立ててゆき、板を張って内と外を分節する面をつくった。内部ではその分節させる面を白い有孔合板で仕上げ、線材をシルバーで仕上げた。それは三角形の家と同じように線材と面と開口部によって構成されたガランドウといえる空間である。・・・
・・・この建築においても外側を面にしたことで、形につきまとうある種のあい昧さを生じている。・・・都市に埋め込まれる建築の形のリストは無限につづく。それぞれの形がつくり出された都市は現象と化してつづく。形があらゆる変化を試みつくして、消滅しはじめなければ都市は見えてこないかのように。

No. s-33　家形を思い、求めて　南湖の家・坂田山附の家・今宿の家
——坂本一成，　sk7902

［連作名］家形

南湖の家

坂田山附の家

今宿の家

それは単に家のかたちをしていたにすぎない。かといって具体的な形を思い出すこともできないのだが。町の一画にひどくあたりまえに、穏やかに、そしてそこにあることに何も疑いを持たせない何気なさの内にあった。一見素朴でありながら、粗野というわけでなく、むしろ洗練されているかに見えた。それはその町の片隅のまわりの家々から必ずしも際立ってはいなかったが、埋没しているわけでもなかった。まわりの家々がそれら自身を家だと主張していると見れば、その家は目して語ろうとはしていなかった。しかし、それらの家々がすでに家のかたちを失って形骸化していると見れば、その家は目して語ろうとはしていなかった。しかし、それらの家々がすでに家のかたちを失って形骸化していると見れば、それは生き生きした家形を積極的に構成しているようにも思えた。・・・
その内部も外側の印象と異なることはなかった。つまり外部で見た家形とそれなりに同形の家のかたちを持っていた。・・・その内部も床や壁、天井、そして窓（い

や天窓もあったかも知れない）がごくなんでもなく穏かにそこにあった。・・・この内部もどこの住宅でも見られそうな家の日常的構成なのだが。
どこかにこの家はあった。私の生まれた町の一隅にあったかも知れない。いやもしかしたら幼い時の絵本の 1 ページにあったのかも。あるいは旅の汽車から下りた小さな町での家かも。いやそんな遠くでなくともこの町のとこかにもその家はありそうなのだた。こんな記憶の家があなたにもないだろうか。

住宅は人の住まう場であり、現実の家は日常の生活のために用意される。それは一義的にはその生活のための機能を求めるために計画されるわけだが、残念ながらその機能を得るために形態を必要とする。そこにさまざまな意味を生じることになる。つまり機能を得るために必要な形態はそれと必ずしも直接関係をもたない意味を社会的に発生させる。・・・つまり私たちの文化社会では「形態は機能に従う」ことにはならず、必ず形態は別の機能を誘発してしまうからだ。だが、その二次的機能の消去、あるいは意味の消去の彼方に、またあるいは消去しきれぬ場にこそ住宅の基本的性格が浮上する、また残ると無意識に思考してきたとも考えられる。そこに家形と呼ばれる家の図像が残ったといえるかも知れない。

さまざまな水準であらわれる二次的機能の完全な消去はそれが社会という世界内にある限り、論理的に不可能だ。・・・二次的機能を家形というある種の形態に準拠させることで、逆にさまざまな意味を開放させることにならぬか。つまり住宅に家という人の住まう場の概念をトートロジー的に表徴されることで機能性記号化しよう（すなわち機能がそれゆえに発生する意味だけの記号に限定しよう）ということである。そこに住宅において家形にこだわる必要性が見いだせると思われるのだが。ここでその家形は必ずしも具体的な家の形を意味するのではなく、具体的なものを通した家の概念を構成するさまざまな水準の関係を示していると理解されたい。
家形は人の住まうことへのあこがれの対象かも知れない。それは遠い記憶の奥底の人の住むところへの根深いイコンを成立させているといえる。あるいはそのことは人間という集団の無意識に持ち合わす住むことへのイメージを形成しているかも知れない。今も、町で、いや製図板を前にして思い、求めている家は零度の地平にもさまようその家形なのであろう。その家形はさまざまな世界との対立の内に漂っていると思えてならない。

［南湖の家の設計解説文］
あるいはこの建物はビーチ・ハウスに似てるかも知れない。もしそうであるなら、そのことはこの建物の立地条件からの私の無意識のイメージによるのであろう。

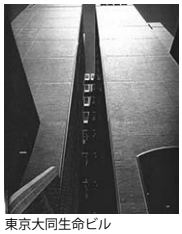
［坂田山附の家の設計解説文］
この建物が素朴な小屋でありながら、一見ビラ的様相を示すのは、湘南の海辺に近い恵まれた緑を背景とした丘の中腹の敷地に計画されたことによるかも知れない。

［今宿の家の設計解説文］
この建物が家形をしているにもかかわらず、完結した、そして単一な、さらに統一的な図像を持たないのは、この敷地の周辺の環境によることもあるかもしれない。

No. s-34　中間領域または周縁性へ――黒川起章，　sk7905

［連作名］中間領域

・・・私有空間の中に公共性を取り入れ、公共空間に私小説的な性格を取り入れることにより、相互に両者が浸透し合い、共存し、衝突する中間領域としての半公共空間を創造することが可能ではないか。1962 年の西陣労働センターの道の空間から始まって、・・・、そして東京大同生命ビルの道空間に至るまで、私の中間領域としての半公共空間への執着は変わっていない。


東京大同生命ビル

・・・この 100 年間の近代化の流れのなかで切り落とされ、無視されてきた、中間領域、あるいは周縁性の問題は、建築や都市の多義的な空間の質の議論を決定的に欠落させることにもなった。
中間領域の一つとしての道空間の評価は、近代化の過程で欠落してきた空間の質

を一つずつ拾い上げていく「落穂ひろいの作業」なのである。
・・・ほんんらいの道空間のアクティビティをつくり出したのは秀吉であった。それまで周囲の道路で囲まれていた町の単位を彼は斜線で四等分し、それぞれを丁と名付けた。そして、道を挟んで相対する丁を一つの町の単位として呼びかえたのである。共有空間としての道が、両側の町屋と相互浸透して半公共的な中間領域として育っていくのは、これをきっかけとしてであった。・・・
道空間の質は、またその両側の町屋の軒先き、格子、連子窓、揚げ棚、駒寄せ、通りニワといった建築的処理によってより高められている。
・・・これらすべての仕掛けが、道を一つの建築空間につくり上げていたのである。
建築の切断は、都市に隙間をつくる作業である。
日本赤十字本社の隙間は、風景を取り込むと同時に、内部と外部を浸透させる手法でもあった。大同生命ビルの切断は、光と、雨と、ときには雪といった自然の感覚をよりドラマティックに道空間に導入する手立てでもある。

No. s-35　再生への演歌 ――星野厚雄，　sk7908

［連作名］中古木材

夢のように時が過ぎて、この中古木材シリーズも早や７歳。「列島改造論」とやらの真最中、ドンチャン騒ぎの世相に背を向けて、いくつかの社会性の強い路線をはじめた。その中のひとつが、このシリーズ。建設の物質消費性、木材への愛着をテーマに、“使えるものは、とことん使おう”と、建築デザインを楯鉾に、消費文明の爛熟期へデモンストレーションをかけた故である。
あれから数年、世の中変れば変るもので、時には嘲笑まで受けた古材も、今や“溺れるもの藁をもつかむ”の見直し始原になりつつあるそうで、古材建築に関する調査・取材・注文などが、相次ぐ今日このごろだ。
［すべての作品に通底して］さらに部材寸法も、構成法も、いわゆる一般的な規格・基準はなるべく無視し、古材の山積みの中から、“一番太いもの”“数があるだけ”といったあんばいである。・・・
・・・スゴ味のある素材は、設計者・職人、そして施主、それぞれの立場にエキサイティングな衝動をかりたてる。それが時として、図面そっちのけの勢いとして暴走するわけだが、・・・第７作目になると、・・・中古材が設計者だけの狭い囲いから、最大公約数の演歌として、スタイルを確立しつつあるような気がする。

独楽蔵のアトリエ

若山邸

むさしのアルプス

みの虫

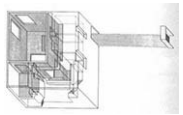
電柱砦

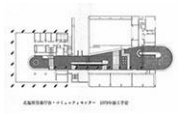
No. s-36　設計について ――谷口吉生，　sk7909

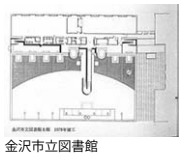
［連作名］二律背反の単純図形の組合せ

私たちが事務所を開設して、設計の仕事をはじめてから約５年になる。・・・これまでに設計したいくつかの建築は、私にとって、それぞれがひとつの設計というよりか、むしろすべての設計が、あたかも長い一筆書きの図形の線上にあるように思われる。・・・
この５年間で設計した建物のうち、主要な建物の図面を並置すると、客観的に見ても、一連の形態を追っていることは明白である。それは、求心形と遠心形、空洞と充実体、というような二律背反を表わす単純な図形の組合せから成り立っている。おのおのの建物は、もちろん敷地の条件も違うし、建物の目的も違う。しかし、それぞれのプログラムの中で、合目的な空間を探すうちに、いつも非常に類似した空間系に収斂してしまう。
かつて出会ったさまざまな過去の都市を想い、・・・私の設計が都市そのものを抽象化し、建築の中に凝縮する閉じた形に指向していったのは、ごく自然な方向であった。
ここにあげる私たちの６つの設計例は、いうなれば、都会的空間を発生させるような図形の空間化であり、ゲシュタルト的知覚を原型として建築空間をつくるひとつの試みである。

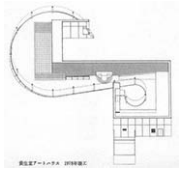
K 氏邸
敷地の角にコートヤードをつくり、隣地側の壁には家の窓と同じ開口部をとる。するとその中には借景となり、このコートに立つ人の周辺全体にまで家は広がり、小広場が出現する。
床と壁が同じ時期タイルで仕上げられ、その結果、小広場の視覚的な重力の方向は弱められ、空は大きな天窓の中に現れ、今度はそこに大きな室内が出現する。

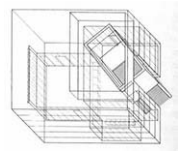

雪谷の住宅


北塩原役場庁舎・コミュニティセンター


金沢市立図書館

B ゲストハウス［P］


資生堂アートハウス


福井相互銀行支店

このように、一方が他方の仮象となり、地と像の反転が 15m 四方の中で絶えず繰り返される。

F 相互銀行支店
長方形の枠組の中にもうひとつの直方形を回転して重ねる。

金沢市立図書館
建物の中心にはいり込んだ外部が、事務管理部門と公共スペースとをわける。・・・タイルで仕上げられた直線の壁とガラスの曲面の壁・・・

北塩原役場庁舎・コミュニティセンター
ふたつの正方形の平面を持つ建物。・・・

B ゲストハウス
この家は、じつは機能的にはリニアーな構成を持っている。もっともパブリックは居間から、もっともプライベートな主寝室まで、その活動のスケールに応じて外部空間と対立させる。次にその空間の対を、螺旋形の図形になるようにまるめる。

資生堂アートハウス
設計された建築の外形は、正方形と円形の単純な形態の組合せからなっている。・・・

No. s-37　狭間からの象徴空間へ――神谷五男，　sk7909

［連作名］メタモール

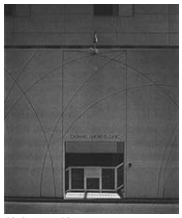
この建築には地方都市における文化活動の核となる建築をいかにアイデンティファイさせ、そしていかなる手法でシンボル化するかが、建築家に対する要望であった。この建築の中央の位置を占めるメタモールの形態はこの建築のアイデンティティとシンボル化に対するすべてである・・・
・・・この建築［佐野市文化会館］の中央の位置を占めるメタモールの形態はこの建築のアイデンティティとシンボル化に対するすべてである。メタモールとはここでは内部空間でもあり外部空間でもある。いわばこの建築のガイドスペースである。
メタモールは、内部空間の形態がそのまま外部に表出した形態で表現されている。全面にレンガタイルの貼られた建築の中央より楕円壇状に表出した形態は“どんづまり”といった地域性に対する巻き返しにも似たイメージを表現したものであり、そして都市の成長と変化に伴う結果と地域性との間に生ずるズレに対する因果関係の中に建築を投企したものである。
それは建築と地域性との“狭間”の中に建築的機能を象徴機能へと転化させる手法を投企し、建築をアイデンティファイさせることである。
これらの類型の手法は、私どもが従来手掛けてきたいくつかの建築表現にも見られるものである。「竹の塚の住宅」、「流山の住宅」、そして「今市市文化会館」などにおいて表現された形態も同様な設計意図の中に構築されたものであった。建築的機能を象徴機能へと転化したメタモールにおいてはさらに構造機能を象徴機能へと転化し象徴空間を演出している。

佐野市文化会館

No. s-38　非装飾が装飾化する可能性を開始する
――長谷川逸子，　sk7910

［連作名］曖昧な図形

この「徳丸小児科」の内部に配置したサインカーブの壁面や仰角 60°の壁面と天井面、6 寸勾配の天井面などもこれまでの内部の空間の質をひきつづける目的で導入されたものである。
それらのかたちの選択の仕方は「鴨居の家」、「緑ヶ丘の家」で 100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきたときの選択の仕方に近い。円弧やサインカーブは円の軌跡を完結するようには見えないものとして選び、6 寸勾配は矩勾配という強い勾配よりやや弱いものであるとして選んで使った。ここで使ったかたちは幾何学の基本図形である円や三角に視覚的に還元できるというより少し不完結さを残すようずらしたもので、完結したかたちに対し、曖昧


徳丸小児科

なかたちともいえるものになっていると思う。
私は通常どちらかというと微妙にずらした曖昧なかたちを選択しようとすることがほとんどである・・・

No. s-39　地形の発掘・部屋の格納 ―沖縄風土へのアプローチへの試み―
――香山壽夫，　sk8004

［連作名］**沖縄の住宅＋病院**

高い石壁に囲まれ、正面にヒンプンを配する沖縄の住居は、ひとつの完成した形式である。それは美しいだけでなく、私に現在すぐにでも住み得るし、その結果はさぞ快適だろうと十分に予想させるものである。重厚な石壁の閉鎖と、中に格納されている木構造の開放性は、世界の数多い民家の中でも、もっとも私が共感を持ち得るもののひとつである。・・・

名嘉邸＋病院

下地邸＋医院

垣花邸＋医院

沖縄の湿度は高い。吹き抜ける風が、それを救うのであるが、単に生理的快感だけでなく、ぼうぼうと鳴る風が、閉じた部屋の中にいても回りの海の存在を常に身近に感じさせ心を拡げるのである。しかしこの風は、年々数回は恐るべき台風となって島を襲う。その風速が本土を襲う台風の２倍に達するすさまじいものであるというだけでなく、その風は石や瓦や樹木をつぶてのように建物にあびせかけるのである。

住居のすべての部屋を覆う日陰を作ること、そしてそれらの部屋を通常は自由に風が吹き抜けてはいくが、必要な時には固く閉じ得ること、このふたつの条件が、建物と建物を入れる、あるいは建物をもうひとつの建物で包むという方法を導き出す。・・・
われわれのこの３つの住宅はすべて、コンクリートの単純で頑健な箱の内に、さまざまな部屋をもうひとつの箱として格納する方法をとっている。形態も素材もまったく違ってはいるが、そうした民家の形式は製図板と向かうわれわれのイメージの中に共感を持って生きていた。

この３つの住宅は、それぞれ固有の、むしろ雑多な、周囲の状況に対応しようとしている。雑多なのは外部の条件だけではない。内部に格納する部屋の種類も造形も雑多であるといっていい。・・・

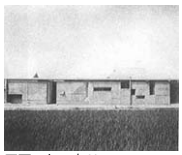
No. s-40　続・コートハウスの記
――太田隆信＋梅原良夫／坂倉建築研究所，　sk8008

［連作名］**正面のない家**

正面のない家第１作は、1961年１月。今考えてみても、コートハウス、就中坂倉コートハウスの特長を、実によくいい表わしているこのタイトル。・・・これからの住宅はコートハウスの出番、じゃんじゃんつくって正面のない家シリーズ、どんどん発表しようよと・・・
第２回目は 1962 年 10 月。この時は、２軒まとめて発表。・・・今度の３回目の発表に、意外と手間取ってしまったが、私としてはずうっと一連のコートハウスのつもりで、続・コートハウスのタイトル大真面目、これからはもう少しコンスタントに続けば…。

正面のない家

正面のない家Ｋ


正面のない家Ｈ

続・正面のない家

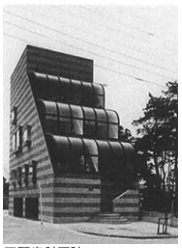
これまでの木造コートハウス［正面のない家、正面のない家Ｋ、正面のない家Ｈ］が、水平な内外空間の流れで構成されているのに対して、RC 造コートハウス［続・正面のない家］の場合、内外空間の関係を立体的に展開することができる。それに今回はそういった展開を、さらに周辺の緑にまで拡げてゆかねばならない。不整形の敷地に、ぎりぎりいっぱいのコンクリートの直方体を置き、内側の不要な部分を囲む計画が構成されているが、それと同時に、外側の不整形のすき間が、内外空間の融合・借景というテーマ上、予期以外の効果をあげている。

No. s-41　表現について ――山下和正，　sk8008

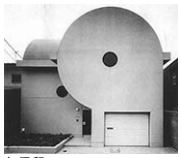
［連作名］**アタッチメントとデフォルメーション**

建築の表現性というものは、（建築に限らず、表現というもの自体の問題であろうが）、実に多様な側面を持っている。・・・モダニズムの規範のひとつに、「正直さ」ということがあげられる。素材をそのまま正直に表現すること、構造を正直に表現すること、過去のモチーフや装飾を排除して現代のみがイメージのテーマであることなどである。

しかしなぜ正直であらねばならないのだろうか。建築が人を「だます」ことができるのであれば、それも楽しいのではないだろうか。いや、むしろそれは建築表現の重要な手掛かりですらある。・・・どんな建築でも制約はつきものだが、合理的な（モダニスティックな解決の前提であるが）追求によって得られるストラクチュア自体を大きく歪める訳にはゆかない。わずかばかりのアタッチメント（付加物）や、デフォルメーション（変形）によって全体の意味を大きく変え得るような効果をねらわねばならず、それがどのようなものになるかという点に関していえば、まさにケースバイケースである。


平野歯科医院

ペガサスビル


久保邸

顔の家

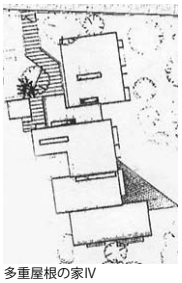
No. s-42　多重屋根のコンセプト ――木村誠之助，　kb8008

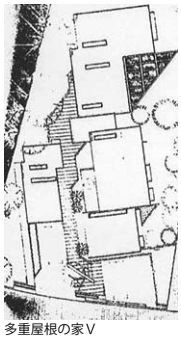
［連作名］**多重屋根の家**

・・・この複雑な家族のニーズというものの理解からすれば大きく欠けており、一連の設計過程の中でそれを感じ取りつつ、案を成長させていかなければならなりというように思われた。・・・

敷地の空間的構造を一方で把握しながら、他方、不確定な建築的要求に対応しうるさまざまな建築的手法が考えられる。・・・

私はこのところ幾つかの住宅を並行して手掛けている。そのいずれもがさまざまな別々な理由によって、建築主の究極のリクワイヤメントを理解するのに多くの時間やまわり道によって初めて達することができるような気がしている。それにつけても建築家側の提案が前提でリクワイヤメントが拡がるということもあり、提案によって初めて潜在的なリクワイヤメントに火がつくこともある。このようなプロセスを冷静に受けとめるならば、私の提出する最初の案というものは、極めてフレキシブルに取り扱われうるものでなければならない。それは単に平面的にフレキシビリティがあるというだけでなく、空間的、３次元的にフレキシビリティがなければならない。場合によっては連なり関係も換えられる互換性も要求される。すべての関連がルーズであり、しかも最終的には素晴らしい建築的結果を期待しうる関係を最初の提案の中に盛り込んでおく必要がある。このような建築的要請に応えるためには、・・・屋根の架け方に自由度を見い出せるとしたら、この問題のかなりの部分は解決してくれるように思われる。・・・これらの諸条件を整理すると、建築的に十分検討された屋根を反復架ける［ママ］ことによって、建築的表現を確保しながら、平面的、空間的自由度が大きく増すということである。私はこれらの理由から建築的ソリューションのひとつとして多重屋根方式とでも呼べる考え方に到達したのである。(この計画に前後して設計した『多重屋根の家Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』と題した三つの仕事が、住宅建築 1980 年５月号に収録されているので併せて御参照いただければ幸いである。)


多重屋根の家Ⅳ


多重屋根の家Ⅴ

No. s-43　開かれた博物館をめざして ――戸尾任宏，　sk8101

［連作名］**博物館**

これまで奈良県立民俗博物館、知多市民俗資料館、浜松市博物館、蒲郡市郷土資料館を経てこの計画に至るまで一貫して考えてきたことは、展示室という閉ざされた空間から受ける心理的圧迫感、展示物から受ける緊張感をどのように開放させるか、そして館に滞在する時間をいかに心を安め想いを深めるものにすることができるかということであった。そのひとつの方法として、展示室を含む展示空間を外部空間に結びつけることをいろいろと試みてきた。展示室自体におおきな窓を設け、外部空間と一体となった展示を試みること（奈良、知多）、あるいは展示室につながるホールやギャラリーが、ガラス面を通して外部の緑や自然に包まれた心安まるスペースをつくること（浜松、蒲郡）、などである。しかしこの橿原

奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館

では、回廊を通して直接外気に接する場所を設け、回廊に出ることにより密度ある展示からの開放感を味わい、中庭のまわりを巡りながら、あるいは椅子に腰かけてくつろぎ、歴史への回想といった時間を持てることを期待したものである。この回廊で過ごす時間は、貴重な資料に接することと並んで博物館で得られるひとつの体験として、意味有るものとして心に残ると思われる。

No. s-44　プライマリィの継承としての混構造 ――宮脇檀，　kb8102

［連作名］**混構造**

住宅地のスケールに合わせ、周辺の環境に揃えて RC の箱を操作して置く。その内部に、これとは全く関係なく施主の要求する間取りを木造で建てる。表現として箱は壁構造の面で白く、木造は線で生地仕上げでと対比的に組み合わせる。松川ボックスでは木造は完全に RC の箱の中に納まり、菅野ボックスではみ出して外部にこぼれるというバリエーションはこの手法の操作性の容易さや展開の可能性を予感させ、その後しばらくのめり込ませることになる。・・・
さて・・・混構造はその手法としての有効性からさまざまな型で展開し始め、そのバリエーションの追求が行われ始める・・・
けれど多分しばらく今構造は続くだろう。・・・
今回発表の 2 軒の住宅は一つは典型的な混構造手法を展開させたもの。RC の箱を切り取って、内部の木造が露出してくるという型だけが新しく、他の一つは RC と木造の軸を 45°振ることによって RC 内の居住部を南面させ、木造を敷地のもつ軸線に合わせて組み合わ亜せたもの。
それぞれがバリエーションの追求を試みて、・・・

松川ボックス

富士道邸

菅野ボックス

有賀邸

No. s-45　光を！ ――葉祥栄，　sk8104

［連作名］**光と架構**

キャンティレバールーフの家、ラチスフレームの Y コートハウスも・・・屋根が主題になっていたし、構造上の興味から架構システムが出発点になっていた。・・・キャンティレバールーフの家、も格子梁の家［Y コートハウスを指す］も、規模は小さいし柱が邪魔にはなるが、四方に広がるために、より自由であるといえるだろう。このような手法によって得られる空間は、寛容で、自由な広がりを持ち、隅々にまで光が満ち溢れて、自然に囲まれ、自然と対応できるだろう。というのは、大きな樹冠の下や、生い茂った林の中をイメージした空間だからである。
住宅に限らず、光を縦軸に、自由度を横軸に考える習慣があるせいか、自然との関わりを密接にする光と空間との関係は、システマティックな架構に対して、光によって均質で、ニュートラルな空間を志向していることになるような気がする。“光格子の家”では、・・・ふたりだけの生活では、成長や変化に対応することは絶対的ではなく、そのために以前のふたつの住宅と異なって、閉ざされた外郭が空間を内包することになったのである。これもまた架構システムと光が、デザインの鍵になってはいる・・・ダブルチャネルの柱と梁は、すべての面におけるスリットを可能とするための唯一の架構方法であった・・・いずれの場合も、光と構造は互いに切っても切れない密接不離の関係にあって、相互に成立しているのである。キャンティレバールーフの家では、コア内部に 4 個のトップライトがあったし、格子梁の家では、あらゆる所に格子梁のおかげで、数十ヶ所に、数種類のトップライトが設けられていた。三つの住宅における光と構造の関係が、明らかになった・・・

光格子の家

No. s-46　自然との共存を求めて　目神山の家 1960 ― 1981
――石井修，　sk8108

［連作名］**目神山の家**

長い年月を経てつくられてきた自然の環境も、人間の破壊力を以ってすれば、一瞬にしてはげ山にするのはしごく簡単なことである。開発という名で二度とかえらぬ美しいこの土地の自然が破壊されてゆくのを目の当たりにし、人間の横暴さを感じぜずにいられない。
・・・私の家の近隣に私が手がけた住宅は、我が家を含めて 7 軒完成し、今後も数件の住宅を設計することになる。美しい現在の自然を残しながら、どのようにすれば自然と共存できる家を建ててゆくことができるかが、これからもこの地域での住宅設計の大切な課題になることと思う。

［目神山の家 7 の設計解説文］
この敷地でいちばんよい眺めが得られるのは、東北の方向であり、自然公園の樹木におおわれた山並みが広がる。居間のある主棟の軸線を敷地軸線から 45 度ずらし、開口部を四周にとることによって日照を確保し、不利な敷地条件を補ったつもりである。

［目神山の家 6 の設計解説文］
南には芦屋の市街地と海が眼下にあり、深く淡路島が望まれる。北には御椀を伏せたような甲山が目前にある。尾根の頂に建つこの家は、それぞれの開口部から四周の景観を望むことができるように計画された。
この建物には石材を多く使っているが、すべてここで採用した御影石である。石肌の表情を好まれる施主の希望もあって、アプローチから玄関に至る外壁と居間、食堂の内壁は割石の野積みとして城壁を模した。
主寝室は平屋建で独立しており、三方に広縁をめぐらしてある。居間と食堂の間には比較的大きな中庭がとられていて、北側にある食堂も日当たりがよい。中庭に植え込まれている数本のシャラノキ（夏椿ともいう）の白い花が咲き、梅雨によく似合っている。四周にある開口部は、視界の広がりと共に、これからの夏の季節をすごしやすくする通風にも充分役立ってくれることと思う。

［目神山の家 5 の設計解説文］
・・・もとの地形を生かし、自生の樹木を残して計画することで踏みきった。
道路と建物の間にある谷は埋めずに、鉄筋コンクリート造の橋をかけ渡すことによって自然の地形や樹木を残すことができた。・・・

［目神山の家 4 の設計解説文］
斜面に建つ家はアプローチの仕方と各室の配置によって形態が決まる。建物は 3 層だが、各層とも地面に密着して地形になじませ、元の地形や自生樹木を残した。鉄筋コンクリート造の屋上は土をのせて平らな庭とし、家庭菜園もつくられていて、どの部屋からでも見晴らしのよい家となっている。

目神山の家 4

目神山の家 6

目神山の家 5

目神山の家 7

No. s-47　形態とすき間――東孝光，　sk8108

［連作名］**スリット**

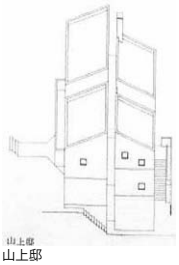
保育園や福祉センターの例のように、都市空間への連続性に有効なことが発見された中庭や室内の街路空間を、スケールダウンして住宅内部の準外部空間に使ってみようという考えが芽生えた。もちろん、高密度の都市型住宅に要求される周辺の住居からの独立性を確保するために、外周の窓を少なくし、内部にトップライトのついたすき間（スリット）をとって、そこから通風や採光を行なうという直接的な動機が意識されるようになり、この手法が繰り返し使われることとなった。

最初の典型的な実例は、1979 年の「章本邸」であった。住居専用地域の厳しい建築制限の中で、南北に 2 列部屋を重ねた平面の、特に北側の部屋への採光と通風のためにスリットの利用が考えられた。ふたつの単純な箱が並列的に置かれ、極度に単純化されたディテールのガラス嵌殺しのトップライトと垂直面の通風窓、上下の連続性を高めるための 1 段ずつ独立した階段ステップなどが、その後の作品の共通仕様となった。1977 年の「山上邸」では、スリットが十文字になっているが、片方にはトップライトがなく、空間的な四分割の度合いはそれほど強くない。そして 1978 年の「ピアノの家」になって、ようやくスリットの役目が内部に光や風を取り入れることだけでなく、異質なふたつの形態を組み合わせるための手立てとして有効であることが意識されるようになってきた。・・・ここで初めて、目に見えないすき間（スリット）という空間による多様性の統合が意識された。

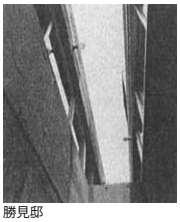
さて今ここに発表する 3 つの作品は、共通してふたつの形態を、あるすき間（スリット）を介して組み合わせるという手続きによって設計されている。すき間（スリット）という言葉は、裂け目とかクッションとも呼んでみたが、結局、中性的なすき間（スリット）が一番良いと考えている。上方や側面から光や風を取り入れる空間でもあり、ふたつの形態をつなぐ働きもあって、単なる裂け目ではないからだ。・・・スリットの手法は住宅設計における新しい建築的構成原理のひとつとなりえる可能性を持っている。これまでひとつの建築にはひとつの形態的表現と考えられていたものを、スリットの空間を挟むことで、ふたつまたはそれ以上の形態の組み合わせという複合的なかたちに転換させ得る点が重要である。

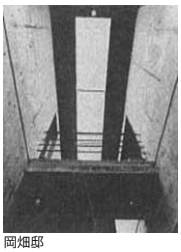
なぜならば、多様な要求をひとつの形態にまとめることが困難な現代的状況から考えると、異種の形態や空間の併存を可能にするこの手法は、広い適用の幅が貴重であるばかりでなく、空間構成に複合的かつポリフォニックな関係をもたらすものとして期待できるからだ。

章本邸


山上邸

榎本邸


勝見邸


岡畑邸

No. s-48　設計随想――神谷五男，　sk8209

［連作名］**曲線**

私の見るところによると、曲線は直線に比べて視覚的なやわらかさや、動的な変化のある表現手法として一般的に扱われているようである。しかし、私にとっては多分に“樹草”や“自然”の姿の中にあって、「曲線」によって構成されたそれらの神秘的な“かたち”や有機的な“かたち”に対して、何ともいいがたい「恋慕」にも似た思い入れがあることも事実なのである。

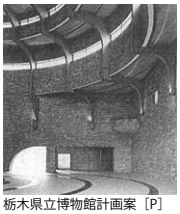
私たちは、これまでに佐野市文化会館や栃木県立博物館の計画案などをはじめとして、「曲線」や「曲面」を大胆に取り入れた建物を設計してきた。

佐野市文化会館の場合、正確には点の連続であるが、段々に上部へとズレ込んだ楕円形の屋根から曲線形へと流れる屋根に覆われた・・・

また栃木県立博物館計画案では、・・・自然現象の中に見られる“断層”や“なぎ――裂け目”をイメージした表現が「曲線」と「曲面」によって構成されており、全体のかたちが樹木に囲まれた都市公園の中に沈み込んでいく計画案であった。

今回の今市市の図書館と資料館でも、かなり思い切って「曲線」や「曲面」を使った。図書館と資料館は、凹曲面壁と凸曲面壁との間に“すき間”をつくり、その間を通って近づくとふたつの建物をつなぐ下屋があり、その玄関からそれぞれの館内に入る構成を持っている。

佐野市文化会館


栃木県立博物館計画案［P］

今市市歴史民俗資料館

今市市立図書館

No. s-49　論文タイトルなし――芦原義信，　sk8304

［連作名］**スプリット・レベル**

30 年前マルセル・ブロイヤーの事務所で働いていた頃から、空間の流動性やスプリット・レベルのような構成に関心があり、ソニービルでは 0.90m、モントリオール日本館では 1.20m のレベル差を使って空間構成をしてきた。私共が最初に関心をもったことは、この大博物館の動線と歩行距離、展示のシークエンスなどであり、今までの経験の総決算として、この博物館の動線を計画した。そこで、歴史の流れを委員会の指導により導入部のあと、原始、古代、中世、近世、近代、現代の 6 つの時代に区分し、それぞれの主室と副室を組み合わせた動線と、民俗、考古、分野別展示、企画展示などが、導入部からレベル差で下降し、途中のふたつの時代区分毎にそれぞれ 1.50m 落差の明るい階段室を通って次の諸室に至るシークエンスを考え、そしてついに中庭に出る。あるいは途中どこからでも、中庭に面した回廊に出ることによって歴史を自由に選択できるようなシステムを考えた。・・・

国立歴史民俗博物館

No. s-50　遊戯性、積木、そして……――相田武文，　jt85 春

［連作名］**積木の家**

「積木の家Ⅰ」は、以後連作のきっかけになったものであるが、ここでは、どのような視点からこの作品がつぎに連続する作品の源泉になったかを説明したい。

モダニズムのもっている規範から逃れること、もしくは、そこに不足しているものを補足すること。このようなことを思考していたときに「遊戯性」という言葉に思いあたった。「遊び」の到達点としての快楽は重要な問題であり、それは人間の生活にとって基本的な事項に関わるものだる。モダニズムに欠落していたのは、こういった「遊び」の問題ではなかったか。・・・

しかし、一方でこれまでの私の空間構成をひきずってもいた。どちらかといえば、「固い」方法だったように思う。・・・こういった状況の中で、これらを二重に結び合わせる言葉や事物として浮かび上がったのが「積木」であった。それは私にとって「遊戯性」と「空間構成」をたくみに表現する唯一の手段ではないかと思えた。そのような模索の中で生まれた建築が「積木の家Ⅰ」であった。

「積木の家Ⅱ」は複合ビルであり、商業地に立つということから、ファサードが重要な意味をもつ。ここでは、キュービックな箱に「積木」を付着させるという手法を用いた。ここでの試みは、・・・「表面」の問題として積木が語れるかということであった。・・・

「積木の家Ⅲ」は積木というヴォキャブラリーを用いて、「固い」形態から「やわらかい」形態へ移行することを試みた建築である。・・・

ここでは、固い静的な形態から、やわらかい動的な形態にするために、ランダムに積むことが求められた。・・・

「積木の家Ⅳ」の発想は箱の中に積木を入れて後、その箱に亀裂を起し、中に入っている積木を垣間見るといったものだ。この発想の根源には、この住宅の置かれた周辺環境によっているところが大きい。ここでは、コンクリートの外壁が積木の箱に見立てられるのだが、コンクリートの外壁は、周辺からの影響をガードすることになり、住空間の維持を図るのに役立つ。・・・

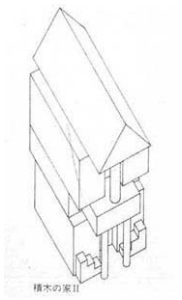
「積木の家Ⅴ、Ⅵ」は・・・ここでの試みは施主と建築家とのコミュニケーションの手段として「積木」を用いることであった。・・・いま、建築にポピュラリティが求められるとするならば、積木はよい媒介物になるに違いない。・・・

「積木の家Ⅶ」は、積木が充満している箱をまず設定した。その箱を切断し、それを移行することによって、そこに空隙が生じる。その空隙を空間として確保することによって、それが必要とされる部屋になる。・・・

切断やズレの手法を用いることによって、結果的にはファサードの分節化が行なわれ、小住宅が並ぶこの地域のコンテキストに適応したスケールをもち得たといえる。

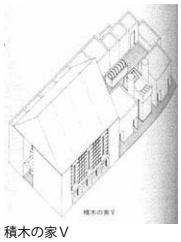
「積木の家Ⅷ」は立方体と円筒というふたつの原型によって成り立っている。このふたつの原型が、それぞれ組み木細工のようになっており、そこからピースが徐々に分割したり、崩壊したりしながら空間を構成していく。実際には、住宅としての機能を含んだ空間構成と積木が崩れていくプロセスとの間に試行錯誤が繰り返される。この試行錯誤の期間がもっとも創作上の興味深いところで、知的なゲームを展開しているといえる。

「積木の家Ⅸ（人形の家）」は競技設計（人形の家国際設計競技 2 等入選）に出展したもので、・・・人形の家―→子供―→遊び―→積木―→ミニアチュア［ママ］といった図式がここでは考えられた。



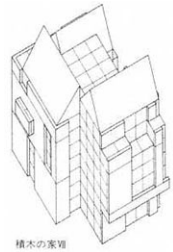
積木の家Ⅱ

積木の家Ⅲ

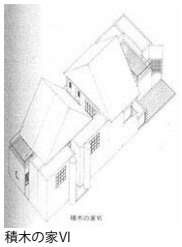


積木の家Ⅴ

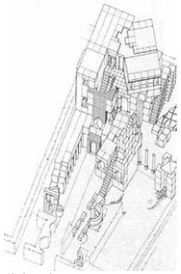
積木の家Ⅳ



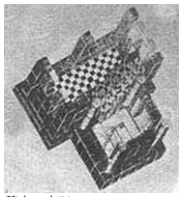
積木の家Ⅶ



積木の家Ⅵ



積木の家Ⅷ



積木の家Ⅸ

今回の作品「積木の家X」は積木の積み上げていくという構築の概念から崩壊、もしくは溶解感覚に表現の基盤を置いている。「積木の家Ⅲ」で試みた「やわらかな」表現をさらに進展させたものといえる。
この「積木の家」シリーズもNo.10を数え、そろそろ終極にしたいと思っている。私のこれまでの方法はどちらかといえば、家の題名を定めておいてからエスキースを始める。つまり、言葉から形態への変換を試みた。このようのな方法で、これまでも5～6年間の期間を区切ってテーマを定めてきたつもりである。
形態のテーマを定めてから建築をつくることは、ある枠組みの中で考えることであり、自動的に空間操作をおし進めることもできる。今回のテーマ「積木」は、形態のイメージが先行するため、建築形態のヴァリエーションは無数に広がる。それだけに当初、「遊戯性」の問題として出発した「積木」も、いつの間にか、形態操作のみに追われる危険性をはらんでいた。つまり、自分で仕掛けた罠に自分がかかるといったしばりがみえてきた。
ひとりの建築家によってつくられる作品が、時期によって大きな違いを見せることが一見あり得ても、ある定められた枠組みの中で微細な差であるに過ぎないだろう。この「積木」のコンセプトも重層的な変化をともないながら、新たなテーマにズレこんでいくにちがいない。

No. s-51　コミュニティ施設を木造でつくる ――木造建築3題
――納賀雄嗣／一色建築設計事務所，　sk8506

［連作名］豊里町の木造建築

ここで言及するまでもなく、かつての日本建築は木造建築によって支えられてきた。しかし、今日、木造による公共、大規模建築はその影をひそめ、山奥の過疎地に計画される小学校ですらコンクリート造で建て替えられるようになってしまった。・・・
15年間にわたって滞米生活をおくり多様な木造建築空間を日常生活空間の一部として体験してきた僕にとって、今日の日本の非木造化の傾向は信じ難いことである。今日、欧米では木造建築の耐久、耐火性が科学的に証明され、木造建築による巨大な室内競技場、数階建てのオフィスビルなどが他の工作に比べ経済面においても優位に建設されている。にもかかわらず日本では近代化、都市の不燃化といったスローガンに加え、木は腐る、燃えるからだめだという木造建築に対する諦めが通念化し、なんら技術革新を果たすことなく今日に至ってしまったように思えてならない。・・・
豊里町の一連のプロジェクトには、僕たちの木造建築への思い入れと問題意識とが反映されている。
今回のプロジェクトでは、「宿舎あかまつ」、「町民センター」、「昆虫館」、「バッハの森コミュニティーセンター」はいずれも公共建築物である。したがって、おのおのの空間構成は、施設の用途によって異なる。計画に取り組むにあたり、僕たちは、おのおのの施設に適した木構法を検討することにした。つまり、適材適所におのおのの構法の特徴を生かし、求められる空間に対応させようという試みである。その結果として、集成材を活用した構法、在来、2×4、ヘヴィティンバー工法などが採用されることになった。
こうした一連のプロジェクトを通して、豊里町では“木のまちづくり構想”という概念が芽ばえつつある。われわれは全国各地にこうした試みが広がっていくことを願っている。

バッハの森コミュニティーセンター

町民センター＋宿舎あかまつ

昆虫館ファーブル

No. s-52　ロビンソン・クルーソーの家づくり ――石山修武，　jt8610

［連作名］**コルゲートパイプ**

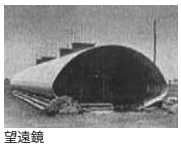
昔は、そんなに遠くはない昔なのだけれど、自分の家は自分で建てた。・・・近隣共同体が崩壊することなく、結と呼ばれ、専門職としての大工や職人と生活者とがまだ明確なかたちでは分離もせず、生活者がそのまま職人でもあり得る良き時代であった。人々は、その手の中にまだいろいろな能力を秘めていた。自分の生活用具は自分でつくり、当然のように自分で手直しした。生活用具の最大のモノである家も自分でつくった。つくろうとするのが当たり前であった。生活者の手には、ある種の全体性が宿っていたのである。手の中に宇宙を生成することがあったのだ。別のいいかたをするならば、技術が人間の手から遠く離れることなく、等身大に人間と付き合っていたのである。現在、人は、家だけでなく日常生活に必要な道具すべてを買う。自分でつくろうとする人はいない。・・・
売買される商品の最大級のものが家だ。みんな家は買うものだ、売るものだと考えている。自分でつくろうとする者はどこかにいなくなってしまったのだ。だから、家は商品としての家を演技することになる。・・・町の住宅展示場や大新聞の広告のページを埋め尽す体の家の像がそれだ。・・・つまり、現在家というのは、実体を失いさまざま像の中に解体し虚像の群れになっている。人々は、実体としての家に住んでいるのではないく、虚像としての家らしさに囲まれて暮らしているのだ。

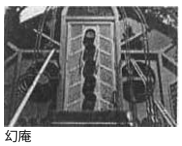
正橋孝一さんと私が建てた菅平高原の農家は、・・・自分の家を自分でつくろうとしない時代へ投げかけた小石だ。

孝一さんが私のところに現れた頃、すでに私はいくつかのコルゲートパイプを主材料とした家をつくっていた。愛知県と長野県の県境、山の斜面に埋め込んでしまった「治部坂キャビン」、「川越の家」、渥美半島の長いパイプのショウルームなどである。また、それらの数倍もある計画案も作成していた。今振り返ってもドッキリするような過激なモノたちであった。「幻庵」もちょうど出来上がった頃だった。それは短期間のうちにコルゲートパイプでできることを突きつめてしまった頃だった。・・・［ここの部分は kb8610 の設計論も参考にしている］

正橋孝一さんの家、それをいささかの感慨を込めて「開拓者の家」と呼ぶが、この家は、工業化時代の小屋づくりへの夢想を暗示している。・・・
・・・今度のこの家を、一家は工業製品の森を使うことによってつくった。自然の木ならぬ工業の木、工業の恵みとしての鉄製部品やゴムやガラスを使ってつくった。周囲の身近な自然が豊かな生産力をもたなくなったので、より広く、社会の豊かな生産力、すなわち工業製品の森を使ったのだ。

治部坂キャビン


望遠鏡


幻庵

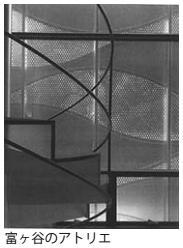
開拓者の家

No. s-53　論文タイトルなし ――長谷川逸子，　sk8611

［連作名］**パンチングメタルのスクリーン**

このごろ私が東京のまち中に設計したものとして、中野区中央の賃貸住宅― NC ハウス―と文京区湯島の事務所― BY ハウス―がある。このふたつの建物は本体がコンクリート造であるが、その外側をアルミパンチングメタルのシースルーのスクリーンでパッケージしたものだ。
ビル化によって都市が硬質化してゆく中にあって、この半透明な薄膜を導入することで建築の内と外の関係を薄く軽く隔てるものにすると同時に、その薄膜が自然光を受け春夏秋冬、終日変化するさまや、パンチングメタルがつくる強い光のシャワーやメタリックでもっと透明な風音で新しいもうひとつの自然を感じさせる風景をつくろうとしてきた。そうしてこの周辺の界隈づくりの一部としてファサードが機能し、その建物の一画は突き抜けるような明るさと、さわやかさを提供するよう期待してきた。

前々から私が自然のイメージを建築家しているのは、建築的高技術的な細部による自然と宇宙の描写と同時に、自然的宇宙的細部による建築の描写によって、現代を生きる自由な世界観を表明したかったからだ。こうしたこれまでの建築の考え方の延長線上にこの富ヶ谷のアトリエもある。・・・道路側のファサードにはコンクリートの本体にもう一枚のアルミ板とアルミパンチングメタルを雲形に切り抜いたものを繰り返した薄膜を重ねた。ひとつの面に組み込まれたパンチングメタルのシースルーの部分が内部と外部の微妙な明るさの変化の中で動き、さらに


富ヶ谷のアトリエ

周辺の気配や空の色を表面に映すというアルミの特性が重なり、不思議な光景をつくり出している。

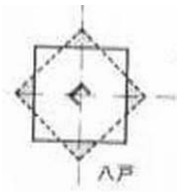
No. s-54　3 つの図書館と幾何学――岡田新一，　sk8703

［連作名］幾何図形平面の図書館

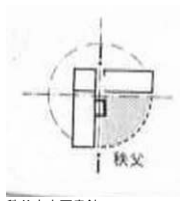
３つの図書館の平面は幾何図形を複合させた構成をとっている。八戸市立図書館はふたつの正方形を、中心を軸として 45 度ずらせている［ママ］。秩父市立図書館は 1/4 円の中心点にふたつの扁平な長方形を交わらせている。藤沢市総合市民図書館は大きな四辺形の辺のひとつに対して円弧を欠き込ませ、その交わるあたりに焦点を形成している。・・・図形の中心点は、市民が図書館を自由に活用し、情報を得るためのさ＾ビス拠点としての役割をもつメインデスクの存在を象徴する。・・・

それぞれの図書館において、幾何図形が複合して相関する部分に空間の特定化がみられるわけであるが、そのような空間は共通してよりパブリックな空間を特定しているわけである。藤沢や秩父のふたつの出入口を結ぶストリートならびにそれにまつわるパブリック空間などもその一例である。

幾何学は古くは建築の構造を支える基本的な学問であり、ひいては幾何学にひそむ美的感覚が建築の秩序、均整、整律などの美的要素を支配すると考えられていた。このような古い時代の建築に較べると、現代建築の構築方法は比較にならないほど自由であり、いわば何でもこなせる時代が到来している。現代建築の表現が百花繚乱の有様も、このような技術を背景にしてのことである。その中にあって、３つの図書館で用いた幾何学は、構造規範に代わる規範を３つの建築の中に持ち込もうとしたものであった。



八戸市立図書館



秩父市立図書館

藤沢市総合市民図書館

No. s-55　論文タイトルなし――大杉喜彦，　sk8703

［連作名］INDEX

この数年、僕の設計にコンクリート打放し（不透過壁）とガラスブロック（透過壁）を組み合わせた建築が多くなった。・・・ガラスブロックを透過した光は、自分の周辺部分全体、いい替えれば環境を自分のものとして支配してしまう。・・・

INDEX（指標）も今回で３作目である。指標にならんがための象徴か、象徴にならんがための指標か、INDEX は周辺の環境に対して責任の持てる範囲での分節化をとなえてきた。・・・都市における連続可能な要因は無に等しいように思える。分節性によって外界の混沌とした状況と対立し、なおその感情の動揺をある種の象徴空間をつくれる透過壁で表現したのも今回の建築である。

THE INDEX

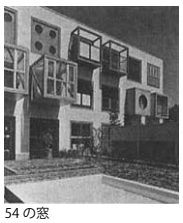
コマバ・インデックス

初台インデックス

No. s-56　54 の柱 ――石井和紘，　sk8704

［連作名］**54**

この建築は､私の「部分の増幅」のテーマ展開の中では「柱シリーズ」に入るものだ。建築の部分への私たちの思い入れの再点検は、すでに与えられたものとして存在している近代建築の機能追求からつくられた全体像が、ややもすると安易に固定してしまっていることへの批判からスタートしたものだった。
部分はまず独立して存在するものであり、その名称が歴史を通じて与えられていることは、機能とともに大切なことである。それを梃子として、部分の領域を私なりに拡大しまだ見ぬ全体像への手掛りとしようと考えた。
「窓シリーズ」としての「54 の窓」､「屋根シリーズ」としての「54 の屋根」などを継ぐ「柱シリーズ」である。


54 の窓

54 の屋根

54 の柱

No. s-57　コンクリート・ブロック造の住宅 3 題
――圓山彬雄，　jt8705

［連作名］**コンクリート・ブロック造の住宅**

コンクリート・ブロック造の家をつくり始めたのは、10 年前、自宅をつくったときである。・・・安くて、頑丈で、金融公庫の返済金も少ない。いいことずくめだからと家人を納得させて計画が始まった。

しかし、外断熱の予算もなく、出窓も削られ、ついにブロック一重積みの内断熱の家で諦めることとなったが、これが失敗であった。・・・外壁をブロック素地のままとしたことが、いっそう結果を悪くした。
素地のままのブロックは十分に水を吸い込む。ブロックに浸み込んだ雨水は風によって内側に押し込まれながら、ブロックの壁体を次第に濡らしていく。・・・少しずつ室内側に進んできて、室内に浸み出してくる。・・・風向きによって二次雨水の出る場所が異なるので、雨漏りを受けるポリバケツの位置も異なる。・・・ブロック一重積みの建物は住まいではない、外断熱したもの以外は、ブロックの住宅とは呼んではいけないと確信したのである。

それから 4 年ほどして、ブロック造のモデル住宅をつくった。ブロックを生産販売している人たちの協会、北海道建材ブロック協会が中心になって、ブロック建築の普及促進を図るために、モデル住宅をつくることになったのである。・・・
モデル住宅は、当然外断熱の二重壁構法であり、開口部は気密性の高い木製サッシュでペアガラスとして、熱負荷を極めて少ないものとした。・・・

私も、モデル住宅をつくった翌年あたりから、年に 1、2 軒のペースで二重壁構法のブロックの住宅を建ててきて､今年は自宅から数えて 10 軒目を計画している。火山灰地の北海道には、ブロックの原料である火山礫は無尽蔵にあり、一道一品の商品としてブロックの住宅をつくるべきであると 10 年近く叫んできたのが効を奏してか［効はママ］、次第にブロックの住宅を建てる人が増えてきた。・・・

須見邸

松本邸

高柳邸

No. s-58　設計作業日誌 77/88　私的建築計画学として
――山本理顕，　kb8808

［連作名］**ルーフ**

実際の建築で屋根が機能から切り離されて、ただ空中に浮かんでいるような見えがかりになったのは、「GAZEBO」からである。そして面白いことに、ただ機能から切り離されるというたったそれだけのことで、途端に屋根が違うものに見えてくる。むしろ、意味ありげに見えるのである。その下にある空間との関係が、逆によく見えてくるような感じなのである。屋根というただの覆いが、それだけで空間を秩序立てる力がある、というのは確かなことらしいのだ。秩序というのは、単純に、その屋根の下の空間を“一つのもの”としてまとめ上げている、といった程度の意味である。その屋根の下に、どんなにばらんばらんに無関係な機能が詰め込まれていても、あるいはさまざまな形が散在していても、それらを一挙に秩序立てて“一つのもの”にまとめ上げてしまう。たった一つの屋根という覆いが、である。
機能とは全く関係のない、覆い〈屋根〉だけをつくった。「ROTUNDA」の屋根は

ROTUNDA

HAMLET

「GAZEBO」よりも、もっと遥かに高いところに舞い上がっていって、秩序だけを指示する一種の指示装置のように、ついになってしまった。
・・・今回の「HAMLET」も、・・・こっちは少しは〈屋根〉の効果なり、鉄骨の納まりなり、扱い方が判ってきた。屋根にしろ鉄骨にしろ、だんだん規模が大きくなってはきても、三度目である。・・・それと、ここに住む人たちの住み方が、今や、極めて特異な住み方に依存して、空間の配列が決められている。彼らの住み方を明瞭にするだけで、それだけで空間の配列がほとんど自動的に決められたような感じなのである。・・・
この微妙な空間の配列を、〈屋根〉が一挙に秩序づけているのである。この屋根のために、屋根の下のすべての空きも隙間も、浮遊しているような箱も、地形のような居住部分も、すべてが関連しているように見えるのではないかと思う。微妙な空間の配列を“一つの建築”にしているのは、ただ、ひとえに、この〈屋根〉の効力によってなのである。

「GAZEBO」から「HAMLET」まで、似たような素材、似たようなやり方をやって、少しはこつのようのものが判った気もする。ゲシュタルトとしての像から、なまなましい建築のところへ飛び越える、その飛び方のこつである。誰だって知っていることを、今頃になって知ったという感じで、どうも、いつも人より 50 歩ぐらい遅れる。
「HAMLET」を見ても、こつが判ったにしては、まだ多少図式的なのだ。
50 歩ぐらい遅れるのも、まだどこか図式的なのも、自分じゃ良く判っている。でも、最低限、自分で考えてきたという自負も少しある。そのために図式的になるなら、それに遅れるのが 50 歩程度ですむなら、これからも多分、自前の論理でやりくりしていくんじゃないかと思う。

No. s-59　異化する――安藤忠雄，　sk8810

［連作名］都市のアルコーブ

この「ガレリア・アッカ」のような商業建築では・・・無表情な街路の表層を切り裂くことによって街を異化してみようというのが、その試みである。
じつはこの試みにはこれまでの私の作業の中にすでにいくつかの先例がある。すなわちたとえば「ステップ」であり、たとえば「フェスティバル」である。そこでは、街に対して一見閉鎖しているように見えながらも、内部に垂直方向のヴォイドを導入することによって、建築に固有の内部風景を創出せしめ都市の中のアルコーブとしての性格を宿さしめる。そしてその結果、一見自己完結的に見えた建築は逆説的に街と関わっていくのである。
「ステップ」の場合は商店街に直角に挿入された３つの階段が、そして「フェスティバル」の場合は建築自体の明確な秩序を刻むフレームに彫り込まれた吹抜けと道空間が垂直方向の動きを視覚化し、建物内部に具体化された界隈空間が街―敷地―建物という常識的に閉塞した関係を裏切って開放されていった。
まったく同じようにこの「ガレリア・アッカ」においても、垂直方向に視覚化されたヴォイドの空間が、一見こじんまりと街路をささやかに佇んでいるかに見える建物をその内部において裏切り、圧倒的な非日常性を現出しようとする。さらにここでは道空間はまさにピラネージ的迷宮となって、訪問者に幻惑的な異化効果を与えるに違いない。

ガレリア・アッカ

No. s-60　INTERIOR LANDSCAPE ――早川邦彦，　sk8810

［連作名］INTERIOR LANDSCAPE

「NTT 渋谷 “The B”」、「INAX 土浦」、「松屋銀座コンフォート・ステーション」と、たて続けに主としてインテリアのリニューアルプロジェクトに関わることになった。・・・

今回のプロジェクトは、各建築構成要素を努めて等価値に並存させようとしてきた従来までの私のアプローチに、変更を促すものではなかった。つまり、家具のスケール、部屋のスケール、建物のスケールで発想を分節、分断化させるのではなく、同じシステムが、スケールをこえて反復し並存するという表現方法は、そのままこの３つのプロジェクトでも展開された。

［NTT 渋谷 “The B” の設計解説文］

黒い箱のなかに、この複合施設全体をサポートする諸機能を背後につつみこんだ、さまざまな形態と材質、色彩をもつ壁群が、勝手気ままな方向を向いて床から立ち上がる。・・・それらの重層する壁群が、いわばひとつの舞台背景ともなり、その前面（＝ステージ）に散財した装置化された家具群を中心にして、ショップパフォーマンスは展開される。

［INAX 土浦の設計解説文］

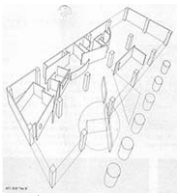
・・・具体的には、オフィス・デスクとして木質系の食卓のようなジャイアント・テーブル、木質を生かした事務機器、照明としての自然灯のコード・ペンダント方式、曲線、手仕事的なディテールの導入となってあらわれている。さらに、書斎的スケールをもつブース内での OA 機使用、湯沸室のキッチン化、男色のカラー・スキームと床材としてのカーペット、ユニット化された木質事務機器による住宅的スケールのコーナーづくりなど、材質やスケールなども含めて、極力住宅的な発想を浸透させるよう意図した。

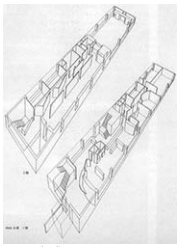
［松屋銀座コンフォート・ステーションの設計解説文］

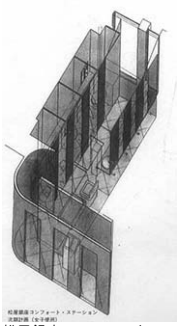
3F：・・・パステルカラーに塗り別けられた、さまざまな形態のブース、柔らかいヴォールト天井からの間接光、万華鏡のなかに入りこんだような効果を出すための鏡の多用、着替もできるブースやラウンジの導入など、従来までのトイレらしさを極力、「隠蔽」することに設計の主眼は置かれた。

2F：・・・従来は壁のなかに隠される小便器の配管や、自動節水装置も露出させ、給水、排水、排気、給気、電気などそれぞれの配管、ダクトに色彩を与え、利用者にトイレのメカニックが分かるようにしてある。さらに洗面器への配管も資格化させるため、ポリカーボネートの透明なカウンターを採用するなど、でき得る限りトイレのメカニックを視覚化する方針は貫かれている。

1F：・・・天井を切妻状にして、トップライトやトップサイドライトのガラス面から光が射し込み、ブースの上から緑が垂れ下がってくるのも、そのような意図によるものである。


NTT 渋谷 “The B”


INAX 土浦


松屋銀座コンフォート・ステーション［U］

No. s-61　“ 街の眼 ” から住宅見る ――早川邦彦，　jt8901

［連作名］成城の家

「成城・バス停前の家」、「成城・交差点の家」が建てられ、そして今回、その両者にはさまれた、「成城・Between」が完成し、３軒の住宅が街路に 30 数 m 面することになった。もともと、この真ん中の住宅まで設計するということは予想もしていなかっただけに、もし最終的にこのようなことになるとわかっていたら、「成城・バス停前の家」も「交差点の家」も、その設計は現在のような姿をとっていなかったかもしれない。自作のものとはいえ、相互への連結の意志を持たなかったものを、今回の住宅により相互の調停をつけ、街路に対し、ひとつの連続体として表現する、ということが課題のひとつになった。その第１作である「成城・バス停前の家」によって、この３つの住宅に共通する、重層する壁群とそこに穿たれた開口というモチーフは決められたといっていい。

・・・この考え方、つまり壁の持つ意味の二重性や重層性、開口への意識というものは、３つの住宅いずれにも共通することである。その名前が示すように、バスの停留所の前に位置する最初の住宅では、バスからの、そしてバスを待つ人々からの視線、発着時の騒音を遮断し、かつ光と風を招き入れるため、重層する壁と、そこに穿たれた開口がフィルターとなり、両者の相矛盾する条件を満たそうとしたものだった。そして、さらにそのような機能的な側面だけではなく、その表情

成城・バス停前の家

成城・交差点の家

成城・BETWEEN

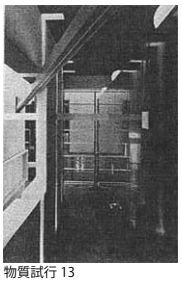
が街路に対し、閉じながら開く、という関係を表現しようとした。
同じ手法は、次の「成城・交差点の家」にも引き継がれていった。たさし、この住宅は交差するふたつの道路に面しているため、重層する壁群は、x 軸、y 軸の双方にわたっている。・・・
そして、さらにふたつの住宅と同じ試みは、3 軒目の「成城・between」にも続いていく。「バス停前の家」の 2 枚目の壁が引き出され、さらに「交差点の家」の 2 枚目の壁も同様に引き延ばされ、その間に、曲線や直線の壁が挿入される・・・

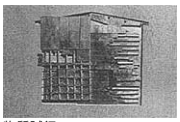
No. s-62　遅さの、沈黙の戦術を置くこと ――鈴木了二，　jt8904

［連作名］物質試行

「物質試行」は、どうも材料＝素材＝物質と受け取られ、僕たちの仕事が材料の使い方にのみこだわっているように思われたりするようである。もちろんそういう側面もあるかもしれないが、名付けた最初の動機は必ずしもそうではなかった。
「物質試行」は今から 16 年くらい前から始まった。そのころ、僕は建築を語るときに「空間」という言葉をひとつも使わないで語れないかと考えてみた。「空間」は、いってしまうと何かわかったような気分にさせてくれるが、実はなかなか手強い言葉なのだ。うまく定義できない。どうも抽象的すぎるように思われた。「空間」そのものを具体的に目で見るわけにはいかない。ポケットから取り出すわけにもいかない。そういうものなら、「気分」とか「雰囲気」とかいってもらったほうがよほどわかりやすい。また、「空間」という概念がウェーバー的な意味でどうやらバロック的近代の成立と関わっており、そこに恣意的に建築を操作しようとするような「人間」的意志が感じられ、うっとうしく思われた。
たとえば、何もない単なる倉庫のような箱型の部屋があるとする。これは「空間」としてはまったく面白くない。しかし、その部屋の形状はいっさい変えずに、その中に小さな、たとえばジャコメッティの彫刻のような力のあるものをひとつ置いただけで、その部屋中に緊張感がみなぎるようなことは十分あり得る。「空間」という言葉では、こういう現象をうまく説明できないように思った。では「物質」だったら説明できるかといえばそれも怪しいが、でも僕にとっては少なくとも「物質」のほうが具体的に考えやすいように思えた。
また作品のひとつひとつを「物質試行」の通し番号で名付けると、建築ばかりでなく、それ以外の仕事もすべて同列に置くことができる。やっていることがことごとく建築に集結していくなどとは思っていない。あくまで、それぞれ別個に、離散的でありたい。
少なくともその点に関しては、貢献してくれているネーミングだろう。

［以下、参考：物質試行 3 の言説、sk7702］
最近、建築的状況の中にふたつの傾向が一般化しつつあるように思われる。ひとつは修辞学的懐古的マニエリスム。もうひとつは物質を消去し去った時に空間が顕在化するという思考。われわれはそれに対し、それ以前の状況からそこに至った過程を含めて疑いを持ち続けている。歴史の漂いから拾い上げてはあしらう修辞法は無意味な知的操作の繰返しに思えてならないし、物質を消し去った後に残るものは，果たせなかった空間支配欲のみではないだろうか。そしれ、それは観念によってつくられた最後の虚構と非在の状態ではないかと。
・・・われわれはそのような虚構と非在にまったく頼ることができず、唯一の具体的実体、すなわち物質に傾斜していった。

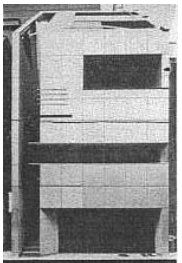

物質試行 13


物質試行 14

物質試行 20

物質試行 17

物質試行 25


物質試行 22

物質試行 26

No. s-63　街路に開かれた集合住宅 ――早川邦彦，　sk8908

［連作名］**集合住宅**

「ラビリンス」は、「アトリウム」、「ステップス」に続く、私にとって３つ目に当たる賃貸の集合住宅になる。したがって、前２作で展開されたヴォキャブラリーが今回にも持ち込まれた部分も少なくない。しかし、いずれの場合にも共通しているのは、共有領域への関心にある。つまり、住戸という私的領域と、共有領域がどのような関係をもつのか、そして一方、外に向かっては、その共有領域が、もうひとつ共有度のランクが高い街路とどう関わっていくのか、ということになる。前者は、集まって住むという形式を成立させる磁場を発生させるものとなる。そして後者は、集合住宅が、街に対しいかに公共性をもっていくのか、ということにいい換えてもいいだろう。

・・・「ラビリンス」は「アトリウム」と比べ、街路に対して視覚的には、より開かれている。したがって、「アトリウム」ではその共有領域が周辺から独立した、完結した風景をつくるのに対し、「ラビリンス」では、街路や住宅地の風景がそこに飛び込んでくる。・・・異なったレベルをもつ立体的な共有領域は、「アトリウム」での〈たたずむ〉場ではなく、通抜けという機能も含めて、〈動き〉を誘発する、アーバン・パークとしてイメージした。・・・

・・・都市の中の集合住宅は、住み手の側の世界に対し開かれたものでなければならない、と思っている。

［参考：ステップスの論説、jt8708］

ステップスはアトリウムの立体版として設計された。したがって、「アトリウム」で意図されたことが、ここでも反復されていることになる。

集合住宅というとき、“ プライヴァシー ” という言葉がすぐに思い浮かぶ。集まって住むのが集合住宅である以上、そこには当然、各住戸である私的領域と、それを支える共有領域が存在するわけだが、“ プライヴァシー ” という言葉は、私的領域同志の、そしてまた私的領域と共有領域との間に発生する “ 視線と騒音の侵入の配慮 ” を意味すると考えてよいだろう。・・・そしてプライヴァシーは確保されるべきであるというのが、今までの集合住宅の規範であった。

しかし、騒音は別として、相互の視線を一義的に遮断しようとするより、適度に “ 見る――見られる ” という関係が発生するのは悪いことではないと思っている。いや、それ以上にそのような関係は逆に望ましいとさえ感じている。私的領域での生活の気配が共有領域へ適度に発信され、同時に共有領域から私的領域の一端が垣間見られるという状況が発生してこそ、集まって住む集合住宅の集合住宅たる所以なのではないだろうか。われわれの生活が “ 演技化 ” していると指摘される現在、適度に “ 見る――見られる ” という関係は、都市の集合住宅に必要とされる要素だと思う。・・・

・・・従来の集合住宅のアプローチはいかにも味気ない。路地＝道路から、各住戸への扉に至までの空間が、演劇的（ドラマティック）であり、祝祭的であるほど、住戸という私的領域が “ 私的 ” として浮かび上がってくるのではないだろうか。それは共有領域の重視ということにほかならない。・・・「アトリウム」を発表したこと際に添えた文面でも触れたことであるが、“ 集まって住む ” 場で重要なのは、各住戸内の空間にあるというよりはむしろ、それらによって切り残された部分、すなわち共有領域にあるといってよい。そしてその共有領域は、もうひとつの共有度のヒエラルキーが高い街路との関わり合いを同時に持つ。集合住宅の共有領域が街路＝都市に対してどう関係するのか、そして一方、内に向かっては、私的領域にどう関わっていくのかという両面性が、都市の集合住宅の大切な点であるように思われる。「ステップス」と「アトリウム」ではこの点に関し、共有領域は、街路 = 都市と私的領域に対して ” 閉じながら開く ” または ” 開きながら閉じる ” という関係をとっている。

アトリウム

ラビリンス

ステップス

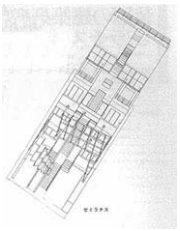
No. s-64　装飾の断面 ――装冠の建築について ――久保清一，　jt8912

［連作名］装冠の建築

「装冠の建築」と銘打った作品も、ちょうど今回で 10 作目になります。・・・
「装冠の建築」とは、単純に言えば、装飾を冠にいただく建築のことです。「建築は、限りなく装飾的でありたい。」という、私の建築理念を表明したものと、ご理解してください。・・・
・・・装飾は、人類史上、もっとも長くこの世に存在する、まさに表現の本質、起源にせまる人の手の跡なのです。この装飾のエネルギーを、現代建築に回復させたい、このことが装冠の建築の、そして私の建築の理念になっているのです。

そこで私が考えるところの装冠の建築の作法ですが、それはオーナメントでもストイックでも、そのこと自体はあまり問題としていません。今まで本体の価値を高めるためにあるとされた装飾は、独立した美的価値を有するものとして、本体とは別にその存在が認められる場合もありますし、また正反対に装飾のない建築にも装飾性は存在すると判断しています。・・・
このようにセミラチス［装冠の建築Ⅸ］とＫペアハウス［装冠の建築Ｘ］は、建築の表層において、異なる手段で装飾を用いてますが、それとは別に、この両者の間には共通の装飾意欲が挿入されています。それは都市装飾としてのヴァナキュラーな現代建築の構築の試みです。・・・

装飾をテーマとする建築――装冠の建築は、時代様式の力を借りて人の記憶を呼び起こす建築とはちょっと違います。タランティズモの発想とでもいいましょうか。装飾の中にある神秘性や不思議な感覚、ヴァナキュラーな香り、柔らかさ、暖かさ、そして興奮。それら装飾の本質を形成する芸術意欲の表出そのものに主眼を置くことで、ヒューマニズムを回復させることができる建築を目指すこと、そこにコンセプトを持っています。モダニズムの建築は、装飾を捨て去りました。何もないことが純粋で健康な美であると、装飾を罪悪視しています。しかし、レス（less）の世界がアブストラクト・アートとしての建築の表現領域を硬化させるのに相反して、装飾の世界は、躍動的で、自由な、そしてさらには時代のコンテクストを育むメンタルな世界を発展させます。装飾を時代の範疇から一度解きほぐして考えることが、大切なような気がします。


装冠の建築Ⅸ

装冠の建築Ｘ

No. s-65　場の意味と軸の規定 ――村上美奈子，　jt9001

［連作名］軸

建築の設計を始めようとして敷地図を見ているとき、そこにいくつかのグリットの置き方を考えます。実際のところグリットの方向を規定する軸は無数にあるともいえます。軸にはそれぞれに違った意味があります。多様な軸の中からどの軸を選ぶかとういことは、なぜその軸を選ぶかという意味づけによって、選択した結果の価値が定まるといえます。

敷地境界線のような敷地固有の条件から生じる軸を「生活の軸」とよびたいと思います。「生活の軸」は、境界線の影響で考えられる軸のほかに、建築を規制する法律の適用から生じる軸があります。・・・

敷地を通っている軸には、その土地固有のものに加えて、都市の空間を規定している軸があります。それらの軸には、地形や風土の条件によるもの、宿場町や、門前町、城下町のように都市の発生過程を条件とするものなどがあります。地形や風土の条件によるものを「地理的な軸」とよびたいと思います。

３つ目の分類としてあげる軸は、都市の空間を規定する軸であある場合と、敷地固有の空間を規定する軸である場合とがあります。それは「宗教や思想の軸」です。日本で家を建てる際、現在でも根強く残っている家相に規定される軸に、設計者はよく悩まされます。宗教建築の建物の向きや軸線は、宗教独自の信仰上の意味付けがされた軸です。・・・
思想的なものとしては、問うようでは歴史的に見ると中国の「陰陽学」が、都市や建築の計画学としての思想的背景となり、おおきな影響力を持っていたといえます。・・・

以上述べたように大きく３つに分類される軸が、敷地にはいろいろな方向で通っ

WAVE

3:4:5

Tan-10.2

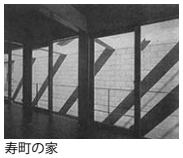
ています。その中からどの軸を選ぶかということが空間の意味を規定するという点から非常に重要です。・・・

建築空間と都市空間との間に自然な関係を作り出すには、都市空間を規定している軸を建築空間を規定する軸に選ぶことが重要です。敷地の中だけの空間を意識し、軸をひとつに絞ることを考えると、「生活の軸」の規定のほうが優先性が強く、結果として都市空間になじまない建築空間となってしまうことになります。
そこで複数の軸を選んでみます。複数の意味のある空間を集約できることになり、そしてそのことによって、ずれたグリッドを用いて空間を構成してみます。たとえば、土地利用効果を考えた軸と都市空間を意識した軸との両方の選択は、それぞれの場の意味を規定する軸の持つ空間的効果をあげることができるのです。
WAVE では、敷地境界が規定する軸と、旧環状 7 号線沿いの敷地周辺の隣接建物が規定する軸とを選んでいます。・・・この中にあるふたつの軸のずれに空間的な関連性を持たせ、ずれを隠すことなく生かすような構成として WAVE 状の曲線が生まれてきました。・・・
昨年 4 月号で発表した 3：4：5 の家では、敷地境界線の規定する「生活の軸」と南北の方位の規定する「地理的な軸」とのふたつによって構成しています。ふたつの軸の関係は直角三角形（3：4：5）となっています。・・・
Tan-10.2 では、道路と敷地境界とが規定する軸と、八ヶ岳山頂から山脈に沿った沢の方向が規定する軸を選んでいます。水の流れが示す山の保傾斜面に沿った軸は、山の頂上を意識させます。道路の軸とはわずかに約 11.3 度（tan θ -10.2）ずれている・・・
以上のようにひとつの敷地におけるふたつの軸の規定は、ふたつのずれたグリッドによって空間を構成することになりますが、そのうちのいずれかが都市空間、あるいは周辺の環境を規定する軸の選定とすれば、都市空間あるいは周辺の環境に豊かな空間性をつくり出す可能性があることになります。また都市空間を規定する軸と、敷地固有の軸との混合は、建築にその存在と計画上のリアリティを表現できることにもなります。

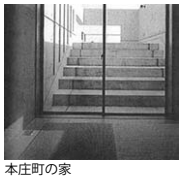
No. s-66　自然・素材・建築――竹原義二，　jt9002

［連作名］自然との融合

私は、建築空間をつくるときの出発点に、まず素材を考える。建築体の中に自然を感受するための手掛りがそこにある、と考えるからである。そして、コンクリート、コンクリートブロック、漆喰、石、木、紙をもって、自然の表現操作のためのモチーフとしてる。これらのうちどれを使うか、その選択には特にこだわりはない。ただ、それは「場所」を見極めた上で、決定されなければならないと考えている。・・・
そして、私は、その場所にあって、壁が強く存在する表現に意義を見出している。建築が壁によって場を囲い取り、自立するときに、その壁の美しさは、素材そのものが空間構成の表現になることにあると思う。このとき、素材は、作品の単なる意味付けといったものではなく、そのまま感覚に訴えるものになるであろう。
自然を感受することが困難になっている現代の都市の中で、このような素材による建築という作為を介することで、自然との関わりを保ち続けることができるのではないだろうか。私の狙いは、自然と融合することのできる空間を、「場」を通して見極めた上で、新たに構築することにある。
今回の 3 つの住宅は、空間的には、「内に向かう」、「内と外に向かう」、「外に向かう」の 3 種の手法により、自然とのかかわりを求めようとした。いずれも中庭を自然との接点として捉えている。そして選ばれた素材は、コンクリートブロック、漆喰、石、コンクリート打放しと、それぞれ異なっている。


寿町の家

千里山の家


本庄町の家

［参考：以下各作品の設計解説］
ここでは内部から施工可能な型枠コンクリートブロック構造で成立させた。・・・ここは、いわば内でもあり外でもあるという意味での、内と外の共有の場となっている。・・・外壁は、表面がざらざらした粗い壁の中に、庵治石の石積みを組み込んだ。・・・この中庭を通して、生活と自然のかかわりが生じ、建築と自然が一体化する。・・・開かれた中庭はステージと一体となった屋外席として、上昇感のある空間を意識させ、階段を持つが異質として囲い込んだ 2 回和室に続くテラスも、室内の延長してのステージとなる。内と外の関係を、ここではあくまで相関的なものとして捉えようとしたものである。

No. s-67　光のワイドレシーヴァー ――原広司，　sk9003

［連作名］**光のレシーヴァー**

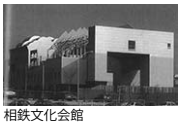
ここに紹介するふたつの建物と３つのプロジェクトは、大きさや立地条件などにおいてそれぞれに異なっているが、ひとつの共通した性格をもっている。それは、いずれも自然光の受け止め方を考えて設計されているという点である。いわば、建物は〈光のレシーヴァー〉として計画してある。

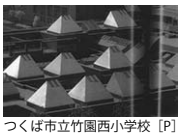
建物の内部の空間の状態をつくる方法上の概念としては、すでに〈光のミキサー〉といってきた。これは、光をさまざまの角度、フィルターなどを通して室内にとり込み、建物の外部とは異なった光の状態、つまりある種の様相をつくり出す具体的な方法である。「田崎美術館」「ヤマトインターナショナル」「飯田市美術館」と続いてきた建物も、できるだけそうした〈光のミキサー〉としての性格をもたせてきたつもりではある。これらの建物は、同時に、光を受け止める装置として設計されてもいた。そして、ここに紹介する建物も、光の受け手としての建築の展開である。

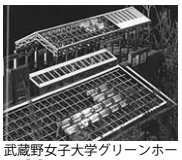
光を受け止める方法には、いろいろな建築的手法がある。・・・完工が間近になっているつくば市の「竹園西小学校」のプロジェクトである。ガリヴァリウム鋼板の傾斜面を適当に配置して、光のレシーヴァーを用意した。「武蔵野女子大学付属幼稚園」のプロジェクトは、同様な屋根の仕組になっているが、光を受ける面を逆３角形にしている。同大学の「グリーンホール」も近々完成するが、この場合は、トラスでガラス面を受け、湾曲したガラスを混ぜることによって、このガラス面を波立たせている。また、ガラス屋根が視覚的に重なるように置いてあるので、光のレシーヴァーとしてどのような効果を上げるのか、予測できない部分もある。

「相鉄文化会館」では、機能論をもって説明しにくい６枚の羽根が建物の表現を決めている。この羽根は、まさに光を受けるための働きだけのために置かれている。・・・

「BEEB」の場合は、ファサードがレシーヴァーの装置である。・・・


相鉄文化会館


つくば市立竹園西小学校［P］


武蔵野女子大学グリーンホール［P］

BEEB

No. s-68　プラットホーム ――妹島和世，　jt9007

［連作名］**PLATFORM**

形態的にも名前の由来である駅のプラットホームを連想させるⅠに対して、Ⅱ、Ⅲを同様に PLATFORM においてと呼ぶのは多少無理があるかもしれない。これらの３つの計画は、プログラム・規模などさまざまな違いがあるし、各々が、その時の試みを併せ持つ。しかし、Ⅱ, Ⅲにおいてもテーマとなったことは、Ⅰにおいて考えた、「場をどうやってつくるか」ということの展開であったし、その結果現れた「場」は、同質のものであったと思われる。

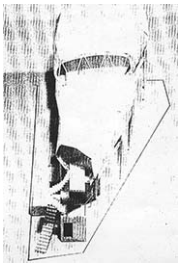
以前Ⅰにおいて、私は次のように書いている。

「私たちの行為は連続している。…今私は、建築を、とぎれとぎれに続いていく行為とラップさせたいと思っている。行為と場が重なった瞬間ヴォリュームが生まれ、ある輪郭が可視化される。…そして行為が通り過ぎた後は、再び静かな〈場〉にたちかえり、音もなく呼吸を続ける。…今の私にとって建築をつくるということは、上記した可能性を持つ場をつくることである」

行為とラップする場、すなわち私が PLATFORM と呼ぶ場をつくるということは、物理的に建物を計画する過程においては、何がそういう場を生み出すかという問題になる。わたしはそれは架構ではないかと思っている。３つの建物はすべて、まず建物を組み立てる架構から考え始められた。・・・架構ががスタディされ、ある領域が設定され、結果として、ある平面、断面が現れたということである。平面、断面がないところから架構を考えるのであるから、それは当然、はじめから存在する全体をつくり上げる質の架構ではない。そこでとられたのは、ひとつの小さな完結した架構がつながって、より大きな架構になるという方法である。さらに、ひとつの単位ともいえる完結した架構は、たとえばスペースフレームのように、具体的な機能から切り離されたものではない。そこに行為という視線の接点がある。

PLATFORM Ⅰ

PLATFORM Ⅱ


PLATFORM Ⅲ

No. s-69　宙吊りの幾何学 ――宮崎好彰，　jt9011

［連作名］**ジャンクション和接合**

1988 年の夏、「CAT'S EYE」と同時に「TRIANGLE」と「I・S GASTEM」の計画が進められていた。これらの計画は、いくつかの幾何学形態を組み合わせる手法が採られている。形態を組み合わせることは、その形態のぶつかり合う点で空間が変換するジャンクション和接合というキーが入り込むことになる。当然ながらその接合点をどう扱うかが問題になってくるわけで、それによって形態相互の関係に緊張感を持たせたり、逆に自然な回遊性をつくり出すことが可能になるのである。

「CAT'S EYE」の場合、３つのボリュームの組合せは、内部においてはふたつのブロックとその間の緩衝地帯という明快な分かれ方をし、立面においても形はそのまま反映される。お互いの関係は相互に介入するわけでもなく、部屋として異なった扱いをとるが、ただ形態を組み合わせることによって生じるジレンマのようなものが、全体のリズムをつくり出すようになっている。・・・

「TRIANGLE」では、平面において長方形と三角形を組み合わせている。・・・長方形と三角形のブロックの接戦は、ガラスによって透過され、いわゆるブランクを設けることによって、「CAT'S EYE」のような具体的な緩衝地帯としてのブロックを設けることなく、自然という外部環境が介入するように仕組まれている。・・・

「I・S GASTEM」では、各ブロックの平面形が立面に反映する点は、「CAT'E EYE」に共通しているが、大きく異なるのは住宅との規模の違いもあり、各階平面の形態のズレおよびズレを結ぶ階段室に見られるような円弧がエントランスホールに食い込むような形態相互の積極的な浸食作用を用いている点にある。・・・

前述の３つの建築は、その形態間の接合部での扱いは異なるものの、形態の組合せによって構成していく点では一致している。組み合わされる接合部で変化が生じるため、組み合わされる形態の個々の単位は、正方形、矩形、円弧といった普通の様相を持った、明快な形態が求められてくるのである。つまりわかりやすい見慣れた光景が、その置換えによって予想しなかったものに変化していき、そのズレが新鮮に感じられるように思われる。

そしてそのズレとは、ひとつの空間に停止して得られるものではなく、移動＝トランスという、シークエンスを通して感じられるものである。

普通の単位空間からなる構成であっても、その組合せや組替えによってゴリゴンシティーのように、新しい位相を生み出すことがある。・・・

TRIANGLE

CAT'S EYE

I・S GASTEM

No. s-70　木洩れ日のなかで ――相田武文，　sk9101

［連作名］**ゆらぎ**

解体され過ぎてしまった建築に魅力はない。建築には、やわらかな構築の道程が必要だと考えている。私の場合、これまで並置された壁の集積によって、やわらかな構造を組み立てることを試みてきた。それは " ゆらぎ " の建築というテーマのもとに発表してきたものなのだが、この「齋藤記念館」も同列に位置づけることができる。つまり、「梶原邸」、「風間邸」、「西園寺無量寿堂」、「GKD ビルディング」、「東京都戦没者霊苑」の作品は、平行系の壁を配置しながら、諸々の事象に交感してきたものとしてまとめることができる。「梶原邸」「風間邸」では、日本の風景の再生を試み、「西園寺無量寿堂」では、伝統的なスタイルと現代建築との位置づけについての相克があった。「GKD ビルディング」「東京都戦没者霊苑」では、都市および外部空間に対するやわらかな構造の挿入を試みたものである。

「芝浦工業大学齋藤記念館」は、芝浦工業大学機械工学第二学科の元教授である齋藤雄三先生の寄付によって建設されたものである。敷地は芝浦工業大学の大宮キャンパスにあり、郊外地としての雰囲気がまだ残っているところである。

大宮キャンパスは開設後、すでに 20 数年を経ており、この「齋藤記念館」もキャンパス全体の配置計画と関連して建設された。それゆえ、既存建物や前面広場との関係を考慮し、キャンパス全体の景観構成上の配慮も設計段階における重要な点であった。

［以下、参考：東京都戦没者霊苑、sk8811］

現代建築の多様性は衆知のとおりなのだが、・・・現代の多様性をそのまま単純に容認することはできない。ややもすると、それは固定化された焦点をもつ建築の集合化が一見多様に見えているに過ぎないと思えるからである。このような状況

梶原邸

風間邸

西園寺無量寿堂

東京都戦没者霊苑

芝浦工業大学齋藤記念館

の中で現在考えられることは、ゆれ動く焦点を建築の既成概念に導入することで、換言すれば建築の既定的な概念に微振動を与えることともいえる。そのキーワードとしての言葉が“ゆらぎ”であるが、これまでの「S 氏別邸」「梶原邸」「風間邸」「西園寺無量寿堂」「GKD ビルディング」は、この“ゆらぎ”の概念を通じて設計 s てきたものである。・・・
ここで、今日の建築の状況を考えるとき、その状況は多様化し、それなりの変遷を経ているのだが、表層的な形態の開発も飽和状態を示し、大枠では固定化した安定的な様相を呈しているといえよう。そのような状況の中に、ある振幅を有する新たな秩序を生み出す契機、つまり状況に微振動を与え振幅をもつ秩序を形成する誘因となる概念を“ゆらぎ”と考えている。

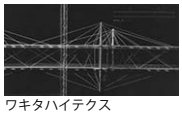
No. s-71　蝶の家に住む小児科医 ――葉祥栄，　sk9103

［連作名］緊張構造

「西部ガスミュージアム」、「ワキタハイテクス」、「松下クリニック」に続いた緊張構造のディテールは、木構造の緊結法が 3 段階にわたって改良・洗練され、結局ボルト、ナット、ワッシャーが消えてなくなったように、呆気ないほどのディティールに落ち着いた。木や、竹や、スチールと取り組んでみて、異質物を結合するインターフェイスのデザインの多様性が次第に収斂していく様は実に呆気ないほどだ。ガラスや、アルミをシリコンで柔らかく留めたり、柔らかい木と硬い鉄の間にエポキシを充填してめりこまないようにしたり、スチールロッドをピンで留めたり、試行錯誤の結果は今思うとコロンブスの卵のように他愛もない。

西部ガスミュージアム

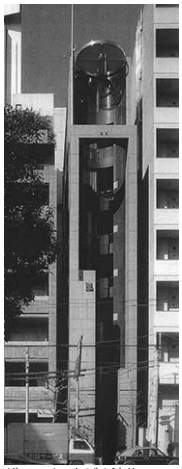
松下クリニック

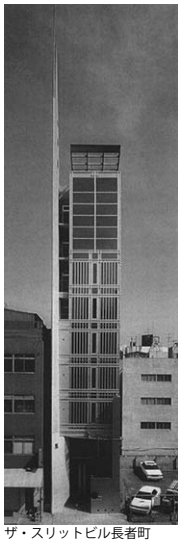

ワキタハイテクス

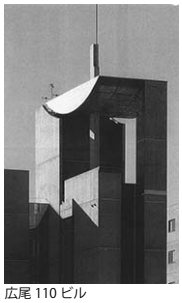
No. s-72　象徴化する ――中村弘道，　sk9104

［連作名］都市のシンボル

私は丹下健三都市・建築研究所時代の 1971 年から 17 年の間、都市的スケールで建築を捉えてきた。しかし東京の現状との落差の厳しさは想像の領域から逸脱している。こうした経験の中で東京を考えた場合、都市景観の中で建築を考えることが希薄で、行政も景観を重要視していない。敷地内のみ考えを巡らした建築が完成されていく。いわゆる都市設計の不在である。都市の中での建築をもっと進化させ刺激する意味で、地上にそびえ立つモニュメンタルな建築を都市に挿入していく手だてをもって、人間のもつ感性に訴えた状況をつくり出していくことを期待したい。ここで紹介する 3 つのプロジェクトはいずれもそうした観点を基本に据えて計画された。
ザ・スリットビル渋谷は・・・都市的観点から存在感のある強い形態と重厚な建築をもってくることが必要だと考え、巨大な直方体の石塊をイメージした。・・・
ザ・スリットビル長者町では、・・・直方体の建築を単純に置いたにすぎない。「長く垂直に伸びたコンクリートの側壁」は、削りとられたエッジを顕し、尖塔は空に突き刺さる。・・・
広尾 110 ビルは・・・外観は前面の石の重厚な刻み、楕円形の深窓、量感のあるコンクリート打放しと石を打ち込んだボーダー、屋上に軽く浮かぶ大庇、6m の高さのステンレスエッチングの大扉など、現状では発見できない街の一部として、道行く人びとに新鮮な印象と潤いを与えてくれることを期待して設計された。
このようにいずれもきわめて狭い敷地の中で、都市における建物は今まで以上にテクノロジー化し、日ごろ都会で見る雑多な風景として生産されていく。いまこれらの建築も雑多な一部として捕えられてしまうようにしろ、都市の風景の中にシンボル化された形態を挿入するという試みにより景観上の刺激を与え、美に対する意識を喚起させ、劣化する東京の風景に新しい明日を夢見させてくれるのではないかと期待しているのである。


ザ・スリットビル渋谷


ザ・スリットビル長者町


広尾 110 ビル

No. s-73　紙の建築――坂茂，　jt9106

［連作名］**紙管**

紙管は、さまざまな太さと厚み、エンドレスな長さのものが製作でき、再生紙を使っているので安価、ヴォリュームのわりに軽量で施工性もよい。中空部分を構造的、設備的に利用でき、断熱性もある。工業製品ゆえに性能が安定していて、防水や不燃化もできる。木のような温かな質感があり、紙管は“進化した木”だともいえる。

・・・初の“紙の建築（PTS=Paper Tube Structure）”となったのは、「水琴窟の東屋（‘89世界デザイン博覧会）」であった。紙管は、フジモリ産業製で直径 330mm、厚さ 15mm、長さ 4m、圧縮 31kg/㎠、引張り 71kg/㎠、曲げ 46kg/㎠のものを採用した。パラフィンで防水処理された 48 本の紙管をプレキャスト・コンクリート・ベースに差し込み円形に並べ、上端を木製コンプレッションリングにより一体化し、スポーク状に張ったテンション材で軸を吊り上げテント屋根を張った。・・・

市政 50 周年のイベントに、これからの小田原市発展の指標となるべくユニークなホールが欲しいと考えられ、折りから世界では森林伐採などの環境問題が深刻化し、そういう観点からも再生紙を使った PTS が、市長の興味を引いたのだろう。・・・屋根を鉄骨で支えたスペースフレームとし、その下の内外壁はすべて直径 53cm、厚さ 15mm、長さ 8m の紙管 305 本と、内部をトイレブースに使う直径 123cm、長さ 8m の紙管 18 本で空間を構成した。・・・

・・・今回は、紙管を圧縮材と考え中空を利用し中に鉄筋を通して、プレストレス形式とし、鉄筋ブレースを外に出した。・・・

PTS は、紙管の強度アップと恒久的に使う開発が必要であるが、・・・弱い材料を弱いなりに工夫し、それにあった形態をつくり出していくことも重要なのではないだろうか。

水琴窟の東屋

ときめき小田原メイン会場ホール

詩人の書庫

No. s-74　「ON AXIS-OFF AXIS」から「厳粛なる散逸」へ
――小林克弘，　sk9109

［連作名］**厳粛なる散逸**

今回発表する３つの作品は、一見した限りではまったく異なる建築表現を携えているという印象を与えるかもしれない。確かに、プログラム自体、それぞれの作品に関するコメントの中で述べたように、三者三様である。

・・・そして、それぞれの作品がもつ空間特性も大きく異なっている。

しかしながら、こうしたプログラム上の差異、空間特性上の差異、敬称上の差異にもかかわらず、これら３つの作品はある共通した構成手法の上に展開した作品群であると私は考えている。この見かけ上の差異に潜む類似性を、ここで明らかにしておきたい。それは簡潔にいうならば、秩序づけられた不整合、コントロールされた逸脱、厳粛なる逸脱、調整された破調、形式の中のズレといった言葉でいい表されるものである。

C-WEDGE や新潟の塔は、・・・秩序づけられた不整合、あるいは厳粛なる散逸といった構成手法を試みることとなった。・・・ル・クロワートルは、・・・敢えて厳粛なる散逸という手法を採用している。ここで、より具体的に「厳粛なる散逸」という言葉で意図している構成手法について原則的な考えを述べることにしよう。

1．自由な散逸ではなく、コントロールされた、あるいは秩序づけられた散逸を目指す。

勝手気ままな散逸――それは今日的な流行ではあるが――は表現の自由を獲得しているように見えても、実際はそうではない。自由とは、形式との葛藤、形式との闘争の中からのみ生まれるものである。・・・そうした形式として、今回の３作品では、正方形を基本とした平面構成秩序を採用している。・・・

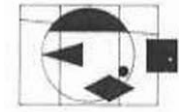
こうした正方形に基づく基本図形が根底に存在しているからこそ、さまざまな幾何学形態が分散的に配置されたとしても、でたらめな構成あるいは恣意的な構成を避けることができるのだ。それは、いうならば、でたらめに陥らぬための安全弁であり、建築構成の根本において、ある種の厳粛さ、厳格さを保証するものなのである。

2．表層の形態操作ではなく、ヴォリューム自体の造形を行う。

表層のデザインあるいは視覚的快楽に満ちた形象を用いるのではなく、ヴォリュームそのものがもつ根源的な力、生の力に頼るべきである。というのも、人間の感

C-WEDGE

ル・クロワール［P］


新潟港沈理トンネル立抗［P］

性に真に訴えかけるだけの力を保有しているのは、表層的なかたちではなくて、ヴォリュームそれ自体の迫力であると考えられるからだ。今回の３作品では、意図的にさまざまなかたちのヴォリュームが採用されいてる。・・・

3. 空間イメージを明快にする。
ヴォリュームを造形する際に、どのような空間をつくろうとするのか、という点が明快になっていなければならないのは当然のことである。この空間イメージが想定されていない限り、幾何学ヴォリュームの操作は単なるゲームに陥ってしまかもしれない。どのような空間を形成したいかと考えるかが、ヴォリュームの操作を主導するのである。
今回の３作品は、それぞれまったく異なった空間イメージを携えている。・・・

これら３つの空間は、まったく異なる類のものであるが、それらはそれぞれのやり方で、人間の感性に訴えかけよう。それらは、優しい空間、気分をなごませる空間であるというより、緊張感に満ちた空間、厳粛な雰囲気の空間であるに違いない。

No. s-75　好木心 ――日本の風土の中で ――中東壽一，　jt9109

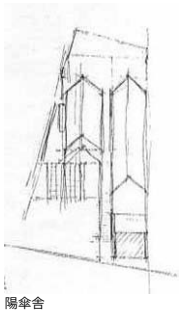
［連作名］舎

木は入手しやすく、加工性に富んでいるから手軽である。表情が豊かで温かみがある。
年輪の表情、
新木の表情
「カンナ」をいれられた鮮やかな木目の表情、
木表・木裏の表情、
時間とともに変化する表情。
製材されたとき、加工されたとき、常に生きている材料。ねじれたり、曲がったりと行儀が悪いが魅力的である。
「木が好きだから、木にこだわる」

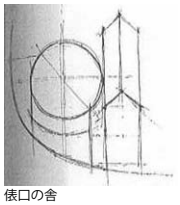
1977 年、独立を機に、木に魅せられた私の創作活動が始まる。熟練した棟梁のもと、木造の精神性を形にと、学びながら、汗を流しながらの毎日。上棟時の軸組の力強さを生かした建物ができないか。棟梁の持つ伝統の技と、私の考え方との衝突と理解の中で、在来工法を基盤にもっと自由に、現在の生活の形態と空間の楽しさが伝えられないか。5 年の検索と研究を経て、1984 年 11 月、「陽傘舎（対馬家江の舎）」が完成する。とにかく木材の持つ荒々しさと力強さを内部空間に展開し、民家の郷愁を表現した空間が出来上がる。
その後、「富松町の舎」、「境橋の舎」と、作品が完成するたびに軸組を整理することで、垂直材の軸と水平材の軸のマトリックスが明確になり、構造材の整合性の美しさが空間の容積を決定づけるようになる。

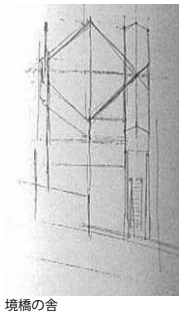
「俵口の舎」では、在来工法の整合性を保ちながら、絵を描くようにもっと自由な木造ができないかと考えていた時期に、扇型の敷地に出会うことになる。丸い平面構成と切妻の垂木構造の合体は、今までの作品とはかけ離れた、木構造の可能性への挑戦であった。
その後、「春日町の舎」、「南中振の舎」、「山崎の舎」と完成していく。この頃から屋根の形態がヴォールトに変わり、軽快になっていく。屋根のデザインの決定要素である棟木をなくすことで軽快な屋根形態に変わらないか？ 整理された軸組のリズムと、一体感のある屋根加工。グライダーの羽のように軽やかに！の思いが、扇型垂木を生んだ。

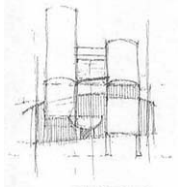
木の持つ味わいと温かさが捨てきれず、日本の風土に根づいた木と一生つきあってやろうと思い始めて 15 年の歳月が流れている。・・・

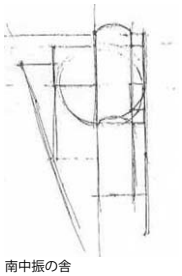

陽傘舎

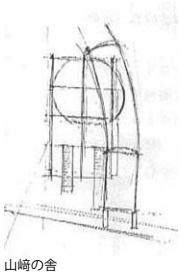
富松町の舎


俵口の舎


境橋の舎


春日町の舎


南中振の舎


山崎の舎

No. s-76 「地籍」の「かたち」―「末広がりの家 2・3」のデザイン・プロセス―

――林雅子， jt9111

［連作名］**末広がりの家**

ここで紹介される 2 軒の住まいが、平面・断面とも末広がりの形態を与えられ、結果的に「末広がりの家」として括られることになった。

末広がりの家

末広がりの家 2

末広がりの家 3

No. s-77 「自律する秩序」と「孕んだ空間」の合成

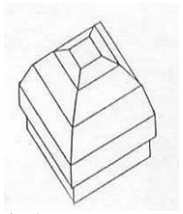
――越後島研一， jt9112

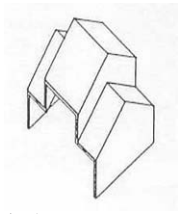
［連作名］**木造による西欧的造形**

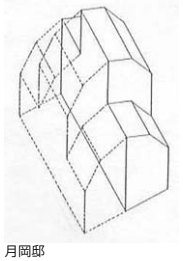
敷地は私鉄駅間近に位置し、・・・典型的な郊外のの雑然たる街並みで、特に今後休息に変貌していくに違いない地区だといえる。したがって、周囲に紛れず、その変化にも関わらず。むしろ独自な生活の器としての確かさを、永続的に主張しうる意匠的効果も重要と考えられた。こうして、日本の伝統的・一般的な住宅には見いだせない強力な形の力、周囲からは自立した、確かな形態的全体が構想された。具体的には、教会堂の断面型に典型化される西欧的秩序の原型としての「凸型」の全体輪郭が選ばれた。

一方、先の、内部からの要請は、「孕んだ曲線」として表現されるのが自然だろう。したがって、大きくは、「凸型」と「孕んだ曲線」という、相矛盾する 2 種類の形態的要請が設定されたことになる。この両者が複合される緊張が、形態的全体像を支えるのである。それにより、最終的な全体形状が具体的に決定された。

こうして、作者が、80 年代を通じて、西欧的なものを伝統的木造において表現するために進めてきた、2 種類の形態的テーマは、ここに融合されることとなった。


森田邸


室町邸


月岡邸

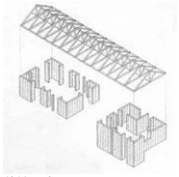
No. s-78　建築の素形 ――内藤廣，　sk9201

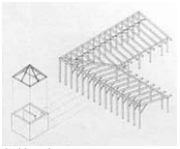
［連作名］**素形**

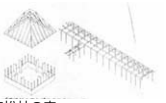
時間にこだわると、建築形態は、その原形質である「素形」に収斂していく。
時間を中心に考えると、空間のさまざまな問題点が明らかになる。極端な設定をしてみるとわかりやすい。たとえば、1時間しか存在しなくていいものの最適解と、千年存在させようとするものの最適解は、まったく違うものになるはずだ。前者はおそらく数千の解があるのに対し、後者はおそらく、ひとつかふたつの解しか見出せないだろう。・・・
計画される建築の存在する時間を引き伸ばしていくと、設定された条件が変わらなければ、解の選択肢は次第に狭くなっていく。狭くなる選択肢の中で、最後に残る解を「素形」と呼びたい。「素形」は、建築にまつわる寡黙な時間を、空間の幻像を越えて、その中に浮かび上がらせる。

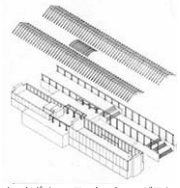
小さい規模ながら、収蔵庫、研究棟、展示棟の建設と、順を追って継続的に６年間設計作業を続けている「海の博物館」も、ようやくあと半年で完成する。・・・「素形」という建築の原初的な形に還元することによって、そうした問題を越えられないか、というのがはじめた当初から今に至るまで、問題にし続けている唯一のテーマだといえる。・・・
・・・建築は余計な無駄を省いて、何を中心に組み上げるか、何を最後まで確保するのかが次第に明確になってくる。形態の操作を捨象し・・・
必然的に、同時進行している仕事も、その考え方に引き寄せられている。改めて、最近まで自分がやっていた仕事を眺めてみると、バラバラに見えていたそれぞれが、ひとつのトーンを帯びていて、比較的明快な方向を指し示しているように思う。どの仕事も「素形」へ通じる道を探っている。そこに流れている空間の質と密度は、写真にはなりにくい。形態はどれも、おそろしく地味で、いってみれば一見何の面白味もないので、なぜそこにこだわってきたのかを説明しないとわかりにくい。あえて自己診断すれば、まだ見ぬ理想型である「素形」への傾斜が形態の多様性を奪っている、ということになる。
空間に過剰にシフトした建築に、時間を導き入れるための梃子として提出した「素形」という考え方は、まあだ明確なイデーには昇華していない。しかし、「素形」を意識し続ける・・・

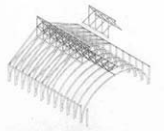
海の博物館・重要有形民俗文化財収蔵庫

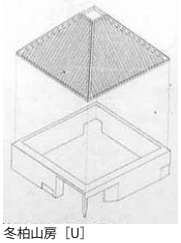

稜線の家


杉林の家


唐松林の家


オートポリス・アート・ミュージアム


海の博物館・展示棟［U］


冬柏山房［U］

No. s-79　建築の教育と体験 ――坂茂，　jt9203

［連作名］**壁とコアによる空間構成**

壁には多くの建築的意味と機能を持たせることができる。壁は内部の空間を包み込むと同時に、それ自体の形により敷地独自のコンテクスト、たとえば、敷地の形状、高低差、自然環境や近隣との関係などとの関わり方を表現する。構造的には、垂直荷重と同時に、横力を受けることができる。また、表面の仕上げによっても、さまざまな表情を与える。しかし、個々の部屋を細かく区切ることなく、空間に流動的なシークエンスを持たせるには、壁によって内に包み込まれた大きな空間に、核となるコアを配し、空間内部にヒエラルキーを与える必要がある。・・・そこで私は、キッチンやバスルームの納まった水回りのコアを住宅の核としている。さらにそのコアを常に円筒としているのは、もちろん四角と違い方向性を持たないコアにより、より流動感を空間に与えるためだが、何よりそれは、私の学生生活での体験が原因しているようだ。
私が学生生活の最後の３年間を送ったクーパー・ユニオンのファウンデーション・ビルディングは、1859 年に建設され、1974 年に建築学部長のジョン・ヘイダックによって外壁をそのまま残し、内部を構造もろともリノベーションさせた。・・・円形の内部を持つ円筒形のエレベーターコアは、公会堂、図書館、ギャラリー、各学部フロアーを貫通する軸であり、ホール空間の秩序を治める重要なエレメントである。そしてその日常的体験は、建築の原風景として私の中に残っていった。現在、壁とコアによる空間構成を設計に取り入れているが、実は機能分化した最小限の壁によって空間構成をする試みは、私の学生時代の設計のテーマであったが、コアの考え方は当時まったくなく、日本に帰り、日本の無秩序な都市と空間の中で生活しているうちに、自然に表れてきたように思う。

城ノ平のヴィラ

VILLA K

M 邸

声楽家の家

I HOUSE

VILLA K

No. s-80　都市空間のプログラム　無為の時間の空間化、そして衝突の現場
――竹山聖，　sk9205

［連作名］**無為の時間の空間化**

OXY 乃木坂

D-HOTEL OSAKA

TERRAZZA

都市に対していかなる空間を提案し得るか、ということを、いくつかの建築の設計を通して、数年来考え続けてきた。
都市に要求される新しいプログラムは何だろうか。いかなる空間を、現代の都市生活者は必要としているのだろうか。・・・ところで現代の都市生活者とはどのような存在か。最先端の感性をもつ選ばれた人びとなのか、裕福な人びとなのか、女性なのか、子供なのか、老人なのか、それとも不特定多数の人びとなのか。そもそも都市とはどのような場所だったのだろう。生産の場か消費の場か、住まう場所か商いの場所か、はたまた文化の廃墟か、それとも文明の孵化器なのか――。・・・こうした疑問を自身の内で反芻しながら、おそるおそるいくつかの都市の建築の設計に取り組み、ささやかな提案を試みてきた。そうした経緯を振り返りつつ、現在のところの考えを記してみたい。
ここで振り返る計画のすべては商業建築である。現代社会をある意味で代表するプログラムであり、都市生活者の日常にとっても関わりの深いものだ。もはや都市の表通りはほとんどが商業建築であって、たとえば東京のような都市の風景を決定付ける役割をも担っている。それだけに建築家としての矜持が問われるところでもある。・・・
まず、街並みに対して批評的であること。多くの場合、日本の都市の街並みは信頼し難く、しかもそのことに無自覚だからである。また、饒舌をもってでなく、沈黙をもって街に対峙すること。消費的状況は加速されていくにせよ、デザイン的な消費には極力耐える造形でありたいからだ。個人的な見解としては、この目論みは成功しているように思う。そして、都市生活者に対して、それも不特定多数の人びとに対して、共有し得る都市空間を提案すること。しかもそれが商業空間として要求されたプログラムではなく、新しいかたちのプログラム、建築計画者の提案がなければ決して実現されぬはずのプログラムであること。これを建築計画に組み込み、育てていくこと、である。
ある場合にはうまくいき、ある場合にはやはり商業的な要求に流され、ある場合にはオーナーの見識に待つかたちとなった。にもかかわらず、こうした無意味とも見える努力を重ねていきたいと思うのである。というのも、都市空間の新たなプログラムの可能性をもつ空間の種子を、都市にそっと差し入れておく意志こそが、都市の未来の風景に何らかの影響を及ぼし、少なくとも選択可能な未来の幅が広がると信じているからである。
具体的に、「OXY 乃木坂」、「D-HOTEL OSAKA」、「TERRAZZA」という 3 つの都市商業施設を例にとって、とりわけ第 3 の、共有し得る都市空間の提案という意図の所在と行方を眺めてみたい。

OXY では、1 階にくさび型に貫入した路地および 6m 角のガラスの箱がそれにあたる。・・・
そこは不特定多数の人びと、用事のない人びとすらも自由に出入りし、一歩足を踏み入れても決して金を取られない、いわば「パブリックな場所」となるはずであった。・・・スペースの活用に展望が立たず、オープニング・パーティ当日にオーナー自ら喫茶店への転用を決断したのであった。
D-HOTEL においても、やはり 1 階に、ストリート・ギャラリーと称して通り抜け可能な空間を計画した。空気としても屋外と通じていて、「通り」を屋内化する試みであった。いわば「プロムナード」の空間化である。当初の企画では、ここに都市生活者のための情報を提供する仮説的ディスプレイを配し、種々のイヴェントと連動することによって、この場のみならず界隈をも活性化する目論みであった。・・・［色々な理由で］とりあえずカフェに改造された。
ただ、都市というものが、多くの人びとの交流によってはじめて意味をもつ場であり、にもかかわらず、とりわけ日本においてはそうした交流の場が都市に十分具備されていない現実、たとえ具備されてもすべて商売の具となる空間である現実を見据えるなら、どのようにささやかなものであるにせよ、自身の計画する建築の一画に、都市の一般の生活者がそぞろ歩きのついでにふらりと立ち寄ることのできる空間を配してみたい誘惑に駆られるのである。そして、OXY や D-HOTEL のオーナーも、いったんはこうした考え方に共鳴してくれたのであった。ただ、敷地の狭小さからくる経済効率などの要因で、やはり短期的な商業上のメリットを求めざるを得ない結界となったわけだ。・・・

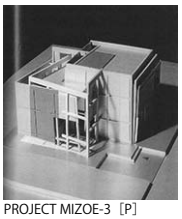
「無為の時間の空間化」という言葉が、私の最近の作業を導いている。古来、人類

の文化遺産として残された偉大な空間はみな、「無為の時間の空間化」ではなかったか。それは人間の生存そのものの中枢に位置付く時間であるからである。無目的な時間がなければ、人間は本来的な意味で、生きていけないものではないか。われわれがその生を展開する舞台である都市において、そのことがまったくといっていいほどに忘れ去られてしまっているのではないか。・・・「無為の時間の空間化」は表現のテーマとして意識の俎上に登って日が浅い上、困難な課題であるからあるいは単にシュプレヒコールで終わるのかも知れない。しかしながらそのような空間の存在に気付くことは、生の豊かさと選択の自由を都市空間に求める精神にとって、無駄なことではない。
TERRAZZA において、商業上のプログラムにのってこないふたつの場所、屋上庭園と斜めの壁の広場はこうした思考の果てに生まれてきた。都市生活者にとってみれば、1 階に大きなパブリックな場所をつくるべきところかも知れない。ただ公共建築ではないのだから、自ずとバランスがある。私としては現行法規や商業上の採算その他を考えて、ベストのかたちを提案したつもりである。・・・

都市に対する問いかけには、終わりがない。都市のごく局所を構成する要素であるところの建築の計画者として、都市の未来に向けたささやかな提案を続ける人間として、都市空間への夢と、夢の衝突の現場を素描してみた。衝突の現場に出て行く心構えは常に持ち続けていたいし、夢を語るだけの相手に巡り合い続けてもいたい。そのためにも建築の計画者は都市に対して、都市生活者に対して、自身の夢を鍛えつつ問い続ける義務がある。

No. s-81　PROJECT MIZOE-3 ――藤井博己，　jt9205

［連作名］**MIZOE**


PROJECT MIZOE-3［P］

それは、つまり、この PROJECT MIZOE-3 は、以前発表した MIZOE-1、MIZOE-2 に続く連作のシリーズのひとつであって、空間や壁の重層性、あるいは散逸が意図されたように、この MIZOE-3 では空間や壁の移動による運動によって、そこに建築の過程的、さらには仮説的な状態がつくり出されることが意図されている。
・・・MIZOE-1、MIZOE-2、さらには MIZOE-3 で、私が意図した重層、散逸、あるいは移動、運動、過程、仮説といった考えは、各部分の構成を統合していくためのものでは決してない。それらはむしろ、部分、部分の構成についての考えなのである。
例えば、この MIZOE-3 では移動による運動を知覚させるために、その痕跡や形跡が各部分のディテールを形成している。こうした部分は、さらに感覚や知覚に強度を与えるために傾斜や重層した格子、あるいは補色関係にある色彩等が施され、個々の視線との関係を持続させながら、アナログ的な連鎖を生成していくことになる。
さらにこの部分、ディテールによる連鎖は、多様な全体のアナログ的な連鎖として知覚され、多中心的で未完結な時間的体験をつくり出していくことになる。
このことによって、このプロジェクトは、統一的なテーマによって各部分が構成され、ひとつの全体に統合されている建築が無時間的であるのに比べると、時間的だといえるだろう。ここではこうした時間を持続した連鎖が、統一的なルールなくして、如何に全体を形成していくのかが問題となってくる。

No. s-82　時と風景 ――東京へのオマージュ ――槇文彦，　sk9206

［連作名］**ヒルサイドテラス**

代官山集合住居計画第 1 期

代官山集合住居計画第 2 期

代官山集合住居計画第 3 期

第 1 期から第 6 期までのプロセスを改めて振り返って見るとき、次に述べるパブリック・スペース、あるいはモダニズムのひとつの展開と併せて、自分なりにひとつの “ 時の風景 ” をしるしていったといってよい。・・・

もしも、ヒルサイドテラスが 20 年以上の年月の中で、都市の中で生きたひとつの風景を提供しているとすれば、おそらく前面の歩道も含めたパブリック・スペースの存在であろう。先にも述べたように、第 1 期から小さくはあるがさまざまなパブリック・スペースの展開が試みられている。ここでは外部のパブリック・スペースであれ、内部のパブリック・スペースであれ、それらは絶えず外に向かって開かれている。・・・われわれが都市においてパブリック的なものというとき、それはどこまでも、その空間性のいかんによって、その質が規定されるべきものなの

である。巨大都市は、ときに小さな都市や集落にない圧倒的な空間を提供し得る。しかし都市のパブリックなスペースは群衆やコミュニティのためにだけ、その存在理由があるわけではない。その本質のひとつは人びとに都市における孤独性の享受を確証する場でもある。このようにさまざまなレベルにおけるパブリック的な空間とその意味性が重層的に現れるとき、われわれは都市空間の豊かさを獲得し得るのである。
ヒルサイドテラスの 25 年を通じて、たえず私の心の中では漠然とではあるが、このようなさまざまなパブリック性に関するいくつものテーマ［日本の庭とか散歩とか］が去来していた。建築やアーバンデザイナーが提供し得る空間の型は確かにいくつかに限定されている。しかしそれらが周縁の都市存在と組み合わされたときに、人びとが共有し得る風景をつくり出すことができる。・・・
第 6 期の計画はこれまでの計画のように直接背後にある樹木や塚に接することはできない。しかし道路越しの風景として共有させることは可能であった。東側にある棟の 1 階部分は道路に沿ってガラスの細長い、ささやかではあるが透明な内部のパブリック・スペースが設けられ、店舗などのスペースは少し後退させてある。こうしたスペースは第 1 期や 3 期にも設けられているが、都市の中で襞的な空間を提供している。
ヒルサイドテラスにおけるパブリック性の展開は、こうした空間的なものだけでなく、この 25 年間プログラム的なレベルでも少しずつ継続的に行われてきた。単に店舗と住居の組合せだけでこの場所の機能を完結させたくないというオーナーの強い期待もあって、この 10 年間 SD レビューをはじめ、音楽会などさまざまな文化的イベントが開催されてきた。第 5 期のヒルサイドプラザといわれる地下空間は、こうした目的を一層充実させるものであったが、第 6 期においてはさらに、地上の広場に面して新しい多目的に利用され得る場所を用意し、主としてアート的な展示や集会に利用されることを意図している。

No. s-83　廻遊式住居 ――竹原義二，　jt9211

［連作名］廻遊式住居

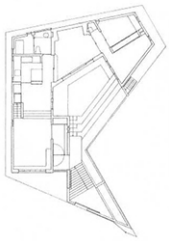
最近の住宅を見ると、個の自立性を重要視するあまり、家族と個の関係が希薄になっていくような住宅が多く見受けられる。・・・

今、住宅の平面を通して考えていることは、これまでに無駄だと思われ切り捨てられてきた“間”の空間を意識的に操作すること、そしてそこから生まれた場を領域的にとらえ、住居を構成するそれぞれの室を分割した配置の中に“間”を挿入し連続した空間につなげていくおｋとである。この分割された室は“間”を介することで視覚的空間がリニアーなものからラウンドなものへと転換され、中間的領域としての役割を果たす。このようにして生まれた空間は、曖昧な空気を通してすべての物が見え隠れし、家族のつながりを回復させる重要な要素となっている。
住人は廻遊するという運動を通じて、異なるシークエンスを“間”の中に見い出し、見え隠れすることを通して日常の生活の中で、お互いの距離を認識することができる。個室と家族室が視覚的つながりをもち連続した一室空間となることは、かつての書院建築の土間・廊下・縁側を通しての中庭と室との関係と等しい要素をもっている。
さらに、平面から立体へと空間を重層させることで、上下で見え隠れするシークエンスは立体的にとらえられ、都市という限られた場の中で連続的な視覚だけに止まらず、あらゆる感覚（自然）を呼び起こすことができる。そのためには、あるがままの状態を受け入れながら、見え隠れするという操作を、壁の立ち方や床レベルの変化、半外的空間（中間的領域）と室内を対峙させることで重層的な空間をつくり出している。
「棲む」というもっとも根源的な行為を、改めて意識することで、住宅という器を家族共有のひとつの社会としてとらえ、その枠の中で個を確立し、社会との関係を確立していけばよいのではないかと思考している。
“廻遊式住居”はこのような家族関係の回復をも含めたさまざまな要素を内包している。

西明石の家

塗屋造の家

石丸の家


本庄町の家

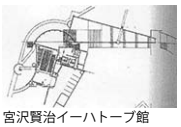
真法院町の家

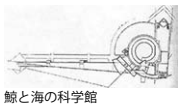
山坂の家

No. s-84　軸――平面計画への手掛かりとして（角度のもつ意味）
――古市徹雄，　sk9212

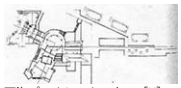
［連作名］**軸線**

歴史上、かつてさまざまな地域で、軸線は都市・建築の構成に重要な役割を果たしてきた。都市の空間構成、建築の平面計画、特にアプローチ計画、ビスタ・プランニング、ランドスケーピングなどにおいてはさまざまな方法で使用された。時にはその象徴性のゆえに権力者に都合よく用いられたり、古代文明においては神秘的な意味で用いられることもあった。
特に日本における安易かつ無知なアンチモダニズムによって、建築本来の重要な要素すら忘れられようとしている昨今であるが、軸線の持つ魅力を現代において考慮することは決して無駄なことではなかろう。


宮沢賢治イーハトーブ館


鯨と海の科学館

大湯環状列石保存計画［U］


西海パールシーセンター［U］

■宮沢賢治イーハトーブ館
・・・斜面の形状に沿って建築の座標軸が決定されている・・・敷地の斜面形状による座標軸と、アプローチ条件から来る軸のふたつが平面を決定する重要な要素となっている。

■鯨と海の科学館
平面は、円と、円に内接する正方形に重なるＬ字形と、微妙にずれて円周の外側に位置するもうひとつのＬ字形の３つによってつくられる。正方形に重なるＬ字形の長辺の延長がアプローチのためのスロープ壁をつくり、これに対しもう一方のＬ字形の軸をずらすことで逆パースペクティブの効果を生み、アプローチの長さを心理的に軽減させている。

■大湯環状列石保存計画
既存の道路に従い、博物館・アミューズメントセンター・研究所の３つの建物と駐車場の座標軸が決定されている。これに対して、ふたつのストーンサークルの中心を結ぶ軸は夏至の日没の方向に一致しており、それに直行するようにアプローチ軸が設定され、建物群に囲まれる広場へと貫入する。駐車場から広場へ入る部分にゲートとしての列柱が提案されているが、その影は夏至の日没時に一直線に連なる。

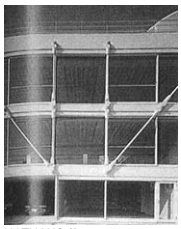
■西海パールシーセンター
敷地境界線から来るアプローチのための軸線と、桟橋による水際ラインに従う軸線のふたつで構成される。・・・

No. s-85　都市小規模ビルの可能性
――アーキテクトファイブ，　sk9302

［連作名］**HATHAUS**

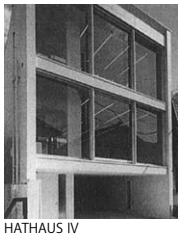
「気持ちのよい建築を目指して」というタイトルで、札幌のコンピュータソフト会社本社研究所「LINK」を解説して以来、幾度か「気持ちのよい」という言葉を使ってきたが、われわれはこれからも今まで以上にその意味を追求し、実戦していくべきだと考えている。

HATHAUS Ⅰ


HATHAUS Ⅱ

人が素直に欲する空間を描いてみると，光が欲しい、眺めが欲しい、安らぎが欲しい、緊張が欲しいなど、自分の五感を通して体験したこと、してみたいことのイメージが集積としてでき上がっていることに気付く。この原点ともいえる空間を、さまざまな条件をクリアして実現できるならば、その空間は人間の行動に対していつも寛容に対応してくれ、また時間の流れに対しては普遍性をもち得ると考えられる。構造云々や様式云々にとらわれた入れ物をつくる概念の操作よりも、この空間の質を問うことのほうが重要であろう。
故天野太郎いわく「建築は風呂敷みたいなもの」、つまり構造やかたちから規定された箱に合わせて人が強いられるのではなく、人の生活活動がかたちを決める。そして、その風呂敷が光や風と呼応すると同時に、照明や湿度、温度といった環境調整装置をもった皮膜でもあって欲しいと考え、それを試みようとしたのが、TENHAUS と HATHAUS の計画である。

HATHAUS Ⅲ


HATHAUS Ⅳ

幡ヶ谷のビル「HATHAUS」は、バブル経済の最中、大型物件を建てようと地上げ

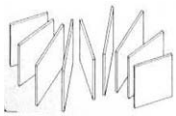
が虫食い的に進んでいたときに、それを食い止める布石として職住接近の場所を生かすべく計画されたものである。・・・
1. 容積率を最大限に利用する。
2. 1 階をオープンな駐車場にする。
3. 地下を 1 層とり、その階高は 2 層分とし自然光を取り入れる。
4. 各階の天井を高く確保する。
5. 屋上をリフレッシュスペースとして積極的に利用できるようにする。
6. 柱を出さない構造とする。
7. 躯体を利用した省エネの輻射冷暖房を採用する。
8. 自然換気・採光のできるトイレ・湯沸かし・階段とする。
9. 開口部はすべて可動。大きな開口部には、外部に光・温度調整補助の可動ルーバーを設置する。
10. 敷地全体に緑のスクリーンを通した風抜きを考える。.
いっぽう、築地のビル「TENHAUS」は、場所性が異なるので表現が違ってきているが、同じ発想で計画されている。・・・

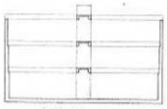
葉山氏や梅沢氏と勉強会をするかたちでいくつかの作品を経験してきたが、われわれがチームを組めるのも、よりよい住環境をつくっていくために、総合的に建築を語り、力を合わせていかなくてはならないという共通の意識があるからである。
われわれは、人間のもつ五感が常に気持ちよく素直に反応してくれる状態を包み込んでくれる空間をつくるために、可能性のあることは何でも挑んでみたい。その可能性は新しい技術の中に、そして歴史や風土が培ってきた日常の中に潜んでいるかも知れない。自然の力を味方にして、自然と共存できる方向に、われわれの生活を見直していくことが、やがてわれわれをとりまくさまざまな地球規模の環境問題の解消に結びつくことであると考えている。これからも使命感をもって、ささやかながら貢献できればと思う。

No. s-86　構造テーマの継続と展開 ――坂茂，　sk9304

［連作名］南北面に前面開口で内外部が融合した空間

VILLA TORII


石神井公園の集合住宅


Y デンタルクリニック［U］

これまで、建物の東・西側にのみ壁を立て、南北面には壁やブレースがない全面開口をつくり、内外部が融合した風通しのよい空間をつくるために、いくつかの構造方式を提案してきた。そのひとつ「VILLA TORII」では、平行に自立する木造の 2 枚の壁の上に集成材の梁を載せ、地面から鉄筋で梁と壁を外側に引張り、横力を処理する方法を考えた。また「石神井公園の集合住宅」では、RC 造 4 階建てを壁構造で、それぞれの壁をドミノゲームのように S 字型に配置しスラブで連続させることにより、各ユニットでは一方向の壁しかないが、建物全体で XY 軸両方向の壁量を満足させるような構造形式を採った。
電業社においては、予算、工期面、そして重量機械を多層に設置する条件により、鉄骨造とプレストレスの PC 版（DT スラブ）の併用を考えた。まず、東・西側にこれまでの壁の代わりに 4 層分のフレームを S 造で立てる。・・・
現在進行中の Y デンタルクリニックでは、地面よりキャンティレバー状の 2 枚平行な 3 層分の RC 壁に、各集成材梁を載せている。RC 壁は、床が木造で軽量であれば、XY 軸両方向の横力が処理できることが計算で確認された。このように、構造テーマは次のプロジェクトへと継続し展開されていく。

No. s-87　図式の体験 ――妹島和世，　sk9308

［連作名］図式

パチンコパーラー

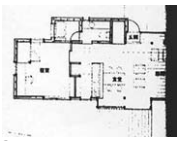
ここ 2、3 年、単純に図式的な平面、あるいはモデルを、建築関係のさまざまな雑誌上で見るようになった気がしている。図式的なというのは、そのモデルや平面が、幾何学的に単純な形でまとめられているということや、表現上かなり簡略化されている、などとちうことを漠然と意味している。そういう私も、・・・そのひとりに確実に該当しているだろうと思う。
この「パチンコパーラー」は、約 1 年半前の 1991 年秋にクライアントが開いたコンペティションからスタートした仕事である。当時、私たちは同時進行にふたつのプロジェクトを進めていた。ひとつは「那須野が原ハーモニーホール」というコンペティションで、もうひとつは「N-HOUSE」の実施設計である。これら 3

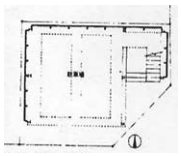
つのプロジェクトは、1992 年はじめの『JA』6 号でまとめて発表する機会をいただいて、当時の仕事全部を(といっても 3 つしかなかったが)おのおののプロジェクトについての考え方や、平面、モデルなどについて改めて並列、比較して考える機会に恵まれた。
たとえば、それまで私たちは、モデルは基本的に白い紙模型でつくっていた。これに対し、この 3 つのプロジェクトでは、設計のスタートの段階から『JA』に発表したような、色や石模様などの素材を用いたグラフィカルなものに変えている。そしてそれらのモデルによって、実際にリアライズされる建築のほうも、形も平面も構成も、よりはっきりと図式化されていった。・・・
・・・「パチンコパーラー」をはじめとする 3 つのプロジェクトを発表した際に、私は以下のようなことを述べている。
「…建築をつくるということは、誤解を恐れないでいえば、結局新しい形をつくるということではないだろうか。新しい形とは、不定形をつくるとか、いわゆる変わった外形をつくるというのではない。エスキースを進めながら、私は、計画とダイレクトに結びついた新しい形をつくりたいと思っている。…」
これは、補足すれば、何かモデルのように超越的に把握できる図式をつくりたいということではなく、逆に、建物の中で生活していく経験を通して、計画そのものがもつ図式的な明快さが、体験によってはじめて納得できるような状態を望んでいる。・・・重要なのは、計画された図式が、今の私たちの生活において、どれだけ新しく、解放された体験を可能にする構造をもっているかということであり、決して図式がそのものの面白さや新しさや、あるいはその巧みな構築にあるのではない。・・・新しい体験を可能にする図式を、その計画ごとに発見したい。そして、それらが体験によって認識される、そのこととダイレクトに結びついた建築をつくりたいと思っている。

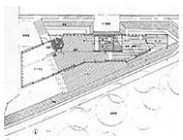
No. s-88 ［Barn］について ――吉本剛， jt9405

［連作名］**Barn**

「機能」「空間」「構造」および「形態」が、さまざまな要求や制約により建築化される仕組みを「納屋、小屋」などの建築に学ぶ。それらは常に与条件に対しニュートラルに作用し、作用した結果としての建築は、力強く、美しいと思う。


Barn-1


Barn-2


Barn-3

● Barn-1
この建築について当時私は「住むための納屋づくり」と称し、次のような感想を述べた。「『納屋』、『小屋』などの建築の形態や内部構成を探求すると、これらが合理的、経済的解釈により構成されていることに気がつく。これらの建築の内部機能は、使用する側の要求を裏切ることがない。『-1』では施主と共に、つくるべき空間を吟味し、無駄を排除した『納屋』づくりをしたつもりである」この考えは今回の「-3」に至っても変わっていない。
「-1」と「-3」の形態比較をすると、「-1」が「納屋」のもつ空間構造を隠喩しているのに対し、「-3」ではより即物的に空間の必要量を得るように意識した。・・・

● Barn-2
「-1」が木造真壁であるのに対し、ここでは間柱の C 型チャンネルを露出させた鉄骨造真壁納まり？とすることにした。・・・
ここでの経験は「-3」の収まりに影響を与えた。具体的には、ほとんどの柱が通し柱となり、横架材で途切れない縦方向の強さを意識している。

● Barn-3
［解説］
「機能」「空間」「構造」を以上のような姿勢で解いた。「形態」は上記のそれぞれをニュートラルに解いた結果であった。

No. s-89　都市の単位 「緑園都市」を契機にして ――山本理顕，　sk9501

［連作名］**緑園都市**

道＝歩行者の空間のつくりかたに注意を払い、それをうまくつくっていけないだろうかという提案をしました。具体的には「通り抜けの道」です。ひとつの建物を通過して、別の建物に行けるような計画。全体のコンセンサスをつくった後で個々の建築をつくるのではなく、個々の建築をつくることで、逆に全体をつくっていくような計画。都市づくりのひとつの手法として、「通り抜けの道」を個々の建築につくり、その結界として都市全体をつくっていくというものです。建築に関しては、はじめから確固たる制約をつくらないで、看板や手摺や床のタイルの色といったものの表情だけをある程度決めておいて、そのほかは自由に建物をつくっていくという提案をしました。それが受け入れられて、「緑園都市　INTERJUNCTION CITY」計画が始まったわけです。

まず最初に「XYSTUS」のゾーンの計画が始まりました。・・・橋をつくって、スーパーから「XYSTUS」の敷地へ直接アクセスできるようにしてもらいました。この橋があることで、「XYSTUS」は、はじめから駅側からこられるような動線をもつことができたわけです。つまり、この橋のおかげで、建物の真ん中に道をつくって両側に店舗を配置するというプランが採用できたわけです。次に、「OBERISK」のゾーンと「G.F. ビル」のゾーン計画がほぼ同時に進行しました。「OBERISK」の計画に関しては、「XYSTUS」と向かい合っていることもあって、同じような関係をつくるようにしました。「G.F. ビル」のゾーンに関しては、このゾーンでそれぞれ分割された土地をもっている人と個別に話をしていきました。やはり裏側の敷地への「通り抜けの道」をつくっていこうと話をして、その代わりに裏側の敷地――「CÔTE à CÔTE 」がそうなのですが――を、共有の広場と駐車場として整備しますということで計画を進めました。「ARCUS」に関しても、すでに北側の敷地へ向かう動線ができ上がっています。

住宅部分とそこをただ通り抜ける人との動線が交差すると、やはり住んでいる人のプライバシーが制約されると思いましたので、商業部分と住宅部分のフロアを分けるようにしています。1・2階部分に「通り抜けの道」があって、その道に面して商業施設が配置されています。そしてその上に小さな広場があって、その広場をめぐって住宅が配置されているというイメージです。「通り抜けの道」が次々に連続していって、その上に住宅のための広場が浮かんでいるという風景はかなり初期の段階からありました。この「通り抜けの道」を〈触手〉と呼んでいます。この〈触手〉が、都市へ建物をつなぐと同時にひとつの建築が都市という環境に変わっていく契機になっているのではないかと考えています。

XYSTUS

ARCUS

LOGGIA

OBERISK

CÔTE à CÔTE

AMNIS

PRADO

No. s-90　新しい住居形式を求めて　沖縄での模索
―半戸外のパティオをもつ住宅 ――福村俊治，　sk9502

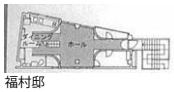
［連作名］**パティオをもつ住宅**

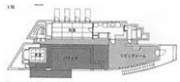
これまで沖縄ですでに６軒の住宅をつくり、計画中のものがひとつある。そのうち、ほぼ 10 年前に、敷地建設条件、周辺環境条件などが最悪な中で、実験住宅としてつくった自邸である「福村邸」での検討と新しい試みが、これまでの一連の住宅設計のベースとなっている。

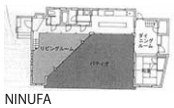
温暖な気候であるものの沖縄は雨が多い。ガラスのトップライト屋根をもつ半戸外の広いパティオを住宅の中心に据え、各室をその周りに配置する。各室ともパティオとその吹抜けを介して連続する。

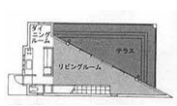
それは室内の狭さを補うかたちで、リビングルームと連続して、集いの場、子供たちの遊び場として使われると共に、食事や家族団欒の日常的生活の場としても使われている。また、夏の強い日差しや強い雨などの厳しい自然環境を和らげる一方、心地よい風や光、虫の音や風・雨の音など移り変わる自然の様相を室内へ導き入れる「仕掛けの空間」である。かつて沖縄の伝統的な住宅は、防風林や石垣に囲まれた半戸外の空間である中庭や雨端をもち、住宅の内部と外部を一体化させていた。その手法を新しいかたちで再現したものだ。

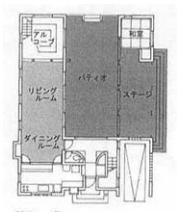
「ORION」、「NINUFA」、「N 邸」などは大きなアルミサッシュで区切られているが、「NIRAI・KANAI」はその区切りにスライディングサッシュを使い、すべて引き込み収納される。床材も、同じ石貼りとし、室内・半戸外のパティオ・外部が完全に連続し一体化するようにあしてある。「福村邸」では面積的ゆとりがなく中央ホー


福村邸


NIRAI・KANAI


NINUFA


N 邸［P］



ORION

FUKGI

ルがその代わりの役目を果たす。外壁には換気小窓程度しか開口がなく、唯一外部とつながるのは透明ガラスのトップライトである。・・・「FUKUGI」では、・・・主屋と赤瓦葺き屋根をもつ離れの２棟建てとし、その間に雨端とテラスに囲まれた中庭をつくった。

・・・私たちが試みたことがすぐに一般化されるとは思わないが、画一化し閉じた沖縄の住宅が、恵まれた自然を受け入れ、豊かな住環境をもつ住宅となり、そしてよりよい街並みを形成することを望んでいる。・・・

No. s-91　和洋折衷・安愚楽鍋　KES 構法の展開
――太田隆信／坂倉建築研究所，　jt9505

［連作名］KES 構法

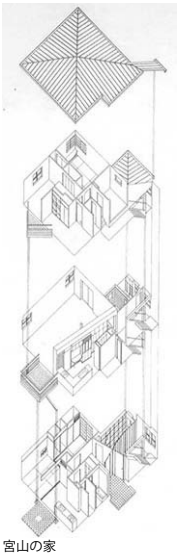
今回発表させていただく３軒は、いずれも２×４の KES 構法によるものである。・・・「高野台の家」と同じく打放しコンクリート仕上げの設計で、見積は兵庫県の仕事だから、戎工務店にお願いした。結果はやはりバブルの価格で、ちょっとやそっと、ハツってみてもタタいてみても、どうにもなりそうにない。ここはざっくばらんに、関西流にいうと何もかもぶっちゃけて、戎さんに相談したところ、少し間をおいて紹介されたのが今回の KES 構法。

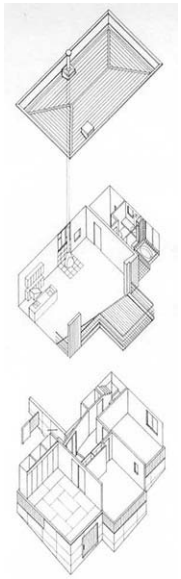
これだと、RC 造の住宅がそのまま、木造の２×４構法に置き換えられる。コストもリーズナブルである。KES とは、Kimura Excellent Structure System の略で、壁構法である２×４構法と、柱梁構法を、独特の接合金物（コネクター）で緊結した混構造（ハイブリッド）である。この構法と接合金物は、日本・アメリカ・カナダでパテントを取得している。なお、KES 構法の Kimura は、この構法の発案者であるシェルターホーム株式会社の社長の名前によるものとのこと。

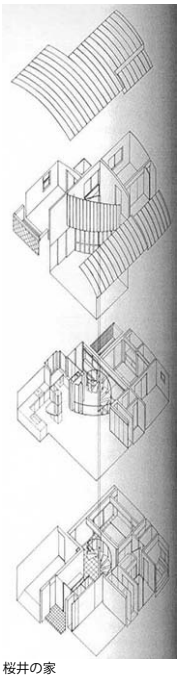
・・・２×４構法はアメリカの文化、２×４住宅はアメリカの生活、そんなスタンスでじっくりと展開してこそ、この構法の本来のよさがわかっていただけるのではないかと、やや批判的であった。だから最初の２×４住宅設計の機会に、ゆさぶりをかける意味で、いわゆる２×４住宅らしからぬものをと、和風に挑戦、「和風タウンハウス（西神ニュータウン）」をつくったが…。

今回の KES 構法、こういった気持ちの延長上に素直に受け止めて、２×４構法の新たな展開を図った。・・・

３つの住宅それぞれについては個々の説明に譲るとして、KES 溝法の特徴を生かした伸びやかでオーディナリーな空間が、３軒３様にできたかなと、２×４溝法の新しい展開、しかと手がかりをつかんだ感じである。


宮山の家


東条湖の別荘


桜井の家

No. s-92　浮遊する断片がダンスを始めた――竹山聖，　jt9506

［連作名］天と地の対位法

豊中に３つ目の住宅が建ち上がった。1990年の「豊中・本町の住宅」、93年の「BLUE SCREEN HOUSE」に続いて。おのおの徒歩数分の圏内にある。思えば「豊中・本町の住宅」において、僕は「天と地の住宅」を開始したのだった。その後は一貫して、天と地の対位法によって住宅の在りうべきコンフィギレーションを考え続けてきた。

発表寺の一節を引く。

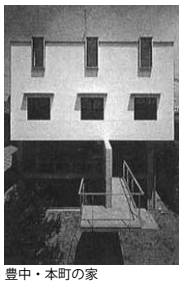
「いま僕は、大地に根ざす形と宙に浮く形の対位法によって空間を形成しようとしている。（中略）建築は本来大地に根ざすものだ。建築の永遠の相は大地に同化する。土から出て土に還るのみ。形式はそこに存する。対するに宙に浮くものが形式に運動をもたらす。ものの彼方に意識の運動をもたらす。永遠の相の下に刹那の輝きを刻み込む。宙に浮くものばかりで刹那を謳うことにはためらいを覚えるが、形式は運動の介入によって活性化されることを忘れてはならぬだろう」

すでにして運動の可能性が語られている。ただしいまだ控え目に。

豊中の３つの住宅は、あるインターヴァルを置きながら近しい風土の中で一貫した建築的思考の営みを通して産み落とされた３種類の解を示している。

コンテクストに対しては、大地との接点および街路との関係をコンクリートのマッスとスケールとテクスチュアで受け止め、その上部に空との感応を果たすべく軽やかに開口を刻み込まれた木造ないしは鉄骨造のヴォリュームが架構されて―浮いて―いる。

プログラムはおのおのパブリック VS プライベート、子供 VS 大人、そして今回はプライベートな個室群が並ぶ１階に対して、パブリックな一室空間としての２階を配する構成となっている。対比的な空間を明確に配列することが、生活の場面の幅を広げるのだという考えが「天と地の住宅」を貫く信念である。


豊中・本町の家

BLUE SCREEN HOUSE

DANCING-WEDGE HOUSE

No. s-93　通過点としての公共建築――伊東豊雄，　sk9507

［連作名］八代の公共施設

熊本県八代市にこの春、私たちの設計した３つめの公共建築が竣工した。「八代広域消防本部庁舎」である。アートポリスのプロジェクトとして「八代市立博物館」の設計を始めたのが 1988 年であるから、すでに７年になる。その当時は与条件を考えるだけで精一杯であった。しかし最近は毎年いくつかのプロポーザルやコンペティションに参加し、わが国の公共建築がどのようにつくられていくのかを多少理解した。

これらの機会を通じて痛感させられたのは、いかに定石通りのプロセスで定石通りの建築がつくられるかであり、この定石からはみ出すことがいかに困難かという事実であった。・・・この閉ざされたプロセスと閉ざされた空間を開くためにいったい何が可能なのか、それがこの７年間われわれが考え続けてきたテーマであり、それを可能にするためにはわれわれなりの戦略（方法）が必要であることを学習した。

「八代市立博物館」の場合に、私たちはこのような問題を棚上げにしていたわけでは決してない。開放的で明るくて、人びとが気軽に近づくことのできるなじみやすい建築をつくりたいと考えていた経緯は、すでに何度も述べた通りである。しかし今にして思えば、そのような開放性を獲得するために、われわれは、ひたすら空間表現にテーマを限定していたような気がするのである。あまりにも素朴な方法しか考えていなかったといえよう。

しかしそのような方法の問題を超えて、建築に対する認識の問題がその根底に存在していることに私たちは当時まだ気づいていなかった。そしてそれが、目的地としての建築と通過点としての建築という認識の違いであった。博物館においてイメージされていたのは、しょせん目的地としての建築であった。環境に対してそれは、かなり開かれているようにも見えるが、建築自体に感じられる完結性は、おそらくこの目的地としての建築が備えた行き止まりの空間に由来しているに違いない。それは人びとを迎え入れる空間構成をもち、その先に抜けていくことの不可能な終着駅のような行き止まり性を否定できない。・・・

八代市におけるほかのふたつのプロジェクト、「養護老人ホーム八代市立保寿寮」と「八代広域消防本部庁舎」において、私たちが意図したのは通過点としての建築である。そこでは明らかに博物館とは異なる開放性を形成したいと考えた。・・・老人ホームと消防署のふたつのプロジェクトの設計が開始されたのは、ほぼ同時期である。このとき共通の戦略としてイメージされていたのは、異なる機能の空

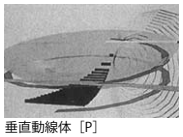
八代市立博物館

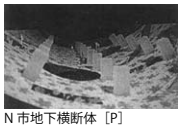
間を重ね合わせるという方法であった。
・・・孤独な老人たちの集団のハウジングは、既存の市街に向かっても、あるいは美しい八代海とその上に沈む夕日に向かっても開かれることになるわけである。老人たちのさまざまなパブリックスペースはそれら直交する２軸の交点に点在しているが、この関係は従来の〈公共建築の広場―エントランスホールおよび中心を形成するパブリックスペース―個室〉というヒエラルキーをもった配列からはかなり隔たったものである。・・・このような広場は、・・・目的としての広場ではなく、それは通過点としての広場である。そしてこの広場を横断する建築を、通過点としての建築と呼ぶことができよう。・・・
「八代市広域消防本部庁舎」においてこのコンセプトはより徹底された。この場合には広場、というより公園と消防署としての機能が重ね合わされている。・・・
・・・都市空間はこの公共建築の建つ敷地内に自ら引き込まれ、建築を通過する。私たちには八代での３番目の建築にして、ようやく「メニル・コレクション」に対抗し得る開放性を獲得し得たという実感がある。

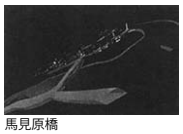
No. s-94　道から進化する建築――青木淳，　sk9509

［連作名］動線体

すべての建築は道から進化した、というのは、途方もない仮設だと思うが、・・・僕のところでこの数年間に行われているプロジェクトの多くは、振り返ってみれば、この仮設に大いにかかわっていると思う。道から進化する建築。僕たちは、それを「動線体」と縮めて呼んでいる。


垂直動線体［P］


N 市地下横断体［P］


馬見原橋

福島潟情報館［P］

道とは何にもまして「つないでいるもの」である。「つなげられるもの」ではない。だから、「すべての建築は道から進化した」というとき、それは第一に「つないでいるもの」の優位性、先行性を述べている。
これはひとつの転倒である。なぜなら、僕たちは基本的には「つなげられるもの」の優位な世界に生きているからである。
たとえば、都市。なぜ道ができたのか。都市の中に人が訪れるべき場所が複数ある。市場、劇場、神社などの「つなげられるもの」である。そこで、それらを「つなげる」ために道がつくられる。目的（目的地）があってはじめて手段が選ばれたというわけである。だとすれば、「すべての建築は道から進化した」のではなく、当然「すべての道は建築があってはじめて必要になった」ということになる。これが僕たちの一般的な感覚だろう。
しかし、動線体はそうは考えない。その逆に、まず人びとが動き回れるように道があった。そして、その動きをより活性化するために、あるいはその動きを一時的なものでなく定常的なものとして構造化するために、道の一部がある特定の性格を帯び始めた。それが建築ではないか。まずは人びとが動き回る。そしてその中から目的（目的地）としか呼びようのないものがかたちづくられていく。
・・・実のところ、普段の生活とはそういうものではないだろうか。目的を目指すよりもまず動き回ること。「つなげられるもの」より「つないでいるもの」。そうして、いったん建築を「つないでいるもの」そのものに還元すること。

「垂直動線体」
・・・公園の環境をもう一度「つなげられるもの」なしの「つないでいるもの」に差し戻すことができるかどうか。「垂直動線体」で試みられたのはそういうことである。
敷地の周辺にはかなりの高低差がある。そして、その周りのさまざまの方向から、さまざまの高さで人の流れがここに集まる。・・・そうした銅線をターミナルとしていっぺんに処理できないか。大きなパラボラ状の芝生の地表面と、そのかたちを形成する土手の中を緩やかに登る螺旋スロープがそうして生まれた。

「N 市地下横断体」
・・・「N 市地下横断体」も・・・とりあえず「広場」を出発点に考えるのはやめて、「つないでいるもの」＝横断体としてどうあるべきかという点から計画された。「つないでいるもの」の徹底が、結果として「広場」を再定義できるか、が試みられた。
道路とその下の地下配管を残して、スリット状のU字型空間が穿たれる。そうして、道路のこちら側と向こう側がひと続きのスムーズな面でつなげられる。降りはじめの勾配はきつい。そこでスキーの斜滑降のように、傾斜面をスライスしながら降りていく階段が設けられる。・・・

「馬見橋」
これが橋になると、より純粋な「道を進化させる」試みに近づく。橋は明らかに「つないでいるもの」だからである。「つなげられるもの」ではない。
道＝「つないでいるもの」に裂け目が入り、それが上下にスプリットし、再び合わさる。ふたつにスプリットした場所では、包み込まれた空間が生まれる。・・・

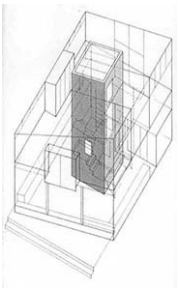
「福島潟情報館」
生態系の保護されている潟の傍らに、道路を挟んで市民のための空間がつくられる。潟へ入るにはこちら側に車を置いて、道路を渡ってもらう必要がある。そこで、歩道橋という一種の道の延長体としての建築が考えられた。
螺旋を描いて登るチューブ状の階段室があって、その外側にもうひとつの螺旋を成す幅広の緩やかなスロープがまとわりつく。建物の主要な部分はこれらの動線空間がつくり出す。・・・

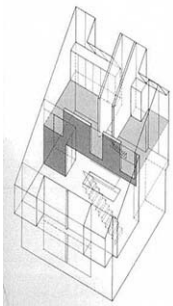
僕たちが「つないでいるもの」よりも「つなげられるもの」に優位を置きがちなのは、僕たちがまさにモダンの時代に生きているからである。・・・そして、今度はその「つなげられるもの」がおのおの役割を担うはずだということになり（機能の発生）、またそれらが組み合わさったものとして全体がとらえられることになる（構造の発生）。これが科学の根本であり、おそらくは「機能主義」が前提にしてきた思考方法のはずだ。機械の美学もこういうところから生まれた。・・・

No. s-95　明確なかたちをもった部分と何でもない殻

―創作論スケッチ 2 ――奥山信一，　jt9510

［連作名］明確なかたちをもった部分と何でもない殻
私は、この数年間、さまざまな建築家による設計の方法論を、言説のレベルから眺めてきたのであるが、そのことを通して、空間に関する建築家の構想力は、空間の体系的側面と現象的側面というふたつの極を位置づけることでうまく説明できるという実感をもった。・・・今回のふたつの住宅の設計を通して考えてきたことは、おそらく今述べた建築家の構想力レベルでのふたつの極を同時に思考し、論理化できないかということであるかもしれない。・・・


本町田の住宅


柿の木坂の住宅

かたちの構成法について、あまりにもイノセントな状況が数年前から続いている。何も目新しいかたちを次から次へと生み出せばよいということはない。しかし、それにしても何の論理も介在せず、無批判に何らかの過去の美学のみを継承した方法が流布している。・・・問題なのは、かたちをつくる構成法に関する論理の有無と、その良否なのである。
これまで、建築のかたちとは、建物の全体あるいは部分のどこかにあてがわれた概念だったのではないだろうか。それゆえ、表層的で、装飾的で、何らかの意味をもたらすサインとかたちの問題は直結していたのである。・・・多かれ少なかれ全体をつくらざるを得ないが、全体よりも部分が主導する空間をつくれないものであろうか。

何でもない殻の中に、明確なかたちをもった部分としての要素を置くことで住宅の空間を成立できないかと思っている。それはきわめて建築の部分に意識を集中した方法であって、全体を希薄にさせながら、なおかつ部分に自律した意味を担わせられる、ひとつの方法ではなかろうかと思っている。そこで問題になるのが、その明確なかたちをもった部分をいかにしてつくり出すかということであるが、前作の「石神井公園の住宅」では、通常のスケールを超えた建築化された家具という概念を提出した。そしてそれをジャイアント・ファーニチュアと呼んだのである。
「本町田の住宅」では、上下２層のヴォリュームに光の筒としての階段室を貫入させた。したがってこの階段室の筒は、断片としてそれぞれの層に現れている。・・・それに対して「柿の木坂の住宅」では、計画的な条件の厳しさもあって２階主室に表現を限定したので、ここでのコンセプトの現象的側面がより明快に現れてくる。さほど広くないこの主室の中に、黒く着色された屋根裏階としての巨大な家具が、一部水回りの箇所で床面に接地しつつ浮かんでいる。・・・
「石神井公園の住宅」では、収納や設備が組み込まれた壁柱としての家具を主室に林立させることで、家具の森とでもいえる空間が現象することとなったが、それ

に対して今回のふたつの住宅では、そうしたジャイアント・ファーニチュアを、規模の問題もあって、分散させずにできるだけひとつにまとめ、さらに内側に人が入り込めるような家具の空間化を試みている。つまり、先ほど述べた「モノの体系」と「人の体系」を一体化させようとしているのである。何でもない殻としての家全体を大きな家具とするならば、その中に置かれた部分としてのジャイアント・ファーニチュアも家具であり、人はそうした家具の中に入り込み、移動し、モノの配置は人間の所作と同格になる。

No. s-96　トータルシステムとしての独身寮

――シミズ独身寮パッケージ「PLUST-21」

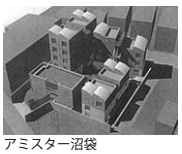
――岡本宏・宮下正毅・栗山茂樹／清水建設，　jt9512

［連作名］

このような社会ニーズの変化に対して、従来は発注者からのおのおのに異なる条件に従って対応していたが、同じ用途の依頼を大量にまとめることができるという総合建設業の特徴を生かして独身寮を個別案件対応としてではなく、施設群としてとらえることにより、①品質の向上とその安定供給、②低価格のプライベート商品の開発、③設計・施工・メーカーにかかわる生産システムの効率化を目的として開発されたものが「シミズ独身寮パッケージ PLUST-21」である。
これはワンルーム化している独身寮の寮室をユニットパッケージとしてとらえ、室を構成する各パーツ（照明、システム家具、ユニットバス、玄関扉など）を、当社のノウハウと専業メーカーの技術力を生かしてプライベートブランドとして共同開発し、標準化したものである。それによりおのおの異なるプロジェクトにおいても、高品質な寮室を効率よく供給することが可能となった。
また一方で、そのプロジェクト固有の発注条件、敷地条件などに対応したよりよい解を求めるために、多くの力を注ぐことができるようになった。

メディア ハイツ南

アクアス青葉台住宅


アミスター沼袋

「PLUST-21」の開発内容は、各プロジェクトで共通に利用できる寮室内の構成パーツに限定して、各専業メーカーと共同開発したものである。これらは、寮生活を営むうえで、使い勝手のよい、機能性を追求したプライベートブランド商品となっている。

●共同開発品
マルチウェイ照明
ワンタッチで直接照明にも間接照明にもなるマルチウェイタイプ照明。

システム玄関扉
寮生のプライバシーを確保するために遮音性能を確保した玄関扉。ドアクローザーを内蔵型とし、ドア枠に室名・名札をセットし、シンプルなデザインとした。

タイルカーペット
先染めナイロン糸使用による深い色調とグレード感、耐久性を確保。また汚染処理済みでメンテナンスも容易なオリジナル商品。

高機能ユニットバス
居室との床レベル段差を解消し、天井高を既製品より 150mm 上げ圧迫感をなくした。日常生活に必要な収納、コンセント類を設置したオリジナル仕様。

システム家具
ミニキッチン、ランドリースペース、収納スペース、下足入れを同じフェイスのシステム家具として開発。

物干し組み込みバルコニースクリーン
光・風を入れながら視線をカット。物干し用フックを組み込んだバルコニースクリーン。

電気温水器
深夜電力利用の貯湯型電気温水器を採用。残湯ランプ、追焚き機能を設置。

No. s-97　インターネット空間の断片

柿ノ浦の家・灰塚の家・House-Ku からの考察

――西宮善幸，　jt9602

［連作名］**internet 空間**

・・・私は、小さな場の特性を見つけながら「住宅と家族」そして「共同体と住宅」とはどうあるべきかを考え設計を進めている。

柿ノ浦の家

灰塚の家

House-Ku

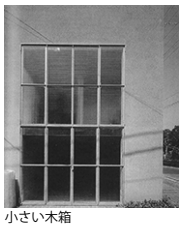
住宅という単位とその中で生活するヒトの単位との関係は、1 対 1 で対応するような単純な関係ではなく、おのおのが相互関係をもつ「空間」を構成している。また、住宅の空間構成は、その住宅の集合の仕方と密接な関係があり、その集合全体を見ていかないとわからない。そこいは、個人⇄個人、個人⇄家族、個人⇄共同体､家族⇄共同体といったさまざまな関係が交差し､飛び交っている｡こういった相互関係を、建築的には閉じる、開く、移動、連続、覆うといった処理で操作している｡この３作品の住宅における相互関係の特徴を､立地条件による場所性と、その建築的処理として以下に記す。
これら３作品は共通してヴォイドなスペースを建築が囲い込む、いわば古典的なコートヤードハウスととらえている。機能的には分節された各空間が､コートヤードを囲む一体空間とし、空間の流れ、つながり、連続を促す構成である。

各コートヤードは、あり様と配置との関係には違いがあるが、それぞれに対話を深めながらも同時に牽制しあったものとなっている。それは公の領域と、私の領域とを仲介するニュートラルなスペースともなっており、風と光を集め、続く領域へと送り出す装置となっている。そして、家の空間全体へとほとんど均等に通じ合っている。外部でも単なる「外」としてではなく、ひとつの部屋と同等の性格をもつものとして扱い、また、内部にある部屋でも「連続した外部空間」として扱っている。ここを通して共同体の生活を垣間見、家族の息づかいを感じ取る。それは日常生活に刺激を与え、創造や潤いをもはや成立していない。いい替えれば「internet 空間」といえる。世界中の情報を国境を越え瞬時に手にすることができる「internet」のようである｡・・・この「internet」空間は、共同体、家族、個人の網目のように張り巡らされたネットワークを自由に選び出し、情報を手に入れることのできる場となっている。つまり、家族の中でのかかわりや地域の人びとのかかわりも、ここを通じてお互いに語りかけ、意識しあった形で構成されている。この空間は現代の家族、住宅が抱え込んでいる問題を、建築的側面より解答を引き出すひとつの空間化である。

No. s-98　原初の箱 ――葛西潔，　jt9604

［連作名］**木箱**

今回のふたつの住宅の建主の職業は経営コンサルタントとバイオリニストであり、住宅内にその職業のための機能が要求された。だから併用住宅ともいえる。そこに住む家族の人数はそれぞれ単身と 4 人であり､それに伴うさまざまな要求もあった。しかしそれらの要求に対処するために設計をしたのではない。それぞれの住宅に特徴が表れたとしても、そのことと個性的な職業や家族構成とは関係がない。人間のための住空間を提案する建築家が設計する住宅の本質は、どのような条件においても変わらないはずだ。
・・・建築家には生活の細かい問題を克服することが求められる。建築家はさまざまな工夫や仕掛けを提案する。しかし個人の生活を追いかけることが建築家に求められるすべてであろうか？　そのような実用的な解決手法は、現在ではハウスメーカーに求めればよい。ハウスメーカーは多くの設計士を抱え、組織的な設計体制をもつ。・・・建築家は誰よりも個性的な考え方を示さなければならない。なぜなら、その思考の振幅の大きさが新たな普遍性を生み出す可能性をもつからだ。


小さい木箱

傾斜地の木箱

段地の木箱

私は「小さい木箱」の発表に際して、「建築家のつくるべき住宅は小さければ小さいほど、生活を限定しないのびやかな空間が必要である」と書いた。今回のふたつの住宅は小規模であり、広い空間の獲得には物理的な限界があった。しかし私はいつものように住宅内にのびやかな空間を求めた。それに加えて小住宅だからこそ有効に働く住宅デザインの手法を探った。
忙しい現代の人びとは､生活する中で空間を意識することがあるのだろうか｡現在、

人間と空間との関係が希薄になっている。本来「住まう」ことの実感は人間と空間とのぶつかり合いの中から誘発されるのではないか。ものとしての住宅と人間との存在を認識するとき、人間と住宅との原初的な関係を感じる。それが人間と住宅とのはじめての接点である。全体を意識しやすい小住宅ほど、この関係の実感をもつはずだ。私はこの点に小住宅のデザインの可能性を見る。その答えが裸の骨組みをもつ単純な箱である。
私のつくる住宅の木箱は箱を構成する 6 面が可視的な単純なものだ。1 枚の写真でも理解し得る「ただそれだけの箱」が私の理想だ。内部に視線を遮るものをなくし、壁は外周だけにする。住宅全体を占めるひとつの広い空間を求める。外部からはもちろん、内部からも住宅の全体を見わたせる。部分からではなく全体から住宅を語りたい。それはものとしての住宅自体を意識させたいからだ。仕上げ材を施すと住宅の構成はわかりにくい。仕上げ材や部分の詳細にこだわることが住宅の存在を希薄にしている。私は明快な住宅像を望むため、仕上げ材やディテールをできるだけ省いた。内部の仕上げを省くことは、柱・梁はもちろん垂木や根太や間柱などの構造材を表すことになる。そこに表れる裸の骨組みは、全体の構成を理解させる。その結果、構造がむき出しの箱は、住宅を単純な箱として強く意識させる。

No. s-99　光の中の 6 つのキューブ ――葉祥栄，　jt9605

［連作名］**光の建築**
自然現象を意識し知覚することによって、私たちは前進で反応し、応答しながら生きている。とりわけ「光」によって、私たちの心理的状況は変化し肉体的反応も大きく異なる。刑罰としての地下牢を考えてみれば、生命にとって根源的な「光」を、私たちは決してないがしろにしてはいけないと思う。

「光の建築」としてこれまでつくってきた「光格子の家」、「日時計の家」、「光十字の家」、「慈愛園乳児ホーム」、そうしてこの 6 つのキューブの家に続いて、この 3 月には日時計の家Ⅱとして、老人保健施設サンダイアルが完成した。

サーリネンのミラーハウスに示唆を受け、ルドルフの繭の家に倣って、蝶の家にしたいと思いながらでき上がった「光格子の家」から 15 年を経て、相変わらず同工異曲であることを認めないわけにはいかない。しかし、これからも「光」をテーマにしたいと思っている。

光格子の家

日時計の家

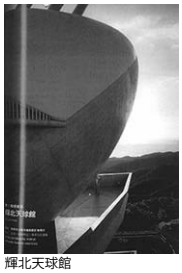
光十字の家

6 CUBES IN LIGHT

No. s-100　海のシルクロード建築構想 ――高崎正治，　sk9608

［連作名］**地球建築**
私の活動拠点のひとつである南九州は海に開かれ、東シナ海～南シナ海～インド洋～アラビア海～地中海へ連なる「海のシルクロード」と呼ばれる海洋文化交流圏に含まれる。・・・
鹿児島建築コスモロジーとは、「海のシルクロード」海洋文化交流圏に点在する諸文明との対話、交流を通して生まれた歴史や風土、自然、生活文化に発する地域アイデンティティと、その建築形態に象徴的に顕現し、地域と世界をつなぐ情報発信の拠点として地域活性化に寄与する多彩な活動を興し、地域参画型の文化創造の場を目指すものであり、本来建築が有すべき芸術性、文化性の「社会化」を南九州各地で実践的に展開するネットワーク構想である。

すでに、鹿児島建築コスモロジーを形成するものとして、第 1 地球建築（輝北天球館）、第 2 地球建築（照明保育園）などが存在し、それぞれに地域活性化を担う中核施設として、また地域文化発信、創造の場としても注目を集めている。第 3 地球建築となる「南溟建築」においては、弊社の研究機関である「TAKASAKI 物人研究所」が近年とくに研究課題としてきた「まちづくり、人づくりに実践的に協働する建築計画」の中で、個の建築と個の建築を結ぶ意識化された地域設計のもとで生き生きとした広域空間が形成され、やがては心の風景となる建築のネットワークによる地域社会を考えており、この社会風景が、生活性の価値の再構築・転換につながり、新しい地域創造の気運を招くものとして期待している。・・・
今後も第 4、第 5…の「地球建築」のプロジェクトが始動するであろうが、個々の建築を有機的に包含する鹿児島建築コスモロジー構想は、さらに「海のシルク


輝北天球館

照明保育園・第 2 地球建築

南溟建築

ロード建築構想」に包含され、南九州の「地域性」・「生活性」が「世界性」につながる芳醇な文化圏となることを標榜している。海のシルクロードに沿ってそれぞれの地域の風土や文明が密かに放つ、かぐわしいイデアとの邂逅を求めていきたい。

No. s-101　複雑性の海に浮かぶ装置体 ――早川邦彦，　sk9608

［連作名］装置体

クリティカリティ――機能と形態

文化人類学者であるアモス・ラポポートはその著書『House Form and Culture』の中で、クリティカリティ（CRITICALITY）という概念について述べている。つまり、クリティカリティとは、機能（性能）に対応する形態の必然性の度合い、といってよいだろう。たとえば自動車とジェット機を比べれば、ジェット機のほうがより高度の機能が要求されるため、形態の自由度は少なくなる。つまりクリティカリティが高い。クリティカリティが高いほど形態への操作性は少なくなる。

霧島彫刻ふれあいの森アートホール［U］

横浜港国際客船ターミナルコンペ応募案［P］

福島県産業見本市会館コンペ応募案［P］

クリティカリティの低い空間へ

クリティカリティの概念から、“ 速度 ” と “ 複雑性 ” を加速する世界に対応する建築をとらえようとしたとき、どのようなことがいえるのだろうか。社会の複雑性に対し、器としての建築もクリティカリティを高め、厳密にその複雑性に対応していく。という方向も考えられる。一方、その複雑性を大らかに包み込むシンプルでクリティカリティの低い器として建築をとらえていく視点もある。私は後者のほうが “ 速度 ” という要素がさらに加わったとき、この複雑性の世界に対応するにはふさわしい選択ではないかと最近考えている。

テクノロジーと装置体

一方、建築をインダストリアルデザイン的な発想から組み立てられないか、ということに私は興味をもっている。その言葉の中に、精度の高さ、技術の集積というニュアンスを含む “ 装置体 ” というイメージを通して建築を見直すことへの関心といってもよい。クリティカリティの概念から見れば、自動車や AV 機器などのインダストリアルデザインによるプロダクト（装置体）は建築に比べクリティカリティは高いので、この関心は今まで述べてきたクリティカリティの低い空間への志向と矛盾するものとなる。・・・

私の中で、クリティカリティの低い空間とクリティカリティの高い装置体としての建築という相矛盾する関心が、現在ひとつの明確な建築像に結びついているわけではない。今のところ、それは構造・設備・工法という分野を横断したテクノロジーに支えられつつ、開放性とフレキシブルな空間を内蔵した装置体という素朴なイメージでしかない。クリティカリティのふたつの落差を埋めていく中に、これからの私にとっての設計行為があるように思われる。

装置体に向けて

「下関市営白雲台団地」は、・・・今まで述べてきたような、装置体として建築をとらえるという視点から見れば、そのイメージと実体との間には距離があるのは確かである。しかし、形態の操作を抑えた単純明快な平面・断面構成や、住み手にとってフレキシブルに対応可能な余白の導入など、その方向へ一歩踏み出したプロジェクトであった。

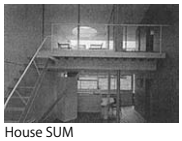
一方、オープンコンペで最終案となった「霧島彫刻ふれあいの森アートホール」は、装置体としての建築というイメージを、現段階ではかなり明快に表現できたのではないかと思っている。このプロジェクトは「横浜港国際客船ターミナルコンペ応募案」と「福島県産業見本市会館コンペ応募案」を含めた 3 部作のひとつとなっている。海上に突き出た桟橋の上に軽やかに浮かぶ、多様な速度の錯綜するネットワークを包み込んだチューブ装置体が「横浜」であった。そのイメージは、インフォメーション・チューブというコンセプトで「福島」へと引き継がれていった。情報の受発信基地となる展示空間をメカニック・スペースやサーキュレーション・スペースなどのゾーンが 3 方を覆う装置体が私たちの提案であった。

そして「霧島」は、従来までの仰々しい美術館という形式から大きく離れ、人びとが生き生きと芸術に接することのできると同時に、多様な企画に対し最大限のフレキシビリティをもつ空間を、4 周にサポートゾーンが覆うダブルスキン構成のチューブ状の構成としている。風や雲の流れや太陽の動きなど、自然のうつろいの中でのびのびとアートに接することができる装置体としてのアートホールは、

既存の美術館のもつ密室的で閉じた形式を破り、開放性をもったパブリックな建築となることが目指されている。

No. s-102　場所についての覚書き ——塩田能也，　jt9608

［連作名］**つなぐ場所**


House SUM

House KAS

House TAK

「House SUM」と「House KAS」、そして今回の「House TAK」では、基本的なところで共通した、いくつかの方法をとっている。
最初の住宅を設計したときから、それぞれの機能領域には、それぞれ固有の性格を与えるようにしてきたし、それらを貫くように動線を設定してきた。
しかし、「場の可能性」というものについて考えるようになってから、大事なのは、動線によって貫かれていく場所のほうよりも、むしろ場所を貫いていく動線のほうではないかと思うようになった。
あえて機能に即していえば、“つなぐ”とか“移動する”とかいう、ただそれだけの空間、その曖昧な空間のほうが、場の可能性をもたせやすいのではないかと思った。機能的に特化していないぶん、人もそこに固定した先入観なしに自らの行為を発見しやすいのではないかと考えたのだ。
そして以後、この空間を、場所と場所をつなぐもうひとつの場所としてとらえ、積極的に位置づけようとしてきた。
「House SUM」の２階のアトリエ奥の小さなステージから始まって屋階の寝室へ至までの、一連の小さな場所の郡は、この意図に沿ったものであり、ルーフテラスもその延長線上にあるものとしてとらえられている。テラスとか開口部付近も、内と外を「つなぐ場所」として考えようとしたからである。
「House KAS」は「House SUM」よりも面積的には小さいのだが、考え方をもっと徹底させた表現をとっている。トップライトから落ちてくる光と通常より大きな踊り場をもたせた階段、その階段がそのままつながっていく食堂のステージ、食堂から居間に向けて上がっていく段状の床、上に何かあるのではないかと思わせる（実際、小さな塔屋と物干し台があるのだが）タラップと大きな丸い穴などがそうである。

「House TAK」の・・・３つの庭のうち、中央のものは室内である。広間ととりあえず名づけられたこの庭の西側端部に、家族が集まる拠り所になるような場所を設定し、ここと棒状部分の場所群をつなぐ場所として、いわば廊下が肥大化したようなものとして、この「内の庭」はとらえられている。・・・

No. s-103　未知の近代建築に向けてⅣ
ドミノ 1996　かわぐちかいじ仕事場住居 ——岡河貢，　jt9609

［連作名］**ドミノ**

ドミノ 1996

ドミノと名づけた一連の住宅で、近代建築における床スラブの問題をそれを支える柱（ドミノ 1994）、それに開けられた穴（ドミノ 1995）をめぐって、建築と住宅の新たなありようを思考してきた。近代建築がその外観のイメージとして輸入され無根拠に消費されたわが国の近代に対して、近代技術がつくり出す床スラブというもっとも初源的な事柄から思考を始めることによって、未知の近代住宅をつくり出すことが可能かという探求である。

この「かわぐちかいじ仕事場住居」は、即物的な意味で床の面積を獲得する戦いから始まった。約 70 坪の敷地に建つ建物に５人の家族と７人のスタッフとひとりの祖父が生活し、かつ、かわぐちかいじとスタッフが仕事をする床面積を確保することが条件であった。

地上２階・地下１階のこの建物には、レベルの異なる７層のスラブ（床）が用意された。つまりすべての階が２層のスラブによってつくられた。法規的に緩和される限界まで床面積としてロフトを獲得するためである。・・・
螺旋階段とブリッジがこれらの機能的に整理された部屋を結びつける。その周りのスラブにあけられた穴の垂直の連鎖は、高さ約 10m の筒をつくり上げた。穴という方法がここで進化した。この空間は、従来の意味での具体的な機能をもつものではない。建築の内側でもなく外側でもない曖昧なヴォイドとしてつくられた。

建物の中に、外でも内でもないヴォイドを内包することによって、生活と仕事は結びつけられかつ切り離される。この空間を通過することは、生活のための空間でも仕事のための空間でもない場を存在させることになり、生活と仕事のふたつの時間とふたつの空間の同時並存をこの建物の中で可能にしていく。ふたつの異なった時空の連結がこのヴォイドの機能である。

No. s-104　諸分野統合としての建築 ――渡辺豊和，　sk9610

［連作名］商業建築

「龍神村民体育館」において私は、公共建築も煎じ詰めれば商業建築と変わるものではない、と書いた。その思いは現在も少しも変わってはいない。しかしこの場合の商業性は、ファッショナブルなデザインや意識を高揚させるためのものとして取り扱われているのではない。商業を成立させる買い手の欲望・欲動の集積が空間表現としてどう顕現されるのか、しかもトルコ・イスタンブールのグランドバザールのように、それが何百年もの時間的スケールを越えて存在し得るような建築空間となってはじめて、建築のポピュリズムは花開く。そのような意味で村落の居住者の夢や欲望、欲動が空間化され得なければ、そこに建築をつくる意味はまったくなくなってしまう。「龍神」における「商業建築」とはそのようなことを指していたのである。・・・今回掲載している北海道網走市の北にある「上湧別町ふるさと館 JRY」や奈良県吉野山中の「黒滝村立森のこもれびホール＋野外ステージ」も基本的には「龍神」で考えたこととは変わらない。「黒滝」では村の若衆宿として企画・計画したし、「上湧別」でも企画段階で相談にあずかったから、これも「龍神」と仕事の仕方はまったく同様である。
・・・イメージの段階でその土地の神話や古代遺跡をモチーフとしたことを、建物の発表に際して述べた。・・・人びとの空間欲望・欲動とはきわめて深いところに眠っている。まさに無意識であり、これが時折表層に浮かび上がる。それをかつて吉本隆明は「共同幻想」と呼んだが、・・・ただしこの共同幻想を的確に把握するにはきわめて鋭敏な感受性を必要とする。要するに作者自身の意識の鏡に彼らの無意識が鮮明に映し出されなければならない。それは至難の技であるが、幸い、神話・伝説・遺跡はそれを助けてくれる。

神話・伝説・遺跡を建築表現のモチーフとするとしても、それを比較的直接に表現するため具象性の強い形態・空間を選択する・・・

龍神村民体育館

黒滝村立森のこもれびホール＋野外ステージ

上湧別町ふるさと館 JRY

No. s-105　論文タイトルなし ――谷口吉生，　sk9611

［連作名］門構え

建築の前面には、各施設のロビー空間を一括して覆う大空間がある。このような門構えの正面構成による建築の設計を、すでにいくつか行なっている。「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館」の設計においては、美術館の建築と駅前広場を一体化するため、壁画がある門形の大空間を前面に設けた。「慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部」と現在建設中の博物館の設計においても、建築の正面を特徴づけると同時に、校庭や庭園の空間を建築に取り込むため、鉄骨造のキャノピーを前面に設けている。
この建築の設計においては、敷地に隣接する公園の空間を取り込むため、高さ14m 幅 83m の構造体を前面に設けた。両端の鉄筋コンクリートの壁と、垂直荷重だけを細い丸柱が支える鉄骨造の屋根による、軽快な半戸外の空間である。スポーツの後や観劇の幕間に、公園の自然と一体となった大空間の中で、人びとが出会い、休息し、語り合うための場所となっている。

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館

東京国立博物館法隆寺宝物館

つくばカピオ

No. s-106　第三の地形―自然とのダイアローグ――團紀彦，　sk9611

［連作名］ランドスケープ

「新島グラスアートセンター」、「新島島民塾」、「八丈島のアトリエ」、および「日吉ダムビジターセンター（Meseta Ⅱ）」から、「旧軽井沢倶楽部ハウス」を経て、現在計画中の「日吉メモリアルホール」、「足摺岬国民宿舎」ならびに「上林暁文学記念館」に至る一連の自然環境のなかにはめ込まれた作品に共通する点は、〈ランドスケープのなかの建築〉と〈ランドスケープとしての建築〉の双方の性格を具有していることであると思っている。

〈ランドスケープのなかの建築〉の場合には、建築の周囲の存在する諸要素に対応した関係性をもってして自然環境と建築を縫合しようとする場合と、一見異質とも取れる要素を既存の環境のなかに投入することによってもたらされる異化作用から全体との新たな関係性をつくり出そうとする方向性があろう。

一方〈ランドスケープとしての建築〉は、建築の周辺環境への対応能力や異化作用といった外界との関係性を意味するのではなく、建築そのものが、自然地形のもつ特性をどれだけ兼備することができるか、といったいわば建築自体のランドスケープ化を意図している。木や丘の上に登ったりすると、それまで見えなかった地形の関係性が露わになって、隠れていた地形の次元が現前化することがある。またコーンウォルのローマ帝国の堡塁や、瓦礫のなかのアクロポリスは、かつての人類の構築物として明確に自然と対峙していたものだが、永い時間の間に風化し第二の地形から第一の地形に同化すつつある。第三の地形は、こうした人工物と自然地形という対立の中間に位置してそれらの関係を調停する、いわばミディアム（建築の泥）なのである。

旧軽井沢倶楽部ハウス

・・・プログラムに対応して分解されたいくつかの建築的要素を、カラマツ林の傾斜面に配置しながら、基壇的なミディアム――道路擁壁の浅間石積みと連動させた――によって内部的に統合させつつ全体としてのランドスケープを一体に縫合しようという試みなのである。

上林暁記念館

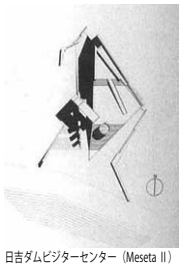
・・・この建物がメタフォリカルなつながりをもっている海との関係のように、文学との関係もまた、上林暁の文学を内蔵するひとつのランドスケープとして計画した。・・・

日吉メモリアルホール

ここでも建築物のプログラムに対応したフォルムの設定をするなかで、ダム堤体に対応したスケールの筒状デバイスを導き出した。これを、比較的サブプログラムの諸室を収めたミディアムとしての基壇部分や体育館から視覚的に分節させながら、河川と直交させて両岸に渡って連続したエレメントとして見せ、堤体と対峙する、または前構えとしての水門（ゲート）の役割をイメージさせるようにした。・・・

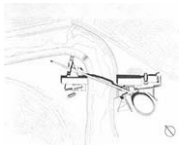
足摺岬国民宿舎

宿泊室の部分は傾斜面の掘削土量の低減化を図るため、広いテラスをつくりながら斜面に沿った断面計画を採用しており、上部では建物ヴォリュームを抑えながら既存の広場と屋根面をつなげて、前方に広がる展望広場としてデザインした。


日吉ダムビジターセンター（Meseta Ⅱ）

旧軽井沢倶楽部ハウス

足摺岬国民宿舎［U］


日吉メモリアルホール［U］

上林暁文学記念館［U

No. s-107　住宅のコストセービング ――野沢誠，　jt9704

［連作名］輸入材

「Co-tached House」は同居型の２世帯住宅（3 世代住宅）、「De-tached House」は隣居型の２世帯住宅、「Big Barn」は納屋付住宅であるが、これら３つの住宅の予算は『一般的」な基準に基づいており、われわれの設計者にとって厳しいものであった。
そこで、コストセービングを意識しながら設計に取り組むこととなった。・・・国内ですでに取り扱われている輸入品を使うのではなく、自分たちで直接製品を輸入することを考えたとき、効果的なコストセービングが図れることがわかった。今回は、製品のもつ性能と工法の両面から判断して輸入品（直接輸入）と国内製品を状況によって併用することにした。
それぞれの住宅で輸入した製品は、「Co-tached House」では木製ペアガラスサッシュ（外側：アルミクラッド）＋ウッドシングル（外壁材）、「De-tached House」では木製ペアガラスサッシュ＋ウッドシングル＋構造材（2"" × 4"" 工法）、「Big Barn」では木製ペアガラスサッシュ＋ウッドシングル＋構造材（2"" × 4"" 工法）＋内部枠付木製ドア＋キッチンキャビネット＋イエローシダーピーリングボード（天井仕上げ材）である。
これらは一住宅単位ごとの輸入になるので、そのメリットは量的な面にあるのではなく、むしろ必要なときに仕入れることで流通のコストが節約できるという点にある。「De-tached House」や「Big Barn」ぐらいの量になると、工事の工程に合わせるために、現地の製作期間および通関にかかる日数を逆算して徐々に発注し、国内でのウェイティングをなくすことが最大のポイントとなる。

ともすれば、輸入すればコストダウンが得られると思われがちだが、今回のように現地レベルでコストセービングしなければ輸入の効果が得られない。・・・
現在のところ、コストセービングを目的として輸入する製品の量は「Big Barn」がマックスであろう。・・・

Big Barn

De-tached House

Co-tached House

No. s-108　原型としての「箱の家」 標準化とその展開 ――難波和彦，　jt9707

［連作名］箱の家

僕は箱の家― 1 を完全な特殊解のつもりで設計したからである。箱の家― 1 はそれまで設計した住宅の中でもっともローコストの住宅であり、当初は実現できるかどうかさえ自信がなかった。ぎりぎりの予算内で与えられたプログラムを実現するには、平面、空間構成、形態、構造、仕上げ、構法など、すべての条件を徹底的に単純化するしか方法はなかった。その結果、室内はほぼ一室空間となり、単純な箱型の住まいとなった。・・・
もっとも意外だったのは、特殊解であるにもかかわらず、箱の家― 1 に興味をもって連絡してくれる人たちが、この住宅を自分たちの住まいにも適用できるプロトタイプ（原型）のようにとらえていたことである。
・・・
こうした特性はすべて、コストパフォーマンスを最大限に確保するために、それぞれの設計条件から余計なノイズを取り除き、システムを単純化した結果、生み出されたものである。あくまでも固有な条件からスタートしているのだが、個々の条件を徹底的に単純化していき、それがある限界を越えると、解答は一挙に普遍性をもつようになるらしい。箱の家― 1 はそのようなプロセスを経てプロトタイプへと変換したのだと思われる。
そのようなわけで、予算、家族構成、敷地条件はそれぞれ異なるのだが、基本的なコンセプトは箱の家― 1 と同じような木造住宅を、何戸か平行して設計することになった。
今回発表するのは、すでに完成した 4 戸と設計中の３戸である。設計条件の違いに応じて、プロトタイプとしての箱の家― 1 がどのように展開したかを報告してみたい。

箱の家のコンセプトを展開させるにあたって採用した方法は、一言でいえば「標準化」である。すなわち、箱の家― 1 に対してクライアントが注目している特性を、それぞれシステムとして標準化し、それを展開させて組み合わせていくという方法である。

箱の家 1

箱の家 10

箱の家 11

箱の家 17

箱の家 19

箱の家 21

箱の家 9

箱の家 5

まず物理的な性能とメンテナンスフリーを確保するために、材料とその構法を標準化した。・・・
つぎにプランと高さのモデュール寸法を標準化した。・・・
このモデュール寸法にもとづいて、テラス＋バルコニー、階段＋便所、浴室＋脱衣室、納戸＋収納、台所＋収納といった付属的な空間を、一種の「機能モデュール」として標準化し、これを組み合わせてプランニングするという方法を取った。・・・
設備システムも、ガス熱源による給湯と床暖房を標準装備し、配管システムや照明システムも、器具を含めて標準化した。・・・

こうした設計の標準化は、とくに目新しい方法ではない。建築家は大なり小なり自分のデザイン・ボキャブラリーの標準化を行っているからである。しかし箱の家シリーズで試みた方法は、通常のデザインの標準化とは、いささか異なっている。大きな違いは２点あると思う。
ひとつは、部分要素だけではなく、全体の空間構成までも標準化しようとした点である。つまり箱の家―１の単純な箱型と開放的な一室空間のコンセプトを、可能なかぎり実現するようにしたわけである・・・
もうひとつは、標準化する要素から恣意性や嗜好を可能なかぎり排除し、徹底的に単純化している点である。これはいわゆる建築家の個性や感覚を反映した通常のデザインとは対極的な標準化である。むしろ工業化における標準化の考え方に近い。しかし箱の家シリーズは工業化を目指しているわけではない。あくまでコストパフォーマンスを確保しながら、空間のコンセプトを明確に表現するための標準化である。

・・・箱の家は決して一般解ではないし、将来も一般解になることはないだろう。はっきりと確定できないが、箱の家のコンセプトを受け入れているのは、限られた世代の、特定の思想をもった人びとにすぎないからである。
あくまで特殊解に徹しながら、なおかつ普遍性を目指すこと。つまりある特定のライフスタイルをもつ人たちに対して、それにふさわしい住まいの原型を提案すること。
これが、現代の建築家が果たすべき社会的役割ではないかと考えている。

No. s-109　丸太柱と鉄のビーム ――石井和紘，　jt9707

［連作名］丸太柱

青森の三内丸山遺跡の中心的遺構は、６本の大きな栗柱による、高さ 16m の櫓の復元である。それを見て、これを鉄骨で梁を組んだら、素晴らしい現代建築になるのではないかと思った。・・・

北巨摩シャレー

以前に「丸太柱の家（間邸）」というのを設計した。それはコンクリート２層の住宅の中に丸太の２階建てを入れ込んだものである。このときにはコンクリートの都市に対する「反」の気持ちが強くあったように思う。その気持ちは残念ながら中止になってしまった世界都市博覧会の 333m の「1 万人の茶室」にも生きていて、丸太の木組みも、あえてジョイントをつくらず、「反」の気持ちを強くもったものであった。昔、「清水の舞台による数寄屋」をしたときも、ラワンではあったが、丸太の柱をサッシュ組み込みの柱とした。それも同様の気分であったかのように思う。「小坂町立十和田小中学校」で尺角の和田杉を 300 本使ったとき、尺角の材を取れなかった丸太を囲炉裏の周りに立てたとき、その材を太い太いと皆が感嘆してくれたとき、ああこれからは三内丸山のように丸太でいこうと思ったのだ。今回は敷地が都市とは正反対のところにあった。・・・それで木造に対する制約は何もなく、スッキリと鉄骨の梁でいくことにした。

No. s-110　鉄のこと ――木村博昭，　jt9710

［連作名］スチールシートの住宅

最初に、強い印象をもって鉄造の建築を意識したのは、ロンドンからスーツケースを片手に、不安と共にはじめてグラスゴーのセントラル駅に降り立った時だった。・・・
最後の４つ目は、スチールシート加工でつくられた蒸気機関車と蒸気船の乗り物である。・・・

1/4 Circle House

これらの鉄造物は、モダニズムの機能美や構造美と共に建築本来の大切な役割でありながらもしばしば忘れていた、思想の根源にもつながる、フロンティアやピューリズム精神というものを再確認させてくれる。

4つのスチールシートの住宅は、個々それぞれにその特性を生かし、異なった表情をもっている。最初にスチールシートを使った「A House」は、内外を隔て連続させる被膜装置となるファサードに、スクリーン状のマスクを被せ、スポーティな車のような表情をもつ。「3 in 1 House」では、鉄の可塑性を生かし、3つの住戸をスチールシートでひと塊のヴォリュームに包み込む、一体感のある戸建タイプの集合住宅ができた。その曲面形態は、流体学を駆使した流線型の乗り物を想起させ、自由な形態選択の可能性と、何かしら夢とロマンのある形態イメージを感じさせる。また、「N's ARK［野田邸］」は、震災後の新たな船出の箱船をイメージし、ここではスチールシートの外壁で、防御的に内庭を囲み静かな環境が確保され、通りに閉ざされ、庭に開かれた二面性のある住宅ができた。4つ目の「1/4 Circle House」では、恵まれた眺望を生かすため、ガラスボックスの中庭と対のスチールシートの構造により超横長の開口部の、パノラマ・ビスタを確保することができた。まるでヨットの船上から、海に浮かぶ島々を眺めているような雰囲気がある。
これらスチールシートを外皮に使った住宅は、客船のようにそれ自体が外装材と構造材を兼ねた1枚のスチールシートで包み、建物本体とは別に、外皮が自立するモノコック的構造を試みた構造体である。乗り物は、強い外皮とより軽量な面構造の一体型のモノコック構造によるのが普通である。それは、建築と比べれば形態の自由度、さらにその強度は遥かに強く耐久性も十分に確保されている。
スチールシートの採用は、建築の形態や構造的制約に縛られないひとつの試みでもあるが、さらに、加工性や精度の確かさ、手のかかる現地加工から、近年、建築自体が軽量化と工業化によってプレファブリケーション化とモデュール化は進み、プロダクト化への傾向も避けられないからである。

No. s-111　分有体への試み ――遠藤秀平，　sk9807

［連作名］コルゲート鋼板

連鎖性により生み出される不連続体を確保するものとして、鋼板の運用による連鎖帯を利用している。このコルゲート鋼板と呼ばれる波型製形板による試みは今回で6件目となる。いくつかの偶然と必然により、米国生まれの鉄板加工技術とかかわることになったが、当初より限定した可能性を追究したわけではない。主に施工性と経済性とにより選択されているが、鉄としての再利用度の高さや表面をメッキ加工できる点など、他にない魅力も有している。また6件の建物のほとんどが経済的な厳しさが前提となっていることも否定できない。そして、これらいくつかの試み自体が不連続な延長上にあり、相互に関連する部分を共有している。
まず最初に具現化させた「Cycle Station 米原」では、単純に屋根と壁を一体化し、連続的に用いることで部分的にではあるが構造性ももたせている。ここでは一枚の大きな連鎖帯による開放的状態が確保されている。次の「Healtecture 小森」では、この屋根、壁一体の連鎖帯による異なる線形での2面の構成を試みている。ここでは4層の高さをもつことから、ラーメン構造との複合化と曲線の芯を内から外に出し反転させることによる不定形なスリットが設定されている。これらふたつの連鎖帯のズレによる可能性を平面的に試みたのが「揖保川鮎種苗センター研究棟」である。ここでは平面的に異なる線形の壁を1階と2階それぞれに設定し、上下の空間がひとつの柱を接点として共有しながら独立的に展開される連続性を試みている。しかし、これらはいずれもが構造体として自立性を有しておらず、鉄骨のラーメン構造体に付加するものとしての恣意的選択の側面に増幅されがちであった。この限界に対して「TRANSTATION 大関」では、コルゲート鋼板そのものを構造体とし、ドーム形状や自立する逆L形状を並列的に設定している。そしてここでは、並列された多くの設定が地盤面との関係に強く方向づけられていることが確認された。それは地表から立ち上がる限定された壁面の角度により、他の並列するものとの差異が決定され不連続な多様性が生み出されることである。これらの延長上における地表の持つ限定性の解除を目的とした「HALFTECTURE 福井」では、屋根・壁・床の連続体を試みている。これは無人駅のプラットホームと待合いの計画であり、人工地盤が有する特異性により可能となる特殊解であるが、地上解以外では妥当性のある展開力を示している。しかし、小さな施設で

Cycle Station 米原

Healtecture 小森

揖保川鮎種苗センター研究棟

TRANSTATION 大関

HALFTECTURE 福井

SPRINGTECTURE 播磨

あることによるが、均質断面に変わりはなく、一方向の切断面が同一形状で連続することの限界からは逃れられていない。

これら一連の試みを通して今回の計画では幾何学的汎用性を有し、断面においても一方向での均質性に対し、特異点を設定せずに解除できる多様性の運用を試みている。必要スペースの確保は正円柱の外面を螺旋状に進展する形式と、その半径およびコルゲート鋼板の幅により設定される。これは反転する不連続性による増殖と、半径の選択とによる極大と極小における展開力を有している。今回の設定では補助的に門型の構造体を付加しているが、これは現行法の限界による現実的な選択のひとつである。・・・構造上の側面では法的な課題を残してはいるが、不連続に連鎖する形式としての具体性を有している。

No. s-112　森の中の簡素な囲い　3 つの山荘について
――香山壽夫，　jt9808

［連作名］**山荘**

この 3 つの山荘は、12 年前に完成し発表した私自身と家族のための「千ヶ滝の山荘」に連なるもので、そこで試みた概念と方法の展開といえるものである。もちろん、それぞれ住む人も地形も異なるから、独自の出発点をもっているということはいうまでもない。しかし自然の中に置かれた単純な箱形の輪郭とはめ殺しのガラスと板戸とを組み合わせて構成する開口部の仕組みは、すべてに共通する基本的手法である。

住宅とは、あるいはさらに広く建築とは、人を囲うものであり、周囲から内部を切り取り、それによってその内にある人と人を結び、そしてその上で、内と外をつなぐものである。この単純な定義は、私にとって、建築を考えるとき、あるいはさらに広く人間について考えるとき、ますます力をもつものとなってきた。

千ヶ滝の山荘

追分の山荘

四阿高原の山荘

No. s-113　向齢住宅設計ノート ――藤木忠善，　jt9808

［連作名］**すまい**

これは私たちの向齢住宅である。・・・私は、人を招くことができる、あるいは活用してもらえるような知的活動のスペースをつくれば、孤独にならないための情報の受信、発信にとってバリアフリーになるのではないかと考えた。・・・

この家は私が 20 代につくった「すまい／サニーボックス」、30 代に義父のためにつくり、現在、私が住んでいる「300㎡の家」に次いで、3 軒目のすまいということになる。現在では、住宅設計に特別な問題も感じられない恵まれた時代になったが、この 3 軒目のすまいは、それぞれの時代の問題を意識して設計し、そこに自ら住むことで自己検証をすることになったわけである。3 軒のすまいには、いずれも「単純な箱の内外にさまざまなプライバシーの段階をつくりながら自然なコミュニケーションを促す」という共通のテーマがあったが、当然のことながら、それぞれ、当時の自分の年齢や家族のライフサイクルに対応した住まい方の具体的な提案を伴っている。「サニーボックス」では、核家族が都心に住むための鉄筋コンクリート 3 階建てによる、開放的な都市型住居の試みがなされた。当時、私はル・コルビュジエが母親のためにつくった『小さな家』の本を読み、それに触発されてこの家を建てた。たとえ、小さくても精神的充足が得られる家ができるのだという確信が得られたからである。この「サニーボックス」には大きな反響があったにもかかわらず、日本の都市住宅には、その後、閉鎖的な方向に向かうことになった。一方、郊外に建てられた「300㎡の家」では木造の立体的空間の中に多様な対話の方法が提案されている。ここではくつろげる空間として、木、塗壁、タタミが積極的に用いられた。そして、3 軒目の「すまい／マウンテンボックス」は還暦を過ぎた私たちの向齢実験住宅となった。

すまい／サニーボックス

300㎡の家

すまい／マウンテンボックス

No. s-114 「家具の家」の開発 ――坂茂， jt9809

［連作名］**家具の家**

1995 年に完成した「家具の家」は平屋の建築だが、モジュール化され内外壁の塗装まですべてを家具工場で製作されたフルハイトの家具を主体構造として設計された、はじめてのプレファブ構法の試みであった。
その後、1996 年に完成した「家具の家 No.2」は、このシステムの商品化を目指し、2 階建て、延床面積 35 坪の 4 人家族用住宅のプロトタイプとして設計された。2 階建てといっても構法的には平屋とまったく同じで、水平剛性を確保した 2 階床の上に同じ手順で家具を並べ、1 階同様ラグスクリューで家具同士と床の梁とを固定する。ユニット的にはモデュールを変えず、新しいバリエーションとして、洗面台、キッチン、階段、空調入りクロゼットなどを加えた。また、家具のついていない単体の壁ユニットを加えることにより、プランのバリエーションは大きく広がった。
今回の「家具の家 No.3」においては、建方をいっそう単純化するため、1 列の連続した壁ではせん断に効く部分が両端だけであることを考慮し、両端の壁のみをラグスクリューの代わりにホールダウン金物で土台や梁と緊結し、間の壁のラグスクリューを省略する試みをした。・・・
このプレファブ住宅の商品化へ向けて開発はまだ続く・・・

家具の家

家具の家 No.2

家具の家 No3

No. s-115 ロコンニ ―屋外生活空間 ――阿部勤， jt9902

［連作名］**ロコンニ**

・・・どのような屋外空間が生活の場として快適に感じるのであろうか。・・・自然に開かれているとのと同時に、守られている。また、完全に囲われて外部からの情報が遮断されていると不安になる。外の状況を知ることができる程度の見え隠れの空間が心地よさを生むようである。屋外空間が生活の場として生かされるためには、日常生活の場がこの空間に直結しており、そこに大きく開かれた関係が望ましい。・・・
今回掲載した 3 作品は、屋外生活空間をテーマのひとつにしたものである。いずれも湘南地域で日本の中では気候条件に恵まれてはいる。実際に使えるのは 1 年の半分程であろうが、私の経験からしても、これらの屋外生活空間が生活に変化と豊かさを与えることは確かである。
最後に表題の " ロコンニ " であるが、私があそびでつくった単語で、屋外生活空間の建物での囲い方を表したものである。さしずめ「国府津の家」は " コ " であり、「鎌倉の家」と「湘南の家」は " ニ " ということになる。

国府津の家

鎌倉の家

湘南の家

No. s-116　立方体住棟システムと “ARCHITECT” ――原広司，　jt9903

［連作名］**立方体住棟システム**

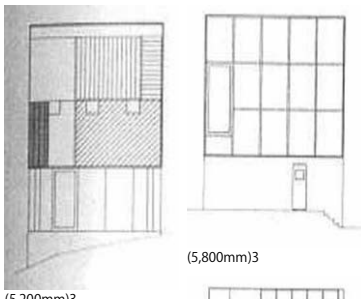
昨年、プロジェクトとして『新建築』に発表した 5 つの住棟のうち、4 つが完成した。等差数列 5.2、5.8、6.4、7.4m を一辺とするキューブをもった住棟が実現し、最後の 7.6m の棟は、工事費オーバーで実現しなかった。・・・

私が想定したシステムは、小さな立方体をもった住棟である。このシステムは、“ARCHITECT” がもっとも初源的に発想するシステムであろうと考えたのだった。・・・

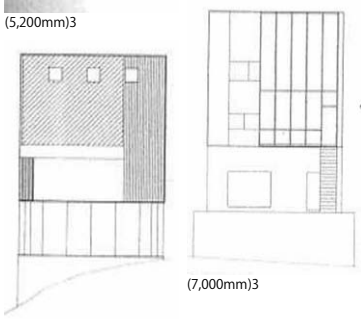
ここで議論している 60cm は、60cm 自体の寸法を問題にしているのではない。そうでなくて、立方体の一辺が、連続的に長くなっていくとき（今回の試行ではそれが比連続［ママ］であったが）、住居の可能性が変質しているところを見い出すことが重要な目標のひとつであったからである。ただ、もう少しさまざまなケースの寸法を実際に計画してみないと立方体の意味はさだかにならないのかもしれない。
・・・
今回の試行は、3 家族それぞれに異なった機能的な目標をもっていたいので、システムの探求がある程度意識的になされたが、この探求は、今後も継続し、寸法を基本とした住棟の体系化をはかってみたいと思っている。

このたびの試行において、「私」［計算機の建築家 “ARCHITECT” のこと］がまず最初に留意したのは、立方体をもつ住棟のシステムのもつ意味である。「私」にとっては、この古来からプライマリーな形態とされている立方体が、このたびの試行に最適であったかどうかに疑問がある。・・・プライマリーな形態にもし意味があるとすれば、それは人間の歴史における意味だけである。・・・
「私」は、立方体のシステムを次のように解釈した。今日、欧米の住宅地の風景を見ても、豊かな階級は、・・・「家らしい家」に住み、貧しい階級だけが近代建築の箱に仕方なく住んでいる・・・貧しい階級は、・・・「家らしい家」へ移ることを熱望している。一方、建築家の意識はといえば、実は、一般大衆と同じレベルであって、ただ「家らしい家」のスタイルが、当世風であるだけが違いであり、「私」の眼からすれば、ほとんど差異がない。「家らしい家」を設計するのであれば、「私」は人間の奴隷になるだけである。立方体をもつ住棟のシステムが、もし「私」にとって意味があるとすれば、そんなところであろうか。・・・

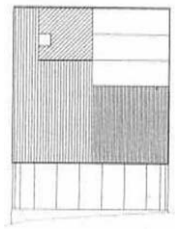
「私」の設計案は、次のようなものである。まず寸法からすると、いずれの立方体も伸縮可能な案であって、5 つの住棟がそれぞれ 4.6m から 8.6 mあたりまでの連続した数値から、ひとつの寸法を確定できるような可変案である。つまり、住棟は定数（たとえばベッドの長さや洗面台の高さ、あるいは工業製品などの材料、寸法）と変数が入り組んだひとつの関数であると見なされている。これを House 関数と呼んでおこう。機械的な手続きからすれば、ある住棟に立方体の寸法が仮想されたら、ただちに材料、労務量、メンテナンス量等々の諸量と同時に、室内の気候状態や人の動きの可能性などの表示がこの House 関数から算出されるのは当然であり、経済的に実現不可能などという事態は発生しない。・・・
次に住棟の形態であるが、「私」が採用したのは、＜ひとつのアトラクターを持った箱＞の形態である。これは 5 つの住棟に共通している。ただし、5 つの住棟はそれぞれ固有のアトラクターをもつ。・・・それぞれのアトラクターは、すべての機能を満足させる装置であると同時に、狭い領域であるが室内の空間を外化し、人びとに動きを与える仕組みをもっている。アトラクターが House 関数に影響を与えるからには、その名の由来するところからして、「私」とて新しい都市を忘れてはいない。
次に、場の状態として、伊東邸には〈夜明けの様相〉を、原邸に附属する棟には〈昼間の様相〉を、松本邸には〈夕暮れの様相〉を設定した。・・・
最後にひとことつけ加えておく。「私」は・・・これから続々と現れるであろう “ARCHITECT” のひとりにすぎないのである。・・・建築家たちが建築のファッションの奴隷になることを批判するために、いや、建築家の想像力を誘起するために、「私たち」は存在するのだ。


(5,800mm)3

(5,200mm)3


(7,000mm)3

(6,400mm)3


(7,600mm)3［P］

No. s-117　拡散し収縮する家・5 つのフェイズ

――入江経一，　jt9911

［連作名］拡散・収縮する家

・・・住宅を形にするには方法がなければならないが、それは理論よりも直感的にしか手に入れることができない。理解はむしろ後からやってくればよい。そんな姿勢で 5 つの住宅をつくってきた。

・・・5 つの住宅をアクソノメトリックで図化した。これらの図を空間構成として読むのではなく（それはもっともまずい方法だろう）、空間の拡張と収縮の跡として眺めることができないだろうか。ちょうど、星が周期的にガスを宇宙空間へと放出するように、家族というある周期で拡張し収縮する柔らかな関係を、比喩的にいえば個体と化するのではなく動的に扱いたい。寝室、居間、台所といった言葉による分節は、仮に限定し、そこで止まり、そしてそれ以上なにも求めることがない。

ある意味で住宅の核でもある寝室は原理的にそう変わらないが、それを取り巻く場、行き止まりへと至るまでの空間ははるかに多様である。5 つの住宅を通じて私の間しっ h な、この至る空間を固定化されない関係とすること、（仮に居間などと名づけながらも）家族がその拡張と収縮を可能にするような場とすることであった。そのとき全体は、いわば半透明（無論、視覚的にではなく）の輪郭によって呼吸するのではないだろうか。本来は静止するはずの建築にこうしたダイナミズムを与えることは、物理的実体の能力を超える。だからそのような場では、行為や力の関係が誘発されなければならない。名称によって分節される以前にさかのぼるのではなく、それ以後へと脱出するために。

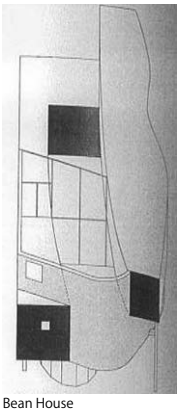
「Bean House」ではふたつの細長い形が上下に並んでいる。豆のような箱と湾曲した面で削られた直方体である。これらは寝室や水回りという限定の強い場であるが、それらの間には大きな内部空間と外部とが挟まれて、曲面壁が巻き込むようにそれらの流れを止める。・・・

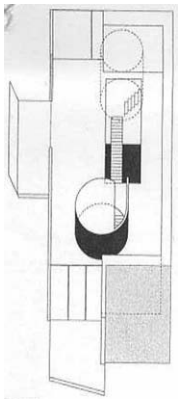
「W House」では・・・微細な要素群は、階段やキッチンシンク、シャワーブース、絵画収納のフレーム、水飲み場などである。これらによってこの住宅は、5 つの住宅の中でももっとも全体にわたる拡散と収縮の激しい運動を引き受けているように思う。

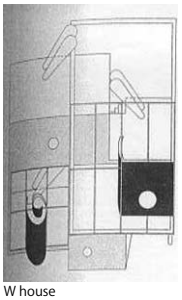
「T house」では・・・ふたつの寝室も大きな引き戸によって拡張と伸縮の運動に取り込まれている。ここでもキッチンや手洗いなど、いくつかの要素が運動の中に現れる・・・

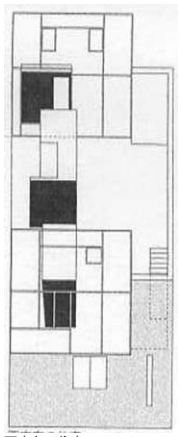
「西麻布の住宅」では、コンクリートの箱と木の箱が組み合っている。・・・木箱のほうは南北に向かって開き、閉じたコンクリートに対して性格を一変させる。・・・

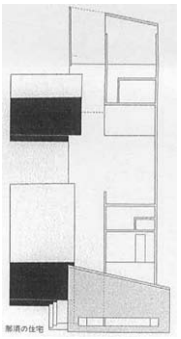
「那須の住宅」は・・・寝室となる箱を内部、外部に併置しているが、その輪郭を柔らかく森の中で融解させることができた。・・・この空間では、夏と冬とでは家具の配置が自ずから変化し、それらは季節と共に呼吸している。


Bean House


T house


W house


西麻布の住宅


那須の住宅

No. s-118　桐蔭学園キャンパス整備計画の歩み

――稲塚二郎，　sk0004

［連作名］コミュニケーションネットワーク

情報化社会においては、空間をコミュニケーションの場と考えることができる。すなわち現代において建築や都市を考える場合、機能それ自体を考えることの重要性と、さらに機能と機能をどう結びつけていくかという、相互の関係について考える構造論的なアプローチが必要であり、また、その建築空間や都市空間を関係づけていくものはコミュニケーションではないかということである。

コミュニケーションとは、究極的には人と人との関係である。したがって建築や都市空間をデザインするということは、そのコミュニケーションがどのように行なわれ、流れているかをかたちづけていくこと、といえるだろう。

こうした問題意識は、1960 年代以降、文明が工業化社会から情報化社会社会へと移行し始める時期に、私が在籍していた丹下研究室（大学院）において議論され、またその後も、いくつかの国内、国外の都市設計や建築設計を担当する中で考え、あるいはチームの中で議論されてきたことでもある。

桐蔭学園高等学校

自然地形との融合を図りながら計画されたキャンパスの建築空間には、ストリートと呼ばれるコミュニケーションスペースが内包されている。その中には、アルコーブや広場が組み込まれ、それらが吹抜けを介して視覚的に連続しながら各フェーズの建築空間を巡り、各棟の諸室（機能単位）が有機的に関連づけられる空間構成を試みている。
このストリートは、人びとの出会いや相互の情報交換の場であるプラザや道空間を建築的に内部化した廊下で、そこでは教室でのフォーマルなコミュニケーション以外に、生徒と生徒、生徒と教師、ときには父母と、多様で自由なコミュニケーションの場となる。より社会性をもった空間として提案している。この考え方は、丹下研究室での、情報化社会における建築と都市空間のあり方に関する議論の展開の中で、「ゆかり文化幼稚園」や「東京聖心インターナショナルスクール」などの建築に組み込まれた「コミュニケーションスペースのネガティブなネットワークによる建築空間の有機的結合」という考え方を、社会がより成熟した現代において、都市的スケールでさらに発展させた提案でもある。

No. s-119　中古 28 年 ―新築の夢遠ざかる ――乗富久哉，　jt0005

［連作名］**DOGU**

「DOGU」とは、建物をしっかりガードし、使えて、遊べる空間器具のこと。「胴具」は構造や耐候性など建物としての基本性能、「道具」はいわゆる機能性、そして「動具」は機能ばかりにとらわれない使い勝手、あるいは将来的な可変性といった遊びの要素を示している。そして、以上の３つの要素をあわせもつ物体が「DOGU」。生活するためのプレインな場と「DOGU」の組合せによって、住宅あるいは建築がつくれないかというのがこのテーマの主旨である。
この 10 年発表してきた作品のタイトルを挙げてみると、「街の換気口」にはじまり『チャイナタウンの壁三態』、「関節装置」、「空中井戸」、「100 年の壁」、さらには前作「井草の住宅」での「昇る庭」とおぼろげながら「DOGU」を暗示するものばかり。ギャラリー、オフィスビル、集合住宅、公園、住宅とビルディングタイプはさまざま。なぜこのような名前になったのか自覚的ではなかったし、実体がその名前と完全に一致しているともいいがたかった。
そして今回の「DOGU」は「自由格子」、中古建売住宅のリフォームである。

自由格子

・・・はやくも次なる計画が脳裏をかすめる。屋上と床下に通じる開口部を設けたのは、実は今後の展開に備えたものだ。また、今回完成した「DOGU（大ドーグ）」をバージョンアップする細やかな部品、すなわち「dogu（小ドーグ）」を開発し、発展させていくのも大事な課題。・・・

No. s-120　建築のイメージから原寸まで ―最近作を通して
――宮崎浩，　sk0009

［連作名］**透明性**

・・・複数の建物が同時期にピタリと重なって完成することなど、われわれのアトリエにとってはもちろんはじめての経験で・・・異なったプロジェクトをほぼ同じタイムスケジュールに沿って設計したことが、おのおのの建築のあり方やデザインにお互いに大きな影響を与え合っていたことに気づいた。
設計当初東京のアトリエでは、これらのプロジェクトのスケッチや模型が、乱雑に重なり合うように置かれていた。隣り合う異なったプロジェクトのイメージが、たとえそれがまとまりのない未完成なものであったとしても、他のプロジェクトにヒントを与え、さらに新しいアイデアを喚起する。・・・

再生木ルーバーハウス

道の駅「仁保の郷」

TAG

日頃常々思っていることは、プランからだけでも建築内のヴォリュームや、空間の繋がりが読み取れるようなものをつくりたいということである。与えられたプログラムを下敷きにして、できるだけ恣意的な形態や象徴性を排除して、空間の特質を探し出そうと、最近は意識的に素直にプランニングをするようにこころがけている。この３つのプロジェクトをデザインしている最中にも、日常的にそのような作業を繰り返していた。その中で、「透明性」というキーワードに着目し、そのあり方に興味を引かれ、それを実際の建築として実現させたいと強く願っていた。

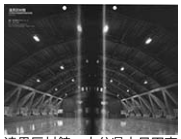
・・・「仁保の郷」における透明性は、大きな屋根に覆われた内部空間と外部空間を、内と外を結ぶデッキや櫓によって視覚的にも空間的にも簡明に連続させた点にある。・・・
「TAG」は、仁保に比べもう少し複雑に内部と外部を交差させている。この建築では、面としての透明性の表現というよりは、スペースそのものの透明性をつくり出すことを強く意識している。そのため、原則的にガラススクリーンで囲んだふたつのオフィススペースを透明なヴォリュームとして表現している。そしてこのふたつのオフィススペースを、大屋根の中に向かい合わせて配置することにより、その間に透明感のある外部スペースをつくり出している。ここはこの建物のコートとなり、常に近隣に開放されている。・・・
一方、「再生木ルーバーハウス」における透明性は住宅としてその機能やプライバシーを成立させるため、前者とはまったく異なった性格をもっている。・・・敷地境界に半透明スクリーン（再生木による水平ルーバー、可動ルーバー、乳白ガラスを組み込んだスクリーン）を隣接した周辺の状況を読み込んで設け、その半透明なスクリーンと内部スペースの境界をできるだけ透明に表現し、外部スペースを取り込んだ透明で広がりのある内部空間を生み出そうとした。
このように「透明性」のあり方だけを取り出してもおのおののプロジェクトごと、異なった考え方からなっている。それをひとつひとつ限られた時間の中で確実に形にすることは、頭で理解はしていてもそれ程簡単なことではなかった。設計監理のプロセス中で意にそぐわない決定を強いられることもなかったとはいえないが、3つのプロジェクトなりの特徴をもった透明なスペースを生み出すことができたと思っている。

No. s-121　論文タイトルなし ——黒川哲郎，　sk0011

［連作名］丸太材構法

「スケルトンログ」と名づけた“大規模木造に国産材を活用するための丸太大径材構法”の試みは、1993年北海道の「置戸営林署庁舎」以来、「月點波心—クラフト館蜂の巣」、「臨川技楽—上津江村屋根付交流広場」など大分県を中心に10件あまりの事例研究を経て、自然乾燥した30～35cm φのスギ丸太280本を用いた30mの大スパン建築「遠思巨材館ー大分県立日田高等学校新体育館」に至った。・・・丸太大径材は、トラス・軸組・アーチなどさまざまに展開可能な合理的な構造材で、材が短いゆえの工夫が木造独自の表現を生み出す。

上津江村屋根付交流広場『臨川技楽』


遠思巨材館ー大分県立日田高等学校新体育館

No. s-122　建築の4層構造 ——難波和彦，　jt0104

［連作名］箱の家 - サステイナブル

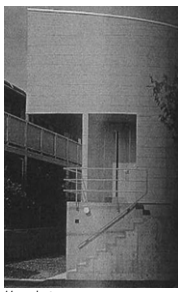
「箱の家」シリーズをスタートしたとき、僕は達成すべき目標として、以下の8項目のプログラムを設定し、これに基づいてシリーズを展開してきた。
［8つの項目が挙げられているが、関係が薄いので省略］
・・・シリーズを展開するにつれて、クライアントが「箱の家」に求める条件も少しずつレベルアップし、構法や仕様も洗練された結果、それぞれの「箱の家」は、原型的な解答から徐々に分岐してきたように思う。そこで、今後の展開の方向性を再検討するために、このプログラムを理論的に体系づけてみたいと考えた。
前回に発表したときにも述べたように、これからの「箱の家」シリーズが追究すべき最大のテーマはサスティナブル（持続可能性）化である。この点を明確に把握するために、箱の家のプログラムをひとつの図式として再構成することを試みた。ここで紹介するのは「建築の4層構造」という図式である。これは建築を次のような4つの層の重なりとしてとらえる提案である。

1. 建築は物理的なモノである。
2. 建築はエネルギーの制御装置である。
3. 建築は社会的機能をもっている。
4. 建築は記号としての意味をもっている。

・・・サスティナブルデザインのプログラムを4つの層によってとらえれば、以下のようになるだろう。・・・

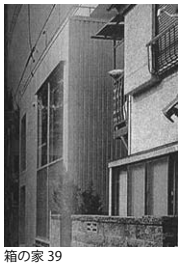
1. モノとしての側面には、廃棄物問題・再利用・リサイクルといった問題がある。
2. エネルギー制御装置としての側面には省エネルギーや高性能化の問題がある。
3. 社会的な動きの側面にはコミュニティや家族といった問題がある。

箱の家 36


箱の家 37

箱の家 41

箱の家 40


箱の家 39

4．表現としての側面にはヴァーチャルリアリティやエフェメラリゼーションといった感性的な問題がある。

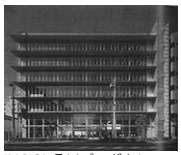
4つの層は決して無関係ではありえない。ひとつの層を操作すれば何らかの形でほかの層も変化する。たとえば、ある特定の材料と構法を使って建築をつくれば、それによって熱的な性能が決まり、空間のサイズも限定され、それによって用途や平面も規定される。・・・
4つの層は、それぞれ独自のテーマとして追究できる。デザインはどこから出発しても構わない。たとえば住宅を設計するとき、クライアントはたいてい平面計画から出発する。建築家はその平面計画を空間表現から立体的にチェックし、構造エンジニアはそれに対して構法や構造方式を提案し、設備エンジニアは環境性能をチェックして、電気・機械設備のネットワークを提案する。すべての問題がチェックされたときにデザインが完成する。このとき関係が一方的ではなくフィードバックの関係におかれていることが大切である。それぞれのテーマが互いに刺激しあって問題全体が組み換えられ、それがもう一度それぞれのテーマに投げ返されることによって、新しい解答が生み出されるわけである。そのようなフィードバック回路をつくり上げることが、コンピュータをモデルにして4つの層を提案した目的なのである。以上を整理すると、下のような図式が得られる。
以下では、この4層構造に基づいて今回の箱の家のシリーズを分析的に紹介し、さらに今後のシリーズの展開可能性を検討してみたい。

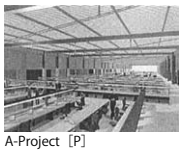
No. s-123　企業が溶ける時代のオフィスとは？――大江匡，　sk0105

［連作名］オフィス

インターネットを基盤としたモバイルテクノロジーが企業のオフィスの中に発達し始めると、これまでの会社にドメインをおくという体制にも変化の兆しが見え始める。これまで一般的な企業において、人のドメインは機能にあった。たとえば、メーカーであれば、それは営業部、設計部（開発部）、生産管理部、購買部、物流部などの機能に名前がついて部（セクション）に人は所属しドメインとしていた。モバイルテクノロジーによって、これらの仕組みは解体し、プロジェクトがドメインとなることになる。すなわち、机のレイアウトの単位は、部や課ごとではなくて、プロジェクト単位になっていく。そして経時的なフェイズによって、人が移動していく（これまでは、人の間をプロジェクトが渡り歩いていた）。・・・
こうなっていくと、オフィスのイメージは、短期的に人が流動していくモデルとなる。プロジェクトというカウンターが散在していて、その中を携帯電話とラップトップをもった人びとが行き交うというイメージは、空港そのものである。空港は、それぞれにつくられた旅行というプロジェクトの間を短期間の間に人が動いていく。A工業の開発センターである「A-Project」においては、こうしたイメージを元に、前面のプロムナードをつくり、その後ろにオフィスが並ぶレイアウトになっている。このレイアウトは、同じく「帝国データバンク福岡支店」、「IMAGICA品川プロダクションセンター」においても同じである。

帝国データバンク福岡支店


IMGICA 品川プロダクションセンター


A-Project［P］

No. s-124　木箱仕口 212 による展開 ――葛西潔，　jt0107

［連作名］**木箱 - 鳥居形フレーム**

在来木造は広く普及し、簡易に施工できる構法であるが、現在の住宅が求める開放性に対しての対処には限界がある。私は「木箱 210」で開口を前面開口部にし、内部に柱や壁がなく、一方向の外壁にだけ耐震壁がある架構システムを採用した。その後、この構法に興味を示した数人の設計者から「自分の設計で使用したい」という問い合わせがあった。そのため、この構法の可能性を自覚し、耐力や施工性をさらに発展、改良しようと試みた。

その構法は枠組壁工法の部材を柱と梁に用いた簡易施工の木構造である。柱と梁との接合を工夫することで、接合部に耐震性をもたせられないか。その耐震性は小さいとしても、仕口の数を多くして、一個の仕口にかかる応力を小さくすることで住宅全体の耐震性を確保できると考えた。柱と梁による鳥居形のフレームを細かいピッチで立てた構造である。・・・
最終的にはボルトとラグスクリューの組合せが、耐力的にも施工的にも一番よいことがわかった。212 の柱と 212 の梁とを中心のボルトで留めて、その周りに片面 4 本ずつ、合計 8 本のラグスクリューで緊結する方法である。またはさみ梁の隙間に変形を防ぐために 212 のスペーサーを入れる。このような仕口の接合部でできたフレームを 455mm 隔てて、接合部同士を 212 のつなぎ材で上下 2 ヵ所で結び、さらに壁と床の下地の構造用合板を釘で打ちつけることで、さらに接合部を固めた。この仕口を「木造仕口 212」と名づけた。
この仕口を用いて通し柱と間口いっぱいの梁とで門型および鳥居形のフレームをつくり、それを桁行方向に 455mm ピッチで立てて骨組みをつくり、桁行方向は通し柱に構造用合板を張り、耐力壁をつくり耐震性を確保した。全体は両サイドを耐震壁で固めたトンネル上の架構体である。今回掲載の住宅はこの形式の応用によっている。・・・

「木箱仕口 212」を使ったトンネル状の架構体を「木箱 212」構法と名づけて、その特徴をいくつかにまとめる。
1. 簡易施工
「木箱 212」構法は、特殊な金物を使用しないので施工は簡単である。・・・
2. 仕上げをしない
住宅の内部は、基本的に床以外の仕上げを行っていない。だから構造部材の柱・梁・構造用合板が現れている。・・・
3. 収納
・・・室内に現れた柱の間に棚板を渡すことで柱の奥行きの棚ができ、床から天井までの収納壁のようになる。・・・

現代社会の変化は速く、当然われわれの生活をも変えていく。未完成の単純な箱は、住まいに対する要求の変化に対応できる。
生活の変化を受容する現代の住宅として、木箱 212 を提案したい。

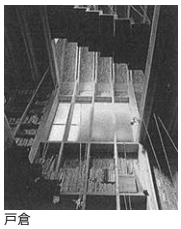
木箱 210

八千代

秋津

西町

落合［U］


戸倉

No. s-125　グリッドプランはフレキシブルではない ――山本理顕，　sk0109

［連作名］**グリッドプラン**

研究所としての使いやすさを考えてグリッドプランを採用しています。「はこだて」と「広島市西消防署」でも採用していますが、とくに「広島」にスケールも似ていて「広島」は 3.8m のモデュールで、ここは 4.2m です。グリッドプランは架構方法と密接な関係をもっていると思います。「埼玉県立大学」と「はこだて」はプレキャスト・コンクリート、「広島」は鉄骨のフィーレンデールとブレース構造の併用。今回の研究所は鉄骨の純ラーメンです。鉄骨のラーメン構造、それとプレキャスト・コンクリートの特に圧着工法とグリッドプランは非常に馴染みがよい。グリッドという形式をむしろ鉄骨やプレキャスト・コンクリートが補完しているようにも思います。つまり、グリッドは必ずしもフレキシブルではないと思うんです。概念としては確かにグリッドという形式は抽象的な空間、フレキシブルな空間を象徴していると思いますが、それは単純に数学的なユークリッド座標がグリッドだからなんですよね。ユークリッド座標が均質空間を象徴しているからなんだと思います。でも実際の建築空間ではそのグリッドのモデュールにあわ

東京ウェルズテクニカルセンター

せて、柱のピッチが、あるいは壁の位置が結果的にはむしろその空間の固有性をつくってしまうだろうし、その空間の秩序をつくってしまう。秩序という意味は、つまり、どうその空間を使うかというその使い方の形式を決めてしまうという意味です。これは実感なんですが、「埼玉」「はこだて」「広島」と今回の研究所の 4 つの建築をグリッドプランでつくって、それぞれに架構方法は違いますけど、建築のもっている構成する力というんでしょうか、モデュールと架構方法を決めると、その中のプログラムまで一気に決まっていくようなところがあるんですよ。

No. s-126　部分から考えることの意味――坂牛卓，　jt0202

［連作名］連窓の家

建物を縦横無尽に走る窓は、少し前から考えていることである。建物を「部分」から考えていこうと思っている。窓はその「部分」のひとつである。建築は一言でいえば「箱」である。人を包み込む箱。一方で窓は、この箱という全体を包括するような概念の反対側にある。そのうえ、窓は建築に必要不可欠なものでもない。「無窓居室」などという法律用語があるくらいだ。人の生理に欠くことのできないものではあるが、建築はそれなくしても存在できるような広い概念である。だから普通、こうした「部分」は、設計の最初に登場してくることは少ない。窓は建築の中では下位の概念である。しかし、むしろそうした下位概念から建築を構築してみると、また建築の新しい側面が浮き出てこないだろうかと考え、これがその３つめの家となった。最初の家では窓が空間のまとまりを緩やかにつなぎとめていくことを、ふたつ目のの家では窓によって空間のまとまりを分節することを意図し、そして今回は窓によって空間のまとまりを切り取ろうとしている。

連窓の家 #3

No. s-127　都市空間を自由にレンタルするために――古谷誠章，　sk0205

［連作名］空箱

都市はそこに空間を所有する人だけのものではない。都市の文化はさらに広範な人びとによって培われる。都市を時限的に訪れる人、1 日、3 カ月、5 年など期間はさまざまでもそうした人びとのために、都市には質のよいレンタル・スペースがもっともっと必要だ。これまで賃貸空間について、およそ建築家は積極的にはかかわってこなかった。僕は世田谷に小さな木賃アパート「バウムハウス」を設計したとき、それを入居者が持ち物で充填すべき「空箱」だと考えた。では「よい空箱」とはいかなるものか。今回の「高円寺南アパート」、福岡の「イル・カセット」も、一方がアパート、他方がテナントビルであるが、共にその概念を発展させたものである。

集合住宅の二段階供給、すなわちスケルトン・インフィルの考え方は、もともと商業用テナントビルの方法を住宅に応用したものだ。入居者の使い方や好みに応じて住戸内をつくり替えられる点が特徴だ･･･「高円寺南アパート」も入居者はもっぱら本人の家財道具、つまり持ち込み家具の類で室内をしつらえることを基本に空間を決めた。各戸に中２階があることで内部空間にヒエラルキーが生まれている。多様な使い方が想定されるが、その気になれば小さな塾ぐらいは開けるだろう。一方の「イル・カセット」のほうは、さらに多目的性を追究した。天神の繁華街に近く、街並みが急速に変貌しつつある場所柄で、予想される入居者の業態もまったく多様だった。しかも将来、容積率の緩和も考えられる。そこでかなり大胆なインフィル工事にも対応し、さらに容積 100% ぐらいの増床が可能な、空間と構造のデザインを行った。柱梁とも SRC600mm 角の大きさ、空間のもデュールも 600mm ピッチに統一した。増床予定部分は大きな吹抜けとして半屋外化されている。各階のスラブは逆梁式として、テナントの空調、給排水のスペースを床下に確保し、一切の内装工事がスラブ上で行えて、かつ床仕上げに段差のない完全なバリアフリーを実現できるように考えている。逆梁や外壁に予め打ち込んだスリーブも、住居から店舗、飲食、美容、歯科医院などさまざまに想定してシミュレーションを行い、構造とすり合わせて設置した。都市のレンタル空間として何にでも活用可能と謳うには、これぐらいの準備をしておかないと看板に偽りありになってしまうからだ。

高円寺南アパート

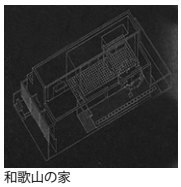
イル・カセット

No. s-128　中庭について ――岸和郎，　jt0211

［連作名］**中庭**

「中庭」と呼ばれる空間がある。それは世界中のさまざまな場所で異なった名前で呼ばれているし、それぞれが長い歴史をもってもいる。ポンペイを見ればわかるように、ローマの時代から中庭は都市の住宅にとって欠くことのできない要素だった。
一時期、世界中の中庭を体験しようと決心したときがあった。・・・
そんな中で、日本のタウンハウスである「町家」とようやく出会う。日本の建築家でもあるにもかかわらず、自分の国の「町家」の中庭に、中国の「四合院」や韓国の「マダン」と同時に出会ったというわけだ。
そんなふうにして出会った日本の中庭の伝統と現代の新しい屋外空間のあり方との関係を探ったものが、今回の３軒の都市型住宅である。

Hu-tong House


和歌山の家

境の家

Hu-tong House
この住宅は壁で囲まれた敷地の中に３つのパヴィリオンが建つという、客家の住宅か、あるいはバリの住宅のような平面形をしている。ここでは中庭はセミ・パブリックな空間として、さながら路地 path か、中国の「胡同」Hu-tong のように３つのパヴィリオンをつないでる。パブリックな空間としての中庭という形式を試行することで、アジアの住宅のプロトタイプのようなものについて考えてみたいと思った。

塀の家
塀の家にはふたつの中庭がある。いずれの中庭も床のレベルは内部とそろえてあり、外部空間にあるにもかかわらず、内部の様相を帯びている。・・・ここで試みようとしたのは、都市と住宅の内部とをつなぐ中間領域を「中庭」の形式を借りてつくり出すことであり、それは日本の町家の「通り庭」の空間に新しい解釈を付け加えることではないか、と考えていた。

和歌山の家
この住宅の中庭では「自然」をそれとは違ったかたちで導入したいと考えた。・・・この住宅にとっての「自然」である中庭には入ることはできない。いや、むしろ禁じられている、といったほうがようかもしれない。リビング・ダイニングとは１層もずれているのだから。

ここでまとめた３軒の住宅は・・・そこで問題とされているのは外部＝自然の意味するものなどでなく、その導入の作法、すなわちシンタックスが問題なのではないのか、というのが僕の考え・・・

・・・これらは・・・与えられた状況と問題設定に対する個別的な解として、それぞれ毎回考えてきたものにすぎない。それらをまとめて概観することで、何かこれまでとは違う切断面が見えてくれば、と考えている。

No. s-129　構成の強度／形式を純化すること ――八重樫直人，　sk0301

［連作名］**アウトフレーム**

同時期に、機能、用途は違うが３つの建物の計画が進められた。

S・S レディースクリニック

せんだい演劇工房 10-BOX

いけの産婦人科小児科医院

これらそれぞれの住宅・市街地、環境保全地区、工場地帯というまったく異なる敷地条件下で、どのように建築を組み上げていくのか。初期の住宅の設計からこれまで、ア・プリオリに想定された「アウトフレーム」と呼べる強い矩形を手がかりに、室あるいは空間の平面的ヴォリュームを配列する作業プロセスをとってきた。それぞれの建築プログラムやビルディングタイプの相違、敷地の外的条件に対しても、私たち自身の建築化の過程を貫けるように、この普遍ともいえる矩形の「アウトフレーム」に、何らかの可能性を感じていたのかもしれない。裏を返せば、さまざまな事象をスポンジのように吸収してくれるであろう形態の強さ、そして抽象性を求めていたと思う。
私たちはいつでも、必要とされる室（あるいは空間／ヴォリュームといってもよいが）同士の関係性を考慮し、並び替えや変形を加えていく設計作業に終始する。

その結果、架構はそこから生まれた平面・立面構成を反映できる構造形式を選択することになった。

IMPC では、各階をまったく独立した空間構成で考えようとした時点で、新たな構造上の架構形式が生み出され、下部構造などの制約から解放された。各階に設定した機能的要求に変化がない限り階下の空間配列がどのように変化しても、上階の構成には何ら影響がなくなる。・・・また S・SLC の架構形式は、鳥籠のようなものなので、上・下階でスケールの異なる諸室群が自由に配列可能な状況が実現された。10-BOX の場合は・・・純粋な「箱」の配列が展開された。
このように、ふたつの産婦人科では、建築全体の構成や室配列を決定づけている架構の形式が、10-BOX に関しては、単純な箱の並びという形式性が、より「純化」されていくことで、それぞれの建築構成の強度が増していったと考えいる。

No. s-130　包むということ ――遠藤政樹＋池田昌弘，　jt0303

［連作名］**ナチュラル**

昨今の東京都内で分譲される住宅地はあまりにも面積が小さく、そこで快適に住むためには、採光や通風、特にスペースの広がり感を、今までとは異なった新しいアプローチによって獲得していくことが必要となってきている。僕たちがデザインした最近の住宅、「ナチュラルイルミナンス」、「ナチュラルスラット」、「ナチュラルエリップス」では、薄い 1 枚でできたスキンのような境界デザインを行うことで、これに応えようとしてきた。そのスキンは、構成部材のサイズがすべて小さくヒエラルキーがなく、奥行き感を消滅させることを可能にするものである。また、必要性能をこの小ささに釣り合う同じ収まりで形式化させたもので、近接した周辺の複雑な環境にセンシティブに対応可能にするものである。その結果として、十字型やスラット間からの採光で、あるいは閉じることのない曲面形の連続によって快適性を確保してきた。・・・

この「ナチュラルウェッジ」という住宅も、この延長上に位置している。・・・

ナチュラルイルミナンス

ナチュラルスラット

ナチュラルエリップス

ナチュラルウエッジ

No. s-131　服としての建築 ――坂茂，　sk0310

［連作名］**シャッター**

これまで、内外の空間をドラスティックに連続させたり区切るためのデバイスとして、工業的にスタンダード化されたさまざまな種類のシャッターを利用してきた。最初に使ったのは「逆シャッターのギャラリー PAM-B」で、既存倉庫をギャラリーに改装し、シャッター・オープン時に庭の木製デッキの庇となるように FRP 製のオーバーハンギング・シャッターを使った。「紙の資料館 PAM-A」では、ドイツ製の FRP 複合板のスタッキング・シャッターにより、3 層吹抜けのオフィスとギャラリーの中間のアトリウムを屋内化したり、半屋外化させた。
今回の敷地は、駅前の商店街を少し外れた商業地域にある。周りはほとんど 3 階縦の商業ビルで、1 階に商店、その店舗には前面シャッターという見慣れたファサードが続く。このストリート・ファブリックに対し、あえて異質な形態やファサードを新たに挿入するのではなく、周りと同じような素直な立方体に前面シャッターというありきたりのボキャブラリーを設定した。唯一違うのは、前面シャッターの代わりに全面シャッターという漢字の微妙な一文字の違いである。
このように前面のファサードは周囲の建物に合わせたが、一般的な建蔽率の残りをプライベートな裏庭に取るところを、ここでは敷地の西側を道路から敷地裏境界まで空地をいっぱいに取った。この側面のコートヤードを道路に開き、前面の完全にパブリックなファサードと、側面のセミパブリックなファサードというヒエラルキーをつくった。このコートヤードに面するファサードも、フルハイトのガラス・シャッターで構成することにより、シャッターが閉まっているときにはコートヤードはパブリックな道路の延長としてセミパブリックになるが、シャッターを全開した途端にコートヤードは、セミプライベートな内部空間の延長となる。

ガラスシャッターのスタジオ

No. s-132　空間のこと ――妹島和世，　sk0403

［連作名］**部屋の配列**

いくつかの部屋に分けた方がいいのか、その場合それらをどのように並べればいいのか、さまざまな関係のつくり方がると思うんです。「スタッドシアター」や「梅林の家」は部屋がくっついたものだし、「金沢 21 世紀美術館」は部屋を離しています。金沢の場合は展示室も含めていろいろな機能のすべての部屋を分散して並べているのに対し、「スタッドシアター」は全体から分割したようにも見えますが、独立した部屋をピッタリくっつけて並べたというような感じです。イメージとしてはひとつひとつの部屋をくっつけていったような。だからいろいろな部屋があるという点は似ているように見えても、正反対なものでもあるように思います。本当は「スタッドシアター」の場合、壁が 2 枚になればもっとクリアになったと思いますが、さすがに予算がかかりすぎるのでできなかった。だからある意味では、「トレド美術館ガラスセンター」はその発展形です。壁がダブルになることで、各部屋の関係性がさらに変わってきています。

スタッドシアター［P］

金沢 21 世紀美術館

梅林の家

・・・かつて「スタッドシアター」のプランを発見したときには、その平面にとても興奮したんです。でもそのときには、それを断面的にはできないだろうと思っていたんです。でも結局「梅林の家」は「スタッドシアター」を断面的に展開した形だったのだと思います。・・・

No. s-133　複合の新しい〈風景〉を目指して ――飯田善彦，　sk0405

［連作名］**対概念の形象化**

振り返ってみると、対（あるいは複数の）概念を形象化することで建築を組み立てていることが多い。対というのは、異なる様相の領域ととらえることもあるし、相補的に位置づけることもある。それはたとえば、マススペースとサーバントスペース、あるいは目的空間と無（多）目的空間というような機能的分類とも異なり、そのときどきのプログラムのあり様によって流動する。それぞれがくっきりしていたり、何となくゆるやかに色が変わるように変化したりする。建築には目に見えないさまざまなビジョンを固定し、身体化する仕組みであることだとすると、作用として決定的なのはアクティビティであり、それらの差異を明確にするために領域化するということもできる。つまり分節することによりそのプログラムの特性が格段に際立ち、わかりやすくなる。たとえば「川上村林業総合センター」の場合、展示系を透明なスペースに、事務系を不透明なスペースにそれぞれ集約し、「市沢地区センター」では体育館を、「センター北の家」ではダイニングキッチンを他と区別した領域として中心に位置づけている。ただ、今までの多くは、対概念という構成を用いながらそれらの〈関係〉を視覚化しようとすることで、建築全体のストーリーを組み立てていた。A と B のそれぞれというよりも、それ以上に A と B の〈関係〉が上位にあって、決定的に作用している。しかしながら、今回の「野依センター」の場合は異なっている。つまり A も B も同じような地平にあって際立っているが、両者の〈関係〉を視覚化するところに主旨を置くのではなく、それぞれが立ち現れている状況をそのまま形象化し、固定していくような感覚である。A と B を追求していった結果としてたまたま今のような関係になった。あるいはそのような関係に置くことが A、B それぞれにとって最適であった、という感じに近い。

野依センター

No. s-134　バージョンアップするリファイン建築
――青木茂，　sk0406

［連作名］**リファイン建築**

1982年6月､北イタリアのベローナにあるカルロ･スカルパの｢カステルベッキオ｣を見て以来、こんな建築をつくってみたいという思いが湧いていた。ひとつの仕事の依頼があった。｢鶴見町旧海軍防備衛所跡地資料館｣の仕事である。今思えばない金を絞りながらスカルパのような建築をつくりたいという思いでひたすらに設計に没頭した。その後､｢アートホテル石松｣や福祉施設など３つの建物を再生してきたが、再生建築をつくるためにはデザインやアイデアだけでは、建築基準法の壁は越えられないと痛感し始めていた。そんな折､｢大分県緒方町庁舎｣の再生建築のコンペで最優秀賞となり設計の機会を得た｡この建物で､既存躯体を残し、そのほかの部分はすべて取り外してつくりかえる手法をはじめて試みた。その後、隣町の宇目町で林業研修センターを庁舎に用途変更をするコンペが行われた（宇目町役場庁舎)｡・・・研修センターから庁舎へのコンバージョンは、積載荷重の設定が変わる。それを解決する手段は、建物の自重の減量であり、それによって耐震補強も容易になることがわかった。

大分県緒方町庁舎

宇目町役場庁舎

野津原町多世代交流プラザ

八女市多世代交流館

もともと、再生の仕事は、地方に住みながら設計活動をするために戦う「武器」としての建築手法を身に着けたかったのが、正直な気持ちである。出版をしたいとの思いから、記録を取りながらの作業になった。再生に関するはじめての著書「建物のリサイクル」の構成が終わった段階で鈴木博之先生に現地まで足を運んでいただいた。京都議定書に合致する建築手法であるという先生の発言がなければ、今日のリファイン建築は誕生していなかったのかもしれない。しかし、多くの問題も抱え込んだ。

次に「野津原町多世代交流プラザ」を設計することになった。使用用途の関係上増築が必要で、面積が既存の倍の大きさになる計画である。ここでの耐震補強は、X･Y 軸それぞれにブレースと耐震壁をつけることで解決した。｢宇目町役場庁舎｣の設計の際には、新築に比べ、リファイン建築は何年間建物として保証できるのかという質問に対して論拠を示して弁証することができないという壁にぶつかった。ここでは、それを試み、建物をスキンで覆う考え方で、北・南面のみをガラスで覆った。理論的にはこれで耐候性はクリアできたと考えている。

すべてを覆うことに挑戦したのは、次の「八女市多世代交流館」である。大分県外でははじめてのリファイン建築であり力も入った。・・・この建物はかなり細長い建物である。そこで、耐震計画では、偏心および層間変形を抑えるように、中心に耐力壁を配置して建物の剛性のバランスをとり全体の揺れを抑えた。このときリフリート工法でコンクリートを補修し、カーボン（炭素繊維）での補強をはじめて使ってみた。軽量であることが、大きな理由であるが、ひとつ道具が増えた思いがした。・・・

・・・リファインの場合、躯体のみを比較してみると CO2 の排出量が、コンクリートの躯体を全解体してから新たに設置する場合の１／60 という驚くべき数値がはじき出された｡工事全体でも８／9｡つまり１割以上の効果になるとの結果であった。鈴木博之先生の京都議定書に合致するという言葉が実証されたことになる。このようなデータが出てくると、もう少しうまく解体できないだろうか、CO2 排出量をもっと抑える方法はないだろうかと考える。

No. s-135　「絶対装飾」について ――青木淳，　sk0407

［連作名］**ルイ・ヴィトン**

ボリュームを減少させる

「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」で、ルイ・ヴィトンの一連の仕事が、何か、一巡したような気がする。これからも機会があれば、ルイ・ヴィトンの仕事をするだろうけれど、今まで考えてきたことがこの完成を待って、ひとつの結論に達したという感じがするのである。

その感じをまとめれば、外装を内装や構造から切り離し、外装を単独の独立したデザイン領域としても､それは建築になりえるのではないか､ということだ｡なぜ？　どのように？　この問いに対して、ようやくここで、僕なりの一通りの答えが得られたと思う。

LOUIS VUITTON NAGOYA

1 EAST 57TH

ルイ・ヴィトンの仕事は、｢LOUIS VUITTON NAGOYA｣に遡る。・・・ルイ・ヴィトンには、お店としての内装のスタンダード・デザインがある。だから、内部空間に手をつけることは望まれていない。内部空間はいわばブラックボックスとし

て用意されればいい。デザインの中心は外装だった。
・・・建築というのは、空間のデザインである。そう素朴に考えていた僕は、だから、外装という奥行のない表面をデザインの対象としながらも、「空間」の問題に触れるようにしたいと思った。表面そのものを問題にしないこと。そこで、外装として使用される素材に目がいくことを避けようとしている。と言っても、素材なしに外装はできない。だから、その素材より強い何らかの効果を出現させようとした。それがガラスに施されたパターンとその背後の壁に施されたパターンによって生まれるモアレ効果だったのである。モアレは見る者に奥行き感を混乱させる。モアレは、表面の処理にすぎないけれど、まるで中まで詰まった霧のようなボリューム感を与える。表面にとどまりながら、しかし３次元のボリュームを現象させること。それが僕にとっての、外装を「建築」に近づける最初の考案だったのである。

ボリュームであること
その意味で、ボリュームを建築で、つまり物理的に実現することは、本来的にはできない。にもかかわらず、僕は建築において、ボリュームは重要だと考えてきた。なぜなら、僕は建築を、僕たちの日常世界を相手にしているわけだが、その日常世界の〈くうき＝質〉を単純再生産するのではなく、それを日常世界と若干異なった色を持った〈くうき＝質〉に変えること、と捉えてきたからである。・・・
外装によって現実には存在していない空気の塊を現象させる。ということは、こうして、それまでの僕の建築に対する関心に重なったと言える。モアレは、新しいデザイン手法として考案されたのではなかった。ボリュームという物理的には存在しえないものを、その本性に相応しく、物理的には存在しえないものとして現したものであったのである。
・・・「LOUIS VUITTON 1 EAST 57TH」は、このボリュームという考えをもう一歩進めようとしたプロジェクトだった。お店の中を外の世界と異なる〈くうき＝質〉に変える。そういうことをより強調するために、一次的にはモアレを出現させるためのパターンの施されたガラスを、〈くうき＝質〉の変換フィルターとして扱うことにした。外から内が見える。しかしその内は、白濁した〈くうき＝質〉の世界に変わっている。
こうした試みは、ボリュームというものの「表現」としてある程度の達成を見ていると思う。それらはボリューム「っぽく」見える。しかし僕の中では、ボリュームの「表現」にとどまっていていいのか、という疑問もないではなかった。ボリュームというものの「表現」ではなく、ボリュームというもので「ある」ということ。・・・その気持ちから、2000 年に始まる「ルイ・ヴィトン表参道ビル」・・・が生まれる。・・・ここには、空間構成全体を把握できる視点はない。しかしその空間構成は、体験者の中にそのボリュームを現象させる。
だから、「ルイ・ヴィトン表参道ビル」で、トランクをランダムに積み重ねようとしたというのは、・・・そもそもが、そう見える（表現する）ようにつくろうとしたのでは全然なくて、そうしてできた全体の空間構成がはたして「ボリュームであること」を実現できるのかという関心からきていたのである。・・・「ルイ・ヴィトン表参道ビル」の場合、内部空間の質を規定しいるのは構造体である。床と柱の列。そのふたつの要素によって、さまざまなスケールとプロポーションの直方体空間が規定されている。そして、それらの仮想空間が立体的に連結されている。ここではしかし、その全体構成が、内部空間の体験上、一度も把握されることはない。直方体の空間同士のつながりも、多くのところで視覚化されない。直方体の空間が独立し、至るところで、それらの間の視覚的関係が完全に切れている。その全体の〈くうき＝質〉がひとまとまりとして、つまりある特定のボリュームとして把握されるのは、体験が終わって外に出てからである。そのボリュームは、構造体がそうであったから初めて可能だった〈くうき＝質〉である。その意味で、構造体の配置のされ方が建物のボリュームを現象させていると僕は考えている。

装飾と等価な包み隠されている実体
こうして「ルイ・ヴィトン表参道ビル」ではじめて、ボリュームの問題は、外装の問題から分離することになる。外装は、もはや内部の空間構成の「現象」ではなく、それを単に「なぞった」ものにすぎない。ということで、結局、外装の問題は振り出しに戻る。外装はふたたび、包装紙にすぎない。そして、それ以降、僕は外装を包装紙と割り切ることになる。「ルイ・ヴィトン六本木ヒルズ店」と「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」・・・そのどちらにおいても、外装は内部空間とは縁の切れた独立した「装飾」であるし、またそれでいいと考えたプロジェクトだった。
「衣服の向こう側に裸体という実質を想定してはならない。衣服を剥いでも、現れてくるのはもうひとつの別の衣服なのである。衣服は身体という実体の外皮でも

なければ、被膜でもない」(『モードの迷宮』、鷲田清一)
こうした日本の包みなりファッションという「装飾」は、それが包み隠している実体と等価である。装飾という表面それ自体が実体であって、それらを取り去ったものが実体ではないのである。それらは内部へと誘惑するけれど、その内部には何もない。もしそれが隠しているものがあるとすれば、むしろ「実体の無さ」なのである。

「装飾」の奥行
「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」の外装は、内部空間とはまったく分離した表面である。・・・「装飾」は現実に見えるものとその背後に隠されているように思われる虚の実体との、それら 2 重の見え方を同時に与える。たしかに実体としての内部空間はあるだろうし、実体としての構造体もあるだろう。しかし、「装飾」というもうひとつの実体は、それらの実体とは同列にあるのではない。「装飾」は逆にそれらを隠すことで、目に見えている「装飾」という実体と同時に、現実には存在しえないそれらの実体としてのあり方を現象させているのである。これが「装飾」の奥行なのだと考える。
こうして、僕の中では、巡り巡って、「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」で「LOUIS VUITTON NAGOYA」に帰ってきた気がするのである。その間には、外装が装飾でしかないことへの後ろめたさが、逆にひとつの大きな可能性としてポジティブなとらえ方に反転したということがある。「LOUIS VUITTON NAGOYA」で、僕は、ボリュームという実体を伴わない内部空間を現象させようとした。このことは、今では、ボリュームという観点から考えるなら、さほど重要なことには思えてなくなっている。しかし、「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」が発見したのは、「LOUIS VUITTON NAGOYA」ですでに、実際に目にするものとそれが与える実際には存在しない隠された内部への誘惑の同時提示としての純粋な「装飾」が達成されていたということだったのである。

No. s-136　Renovation Style　集合住宅のワンユニットを敷地と捉える
――納谷学＋納谷新，　sk0502

[連作名] マンションのリノベーション
われわれは、これまでに 5 世帯のマンションのリノベーションを実現してきた。・・・最初に依頼があったのは、403 号室である。・・・集合住宅においては、・・・壁や床、天井によって決定されている隣地境界線が、左右の隣戸だけでなく上下階の住戸とも存在するのである。・・・集合住宅の一室は立体矩形の敷地と考えられる。・・・LDK と寝室、つまり住宅を構成する大きなふたつの居室を、その立体矩形の敷地に配置することだった。ちょうど、新築において敷地の中で複数の建物の配置を計画するように。
・・・1227 号室のクライアントは女性の独り住まい。変形している立体矩形の敷地の真中に物が何も出てこない最大限のプレーンなスペースを配置することにした。プレーンなスペースの外側には水回りや収納などの機能を追い出し、スペースを囲い込んだ壁と立体矩形の境界線との距離をコントロールした。

・・・406 号室は、・・・ワンルーム的にまとめ上げたスペースに筒状のスペースを挿入し、ふたつに分けた領域を、閉じたり繋いだり挟み込んだ領域を可変させることで、分断した空間の領域を換えようという試みである。・・・403 号室や 1227 号室の抉り取られた隙間の空間が空間の引き算による空間の組立て方によるものだとすると、406 号室の中間領域は空間の具体性をもって意図的に挿入するという足し算によるものだと言えるかもしれない。

404 号室では、夫婦の趣向を手掛かりに、空間を 3 つの大きなゾーンに分類した。・・・
また 502 号室では、パブリック性の強い LDK と、プライバシーの強い個室をはっきりとしたゾーンとして捉え、切り分けた。・・・
計画中の 804 号室では、立体矩形敷地とゾーンの考え方を併用して提案している。・・・

われわれのこれまでのリノベーションは、立体矩形の敷地に見立てたり、中間領域を変換させたり、新たにゾーンという考え方を持ち込んだりと、ミニマムで終わらない、何か別のやわらかい空間の緩衝材となるスペースを検索してきた。そ

403 号室

404 号室

502 号室

406 号室

1227 号室

804 号室［P］

してそれらは、住空間それぞれの場所性や個別性、独立性、反画一性を導き、引いてはその住戸の固有性に辿り着くのではないかと考えている。住戸の固有性は、住人のキャラクターをダイレクトに表出するものとして、均一に連続し積み重なる、合理的な住戸配列の中で一石を投じれはしないか。田の字プランに満足していない人たちへのアプローチにならないか。集合住宅に、戸建て住宅と同様の自由度と固有性を持たせたい。

No. s-137　共有するプロセス、事後的なプランニング
――田辺芳生 他，　jt0505

［連作名］空間の原形

住宅として満たさなければならない条件から、できるだけ遠いところから住宅を設計したい。住宅を内側から解決するのではなく、あえて空間の問題にとどまること。あるいは、そこで営まれる生活からの逆算で住宅を設計しないということ。そういう意識を明確にもっていないと、住宅を設計するという行為自体がいわゆる「住宅建築」としての閉じた枠のなかでの内向的な行為になってしまうのではないか。空間を扱うという意識を強くもちながら住宅を設計したい。

T-HOUSE

花見川の家

殻の家

設計の案としてひとつの方向にまとまるまでの間、さまざまな要因が現れる。・・・これらの条件を整理・精査しながら、さまざまなスタディによって可能性を検討していく中で、パラメーターが同時に成立し、手法的意味における空間のつくり方と物理的な意味における空間のつくり方が、合理性をもって成立する段階がある。この段階での「空間の質」は、住宅の内部の論理からはいまだ遠いところにある。どこがリビングでもよいし、どこが寝室であってもよい。つまり、どのように使われようと決して消えることのない、いわばスケルトンのような「空間の原形」の状態である。
今回掲載の「T-HOUSE」「花見川の家」および「殻の家」（池田昌弘氏と共同）の３つのプロジェクトを通して、「空間の原形」への試みを具体的に説明したい。

「T-House」
この住宅では、空間の問題として「内部と外部の形態的な関係」が設計の対象となっている。・・・
内部空間は、建物全体のヴォリュームから外部空間を切り取って残った状態として形をとどめている。外部空間の形が変わればまた違う形が現れるような、それ自体では形態としての自立性をもち得ない、結果としての空間である。それぞれ台形をした外部空間により象られた内部は、都市における建築の隙間のように、挟まったり、広がったりしながら形を変え、不定形で流動的な空間を形成している。

「花見川の家」
花見川の家における特徴的な空間手法として「グリッド」がまず挙げられる。・・・かなり抽象性の高い空間であるが、整然と内部空間と外部空間が連続している状態はグリッドという手法自体を消し去りながら、明るく伸びやかな空間を実現している。

「殻の家」
囲むというよりむしろ包み込むという状態の RC 壁が、周辺環境と内部空間の境界を「中間領域」として、内部と外部を分断するのではなく、周囲を受け入れて存在するような関係性を生み出すことを意図した。

「住宅」になるためには、「空間の原形」の状態から、特定の住まい手のための生活の細部をきちんと定着させることが必要となる。ここで発生する生活のためのプランニングとは、将来的には変更になる可能性をもつ設計時点での与条件に基づいて、個々の住宅としての「設え」を事後的に付加する作業だと位置づけている。可能な限りその割合を少なくし、設えが付加される前の空間の原形に近い状態で、住宅としての「空間の質」をつくり出せることが、最終的な到達点だと考えている。

No. s-138　スペースブロックとダブルスキン
――小島一浩＋赤松佳珠子，　sk0506

［連作名］**スペースブロック**

賃貸の集合住宅を設計するという時、だから、われわれはそういった建築家による独立住宅に劣らない空間の質を本気で生み出さなくてはならない。集まることで得られるものを、われわれは初期の「氷室アパート」、「桜台アパート」から「スペースブロック上新庄」、「スペースブロックハノイモデル」まで、一貫して敷地の中での空間のボリュームの組み合わせ方の問題として捉えてきた。
そういった中で、今回はじめて東京に「スペースブロック（以下 SB）」を用いた建築、賃貸集合住宅を計画する機会を得た。・・・大阪の混乱した周辺環境の中では「上新城」のように周囲にいささかワイルドに同化した SB が、東京都下の閑静な住宅街では行儀良い振る舞いを見せる。・・・
視線（プライバシー）・風・光の制御を兼ねる型板ガラスルーバーのサッシは、「スペースブロックハノイモデル」でアジアから学んだ知恵。

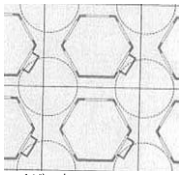
スペースブロック上新庄

ノザワ

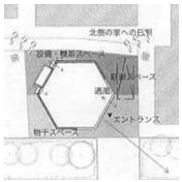
No. s-139　建築は動かない ――堀部安嗣，　jt0508

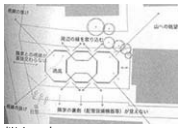
［連作名］**多角形平面をもつ住宅**

そんな日常の考えの中から生まれてきたのが正多角形の平面をもつ住宅である。現代の日本の町並みや住宅地に有効な形態である、という理論があり、また個別的に特定の敷地のためを考えてみても眺望や風通し、あるいは内部、外部の空間の変化や奥行にきわめて効果的な形である場合が多い。しかし私が正多角形に魅力を感じているのは、正多角形が誰かが誰かのためにつくった形ではなく、またその敷地のためだけにつくられた形でもなく、そしてそれ以上動かない形である、という自立性であるかもしれない。あるいは正多角形の平面からは誰からも見られることがないであろう、美しい屋根伏が生まれるからかもしれない。
いくつか正多角形の建築を設計してわかったことであるが、五角形、六角形、八角形、とそれぞれの形においてまったく違う強烈な個性が存在している。それらの建築ができ上がってみるとなんてことなない、その角数の個性がしっかりと表れた空間ができ上がる。設計はそれらの個性と向き合いながら、すでにその形の中に存在しているものを引き出していく行為に近くなるのだ。
ただ正多角形という形は自己の考えをわかりやすく表現できるひとつの道具であって、それを用いることはひとつの試みにすぎない。これらの考え方の先に、今後どのような形の存在が見えてくるのか、スタディを重ねていきたい。


つくばの家

由比ガ浜の家


府中の家


桜山の家

屋久島の家 II

No. s-140　バーチャルなエクステリア
――ベラ・ジュン、藤村龍至，　sk0509

［連作名］**グリッドベースの家具**

今回の２作品は商品や、事務所類など、大量の所有物を立体的に配置する必要性、および現場における既存の床、壁、天井の仕上げ工事と工場における家具製作を同時に進行する必要性から、前作である「VOXEL HOUSE」で試みたグリッドをベースとしたつくり付け家具のシステムを共通して採用することとなった。設計方法、工法はほぼ共通しているが、それぞれの建築的意図の違いによって、端部の処理、色彩、棚のスパンなどのディテール、仕上げ、寸法に変化が現れている。
しかし今回は、そうした建築的なディテールの差異よりも、建築が外部を持つということについてい悩まざるを得なかった。「VOXEL」は「逃亡」を企てる個人の住宅であったため、エクステリアについて考える必要がなかったのに対し、今回の２作品では共に、社会と関わりの大きい企業が使用するから、空間にエクステリアが求められた。
東京のようなファサードのない都市において、インテリアはもはや「内装」を意味せず、エクステリアは「外装」を意味しない。しかし、倉庫やテナントスペースといったいかにも東京的、今日的な与件に際しても、建築はインテリアとエクステリアの関係を仮構することはできる。本作品群は、そのようなバーチャルなエクステリアを構築するためのスタディとして位置づけられるだろう。そして、こうした試みに延長線上に、建築がもう一度都市に参加するためのヒントが隠されているのではないか。

VOXEL HOUSE

ATHLETA OFFICE

ARTSREAL ESTATE AGENCY

No. s-141　風景を支えるフレーム ――下吹越武人，　sk0607

［連作名］**テナントビル**

最近､いくつかのテナントビルに携わる機会を得た｡ここで言うテナントビルとは､複数のテナントを想定した、中小規模のいわゆる雑居ビルである｡・・・つまりスケルトン／インフィルというフレーム自体が現実と乖離している。一体、テナントビルを考える際に何を拠り所にすればよいのか、という問い掛けからプロジェクトはスタートした。

街並みを見渡すと、テナントビルは数多く存在するが、文字通りありふれた風景の中に埋没している。もう少し注意深く観察すると、むしろビルというよりはそれぞれのテナントが自由気ままに街並みに参加していると言った方が正しいかもしれない。それは混沌とした風景だが、人びとの営みがつくる風景は良くも悪くもリアルで身近な都市のイメージを築く。この心象的な都市空間にどのようにしてテナントビルは参画することができるのだろうか。それは、建築単体で完結するような閉じた空間構成ではなく、敷地を越えて周辺まで含めた地域性の構造を担う開かれた建築のあり方であろう。人びとの営みの連鎖が地域性を支え、活発なアクティビティの集積は活力と求心性を育む。テナントビルをアクティビティの多様体として捉えると、それはおのおのテナントの個性と風景を繋ぐ新たなフレームを見出すことではないか、と思う。

最初に手掛けたテナントビル「FLEG 代官山」は、・・・建蔽率 60％によって得られた空地率 40％を利用して，間口いっぱいにオープンスペースを設けた。パブリックな道路レベルは各区画へダイレクトにアクセスできる立体的な広場空間とし、プライベート性の高い上部にはコケパネルを載せたグリーンビームを架けて、住環境と商業空間を繋ぐバッファーとした。

このオープンスペースは内部からは限りなく専用部分としてイメージされる「外部」であり、都市への接続部である。テナントは、まずこの「外部」の使い方を想像するだろう。・・・活動領域（専有部）からはみ出した「外部」の使い方を考えることは、自らのアクティビティを少しだけ拡張していく可能性を秘めているし、シンプルに楽しい。そして、使い手を喚起する「外部」の創造性は、通りを歩く人や周辺地域からの眼差しを受け止め、発展的に波及し、魅力的なボイドとして共有されうるであろう。内部にも都市にも属さないこの「外部」の探求が、その後のプロジェクトへと続いていった。

キラービルの最大の特徴は 3 階から 5 階の中間層に設置したバルコニーである。・・・このバルコニーはとても曖昧な位置づけとなっている。まず、区分上は共用部で、賃貸部分には含まれないが、各フロアからのアクセス階段によって専用使用できる。中間層にあるので、床には属さないし、インナーバルコニーなので都市にも属さない。つまり、内にも外にも属さない中間領域となっている。バルコニーの軒天に貼ったステンレス鏡面パネルによって、内部からは道路の人の動きや車の流れを、外からは内部のアクティビティを意識させる。内部と街の積極的な関係を築くバルコニーは、使い手と通りを移動する人びとに「どのように使うのだろう」と、想像力を強く働きかける。この前向きな相関性が、良好な都市のイメージを誘導してくれればと考えている。

［キャットビルは］まず、外部からの視線を考慮して、ずらしながらボリュームをえぐり取ってボイドをつくり、フロアごとに周辺環境との個別の関係性をつくり出すことを試みている。えぐり取った部分は各テナントの顔＝ウィンドウとした。ずらすことでウィンドウはそれぞれ自立している、街のある一点からガラス越しに全フロアを見通すことができず、人の動きに合わせて内部のアクティビティがかわるがわる表出していく。内部と周辺の関係も一様ではないので、アクティビティの表出は多様化するだろう。・・・

［FJT ビルの］敷地は自由が丘の私鉄線路沿いにあり、前面道路は線路によって分断され、行き止まりとなっている。・・・このふたつの空虚な帯状のボイドがつくるカドに 2 階のボリュームがオーバーハングした半屋外の立体広場をつくる。ふたつのボイドは立体広場と連続して、一体的な「外部」として専用化できるのではないかと考えている。

キラービル

キャットビル

FJT ビル

No. s-142　建築のその先にあるものと、今ここにあるもの
キールをめぐって ――田井幹夫，　jt0608

［連作名］**キール**

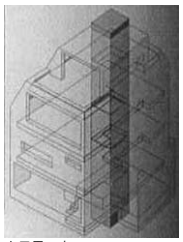
建築はさまざまな条件の上に成り立っている。その細かなひとつひとつの課題を丁寧に読み解いてかたちにしていくのが設計という行為だ。それらは、プログラムだったり、予算だったり、法規、構造、そして環境調整だったりと、実に多岐に渡る。それらを何かひとつのツールで、スウッと建築が解けていったら、それが建築の強さやよりどころになる気がしている。それはつまり、かつて家族の成長に合わせて傷つけた大黒柱のようなものなのかもしれない。仮にそのツールをキール（竜骨）と呼ぶとして、それを建築がもつとき、より魅力的で強いものになるのだ。

材木座の家

浦和の家

東小岩の家

古河の家


上目黒の家

最近手がけた住宅においては、下記のように意識的にキールを仕込んだつもりだ。いずれの計画でもキールにあたる部分は、構造的、環境的、心理的、動線的などのうちひとつだけにとどまらず、いくつかに渡って重要な役割を担うことで、その建物をひとつの解へ導いたといえるだろう。

建築のその先にあるものを絶えず意識して、新しい概念を生み出すことが重要であるだろう。しかし、それだけでなく、建築が使われ続けることによって存在する以上、その空間の質を徹底的に扱うこと、つまり今ここにあるものに正面から向き合うことが必要だと思う。このふたつをバランスよく扱うとき、建築におけるキールの存在が、大切なきっかけとして有効に空気を紡ぎ出すのではないかと思っている。

材木座の家
・・・擁壁としてつくられた RC の壁がキールだといえる。・・・

浦和の家
2 枚の屋根の段差に架け渡されたフィーレンデールトラスが文字通りキールである。・・・

東小岩の家
木造の中に挿入された 3 つの鳥居型のスチールフレームが、さまざまな機能を担っている。・・・

古河の家
中央に設けられた RC のコア部分が、両サイドの木造の水平応力を負担して、平面的立面的な開放性を確保している。また、水回りやゲストルームなど、非日常的な空間がこの中央のコアに収められることで日々の生活に演出的な効果をもたらす。

上目黒の家
スギ板型枠によって特徴付けられていたエレベータコアが、まさに大黒柱のように各フロアを貫いている。

No. s-143　新旧の対話する空間 ――安藤忠雄，　sk0609

［連作名］**新旧の対話する空間**

PALAZZO GRASSI

PALAZZO GRASSI は、グランド・キャナル沿いのサン・マルコ広場に程近い場所に位置する、ジョルジオ・マッサーリの設計により 18 世紀後半につくられた新古典主義の建物である。・・・ベネチアにおいても歴史的建造物の維持保全については厳しい規制がある。都市景観に関わる外観はもちろんのこと、内部の改修についても、行政による細かな指導を受ける。このような状況の場所にあって、現代美術のためのホワイトキューブ的空間を既存建物内部につくり出そうという今回の計画は、ある意味、矛盾した計画と言えた。しかし、その新旧の対立的な関係が、対話を伴った衝突であるならば、新旧が互いに刺激し合うような活力のある空間が生まれる可能性がある。「FABRICA ／ベネトン・アートスクール」や「国際子ども図書館」など、同種のプロジェクトで一貫して試みてきた〈新旧の対話する空間〉というテーマだ。PALAZZO GRASSI 再生計画では、その主題をより繊

細なディテールの部分で追求することになった。

No. s-144　CHINA RUSHING　SAKO 建築設計公社の中国に置ける設計活動
――迫慶一郎，　sk0610

［連作名］**スケーリング・ユニット**

このような中国的状況に対応するために、スケーリング・ユニット（拡大縮小・単位）と呼んでいる設計手法をいくつかのプロジェクトで展開している。
起点は「北京フェリシモ」の「キュービック・ファーニチャー」である。400mmの立方体とそれのふたつ分の大きさの直方体。このふたつのサイズの箱を積み木の要領で組み合わせることで、ブティックに必要な什器のすべてをつくり出した。・・・

北京フェリシモ

金華チューブチューブ

北京バンプス

天津コラムナーシティ

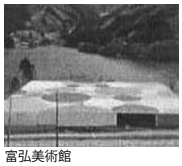
もうひとつの起点は地方都市の開発区に建つ官庁ビル「金華チューブチューブ」である。・・・初源的な形態による徹底的なシンプルさと、スケールアウトしたサイズ（32m 立方体と 55m 長のチューブ）にまでユニットを拡大することで、期待されるシンボル性を獲得できるのではないかと考えた。
「千鳥湖チューブハウス」は筒状の「ルーム」をユニットとして構成された戸建て分譲住宅である。・・・
「天津カレイドスコープ」と「済南レイヤーズ」はどちらもスケーリング・ユニットにより囲まれてできる外部空間が主題であり、「内街」と呼んでいるリニアな場を街と連続するように敷地内部に取り込んでいる。・・・地元に慣れ親しんだ小さなスケールの沿道型店舗が、歩道から大きく壁面後退した中高層の商業施設に建て替えられる。・・・これらのプロジェクトではコンテクストに合わせたスケーリング・ユニットにより、路上のアクティビティが再生される場をつくり出すことを試みている。

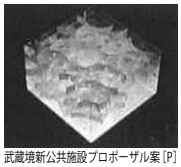
「済南オーガニゼイション」と「北京バンプス」は・・・スケーリング・ユニットを市松状に積層させている。・・・
「天津コラムナーシティ」では・・・8.5m 角のグリッドを敷地全面に行き渡らせる。住宅、混合商業、オフィスといった 3 つの地域にはそれぞれのスケールに合うように、8.5m の 1 倍、2 倍、3 倍の大きさの柱状体を設定する。GL-5m から +200m までの合計 2,500 本の柱状体が、複雑で豊かなスカイラインをつくり出す。

No. s-145　セミモノコック建築――ヨコミゾマコト，　sk0610

［連作名］**セミモノコック建築**

造船所で見た鉄の構造物が忘れられない・・・造船所のタンカーはとてものんきな存在に見えた。鋼板も紙のようにペナペナである。微視的に見れば歪んでいるが巨視的に見れば平らなのである。製作した方には申し訳ないが、なぜかそのいい加減さにとても惹かれた。そのペナペナ感は、リブと外皮材との組み合わせによるセミモノコック構造特有のものと言える。卵の殻のように外皮材だけであらゆる応力に耐えようとするモノコック構造と比べると、張り子の虎のように柔軟で軽快な量感を持つ。実は、人を入れるためのセミモノコック構造は、船舶や自動車、電車など身近にもいろいろある。薄鋼鈑セミモノコック構造の建築が世の中にもっとあってよいではないか？と思い始めた。


富弘美術館


武蔵境新公共施設プロポーザル案［P］

NYH

GSH

初めて薄鋼鈑で建築をつくる機会に恵まれたのは、富弘美術館である。外皮材としての 9mm 厚の鋼鈑にリブとして FB-38 × 12mm を 455mm ピッチで溶接しているセミモノコック構造である。単層であったためにディテール的にはきわめて単純な納まりでできている。次いで武蔵境新公共施設プロポーザル案では、富弘美術館が重箱のように積層したような建築を構想した。各フロアでは、それぞれの条件の元でサークルプランニングが行なわれる。それを積層させるわけだから、上下に連続する壁や柱はない。鉛直力は上下で交差している壁の部分を伝わっていく。その考え方を実行したのが、NYH である。・・・曲面壁は 9mm 厚の鋼板の片面に FB-38 × 16 を 300mm ピッチで溶接したものである。床スラブは 4.5mm 厚の鋼板に FB-75 × 12 を同じく 300mm ピッチで溶接。・・・NYH では、セミモノコックのコンテナ状のものを積み重ねるという意識が先行し、建物全体に対

する一体性に対する意識は希薄であった。それは構造的だけではなく空間的にも、家としての全体性よりも生活の場としての部分の集積が重要であると考えたからである。一方の GSH は、都心の商業地域に建つテナントビルである。・・・施工後しばらくして覗いてみれば、驚くほどに各階独自の世界がまったく上下無関係に積層しているに違いない。その光景を思い浮かべながら意識はセミモノコック構造の建物としての一体性に向かった。外皮は 4.5mm 厚の鋼板に□ -75 × 75 のリブをランダムなピッチで溶接している。各階の床レベルでは C-150 × 75 がタガのように廻っている。円い開口部はスキン状の外皮を強調するようにランダムに配置されている。リブは、その開口部を避けるように配置されているためにピッチが一定ではなくなるのである。全集で 40m となる外皮は縦に 13 分割され、現場溶接によって一体化された。先行事例として航空機や自動車等が参照可能であるセミモノコック構造の建築への応用の歴史を埋めるためには、まだまだ手つかずの世界が広がっていると感じている。

No. s-146　図式の崩壊から ――青木淳，　sk0703

［連作名］ルールのオーバードライブ

ぼくにとっても、建築とは、その図式を説明するものではないし、図式というものが本来的に持つ非現実的抽象世界を実現するものでもない。建築とは、ある特定の世界を、ぼくたちの現実世界の中に、現実の物質や空間によって定着することだ。図式は、そのための手段にすぎない。そして、そのための手段は、何も図式に限らない。・・・

青森県立美術館

TARO NASU OSAKA

・・・ぼくが、空間の質、そこでの人の居方、世界の実現に近付こうとする一方で、次第に図式というものから遠ざかっていたからだ。「青森県立美術館」は、その極北だった。・・・
そんなわけで、ぼくは、外部からその正当性を保証できないひとつの「無根拠なルール」を採用しようとした。意味の行き来、というルールだ。もっともこのルールは、青森県立美術館に限ったことではない。古くは、住宅「O」でも採用している。・・・青森県立美術館は、そのルールを、「O」以上に、いろいろなレベルで、また細部にまで展開し、徹底してオーバードライブした建築だった。・・・
こうしたルールを図式で描くことは難しい。それは、ひとつの静止点において受け取ることができる感覚ではないからだ。それは、その中を実際に歩き回って出会うことになるシーンの総合として、その体験者の脳裏にだけ像を結ぶことができる感覚だ。一枚の図式で表わすことはとてもできない。だから、青森県立美術館には、本来的に、ルールはあるが、図式はない。
もっとも青森県立美術館にも、最初は、図式らしきものがあった。・・・
・・・でも、確かに、青森県立美術館は、設計のかなり早い時期に、図式をルールに回収してしまって、それからは、そのルールのオーバードライブに身を任せた建築だった。・・・
青森県立美術館は、ぼくたちの建築の中から、図式が消えていく、その最後の尻尾のような建築だった。そしてぼくは、それ以降、次第に、もっと意識的に図式を捨てる道を考えるようになった。

「TARO NASU OSAKA」は、青森県立美術館とは比較にならないくらい小さな空間ではあるけれど、これは、ある意味で、青森県立美術館で考えたことの延長線にある。なぜなら同じように、ルールのオーバードライブによって、美術のための空間をつくろうとしているからだ。違うのは、そのルールが「意味の行き来」という概念的・非視覚的なものではなく、可動パーツの集合体という物理的・視覚的なものだったということだ。

・・・図式そのものが重要ではない。ぼくはそれに対して、ルールやそのシーンを、それ自体に「ある特定の世界」を含んだものにするまで、研ぎ澄まそうと思う。そこから建築にストレートに直結させようと思う。そんなルートを、ぼくは今、考えている。

No. s-147 「ある置かれ方」でできているメガネ屋さん
——中村竜治， sk0706

［連作名］**JIN'S GLOBAL STANDARD**

どんなに過激なデザインのお店であっても、商品の陳列に関しては意外と保守的である。・・・店舗設計を「内装」、「什器」、「商品の置かれ方」という分け方をすれば、一般的に「内装」に関しては、かなりの自由度が与えられているが、「商品の置かれ方」に関しては、ほとんど自由度が与えられていないようだ。陳列という核心に触れない「内装」のみを自由に変えることで他との差別化を図っているのである。これが、先に述べた「違うようで同じ」状態を生んでいる。つまり、陳列という核心に迫ることで、意外にあっさりとこの状況から抜け出せるのではないかと思うのである。しかし、考えてみれば、特に物販店舗においてのお店づくりとは本来、商品をどう置くかというところから出発していたはずである。
ここ 1 年ぐらいの間に同じブランドのメガネ屋さんを 4 店舗設計した。JIN'S GLOBAL STANDARD というブランドである。・・・

4 店舗はどれもまったく違うデザインであるが、商品の置かれ方から提案されている。陳列＝棚ではなく「置く」というもっともプリミティブなところまで遡って考えた。それによって、他のお店に埋没しない魅力的なお店ができると考えたのである。

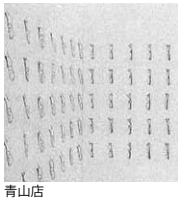
壁の表面に——流山店
・・・そこに貼られた壁紙のストライプ模様のようにメガネを配置した。・・・

雪の中のような場所に——青山店
メガネしか見えない雪の中のような場所にしようと思った。・・・壁面全体を白い布で覆い、切れ込みを入れ、メガネを縦に引っ掛けるというディテールの少ないディスプレイを用意した。

標本箱の中に——四条河原町阪急店
・・・蝶の標本屋のように、昆虫雨の標本箱が無造作に積まれているような場所にしようと思った。・・・

布基礎の上に——神戸北店
・・・メガネがきれいに布基礎の上に並んでいる光景が思い浮かんだ。・・・まずコンクリートで布基礎を打ち、基礎で分割された場所を、木の家具で部屋として設え、基礎の上にメガネ、家具の上に雑貨を置いた。・・・

JIN'S GLOBAL STANDARD 流山店


青山店

四条河原町阪急店

神戸北店

No. s-148　囲いの形式——千葉学， sk0708

［連作名］**囲いの形式**

・・・この開かれていながら多様な場所であるという状態が、都市的であることを支えているのだ。では、そもそも閉じている建築において、どうしたらこのような都市的である状態を生み出すことができるのか。

「Hi-ROOMS 方南町」は、建築の規模も、周辺環境も、これまでとは違った条件のもとでの計画だが、建築の平面形は、以前設計した「八ヶ岳の別荘」以降、何度となく繰り返し現れてくる 2 重囲い、あるいは 3 重囲いの平面形式の延長上にある。この囲いの形式は、すべて同じようでありながら、実はすべて違うものでもある。「八ヶ岳の別荘」はいくつかの部屋を回廊が取り囲むかたちである。・・・緩やかに繋がった部屋の集合に周囲に広がる林の密度感と似たものになることで、建築の内も外も等価に体験できるような空間を試みた。集合住宅の「MESH」においても同様に、周囲に広がる空地と 2 重囲いの内側の空間のスケールを近似させ、そのふたつの空地の狭間に居住空間を象徴するインフラを配置した。・・・「Studio 御殿山」においては、室内空間は共用動線を中心にぐるぐる廻れるような行き止まりのない空間になっている。・・・また 2 重囲いの厚みに穿たれた奥行の深い窓は、隣地との隙間の空間を増幅する万華鏡のようになって、内部空間が遥か遠く外へと広がっているようでもあり・・・

「Hi-ROOMS 方南町」は、・・・空間のスケールが敷地外周部に残る空地と近似し

八ヶ岳の山荘

MESH

Studio 御殿山

Hi-ROOMS 方南町

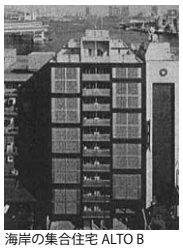
ていることと相まって、この外周部は、内側から見てみれば自分の部屋の一部でありながら、どこか外のような、遠くにあるような空間にも感じられ、この小さな部屋から内側の空間を眺めてみれば、今度は逆に自分が自分の家の外にいるかのような錯覚すら覚える。・・・
この２重、あるいは３重の囲いの形式は、単純に見えながら、不思議なことに建築の内外を超えてたくさんの場所を緩やかに繋いだり切り離したりする。さらに周辺環境やプログラムがそこに巻き込まれると、それはもはや単純なものを超え、そこにしかない空間として立ち現れてくるのである。その空間の質を「視覚的体験と運動する身体」や「かくれんぼと鬼ごっこ」、あるいは「距離感」といった言葉に置き換えてきたが、このことが建築によって生み出し得る「都市的であること」になるのではないか。この囲いの形式はその意味で、極めて柔軟でありながらも原形的な、ひとつの形式といえるのではないか。

囲いの形式は、平断面の見え方は同じようでありながらプロジェクトごとに異なるプログラムを味方に付け、そしてその場の環境を映し込み、炙り出し、原型を保ちながらも柔軟に変化してきた。こうして生み出される建築は、既存の都市空間にほんの少しだけ手を加えてできあがった、いわば「空間の地形」のようなものである。都市空間における異物になるのでもなく、かといって何もしないわけでもない、ささやかな新しい地形である。この地形によって、ちょうど都市空間が耕されるように環境は更新され、そして人の集まり方を、少しだけ加速したり減速したりするような場ができ上がる。

No. s-149　集合住宅であることの意義――谷内田章夫，　sk0708

［連作名］高さのある住居ユニット

それでは集合住宅では得にくいもののうち何を取り入れるか。今まで高さについての選択肢を求め、それを生かした住居ユニットを中心にして集合住宅を考えてきた。「海岸の集合住宅 ALTO B」で２層分の階高を使ったボイドのあるフラットを提案したのをはじめとして、「海岸の集合住宅Ⅱ CUBES」などではボイドのあるメゾネット、「桜上水の集合住宅 Hi-ROOMS 桜上水 A・B」などではスキップフロアのメゾネット、「西早稲田の集合住宅 SCALE」では 1.5 層のユニット、「鵠沼海岸の集合住宅 GRAND SOLEIL」では 2.5 層のユニット、「早稲田鶴巻町の集合住宅」ではさらにそれを複合させた。いつも内部空間の高さに変化を持たせた。「落合の集合住宅」は 3,750mm という住宅というよりオフィスビルに近い階高で、逆梁にして、開口部を天井目いっぱいに取り、回りの都市的な景観を内部に引き込んだ。また、1.5 層の仕組みを取り入れ、高い天井、ロフトや床下収納を組み合わせ、空間を有効利用した。「練馬の集合住宅」では 1 層と 1.5 層を組み合わせ、4,200mm と 2,800mm の階高で法規的制約、コスト的制約を克服し、部分的に高い天井の空間を編み出した。
それでは、何のための高さだろうか。平面だけでは考慮できない、空間の質や性能に関わるものである。広さ、機能に応じた変化は必要である。高さを設定した上でいかに空間を有効に使い切るかという意味では、むしろ立体最小限というコンセプトで求められる空間の質をつくるのと同じような作業を必要としている。


海岸の集合住宅 ALTO B

西早稲田の集合住宅 SCALE

落合の集合住宅

鵠沼海岸の集合住宅 GRAND SOLEIL

練馬の集合住宅

No. s-150　住宅はアメーバ型ワンルーム空間へ

住宅設計について最近考えたこと ――安田幸一，　jt0708

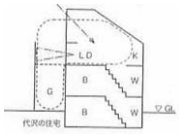
［連作名］**アメーバ型ワンルーム空間**

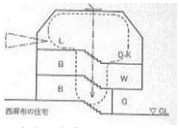
［「鎌谷町の住宅」と「三ツ沢の住宅」に］共通なところは、クライアントがともに車庫を設けることを希望し、そこで車庫を含めた住宅全体、特に断面方向での空間のつながりも含めた３次元的な空間構成を考察することに設計の主眼を置いた。

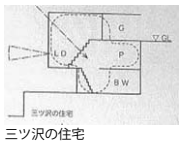
過去の住宅で経験した空間構成を考えると、最初の住宅である「代沢の住宅」では吹抜けに匹敵するような緩やかな階段が３層３室構成を貫き住宅をつなぎとめている。・・・今回の「鎌谷町の住宅」の空間構成はこの代沢の手法の延長上にあたる。「鎌谷町」では外部の床をつくらなかったため、より駐車場空間との連続性が強くなっている。・・・

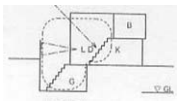
「西麻布の住宅」では、ふたつの異なるレベルの道路に挟まれた立地条件を発展させたスキップフロア型式の３層の縦型ワンルーム構成をとった。・・・「三ツ沢の住宅」は･･･ワンルーム形式と積極的に開く方向性を持った構成は「西麻布の住宅」の延長上にある。

主空間は常に大きな意味でのワンルーム構成となった。断面方向で他の室と有機的につながり、アメーバのように、住空間全体を視覚的にも意識的にもつなぎとめた。


代沢の住宅


西麻布の住宅


三ツ沢の住宅


鎌谷町の住宅

No. s-151　別荘の街並みを考える ――早草睦恵，　jt0710

［連作名］**軽井沢の別荘**

都市と別荘地では敷地の広さに対するスケール感が異なる。生えている樹木のスケールが違うためだ。敷地の大きさが同じでも、別荘地のほうが小さく感じる。別荘地では、20m ～ 30m はゆうにある高木がスケールのベースとなっているのだ。高木をすべて伐採されてしまった開発地が、都会の住宅地のように見えるのは、街の尺度が都市の樹木のスケールに変わってしまうためだと思う。

ということで、別荘地の街並みは、そこにある木がコンテクストとしてベースになるべきだと私は考えている。この３年間で、軽井沢に５件の別荘の設計を行った。振り返ってみると、その場所でその形になった原因はすべて木に由来する。「120度の家」はマユミという幹のねじれた木がたくさん生えていた。・・・建物の複雑な形態はマユミを眺めていたゆえかと思う。「万華鏡の家」の敷地は雑木林だった。シラカバとホウノキという大きな放射状の葉がつく木が印象に強く残った。回転性を持たせようと思ったのは、このホウノキがきっかけかもしれない。今回発表する「水平線の家」と「緑陰の家」は、道を隔てて向かい合っている。・・・ともに周りをカラマツの林で囲まれていた。・・・カラマツの強い垂直性から、四角い建物がふさわしいと思った。・・・

水平線の家

緑陰の家

No. s-152　ワンルームという不動産ストックの再構築

「REISM」プロジェクトにおける 4 つのプロトタイプ

――田島則行，　sk0802

［連作名］**REISM**

安くて質の高い住空間を提供するために、鉄筋コンクリート造のマンションは広く普及してきた。1979 年以前の建築は耐震基準が甘かったこともあって、取り壊し・建て直しを余儀なくされていくだろう。一方、1980 年代以降の新耐震基準を満たしたものは、今後、その既存ストックをどのように再利用していくかが、大きな課題となっている。特にライフスタイルが多様化する中で、その既存のプランのままでは今日のニーズに合致しないこともあり、リノベーションを施して再利用する方法論を確立しなければ、大量のストックが無駄に放置されることになる。

・・・では、どのようにして、リノベーションをするのか？

計画の早い段階で、プロトタイプというキーワードが浮上した。1 戸 1 戸、特注でつくるのではなく、かといって、同じタイプを単調にひたすら繰り返すのでもなく、たとえば自動車のように、ある程度のバリエーションを持ったプロトタイプをつくり出すことによって、多様な条件、多様なニーズに対応できるような「半」大量生産、あるいは少数多品種なアプローチが可能になる。・・・ライフスタイルの多様性に応えるためにも、「プロトタイプ」となる考え方が重要になったのだ。

ところが、既存マーケットに売りに出ているワンルームタイプの住戸は、プランタイプとしては同じであっても、その輪郭や出入口の位置、あるいは間取りのプロポーションはどれも違う。ほぼ同じプランであるが、どれもどこかが違うから、プロトタイプを考える上では、既存マンション住戸の類型化が必要になった。・・・何十、何百というプランを分析しているうちに、ほぼ 4 つのタイプに類型化は収束していった。

・・・50㎡以下であるならば、ある程度の機能を併用して空間を考えることは避けては通れない。そこで考えた戦略が、水回りを集約させることによって、その周りの空間を回遊させる方法である。回遊空間が、窓の位置や水回りの開口の位置や、玄関の位置との位置関係によって、少しずつ場の性格を変化させる。その変化によって生活の場がさまざまなかたちで分散され、空間性に微妙な濃淡が生まれることになる。あるいは別のケースでは、水回りを壁際に分散配置させた場合でも、玄関や窓、あるいはキッチンや風呂トイレとの位置関係によって、空間や用途の濃淡ができ上がる。つまり、そういった濃淡を読み取ることによって、同じワンルームの中でも微妙な「場」が偏在することになり、空間の自由度が飛躍的に増すことになる。

この戦略がそのままライフスタイルの多様性への解決策になった。配管工事の関係上、当然ながら水回りの位置は固定せざるを得ない。しかし、水回りの位置は固定しても、その余白の空間の機能は固定せず、むしろトポロジカルな位置関係において曖昧にしておくことによって、読み取りの自由が残されることになる。・・・

WALL

・・・ウォールは、こういった細長いプランを、より明快に、より広々と使うために考えられたプロトタイプ。壁 1 枚で水回りと余白の空間が区分けされている。

BOX

真四角か、あるいは長方形の中途半端なプロポーションの空間において、真ん中の箱に水回りをまとめることによって、回遊性と空間的な距離感をつくり出すプロトタイプ。箱の 3 面のそれぞれに面した、それぞれの空間的性格が喚起される。

FLOAT

・・・水回りを集約しつつも、ユニットバスの加工方式を利用して、水回りを中途半端な中央付近に浮かしてしまう。そのことによって、床や天井が続くワンルーム空間が可視化され、スケルトンに近い空間が認知される。

WRAP

・・・既存躯体の凹凸を有効利用して、水回りや収納をすっきりと納め、ラップしてしまうことによって、空間的には広々とした余白が生まれる。また、生活シーンに合わせて、水回りの開口部は開閉することができる。

WALL 007 江戸川橋

BOX 002 代々木

BOX 013 三軒茶屋

FLOAT 004 高円寺

FLOAT 005 東池袋

WRAP 009 三田

WRAP 012 西早稲田

No. s-153　ふたたび、都市型住宅へ ――岸和郎，　jt0805

［連作名］中庭と屋上庭園をもつ都市型住宅

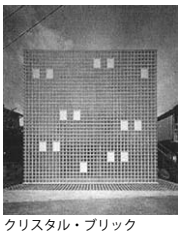
過去に都市型住居を成立させるためのふたつの外部空間として「中庭」と「屋上庭園」を並置しながら考察したことがある。「中庭」も「屋上庭園」も字義・定義通りというよりは、前者を「外部の変化の影響を受けない、安定した、過去から脈々と繋がる歴史を持つ外部空間」、後者を「開いているが故に外部の変化に敏感に反応せざるを得ない、しかしだからこそ今日的な外部空間」という文脈で語ってきた。「中京の家」や「宝塚の家」以来でずいぶん久しぶりだが、あらためてこのふたつの外部空間を合わせてもつ都市型住宅を設計する機会を得たのだと考えている。

博多の家

No. s-154　ガラスブロックによる「構造＋機能＋環境」の一連の試み ――山下保博，　sk0902

［連作名］ガラスブロック

1 棟目の「クリスタル・ブリック」が完成するまで
2003 年にクライアントから「キラキラ」、「鉱物」というキーワードをいただいた時に、ガラスブロックの使用が決まった。・・・
ここで考えたのは、ガラスブロックが構造体になり得るのではないかということに尽きる。まずは基本的なガラスブロックの圧縮強度の測定から始まった。東大で実験を行う中で構造に使える強度があることが確認された。その次に大事なことは、垂直荷重を支えるための鉄骨のフラットバーと水平力を担うガラスブロックのジョイントをどうするかが大きな問題として残った。ここからは日本電気硝子が自社の工場で何度も実験を行い、既製品のアクリルとクロロプレンゴムの組み合わせで、力の伝達を行うだけの硬さとガラスブロックが割れないだけの柔らかさを絶妙に捕えることが分かった。そして次に大事なことは、現実化するための職人たちの説得と現場の管理である。日本電気硝子の２氏が職人に何度も説明会をしてくれた。施工の管理はホームビルダーの監督と天工人のスタッフが現場に張り付いて行った。


クリスタル・ブリック

Twin-Bricks

白いてんとう虫

２棟目の「Twin-Bricks」への展開
2006 年に、オーナーの２世帯住宅と賃貸住戸併用のプロジェクトの依頼があった。・・・おもしろいものをつくってほしいとの要望であったため、新たなガラスブロックの展開を試みた。
考える際にキーワードになったのは、「コスト」である・・・ここでは、基本的には「クリスタル・ブリック」と同じ方法を取った。マスの中に入れるものが、ガラスブロックと同強度かつ安価であれば、この構造システムはすごいフレキシビリティを持っているのではないかと考えた。要求される特性は、ガラスブロックと同等の厚みや強度、断熱性能、防水性能等であった。いくつか考えた素材の中で、ALC が最も適切と考え、圧縮強度を確認する作業からスタートした。・・・そして、思った以上にガラスブロックと同等の強度が確認された。なぜ同等の強度が必要かというと、強度にバラツキがあると弱い部分に力が集中し、壊れる原因になるからである。
・・・内部に入って感じることは、「クリスタル・ブリック」以上に、構造体の存在の危うさである。

３棟目の「白いてんとう虫」による挑戦
2007 年に東京の都心で住宅を依頼され、クライアントのキーワードは「リセール・バリュー」だった。光は入れたいが近隣からは見えないことと汚れにくい建物であることが課題だった。さまざまな検討をしていた時、日本電気硝子の小嶋氏がおもしろい商品を持ってきた。ステンレスのフレームの中に 150 × 150mm のガラスブロックがはめ込まれたものである。このパネルを見た時にほぼ建物の概要が見えた。同じ質感のタイルとガラスブロックの融合を行うことで品のある外壁と光が同時に確保される。
さらにもうひとつハードルを設けた。ガラスブロックと同じ厚みで、断熱性法を持った汚れにくい鉄骨造をつくるということである。・・・

シリーズとして目指すもの
素材にはまだまだ発見できていない特性が隠れていると思っている。20 世紀に、コンクリート、鉄、ガラスが主要材料として建築の世界で使われ、さまざまな変

化をもたらした。素材によって思想が変化したと言っても過言ではないと思う。素直に素材の発する言葉に耳を傾けることの重要性と、新たな素材同士の組み合わせの編集作業の可能性が少なからず残っている。
シリーズとしてひとつの素材を考え続けることで、新たな発見や人との出会いを模索しているし、この考え方は素材だけでなく、さまざまな「現実」や「現象」にも当てはまる。既成の考え方やシステムでも、ニュートラルな観点で思考すると違う現実が生まれるような気がするし、それを今年から実証していこうと思っている。

No. s-155　アルミハウス・プロジェクト　概要と進捗状況
――山下保博，　jt0905

［連作名］**アルミハウス・プロジェクト**

本誌二〇〇七年六月号において、アルミハウス・プロジェクトの途中経過を報告した。それから一年半、実際の住宅が二棟完成し、三棟目を建設中であるり、その状況を報告したい。
・・・当初の私たちのコンセプトの中心はアルミが構造体であり、その構造体が放熱器（環境設備）も兼ねるというものであった。構造体すべてがアルミであることが前提であったが、コストの面で一般化が難しいというのも悩みのひとつとしてあった。・・・よりコストを落とし一般化を図るために、木造との混構造を考えていった。しかし、二〇〇七年六月の建築基準法の改正が高いハードルとして立ちはだかった。木造と鉄骨やアルミが混構造として認められなくたったのである。・・・
そこで、一棟目（『L-□』）、二棟目（『Branching Coral』）は構造的には木造にし、アルミのリングを設備機器として考える方向に変更した。この考えは、アルミを使用しながらコストを一般的な価格に落とすために、木造と融合するというやり方である。それと同時に三棟目（『金沢市のM邸』）のオールアルミ構造を考えながら、どうにかユニット化できないかも思考していった。何故ならば、ユニットにすることで取り扱いが簡易的になり、工期の短縮が図れること、コストが落ちること、そのユニットだけで流通が可能なのではと思ったからである。そして、そうすることで既存の住宅への転用が可能になるかもしれない。・・・
そこで、バスユニット、キッチンユニットの開発を天工人＋新日軽＋ INAX とで考え、二〇〇八年の秋にモックアップを金沢工業大学にて試作した。

L-□

Branching Coral

金沢市のM邸［P］

No. s-156　改めて家型の意味を見直す――五十嵐淳，　sk0911

［連作名］**家型**

私はこれまで「家型」を使ったプロジェクトをいくつか経験している。「tea house」「豊田市逢妻交流館」「KOKUEIKAN PROJECT」「農の舎」などである。それぞれのプロジェクトにおいて、それぞれの理由により「家型」を選択した。「家型」については既にいろいろと議論や論考がなされているとは思うが、自分なりの解釈を考えなくてはならない。

・・・私が「家型」として意識して使ってきた形は「軒の出」を許さない「家型」である。軒が少しでも突出していたり、形が変化した途端、私の中では「屋根型」となる。これは「ミニマル」とは違う「家型」の表現である。

私の「家型」を使ったプロジェクトでは、プロセスの中で必然的に「家型」を選択していった。・・・
これらは決して、過去を単純に踏襲するというような使い方ではないと考える。建築の世界ではさまざまな手法・原理・方法論が展開され、新しさや正しさを求め続ける。それはプログラムやプロセスなのかもしれないし、形態操作なのかもしれない。そういった手法や方向性のひとつの可能性として、「家型」や「アーチ」などの「ノスタルジー」や「物語」というような、今の時点では予測や予感の範囲を超えないし、いろいろな危険も含んでいると思うが、建築の未来にとって、人間が根源的に求める建築に繋がっていく、ひとつの明るい方法論になる可能性を秘めているように感じる。そして、それはとても「自由」なことなのである。この「自由さ」を未来のひとつを予感としつつ、私自身の「家型」については、

tea house

豊田市逢妻交流館［P］

KOKUEIKAN PROJECT［P］

農の舎

Signal Barn

それらのすべてを内包しつつも、すべての「家型」や「屋根型」とは全く違う発展や展開を思考し続けていきたいと考えている。

tea house。凍結深度まで掘った半地下に家型の茶室が収まる。
豊田市逢妻交流館コンペ応募案。27 個の家型ボリュームが縦方向にも積み重なる提案。
KOKUEIKAN PROJECT 応募案。豊田市逢妻交流館コンペ応募案からさらに家型を発展した提案。
農の舎。横長の家型ボリュームが「農」を支える起点となる人の「居場所」をつくる。

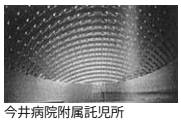
［Signal Barn の設計解説文］
大小の「家型」の塔状ボリューム群を用意する。・・・

No. s-157　ポンピドー・センターとの 7 年間 ――坂茂，　sk1007

［連作名］木造編構造

それらのばらばらなボリュームを一体の建築として融合させるため、その上を六角形の水平飛影面を持った木造の屋根で覆った。・・・そして六角形の屋根は、アジアの伝統的帽子や籠を竹で編む六角形と正三角形のパターンで構成されている。面剛性を持たせるため三角形はつくりたいが、面すべてを三角形で分割すると一点の頂点に 6 本の線材がぶつかり、ジョイントが複雑になる。この六角形と三角形のパターンにすると、頂点には 4 本の線材しか交差しない。更に、ジョイントにはメカニカルな金属ジョイントを使わないため、竹の編細工のようにそれぞれの線材をオーバーラップさせた。このアイデアは、1999 年に、ハノーバー国際博覧会の日本館を設計している時、たまたまパリの中国工芸品屋で見つけた中国の伝統的な竹を編んだ帽子をみつけた後に考えたものである。・・・初めてシュトゥットガルト大学にあるオットー設計の軽量構造研究所を見た時から、その吊ワイヤーメッシュ構造の魅力と、同時に感じていた疑問が、その中国の帽子を見て吹き飛んだのである。その疑問点とは、ワイヤーメッシュにより、最小限の材料で魅力的な 3 次元的内部空間はできているが、ワイヤーはあくまでも線材であり、その上に通常の屋根を葺くためには、木で面のシェルをつくらざるを得ない。それを見た時、このワイヤーメッシュがなくても、2 次元的に曲がりやすい木でグリッドの構造をつくれば、その上に直接屋根を葺くこともできる上に、木は引っ張り材にも圧縮材にもなるので、吊ワイヤーメッシュ的にも、圧縮系のシェル構造としても成立するのではないかと考えたのである。その後、宇野千代博物館計画、今井病院附属託児所、今井篤記念体育館、バンブー・ルーフ、フライ・オットー・ラボラトリー計画と、木造（竹）編構造の開発を続け、その集大成としてこのポンピドー・センター・メスの屋根が完成した。

ハノーバー国際博覧会の日本館


今井病院附属託児所

ポンピドー・センター・メス

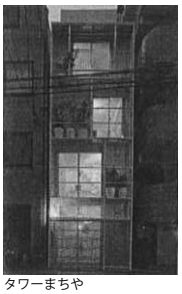
No. s-158 「狭小住宅」はやめにして「町家」をはじめる
――塚本由晴， jt1102

［連作名］**まちや**

そして 90 年代以降、はじめに述べたように小さな住宅は一層小さくなって「狭小住宅」と呼ばれるようになる。50 平米以下の敷地に建つような住宅をアトリエ・ワンでも手がけたきたが、それを「狭小住宅」と呼ぶことにはいつも抵抗を感じてきた。
「狭い」「小さい」という形容詞は、「広い」「大きい」という反対語を伴った量的な比較に奉仕している。キョーショーというのは空間の量が足らない時の叫びみたいなものだが、不動産あるいは富の分配の話である。・・・「狭さ」「小ささ」を原罪のように抱え込んだ袋小路を、趣味や匠の物語でいっぱいにしても、閉塞感は強まるばかりである。それでは 70 年代に花開いた小住宅物語の矮小化、狭小化にしかなっていない。「狭小」の枠組みから抜け出して、小さな住宅が輝くような、誇り高い枠組みに組み変えなければならない。

その活路は、小さな住宅を、都市空間をつくるものとして位置づけることにある。密集地の小さな家には、直接的に都市空間に参加し、その形成原理たるだけの、まちへの近さと量的反復がある。
東京の住宅地でよく見られる狭小な敷地を観察すると、そこには大きく分けて、間口が狭く両側を挟まれているもの、角地のもの、旗竿のものの三種類がある。これらは土地の細分化の常套手段であり、どれも「狭小住宅」が生産される舞台となっている。だがそれぞれの敷地のあり方を具体的に検討していくと、異なる都市型の住居タイプへと展開し得る可能性が見えてくる。
その中でも特に多いのが間口の狭い敷地である。・・・複数の建物が同じような条件のもと、一定のふるまいを共有することによって、統一感の中にも変化を含んだ街並みの連続をつくり出す可能性がある。

この組み立ては町家やタウンハウスの系譜につながるものである。町家／タウンハウスは世界のいたるところで試行錯誤を繰り返しが、形式としての洗練を生み、卓越した街並みを生み出した。そこに畳み込まれているのは、密集した都市空間に住み込むための知性である。・・・東京の小さく狭い敷地のほとんどはその条件を備えているのだから、そこに建てられる住宅を積極的に「町家」と呼べばよい。そうすれば「狭小住宅」をやめにできる。「狭小住宅」が、その規模だけをニュートラルさの中に隠しもっている矛盾した枠組みから抜けられる。現代的な課題を「町家」の系譜がもつ資源や知性にぶつければ、そこに都市形態と結び付く「町家」の新世代が生まれ、有機的な都市空間が形成される展望が開ける。「町家」というのは、間口が狭く奥行の長い敷地に対して、道と家との関係の取り方、住居以外の店などを包含するやり方、奥行の長い中での光の取り方などでほぼ自動的に対応できるという意味で自律性をもち、かつそのやり方を一種の規範としてまちが共有するという意味で共同性も併せもっている。この自律性と共同性が両立する洗練された形式を、まだ東京はつくり出せていない。しかし 20 世紀の東京が街並みを壊し続けてきたからといって、21 世紀の東京がそれをあきらめる必要はないのである。
今回発表する「スプリットまちや」は、「タワーまちや」、「だんだんまちや」と共に、東京の 21 世紀の住宅を町家の系譜に接続し、歴史的、都市論的な遠近法の中に位置づける試みである。


タワーまちや

だんだんまちや

スプリットまちや

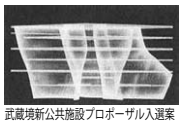
No. s-159　線上の建築――佐藤光彦，　sk1105

［連作名］**一本の線**

これまで、一本の線上に設計を還元するプロジェクトをいくつか試みてきた。
アパレルショップ「＋ A VIA BUS」で、それぞれ異なる条件の立地で、短期間に同時に 7 店舗展開するという条件に、ある一定のルールを用いることを考えたのが最初である。売場とストックに必要なすべての商品を、棚とハンガーパイプの量として一本の帯に換算し、それぞれの店舗に合わせて折り込みながら納める。・・・
ほぼ同時に取り組んだ「新富弘美術館設計競技入選案」では、色紙大の小さな作品に合わせて、展示に必要な壁面を折り曲げることで分節して、裏側に生まれるスペースに諸機能を配置し、中央の収蔵庫から徐々に外部に対して開いた空間とするものであった。
複合公共施設である「武蔵境新公共施設プロポーザル入選案」においては、複合はしていてもタテ割に管理運営がなされることの多いこの手の施設に対して、人びとの活動内容に応じて 3 つのゾーンに再編して編み上げ、さらにフラットバーによるスクリーン状の構造体によって室内環境の異なる領域に分けている。
愛媛県八幡浜市で行われたコンペ「八幡浜芸都」の最優秀案となった「かまぼこカーテン」は、研究室の大学院生が取り組んだプロジェクトである。地元の特産品であるかまぼこの、食べた後は廃棄されてしまう「かまぼこ板」を用いて公園の東屋を提案し製作するコンペであった。ここでは一般的な東屋とは逆に屋根をつくらず、かまぼこ板を数枚単位でブロック状にして積み上げたスクリーンを提案した。・・・
来春竣工予定の「（仮称）下馬の集合住宅」では、コーポラティブハウスという条件もあるが、個々のプランニングについては入居者にまかせ、周囲の都市環境とのインターフェイスをコントロールすることのみを考えている。下階では植栽、庭、ドライエリアによって隣地からセットバックし、上階では金属メッシュのスクリーン、縁側、サッシ、カーテンをぐるりと回し、いくつもの境界線を設計することによって住環境を成立させる。・・・

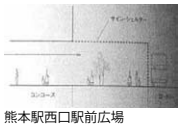
＋ A VIA BUS

新富弘美術館設計競技入選案


武蔵境新公共施設プロポーザル入選案

かまぼこカーテン

下馬の集合住宅［P］


熊本駅西口駅前広場

これら一連のプロジェクトの中で「熊本駅西口駅前広場」は最も平面的な規模も大きく、試みてきた手法の集大成とも言える。しかしながら、このような設計手法が、あらゆる建築に対して適応可能であると考えているわけでもない・・・ロータリーのプロポーション、規模、道路との接続方向、駅舎の位置、高さ、民地の状態、などすべて異なる。「駅前広場」という機能に対して一概に有効な設計手法などあり得ない。つまり、「ビルディングタイプ」あるいは求められる「機能」ごとに、一対一で有効な計画方法などないということだ。バラバラに定義されてしまった「機能」に頼るのではなく、密度や明るさや流れや時間に対応する設計が求められている。当たり前のことを言っているのかもしれないが。
機能の属性をいったん取り払って、量や、室内環境や、透明度や、人びとのアクティビティなどを手がかりにすることで、ひと連なりの線上に還元され、別の秩序が生まれる。機能に応じた空間ではなく、空間によって機能が誘導されるような場が立ちあらわれる。これまでの境界や形態を超えた空間をつくるための、ひとつの手がかりではないかと考えている。

No. s-160　規格材で、高品質なプロトタイプ住宅をつくる

地方の子育て世代へ示す建築家と工務店の協働住宅

――奥野公章，　jt1108

［連作名］**7272**

「7272」はプロジェクトの名前どおり、基本的なベースプランが 7,272mm の寸法になっているのが特徴です。3 尺（909mm）という尺貫法のモジュールに乗せた 4 × 4 間の平面形で、空間のクオリティを確保しつつ、特定の工務店ではなく、どの大工さんもつくることのできる量産可能なかたちをデザインすることを狙いとしています。・・・規格化することを考えました。そのため特別な材料や方法は用いず、基本的には誰でもつくれるようにしています。

笛吹の家

蘇我の家

飯能の家

平面は正方形を十字に切った田の字型がベースになっています。その中にヴォリュームを上下にずらしてつくって大小ふたつの個室を設け、水回りをまとめ、その他はワンルームのリビング空間という構成です。・・・
当初このプランは 303mm 大きい 7,575mm でつくり始めました。都心に比べ表

示面積に敏感な人たちをターゲットにしているので、少しでも広がりを感じられるようにと考えたのです。この 7575 プランに基づいてつくったのが「笛吹の家」で、建主の理解によってプロトタイプに近いものが実現できました。ただ「7575」だと 909mm のモジュールに乗らないため、柱の建て方に無駄が出るなどいくつか反省点が生まれました。そうしてベースプランをブラッシュアップして 7,272mm に改変し、それをもとにつくられたのが「飯能の家」と「蘇我の家」です。

No. s-161　パラレル・マテリアル・シティ
――彌田徹＋辻琢磨＋橋本健史，　sk1202

［連作名］マテリアルの流動

403architecture〔dajiba〕は 2011 年春より、静岡県浜松市に拠点を置いて活動している。これまでに手掛けた 4 つのプロジェクトは、そのどれもがとても小規模であるが、新築、改築、そして解体が区別されることなく「マテリアルの流動」という視点によって互いに関連している。「渥美の床」は天井を落として床にするという、壊すことなくつくることが直接的に繋がったプロジェクトであったし、「三展の格子」ではロフトからバックルームへと木造軸組を徹底的に組み替えた。壊し方とつくり方を同時に考えながらマテリアルを動かすことで、果たす役割を変えている。「頭陀寺の壁」では他の 3 つのプロジェクトから得られたマテリアルと、運送用パレットとを使用し、複数の流通経路を組み合わせて一軒の倉庫をつくった。「海老名の階段」では床を壊すことで段差を出現させ、そこに再び部分的に床をつくることでベランダへの動線と収納を確保し、機能的な解決を行なっている。このように、新築も改築も解体も建築資材を移動させるという点で区別せずに、それらを統合的に計画することで従来の流通システムとは違う生産が可能になると考えている。「パラレル・マテリアル・スケープ」ではそのような「マテリアルの流動」の総量を増やし、より円滑な編集作業が可能となるようなマテリアルサーバーと工房が、公共施設としてあり得るのではないかという提案を行った。
いわゆるマスな流通の端部で設計しているのではなく、解体によって資材を確保、ストックしたり、空きのある駐車場をサイトプレファブの工場にするなど、流通と生産の関係から再構築していく。そこには、ある都市に飛び込んでいるからこそ得られる、建築単体を超えて敷地を相互に横断し、都市そのものを使って設計している感覚がある。それは、その場所ごとの風土や文化との接続というよりは、むしろもっと即物的な「そこにあるのだから反応する」という態度だ。

・・・一般的な建築生産に携わる人以外の人も巻き込み、建築単体を超え、敷地を相互に横断し、標準を組み換え、慣習をスライドさせる。そのような「マテリアルが流動する（かもしれない）風景」をつくり出していくことが、私たちの希望である。

渥美の床

頭陀寺の壁

三展の格子

海老塚の階段

No. s-162　シェアを設計する――猪熊純，　sk1206

［連作名］超濃密な可能性の場

この春、私たちが設計を手掛けた 3 つの施設がほぼ同時に竣工した。陸前高田に建設したコミュニティカフェ、渋谷にできたコワーキングスペースとデジタル工房カフェ、これらはすべて、数年前から私たちが積極的に提案してきたこれからの生活や社会のあり方が、出会いに恵まれ、かたちになったものである。

これら 3 つの設計には共通点がある。対象としているコミュニティや地域は違えど、カフェであり、オフィスであり、工房であり、会議室であり、イベントスタジオでもある、もはや用途を名付けるのが不可能な場である。多目的室と呼ばれるがらんどうとはまったく別の、超濃密な可能性の場を設計しなければならない。こうした場の設計においては、運営と設計の検討は同時に進み、空間のアイディアが運営にフィートバックされるというダイナミックなプロセスが必要不可欠だ。こうした検討の積み重ねによってしか、複雑な運営と有機的な関係を結ぶ、多様な空間をつくることはできない。新しい時代の新しい空間とは、そもそもそうやって生まれるものではなかったか。日本の社会がまったく別の価値を求め始めた今、私たちも 20 世紀とは違ったかたちで、これからの時代の営みと風景を描けるのではないかと思う。

FabCafe

THE SCAOPE(R)

りくカフェ

No. s-164　建物からスペースへ、そして空間性へ

一連のオフィス建築の展開

――菅順二／竹中工務店，　sk1211

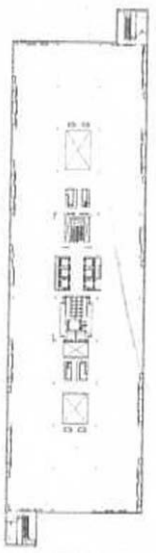
［連作名］**オフィススペース**

日本のオフィス建築の執務スペースは、長い間、有効性が問われることはあっても空間性に着目されることはなかった。組織上のヒエラルキーは意識されてもワーカーの働き方が職種、職能にかかわらず画一的に捉えられていた状況では、作業能率を上げるには均質な設備環境が有利と考えられた。いわゆるコアタイプの平面計画が多くの場合行われてきたのは、オープンオフィスのレイアウトが主流の中で合理的に執務スペースを確保することと、均質なスペースをつくり出すのに有利だったからである。建築としての個性と質感は、外観と、エントランスホール、その他の特別な用途の部屋のデザインに負うところが多く、建物としての即物的な質と性能がオフィスに対する価値観であったとも言える。・・・かくしてオフィス建築の中での主体たる執務スペースは建築が本来持つべき空間性とは無縁のスペースになった。

2004 年末、東陽町に竹中工務店東京本店新社屋が竣工し、今回明治安田生命新東陽町ビルが竣工するまでに 7 年が経過した。この間、建物としてのオフィス計画から脱却し、より活性化したワークスタイルに対応したスペースありきの計画へ、ここでは執務スペースが建築デザインの主役になっている。そしてさらに自分の働く場所としてのプレイヤーアイデンティティを想起させる空間性へ至るまで、オフィス建築に対する一連の取り組みを行ってきた。

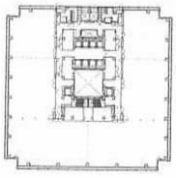
竹中工務店東京本店新社屋の計画・・・を通してその後のオフィス建築の計画において重要となるポイントを見定めることができた。それは、全体スペースの連続性、均質ではない空間の創出であり、言い換えれば、組織全体の可視化とシームレスなコミュニケーション環境の形成、環境に揺らぎを与えることによる執務環境の向上ということになる。建築的手法としては、ポーラスな内部構成による全体可視性の確保、自然光と数の導入、視覚変化の創出である。自然通風と採光は、時の移ろいを感じさせる重要な要素であると共に、その流れる、あるいは入射する方向によってスペースの繋がりを喚起することができる。均質でないスペースとは、ワークプレイスのプランニングと連携し、自席での穏やかな環境の変化と、その時の執務内容により自席を離れより適した環境の選択を可能にすることである。これらは、その後設計したオフィスに総体的にあるいは選択的に一貫して展開していった。

一連のオフィス設計の延長線上に計画したのが、明治安田生命新東陽町ビルである。・・・


竹中工務店東京本店新社屋

スカパー東京メディアセンター

日東工器新本社・研究所


飯野ビルディング

明治安田生命新東陽町ビル

No. s-165　内外を超えた場の可能性から想起する

「天国のような状態」から 4 年、近作 3 作品の考察

――五十嵐淳，　jt1303

［連作名］**風徐室**

地球空間は多様で雑多で複雑である。それが現実の世界。そこに、ある密室空間として天国のような完璧な状態をつくれたならば、地球空間との複雑な関係性のうえで「天国のような状態」が究極的な建築として成立するのではないかと思考した。

その具体的な方法としては僕は、「風徐室」について一貫して考え設計を続けてきた。風徐室を単に「問題解決のためだけの手段」として設計するのではなく、建築の可能性を広げる「キッカケ」として思考を続けてきた。・・・

ある究極的に安定した空間に対する思考と、民家の縁側という居場所との出会い。それが風徐室の地球空間（環境）との応答の仕方について、少し変化を与えることとなった。

「case」と今月号の「repository」、「polyphonic」についての変化を考えてみた。「case」はとても小さな住宅である。小さな住宅において風徐室を確保するのは物理的に困難であるが、今回は玄関土間を風除湿に見立てた。この玄関土間は内部空間と

repository

polyphonic

外部敷地をつなぐ意識が強く現れている。過去の作品では風徐室を外部とつながえる意識よりも、緩衝帯としての意識が強く働いていた。「case」では、敷地周辺との関係性やつながりへと意識が増し、ワイヤーと植物による緑のトンネル空間をつくっていく。バッファー空間の可能性を拡張する方法のひとつであるし、風景を創出する「よきウィルス」の発端になればよいとも考えた。・・・
「repository」はとても大きな住宅であり、茫漠とした場所に建つ。大きな住宅では風徐室を四方に確保できる。ここではさまざまな用途の部屋を、ふたつの広間を囲う断面的なバッファー空間とした。部屋の機能により、従来通り緩衝帯としての意識が強く働いている風除湿と、茫漠とした地球空間（環境）とのつながりを意識した２種類の風除湿が設えられている。「つなぐ空間」と「緩衝帯となる空間」が混在することで、問題解決のための風徐室が同居する建築となっていて、バッファー空間の思考拡張になり得る。
「polyphonic」は「オルドス 100」や「House of Eden」の思考を強く継承している。敷地の中に壁で大きな人工空間を設け、生まれたある種の内部敷地に部屋を建てていく。この内部敷地と部屋の間の余白が風徐室となる。このバッファー空間の形式は、地球空間（環境）に対しつながるという強い積極性をもっている。・・・
それぞれとても小さな変化ではあるが、今後の建築には大きな変化となり現れてくるはずである。

資料編： 第 4 章　記念館建築の設計論にみられる時間認識

注）［　］内は意味を補うために筆者が加筆したものである

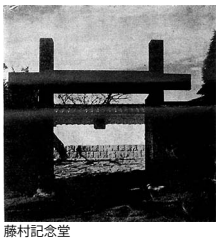
付表４　記念館建築の設計論の資料リスト

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	記念対象	主用途	設計根拠					実現手法			
						記念		関連						
						表現	伝承	社会的役割	周辺環境	性能	全体	空間	部位・部材	なし
1-1	4903	藤村記念堂	谷口吉郎	島崎藤村	博		●						色	
1-2						◎							色	
1-3										◎			配	
2	5401	平和会館 記念陳列館	丹下健三	原爆投下	博			●			尺			
3	5504	原爆堂	白井晟一	原爆投下	博	●					形			
4	5901	原敬記念館	谷口吉郎	原敬	博					●	色			
5-1	5907	野球体育博物館	森京介	野球界に貢献した人々	博		●				形			
5-2									◎				配	
6-1	6002	クラーク記念館	太田実	クラーク博士	学			◎				配		
6-2									◎		形			
7	6006	五島美術館	吉田五十八	五島慶太の喜寿	博	●								な
8-1	6107	玉堂美術館	吉田五十八	川合玉堂	博	●	●					な	な	
8-2						◎					な			
8-3						◎								
8-4									●				尺	
9	6208	日本26聖人殉教記念施設	今井兼次	日本二十六聖人	宗	◎							形	
10-1	6604	楽部音楽堂	今井兼次	香淳皇后の還暦	劇		●						形	
10-2							●						色	
10-3						●							な	
11	6612	大隈会館	今井兼次	大隈重信	博	◎							配	
12-1	6808	武庫川学院公江記念図書館	大辻真喜夫	公江喜市郎	学					●	形			
12-2							●						配	
13-1	6910	金沢工業大学本館・土木工学館	水野一郎	益谷秀次	学			●				配		
13-2										◎		配		
14	7009	芹沢文学館	菊竹清訓	芹沢光治良	博	◎								な
15-1	7102	遠山美術館	今井兼次	遠山元一	博				◎		形	色		
15-2						●							形	
16	7106	北海道開拓記念館	佐藤武夫	北海道開拓百年	博	●					形			
17-1	7212	こどもの国「あずまや」	環境開発ｾﾝﾀｰ	皇太子成婚	劇			◎			形			
17-2										●	形			
17-3									●			配		
18	7308	喜多六平太記念能楽堂	棒沢敏郎	喜多六平太	劇					●				な
19-1	7510	別子銅山記念館	寺本敏則	別子銅山の歴史	博	●					配			
19-2									◎		形	配		
20-1	7701	吉川英治記念館	谷口吉郎	吉川英治	博	●					尺		色	
20-2						●					尺		色	
21	7806	大佛次郎記念館	浦辺鎮太郎	大佛次郎	博	●					色	尺		
22	8107	自由学園記念講堂・記念体育館	遠藤楽	学園創立60周年	学				◎		配			
23	8209	白鹿記念館	上村幸之 他	酒造の歴史	博				◎					な
24-1	8303	賀川豊彦記念松澤資料館・幼稚園※	阿部勤	賀川豊彦	☆		◎					配	配	
24-2						◎							配	
24-3								●		●		配		
25	8307	歴史民俗資料館・自由民権運動記念館※	大高正人	自由民権家	博			◎	◎		配			
26-1	8310	北海道立三岸好太郎美術館	岡田新一	三岸好太郎	博				●		形			
26-2						◎							形色な	
26-3						◎							配	
27-1	8310	稲沢市 萩須記念美術館	徳岡昌克	萩須高徳	博	◎					形			
27-2								●					な	
28-1	8312	土門拳記念館	谷口吉生	土門拳	博		◎					な		
28-2									◎		形			
28-3						◎							配	
28-4								●				配		
28-5						◎	◎					形		
28-6							●						形	
29-1	8406	齋藤隆夫記念館 静思堂	宮脇檀	齋藤隆夫	博	◎	◎					色		
29-2									◎				色	
30	8409	伊豆の長八 美術館	石山修武	伊豆の長八	博		●					形		
31	8411	メモリアルハウス	森義純	施主	住	●					色			
32	8506	日中友好会館	加藤隆久	国交正常化10周年	住					◎			色	
33	8510	YKK 50	遠藤精一	会社創立50周年	事	◎						な		
34-1	8608	田崎美術館	原広司	田崎廣助	博	◎					色		形色配	
34-2										●	形			
34-3								●			形			
35	8608	県立富山高校100周年記念館	山本公也	高校創立100周年	学	◎					形			
36-1	8712	路屋虹児記念館	内井昭蔵	路屋虹児	博				◎		形			
36-2						◎					形			
37	8712	ｻｯﾎﾟﾛﾋﾞｰﾙ 開拓使麦酒記念館	竹井俊介	ビールの歴史	博		●						色	
38-1	8801	東京工業大学百年記念館	篠原一男	大学創立100周年	博				●					な
38-2						◎					色			
39-1	8805	瀬戸大橋記念館	山本忠司	瀬戸大橋竣工	博				●		配			
39-2								●			形			
39-3										◎			配	
39-4								●					色	
40	8806	平福記念館	大江宏	平福穂庵・百穂	博				◎					な
41	8901	ﾄﾞﾝﾎﾞｽｺ記念聖堂・地域交流ﾎｰﾑ※	坂田誠造	ドンボスコ	宗			●					形	
42-1	8903	福島市古関祐而記念館	岡田新一 他	古関祐而	博		◎						配	
42-2								◎	◎		配			
43	8906	三溪記念館	小俣富歩	原三溪	博			◎	◎		形	尺		
44	8912	玉川高島屋 20周年ﾘﾆｭｰｱﾙ※	彦坂裕	開店20周年	商					●			配	
45	9006	東京都太田記念館	林雅子	太田宇之助	住	●	●					色		
46-1	9007	長野県信濃美術館 東山魁夷館	谷口吉生	東山魁夷	博	◎						形配	形	
46-2									◎		形			
47	9011	普連土学園百年記念館	小川守之	学園創立100周年	学				◎			配		
48	9101	芝浦工業大学齋藤記念館	相田武文	前教授の寄付	学				●				配	
49-1	9103	白瀬南極探検隊記念館	滝浪正光	南極探検隊	博	●	●					色		
49-2							●				色			
50-1	9111	酒田市国体記念体育館	谷口吉生	国体開催	体			◎	◎		尺			
50-2						◎					色			
50-3									◎		色			
51	9112	曽我・平澤記念館	香山壽夫	曽我量・平澤興	博				◎					な
52	9112	山口蓬春記念館	大江匡	山口蓬春	博				●		色			
53	9201	高知県立坂本龍馬記念館	高橋晶子	坂本龍馬	博	◎							配	
54	9207	猪熊弦一郎現代美術館・図書館※	谷口吉生	猪熊弦一郎	博			◎	◎				色	
55	9208	静嘉堂文庫美術館	高木彦二	文庫創立100周年	博				◎		形	2	色	
56	9212	宮沢賢治イーハトーブ館	古市徹雄	宮沢賢治	博				●			配		
57-1	9302	新居浜市立 別子銅山記念図書館	寺本敏則	銅山開杭300周年	図		●						配	
57-2								●			配			
58-1	9306	所沢航空発祥記念館	横谷英之 他	航空の発祥	博				◎		形			
58-2							●						色	
59	9307	須磨子博物館・赤彦記念館※	伊東豊雄	島木赤彦	博				◎		形			
60-1	9308	窪田空穂記念館	柳澤孝彦	窪田空穂	博			◎	◎		形色配			
60-2						◎					形			
60-3								●					な	
61	9309	式年遷宮記念　新宮美術	小俣富歩	式年遷宮61回	博			◎	◎		尺			
62-1	9401	中原中也記念館	宮崎浩	中原中也	博			◎	◎		配			
62-2						●	●					色		
63-1	9407	木の殿堂	安藤忠雄	全国植樹祭	博	●							色	
63-2									◎		配			
64-1	9407	新美南吉記念館	新家良浩	新美南吉	博	◎					配			
64-2									●		配			
65	9411	植村直己冒険館 植村直己公園ﾓﾆｭﾒﾝﾄ※	栗生明	植村直己	博	◎						尺		
66-1	9501	西堀榮三郎記念 “探検の殿堂”	上田篤	西堀榮三郎	博	●								な
66-2						◎					形			

資料番号	掲載年月	作品名	執筆者	記念対象	主用途	設計根拠					実現手法				
						記念		関連							
						表現	伝承	社会的役割	周辺環境	性能	全体	空間	部位・部材	なし	
67-1	9502	中谷宇吉郎 雪の科学館	平林繁	中谷宇吉郎	博			◎			形				
67-2						◎					色				
67-3									◎		色				
68	9503	中央工学校創立85周年記念館※	林雅子	学校創立85周年	学			●			形				
69	9508	わらべ館	山本浩二	おもちゃ博	博	●					形				
70-1	9509	森鴎外記念館	宮本忠長	森鴎外	博			●	●				配		
70-2						◎						色	色		
71	9509	ある町医者の記念館	堀部安嗣	前原朋和	博		◎					色			
72-1	9603	書写紀念会館	東孝光	大学創立50周年					◎		形				
72-2								●			形				
73-1	9606	からくり記念館	内井昭蔵	大野弁吉	博	●					配				
73-2						●					配				
73-3						◎							配		
73-4						◎					色				
73-6						◎					色				
74-1	9608	長崎原爆資料館	安東直	原爆投下	博		●						配		
74-2								●			形				
75	9609	多胡碑記念館	木村優	多胡碑	博	◎							色		
76	9610	文京学園島田依史子記念館	時園國男	島田依史子	学				◎			配			
77	9701	長野市ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念ｱﾘｰﾅ ｴﾑｳｪｰﾌﾞ	小野威	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ開催	体			◎					色		
78	9703	一茶ゆかりの里	岡田新一	小林一茶	博			●					な		
79	9705	丈山苑	岩崎泰久	石川丈山	博	●						配			
80	9706	安曇野ちひろ美術館	内藤廣	いわさきちひろ	博				◎		形				
81	9707	山口大医学部創立50周年記念会館※	岸和郎	学部創立50周年	学			◎				形	形		
82-1	9709	平山郁夫美術館	今里隆	平山郁夫	博	◎							色		
82-2									◎				色		
83	9806	天竜市立秋野不矩美術館	藤森照信	秋野不矩	博		◎						色		
84	9806	上林暁文学記念館	團紀彦	上林暁	博		◎					色			
85	9807	早稲田大学 會津八一記念博物館	古谷誠章	會津八一	博					◎			な		
86-1	9808	茨城県天心記念五浦美術館	内藤廣	岡倉天心	博			◎			尺				
86-2						●							配		
86-3						●							色		
87-1	9810	松本清張記念館	宮本忠長	松本清張	博		●					な			
87-2						◎						尺			
88	9811	織田廣喜ミュージアム	安藤忠雄	織田廣喜	博		●						配		
89	9902	セキグチ・ドールガーデン	ｱｰｷﾃｸﾄﾌｧｲﾌﾞ	会社創立80周年	博					◎			配		
90-1	9905	昭和館	松里征男	太平洋戦争	博	●					形				
90-2										●			色		
91-1	9911	鹿児島ｶﾃﾞﾄﾞﾗﾙ ｻﾞﾋﾞｴﾙ記念聖堂	坂田誠造	ｻﾞﾋﾞｴﾙ渡航450年	宗			◎	◎		形				
91-2						●					形				
91-3						◎							色		
92-1	0001	牧野富太郎記念館	内藤廣	牧野富太郎	博				◎		形				
92-2						◎					形				
93	0005	沖縄県平和祈念資料館	福村俊治	太平洋戦争	博			●			配		色		
94-1	0005	軽井沢ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念館	三輪正弘	オリンピック開催	博		◎						色		
94-2									●		形色尺				
95	0007	東京大学弥生講堂	香山壽夫	学部創立125周年	学			◎			色		配		
96	0011	馬頭町広重美術館	隈研吾	安藤広重	博	◎							配		
97	0103	草津片岡鶴太郎美術館	泉幸甫	片岡鶴太郎	博				◎		色				
98	0104	神戸大学百年記念館	狩野忠正	大学創立100周年	学				●			形			
99	0204	長谷木記念幹	内井昭蔵	長谷川家の歴史	博	◎							色配		
100	0204	100周年記念館 ﾏｰｶﾞﾚｯﾄﾎｰﾙ※	浅石優	大学創立100周年	学				◎				配		
101	0206	井之頭学園70周年記念館	赤坂喜顕	学校創立70周年	学	◎						色配			
102-1	0207	司馬遼太郎記念館	安藤忠雄	司馬遼太郎	博	◎	◎						尺		
102-2						●	●						色尺		
103-1	0209	雲仙岳災害記念館 がまだすﾄﾞｰﾑ	林年男	雲仙岳噴火	博				●		配				
103-2							●				色				
104	0211	今井篤記念体育館※	坂茂	今井篤	体				●		形				
105	0302	岐阜県立飛騨牛記念館	北川原温	飛騨牛	博				●				形		
106-1	0309	安曇野髙橋節郎記念美術館	宮崎浩	髙橋節郎	博				◎		形				
106-2									◎		色尺				
107-1	0311	石川県西田幾多郎記念哲学館	安藤忠雄	西田幾多郎	博	◎	◎					形			
107-2						●						形			
107-3						●									な
108	0401	大阪府立北野高等学校六陵会館	竹山聖	高校創立130周年	学	●					形				
109	0405	野依記念物質科学研究館	飯田善彦	野依良治	学			●				配			
110	0406	京都大学百周年時計台記念館	川崎清	大学創立100周年	学			●					色		
111-1	0407	村井正誠記念美術館	隈研吾	村井正誠	博		◎					配			
111-2						◎						色			
112-1	0412	吉田正音楽記念館	毒島智和	吉田正	博			●			形				
112-2							◎				形				
113	0504	富弘美術館	ﾖｺﾐｿﾞﾏｺﾄ	星野富弘	博	◎						配			
114	0601	東山魁夷せとうち美術館※	谷口吉生	東山魁夷	博				●				配		
115-1	0603	真下慶治記念美術館	髙宮眞介	真下慶治	博				◎			形	色		
115-2						◎							色		
115-3									◎		形				
116	0604	葛生傳承館	芦原太郎	葛生町の伝統文化	博			●	●		形				
117-1	0611	南方熊楠顕彰館	矢田康順 他	南方熊楠	博	◎	◎					形			
117-2									◎		色尺				
118	0703	龍馬の生まれたまち記念館※	西森啓史	坂本龍馬	博				◎				色		
119-1	0704	奥田元宋・小由女美術館	柳澤孝彦	奥田元宋・小由女	博	●	●				形				
119-2						●							配		
120	0707	キース・ヘリング美術館※	北川原温	キース・ヘリング	博		●					形	形色		
121-1	0709	坂の上の雲ミュージアム	安藤忠雄	坂の上の雲	博	◎							形		
121-2						●	●						配		
122-1	0709	伊丹十三記念館	中村好文	伊丹十三	博				●		形				
122-2							●					形			
122-3						◎							配		
122-4							◎					配			
122-5										●		配			
122-6								◎	◎		色				
123-1	0709	東京音楽大学 100周年記念本館	野口秀世	大学創立100周年	学			●			形				
123-2								◎			色				
124	0804	日本工業大学百年記念館※	小川次郎	大学創立100周年	学					●	色				
125	0805	東京大学情報学環・福武ﾎｰﾙ	安藤忠雄	大学創立130周年	学			●			配				
126	0810	星野哲郎記念館	井下仁史	星野哲郎	博	◎					形				
127	0905	東北大学百周年記念会館 川内萩ﾎｰﾙ	村上孝憲 他	大学創立100周年	学				●			色			
128	0907	聖心女子学院創立100周年記念ﾎｰﾙ	安藤忠雄	大学創立100周年	学			●					配		
129-1	0911	ボーラ銀座ビル	中屋敷公一	会社創立80周年	事			◎					色		
129-2						◎							色		
130-1	1004	東邦音楽大学 70周年記念館	野生司義光	大学創立70周年	学					●		配			
130-2								●				配			
130-3						◎					形				
131	1005	京都工芸繊維大学 60周年記念館	木村博昭	大学創立60周年	学				◎		色	色			
132	1006	鶴岡市立藤沢周平記念館	高谷時彦	藤沢周平	博			●			形				
133-1	1110	山口大工学部創立100周年記念館※	髙宮眞介	学部創立100周年	学				●		形				
133-2						●							形		
133-3								●			配				
134	1207	東京電機大学100周年記念ｷｬﾝﾊﾟｽ※	福永知義	大学創立100周年	学			●		●	形				
135-1	1301	文京区立森鷗外記念館	陶器二三雄	森鷗外	博	◎					色				
135-2						◎					色				

別表4-1 注1）作品名に※が付してある資料は、略名としている。
注2）主用途の記号は、博：博物館、学：学校施設、宗：宗教施設、劇：劇場、住：住宅、事：事務所、商：商業施設、体：体育館、図：図書館、☆：博物館＋学校施設 を示す。
注3）設計根拠の記号は、◎：具体性あり、●：具体性なし を示す。
注4）実現手法の記号は、「対象」ごとに「属性」を記載しており、記号は表4-1の頭文字としている。

No. m- 1　藤村記念堂 ――谷口吉郎，　sk4903


藤村記念堂

1-1

藤村の生家「本陣屋敷」は「夜明け前」の小説で有名であるが、惜しくも明治 29 年の火事で焼けてしまった。その後、その跡は、荒れて見る影もない畠地となっていた。それで、記念事業としては、その跡に、昔の建築を再興したいという案もあったが、私は、焼け跡はそのまま残すことが、かえって記念となるのではなかろうかと考えた。そのために本陣跡の畠地を整理して、村の川から砂を運び、焼け跡を清浄な砂地とした。畠の中からは焼けた土塁石も出て、それが庭石のように、その砂地に静かな風情を添えた。

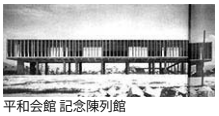
1-2

障子の紙には、島崎家の定紋を、渋いベンガラ色で描いた。この紋章こそ、藤村の多くの作品に特有な性格を与えた「家」であり、青年詩人がそれから離脱せんとした「時代」を意味するものである。

1-3

正面の壁面には窓がないが、腰から下が吹き抜けとなっている。そのために、壁の下部から池の水面が見える。・・・池の向には、隣の古い石垣と植え込みが見え、庭園的な効果を得た。それで、別にたくらんだわけではなかったが、・・・腰壁を開放したことは、あの京都にある弧蓬庵の茶席「防筌」の障子が下半分開放されているのと似たものになった。従って、この玄関内の採光も拡散光のために、落ちついた照明とすることができた。それによって、来訪者の目は、表門で得た黒と白の判然とした印象を、この室内で、やわらげることができる。

No. m- 2　平和会館 記念陳列館 ――丹下健三，　sk5401


平和会館 記念陳列館

わたくしは、広島の平和会館の実施設計にあたって、人間の尺度と社会的人間の尺度の二つの尺度の対位によって、建築を構成してみようという野心をもっていた。最初に取りかかった記念陳列館では、社会的尺度による主構造にたいして、人間の尺度をもつ階段の踊場の流れや同じく人間の尺度による鳥籠構造をなすルーバーが交錯してゆくものであった。

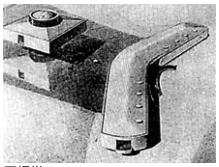
わたくしは気掛かりになって広島の現場に建設中の陳列館を見に行った。そうしてわたくしの意図がさほど間違ってはいないことを感じた。6498mm の階高をもち 10514mm のスパンをもつピロッティは、20,000 人を容れる広島の門として適当と思われた。僅かに斜めに向い、ゆるやかな勾配をもつ階段を上ると、直正面にドームの遺構を直視する。2482mm という階高をもつ横に流れる踊場は、ふと人間の尺度を想い起こさせる。この尺度は上階の 6498mm の階高をもつ 2 階の陳列室の動線のなかに予定されている中 2 階に再び現れるのである。また、慰霊碑に向かって凹面をなす壁面のあるテラスは、広場で行われる祭典の背景として、尺度にかなっているように思われた。

10514：6498：4016：2482：1534：948：586：362：224：138：86：52 の系列を、それぞれの 12 の値をもつ系列が凡ゆる部分の寸法を決定しているのであるが、そのなかに、6498 を主調とする社会的尺度と、2482 を主調とする人間の尺度との対位が試みられているのである。じつはこれらの尺度の採用までには、わたくしたちの間で永い議論が行われたのである。

時折、人から陳列館のピロッティ・・・について、何か無駄なことではないかという批判を受けたことがある。私たちは、このように考えているのである――もしそれが経済的投資の対象である場合、直接に利潤を挙げうる有効面積はコロネードによって著しく減少したことになるだろう。しかし、むしろ利潤を期待しえないその部分にこそ、最も社会的な無言の効用があるということを――この地が公園として整い、これらの建築がコミュニティ・センターとして完成されたとき、このピロッティ・・・は、市民にとって、もっとも楽しい空間を提供するに違いないであろう。空間の経済性とともに、空間の社会性の認識が、必要であることを私たちは深く感じているのである。

No. m- 3　原爆堂 ――白井晟一，　sk5504

メモリィを強いる造型でなく、永続的な希待の象徴を志すことになったといるかもしれない。人間社会の不朽な共存への祈りとこのような自分のなかの造形発展とは素直にむすんだ。


原爆堂

No. m- 4　原敬記念館 ――谷口吉郎，　sk5901

屋根は雨の多い気候を特に考慮し、クスリ掛け瓦を葺く、窓は鉄製サッシュにアミ入りガラス。その外部に防火戸を建てこむ。内部は湿気を防ぐため床を 1.5m 高くし、天井及び壁に青森ヒバの厚板を張る。

原敬記念館

No. m- 5　野球体育博物館 ――森京介，　sk5907

5-1

この野球の殿堂は主にスポーツマンとしての能力を十分に発揮し、野球界に貢献した人々の功績を永遠に保存しようとする目的で建てられたもので、この殿堂をとおしてその人々の貴い功績が後の世の人々に語り伝えられるということを、しみじみと感じ、そうした平和な営みが、この日本に永遠に伝わるように念じつつ設計を進めました。

立派な記録とその美しい記念が大切に守蔵されているマッシブな形、それを確実に捧げ持つ力学的な空間、その空間に静かに横たわる池、そのほとりにたたずめが日陰は人々に憩いと思い出をあたえてくれると思います。

野球体育博物館

5-2

将来この球場［後楽園球場を指す］の拡張計画があり、周囲の立地条件により多少の移動が考えられるので移行可能なように考えました。この点は内藤先生のご考案で、容易に基礎と切り離せるように次のような工夫がなされております。基礎のネッキングの上に繋梁を設け、これが各ピロティー柱の脚部を連結するようにしてありますから移転の際はこのネッキングのところで基礎と切り離せば、容易に移動できます。

No. m- 6　クラーク記念館 ――太田実，　sk6002

6-1

この建築の場合にも、プランがすべての骨子になったことはいうまでもない。このプランの基本は、そのセンター・ホールにある。この建物自体北大キャンパスのコミュニティ･センターのごときものであるが､その学生生活の中心の場として、中央にセンター・ホールを２階吹抜きのひろい空間としてつくりだした。ここは学生諸君が単に通り抜けてゆくだけの入口ホールやコンコースではない｡このホールに接して一方に食堂や購買室のような生活的諸室、また他方にオーディオクラブ室があるが、これらの室に出入りする学生諸君が友人と会い、また友を紹介しあいながら談笑しあう溜り場である。つまり、ソーシャルな接触な場としての核的中心として扱われる。

クラーク記念館

6-2

北海道という地域は、わが国の中でも自然的にも生活的にも異なった独自の風土環境をそなえている。建築は普遍的な社会的技術的変革に対して、その内容を革新してゆくと同時に、その風土的条件をも無視することができない。寒冷な気候条件に対する技術上の防寒的考慮のほか、その地域社会の生活や自然環境に適応したものでなければならないだろう。建築の革新に当って、この風土化の問題は単なる技術的解析を越えるものであって、デザイン上きわめてむつかしい課題のひとつである。私たちが水平線を強調したのも、また外壁の二重隔壁による外套的処理を施したのも、そのような風土化への努力のあらわれであった。北海道の広大な土地のひろがり、とくに北大キャンパスの環境からみて、生半可な垂直線

強調の建物よりも、のびやかな水平線の方が調和するように思われた。軒庇を大きく張出したのも、外壁のウェザリングに対する考慮のほか、このような水平線の強調にも役立たせようという意図からであった。

No. m- 7　五島美術館 ――吉田五十八，　sk6006

この五島美術館は、五島慶太氏の喜寿を記念する意味から、計画されたものであるが、ついに、その竣工を見ずに五島氏は、この世を去られた。・・・しかし、この設計のうちに、五島氏の好みが多少でも、織り込まれていることが、せめてものなぐさめといいうるであろう。

五島美術館

No. m- 8　玉堂美術館 ――吉田五十八，　sk6107

8-1

玉堂先生の絵画生活を主にしようという、意図からでたものであるから、一般の美術館と違い展示室の展観も小下絵、スケッチなどを主にして、玉堂芸術のよってきたるポイントを示し、さらに渡り廊下に、先生の製作中の写真を掲げて、その描写態度を知らしめ、つぎに先生のありし日そのままの画室の生活を展示して、玉堂先生がいかなる態度で絵を描いておられたかを示して、人間玉堂をそのまま表現した美術館としたわけである。それ故、プランもその線にしたがって決定されたものである。

玉堂美術館

8-2

外観であるが、玉堂先生の記念館である以上、その設計にあたって先生をホウフツさせることを第一の念願としたのは当然であろう。私は 30 年来、先生の普請を手がけてきたので、先生の性格はよく知りぬいており、・・・先生には剛軟両面があった。・・・性格も生真面目な固さと洒落、この両方面をもってておられた。その点をこの建物にも反映したかった。

それ故、外観の基調を飛騨の民家にとり、それに寺院の雰囲気と格調をとり入れ、混然一体としたわけである。

8-3

外観であるが、玉堂先生の記念館である以上、その設計にあたって先生をホウフツさせることを第一の念願としたのは当然であろう。私は 30 年来、先生の普請を手がけてきたので、・・・その画風も十分理解しているつもりであるが、先生には剛軟両面があった。画風も、四条派、狩野派の両派を体得しておられ、・・・両方面をもってておられた。その点をこの建物にも反映したかった。

それ故、外観の基調を飛騨の民家にとり、それに寺院の雰囲気と格調をとり入れ、混然一体としたわけである。

8-4

この美術館をとり巻く自然が強烈なので、部材を太くして調和を計ったが、その風景と庭をどう結びつけるかも苦心をはらったところであった。結局、白沙を敷きつめ石庭とし、この奥多摩の美しさと自然を借景とするより、ほかに手がなかったようであった。

No. m- 9　日本 26 聖人殉教記念施設 ――今井兼次，　sk6208

長崎における殉教者を記念する建築は、宗教性をとくに強く帯びているだけに、それらをどのようにすれば表現可能であるかが、私に課せられた重要な問題であった。・・・建築体に投入されている宗教的諸形象は、あらゆる環境空間や建築空間、ならびにその面構成のなかに数え切れぬほど多く含まれているだろう。一言にしていうならば、建築体にかかわる構成部分はことごとく宗教表徴の諸形象の展示そのものだと考えられないこともない。・・・ここで私は聖堂双塔の宗教的表徴の意義のみを拾いあげることにしよう。

日本 26 聖人殉教記念施設

正面向かって左側の塔は聖母マリアに奉献し、右側のものは聖霊に奉献したものである。もともと私が殉教精神を建築設計の当初に歌い挙げようとした際、聖堂の全構成形態に殉教者を賛美する天使のイメージを心に描き、その双塔はその天使の翼の表徴と考えた。そしてなお、殉教の勝利をことほぐためにこの西阪の全血が聖霊の賜によってことごとく満たされるであろうことを願い、聖霊の塔奉献の理由となったのである。・・・
殉教精神の発露の源にあるものは、神なる御父が世の罪を除き給う御方として、この地上に降らせたキリストの愛の犠牲にほかならない。この記念聖堂もまたその精神において、この超自然的神秘体の存在と不離不即のものであることはいうまでもない。私がこの双塔に「天の門」「シオンの糸杉」「ゆらぐ火焔」「御子への愛の讃歌」などの想念を抱いたのもそれがためである。

No. m- 10　学部音楽堂 ――今井兼次，　sk6604

10-1

学部音楽堂

皇后さまは、外壁に描かれている鳥の形象は鶴でしょうかと側近の方にご下問があられたという。・・・鶴は皇太子の象徴でございますゆえ採用しがたいと存じますとの意味を含めて、側近の方から皇后さまに申しあげたと私は仄聞している。・・・・・皇后さまのご還暦を寿ぎ奉りたいとの私の世俗的習慣にしたがう常識的意図の発想が、この場合もっとも適わしい意義を持つものと信じたことに誤りがあったようである。それ以後、はばたく鶴の形象をはばたく白鳥として、記念性の意を高めるように思いを寄せて行ったことはもちろんである。

10-2

音楽堂の外壁に沿うて、5 首の歌碑を配在させてある。いずれも皇后さまにゆかりあるものの中より、お誕生月の春を讃へ、あるいはご長寿をことほぎ奉る古歌を選び刻まれ、皇后さまの御還暦を記念する音楽堂の造形に一段と生命感を寄せたいとの私の願いから生まれたものである。

10-3

音楽堂背後の外壁「鶴亀」の陶片モザイック形象の左視点に近く、小盃一個が押嵌されているのに気づかれるかもしれない。この盃は、天皇陛下ご成年をお迎え遊ばれた御年若き頃、倫理の進講をうけさせられました課程の中の一節「関雎」に関連するもので、盃中に水鳥雎鳩の二羽の雌雄が絵付してあり、盃の袴底には関雎の文字が染め付けられてある。
かつて倫理御進講の杉浦重剛先生が、両陛下ご成婚の日を迎えられ、弟子たちとともにこの盃をかかげてそのおよろこびをお祝い申し上げた当時の記念の品の一つでもある。そして、関雎の盃の手近かに押嵌された陶片の寿扇に、無限のよろこびを讃へられる師のおもかげを心に刻んで、皇后さまのご還暦の記念にお捧げ申し上げさせていただかれた幸を私は限りない光栄と思っている。

No. m- 11　大隈会館 ――今井兼次，　sk6612

大隈会館

延面積 300㎡たらずの小規模のなかに、どうしたら人間大隈老候の巨大なスケールを意図抽出することができるであろうかと苦慮した。至難な業なる哉と嘆息しないではおられなかった。しかし、その至難な道を貫き突破するということが、巨人大隈老候の精神に通ずる好適な私への課題であり使命だと考え、私なりに老候の俤をしのびながら設計構想に時を費やしたのであった。・・・
設計のはじめにあって、私の胸中を去来した数々の想念をもし挙げるならば、大体次のようなものであった。

1 私の学生時代、学園の諸式典に参加し、まのあたりに接した老候すなわち慈父そのものとしての感懐
2 東西文明調和の提唱者
3 人間大隈候、巨人大隈候
4 庶とともにありし老候

これらの思いを多少でも記念館の設計構想のなかに役立せ、大隈老候らしいものを打ち出せればと願った。そのようなことから、私はその空間構成の基本ともいえる中心部の 1 対の巨柱から放射する架構を設定してみた。これには、老候が抱負とし理想とされておられた東西文明の調和という理念を、記念館の建築のなかに含ませたいと考えたからである。1 対の中心柱の主体から 4 隅の柱へ流れる架構体は、4 方に放射展開する姿勢であり、それらた示す外部空間が老候の前進する巨大性の象徴ともなってくれるであろうかと。また、老候の極大な許容力を描写しようと求めたので、巨岩、山塊、大樹のごとき躍動感が各所に連想されるところがあるかもしれない。このように、従来の箱型形式をつとめて脱しようとしたのも、ひとえに老候の人間性を追い求めようと努めたが故である。

No. m- 12　武庫川学院公江記念図書館
――大辻真喜夫／竹中工務店，　sk6808

12-1

敷地は 10 車線が並列する第 2 阪神国道に接し、騒音は平均 80 ～ 90 フォンにもおよぶため、その遮音が問題であった。そうしてこの解決法・・・がいちばんの眼目となった。すなわち、書庫を四周にめぐらし壁で囲んで外に対して閉鎖型の平面とし、内側に全階吹抜けの中庭を設け、これに面して開口を大きくあけて求心的な平面とし、・・・

武庫川学院公江記念図書館

12-2

・・・記念性や研究、読書の場としての雰囲気・・・がいちばんの眼目となった。すなわち、書庫を四周にめぐらし壁で囲んで外に対して閉鎖型の平面とし、内側に全階吹抜けの中庭を設け、これに面して開口を大きくあけて求心的な平面とし、中央に象徴となる像を置いて記念性と内部空間の融和をはかった。

No. m- 13　金沢工業大学本館・土木工学館
――水野一郎／大谷研究室，　sk6910

13-1

この建物を実現することによって、学園生活に何かを与えることができるかという設問に対し、角質空間の確立と同時に、できるだけ長時間利用者を校内に滞在させて、自己啓発の機会をつくり出す場をつくろうとしたといえる。・・・私たちはひとつに、各室の位置と空間を個性的にして、主体的なものにしようとし、もうひとつに広場を与え、学生、教官、職員相互の直接的、日常的な接触を通して、自己啓発と相互の連帯感獲得の機会を得られるようにした。

金沢工業大学本館・土木工学館

13-2

今計画は、自主的に結ぼうとすることも、赤の他人でいようとすることも、あちこちにふくらんでできたラウンジなりアルコーブで、立話や休憩をすることも可能になるように、さまざまな空間やいくつかの経路を与えていった。こういった考え方によって獲得された非私的空間を、さらにそれを利用する者にとってより自由で選択性のある空間に高めることができるのである。

No. m- 14　芹沢文学館――菊竹清訓，　sk7009

菊竹：先生の本を読んで考えるのですが、最初からずっととらえて問題にしておられます、つまり人間の本質的な愛とか死という問題は人間にとっても建築にとっても重大だと思うんです・・・
芹沢：いや、この建物でそれをおっしゃるなら、それは土から出たような感じでしょう。表現が下手だけれど……。それは私の作品の根本に触れていると思っているんです。・・・実際よく私の文学を象徴的につくっていただいたなと思いますね。

芹沢文学館

No. m- 15　遠山美術館――今井兼次，　sk7102

15-1
私は近隣地域の農村の香りを感じながら、記念館との感火曜の調和を大切にしなければならないと思い、玄関東側に沿うて南北を軸とし、美術館の機能を基とした高床土蔵風の素朴な表現構想を真先に企画したのであった。
15-2
設計のはじめから私の心境の中で大きい比重となっていたものは、先生御母堂の面影をこの建物に一粒でもかげに打ち込んでゆきたいとの願いであった。それは、まるで遠山先生の心の姿でもあると考えたからである。御母堂、御令妹と共にプロテスタントとして清らかに信仰を貫かれる先生の御人柄、あるいはその心象とも申される数々をごく控え目がちではあるが美術館の造形面に生かすよう現場作業の指導に従事したことは、忘れがたい体験であった。
私の設計思念を形成する数数の落穂をもし拾うならば、次のようなものが挙げられると思う。御母堂直筆の和歌『みめぐみの 露はあまねし むさし野の 野末にさける おみなへしかも』ならびに扇面上の『天恩』の文字をあわせて刻む定礎石、明治期の女性像や往時この場所が「梅屋敷」と呼ばれしことなどに因み、梅花の簪をかたどったテラス上の手摺子、ブロンズ扉面の瑞雲浮彫りと天使の散華像、夢のような淡さで御家族を象徴的に描写しようとしたロビー天井面のフレスコ画、・・・さらに同室の正面大窓をはさむ左右一対の色光壁内に目立つことなしにあるかなしやの風情で下垂させた十字形銀製モビール、これは御母堂と先生のお心に捧げたいと考えぬいたもの、その他「不死鳥」のメダイユ型レリーフにより遠山美術館の永遠性を描出したいと思った。

遠山美術館

No. m- 16　北海道開拓記念館――佐藤武夫，　sk7106

むつかしいのは造形され表出される記念的な精神性の面の方である。町村知事からじきじき伺ったときのこの建築へのご期待もそこに特に比重がかかっていたようだった。・・・開拓百年のこの地の歴史と未来への期待という厳粛なテーマを果たしてこの建築はどこまで謳い得ただろうか・・・

北海道開拓記念館

No. m- 17　こどもの国「あずまや」――環境開発センター，　sk7212

17-1
皇太子記念館は、このような栄光ある「こどもの国」のシンボルとして「こどもの国」らしい品位と風格を必要とする・・・
・・・周辺に広がる大芝生広場の中の大きな「あづまや」として、いつでも、だれでもその屋根の下の「木陰」にはいることができること。
17-2
皇太子記念館は、・・・その利用者は、あくまでもこどもを中心とし、建物全体をこどもたちが思うぞんぶん楽しめ、親しみのもてるものにすることが重要であった。
またその機能は、周辺に広がる大芝生広場の中の大きな「あづまや」として、いつでも、だれでもその屋根の下の「木陰」にはいることができること。

こどもの国「あずまや」

17-3

「こどもの国」の最大の財産であり、また、こどもたちにもっとも喜ばれているのは、その広い自然環境がつくり出している雰囲気であり、建物の建設によるその破壊が行われてはならない。とくに皇太子記念館のように建坪の大きい施設（約 3,000㎡）の場合はなおさらであるので、従来使われにくかった場所を、こどもたちが近づきやすい丘（約 20,000㎡）に変更し、周辺の芝生広場をさらに拡大、創出することにして配置した。

No. m- 18　喜多六平太記念能楽堂 ――棒沢敏郎，　sk7308

能は古典芸能としてすでに数世紀以前に完成された芸術である。・・・舞台は修練の場であり、能楽堂は道場でなければならなかった。建物の機能性、居住性はおおよそ演者の側にたって考えられ設計されてきたものが多い。

しかし将来の能の発展を考えるとき、当然、観客サイドにたつシアターとしての機構をもった能楽堂が考えられてよいはずである。私はこの観点にたって新しい能楽堂のあり方について模索してきた。・・・この記念能楽堂では、その再建の主目的である遮音、照明、音響、居住性などすべての観客を主体として計画した。

喜多六平太記念能楽堂

No. m- 19　別子銅山記念館 ――寺本敏則／日建設計・大阪，　sk7510

19-1

この長い歴史を留めるために計画された記念館の設計は、関係者の人たちのおのおのの想いがこめられながら進められた。

・・・

敷地が神社の参道に沿ったゆるやかな斜面をもつ丘となった時、この建物はそれらしい想いを実現する可能性を得たともいえる。というのは、銅山の記念館は山の中に埋められたら……という想いが、ねらいが、この建物にかけた当初からの素朴な願いであったからである。

19-2

建物は、半ば地中に埋没させ、屋根を山の勾配にそった斜面とする構成になった。この形態は、ヒューマンスケールをもって成り立っている神社の鳥居や参道のたたずまいと調和し、融和するひかえめな表現として追求された。

別子銅山記念館

No. m- 20　吉川英治記念館 ――谷口吉郎，　sk7701

20-1

・・・設計者の私は、故人の人柄・・・にふさわしい意匠を、その建築に表現したいと心がけた。

建築の規模は大きくなく、鉄筋コンクリート造の平屋建て。勾配屋根に瓦を葺き、外壁は白い。入り口を入るとホールがあり、正面の壁に肖像画がかかる。杉本健吉画伯の制作によるもので、画中の故人が訪れる人にほほえみかける。それによって追憶の情が深められる。

室内の壁には大谷石がはられ、床には鉄平石が敷きこまれ、その表面がつやつやと光る。天井は白木の素地仕上げ。家具も木製。受付の結界に、丸太の太い柱が立つ。

奥の壁に、「道」の一字を書いた遺墨がかかり、その筆跡に故人の作家精神が忍ばれる。壁に取り付けられた腰掛けに休息しながら、庭を眺めると、枝をひろげた老樹が屏風絵のように見える。

ホールを通り抜けると展示室があり、資料が展示されている。その階下の一部が地下となり、化粧室、収蔵庫などが設けられ、敷地が傾斜しているので、そこの外観は２層となっている。

吉川英治記念館

20-2

これは「新・平家物語」や「私本太平記」など、かずかずの名作を書き残した偉大な文業を記念するもので、遺稿、遺品、著書などが収蔵・展示される。そのために設計者の私は、・・・作風にふさわしい意匠を、その建築に表現したいと心がけた。

建築の規模は大きくなく、鉄筋コンクリート造の平屋建て。勾配屋根に瓦を葺き、外壁は白い。入り口を入るとホールがあり、正面の壁に肖像画がかかる。杉本健吉画伯の制作によるもので、画中の故人が訪れる人にほほえみかける。それによって追憶の情が深められる。

室内の壁には大谷石がはられ、床には鉄平石が敷きこまれ、その表面がつやつやと光る。天井は白木の素地仕上げ。家具も木製。受付の結界に、丸太の太い柱が立つ。

奥の壁に、「道」の一字を書いた遺墨がかかり、その筆跡に故人の作家精神が忍ばれる。壁に取り付けられた腰掛けに休息しながら、庭を眺めると、枝をひろげた老樹が屏風絵のように見える。

ホールを通り抜けると展示室があり、資料が展示されている。その階下の一部が地下となり、化粧室、収蔵庫などが設けられ、敷地が傾斜しているので、そこの外観は２層となっている。

No. m- 21　大佛次郎記念館 ――浦辺鎮太郎，　sk7806

私がはじめて、フランス山の敷地を案内された時、市の三木課長から“どんな構想ですか？”と端的な質問を受けたことがある。

「大佛先生の生家というイメージです。ここならば、何かそんな伝説も生まれるかもしれませんね。」

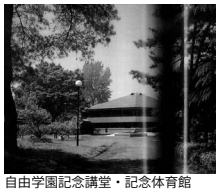
色調は三色旗、開港期の横浜絵にあるような煉瓦造洋風建築そしてスケールは邸宅級というのが直感的イメージであった。（結果的にもその通りになった）

大佛次郎記念館

No. m- 22　自由学園記念講堂・記念体育館 ――遠藤楽，　sk8107

３万坪に近い新しいキャンパスは遠藤新の手によって総合的に計画されたものだが、そこには設計者と創立者との心の触れ合いを感じる。・・・このキャンパス全体は一木一草に至るまで心配りを感じるほどの“完成された美しさ”を備えている。・・・なんとかキャンパス全体の調和を乱さないようにと祈る気持になる。そしてこのたびのふたつの建物も、建物の位置をｈ決めることからはじまって最後まで息の抜けない仕事だった。

新しい講堂は・・・周囲に明るい窓を巡らした極めて自然な、いわば昔ながらの講堂である。そのおかげで周囲の環境とも呼吸を合わせることができたと思っている。



自由学園記念講堂・記念体育館

No. m- 23　白鹿記念館 ――上村幸之・海野克則／大林組，　sk8209

「記念館」について設計上特に留意したことは、・・・周辺の歴史的環境と調和すること・・・

この博物館は、建築としての計画だけでなく、環境との調和に、大きな関心が払われたことはいうまでもない。

白鹿記念館

No. m- 24　賀川豊彦記念松澤資料館・松澤幼稚園
――阿部勤，　sk8303

24-1

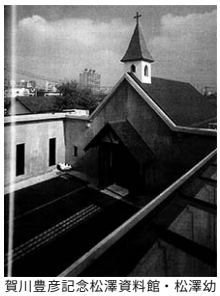
“ 建築は時代の心を運び、時代の心を外側にして永遠に伝えるものである ”（賀川豊彦『生命宗教と生命芸術』）という賀川豊彦の唯心論ともいうべき哲学を伝えるために、旧会堂の内部空間をコンクリートの建物の中に解体・再現し、またキャノピー部分はシンボルとしてそのまま “ 光の庭 ” に取り付けたものである。これらは新しい建物に不思議としっくりおさまっている。

24-2

“ 光の庭 ” 中央軸線上にガラスブロックの帯が走っている。この軸線は建物全体を秩序建てているものであり、各所で光と関わりを持っている。また賀川哲学の中に出てくる、目的・力・変化・成長・洗濯・法則のシンボルと見ることができる。

24-3

隣接する松澤教会の庭の延長にあるホールを挟み、変化のある空間が展開しており、時代時代の教育方針の変化、選択に対応できるようになっている。



賀川豊彦記念松澤資料館・松澤幼稚園

No. m- 25　三春町歴史民俗資料館・自由民権運動記念館
――大高正人，　sk8307

変化のある地形はいいものだと思いました。本来地形は長い間にゆっくりとつくられてきたものだから、落ちついた形を持っているんですね。

三春にはこの資料館の建つ地形にとどまらず、地形の連続体があります。うっかりしているとブルドーザーによって切り崩されかねないんですが、この建築の建つ場所は、三春の町から渡辺さんが取りだしたぶどうの房のようなイメージを考えました。つまり、谷筋を走る街道から階段を登って神社にたどりつくイメージをこの資料館の立地に適用したのです。その結果、町の中では今まで裏側であったのが、町に積極的に結びつき表になるという結果となりました。

三春町歴史民俗資料館・自由民権運動記念館

No. m- 26　北海道立三岸好太郎美術館 ――岡田新一，　sk8310

26-1

札幌という都市の断層的変貌の中にこの美術館を嵌め込むとすれば、固有の文化的テクストを保有した完結形態を象嵌する以外に方法はないだろうというのが僕の選択である。また、洋風木造建築の知事公館の庭でもある広い敷地の一隅に、楡や白樺の林を背景にして建てられるという、環境との関係を考え、そして同時に風土的気候を考慮したときの選択でもある。

26-2

美術館の中央部は、自身が主となり得なかったアトリエを写したものとして好太郎に捧げられるべき部分であろう。他はいうまでもなく好太郎を育んだ故郷の隠喩である。旧北海道庁舎に代表される赤煉瓦、勾配屋根、暖炉の煙突、そして細やかでありながらも大胆なスケールの扱いを多面構成によって表象しようとしている。

・・・現実に人びとがそこを訪れて、その空間の中にインヴォルブされて、そこから何を受け取るかということではないだろうか。手法、空間、細部、などの結合としての建築が物語るのである。

・・・

26-3

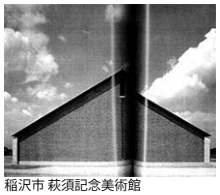
これらのストーリーは絵が描かれた時代を投影してそれらを鑑賞する背景をつくるのである。

北海道立三岸好太郎美術館

No. m- 27　稲沢市 萩須記念美術館
――徳岡昌克／竹中工務店，　sk8310

27-1

萩須画伯は東京美術学校を卒業後渡仏されたと聞くが、近影を拝見すると、異国のきびしい条件を克服された孤高の、気位高く若々しい野心を秘めた芸術家の風貌であった。要項には、デザインについて「萩須記念館は、記念館にふさわしい洗練された風格のあるユニークな建物とすること」とあり、かつ第２次設計競技応募要綱のなかでも「外観、内部デザインは、格調の高い洗練されたものとし、堅ろうな建物とする」と述べられている。風格や格調を視覚的に表現する方法のひとつとして、明快な平面と単純な形体をもつシンメトリーな建築を目指した。


稲沢市 萩須記念美術館

27-2

建設地の調査に向かったが、平坦な田畑のなかに微高地があるものの、土地のもつキャラクターの設定が非常にむずかしく苦慮したが、現地調査の末に発見したおびただしい数の神明社によって提案骨子のヒントを得た。すなわちこの鎮守の森は、緑のネットワークとなって敷地内の植栽計画に及び、かつて村社が村人の守護神であったように、現代の稲沢文化のシンボルとして建設地の環境を美術館、博物館､収蔵庫等の建築的アンサンブルの形成を含んで､文化の香り高い広場＝「芸術の聖域」として提案することであった。

No. m- 28　土門拳記念館――谷口吉生，　sk8312

28-1

これらのいろいろな課題のなかで、私はやはり記念館という建物の性質上、貴殿の人格や生きざまを、いかに建築の中に表現するかということが重要であると考え、それを発想の原点として設計に着手したわけであります。・・・しかし、その結果は土門拳という人物と、作品の魅力にはとりつかれはしたものの、恐るべき執念で、長い時間と広い空間に活動した貴殿の足跡を、一建築に凝縮することの不可能なことも知ったわけです。さらに､貴殿の数多くの作品にふれることにより、「記念館」の建築の中に展示される作品そのものが土門拳なのであり、あえて建築の意匠の中に、貴殿らしさを引用することが無意味であると、考えるようになりました。・・・

土門拳記念館

建築の内部空間は簡潔なものとし、見えがくれする庭園と、展示作品のみが視覚的に強調されて、土門拳の世界を積極的に演出します。

28-2

敷地は私は何度か訪れるうちに、周辺の四季の構図が、次第に蓄積されるようでした。その結果、建築と周辺の環境の積極的な関わりを、設計の第１のよりどころとした基本設計案が､ごく自然にでき上がって行ったのを記憶しております。･･･外観は抽象的な造形が、飯森山と人工池に調和したスケールを保ちながら、敷地の修景の中に組み込まれます。建築の鋭い鋭角的な造形が、柔らかい曲線で構成された砂丘や人工池の姿と干渉して、市自然をいっそう引立てるからです。"

28-3

展示室と記念室の間に、人工池に沿ってこの建築を特徴づける長く連続した石の壁面があります。それは・・・貴殿の業績をたたえるある種のモニュメンタリティが必要と考えたからです。しかしながら、私は貴殿が自由で開放的な風潮を好み、権威的な表現をあまり好まれないことを存じておりますので、この壁にさらにいくつかの機能を加えて、象徴性を弱めようと試みました。"

28-4

この公園の人工池のまわりには、遊歩道がめぐっています。遊歩道に散策を楽しむ人びとは、この壁面と一体になったブリッジを渡り、中庭の水音を聞き、美しい庭園を眺め、「記念館」の中をいつでも自由に通過して人工池のまわりを一周することができます。･･･このようにして遊歩道の景観に変化を与えながら､「記念館」と公園を結びつけ、一般の人びとにより開かれた建築とするのがその役目です。

28-5

展示作品がすべて額におさめられ、静止した構図であるのに対して、来館者の視

覚に変化と休息を与えるよう回遊式の方式をとってあります。来館者が移動するにともない視覚の変化、視野の明暗、位置高低などが生じ、色彩や庭園の景観なども移ります。さらに、このような時間の経過の空間かは、日本の伝統的な建築や庭園などによくみられる形式です。「古寺巡礼」や「ヒロシマ」まで一貫して、日本および日本人の心を追求した貴殿の作品を展示する場所として、やはりこのような伝統的な空間構成がもっともふさわしいと考えたからです。"

28-6

建築の構想がまとまり、設計もだいぶ進展した段階で、私は貴殿と親しい方々にも、この建築に参加していただくようお願いし、多くの尊いご協力を得ることができました。それは、いろいろな領域の方方に参加してだくことにより、建築にさらに興味深い意匠を加えると同時に、貴殿の親しい人びととの出会いを、この「記念館」の中に形として、記憶としてとどめようと思ったからです。

中庭の彫刻をお引き受けいただいたイサム・ノグチ氏は、私も幼いときから父を通して親しくしていただいた方です。・・・

玄関を入って正面の壁にかかる「土門拳記念館」の銘板のデザインは、貴殿とはもっとも親交の深い亀倉雄策氏によるものです。・・・

・・・勅使河原宏氏は、視聴覚室前の作庭をお引き受け下さいました。・・・

No. m- 29　齋藤隆夫記念館 静思堂 ――宮脇檀，　sk8406

29-1

戦災で焼けてしまった齋藤氏の遺品はほとんど無いといって良いから陳列館では無く、旅人に茶菓を提供するという機能もない。一種の神の無い協会であり、仏の無い寺院、空間の質だけで人を思いにはせなければならぬ――という建築本来の意味だけを目差してこの建物は設計されねばならなかった。

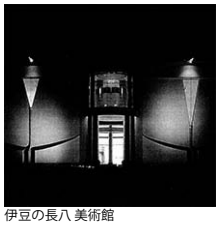
齋藤隆夫記念館 静思堂

29-2

瓦屋根の勾配、外壁や塀の赤い土壁はこの地独特のものに合わせ、景観上の連続性を生むため。そんな土地にそっと静かに違和感なく置かれた。

No. m- 30　伊豆の長八 美術館 ――石山修武，　sk8409

この建築も内部を巡ること、巡りながら長八の作品を体験し、長八が生きた江戸末への小さなタイムスリップを体験できるようにと工夫されている。そのためにいくつかのパースペクティブを施した平面が組み合わされ、この建築を巡り、体験する人間の固定した感覚を揺さぶり惑乱させることが意図された。物理的な距離感覚を少しでも狂わせることが、時間感覚を刺激することにもなると考えたからだ。


伊豆の長八 美術館

この平面形はランド・シップ - I〈イリス〉で経験済みのものだが、それをひとつの単位として扱いいくつかをさまざまに集積し、ドーム状の形態を新しい部品として組み合わせたのが、この建築の全体である。螺堂の形式を平面に置き換えたのだと考えても良い。ともあれ江戸の町人たちが自在に螺堂を楽しみ、札所巡りを望んだように、沢山の人がこの建築を巡り、伊豆の長八が残した作品に触れ、つかの間の不思議な旅を得ることを願っている。

No. m- 31　メモリアルハウス ――森義純，　sk8411

当計画施主の亡くなられた御主人の夢が、この地に居を構えることであり、苦境のどん底にあったときにも手離さなかったところでもあったという。・・・亡き主人の座を構え、ひとつの鎮魂とし、次なる生活の砦としたいということが設計当初の一条件であった。・・・

・・・RC 造の住宅で、初めて打放しコンクリートの持つ重量感とモノトーンの色感が、荘厳な気持を高め、打放し面の今後の風化が、風雪にも耐える物語の象徴としての味わいをいっそう深め続けて、MEMORIAL HOUSE をかたちづくってゆくものと考えている。

メモリアルハウス

No. m- 32　日中友好会館 ――加藤隆久／日建設計，　sk8506

もっとも重要な要素は開口部＝窓でしょう。･･･窓は 5 枚のパネルを備えています。外側からアルミルーバー戸、網戸、ガラス戸、乳白アクリル板、そして遮光板です。たとえば夏季の外出時にはルーバーが熱蒸れ防止になりますし、暗くなれば安眠できない人には遮光板が役立つでしょう。住居は住手が建物に合わせるのではなく、建物ができるだけ住手に合わせられるべきです。

日中友好会館

No. m- 33　YKK 50 ――遠藤精一，　sk8510

基本設計にあたり、施主側から提出された企業哲学に基づく言葉の数々の中で、とくにわれわれにインパクトを与えた言葉を列記し、その言葉からどう空間に結びつけたかをコメントして見よう。

“ 善の循環 ”“ 森林 ”“ 人と共に働く “” 人類への貢献 ”“ 誰も支配しない誰も支配されない ” 等々。この中で何といっても “ 善の循環 ” の一言はすべてを包み込む企業哲学であり、この言葉をわれわれなりに理解せずに前に進むことはできなかった。

・・・

YKK50 の中で不特定多数の人びとが出入りする空間として展示空間がある。そして “ 善の循環 ” はまさに YKK の企業哲学であるから、いかに多くの人びとにこの理念を理解してもらうかがこの空間の使命である。・・・かつて天皇陛下に行幸いただいた際の御製より抽出したキーワードとしての 5 文字、和、営、匠、栄、頼のおのおのに意味づけをして、それぞれのコーナーをつくり展示している。その意味づけを列記して見ると、

和　たすけ合い力を合わせる――静
営　暮しを築く――香
匠　暮しに役立つ技術を追求する――舞う
栄　社会と共に栄える――盛
頼　信頼の絆を確保する――劇

以上のテーマにストーリー性を持たせながらコーナー毎に展示を行ない “ 善の循環 ” を示唆している。

YKK 50

No. m- 34　田崎美術館 ――原広司，　sk8608

34-1

私の単純な理解は、自然の探求者としての田崎廣助というところにあります。もう一方の理解は、画伯は日本の伝統と西洋の絵画の歴史との融合をはかった画家であったということです。ですから、ひとつに自然解釈、もうひとつには伝統の解釈がもし建築にあらわれれば、広い意味での同時代人として、絵画とその背景としての建築とは、ある面で符号するにちがいないと考えて計画をすすめました。そこで、ここでは主として自然と伝統に対してどのような具体的な建築的表現をとったかをお話したいと思います。・・・

境界をなくす、境を曖昧にする手法を、具体的にいくつか挙げてみたいと思います。

田崎美術館

第 1 に、平面型ですが、中庭に壊れたような形状のガラス壁を設けて、通常の壁とはかなり異なった領域の境界をつくったこと。・・・第 2 に、建物の色調の基本を銀とグレイにして、さまざまな材料を意識的に混ぜて、建物全体を色彩上の多様性にすることです。・・・第 3 に、ミリメートル単位から 10 メートル単位にわたる寸法の混ぜ合わせ、ガラス壁と相似した不定形の細かい寸法をもった装飾をあちこちに入れ込むことによって、さまざまな寸法の混成系をつくり、寸法上の事物の境界を曖昧にすること。第 4 に、ガラスへの風景と建物の「うつりこみ」を計画することによって、実像と虚像の重ね合わせがおこり、たとえばガラス壁の周辺では、どの像が本当の柱であり樹なのか、一瞬わからなくなるような効果があります。第 5 に、ガラスの屋根によって室内の状態が刻々と微妙に変化すること。・・・第 6 に、さきほど申しました屋根の効果、外の金属屋根と内のコンクリートの屋根とが「うつりこみ」によって思いがけない位置関係をつくります。

境界を曖昧にするという操作は、今日のデザイン活動にかかわる人びとが共通にもっている感性的な美学の表われだと思われます。それを簡単にいってしまえば、「アモルフでアンビギュアスなものへの関心」であると思われます。こうしたもののあり方を表現するたとえとして、僕は、雲、霧、虹、蜃気楼といった自然現象を挙げてきました。これらは、かたちがはっきりとせず、うつろいやすく、境界があるようなないような現象なわけです。

こうした関心事が、実は日本の空間的伝統の重要なひとつの側面であることを指摘したいのです。僕はこれまでもよく、「非ず非ず」にふれてきたのですが、これは境があって、境がない世界を示しています。そうした世界がひとつの理念であって、これを基礎にして日本中世の美学が築かれたわけです。・・・境界を曖昧にするという意味は、連歌などでみられる「展開する」、同じところにとどまらない、同じことを繰り返さないという意味と同義になります。空間はどこまでも続き、空間の状態は時間とともに絶えざる変化をするわけです。

34-2

美術館には鑑賞者という存在があります。絵の性格からしても軽井沢という場所からしましても、訪問者にすがすがしい体験を味わっていただけるようにするのが、設計者の務めです。それが画伯を記念する意味につながると考えました。と同時に、絵の背景としての建物も短い滞留時間なのですが、楽しんでもらえるような建物にすべきだと思いました。

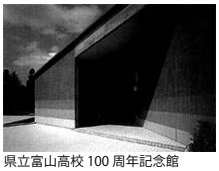
34-3

美術館には鑑賞者という存在があります。絵の性格からしても軽井沢という場所からしましても、訪問者にすがすがしい体験を味わっていただけるようにするのが、設計者の務めです。それが画伯を記念する意味につながると考えました。・・・一度訪れた人びとがもう来ないというのではなく、お茶でも飲みに立ち寄ってもらえるような軽い気分の美術館、開かれた感じの美術館であり得るような平面計画を考えました。

No. m- 35　県立富山高校 100 周年記念館 ――山本公也，　sk8608

建物や校庭のありように、県のナンバースクールとしての力学とプライドが感じられるのである。

今回の 100 周年記念館もその一連の力学の延長線上にあるもので、その力学は無形のものであはあるが強力なプレッシャーとして設計者に作用した。端的にいえば OB 諸氏の胸の内にある誇り、愛着その他の感情に具体的な形を与えることが必要だった。



県立富山高校 100 周年記念館

No. m- 36　蕗屋虹児記念館 ――内井昭蔵，　sk8712

36-1

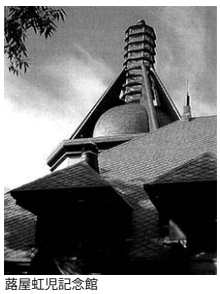
敷地は新発田市の中心、市役所と新発田市民文化会館・公民館と図書館が集まっている市民文化ゾーンの中に選ばれた。そこは文化会館に隣接した狭い場所であったが、私は市民文化会館と図書館に対し、同化させる形態ではなく、相互の自立性を重んじ、なお全体の調和が可能な形態にしたいと思った。

36-2

記念館は抒情画家蕗屋虹児の人間がそのまま建築化し、空間化されたものでなければならないと考えた。つまり、蕗屋虹児の姿をした建築にしたいと思った。そこでかれの全作品や資料を検討し、私なりの蕗屋虹児像をつかんだ。

蕗屋氏の活躍した大正末期から昭和初期は第二次世界大戦をひかえ、あたかも嵐の前のような、不安ではあるがどこかおだやかな時期でもあったと思う。その時代の背景は哀愁に満ちた一種のトワライトゾーンのような感じがする。人びとは大陸に対しての憧れ、ハイカラなものに対する興味、何かにせき立てられるような焦燥感、退廃的な風潮、明るさの中にも一抹の淋しさのある時代であった。まさに夜明けでなく、やがて現実となる悪夢を暗示する夕暮れ時のトワイライトゾーン……。彼の作品はこの時代をよく表しているように思える。私はこの背景を空間や造形でつくるには、直感的に大陸からわが国に伝わってきたロシア正教会の形態をおいてないように思えた。蕗屋氏と正教会とはなんら関係はないが、新発田という風土、日本海に面し、どちらかといえばどんよりとした空の色や沿海州からくる大陸の奥の中に私はシベリア、満州といったイメージを蕗屋氏の中に感じとった。

トワイライトゾーンの中にはビザンチンのドームとオーソドックスな構成を持つ建築がぴったり合うように感じた。



蕗屋虹児記念館

No. m- 37　サッポロビール 開拓使麦酒記念館 ――竹井俊介／大成建設，　sk8712

この建物の意匠性は保存する煉瓦外壁そのものにある。そして 90 年の歴史を持つ煉瓦の素肌を生かし、独特な様式を持つこの工場建築の素朴な架構をじゅうぶんに感じさせうる空間を意図した。煉瓦に対応する素材として、木材、スタッコ、真鍮、鋳物、ステンドグラスなどの本物を使用し、深く味わいのある雰囲気づくりを心掛けた。

このことは、建設当時と変わらぬ表情で生き続ける外観のデザインと内部のデザインとの調和や整合性のうえからも重要なことと思われる。

サッポロビール 開拓使麦酒記念館

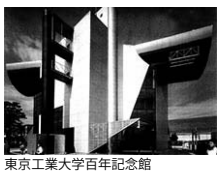
No. m- 38　東京工業大学百年記念館 ――篠原一男，　sk8801

38-1

この記念館の敷地が、構内と街との象徴的な接触点である大学正門際であったことで、私は街と直接向き合う建築を計画する機会を得た。

38-2

建物の外装には金属板を使うことを最初から予定した。技術博物館を主体とした記念館には、軽く耐久性のある材料がふさわしい。



東京工業大学百年記念館

No. m- 39　瀬戸大橋記念館 ――山本忠司，　sk8805

39-1

小学生や幼稚園の子供たちが瀬戸大橋公園に遠足にきたとき、どこから橋を眺めたら良いだろうかという素朴な疑問が出され、それに答える格好で考えられたのがこの記念館であった。いちばん高いところで高さ 17m、それが中心となって、それを取り囲むようなかたちで 4 つの丘がある。それらに登る階段は広くとってあり、角度を振りながら、向きを変えて登って行くから、頂上に上るにつれて、視界が変化し、瀬戸の海と瀬戸大橋とがパノラマのように角度を変えて展開していく。

瀬戸大橋記念館

39-2

記念館の平面構成は、センター部分に 200 人収容の立体的映像空間、すなわちヘリビジョンシアターがあり、それを取り囲むかたちで 4 つの空間があって、これらを展示などを見ながらひと巡りしてくるように計画している。そしれ、これら 4 つの空間は、四国の表現ともなっている。

39-3

記念館の建築と、敷地を構成している周囲のスペースとが、それぞれ関連しながら橋の見える楽しい空間をつくり出すような考えた。すなわち石壁を配してコーナーをつくり、緑を組み込んでの空間構成なのである。

39-4

記念館は、橋を渡ってくる人たちを、四国側として最初に迎える施設でもある。そのため、記念館は四国人として来客歓迎の表現でもある。屋根を形づくる 7 つのミラーグラスは夜になると明りが灯り、7 つの輝く星となる。それは、四国のわれわれの来客に対する歓迎と瀬戸大橋完成の喜びの表現でもある。

No. m- 40　平福記念館 ――大江宏，　sk8806

この平福記念館の建った角館の地に見ることができそうである。

・・・ここでもやはり建設用地確保のため 2 ヶ所の「スクラップ・アンド・ビルド」は行われたわけである。しかし、地上げ屋さし回しのダンプが人のすみかを襲うといったような再生の方法がここではあろうはずもない。今後もこの都市はゆっくりと、しかし人々の生活を脅かすことなく再生し続け、個性の歴史家の格好の教科書になりそうな、そんな可能性を十分に暗示させてくれる角館である。

平福記念館

No. m- 41　東京サレジオ学園 3 期
ドンボスコ記念聖堂・地域交流ホーム（ナザレの舎）
――坂田誠造，　sk8901

子供たちが中心である聖堂は、決して子供っぽくつくるのではないが、明るく楽しくわかり易い建築でありたいと考えた。聖堂は聖別された空間としなければならない。キリスト者たちの世界では、聖書は神の言葉である。その意味からも、聖書は聖堂んデザインの重要なテキストであり、さまざまな象徴、記号、数として形や部分の中に散りばめられた。たとえば 12 本の柱― 12 使徒―子供たちの 6 ― 3 ― 3 の全居住年、魚―キリスト―鱗模様、など。

東京サレジオ学園 3 期
ドンボスコ記念聖堂・地域交流ホーム（ナザレの舎）

No. m- 42　福島市古関祐而記念館 ――岡田新一＋柳瀬寛夫，　sk8903

42-1

氏は楽器を使用せず、湧き上がる音楽をつぎつぎに書き取り続ける手法で名曲を世に送り出してこられたのである。そうしたイメージを自由に操る作曲家の業績を称揚する展示の方法は、二次元的でなく空間と時間を感じさせることが望ましいと考え、展示室中央軸にトップライトを設け、何重もの紗で和らげた光の中で展開させることにした。

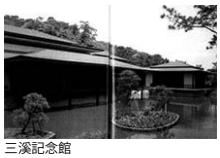
福島市古関祐而記念館

42-2

福島ホールは、音楽堂、働く婦人の家、勤労青少年ホームの異なる３つの機能をクラスター状に集約し、ヨーロッパの集落のような中庭・狭間、広場などを持った構成でまとめた。その後、そのファサードのリズムが道路を挟んだ向かい側に転調されて、新しい喫茶店やブティックが相対する街並みを形成してきている。記念館はその間に建ち、その街並みをさらに特色づけることになる。

No. m- 43　三溪記念館 ――小俣富歩，　sk8906

三溪園は数々の伝統的日本建築、大小いくつかの池から構成されており、外苑と内苑とに分かれている。記念館はこの外苑から内苑への入口付近に位置しこの周辺には臨春閣、白雲邸が近接しているが、それらが園の自然と相俟ってつくり出す雰囲気の中に違和感なく、むしろ外苑と内苑の接点として園の一体感を強めると同時に内苑の存在感を高めることが最大のテーマのひとつである。そのために建設主旨に基づき、延床面積を 1,650㎡程度とし、できるだけ建物高さを抑えるため平屋建とした。さらに全体を六つの棟に分けそれぞれに屋根を架けて下屋によって継ぐ構成とした。



三溪記念館

No. m- 44　玉川高島屋 SC 本館 20 周年リニューアル ――彦坂裕，　sk8912

こうした過程で一貫していたのは、リニューアルにおいて成熟した消費空間に、しなやかなソフトインフラストラクチャーを形成することであった。ここでのソフトインフラとは、リゾートテイストやホスピタリティをそこに臨場する人びとが共同祝祭的な感興で分有するための環境と情報の仕掛け､「街」へのイメージリーダー的な名所性のある空間つくり込み、テイストにおいて通底し選択性に充ちた MD ゾーニング、そうしたものの整備であり、結果としての神話的価値をもった奥行きのある魅力的な環境の獲得にほかならない。

玉川高島屋 SC 本館 20 周年リニューアル

No. m- 45　東京都太田記念館 ――林雅子，　sk9006

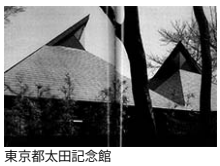
この建築の特徴は３点ある。

第一は、太田氏の旧居の記憶である。

留学生の宿舎であるにも関わらず、３棟からなる分棟形式をとって見え掛かりのの寸法を旧居並みに押さえた。・・・窓枠の朱色など、旧太田邸の記憶が各所にちりばめられている。

・・・

記念室の「大牀」は、固い建築材料と土足による中国の一般的住居空間の中で、特徴的に存在する脱靴の柔らかな小空間で、太田氏はこれを旧居に備えて愛用され、今回の企画の中での再現を望まれていた。・・・太田記念室の中央にこれを置いた。

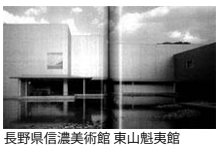


東京都太田記念館

No. m- 46　長野県信濃美術館 東山魁夷館 ――谷口吉生，　sk9007

46-1

第一の問題は、個人の作品だけを展示す美術館として、もっとも重要である建築と作品の関係をどのようにするかということであった。以前に、東山画伯の展覧会の作品構成を担当させていただいた経験はあったが、多くの人びとに愛され、確立したイメージをもつ東山芸術にふさわしい建築の意匠を定めることは、たいへん困難なことのように思われた。また、展示される作品は日本画であるが　現代の日本の美意識によって表現されたものである点や、美しい北欧の自然や街並が描かれたものなどに及ぶ点を考慮して、これらにふさわしい造形を求めることも課題であった。


長野県信濃美術館 東山魁夷館

46-2

第二の問題は与えられた建築の敷地に関することである。

敷地は既存の信濃美術館の横の空地で、一部がテニスコートとして使用されていた。周辺は緑も多く、市民には古くから親しまれている公園の中ではあるが、景観としてはごく日常的風景のものであった。このような敷地の中にあって、既存の信濃美術館と隣接させながら、東山魁夷館にふさわしい新しい環境を周辺につくる必要があった。・・・

建築は、敷地の既存の美術館に隣接する部分を、一辺が 50m 四方の正方形で切り取り、その中に建物を配置した。敷地を正方形にに区切ったのは、増築の部分と既存の部分との距離を近づけながら、同時に両方を自立したものとするためであり、また、厳密な正方形の領域を設定することによって、この計画が永久に不変であることを象徴的に表現することでもあった。

No. m- 47　普連土学園百年記念館 ――小川守之，　sk9011

学園からの僕ら設計への要望は、フレンドの精神である簡素で堅実な建物であること、そしてこの本校舎の佇まいを受け継ぎつつ、設計者独自の展開をしてほしいということであった。いかにしたら本校舎の建物を生かしながら、しかも本校舎によってこちらも生かされるような建築そして場所をつくれるのだろうか。本校舎から学びながら、ただ単に追随するのではなく、対比的な表情をつくりながら、しかもずっと昔から一緒に建っていたような自然な佇まいに建ち上げることはできないだろうかと考えた。・・・

普連土学園百年記念館

・・・僕らが内部と外部のピボット・スペース（庇空間、縁空間）と呼び、大江先生が本校舎の設計で大事にされた、いわゆる「中間領域」の充実を図った。

本校舎から記念館へ向かう連絡路を、設計の初期段階から " ロジア " と名付け、計画のキーワードのようにしていた。また記念館の内部には縦銅線をつくらず、階段はすべて外階段で、上下階に行くにはかならず外の空気に触れ、建物の外側を通る構成とした。授業の休み時間に図書館やランゲージ・センターや講堂に行くには、かならず建物の周囲を通ることになる。ロジアの隙間から見える本校舎、樹々のそよぎ、空の色、校庭で運動に興じる生徒の姿、さざめく声、垣間見る聖坂の車や人の波。こうした学園の内や外の動きやさざめきがロジアや外階段から垣間見られる。

No. m- 48　芝浦工業大学齋藤記念館 ――相田武文，　sk9101

大宮キャンパスは開設後、すでに 20 数年を経ており、この「齋藤記念館」もキャンパス全体の配置計画と関連して建設された。それゆえ、既存建物や前面広場との関係を考慮し、キャンパス全体の景観上の配慮も設計段階における重要な点であった。ここでは、既存建物や広場との関係、日照や通風などを考慮して南北軸に平行系の壁を配列している。

芝浦工業大学齋藤記念館

No. m- 49　白瀬南極探検隊記念館

――滝浪正光／黒川紀章建築都市設計事務所，　sk9103

49-1

外装に打放しコンクリートを採用することにより、南極のイメージを象徴的に表現し、・・・

49-2

外装に打放しコンクリートを採用することにより、・・・探検の意義を讃える記念性を表出するよう意図されている。

白瀬南極探検隊記念館

No. m- 50　酒田市国体記念体育館――谷口吉生，　sk9111

50-1

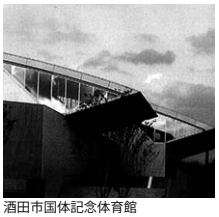
体育館設計に当っての基本方針は、公園がもつ景観のスケールを乱さないよう高さを可能な限り抑えること、・・・

50-2

体育館設計に当っての基本方針は、・・・スポーツ施設にふさわしい軽快な意匠とすること・・・

50-3

体育館設計に当っての基本方針は、・・・当然のことながら、近接する記念館とはまったく異なる機能であるため、その建築表もあえてまったく異なる対比的なものとすることであった。



酒田市国体記念体育館

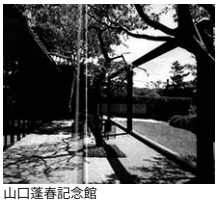
No. m- 51　曽我・平澤記念館――香山壽夫，　sk9112

新潟平野のほぼ中央部、中ノ口川に沿った味方村の旧家、笹川邸（現在は国指定重要文化財として村が保存公開している）の屋敷の中に、この記念館は建てられている。笹川邸は周囲に環濠を巡らし、屋敷門を入れると、広い前庭の向こうにゆるやかな唐破風を正面にみせた豪壮な住宅である。・・・笹川邸の豪壮にして繊細な構成、格調高くかつ自由な意匠に、訪れた私はすっかり興奮し、基本の構想はたちまちできあがった。

曽我・平澤記念館

No. m- 52　山口蓬春記念館――大江匡，　sk9112

敷地は葉山の御用邸の近くで、南斜面の約 1,000 坪の広さであり、法的な規制や周辺環境を考慮し、既存の木造住宅の主屋部分を、あくまでも主要な構造は変更せずに改築をすることや、外構を中心とした造形により記念館を構成することを試みた。



山口蓬春記念館

No. m- 53　高知県立坂本龍馬記念館――高橋晶子，　sk9201

それはひとことでいえば「ロマン」なのだ。

龍馬のことはよく知らない。ただ龍馬と聞くと、非常にロマンを覚える。そのような印象をもっていたから、それが「そのまま」建築に現れてくれればよいと考えた。・・・

・・・直接に建築に関わるきっかけとなったのは、立地場所であった。自然がここではすでに、龍馬というテーマに沿って、意味を汲み取れる媒体としてスタンバイしていた。黒潮の海を一望できる丘陵の頂きに敷地は位置している。晴れた日には遠く、東に室戸岬、西に足摺岬が望めるという。古城跡でもあったこの丘陵は、土地のかたちそのものが海・陸両方から遠望されるランドマークとなって

高知県立坂本龍馬記念館

いる。南国の強い陽光と、こんもりとした常緑樹の影の美しいコントラストを感じながら、曲がりくねったアプローチ道路を登っていく。一瞬道が直線になって、目前にパッと太平洋がひらけ、舞台のように土地が出現する。
まさに海と空と陸が出会う場所である。このことを、建築ができることではっきりさせたいと感じた。
とぎれる瞬間まで上昇を続けている道路を延長して、海と空へ向かっていくことが、まず最初にイメージされた。いきおいそこは、スロープ＝上昇をつづける道となった。・・・
ロラン・バルトは彼の著書の中で、塔について語っている。
「(塔は)……なんでもひとつの事物にはひとつの意味づけをしたがる人間に対して、……純粋に意味するものの役割、つまり人びとが絶えずそれになんらかの意味を与えずにはいられない形の役割を演じる。しかもそこに与えられる意味は、決してつきることもなければ固定することもない」
性能よくロマンを産出するとは、いいかえればこのコメントを実行することであろう。

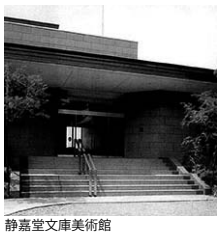
No. m- 54　丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館 ——谷口吉生，　sk9207

建築と美術と都市空間が一体となってつくり出す景観が新しい丸亀駅前を特徴づけるものとなり、さらに総合的な意匠統一によって整えられた環境が市の将来を示すものとなることを、美術館の設計に意図した。
・・・美術館の正面には、猪熊氏のデザインによる壁画と、壁画と一体となった展示室への入り口、そして市民の利用度の高い付帯施設へ人びとを導く大階段とがある。壁画は幅 21m 高さ 12m あり、美術館の内容を象徴的に表すことと、美術館がある駅前広場を構成する要素としてふさわしいものとすることが意図されている。

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館

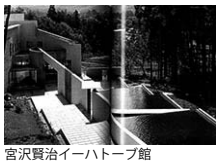
No. m- 55　静嘉堂文庫美術館 ——高木彦二，　sk9208

風景が建物を包み込んでゆく、この景観を残し、明治、大正、昭和にかけての建築群との調和を考慮して、明快でおおらかは平面、断面計画とニュートラルな構成および仕上げを採用、外観は自然林の稜線を壊さぬよう南側斜面に沿った大きな片流れ屋根で、既存建物とあわせて銅板葺とした。また外壁も周囲に溶け込む色彩の御影石を使用した。


静嘉堂文庫美術館

No. m- 56　宮沢賢治イーハトーブ館 ——古市徹雄，　sk9212

各室からの眺望は、部屋によっ池や林に面するなど、周囲の豊かな自然環境を生かすべく計画されている。


宮沢賢治イーハトーブ館

No. m- 57　新居浜市立 別子銅山記念図書館 ——寺本敏則／日建設計，　sk9302

57-1
ここに図書館を計画するに当たり、記念建築物としての完結性と、人びとの記憶に残る凝縮した空間・・・をつくりたいと思った。
57-2
ここに図書館を計画するに当たり、・・・さわやかな公共建築をつくりたいと思った。

新居浜市立 別子銅山記念図書館

No. m- 58　所沢航空発祥記念館

――横谷英之＋小堀徹＋宮本好信／日建設計・東京，　sk9306

58-1

三角形の断面をもつ RC 造の基壇の上にふたつのシリンダーを載せ、のびのびと広がる芝生と樹林、十分に整備された公園と恵まれた立地の中にシンプルで力強い形態を置くことを意図した。

58-2

実際の機体をありのままに展示する " という展示コンセプトを実現するために、テフロン膜による「骨組膜構造」を採用した。鉄骨アーチの視点から支持されて空中に浮かぶ飛行機を、昼は膜面を透過した自然光が柔らかに包み込み、夜は室内側の膜面全体を反射面としてドラマチックなライティングを行うグレアのない展示空間が実現した。

所沢航空発祥記念館

No. m- 59　下諏訪町立須磨子博物館・赤彦記念館

――伊東豊雄，　sk9307

アララギ派の歌人島木赤彦が生涯の大半を過ごした家は、敷地からわずかの旧道沿いに今もある。柿陰山房と呼ばれている茅葺の民家へは、少年時代の私も時折探索に出かけた。小学生自体に教えられたこの歌人の代表歌「みづうみの氷は解けてなお寒し三日月の影並にうつろふ」は、諏訪湖を臨むこの山房で詠まれたと伝えられる。

赤彦にかぎらずすべての人びとにとって、湖は常に中心であり、大きな自然のステージであった。すべての視線は湖にいつも向けられていた。山を臨むときには大概は湖を越えた向かいの山を仰ぐのであり、背後の山を振り返ることはん滅多になかった。

諏訪湖と島木赤彦の生涯をテーマに掲げたこの博物館が湖に向かって開かれ、湖との関係だけを求めて施行されたのはこうした理由からである。設計を始めてから終始私の脳裡を埋め尽くしていたのは、美しく時にミステリアスでさえあったこの湖の存在であった。主役は常に湖であり、建築は湖への捧げ物であった。

このような場合、建築はできる限り単純な形態の h 形態のおうがふさわしいと考えていた。コンペティションの段階から「湖に浮かぶ船」がイメージされたのも、敷地の位置とリニアな形状や博物館の展示のテーマからごく自然なことに思われた。

下諏訪町立須磨子博物館・赤彦記念館

No. m- 60　窪田空穂記念館――柳澤孝彦，　sk9308

60-1

生家の向かい側に記念館が計画されること、そのことに私は大きな特徴があると、敷地を見たときに即座にそう思いました。

生家はとりわけ空穂が歌を生み出す原風景となった松本平の風土の円心であり、空穂自身の生きた痕跡が今に残されている点で、その存在が大きな意味をもつものだと思いました。すなわち生家とさまざまに「呼応」した関係で記念館をデザインすることだと即断したんです。

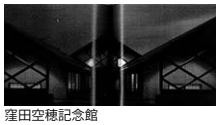
・・・

記念館の大屋根は、生家の伝統的な本棟造りに呼応して棟軸を編ませて大きな妻面が向き合う構えとしました。それらが相互に引き合う緊張が空間を支配すると考えました。

記念館の生家側妻面を全面ガラスとした視覚的開放は、まさに双方の視覚的な呼応による空間の緊張を意図したものです。

・・・生家のアプローチと軸を一線に揃え、生家側と記念館側のそれぞれの奥行きが同一軸上に呼応し、連なる空間をつくろうと意図しました。

建築にとって、その足元である大地といかに関わっているかがとても重要で、そこまでデザインが及んでこそ、建築を一員とする環境としての風景がつくり上げ



窪田空穂記念館

られたことになるのだと考えているのです。その意味では、記念館を生家との呼応関係の上にデザインするということは、取りも直さず生家と記念館を核にして、背景の風土をも参画させた「環境としての風景」が設計のターゲットであるからなのです。

60-2

空穂記念館がきわめて簡潔なシンメトリーの構成を取っているのは、整い尽くすほどの端正さがもつディグニティが、窪田空穂の透徹したした芸術への呼応であると考えた末なのです。

60-3

空穂の生家があるこの土地には、空穂が育ち、歌を詠んだ生活の痕跡と共に、そこには脈々として生きた人びとのさまざまな記憶が堆積しているのです。

建築には人びとの生活や建築構成材が数え切れない瞬間の出来事を歴史として刻み込んでいくものだと考えます。すなわち建築は誕生したときからその風土と共に時を経るごとに歴史を堆積し、変容していくものです。そしてそれは、時の経過と共に存在の意味を深めていくべきものだと思うのです。

No. m- 61　式年遷宮記念　新宮美術
――小俣富歩／大江宏建築事務所，　sk9309

美術館の敷地がある倉田山は、内宮さんと外宮さんのほぼ中間にある小高い丘で、ここには神宮のいくつかの文化施設があります。その中心となっている神宮微古館の斜め向いに、軸線を同じくして配置することで倉田山の文化施設全体の整合性を図り、微古館の洋に対して美術館の和を規範として現状の地形、自然林に調和する平屋建てを基本とした、“ ゆったりとした ”“ おおらかな ” 佇まいの建築、空間構成を設計コンセプトとして検討を重ね、先生が完全に回復されると期待していた年明けには、ほぼ現在の姿の基本的な形がまとまり、あとは先生の回復を待つばかりとなりました。

式年遷宮記念　新宮美術

No. m- 62　中原中也記念館――宮崎浩，　sk9401

高田公園、中也通り等の中也に由来する場の中心にありながらも、特筆すべき彼の文化的背景は読み取れず、そのロケーションが建築に与える場の力は希薄であった。そのため、建築は自らがその中に場を形成し、この地域の文脈の中に無理なく溶け込んでいくことを強く意識しながらも、その表現が周辺環境に対していかに強く関わっていくかを大きなテーマとした。特に直接まち並みに向かい合う外部空間の構成が、この記念館のあり方を規定するものであると思われた。

・・・この建築の周辺環境に対する提案は、建築のヴォリュームや形態として環境に向かい合うことではなく、前面道路までの間に生まれた外部空間との構成と表現によって示されている。このスペースは低く抑えられた工作物によって前庭・駐車場・中庭の３つに分節され、記念館までの透明性を意識して格子状の鋼製建具を通して連続している。特に、中也生誕碑を取り込んだ前庭のあり方は、この計画のみならず建築の町並みや道路に対する提案でもある。この部分は、建物の閉館時や夜間においても常に外部に対して自由に解放されており、記念館に直接訪れる人びと以外に対しても道空間として優しく積極的に関われるよう計画している。

中原中也記念館

No. m- 63　木の殿堂 ――安藤忠雄，　sk9407

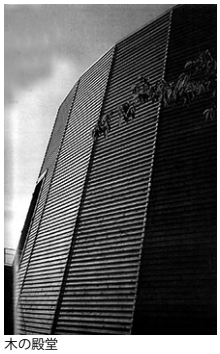
63-1

内部空間は、展示室を含めてほとんどの部分が半透明のガラスを介した自然光の中で展開されている。自然光のもつ時間制が中也の関連遺品や作品の背景となり、彼の詩の世界をより印象的に表現できればと思っている。

世界中の木にかかわる文化を集めた展示と、木の架構がつくる力強い建築空間によって、木の文化を五感で体験できる場所を豊かな緑深い環境の中につくることで、人間と地球自然環境との共存という植樹祭の理想を表現しようとした建築である。

63-2

戦後の荒廃した日本の国土に樹木を増やしていくことから始まった植樹祭の理念に基づいて、ここではまず既存の森林をできるだけ伐採しないことに努め、新しくつくる施設は森の中にすっぽりと収まり、環境の中に埋もれるようにしたいと考えた。



木の殿堂

No. m- 64　新美南吉記念館 ――新家良浩，　sk9407

64-1

・・・南吉文学には弱いものへの暖かいまなざしがあり、一元的な押しつけや決めつけでない、相反するもの、矛盾するものへの肯定的な態度がうかがえる。まさにこの要素が多元的解釈を可能にし、南吉文学を長く人々に愛され、静かに深く生き続けるものとしているのであろう。

・・・計画の当初からぼんやりとイメージしていたことは、この地で建築を行わないこと、建築が建築として存在しないこと。具体的には、要求されている主要な諸室を地下に沈め、地上は何事もなかったかのように、以前の静寂な田園風景を再生させることであった。・・・

私は、新美南吉記念館が、流れゆく情景、うつろいゆく地平線となることを望む。それは、ひとつの事象へと収束せず、多元的な解釈を可能とする南吉の童話・詩の世界でもあるからだ。

64-2

・・・短い期間の中で、南吉や環境を深く理解し解釈したうえで建築化することはたいへん難しいことだが、計画の当初からぼんやりとイメージしていたことは、この地で建築を行わないこと、建築が建築として存在しないこと。具体的には、要求されている主要な諸室を地下に沈め、地上は何事もなかったかのように、以前の静寂な田園風景を再生させることであった。・・・

新美南吉記念館

No. m- 65　植村直己冒険館 植村直己ふるさと公園モニュメント ――栗生明，　sk9411

盆地型のこうした風景に身を置いてみると、植村直己のおだやかで、ナイーブな性格と風景が重なってくる。特に、円山川の河原で牛と遊んだり、学校を抜け出して裏山で昼寝をした子供時代の挿話は、こうした但馬の自然が植村直己の自然に対する豊かな感性を育んだであろうことを確信させる。厳しい高山や極地の冒険においても、一貫して読み取れることは自然へのゆるぎない畏敬の念である。・・・「植村直己冒険館」の計画も、この自然との対話から始まった。

可能な限り植村直己の土地の記憶と原風景を保存すること。自然に対する畏敬の念をもちながらも、人間の存在、意志の力、尊厳を表現するものであること。以上を基本的立脚点として、自然環境、建築、展示を一体化させたトータル・ランドスケープを目指した。

建築の空間構成の方法としては、植村直己の偉業を建築によってシンボライズする方法をとった。・・・

・・・「距離への挑戦」が挙げられる。日本列島縦断 3,000km 徒歩行に始まり、アマゾン河イカダ下り、北極圏 12,000km 犬ゾリ単独行、北極点グリーンランド

植村直己冒険館 植村直己ふるさと公園モニュメント

単独行等、厳しい環境での長い距離への繰り返しのチャレンジが印象付けられる。構想はこの・・・目標をシンボリックに表現することで方向づけられた。
・・・
「冒険館」では、この距離への挑戦を建築の長さの表現に置き換えた。植村直己記念公園の入り口から斜めに一直線に引かれた通路は大地を切り裂くクレバスとして無限に伸びていく。スロープダウンするアプローチに始まるこの通路を軸に、イグルーをイメージする展示室、氷片をイメージするライブラリー、映像ホールなどが接続される。さらに通路は建築を突き抜け、池の上に張り出す眺望テラスまで伸びていく。氷壁をイメージしたガラスのトップライトは地上に現れ、地下通路への自然採光の機能を持つと同時に、植村直己の生涯と行動を刻印するメモリアルウォールとして機能させている。来訪者は、彼が生まれ育った豊かな自然風景の中で、冒険家の偉業を確認し、記憶する。そして彼の生涯に想いを馳せる。夜、闇の中に一条の光の帯として浮かび上がり、強靭な意志が消えることなく自然と向き合っていることを象徴している。ここでは、建築と展示と自然環境の一体化が意図されている。

No. m- 66　西堀榮三郎記念 " 探検の殿堂 " ――上田篤，　sk9501

66-1
建物は、鈴鹿の山並みを背負い前面に池を配しているので、探検家たちの船をイメージした。
66-2
さらに西堀氏の型破りな人生を現すように、東南に向かってイビツに膨らむ平面型を採用した。

西堀榮三郎記念 " 探検の殿堂 "

No. m- 67　中谷宇吉郎 雪の科学館
――平林繁／磯崎新アトリエ，　sk9502

67-1
敷地は中谷博士の生まれ故郷である片山津温泉の柴山潟湖畔公園にあり、柴山潟を一望し、右手に片山津の温泉街、そして潟越しには遠く白山連峰を望むことができる。加賀の風土、文化をくるめてひとつの建物に編成するために、この環境をいかに建物に取り込んでいくかが求められた。建物は六角錐の塔と基壇とで構成されている。アプローチとなる台形平面の前庭は、盛り土をして緩やかな勾配をもつ大地を築き、基壇上のテラス、エントランスへと導いている。前庭から見る建物は、六角錐の連鎖する塔を残して姿を消している。個々を訪れる人は瓦がしかれた芝生の前庭を昇り、ブリッジを渡り、まわりから一段高くなったテラスを歩き、徐々に変わる自然の光景を感じながら、すばらしい柴山潟と白山の風景を目にすることができる。
67-2
中谷博士の科学的探求は常に雪や氷など自然が相手であった。建物に使った素材も、木や土や草や石といった自然のものが大部分である。
67-3
建物に使った素材も､木や土や草や石といった自然のものが大部分である｡そして､この建物が自然と共にこの地に根づき、この地に生まれ育った中谷博士の眼底に焼きついていたはずの加賀の光景、柴山潟と白山の風景を見続けていくことを期待している .

中谷宇吉郎 雪の科学館

No. m- 68　STEP 中央工学校創立 85 周年記念館 ――林雅子，　sk9503

中央工学校の発展の跡をそのままに、この付近だけでも 11 ケ所に分散している校地と校舎をひとつにまとめる核をつくりたいという要求も切実で、その核は同時に構内の各教科の教師と生徒を横につなぐ学祭活動の拠点ともなり、・・・
敷地は南隣りの校舎から北の道路まで 3 段階に、計 12m の落差をもっていたい。この得意な校地に臨んで、まずこの施設を、落差の間を連絡する構内の道としても扱い、中央部に大階段を貫通させることとした。大階段によって、この斜面にばらばらに展開する校地と校舎をつなぐことができれば、それまで大きく迂回を余儀なくされていた上部校地への通学路を短縮することが可能となる。

STEP 中央工学校創立 85 周年記念館

No. m- 69　わらべ館 ――山本浩二，　sk9508

誰もが子どもの頃親しんだ童謡とおもちゃの博物館として、楽しく音楽的なおもちゃ箱のような建築にすることであった。
復元棟、新棟の展示棟、イベントホールの 3 つの建物それぞれがカラフルで遊び心に満ちた形をもってポケットパークをコの字型に囲んでいる。展示棟は赤いインド砂岩で仕上げたピアノの鍵盤風のファサードをもち、オーバル型のイベントホールは頭にシルクハットをかぶり、正面の壁面を飾るからくり時計は童謡で奏でながら「わらべ館」のシンボルとなっている。

わらべ館

No. m- 70　森鴎外記念館 ――宮本忠長，　sk9509

70-1

生家である森鴎外旧宅は、国指定の文化財として津和野町教育委員会の手で立派に保存・管理されている。地元の協力をいただき、記念館はこの旧宅に隣接した位置になった。したがって旧宅と記念館が一体となる空間がもっともふさわしいと思われた。
・・・
外構計画は、津和野の土塀に囲まれた旧宅と記念館を一体化させるため、中庭に双方の求心性を高めるアートのある空間を配し、植栽は鴎外の「花暦み」の中に綴られた植生を再現した。

70-2

鴎外の遺言書には「吾レ石見ノ人、森林太郎トシテ死セントス」とある。すべての官位、文壇での巨匠という地位をあえて捨て去り人生を閉じる人間森鴎外は、後世の人びとに偉大なる教えを残した。その心の響きを聴きながら、小高い山裾にある永明寺を訪ね、森厳として透明な大気を吸うかのような「石見人　森林太郎之墓」の前にひざまづく。やがて心の静まる内、記念館設計のイメージがわいてくる。原点は青野山、城山、津和野川、街のもつ風景、植生のすべてに渡って、森林太郎が 10 歳にして故郷を離れるときの様相を大切にしていくという〈記憶の中の風景〉の創成であった。
・・・
主役は津和野川の周辺と城山の風景である。ここでは建築はあくまで脇役。しかし極力自己主張を拒否しつつも、津和野土塀の構築、半透明のガラスに包まれたアプローチ空間の構成、さらにはそれらの素材の組合せ・ディテールに最大の注意を払って、施工者と十分協議を重ね、丁寧につくられた建築である。"

森鴎外記念館

No. m- 71　ある町医者の記念館――堀部安嗣，　sk9509

単に懐古的な郷愁に浸るだけのものでなく、また、あれこれ説明を加えられ頭で理解するだけのものでもなく、想像を限定しない、新しい視点を生み出す力強くおおらかなもの。建築的な言葉、色、ディティールを可能な限り排除、もしくは意識させず、展示されるものの骨格と存在を抽象的に浮き上がらせ、あたかも真っ白い夢のような世界で前原氏と彼の愛用した物たちに出会えるような、そんな空間がつくりたかった。

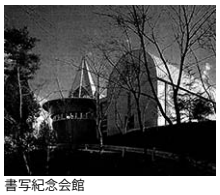
ある町医者の記念館

No. m- 72　書写紀念会館――東孝光，　sk9603

72-1

最初に敷地の丘に登ったとき、私の設計経験ではめずらしく、景観から建築をつくるアプローチの必然性を思った。・・・

姫路駅に降り立つと、大通りの真正面に姫路城の全景が小さな丘の上に見えている。両側の現代的なビルが並ぶ大通りの正面に、石垣と城がそびえたつ。その光景は一度見ると目に焼きついて忘れられない景観だ。兵庫県立の姫路工業大学書写キャンパスは、市街地から約 7km 北西の書写山の緩い裾野に広がっている。何度も市街地を通ってこのキャンパスを訪れるうちに、姫路市内にあちこちに小さな丘があり、そこに必ず何らかの党があるのに気がついて、「丘と塔」をこの建築のテーマにしてもよいかもしれないと、考えはじめた。


書写紀念会館

72-2

この建築は、新旧いずれの場合にも独立してその敷地を見下ろす小高い丘の上にあるだけでなく、逆に学内のどの位置からも杉林の中に見上げる位置にあり、それればかりか、キャンパスに近づく幹線道路の真正面に見える位置にあり、新しいキャンパスのひとつのシンボルとなる可能性が見てとれた。そこで丘の上の塔というコンセプトが、俄然、二重三重の意味をもちはじめたのであった。

No. m- 73　からくり記念館――内井昭蔵，　sk9606

73-1

敷地は金沢港突堤の最先端に属している。・・・敷地候補地はほかにもっと広く平坦な場所があったのだが、現場を見て私はあえて狭小で波しぶきのかかるような場所の方を選んだ。その理由は大野弁吉や銭屋五兵衛の心意気・・・を表すには厳しい条件の場所のほうがよりふさわしいと考えたからである。

からくり記念館

73-2

敷地は金沢港突堤の最先端に属している。・・・敷地候補地はほかにもっと広く平坦な場所があったのだが、現場を見て私はあえて狭小で波しぶきのかかるような場所の方を選んだ。その理由は大野弁吉や銭屋五兵衛の・・・その時代精神を表すには厳しい条件の場所のほうがよりふさわしいと考えたからである。

73-3

基本構想を立案するに当たり、まず建築は本来「からくり」的なものであり、からくり館であればその点をなお一層明確に表現し、現代の「からくり」を象徴するような建築としたいと考えた。

・・・

私は千石船といったメタファ、からくしといった構造、木造の新しい表現、などの多くのモチーフを従来の手書きによる二次元的なアプローチではなく、三次元で考える設計方法でまとめ上げてみたいと考えた。それは建築をスタティックな構造でとらえるのではなく、ダイナミックな「働き」としての構造として表現したかったということでもある。台風とか波や渦巻といった自然現象に見られる動的な構造はこれからの建築のあり方を暗示すると思われる。

73-4

また、大野弁吉を支援した銭屋五兵衛は晩年埋立地造成工事の際、事件に巻き込まれ不幸な週末を遂げたが、彼があやつった千石船に彼の夢と理想が込められて

いたと考え、これと弁吉の業績と合わせて表現してみたいと思った。
・・・
私は千石船といったメタファ、からくしといった構造、木造の新しい表現、などの多くのモチーフを従来の手書きによる二次元的なアプローチではなく、三次元で考える設計方法でまとめ上げてみたいと考えた。それは建築をスタティックな構造でとらえるのではなく、ダイナミックな「働き」としての構造として表現したかったということでもある。台風とか波や渦巻といった自然現象に見られる動的な構造はこれからの建築のあり方を暗示すると思われる。

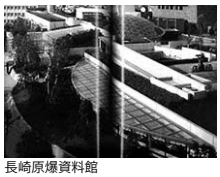
73-5

千石船は木造であり、潮風には何といっても木が一番強いし、木造の伝統をつなくには木による新しい表現技術を開発することが必要という考え方もあった。
博物館を木造でつくること自体、防災安全上の障害があり、これを乗り切れるものか自信はなかったが、中西知事の励ましの言葉もあり、木の博物館を目指すこととした。

No. m- 74　長崎原爆資料館 ――安東直／久米設計，　sk9608

74-1

これは、原爆が落ちたという事実を風化させずに後世に伝えていくための施設である。ここを訪れるのは主に修学旅行でやってくる子供たちだ。彼らは、展示品のもつ圧倒的なリアリティの前に強烈なショックを受け、戦争という行為の結果が心に深く刻み込まれると同時に、今、とても冷え話であるということに気づくのである。
そことをきちんと伝えるために、この資料館のプログラムでは、展示へ至るプロローグとエピローグの " 時間 " の過ごさせ方がとても重要な意味をもつと考えた。そこではおそらく、建築そのものにょり、建築によって引き起こされるさまざまな現象が大事で、建築はその現象の発生を誘発する装置、あるいは背景としての役割に徹するということである。そのほうが、この展示のもつメッセージがより鮮明に伝わると考えた。


長崎原爆資料館

74-2

展示のもつ社会性を拡張するために、私たちが提案し付加したプログラムは、この展示室を " 通り抜けていける展示室 " とすることだった。それは、目的をもって終着駅となる従来の博物館のような、閉鎖的で、密室的に構えたアーキタイプとは違う、開かれた、入りやすいさり気ない建築とすることである。

No. m- 75　多胡碑記念館 ――木村優，　sk9609

石という緻密で永遠性をもった物質に文字を刻み記録するということは、普遍1300 年の時を経て多胡碑の文字は風化しエッジを失い陰影を弱めた。しかしこのことのために表面性が弱まって物質と記号が一体となった美しさが生み出されている。
・・・建築の空間は物質によって形づくられている以上、その物質のありようをよく吟味することで空間の質をつくり上げることができる。床や壁などの物質の表面が空間に対して閉鎖的にならず、見るものに開かれた静かな存在感をつくり出す。いい換えれば、材料の表面にある直接的な物質感に、荒したり研いだりラフにしたりといった行為を加えて表面的な表情を抑制し、物質自身の実在感に還元するようにする。
それは多胡碑の表面が風化し弱められ、物質と記号が一体となった独特の美しさに近づくことである。

多胡碑記念館

No. m- 76　文京学園島田依史子記念館

――時園國男／村野・森建築事務所，　sk9610

都心の大学キャンパスとして非常に限られたスペースであるので、新しい建物が全体の環境を圧迫しないよう、また周囲の建物にうまく融合することが設計上の主眼であった。そこで大部分の容積を占める仁愛ホールを半地下にして、その屋上広場からアプローチできるよう周囲にゼミナール室、クラブ室、図書館入口などを配した。そして広場が既存の校庭と結ばれた結果、キャンパス全体が一体空間として機能することができ、ほぼ当初の目的を果たすことができた。

文京学園島田依史子記念館

No. m- 77　長野市オリンピック記念アリーナ エムウェーブ

――小野威／久米設計，　sk9701

このアリーナの設計にあたり、今までのドーム建築の既成概念を打破し、オリンピックという世界的イベントにおいて、長野を世界に印象づけるユニークな建築であるべき、また長野という地域性を生かし、長野らしさを表現し、人と地球にやさしい建築であるべきだと考えた。これらのイメージから信州の山並みを表現し、地元の素材を利用して吊り橋のような軽やかな構造的架構体の検討の結果、善光寺を有する長野にふさわしい連子格子をイメージした、信州カラマツ材の集成材による半剛性吊屋根構造とした。

長野市オリンピック記念アリーナ
エムウェーブ

No. m- 78　一茶ゆかりの里――岡田新一，　sk9703

高山村の家並みと自然のもつ佇まいは、一茶の頃より連綿と続き今日に脈絡しているものであろう。高山村から善光寺平を振り返ると、淡い霧に煙る風景が茫洋としている。

一茶は 65 歳の生涯を終えるまで、北は東北から、西は四国、九州まで、ほとんど全国を横断するような足跡を残している。俳諧指導の行脚の旅、そして、弟との遺産相続争い、また 52 歳を過ぎてから世継のないことを憂い妻帯して子づくりに励むというような、世俗的な粘性の濃い生活を送っている。しかも、妻が早逝し、子が育たぬことにもめげず妻帯を繰り返すような人生への執着を見せる生活から一茶の人間性が伝わってくる。

建築のデザインは土地に固有の地霊、そして、そこに生活する人びとの人霊（ここでは一茶その人となるが）を併せ、そして今、高山村が遭遇する現代をも表現するものであなければならないと考える。

一茶記念館は旧家に残された茅葺の離れ家と共に「一茶ゆかりの里」を構成する。新しい建物が単に伝統的な和風建物では地霊、人霊、現代社会などを併せ表現することにならない。そこで茅葺屋根と対になる館の屋根に特徴をもたせることを考えた。

一茶ゆかりの里

No. m- 79　丈山苑――岩崎泰久，　sk9705

ここでは、丈山作による庭園の分析を通じ、彼の空間認識や身体感覚を地形的な文脈に再現することを試みた。すなわち無性格な既存施設――近隣公園と老人ホーム跡地――で散逸していた地形の特質に対し、歴史的題材による再編集を行い、イメージを統合する作業として設計行為を位置づけることにした。

・・・

この建築を中心に、丈山の代表作である三庭園（詩仙堂、酬恩庵、渉西園）を参照した庭を方位関係を守りながら配すると共に、西側の谷筋には木橋を架け、前述の三庭園を加えた異なる 4 つの風景が透明な内部空間で呼応するように構成している。

丈山苑

No. m- 80　安曇野ちひろ美術館 ――内藤廣，　sk9706

敷地をはじめて見たのは初秋だった。公園に予定されているところは、道路から小さな川に向かって下る一面の棚田だった。稲の穂が黄金色にたなびいていた。西側には、近景から遠景まで日本アルプスの山々が背景としてあり、反対の側には、今の日本ではなかなか望めないようなよくできたのどかな景色が広がっていた。典型的な安曇野の豊かな田園風景だった。最初に敷地を訪れたときの率直な印象は、世の中の喧騒からは隔絶されたかのようなこの風景を切り裂いてよいものか、という思いだった。

「安曇野ちひろ美術館」は、切妻の連続屋根のシルエットをもっている。敷地との関係から、この形態がいちばん建物が低く見え、風景に対する座りがよいことから決定した。

安曇野ちひろ美術館

No. m- 81　山口大学医学部創立 50 周年記念会館 ――岸和郎，　sk9707

今回の計画でもっとも重要だと考えていたのは「木田池」庭園を新しく再生させることであり、それは 1968 年につくられた日本庭園にほぼ 30 年後、1997 年の建築を重ね合わせることであると同時に、庭園には本来必要な存在であるはずの建築――しかし 30 年間欠け続けていた建築――をつけ加えることでもあると考えていた。それは建築を設計するというよりはむしろ、庭をつくることに近かったのではないか、と今想い返している。

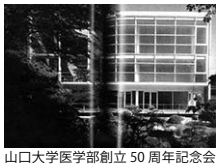
建築が欠けたままで時を過ごしてきた池泉式の庭園にあるべき建築をつけ加え、池泉回遊式の庭園として完結させること。それも伝統的な手法ではなく、1997 年のやり方で、というのが今回の主題であり、20 世紀の建築の方法、近代建築がわれわれに残した手法を意識的に採用しながら、日本庭園を再生することを考えた。

・・・ここでは庭園の中の建築であることから、まず 2 × 3 のドミノを庭園の中に置いた。それに壁を東西に建てることでシトロアン的様相を重ね、方向性のないドミノの空間に南北の方向性をもたせる。同時にドミノに手を加え、南方面へのキャンティレバーで 2 階から上を飛び出させると同時に 1 階をピロティ状の空間とすることで、さらに南北の方向性を強調する。その後東西の壁に穴をあけることで今度は逆に南北の方向性が強くなりすぎないよう調整する。こうして庭の空間と建築の内部空間が相互に関係をもつための基本的な構造をまずつくった。

南側の立面は建築と庭園との関係、内部空間と外部空間の関係をコントロールするための装置のようなものとして考えている。南側の庭園方向へ飛び出した 2・3 階部分は、むしろ半透明なガラスやルーバーで閉じることで、形態としては庭との関係を強めるものの、素材感がそれを逆転させることで内外空間の関係を微妙に調停する。また逆に 1 階をガラス・ピロティとすることで、日本庭園の座式・定視式の視点をこの建築に導入し、日本庭園と書院の関係のような空間とすることを考えている。

・・・日本庭園、池泉式の庭園を回遊式の庭園として再生すること、そしてその考え方を建築の内部空間の構成まで持ち込みたい、と思ったとき、その〈建築的プロムナード〉という主題――内部空間の外部化と展開するシーンの連鎖――が浮上してきた。

庭園には回遊動線として木製のデッキを設ける。・・・デッキはさながら自然の地形であるかのような池や築山のレベルとは関係なく設定され、池を橋のように越え、築山を切り崩す。



山口大学医学部創立 50 周年記念会館

No. m- 82　平山郁夫美術館 ――今里隆，　sk9709

82-1

・・・平山芸術の原点を表現する美術館というコンセプトのもと、第一に重視したのは、屋根の形および全体のプロポーションと周囲の景観との融和である。切妻の大屋根に柔らかな反りを加え大型の日本瓦をのせ、下屋根は黒銅板で構成し、両屋根のバランスにより安定感あるプロポーションをつくり出した。

平山郁夫美術館

82-2

日本画家平山郁夫先生の自然観、芸術観を育んだ故郷瀬戸田町に建つ・・・第一に重視したのは、屋根の形および全体のプロポーションと周囲の景観との融和である。切妻の大屋根に柔らかな反りを加え大型の日本瓦をのせ、下屋根は黒銅板で構成し、両屋根のバランスにより安定感あるプロポーションをつくり出した。穏やかな青い海、緩やかな緑の山並み、優しい陽光といった瀬戸内の自然に溶け込む落ち着きのある作品となった。

No. m- 83　天竜市立秋野不矩美術館 ――藤森照信，　sk9806

佐賀町エキジビット・スペースで開かれた展示会「秋野不矩―インド」を見に行き、衝撃を受けた。

ふたつ受けた。ひとつはもちろん絵の内容で、こんなに湿り気のない日本画があるとは思いよらなかった。日本画が花鳥をテーマとするのは、温帯モンスーンの高湿度のおかげで花鳥が美しく育つからだが、そういう自然条件にまるごと寄りかかっているふつうの日本画につきものの湿り気がない。不矩さんは、乾いたインドの大地をテーマにして、湿り気のもたらす汚れ、のない絵を描く。「いきものがもつよごれを、心の目のフィルターで濾しに濾し」たのが秋野さんの絵だと司馬遼太郎はいった。

このような絵はどんな空間に展示されるのがふさわしいのか。

もうひとつの衝撃は、展示のあまりの素気なさだった。創画会の創立メンバーにして文化功労者、日本画壇の長老女流画家、といった世間体をまるで気にせぬ展示をしている。まず額がない。額のない絵を、その辺で買っていたような金物で合板ペンキ仕上げの壁面に直付けしてしまう。床はコンクリートのタタキだったと思う。ガランとした展示室にただ絵がかかっている。素気ない白い壁に粒の大きい岩絵の具がサッサッサッと勢いよく引かれている。そういう印象だった。

佐賀町エキジビット・スペースの仮説的なつくりによって生み出されたこのような素気ない展示空間を、本格的建築によってどうつくればよいのか。

・・・

このふたつの展示室の内装をどう仕上げたら、「粒の大きい岩絵の具がサッサッサッと勢いよく引かれている」様を一番よく見せることができるのか。白しか無い。それもツルピカの白じゃなくて吸光性の白、肌ざわりのある白、自然素材の白。この条件をみたす素材は漆喰と白大理石のふたつ。

で、天井と壁には漆喰を塗り、床には白大理石を敷くことにした。

天竜市立秋野不矩美術館

No. m- 84　上林暁文学記念館 ――團紀彦，　sk9806

記念館を建てることにもし意味があるとすれば、それは、多くの人びとが参画する建築行為そのものがすでにメモリアルという言葉にふさわしい行事となっていることではないかと考えた。

・・・代表作のひとつに「ブロンズの首」があるが、これは、彫刻家久保孝雄氏による自身の頭像がつくられたときのことが書かれた作品である。「上林さん」と題するこの頭像は、具象彫刻としても名高い作品で、これを、建築計画の中のひとつの焦点に据えた。もうひとつの焦点としてエントランスホールの外部正面に位置づけたのは、彫刻家大久保英治による流木を素材とした「白い屋形船Ⅰ」である。この作品は死ぬときに夢の中に白い屋形船が現れて、それに乗ると死んで

上林暁文学記念館

しまうという土佐の古い伝承に基づいた上林の代表作をテーマとして制作されたものである。・・・
テーマとなる文学と文学記念館の建築の関係は、中身とその容器のような関係にあると考えることができる。作家の生家を文学館にする例などは、その中身と容器の関係を生前の因果関係に求めた例であろう。むしろ今回の場合には、「白い容器」を準備して、作家の精神が抽象的に浮かび上がるようにと考えた。

No. m- 85　早稲田大学 會津八一記念博物館 ——古谷誠章，　sk9807

この博物館を、いわば「ものを読むための図書館」にしようというのが今回の基本的な構想だった。かつて歴代の多くの学生たちがここで本を読み、過去の歴史に触れたように、ここを訪れ時間をかけて蒐集されたものに触れ、これを集めた先人の意志にも触れられるような場所をつくりたかったのである。アルミハニカム入りの光る展示台は、かつての読書机の代わりでもあり、各展示ケースに組み込まれたスツールは、来館者が自由に引き出して腰をおろすことのできる閲覧用の椅子である。その上部に開けられた読書灯兼用のスリットには、展示品の詳細な情報冊子や図録などが差し込まれる。疲れた足を休めながら資料を読み、心ゆくまでここで時間を過ごしてもらうための小さな仕掛けである。

早稲田大学 會津八一記念博物館

No. m- 86　茨城県天心記念五浦美術館 ——内藤廣，　sk9808

86-1
岡倉天心ゆかりの五浦は、軽症の地であり、史跡でもある。どんなに配慮を尽くしても、建物を建てることは、景観の中に何かをつけ加えることになる。海を望む崖の上のさほど広くない敷地に、どのように建物を置くか、が当初からの課題だった。五浦でも数少ない絶景と齟齬なく建物を建てたかった。その景観の潜在的な力が、建物によって補強され、強化されるようなあり方を模索した。
建物が崖の上に突出しないよう、地面の起伏を調整し、樹木の配置を練り上げた。建物を低く構え、分節化し、あえて全体を把握しにくいようにした。
86-2
大きい中庭に黒御影の大きな水盤を設け、その中央からややはずれたところに、水が盛り上がるように湧き出るところをつくった。この湧水と記念室正面に据えられた天心像のレリーフは、中庭から天心記念室を通って海へと向かう軸線上にあり、これらの構成が天心の精神を象徴する隠れたイコンになっている。
86-3
小さい中庭は、インド産の白い石英岩で覆い、中央に白大理石の小さな水盤を設けた。こちらは､天心晩年のプラトニックな恋人であったインドの詩人バネルジーを隠喩する中庭とした。

茨城県天心記念五浦美術館

No. m- 87　松本清張記念館 ——宮本忠長，　sk9810

87-1
清張先生の全業績と、その生涯を記録・紹介する展示空間・・・
87-2
・・・形には見えない、先生の頭脳である仕事場・取り組まれる姿勢・情熱・勇気など「魂」にふれる空間・・・

松本清張記念館

No. m- 88　織田廣喜ミュージアム ――安藤忠雄，　sk9811

内外ともコンクリート打放しで仕上げられた一層の建物の展示室への採光は天井に設けた 1/6 の円弧状のトップライトからのみである。・・・

・・・訪れた人びとがこのがかが描いてきた状態と同じ自然光のもとで絵を鑑賞する体験ができれば、より作品世界に近づくことができるかもしれない。絵は、作者が筆を置いた時点で連結され、封印され、崇められるものではなく、自然の中で人びとと共に生きて、勇気や感動を与えてくれる身近な友人であるということを未来を担うこどもたちが感じ取り、真に芸術と共にある豊かな時代を築いてくれることを願う。閉館は日没である。

織田廣喜ミュージアム

No. m- 89　セキグチ・ドールガーデン
――アーキテクトファイブ，　sk9902

計画当初われわれに求められたのは「人形のもつやさしさ、あたたかさを感じ取れる空間」「自然をできるだけ残し、林の中にたたずむ建物」という現代人にとっての癒しの空間づくりであるとわれわれはとらえた。人形の美術館というと、できるだけ自然光をいれず、暗くて重々しいケースの中に人形を閉じこめてしまうものが多いが、この美術館では今までのそういった概念を壊し、自然の風景を積極的に内部に取り込んで、緑と自然光の中で人形と触れあることができることを念頭に計画を進めた。

・・・この建物の主な要素である縦リブの列柱が夏は縦ルーバーとしてはたらき、冬はリブの間から長い光の帯が建物内に導かれ、一日の時の移り変わりをリブからの影が伝えてくれる。

セキグチ・ドールガーデン

No. m- 90　昭和館 ――松里征男／菊竹請訓建築設計事務所，　sk9905

90-1

平和追求へのメッセージ……生命の尊さをイメージさせる有機的な形態

90-2

後世に伝える耐久保存建築のプロトタイプ……メンテナンスフリーの材料、外壁パネルの組替えが可能な工法の採用。

・・・外壁は、貴重な資料・情報の保存・収集・陳列というような役割を果たす施設であることから、耐久性のあるチタン材を採用し、・・・

昭和館

No. m- 91　鹿児島カテドラル ザビエル記念聖堂
――坂田誠造／阪倉建築研究所，　sk9911

91-1

建て替え前の聖堂は、太平洋戦争の空襲で破壊した明治期の石造聖堂の跡につくられた、木造のバシリカ式建築であった。・・・ザビエル渡航 400 年を記念した公園が整備され、その正面に急勾配の切妻屋根の聖堂が 50 年親しまれた景観をつくって建っていた。・・・これまで存続した景観を継承して、なお現代の新しい聖堂建築を考えようと、正面のシルエットを継承し、側面の屋根形状に船（ザビエルの渡航からの連想）をイメージとした、一見単純、実は複雑な形態の建築を提案した。

91-2

・・・側面の屋根形状に船（ザビエルの渡航からの連想）をイメージとした、一見単純、実は複雑な形態の建築を提案した。

91-3

コンペ後の実施設計では、施工期間や工事費予算などの制約から、宗教的象徴性をもっぱら色彩（材料としてのステンドグラス）中心に考えることにした。「赤・

鹿児島カテドラル ザビエル記念聖堂

青」２色の構成である。日本のキリスト教殉職者の犠牲、キリストの犠牲・贖罪、宣教の情熱、ザビエルの勇気と業績を象徴し、そして薩摩ガラスの色でもある「赤」を会衆席背後に、正面祭壇側には、敬虔な祈りを象徴する色、大航海時代の色である「青」を配した。この「赤」と「青」の配色は、私の独断だが、ザビエルが到着した大航海時代の日本とヨーロッパ文化の出会いから、日本でも大胆にデザインに取り上げられるようになる歴史的「新配色」と見る意味も込めている。

No. m- 92　牧野富太郎記念館 ――内藤廣，　sk0001

92-1

ここで試みたのは、孤立した建築の存在を、環境や景観といったより大きな枠組みに積極的に還元していくことだった。自然や地形のダイナミズムを抱え込もうとした結果、形態や空間に動きを胚胎することになった。

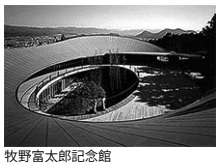
・・・

敷地は、現在の牧野植物園に隣接する高知市郊外の五台山の山頂近くの尾根沿いの緩やかな斜面に位置する。敷地はふたつに分割されており、なおかつ 5,500㎡近くの計画に比していかにもゆとりがなかった。どうすれば建物を五台山の尾根に目障りなくおけるか、まず考えたことだ。当然、景観の様相を大きく変えてしまうような大規模な造成は好ましくない。・・・

・・・「茨城県天心記念五浦美術館」、「うしぶか海彩館」、「安曇野ちひろ美術館」で試みた切妻の連続屋根となる。

しかし、いくらスタディを重ねても、このやり方では建物がこの敷地の環境や景観と一体にはならない・・・

・・・変化のある平面構成を分節的な方法でまとめ上げるのではなく、一体の物として覆う、という考えが浮かんだ。フレキシブルな架構のシステムを地形に沿わせていく。有機的で自由度の高いシェルターで覆っていくことができれば、さまざまな問題が解決する。


牧野富太郎記念館

92-2

・・・どうすれば建物を五台山の尾根に目障りなくおけるか、まず考えたことだ。当然、景観の様相を大きく変えてしまうような大規模な造成は好ましくない。また、自然をこよなく愛した博士の遺志にも反することになる。

・・・「茨城県天心記念五浦美術館」、「うしぶか海彩館」、「安曇野ちひろ美術館」で試みた切妻の連続屋根となる。

しかし、いくらスタディを重ねても、このやり方では建物がこの敷地の環境や景観と一体にはならない・・・

・・・変化のある平面構成を分節的な方法でまとめ上げるのではなく、一体の物として覆う、という考えが浮かんだ。フレキシブルな架構のシステムを地形に沿わせていく。有機的で自由度の高いシェルターで覆っていくことができれば、さまざまな問題が解決する。

No. m- 93　沖縄県平和祈念資料館 ――福村俊治，　sk0005

設計のコンセプトは、沖縄のかつての伝統文化を継承しながら「沖縄の将来の夢や平和を希求する心をかたちにすること」であった。

・・・沖縄戦で亡くなった 23 万余の人びとの名前が刻まれた「平和の礎」のすぐ横に立つこの平和祈念資料館は、沖縄にとって大きな重責を負う施設だ。もはや設計者個人のデザイン的な自己主張は許されないと考えた。そこで、「平和の火」を中心とし、「平和の礎」を取り囲みながら海に開くように同心円状に建物を配置し、かつての沖縄の伝統的な集落を思わせるような、数多くの赤瓦屋根をのせた。色・形ともインパクトの強いこの赤瓦屋根は沖縄の気候風土の中では、周辺に溶け込み、地元の誰もが郷愁を感じる「ウチナーの様相」であり、ここでは主張しがちな建物の個性を消すことに成功した。

沖縄県平和祈念資料館

No. m- 94　軽井沢オリンピック記念館 ――三輪正弘，　sk0005

94-1

1998 年のカーリング予選での日米決戦が生々しく、また 1964 年の総合馬術競技も軽井沢にとって大切な記憶だ。長野オリンピックの成果もダイジェストしたいし、さらには特別の感銘を与えてくれたパラリンピックの意味も伝えたい……。そこで、限られたエリアの有効利用のためとバリアフリーの観点から、1/12 勾配のスロープを積極的な誘導路とし、内壁展示面に沿って、上がる人びとは長野オリンピックの印象をとらえる工夫をした。

メインテーマとなるカーリングの場面は、床材に決勝ガラス盤を敷き詰めて氷面の質感を出し、実物大のハウスを敷いて、日米決戦の名場面のストーンの配列を固定した。天井中央から吊ったスクリーンに双方から投影する映像が館内のどこからでも見える位置づけにした。

94-2

隣接の植物園に配慮して、高さを抑えると共に、既存施設と違和感のない形態をとりながら、記念的施設であることから、外観色を既存とは際立つ色合いでまとめ、ふたつの聖火台と一体感のある配置を構成した。

軽井沢オリンピック記念館

No. m- 95　東京大学弥生講堂 ――香山壽夫，　sk0007

敷地は、本郷通りに面した、農学部正門を入ってすぐ右側の木立の中である。・・・自然を生かし、むしろ敷地をより美しくする存在でもあり得ることを示す大切な機会が与えられたと思った。

・・・私の用いたコンセプトも、したがって、単純明快なものでなければならなかった。それを一言でいえば、木立と重なり合い、響き合う建物にするということ、これにつきる。そのために、木の角柱を規則的に林立させ、それを透明なガラスの皮膜で包んだ。

東京大学弥生講堂

No. m- 96　馬頭町広重美術館 ――隈研吾，　sk0011

地元産の八溝杉を用いた 120mm ピッチのルーバーで屋根から壁まですべてが覆われ、しかも皮膜の性能は内部の要求によってさまざまである。デリケートな環境が要求される展示室においては、ルーバー下部に金属板が葺かれ、開放性の高い空間では開放度に応じ、アウタールーバー＋波板ガラス＋インナールーバー、アウタールーバー＋ストライプ状のトップライト＋インナールーバーなどの構成のフィルターがセレクトされ、フィルターによって透過された粒子状のさまざまな光が室内を満たしている。

ルーバーがつくる粒子感は広重の浮世絵に通じると感じた。北斎のような強い色彩と形態を用いることなく、細い線と小さな点を用いて、広重は自然の繊細にして曖昧な表情を映し出した。その方法を建築という道具を用いて、木材という具体的な物質を用いて追いかけていきたいと願ったのである。

馬頭町広重美術館

No. m- 97　草津片岡鶴太郎美術館 ――泉幸甫，　sk0103

観光地において町並みのデザインはきわめて大事なはずだが、町の景観はコントロールが難しいのか雑然としている。老舗の木造旅館の横には高層のホテル、それに安っぽい土産物屋といった具合である。町自体がどうデザインしてよいのかわからない状態なのではないか、そんな中で、湯の町にふさわしく、すっと町並みに溶け込める新しいデザインのあり方を考えた。

・・・外部は名湯の町並みにあった土壁、漆喰、板張りで仕上げてある。

草津片岡鶴太郎美術館

No. m- 98　神戸大学百年記念館 ――狩野忠正，　sk0104

建築の重要な主題はトップライトとバルコニーと大階段のスリットを透す自然光であり、玄関ホールや部屋を通り抜ける風である。それらは自然を内包し、自然と同調するものでなければならない。内包とは、明快なる自然との応答であり、時間との応答にほかならない。そこには人間の手業からは離れられないものが深くかかわっている。外観を左官仕上げ、ホール内観を木製仕上げ、天井を布地仕上げ、バルコニー床を木製仕上げと、ここで比較的多くの職人技に頼ったのは、手業の魅力に強くひかれたからである。

神戸大学百年記念館

No. m- 99　長谷木記念幹 ――内井昭蔵，　sk0204

現代人のは木材のもつ「もの」としての力や価値を忘れてしまっている。そんなときにも木材を扱ってきた長谷川さんはいつも苦々しく思っていたいに違いない。木材は生命力を切り捨てられもっぱら機能性にのみが尊重されてきたのだ。・・・・・・これは長谷川さんがつくった検知 kder ある。私は長谷川さんの心を具現化するお手伝いをしたにすぎない。
長谷川さんも「もの」にこだわる人だ。「もの」にこだわらなければ建築は d けいない。こだわることとは、無尽蔵にお金を使うことではない。材質を大切にして、その材料が望む形態やディテールをつくることだと思う。
記念幹は 8 角形の中心に 12m の巨木を据え、それを保護するように塔を立ち上げた。床にもすばらしい木材を三重に張った。ウェスターン・レッドシーター、イエローシーダー、その上にバーオークを置いた。さらに基礎には木炭を埋め、調湿防虫に配慮した。

長谷木記念幹

No. m- 100　相模女子大学 100 周年記念館 マーガレットホール
――淺石優／日本設計，　sk0204

相模女子大学のキャンパスには吉武研究室が手がけた 1 号館、北欧建築を彷彿とさせる 3・4 号館をはじめとして、香山壽夫氏が手がけた 7 号館、図書館、10 号館など、建築家の個性がそれぞれ適度に表現されながら、運動場の三方を取り囲んで建ち並んでいる。過去 40 年間に都市が生成されるように構築され育まれてきたこれらの建築群が、同じく大きく育ったサクラやイチョウ並木との調和を保ちながらキャンパスの景観を形成している。マーガレットホールの敷地はこの運動場南側のゲートを入ったすぐの左側の場所であるが、相模大野駅から至近のところにあるとは思えないようなクロマツを主体とした林になっている。そこで北側の建築群とは雰囲気を異にした、林の中に控えめにたたずむ内部空間と外部空間の視覚的関係性のあり方を重視した建築とした。
・・・カフェテリアとティーラウンジの内部空間はクロマツ・モミジ・サクラ・ウメなどたような植物に取り囲まれ、最上階のガーデンホールは屋上庭園の緑を介してこれら周辺に広がる林と資格的につながっている。
・・・約 8000㎡の敷地に緩やかな起伏を重ねることによって外部空間の奥行感と透明感を出し、敷地中央にはゆったりとした起伏の芝生の広がりをつくることで、グラウンドレベルと 2 階フロアの視覚的な親和性を高めている。

相模女子大学 100 周年記念館 マーガレットホール

No. m- 101　井之頭学園 70 周年記念館
――赤坂喜顕／竹中工務店，　sk0206

この構造形式は、大空間をもつ地下体育館では力強いコンクリート打放し仕上げの壁柱と梁からなる門型フレームのゴシック的な整列によって、“体”の力動感と“知”の秩序感の直接的な表現を意図している。
地上の教室では、この構造的な柱をイメージ的に細かく水平方向に連鎖させた縦ストライプ状のコンクリート壁のダブルスキンの繰り返しによって、無限に伸縮していく“知”と“体”の総合的イメージを東側ファサードに表しながら、その優しいヒューマンスケールの波状効果により周辺の町並みとの視覚的調和を生み出している。
こうして「知・得・体の調和のとれた全人教育」を目指すこの学校の教育理念を建築的に可能な限り表現しようと試みた。

井之頭学園 70 周年記念館

No. m- 102　司馬遼太郎記念館――安藤忠雄，　sk0207

102-1
「司馬遼太郎記念館」では、司馬遼太郎という、20 世紀の日本の誇るべき作家も存在自体におおいに触発された。具体的なイメージの源泉は、記念館に隣接してある作家自邸の書架の光景である。そこには、司馬さんが原稿執筆のために集められたという膨大な資料文献が所狭しと並べられていた。それは作家が生涯を通して、背負ってきた本で囲まれた空間であった。
私は、この建築を単に個人の資料文献を保存するだけの資料館ではない。作家司馬遼太郎の心を、来館者が少しでも感じ、共有できるような場所にしようと考えた。司馬さんが生前に考え、執筆活動を続けた創造空間を、建築として表すことを主題とした。
・・・今回新たに計画した新館の中心となるのが「司馬遼太郎・もうひとつの書斎」と称する展示室だ。天井高 11m に及ぶ壁面のすべてを書架で覆い、そこに蔵書から自著本に至る司馬さんの〈本〉を収蔵している。
102-2
ステンドグラスを構成するガラスは、1 枚 1 枚すべて大きさと表情が異なる。その不揃いなガラスは司馬さんが信じ続けた人間ひとりひとりの異なった人格と存在感の象徴であり、それらを通して差し込むかすかな光は、司馬さんの夢と希望の象徴である。この光のもとで手に取り、ページをめくる司馬さんの遺した〈本〉の向こうに、人びとが作家の創造世界を垣間見ることができればと、そう期待して計画を進めていった。

司馬遼太郎記念館

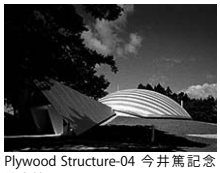
No. m- 103　雲仙岳災害記念館 がまだすドーム
――林年男／久米設計，　sk0209

103-1
6ha の敷地の大半を、周辺に残置させていた溶岩と土砂によって最高 5m まで盛り上げて起伏のある地形をつくり、有明海と雲仙岳への眺望を開き、建物と距離・スケール感を共有することで、固有の関係性をこの地につくることが大きなテーマであった。記念館は周辺に点在する被災地を結ぶ道標のように、この再生の丘の頂部として大地の中に沈み、象嵌されるような構成とした。
103-2
新たな森の再生へ向けて、やがて自然の色彩を濃くしていくこの丘に対して、記念館はきわめて人工的なステンレスの薄い皮膜を纏っている。これは火山の歴史を重ねてきた大地と、建物のもつ仮設性を対比させることで、改めて尊厳としての自然（雲仙岳）が浮き彫りにされるであろうと思ったからである。

雲仙岳災害記念館 がまだすドーム

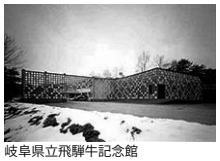
No. m- 104　Plywood Structure-04 今井篤記念体育館
——坂茂，　sk0211

体育館の平面は、敷地周囲の建物に対し新たな対立する軸を発生させないため、ちょうどバスケットボールコートが収まるベルニーニの楕円形とし、付属諸施設をその周りに配置した。


Plywood Structure-04 今井篤記念体育館

No. m- 105　岐阜県立飛騨牛記念館 ——北川原温，　sk0302

細切れの斜材の形状がエレベーションの表情を決定する。今回は周辺環境のイメージに合わせて、細切れの斜材の両側に花弁形のパネルを取りつけた。


岐阜県立飛騨牛記念館

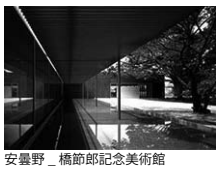
No. m- 106　安曇野 _ 橋節郎記念美術館 ——宮崎浩，　sk0309

106-1

館が位置する穂高町一帯は清純な湧水と雄大な北アルプスで名高い安曇野の風景が広がっている。山並み、古墳、星座などを主題とした作品を多くつくり続けている作家にとっての原風景でもある。

敷地内には、松の古木をはじめとするさまざまな樹木と共に、氏の生家である江戸中期の創建とされる茅葺き屋根の主屋やいくつかの土蔵が群として現存しており、今回の計画では庭を含めた小民家群を美術館施設として再生し、展示室、収蔵庫などの機能をもつ新設館とどのように関係づけていくかが大きなテーマであった。

われわれは、新設館を古民家群のもつ伝統的な形態とは同化させずに、逆Ｔ字形の平面をもった単純で抽象的なフォルムで表し、一定の距離を保ちながら水庭や石庭をはさんで新旧が互いに向き合うよう配置した。新たに生み出した囲われた外部空間に面して、新設館の中でもギャラリーやメディアフォーラムといった来館者に対して自由にひらかれた用途のスペースを配して、芸術の鑑賞と共に内部からも古民家群や静閑な安曇野の風景と出会えるようにしている。


安曇野 _ 橋節郎記念美術館

106-2

美術館としては決して大きくない親切感も、周辺の施設や環境に対してかなりのヴォリュームとなる。特に周辺とのかかわりの強い前面道路に対しては、南北に広く構えるエントランスゾーンを庇状の屋根の下に設置し、建物全体を低く抑えている。そして、前面の水庭から透明な建築を介して背景となる樹木が感じ取れるようにしている。展示室の階高がそのまま大きなヴォリュームとなる南壁面の表現は、特に意識して水平生を強調し、アルミリブ材と漆喰壁を上下に切り分け、高さに対する意識を軽減するよう試みている。そして、建物全体を深い緑悪露の花崗岩と漆喰を用いて仕上げ、しっかりとした存在感を示しながらも、周辺の環境に対しては建築が突出しないような計画としている。

No. m- 107　石川県西田幾多郎記念哲学館 ——安藤忠雄，　sk0311

107-1

自身の内からあふれだす思弁を追いかけて、壮大な哲学を残した西田の思想は、たとえ物理的な移動もなくひとつん場所にとどまっていても、地震の内面を深く覗き込むことで、世界の無限の広がりへと「旅」できることを教えてくれる。

西川哲学館は、そのような西田の思想に応えて、人びとが日常から一歩はなれて自分を見つめられる、さまざまなかたちの「時間と場所」を提供するものとして考えられた。幸い敷地には、西田幾太郎が生をうけ、育まれた、豊かな自然がある。この自然を手がかりとして、〈こたえ〉を探していく、その過程を心と体の両方で体験し、深めていけるような建築を目指した。

・・・

展示棟から地下通路を介してつながる「空の庭」は４周を壁で囲われ、空に向かっ

石川県西田幾多郎記念哲学館

てのみ開放された「何もない」空間である。限られたスペースで何の機能も持たないこの空間が、西田の思想の体現を試みた、この建築のひとつの象徴となる。
・・・最上階の展望ラウンジは西田哲学の落日拝の思想の理解を助けるために西側に日本海が眺望できるように計画した。

107-2

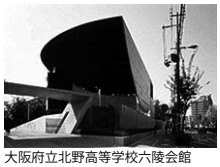
自身の内からあふれだす思弁を追いかけて、壮大な哲学を残した西田の思想は、たとえ物理的な移動もなくひとつん場所にとどまっていても、地震の内面を深く覗き込むことで、世界の無限の広がりへと「旅」できることを教えてくれる。
西川哲学館は、そのような西田の思想に応えて、人びとが日常から一歩はなれて自分を見つめられる、さまざまなかたちの「時間と場所」を提供するものとして考えられた。幸い敷地には、西田幾太郎が生をうけ、育まれた、豊かな自然がある。この自然を手がかりとして、〈こたえ〉を探していく、その過程を心と体の両方で体験し、深めていけるような建築を目指した。
・・・
展示棟から地下通路を介してつながる「空の庭」は 4 周を壁で囲われ、空に向かってのみ開放された「何もない」空間である。限られたスペースで何の機能も持たないこの空間が、西田の思想の体現を試みた、この建築のひとつの象徴となる。
・・・最上階の展望ラウンジは西田哲学の落日拝の思想の理解を助けるために西側に日本海が眺望できるように計画した。

107-3

私はかつて若い頃の自分をおおいに触発してくれたふたりの生涯をかけた問いかけに対し、自分なりの「応え」を建築で返したいと考えた。その西田への「応え」が、今回の杜に埋もれる哲学記念館のイメージである。

No. m- 108　大阪府立北野高等学校六陵会館 ――竹山聖，　sk0401

もともと図書館機能を補完する資料館として計画が出発したが、交流の場をもちたいという同窓生の要望が盛り込まれて、過去を貯蔵し想起する場と未来の出会いを生み出す交流の場というふたつの機能を併せ持つ建物となった。このふたつを「天と地の対位法」にしたがって、宙に浮く未完結な球体と大地に埋め込まれた方形という対比的な空間に翻訳した。


大阪府立北野高等学校六陵会館

No. m- 109　野依記念物質科学研究館 ――飯田善彦，　sk0405

「野依センター」の全体像は、いわば対概念が三重四重の入れ子構造のように重複されて組み立てられているということができる。そこには全体を規定するような支配的な概念もなく、相互の〈関係〉もたいして意味をもたない。最適と思われるところで固定された対概念が、より上位に展開しながらでき上がっている総体。多様な部分がそれぞれの都合を満足しつつ他の領域と即時的に共存している〈関係〉。どれもが突出せず、かといって隠れもしない。それぞれの概念が生み出した表現が過も不足もなくただあるように並置され、共存している複合の〈風景〉。このように得られた〈風景〉は見ようによっては分子構造模型に似ている。集められた元素群が、ある条件下に組み合わされ、つなぎ止められた構造が安定的に意味をもつ。この場合の条件はそれぞれ、研究館では化学のもつ多面性であり、交流館では周囲の雑木林が象徴する環境ということになるだろう。
関係者によって次世代の大学をイメージして構想された、他に類のないまったく新しい企画とその結果としての建築の風景が、野依教授が生み出した画期的な触媒のように、意図をもった総体として大学という閉ざされたフィールドを変えていく契機となることを期待している。

野依記念物質科学研究館

No. m- 110　京都大学百周年時計台記念館 ――川崎清，　sk0406

法・経済学部第 1 教室の跡に新しく 500 人収容の百周年記念ホールを建設した。元の教室にこだわらず、新しい設計とした。しかし、この建物の北側にある法経本館との間に挟まれるかたちになるので、強い存在感をなくす表現として全面ガラス張りとした。・・・むしろ必要がなければ、カーテンを開けて法経本館の美しいファサードとサクラの樹が正面演台の背景となることを意識してデザインを進めた。・・・

こうして「時計台」は、新しい機能を付加され、21 世紀の京都大学のシンボルとして生きることになった。

京都大学百周年時計台記念館

No. m- 111　村井正誠記念美術館 ――隈研吾，　sk0407

111-1

この家には村井さんが手を触れ、愛情を注いだ物たちがたくさん残されていた。それを保存するのがこの小美術館の設計のテーマであった。形態を保存するのではない。物を､物質を保存するのである。それらの物が村井さんという人間を語ってくれるに違いない。村井さんの愛情の深さを、その芸術の奥行を眼前に蘇らせてくれるに違いないと確信したからである。

具体的にはアトリエだった小部屋をそのまま保存した。その四角い箱を中心として、その外側にもうひとつの箱をかぶせ、その二重の箱の間に生成される隙間部分をメインの展示空間とした。

111-2

外の箱は家を解体した廃材でできあがっている。外壁材は一旦はずして、もう一度箱の外側にはりつけられている。そのようにして保存された物たちは「昔の御主人たち」のことをよく覚えていて、たくさん思い出を語ってくれる。おそらく村井さんがそれだけこれらの物を愛していたからに違いない。絵画も、幾何学も、形態も、最終的にはモノとしてわれわれと接し、モノとして語り合う村井さんのその気持ちをこの建築に込めてみたいと思った。

村井正誠記念美術館

No. m- 112　吉田正音楽記念館 ――毒島智和／内井建築設計事務所，　sk0412

112-1

この記念館は吉田正の作品を鑑賞し、彼の功績を称え、その曲の時代と共に自らの人生を振り返る場として計画された。・・・

そこで記念館は吉田正の人間性の大きさを表現し、功績の偉大さを体験するために「塔」という概念でつくることとした。

112-2

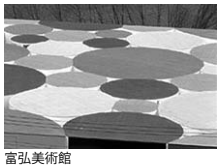
・・・若い人たちや音楽を志す人たちが、吉田作品を通じてより音楽に親しみが持てるような施設を目指した。

そこで記念館は吉田正の人間性の大きさを表現し、功績の偉大さを体験するために「塔」という概念でつくることとした。

吉田正音楽記念館

No. m- 113　富弘美術館 ――ヨコミゾマコト，　sk0504

同時存在する多様性、それがわれわれの提案の特徴である。ホワイトキューブのニュートラルで均質な空間は不釣り合いだと考えた。なぜなら事象を平均化し、抽象化し、画一的に捉えることの無意味さを教えてくれたのは星野氏の作品そのものだからである。われわれを取り囲む自然を含め存在するすべてのものには固有の属性やコンディションのばらつきがあり、そのばらつきを許容することで初めて共存が可能となる。日々忘れがちなこのきわめて基本的な認識に星野氏の作品は気づかせてくれるのである。・・・ものごと相互の関係を相対的に捉え、複雑



富弘美術館

なものと複雑なままに捉える方法論を探らなければならない。多様な価値観が同時存在する仕組みを探らなければならない。そして絶対性よりも相対性、全体性よりも非全体性、そして、中心性より非中心性に向かうべきである。
円には必ず中心があり、半径が決まった時点で自動的に絶対的なものとしてひとつの円が決定されてしまう。円は非常に強い図形なのである。その強さと抽象性には惹かれるものがある。しかし円が持つ完結性や絶対性は受け入れがたい。そこで、円を用いながらも相対的で非中心的で、さまざまな与条件に対応できる柔軟性のある平面計画ができないものかと考えた。・・・
絶対性と相対性、柔軟性と強靭さ、抽象性と具象性、単純さと複雑さ、これら相反する対立的性質を同時に併せ持つような建築をつくることができないだろうかと悩んだ。設計コンペでは、住民参加が必須であること、そして固有の地域性と現代建築の抽象性とを超えることが求められていた。それらの求めに対し、大小さまざまな円が接しながら平面的に広がる建築は、十分に応えてくれるだろうという考えに達した。

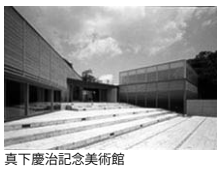
No. m- 114　香川県立東山魁夷せとうち美術館
――谷口吉生，　sk0601

この計画における設計の最大テーマは、美術館に作品が展示される画家の故郷が望まれる敷地の特徴を、いかに明確に読み取れるものにするかということであった。そのためにまず２枚の大きな壁によって、エントランス側から海への眺望を意図的に遮断した。来館者はギャラリーで作品鑑賞の後、ラウンジへ出て初めて海への眺望に接することで、前方に展開する画家の発祥の地、櫃石島へ向かうビスタがより強く印象づけられる。

香川県立東山魁夷せとうち美術館

No. m- 115　真下慶治記念美術館 ―― _ 宮眞介，　sk0603

115-1
厳冬の雪深い丘に初めて立った時、風景の寂然とした迫力に圧倒された。その時から建築の設計は、画家が愛したこのかけがえのない風景を、訪れた人が共有できる場をつくることにつきると思った。地元産の楯山石を敷き詰め、階段状に最上川に向かって 45 度開くテラスは、座して作品鑑賞の余韻に浸る場所であり、観桜会や茶会、生徒の写生会や野外音楽会の場所である。


真下慶治記念美術館

115-2
最上川の冬景色を好んで描いた画伯は、同郷の歌人斎藤茂吉を尊敬し、隣接する市、大石田に疎開していた時の歌集「白き山」を座右の書にしたという。茂吉翁が「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」と詠んだ厳しく寂然とした世界を、画伯は抑制のきいた陰翳あるグレーで表現した。川面のさまざまに変化するグレー、山々の雪景色のブルーグレー、杉木立の藍色がかったグレー、それらは、やはり他でもない北国の雪空がもたらす自然光の中で鑑賞するべきだと考えた。展示室におけるクリアストーリーからの採光はこのような趣旨から生まれた。
・・・外装は地元産の杉の横羽目とし、グレーの塗装をかけ、足下の積雪部分には濃灰色の鉄板をストライプ状に挿入した。杉版の部分はいずれ風化によって表面はグレーに変化する。しかし最初からこの塗装としたのは、風化を先取りする意味と、画伯の描いたあのグレーに、建築の表情を重ねたいという設計の意図からきている。
115-3
建築の佇まいは風景に拮抗することなく、その迫力に呼応しながらも、寡黙であることを旨とし、建物の外形は豪雪地帯ということも考慮し単純なものとした。

No. m- 116　葛生傳承館 ――芦原太郎，　sk0604

建物の特徴となる切妻屋根は、隣接する吉澤美術館の屋根形態と連続性を持たせつつ、新しい景観をつくり出すことを意図して計画した。

葛生傳承館

No. m- 117　南方熊楠顕彰館

――矢田康順＋堀正人＋小川直樹，　sk0611

117-1

熊楠にとって彼の思想と精神の源であり、主要な活動の場となった熊野の山々の姿と森の大気を体現することが、コンペ時から一貫したわれわれの提案の主題であった。

・・・

内部空間には、スギの丸柱に支えられた高さの異なる 4 つの連続する切妻屋根により、さまざまな空間ボリュームがつくり出されている。これらの空間は、森を想起させるような林立する柱と、格子状の構造体を通過する木漏れ日のような光で森の大気を呼び起こしている。

南方熊楠顕彰館

117-2

熊楠が後半生を過ごした自宅に隣接する敷地は、田辺市の中心に位置する屋敷町の風情を色濃く残す界隈にある。こうした立地条件の中で、周囲のまち並みとの関わり、現存する熊楠邸との関わりをどのように関係づけるかということ・・・が、コンペ時から一貫したわれわれの提案の主題であった。

・・・

外部は貫格子壁の木構造が透けて見える、水平を強調したガラスカーテンウォールと、屋根と壁が連続する墨色の特殊亜鉛合金板の平葺きに覆われている。その屋根は道路側にいくにつれ低く抑えられ、対峙する邸及び周囲の家々のスケール感と調和し、屋敷町の風景に融合している。

No. m- 118　高知市立・龍馬の生まれたまち記念館

――西森啓史，　sk0703

内に秘められたテーマは「時の流れ」である。地域の風土や文化、また伝統が背景に感じられ、一時の流行に惑わされることのない固有の艶やかさが表現された時、もてないの心が浮かび上がり、鮮明な記憶へと繋がるだろう。150 年前、龍馬が歩いていた町の情景へと思いを馳せながら、150 年先の未来にまで瑞々しさを失わないものを考えた。よるべきは、土佐で育まれた「技」と「恵み」を最大限に活かす姿勢にあった。職人は巧みに木を、瓦を、紙を、土を、扱う。われわれはそれら職人と協働し、彩りあるものとして組み上げることを目標とした。

高知市立・龍馬の生まれたまち記念館

No. m- 119　奥田元宋・小由女美術館 ――柳澤孝彦，　sk0704

119-1

したがって、美術館建築の設計は三次の地における自然の力、森羅万象がはたらく空間を用意することが、空間設計の意図となった。東の山脈を望む傾斜地をいかした建物構成は、低くのびやかにひろがる平面と、高低差のある断面で、周囲の自然を抱え込み、呼び込む鑑賞空間を随所につくり出して、作家の原風景に通ずる自然の力を共有し、五感で芸術鑑賞の心を深める空間の構えに意を傾けた。

奥田元宋・小由女美術館

119-2

そして、美術館の中心には広大な水を湛えて、そこに天空を映し出し、画家が描こうとした宇宙の気宇の一端を体現しようとした図った。

No. m- 120　KEYFOREST871228 キース・ヘリング美術館
――北川原温，　sk0707

KEYFOREST871228 キース・ヘリング美術館

871228 では私たちが忘れてしまったもの、失ってしまったものを思い出すひとつの寓意の森をつくりたいと考えた。
・・・
建築がつくられていく過程にはさまざまな物語が介在する。建主とキースの出会い、紆余曲折の敷地探し、八ヶ岳山麓の縄文文化とキース芸術に通底するプリミティブなイメージ、若いキュレーター、作曲家、映画監督、デザイナーとの出会いなどさまざまな興味深い事柄が絡み合いながらひとつの物語、大袈裟に言えば、1 冊の書物を目指していったように思う。
構想と設計の過程で生まれた事柄はさまざまな寓意をもつメタファーとして空間化、物質化し、それらは合理的な秩序のもとに整理されひとつの普遍的な言葉の枠に収められるのではなく、原生動物のような未分化の様相をもつ混成林をつくっていった。南東角に突出した黒い倒立円錐空間と対をなす北西角の小さな虚の正立円錐、赤色と灰色に色分けされ空に抉りとられた懸垂曲面を持つボリューム、搬出入口のブルーの大扉、黒と透明のビニルスクリーン、エアパッキングウォール、傾いた床などディテールも含めて多くの部分がその直接的な意味を越えた寓意を孕んでいる。・・・
キースが無意識のうちに人びとに、社会に伝えようとしたメッセージをより強く感じる空間と環境を創出するために、こうした無数のメタファーが編み込まれた物語ー 871228 がつくられていった。

No. m- 121　坂の上の雲ミュージアム ――安藤忠雄，　sk0709

121-1

坂の上の雲ミュージアム

「坂の上の雲」というひとつの作品に焦点をあてたこの博物館では、司馬さんが描こうとした、自由な心を持ち、公のために命をかけた明治の日本人たちの、力に満ちた時代精神を表現しようと考えた。
・・・
建物の主要な壁は外側に向かって 5 度傾いている。このことにより内部空間の求心性は増し、環境に対して大きく開きながらもひとつのテーマに対する空間の指向性は担保され、展望という外向きの性格と、展示という内向きの性格を兼ね備えることを可能にしている。また、この傾きは、明治というあらゆる点で動的であった時代の、躍動感をも表現している。

121-2

敷地の形状から、三角形の平面を構想し、その外周部をめぐるスロープによって、展示室を繋いでいく計画とした。松山城や愚陀佛庵、萬翠荘等が望める北西の面には縁側を設け、室内展示だけでなく、作品のひとつの舞台という場所性と、江戸、明治、大正そして現代という時間の重なりを体感できる場所に身を置くことで、おのおのが「坂の上の雲」の時空間を心の中で位置づけ、思いを巡らせてほしいと思った。
・・・
司馬さんが言葉を通して人々に伝えようとしたものを、この施設で補完しようというのはおこがましいことであるが、「ここでしかできない」体験が「坂の上の雲」の読者の新しい発見のきっかけを生み出すことを期待している。そして、司馬さんの志に恥じない真の意味での公の文化施設になることを心から願っている。

No. m- 122　伊丹十三記念館――中村好文，　sk0709

伊丹十三記念館

122-1

伊丹十三記念館の建築的なテーマと設計の大方針を決めるのに、眉間に皺を寄せてエスキースを繰り返す必要はなかった。敷地にたたずみ周辺の様子を眺め回したとたん「この建物は建築的にも、人の意識も内側に向かわせるべきだ！」と直覚したからだ。そして、そう思った瞬間に中庭を「回廊」が取り囲むアイデアがごく自然に思い浮かんだのである。正方形の比叡面の中に矩形の中庭を注意深く配置することで、記念館として必要な用途と機能を盛り込んだプランを成立させること。

122-2

ミュージアムに必要なのも、展示室などの目的と用途のはっきりとした空間だけではなく、実はこのように来館者が自分自身に心静かに向かい合うことのできる場所だろう。美術館にしろ記念館にしろ、来館者が、見学という体験を通じて感じたこと、考えたことを、その場を去る前にあらためてゆっくり咀嚼し、自身の心の裡にしっかり吸収し定着させることができる場所がぜひとも欲しいと思う。・・・中庭を囲む回廊は、こうした目的に適うまたとない建築空間にちがいない。

122-3

伊丹十三は、エッセイにおいても、映画においても、上質のユーモアのセンスと遊び心を感じさせる仕事をしてきた。・・・伊丹らしさを醸し出すためには、なにはともあれ、そこはかとなくユーモアと遊び心を感じさせる記念館にしなければならない。そしてそれらを展示その他、記念館のあらゆる場所に、それとなくちりばめておかなくてはならない。

122-4

常設展示のデザインで悩んだのは、膨大な収蔵品の中から展示物を選定することと、そのモノと内容にいかにふさわしく、効果的に展示してみせるかだった。・・・このことを解決するために、壁際にズラリとＬ字型に配置した展示コーナーの背後にメインテナンス用の通路を巡らした。

122-5

・・・展示の作業性とメンテナンスのしやすさにも十分気を配っておかなくてはならなかった。
このことを解決するために、壁際にズラリとＬ字型に配置した展示コーナーの背後にメインテナンス用の通路を巡らした。

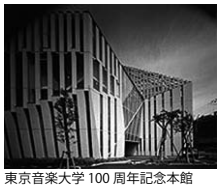
122-6

伊丹十三のエッセイには「ばちがいであってはならない」という言葉が繰り返し出てくるが、小住宅であれ、大規模な建物であれ、建築というものはすべからくその「場所」にあるべくしてあるように納まっていてほしいと思う。「あるべくしてある」という言葉には「溶け込むように」という意味ももちろんあるが「風景の要となるように」というニュアンスを含んでもよいと思う。いずれにしろ、そこに建つ建物は、その場所にいかにもふさわしく、風景や周辺環境に寄与するものでありたいのである。周辺にさまざまなスタイルの建物が無秩序に建ち並ぶ雑然とした風景の中に、外壁を焼き杉板で覆った黒々とした記念館が、はっきりとした存在感を漂わせつつ「ずっと以前からここにありました」という風情で納まってくれれば言うことはないのだが。

No. m- 123　東京音楽大学 100 周年記念本館
――野口秀世／久米設計，　sk0709

123-1
キャンパスの大通りとなる緩やかな階段坂は、陽光で満たされたガレリアを旋回しつつ各階を連続化し、立体的なループを形成する。このループを中心に多様な人々の流れが発生し、各所へ流入し、活気が充満していくような、精力的な場のあり方を追求した。音楽芸術の生成には生命感のあるいきいきとした場が最もふさわしいと考えたからである。

123-2
住宅地に対する威圧感を軽減し、開かれたキャンパスとして開放感を出すために、諸施設を短冊状の PC 板とスリット開口で構成し、建築全体に自然光と視界を取り入れ、リズム感も生み出している。


東京音楽大学 100 周年記念本館

No. m- 124　日本工業大学百年記念館／ライブラリー＆
コミュニケーションセンター――小川次郎，　sk0804

非完結的で不均質な空間の組成、未完成感を生むディテールやマテリアルの効果が輻輳することで、「建築」という硬直化した意識をずらし、人の自由なふるまいを誘う状態を発生させることが可能になると考えた。

日本工業大学百年記念館／ライブラリー＆コミュニケーションセンター

No. m- 125　東京大学情報学環・福武ホール――安藤忠雄，　sk0805

計画の目標として、受け継がれてきた本郷キャンパスの緑地軸の構成を尊重すること、既存のクスノキ並木の風景を壊さないことを前提とし、その上でキャンパス内のオープンスペースの体系において、新たな刺激となるようなパブリックスペースの創出を考えた。その結果生まれたのが既存の樹木を避けた配置で、ボリュームの半分を地下に沈め、その地下まで続く階段状のオープンスペースを有する建物の構成である。

東京大学情報学環・福武ホール

No. m- 126　星野哲郎記念館――井下仁史／佐藤総合計画，　sk0810

最初の２行が作詞の命だという。歌い出しでいかに聴く者を引きつけるか。華々しい歌謡の世界で生きる星野哲郎の品格と艶。それを一目で分かる建築とすることが命題であった。
この記念館は日本を代表する演歌の作詞家である星野哲郎の功績を伝えると共に、町興しの起爆剤として故郷の周防大島が計画したものである。
「365 歩のマーチ」に代表されるように星野哲郎の詩は応援歌と言われている。七転び八起きの人生から紡ぎ出される歌詞は、自然へのまなざしと人間への優しさに溢れ、心に深く響く。
島の誇りである美しい自然をより美しく見せる建築。いつでも人がいる元気な記念館。それは数々のハヤリウタにのせ、時代を応援してきた星野哲郎の島への応援歌であり、作詞家の原点である。

“ ハヤリウタは水に浮かべると忽ち溶けて沈んでゆく「紙の船」に似てまことにはかない ”
圧倒的な自然を前にした時、人は素直に感動する。その感動をストレートに建築に取り込む。島の誇りである白木山と嵩山と周防灘。幼少の頃より見慣れた３つの風景を結び､そのまま展示空間とした回廊型の記念館｡回廊は花道や舞台となり、軽やかな屋根がかかる。空に浮かぶ屋根は自身の人生を「紙の船」に見立てた星野哲郎への応援である。作品の合間に見えるのは故郷の風景と人びとの営みであり、雄大な自然と共に星野哲郎の世界を巡る終わりのない旅を体感する。

星野哲郎記念館

周防灘の多島美をイメージした３つのシリンダーには映像と音楽、作詞のエピソードが満たされており、作詞の世界を多角的に体感する。内部には町役場の支所機能を併設し、島の人たちがいつでも気軽に来ることができるよう、畳敷きの舞台は島のラウンジとして開放している。

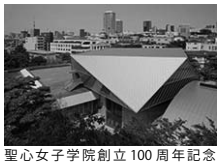
No. m- 127　東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
――村上孝憲／三菱地所設計＋矢口秀夫／阿部仁ｱﾄﾘｴ，　sk0905

シークエンスについても、法的理由から一切増築ができない狭隘な玄関ホールやホワイエなどを、落ち着いた黒で統一したさまざまなマテリアルで再構築することで、外の豊かな緑と中の祝祭空間のスムーズな連結を図っている。

東北大学百周年記念会館 川内萩ホール

No. m- 128　聖心女子学院創立 100 周年記念ホール
――安藤忠雄，　sk0907

円形を象る壁の一部は大型の可動建具となっており、壁に収納するとホワイエ越しに外の緑の風景がホール内部に取り込まれる。環境と一体化した建築により、校内にもうひとつの中心をつくり出すことが主題だった。


聖心女子学院創立 100 周年記念ホール

No. m- 129　ポーラ銀座ビル――中屋敷公一／日建設計，　sk0911

129-1

国内外のスーパーブランドが集積し、その魅力を高めつつある銀座地区にあって、銀座中心部の賑わいを京橋側に繋ぐ銀座 1 丁目のランドマークとなる建物を目指した。周辺は、今後開発が多く見込まれる地域で、ポーラ銀座ビルはその先駆的存在となる。

・・・

ポーラ創業 80 年の伝統を重んじながら新しい歴史を刻む器として、白磁のごとく高い気品とりんとした姿勢で街並みに参加することを期待している。

129-2

ポーラが掲げた新ビルののテーマである美容・美術・美食の「3 つの美」を受け、人の肌を輝かせる根源的な存在の「水」と「光」を今回のキーコンセプトとした。さらに生命を感じさせるイメージとして、「時」の経過と共に刻々と変化していく建築を目指した。建築というスタティックな構築物で、「変化」や「動き」を表現するために、ダブルスキン内にポリカーボネードの可動パネルとあらゆる色彩の表現が可能な LED 照明を組み込み、建物の表情を自在に変化させることとした。

ポーラ銀座ビル

No. m- 130　東邦音楽大学 70 周年記念館――野生司義光，　sk1004

130-1

音楽大学の校舎においては各室に求められる高い音響性能を確保しつつ、お互いの干渉を避けた計画が求められる。そのため北側にリニアな動線とコアを設け、南側には異なる遮音、音響性能が求められる練習室、講義室、第練習室を３つのウイングに分けることでこの形態が導き出された。各室に求められる音響性能に合わせて対面する壁を平面的または立面的に斜めとし、その形態を素直に各ウイングの外形に現した。高い精度で施行された打ち放しコンクリート面とガラスが、特徴ある形態を際立たせている。

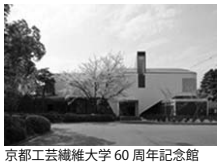
130-2

キャンパス正門の延長上に配されたブリッジ状の大段から吹き抜けの２階エントランスホールに導くことで、4 階の学生食堂やラウンジへのアプローチをスムーズにしている。

東邦音楽大学 70 周年記念館

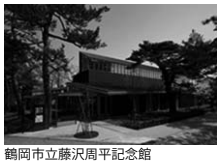
130-3
芝生広場の上でクラスター状に配置された３つの異なる特徴があるウイングは、お互い響き合い、旋律を奏でているようで、音楽大学にふさわしい校舎と言えるのではないだろうか。

No. m- 131　京都工芸繊維大学 60 周年記念館 ――木村博昭，　sk1005


京都工芸繊維大学 60 周年記念館

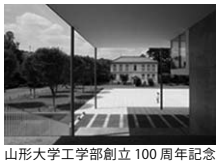
記念館の構想にあたり、時間をテーマに記憶と時を静止させた時代を再確認する静的な建築であると捉えた。建築には、過去から継承されず、失われる技術もある。当然ながら機能だけでは定まらず、感性、記憶、象徴等と多重的要素で成立している。
本大学創設当時の本野精吾設計による校舎は、やや重量感のある鉄筋コンクリート造の建築であるが、W. グロピウスの透明感あるファグス靴工場やバウハウス校舎を想起させる新時代の建築であり、一時代の大学のシンボルとして、当時のデザインスクールとしての新たな近代デザインへの可能性を具現かつ体感的に示したものであった。
現代建築は、存在感が薄れつつある。しかしながら、建設に携わった無名の職人たちの熟練した手の痕跡や素材により、建築そのものに命を与え、その空間体験が五感を呼び起こし、人に感動と敬意を促す。これまで出会ったすばらしい建築は、それらが身体にダイレクトに伝わるものであった。そして、その時代の文化の結晶として残るのである。ここでは、そんな建築への思いと取り組み、空間の素材とディテールを熟考し、現代性の表現として鉄を使い、創設期の本野精吾の鉄筋コンクリート造の校舎と対照させた。
また、その表現として、空間の原初的な型としてのボールト架構の、ふたつの異なる相対によって、エレガントさとダイナミズム、そして、空間の格式と品格、さらには、未来への可能性を暗示できればと考えた。

No. m- 132　鶴岡市立藤沢周平記念館 ――高谷時彦，　sk1006


鶴岡市立藤沢周平記念館

鶴岡城の本丸に位置する鶴岡市立藤沢周平記念館は、隣接する大正建築・大宝館や明治の名工高橋兼吉作の荘内神社などへの配慮から四周に下屋状に低い屋根をめぐらせると共に、またマツの大木をよけるために外壁をアルコーブ状に後退させたり、屋根を斜めに切り込んだりしている。内部は高い吹き抜けを持つ細長いギャラリーと天井を低く抑えたロビーがＬ型の骨格をなしているが、それぞれ大宝館と城の土塁が正面に見えるように配置されている。これは道路の正面に山を配した城下町の町割りの方法を参照している。また、建物全体が地域の伝統的工法である鞘堂形式を取っている。このように周辺環境や地域の伝統・文化との関係性の中で外観や空間構成を決定することで、記念館は藤沢周平氏の故郷に脈々と流れる時間や文化的伝統の系譜状に確かな存在感を獲得できると考えた。

No. m- 133　山形大学工学部創立 100 周年記念会館 ―― _ 宮眞介，　sk1110


山形大学工学部創立 100 周年記念会館

133-1
2006 年に行われた公募型のプロポーザルの実施要綱の中に、事業者がこの建築に求めるコンセプトとして、「大学のシンボルとなる建築」や「格調ある集いの場」といった文句が謳われていた。私たちはそれに答えるために、簡潔で自立性の高い幾何学的な建築の構成を提案した。それは一辺 8.5m の正方形が 9 個集まって大きな正方形をなし、中央にホールを抱えた「囲」の字型の平面系で、ファサードも軒高が 8.5m、4 面とも正方形が 3 個集まった「四」の字型の立面である。
133-2
古典的でスタティックになりがちな構成に、ダイナミックな動きを組み込むため、

エントランスホールに設けたスパイラル状の階段が、2階から外部の階段に連続し、蝸牛のからのように末広がりに地上の正面広場まで達するようにした。このスパイラルのパターンは、建築的にはル・コルビュジエの「無限発展の美術館」のように発展系のパターンであり、そこに本学部の100年の発展的な歩みと、これからのさらなる飛躍を表象する意図を込めた。

133-3

もうひとつの提案は、正門の軸線状に「100周年記念プラザ」を計画し、この建築が、そのプラザを挟んで明治期に建てられた本学部の全身、米沢高等高学校の旧本館の側面に対面するように配置することであった。平成の簡潔な建築が明治の様式建築に対峙することによって、正門にふさわしいアイデンティティをそこに付与し、合わせて学部100年の校史を顧みる契機となることを願った。

No. m- 134　東京電機大学（100周年記念キャンパス）
――福永知義／槇総合計画事務所，　sk1207

千住は江戸時代に宿場町として栄え、現在も北千住駅の乗降客が1日に160万人にのぼる交通拠点となっている。そのようなポテンシャルを持つ場所に大学というメディアによって、どのようにしらた豊かな記憶を育む人間的な都市をつくり出し得るかを考えていた。･･･北千住駅東口の敷地が地区計画によって3分割され、それぞれのブロックに建つ建築のシルエットは、中央の道沿いの低層部とセットバックしたタワーで構成される。その典型的な都市型キャンパスにあって、ひとつのまとまりのある集合体としての街並みをつくっていくことが基本的なテーマであった。

東京電機大学（100周年記念キャンパス）

No. m- 135　文京区立森 _ 外記念館――陶器二三雄，　sk1301

135-1

鴎外の場合、軍医として軍医総監という最高峰のポストにまで登りつめ、文学者、作家として夏目漱石と並び称される文豪であり、あらゆる社会的名誉を手にした。しかしその内面は数々の深い心の傷を負っていたように思えてならない。・・・
本計画は、光、色彩、比例、素材の感触などを念頭に、簡素で無駄のない表現の中庸な建築である。鴎外とそのひと・・・には遠く及ばないが、すこしでもそれいに照応する、静謐な凛とした佇まいの記念館を目指した。

135-2

・・・鴎外の文学は、大人になり社会の不条理にぶつかったとき、氷解する深淵の作品である。
また鴎外文学の特筆すべきひとつに、虚飾しない、美しく簡素な贅肉のない文体で構成されることである。それは、漢文をはじめとした個展やドイツ文学に精通した深い教養を背景とした、語り過ぎない余白の文章である。そのことがより一層作品に深みを与えているのではないだろうか。
本計画は、光、色彩、比例、素材の感触などを念頭に、簡素で無駄のない表現の中庸な建築である。・・・作品には遠く及ばないが、すこしでもそれいに照応する、静謐な凛とした佇まいの記念館を目指した。

文京区立森 _ 外記念館